よこしまほら

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よこしまほら

【Nコード】

N1184P

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

GS美神 と ネギまのクロスです。妄想全開で「YOKOSHIMA」な内容なため、えり好みする内容になっています。最強系成分、ハーレム系成分、原作ブレイク成分が満載ですので、お嫌いな方は避けてくださいませ。

追記：同一類似名称SS「よこしまほら」（キウン氏 完結済み）とは全く関わりはございませんが、同一内容と勘違いなさっている方がいらっしやいましたらお詫びします。

ご好評いただいた「外伝」は、外伝集（<http://nco-de.syosetu.com/n7296r/>）に独立させましたことをご報告します

第一話(改) 麻帆良にやってきたGS(えいゆう)(前書き)

煌星さんのよこっちをみてて、「わしもかくんですじゃ」と某虎っぽくなつて暴走して書いてしまいました。

当作の美神と横島はかなり良好な関係にありますが、全てはよこっちの抱擁力の御蔭ですw

一話を色々と追記しました！ 余計な書き込みしやがってとか言う辛い書き込みはイヤンw

第一話（改） 麻帆良にやってきたGS（えいゆう）

よこまほら01書き直し

始まりは事務所から。

これはいつものことだろう。

ただ、内容がいつもと違っていた。

「横島君。独立開業なさい」

「「ええええええ！！！！！！」」

驚きの声を上げたのはおキ又ちゃん、シロ、タマモ。

俺は驚きすぎて声を上げられなかった。

三回ほど深呼吸した後で、俺は口を開いた。

「・・・それって、美神さん、首って事っすか？」

一番あり得そうなことを口にすると、美神さんはさも面白そうに笑う。

「よく聞かなかったの？ 「独立開業」って言ったでしょ？ 美神事務所から独立して、個人事務所をやってみないか、って聞いているのよ」

「いやいや、「しろ」って言ってたし。

一昔前の俺ならば、これは愛の告白としか、とかいつて飛びかかっているところだが、もちろんこの話に裏がないわけがない。

前は別にして、今の俺は美神事務所黒字の柱だ。

その俺に独立を許そうというのだから、それ以上に「よほどイヤなこと」があるに違いないのだ。

それが美神令子という女性だから。

「・・・というわけで、本当の訳を話してください」

「ひ、人聞きが悪いわね。事務も仕事も営業もできるようになった弟子を一人立ちさせるのは師匠のぎ、そう義務よええ」

実に美神さんらしからぬ単語が続いたところを見ると、そういう圧力が加わったんだろう事は間違いない。

では、「どこ」から？

師匠の義務、という単語で美神隊長と神父が関わっているのは間違いないだろう。

加えて、俺の業務状態についても言及しているところを見るとどうやらGS協会からの圧力もある、ということらしい。

普段ならGS協会の圧力なんかには屈しない美神さんが膝を折ると言うことは、圧力以上の「ウマミ」があると言うこと。

逆説的に言えば、提案という形をとっているけど、すでに決定事項なんだろうなあ・・・。

「で、何処に派遣されるんすか、俺」

あまりの俺の物わかりの良さに機嫌をよくした美神さんは、数枚の書類と共にA級GS免許を渡してくれた。

その中の書類の一枚を見て俺は顔を青くする。

そこに書かれた土地の名前は、GSの下っ端でも知っている不可侵の土地だったから。

「麻帆良学園都市」

その一等地にGS事務所を開業せよ、これが政府とGS協会から美神事務所へ下った仕事であり、横島忠夫へスルーパスされた仕事の入り口であった。

たとえどんなGSであっても、協会に属するものならば「麻帆良」の名前を全く知らないなんて事はない。

埼玉県に属するこの土地が如何に異常で孤立的かは協会に参加した時点でレクチャーされるし、攻撃的に排他していることで裏の社会問題にもなっているから。

この町は「魔法使い」、それも自分達の魔法は秘匿されるべきだとしている主義者達で構成された町の一つで、国内でも同じ主義者達の町が幾つか存在しているという。

事務所開業にあたりヘッドハンティングした机妖怪の愛子は「アーミツシユみたいなものかしら？」と言っているが、閉鎖性という点では遙かに上回るだろうと言うのがGS協会の見解だ。

そんな麻帆良になんでGS事務所？ というと、実はこれは麻帆良からの要請だという。

基本、彼ら魔法使いは「霊」的な対応がほとんどできないらしい。出来ても力任せに散り払う程度らしく、割と問題になるレベルまで霊害が放置されているらしい。

で、今まで通りに放置でも良かったらしいのだが、向こうの事情

で急遽安定化させなければならなかったらしい。

加えて、麻帆良を脅かす手勢の中に「霊」的な存在の比率が上がってきたため、対処能力が追いつかなくなってきており、向こうも最後の手段と言うことでGS協会に人員を融通してほしい旨のヘルプを送ったのだという。

今まで完全に交流を拒絶していた「麻帆良」のこの態度から「おいしい」と判断した政府は、もっともイレギュラーな切り札を切つて対応しようとしたわけだが、そこは美神令子、誰もが考える予想の斜め上をいく存在であった。

つまり、俺、横島忠夫の派遣の決定、であった。

形上、美神事務所からの派遣だし、最近の仕事処理件数の80%までが「横島忠夫」名義の報告書だったりもする。

処理上も、形式上も、まったく不備のない、文句のつけようもない状態に仕立てた上で、「A級」の審査まで通してしまうというのだから恐ろしい上司様だ。

それに加えて、タマモをお目付け役に、雪之丞を助手に取っつけるあたりで、美神さんの腹が読めると言うものだ。

つまり、完全攻撃型の人員配置が、この麻帆良に必要なだと美神さんは考えているという事なのだ。

それに、全員が道具使いではないことを考えれば、完全殲滅が必要だけれども、手数が必要なので道具使いでは赤字になる、とも見とれる。

……くそお、こんな事まで読めるようになるのもイヤな話だなあ。

横島が独立開業すると聞いて、手伝い程度はしてやろうと思った

ら、美神の旦那に行き先を聞いて、こりゃ一口混ぜると飛び込んだ。
あの、日本でありながら日本でないと言われる「麻帆良」に
事務所を開業するというのだ。

こりゃ、毎日戦争だろ？

そりゃ、毎日戦闘だろ？

ああ、もちろん、毎日充実だ、決まってる。

そんなわけで、開業前から横島に飛びついて、書類仕事だって手
伝ってガンガン押し進めたりしたのだが……。

「おい、横島。なんで俺まで学校に入るんだ？」

「入所条件」

「……くそ、わかったよ」

まあ、正直な話、ピートだのタイガーが学校の話をするのを聞いて
疎外感を感じていなかったわけじゃねえ。

そんな気持ちを知られていたことも驚きだが、その辺に配慮する
横島の優しさにも感謝だな。

つつか、その辺の手はずをしたのって、もしかして美神の旦那か？

くそ、どうも見透かされすぎてる気がするな。

最近、かおりの視線も生暖かい気もするし。

むー、どうにかしてえなあ、もう。

横島忠夫霊能事務所開業前日。

私とタマモちゃん、雪之丞君と横島君は、麻帆良で最も異常な光

景、世界樹と呼ばれる大木の真下の広場に呼ばれていた。

まあ、なんだ、そう、縄張りの内側にきたチンピラをいつちよもんだるか、と言うことなんだろうと思っただけ、実際はちよつと違うらしい。

そう、これは実力を計るとかそういうものではなく、単純に見物なんだ。

あの戦いで常に最前線にたという「横島忠夫」と「伊達雪之丞」の。

模擬戦という形ではあったけれど、私の目から見ても横島君達は手を抜いていた。

そして相手も、魔法先生達も手を抜かれている事実を理解しながら屈辱には感じていないようであった。

そこまで実力差があることを、すでに見切っているのだろう。

はじめの一二戦は、結構スカした感じだったのに、それで降はまるでバトルジャンキーのように、追い続けるかのように横島君や雪之丞君に対戦を申し込んで気持ちよく負けてゆく。

まるで青春ドラマのような展開だと私がつぶやくと、タマモちゃん嫌らしい笑いを浮かべた。

「そろそろ有料対戦にするべきじゃないかしら？」

「・・・美神さんっぱいわよ？」

「・・・勘弁して」

そんな心温まる会話の中、そろそろ魔法先生達の対戦申し込みが終わったようだ。

さすがの横島&雪之丞も息が切れているようだけど、横島君に比べて雪之丞君はツヤツヤしてる。

「どつじゃ、定期的に組み手をせんか？」

「まっぴらじゃー！」

学園長の言葉に反射的に答えた横島君だけど、雪之丞君と魔法先生達は嬉しそうに次の予定なんかを打ち合わせ始めた。

「おれはやんねーからな、しらねーからな！」と叫ぶ横島君を後目に、横島君込みの予定を組み始める魔法先生と雪之丞君。

何とも無情な話だと思う。

それは信じられない存在でした。

体裁き一つ見ても、我々とは次元の違う動きでした。

一騎当千の魔法先生たちが、軽く翻弄されており、神多羅木先生ですら相手になりませんでした。

出張中の高畑先生がいても、どうなっていたか分からないと感じます。

それほどまでに隔絶した実力でした。

それなのに彼らは奢らず、生徒としての立場を崩さない冷静な判断力があるのです。

さすがに驚き、そして興味を引かれます。

「おねえさま、あの方々から学ぶことは多いですよね？」

「そうですね、愛衣。私たちは如何に井の中の蛙だったかを知る良い機会でしょう」

魔法以外でも必要な知識があることを知った私たちは、彼に教えを請いたいと心底感じてしまいました。

心底驚いたことに、学園長は元老院の説得もそこにGSを招き入れてしまった。

それも単なるGSではない。

神界、魔界、人界において勇名を馳せた悲劇の英雄、横島忠夫であった。

魔法界経由で入ってきた彼の戦歴は、高校生でありながら歴戦の戦士と言っているもので、彼が魔法使いとして生まれていれば間違はなく「立派な魔法使い」と呼ばれていただろう。

しかし、彼の功績はその高さに比べて人界では秘匿されている。なにしろ、高校生を魔族へのスパイに仕立てて潜入させていたなんて事態だけでも大事なのに、魔神を討ち取ったのもまた彼だといふのだから、人界で発表できる話ではない。

これが魔法界ならば、ナギの前例もあり「英雄」の名を欲しいままにしていただろうけど、人権意識の深い人界であるからこそ、その名をしらしめることが出来ない。

何という不幸なことだろう。

彼の活躍ならば、世界に認められる活動なはずなのに。

僕のように魔法が使えない魔法使いとは違い、彼はGSにおけるトップエリートだ。

それが認められない世界というイビツさに僕は重い溜息をつかざる得なかった。

開業翌日から、予定表はマツハで埋まった。

日中は学校、夕方にかけて周辺幽霊のケア。

そして日が落ちてからは学園防衛戦線への助力。

これを毎日、だ。

進入者の質が高いときもあるし、低いときもある。

人数が多いときもあるし少ないときもある。

が、学園防衛戦線は毎日出動だ。

いや、フォワードの魔法使いたちは交代制でやってるよ？

でも、なぜか、助っ人の俺たちは、熱いラブコールを受けて毎回出動している。

文珠のたまる暇もない！ と言いたいところだが、かなりかわいい女子高生のチームと一緒にいたり、色気むんむんの魔法先生とチームを組んだりさせてもらっているので、ガンガン霊力が回復している。

ルチ將軍、グツジョブ！

そんなこんなで今日も霊波刀を構えて、召喚された鬼たちに切りかかった。

「おめーら、毎日大変だなあ？」

「そうなんや、もうやつとられんわ」

「そろそろ召喚拒否でもしたらどうや？」

「あかんあかん、召喚には応じる、これは鉄則やん」

「せやけどなあ、オーバーワークやろ？」

「まあ、嫁さん子供に良い生活させたいんや、残業万歳やで」

「体こわしたら、元もこもないやろ？」

「労災契約しとるから安心や」

「・・・ええなあ、おれの元の雇い主、労災なんか関係なしやったぞ？」

「あかんやろ？ 雇い主の義務やて」

「がめつかったんけどなあ・・・。いい女なんや」

「色香に命懸けてどうするんや？」

「せやけどな！ 乳も尻も太股も、最高なんやぞ！！」

「・・・あー、わるかったなあ、もういわん」

「ええんや。そんな乳尻太股と別れて、なにがかなしゅうて毎日鬼

と戯れてるんやろ？」

「仕事やる、仕事」

「・・・せやつたなあ・・・、ああ、ゆうつや」

と、こんな人生相談までするほど顔見知りになった鬼たちを霊波刀で打ち返す。

「んじゃ、またな」

「こんどはそっちに呼び出されたいわあ」

正味、15分で式神はすべて追い返した。

遠くでライフルの音が聞こえるのを考えれば、どこかで龍宮真名が召喚士を狙撃したんだろう。

もうちよつと早く狙撃してくれれば、こっちが楽だったのに」

『それはこっちの台詞だよ、横島さん。あなたが鬼と遊んでないで一気に返してくれば、還元光ですぐに狙撃できたんだ』

どうやら考えが口にでていた上に無線で伝わってしまったらしい。

「ま、それでも普段より早いだろ？ 時給制の仕事じゃねえんだし、得したと思っついていてくれない？」

『まあ、頼りになる前衛だからな。今度ばかりは見逃そう』

うー、真名ちゃんは厳しいなあ。

そんな龍宮真名ちゃんと合流した俺は、使用弾数や狙撃数などのすり合わせを行って、報告書をすらすら仕上げた。解散することにした。

「うーん、横島さんと組んで仕事すると、楽だね」

「そうなんか？」

「ああ。ほかの魔法生徒と組むと、どうしても報告書や事務処理が遅くてね、私が手を出さざるえないのだよ」

ふーん、と思いつつ、仕上げてルーズリーフに入れた報告書を見る。

定格の場所を普通に埋めただけなんだけどな、と。

しかし、その報告書が遅かったり遅れたりすると報酬に関わる事態になるそうだ。

まあ、立派な魔法使い様は無報酬らしいので、その辺の感覚は薄いかもしれないらしいけど。

しかし、無報酬はいかんだろ？

仕事のレベルが落ちるし、モチベーションが持続しないし。

「そう、そうなんだよ！　そこが彼らに理解してもらえない部分であり歯がゆいところなんだよ！」

報酬をもらう傭兵という立場のせいかな、結構ストレスをためていた模様の真名ちゃん。

まあ、愚痴ぐらいは聞くよ？　餡蜜食べにいくんだろ？

「・・・おごりかな？」

「そのぐらい奢るって」

「」

大人びていても、結構年相応な部分もあるかわいい真名ちゃんであつた。

いや、儉約家、かな？

事務所に帰ったところで、学園に提出するのは別途で、GS協
会に提出する書類を愛子とともに作成する。

こつちの方は戦力分布だの戦略分析なんかも追加しなけりやなら
ないので、毎日となると億劫だ。

もちろん、いつも学園内なのでテンプレ書式を作っではいるけど、
それでも面倒くさい。

「グチらないグチらない、さっさと作って寝るわよ？」

「へーい」

そんな話をしていると、雪之丞とタマモも帰ってきた。

さすがに疲れた様子のタマモは風呂に行かせて、雪之丞も書類に
かかった。

「どうだったよ？」

「あー？ また召喚鬼。あいつら気合い入ってねえぞ、最近」

「なんか、おやびんが召喚されなくて拗ねてるんだってよ」

「つたく、公私をつけるよな」

「おめーは、公私共にバトルジャンキーだろうが」

「ちゃんと、殺す殺さねえーっつう区別を付けてるぜ？」

ニヤリと笑う雪之丞。

これがヤツなりのユーモアセンスだというのだから、歪んでると
思う。

「はいはい、雪之丞君も、さっさと書かないと横島君が眠れないわ
よっ。」

「おー、すまんすまん」

最後に事務所長決済って、どうにかならんかねえ、実際。

タマモも俺も愛子も、日々寝れていくんだけど、雪之丞は日々ツヤツヤしてゆく。

曰く、「予想通りの日々だぜ」とのこと。

毎日戦争という生活は雪之丞にとって望むところだし、魔法先生たちとの連携も勉強になると喜んでる。

見た目「改造人間」、力「宇宙超人」、技「古今東西武道てんこもり」という雪之丞は、魔法先生や魔法生徒の中でも話題急上昇で、うちのチーム以

外にも出向を願うチームが多い。

ルチ將軍・・・いや、学園長もその辺、人材交流だとかいう話をしだして、魔法先生や魔法生徒のチーム入れ替えの一環で雪之丞を引っ張り出したり何だったり。

結果、俺もタマモも雪之丞も、多くの魔法先生や魔法生徒と作戦をともし、交流することができた。

実際、魔法生徒や魔法先生からの依頼は多いけど、相談で言えば一般生徒、それも女子小学生や中学生からの相談がダントツだろう。自分には見えている気がする、見えるような感じがするという思いこみやその事実に対する処理能力がない頃なので、見えていなくても見えている気になってしまい、実際に視てしまうと言うことが結構ある。

だから、その事自体をケアするのもGSの仕事であり、その分布から霊の特定を行いのも「仕事」のうちだった。

だから、彼女から、小さな金髪の少女から助けを求められたときには、そんな大きな話だとは思っていなかったのだ。

少女が現れたのは、たまたま早めに出勤が終わった日のことであつた。

日付けも変わっていない時間だったので、緊急出動に備えて雪之丞と共に待機していた、そんな時間だつた。

事務所の入り口が控えめにノックされた。

色々その後暗い事の多い雪之丞は眉をしかめ、俺は気配を探る。そして、二人で首をひねつた。

気配は「あの怪異」だが、あまりに力を感じなさすぎる、と。

「はい、どなた？」

「・・・相談したいことがある。「招いて」はくれまいか？」

はい、ドンツピシヤ。

つつか、これって自己紹介だよな？

吸血鬼は、「招かれない」と家には入れないという伝説にひっかけた。

だけど、やっぱり力を感じない。

どうなってるんだ？ と俺と雪之丞は再び首をひねつた。

女の名前は「エヴァンジェリン」A「K」マクダウエル」。

600歳の真祖で吸血姫、悪の魔法使い、だそうだ。

が、彼女自身から望んで殺しをしたことはないし、進んで襲つたこともないと言う。

もちろん、いろいろと嘘はあるだろうけど、それでも信じる事が出来る俺も横島も感じていた。

そう、あのピート、ピエトロ・ド・ブラドーにも似た雰囲気を感じていたから。

「そうか、ひどい話だな」

「……」

曰く、彼女はある魔法使いに人間の日常を体験するように言われ、真祖の力を封印された状態で中学生をさせられたという。

一応卒業の頃には迎えにくると言われたが、そのまま放置で15年ほど中学生をさせられているという。

さらに、封印をしたという魔法使いは鬼籍にあるという話で、もう誰にも封印が解けないのだという。

「……魔法使いには頼れないのだ。あいつ等は正義という果実に踊らされた道化だ。しかし、おまえなら、いや、ソナタなら、そう思っただけにきたのだ」

まあ、正解だ。

俺はまだしも、この横島忠夫がそんな話を放置できるはずもない。

彼女の言う封印が「呪い」と判断した横島は、奇跡的に事務所にいた小笠原エミへ連絡を取り、切々と現状を語り協力を依頼した。

現在、呪いに関して最高峰とも言える小笠原エミと、オカルト界における万能符・横島忠夫に解けない呪いであるとすれば、オカルト側に解ける人材などいないだろう。

そんな予見道理に、翌々日には彼女にかけられていた「登校地獄」が開封された。

だが、彼女自身には「魔力封印」などの追加呪いが掛かっている

ことが判明し、怒りのあまり横島と小笠原エミが学園長室に乗り込む騒ぎになったのだが、それでも学園長ことルチ將軍こと学園長は「エヴァの安全のために、封印が解かれたことを秘密にして欲しい」と土下座をした。

こと、責任者の土下座ほど信用してはいけないものはない。

彼らの土下座は交渉のカードであって、なんら意志が介在するものではないからだ。

俺はそのことをよく知っているし、横島もよくよくわかっている。なにしろ横島と言えば、神の如くの土下座をあやつる土下座世界の王者、マスターオブ土下座なのだから。

土下座をする事も見ることも慣れていない小笠原の旦那や金髪幼女は怯んだようだが、横島は一步先にでた。

「んじゃ、秘匿された魔法側で保護するんじゃなくて、表のオカルトで保護するっす」

え？ と顔を上げる老人。

「うちの事務所の除霊助手にして、いずれGSにするっすよ。で、立場はGS協会が保証。さらにうちの事務所と美神事務所がバックアップ。六道にも声をかけるっすから表のオカルトでこれ以上の立場はねえっすよ？」

真っ青になる老人。

どうだ、これが横島クオリティーだぜ、じいさん？

喧々囂々の交渉の結果、一応、中学卒業までは麻帆良にいらすと、GSになるのは本人の希望次第という流れになったが、その場で金髪幼女も「GSになる」と断言しているので、爺の交渉の余地はないだろう。

表のオカルトで言えば、美神事務所が背後にいと聞いて手を出すバカはいないし、裏の話で言えば「闇の福音」「不死の魔法使い」「悪しき音信」「禍音の使徒」等と言われている本人に加えて、オカルトヒーローの横島忠夫がいるというのだから手を出そうというバカは皆無だろう。

いや、皆無だと思われていたんだがなあ……。

「横島忠夫殿、あなたはなにを考えているんですか!？」

事務所に飛び込んできたのは、魔法生徒の高音「D」グッドマンのお嬢様。

ウルスラの制服のまま、影の魔法の使い魔まで顕在させての登場だった。

とりあえず、私はお茶を入れるために準備を始めるが、タマモちやんはちゃっかり子狐状態になってソファアの端に隠れた。……ずるい。

私も机に隠れようかしら？

まあ、それも義理に欠くということ、ウルスラお嬢様とその

従者である愛衣ちゃんの分のお茶を出すと、実に恐縮している愛衣ちゃんと対照的に、極めて攻撃的な視線のお嬢様。

「……ありがとうございます」

とりあえず、一般的な礼儀を忘れてはいない様子。

実際のところ、はじめは私やタマモちゃんが妖怪だということに警戒していた彼女だったけど、自分の狭量さを自覚して、ふつうに対応することと今までの悪意を謝罪してきた正義の人だったりする。だから、彼女の怒りが横島君に向くということは、かなり一般的なレベルの常識に引っかけられているんだと思う。

どうなのよ？ と視線を送ると、肩をすくめる横島君。

たぶん、心当たりが無いのだろう。

だったらなんだろう？

その疑問は、彼女の怒りの声が教えてくれた。

「……横島忠夫殿！！ あなたは、何を考えて、あの真祖の封印を解いたのですかあ！！」

ああ、そのこと。

思わず、肩から力が抜けた私。

あきれた顔の雪之丞君。

そして、ちよつと冷めた顔の横島君。

……あ、彼って実は結構怒ってるんだよねえ、「正義の魔法使い」がエヴァちゃんにしてきたことを。

人間だって終身刑でも15年も入れられていれば恩赦がある。

さらには、生活を強要させられ、強制労働があり、そして蔑まれる。

正直に言うと、この話を聞いて本気で怒った横島君は怖かった。

今までいろいろと経験した横島君は、「自称正義」という集団や

「世界のために」という立場で強権を振るう立場を警戒しているのだ。

さらには、目の前の誰かがそれにさらされていると、本気で怒るし本気で助けようとする。

そんな不安定な状態だからこそ、この麻帆良へ美神さんの手によって送られたんだと思う。

美神さんつてば、本当に横島君が大事なのねえ？

あ、だめだめ、目の前の険悪な空気から逃避したくて、変なこと考えちゃった。

「・・・彼女の境遇と今までの実績を考えれば、すでに彼女の罪は購われたと言つてもいいと判断したんだよ」

「それはあなたの勝手な判断です！ 元賞金600万ドルの指名手配難の罪はその程度で・・・」

「じゃあ、あと何年だ？ 何をすればいい？」

「そ、それは！」

「彼女はサウザンドマスターという男に呪いをかけられたが、二年間の学校生活で人間の生活と光の生き方を学べと言われた」

「・・・」

「そして卒業と共に解かれるはずだった呪いは、もう15年も延長されている」

「・・・それは、彼が来たくてもこれない事情が・・・」

「死亡つて話は聞いている。じゃあ、なんでその約束を知っている、

その「契約」を知っている学園長は「契約」を無視して学園に縛り続ける？」

「当たり前です！ 彼女が如何に邪悪で凶悪で・・・」

「「契約」つてのはそんな軽いものじゃない！！」

「！！」

「邪悪とか凶悪だとか、そんな表面的で流動的で感覚的な話をしてるんじゃない。「契約」の話をしているんだ」

契約、それは絶対の法則。

魔法使いがそのことを理解できないはずがないのに。

「・・・彼女の行いは俺も調べた。しかし、彼女から人殺しをしたのは、彼女を無理矢理真祖化させたバカ以外一人もいない。これはメガロメセンブリアのライブラリにも納められている事実だ」

「・・・え？」

「たとえ、寝込みを襲われようとも女子供は殺さない。遙か過去は家族のいるものも殺さなかったが、そう言い訳をして逃げようとしてだまし討ちをするバカが増えたので、全部返り討ちにしただけだ」

そういいながら、横島君は、分厚い書類の束を高音さんに渡しました。

ゆっくりと受け取って、徐々に、熱心に読みふけていた高音さんは、ひどく肩を落とします。

「子供の頃から「絶対の悪」として聞かされていた相手が目の前にいるんだ。悪者だっと思うのはいい。だがな、真実ってヤツは、一歩も二歩も踏み込まなけりゃ見えてこねえ。そういうものだ」

そういいながら、横島君は事務所からでていった。

高音さんは方を振るわせて、そしてボロボロと泣いていました。

「・・・わたしは、私は、なんて愚かしいのでしょうか」

高音さんが見ている書類は、GS協会と六道がまとめたメガロメセンブリアが行ってきたエヴァちゃんに対する非道な行為の報告書でした。

はじめの真祖化もメガロの官僚が「不老化」を研究するためにバ

力を唆したことが始まりだったし、途中メガロメセンブリアに助けを求めた彼女を誘い込んで処刑しようとしたりした行為もかかっている。

もちろん、表のオカルトで調べられる範囲での話なので、欠落や偏りもあるだろう。

しかし、様々なリーディングや過去の記録の編纂を行った上での結論なので精度は高いはず。

その資料をみて、自称正義の高音さんは混乱状態。明らかに自分がブレているようでした。

「ね、高音さん。私が前まで、何人もの生徒さんを神隠しにしていたのは知ってる？」

「……え？」

「はじめの人は50年以上前の人、最近最後は横島君かな？」

私は、学校の生徒に成りたかった。

私は、学校の授業を受けたかった。

みんなと一緒に学校で生活して、みんなと一緒に勉強して、みんなと一緒に……。

だから、私はいろんな時代のいろんな人を取り込んで、私の中に展開している異空間で学校のまねごとをしていた。

今考えれば酷く恥ずかしく後悔しきりの時間だったけど、そのおかげで横島君と出会えた。

「……それで、その、あなたの中にいた人たちは？」

「元の時間に戻ってもらったわ。だから、神隠しで行方不明なんてニューズなんて残ってないでしょ？」

「そんなことが可能ですの？」

「できるわ。そういう能力なのよ」

そう、取り込んでいた時間に関係なく、時系列バラバラで解放できる、そんな力なんか意味はないと思っただけで、逆にそれに助けられていた。

私の保護妖怪化を助けてくれた人たちや、議員の人たち、そしてGS協会にも「あの」クラスメイトがいたのだから。

横島君の「人類の敵」報道の撤回や修正報道がいち早く、美神美智恵さんの指示よりも早く拡散し、徹底されたのも「あの」クラスメイトたちのおかげでもあった。

一番最後の転校生にして、あの教室に終わりを迎えさせた転校生、横島忠夫は、クラスメイトの中でも伝説的な光を放っているのだ。

まあ、美神さんの丁稚時代んだけど、あとの評判が美化されたのよね。

とかなんとか話していると、雪之丞君が苦笑いで加わる。

「あいつはな、そんな資料無しでも金髪少女を救ったと思うぞ？」

「……なぜですか？」

「こつ、な、わかるんだよ、おれたち霊能者には

「なにが、ですか？」

「……霊能がささやく、だよ」「」

声を合わせる雪之丞君、タマモちゃん、そして私。

それは時々横島君がいう台詞。

いつ頃言い出したかは解らないけど、この台詞は横島君の台詞だと思わせるものがあった。

ちょっと驚いた顔の高音さんだったけど、笑顔と言うには複雑な笑いでそれに答えた。

しばらく、高音ちゃんたちとの当番はなかったんだけど、一週間

ほど経ったある日、高音ちゃんに偶然会った。

「気まずいかな、と思ったけれど、思いの外清々しい笑顔で話しかけられ、そして談笑できた。」

「で、最後に「いろいろと考えさせられましたわ」と言いつつ頬にキスされてしまった。」

・・・衆人監視の中で。

「『『『『リア充しねー！』』』』』」
「だぁー！ー！ー！ー！！！」

事故だ、偶然だ、気の迷いだ、聞いてくれー！ー！！

衆人監視の中での俺へのキス事件以降、何か吹っ切れたらしい高音ちゃんは、うちの事務所によく来るようになった。

相棒の愛衣ちゃんも何だか嬉しそうにやってきては、愛子やタマモとジャレてゆく。

「今日もそんな予定できたようだ。」

「『『『『『そういえば愛衣ちゃん、普段偶然会ってももつと堅い感じだよね？』』』』』」

「ああ、それは、この事務所だったら魔法秘匿しなくていいじゃないですか」

「学校でも寮でも、気が抜けて魔法関係が漏れないように、日々気合いが入っているそうだ。」

「確かに、眉間にしわ寄せて、何か我慢している風だったなあ」

「・・・え、ほんとですか？」

「ほんとほんと。あのままじゃあ、眉間にしわが定着しちゃうって」「いやー！ー！ー！ー！」

思わず手鏡片手に額を揉みしだく愛衣ちゃんのあたまを優しくなでて「冗談冗談」というと、涙目で怒られてしまった。

「もう！ 横島さんのバカ！」

こんなにアクションができるほど馴染んでは来ている。

「もう、横島さんもあまり愛衣をいじらないでください。この子は芸人じゃないんですから。愛衣もオイシイ反応をするから横島さんにいじられるのよ？」

「ナチュラルリアクションですよー！」

苦笑いの高音ちゃんも何だかんだといって愛衣ちゃんをいじるし、愛衣ちゃんも良いリアクションを返す。

なんだか、美神さんとこや最近のうちの事務所らしい反応だなあ。ガンガン染まってるってことかな？

まあ、それもアリだし。

キッチンにいた愛子とタマモがお茶を持って現れた。

「あら、今日は早いわね」

「ええ、授業が早くはけましたの・・・これお土産ですわ」

「ふふふ、おねえさまったら・・・」

はじめ、この二人は愛子が妖怪だと聞いてことを構えようとしたものだったが、明らかに常軌を逸した自分の正義というものの異常

さを「いろいろ」と実感してもらい、今の関係に落ち着いている。タマモについても「それなり」にゴタツいたが、まあ、仲良くお茶をする関係になっている。

「高音、これ、もしかして自分で作ったの？」

「・・・おいしいわ、これ作り方教えてもらえない？」

「結構ですわよ、こんど作りに来ますから覚えませんか？」

「じゃあ、おねえさま。今度のお休みに・・・」

家主そつちのけでこんな会話になるほど仲がいい。

「あ、あ、あ、あの、その、横島さんもよろしいです、わよね？」

こんだけ動揺するぐらいなら、あんな事しなければいいのに。

苦笑いで頷いてみせると、彼女は花が綻ぶが如くの笑顔を見せる。くそー、これでセクハラができないなんて、美空ちゃんの所の女子を相手にしているとき以上の苦惱だぞ。

年齢的には超ストライクなのに！！

「忠夫、いるか」

千客万来。

本日は、予定外の客も多いらしい。

入ってきた幼女をみて、高音と愛衣が視線を強くする。

「ほほお、正義の魔法使いどもも来ていたか。おまえたちにはこの空気は馴染まんのではないのか？」

「・・・あなたこそ、ここの空気に馴染めまして？ エヴァンジェリン=A=K=マクダウエル」

そう、小型美神さんを体現するような金髪幼女の名は「エヴァン
ジエリン」A「K」マクダウエル」こと「エヴァちゃん」。

魔法世界で「闇の福音」「不死の魔法使い」「悪しき音信」「禍
音の使徒」などなど、厨二感覚まるだしの異名を轟かせている真祖
の吸血姫だ。

彼女もまた、学園防衛の魔法生徒なのだが、彼女自身は呪いで括
られているために仕方なく従事している状態だった。

しかし、正義の魔法使いたちへの情報リークと呪いの解呪によつ
て自由な力を取り戻し、現在は一般生活へのリハビリとうちの事務
所預かりになつて

いる立場から、ふらりと事務所に現れるようになった。

というわけで、俺は彼女の自由は確保したつもりだったんだけど、
その事実に感謝してか、うちの事務所の人間として振る舞ってくれ
ることが多い。

「所長、本日の予定の確認です」

まるで秘書のように振る舞うのは、エヴァちゃんの従者である「
茶々丸」。

科学と魔法のハイブリットガイノイドで、俺やタマモの目から見
ても「マリア」と同等に魂を持つ存在だ。

たぶん、霊能者なら大半が、神族魔族なら100%、魂を持つて
いることを認めるだろう。

このことをカオスに伝えたところ、二週に一度の割合で現れて、
美空ちゃんの所の女子、葉加瀬聡美と大いに盛り上がる生活をして
いる。

ああ、「ロリ」とかそういう関係ではなく「サナダ」的關係とい
った方が正しい。

なんとも「マッド」な話だ。

「ありがとう、茶々丸ちゃん」

「……いいえ、マスターがお世話になっている方ですから／＼」

業火を背負つての言葉の応酬をする大金髪と小金髪。

これを見たらおキヌちゃんは何と言っただろう？

思わず苦笑の俺だった。

「さーさー、そろそろ出勤だ。タマモと高音、愛衣ちゃんは右回りでフォロー。俺とエヴァちゃん茶々丸ちゃんは左回りでフォロー。定時連絡はマメに愛子に入れてくれ」

「『『『了解』』』」

さあ、横島忠夫霊能事務所、本日も開店だ。

で、その日の営業は、深夜三時まで続いた。
さすがに毎日これじゃあ死ぬぞ？

さながら、毎日が戦争だ。

GSを名乗っているが、俺はどちらかというと対人戦闘に特化した霊能を極めている。

もちろん、雑霊の説得や周辺霊との交流という事務所方針に従っ

て納める方向も修行中だが、かおりや一文字に劣る程度しかできていない。

では、俺がこの事務所でなにをしているかと言えば、もちろん「対人戦闘」だ。

横島が事務所を開かされた「麻帆良」という土地は、オカルト業界にとつて「鎖国」された国だった。

秘匿された魔法使いたちが集う日本の中の別の国であり、一般人も住んでいることから大規模侵攻が難しい土地ともいえる。

情報のカーテンに阻まれたその土地の内側から「GS」への協力要請がきた。

そこに答えたのは、・・・いろいろとたらい回しにされたあげくに答えさせられたのは好敵手「横島忠夫」。

魔法使いの協力者にして、麻帆良の内部への間者、それが横島靈能事務所の役割といえた。

もちろん、協力者としての仕事配分が重いので、間者としての意味があるかという話もあるが、最終的には大きな意味を持った。

そう、秘匿された魔法世界から公開されたオカルト世界への亡命窓口として、だ。

その第一号となるのは、魔法世界で賞金首にもなったという真祖エヴァンジェリン「A」「K」マクダウエルであった。

600年の魔法知識、魔法世界の裏表に通じた経験、そして亡命に前向きな気持ち。

はつきり言えば、GS協会など小躍りした。

これ以上無い情報源であったし、これ以上無い宣伝であったから。加えて、GS側のバンパイアハーフ、ピエトロ「ド」ブラードとも面識があり、その友誼は根深いものであった。

そう、わりと、その、根深かった。

・・・まあ、細かい話はいい。

そんなわけで、横島事務所の主要任務は魔法世界と深く関わることに舵取りを直し、実に多彩な交流をされることになった。

その一端が、学園内部の魔法書や世界樹をねらって侵攻してくる怪異・妖怪、そして術者たちの撃退だ。

横島のいるところには召喚鬼が多いらしく、顔見知りになってしまったぐらいらしいが、俺の方には術者もいれば能力者もいるという多彩さで、日々全力を尽くせてうれしい。

が、俺が応援しているはずの魔法使いたちの戦力幅が狭い。

攻撃も防御も魔法に頼っているものだから、明らかに読まれているのだ。

それでもスタイルを変えないことがいいのか悪いのか。

まあ、単純に悪いわな。

勝っても負けても「魔法使い最高！」しか考えず、進歩もしなければ工夫もしない。

こんなんで今まで麻帆良を守り切れていたこと自体が奇蹟といってもいい。

本当に大丈夫なのかね、こいつらは、と思わざる得ない。

少なくとも、この魔法使い達よりも数段高いところにいるであろう横島や俺ですら、工夫や開発に余念がないというのに。

とりあえず、その辺に不満をためていそうなガンドルフィーニ教諭あたりと話す機会があったので、遠回しに聞いてみると・・・

「・・・ははは、我々は「魔法使い」だからね」

で済ませやがった。

だめだ、こりゃ、てのが最近の感想だ。

逆に金髪幼女にその話を聞いてみると、大爆笑だった。

「伊達雪之丞、貴様は正しい。あいつ等は確証なしに自分達が優れていると盲信し、今以上の力を持つことなど無い。逆に、力が得られなかったタカミチや、もっと強い力をと渴望しているもの以外、本当に強い魔法使いなどおらん」

「・・・なんか変じゃねえか？ 力や実力に上限はねえ。上には必ず上がっている世の中だ。何段もの高い上をひっくりがえす努力も修行もしねえってのは、緩慢な自殺だぜ？」

「その通りなのだがな。この麻帆良にいと、最後にや「最強」がケツを拭いてくれるという安心感があるんだらうよ？」

「かあ、そういうことかよ」

思わずため息がでる。

横島に龍宮がこぼしていたグチの大本だらうな。

奴らにはプロ意識がない。

慈善事業というよりも趣味で学園防衛なんてしているものだから、仕事っぽい部分から逃げているとすら思える。

基本、「正義の味方」であって「正義の施行者」じゃないんだらう。

助っ人気分が抜けないのが根本だな。

「・・・ふ、さすがは忠夫の盟友。解っているな」

「つつかよ、表のGSなら、三流でも分かる話だぜ？」

「そうか、それは期待のもてる世界だな」

「もちろん、四、五流となるとゲストとバカばかりだけだな」

「まあ、そういうバカの相手もなれているからな、問題ない」

わりとこの金髪幼女とは話す機会が多い。

表も裏もその裏も通じている相手なので、わりと話が合うのだ。

かおりとは別の意味で気軽に話せる女なので、結構貴重じゃない

かと思っっている。

かの大霊障と言われた事件の際、麻帆良は結界を補強し、大々的に麻帆良自体を封印することで外からの障害を排除した。

これ自体は魔法世界の言うところの勝利だろう。

しかし、結界内にすら現れた霊的な驚異には意味が無く、多くの「正義の魔法使い」が負傷した。

彼らの中で霊的な驚異に対抗できる力を持つものは少数で、神鳴流の一定以上の剣士以外居ないと言っている。

私は、真祖である私は、結界の効果増強により指一本動かせない状況だったので茶々丸の報告を聞くばかりであったが、魔法先生の半数が入院したという。

そして、外の騒ぎが収まって結界を元に戻そうとしたら、今度は緩みすぎてしまい、昨今の敵影強化に繋がっているという。

アホらしい話だ。

技術系の魔法先生の大半が入院したからといって、それは無かるう、ジジイと思っただが、そのおかげで生涯の出会いをすることになった。

表のオカルト英雄^{ヒーロー} 横島忠夫。

人界侵攻を企てた魔神陣営に潜り込み、そして幹部の一人と恋仲となり、共に戦う中でお互いをかばって、永遠に伴侶を失った男。

それでも、それでも、魔神を討ち取った英雄。

魔法世界の紛い物の英雄などとはちがう、本当に世界を三界を救った英雄だ。

時代が時代なら神話にすらなるであろう偉業だ。

・・・いや、本人にこんな事を言えるはずもない。

間違いなく男は、横島忠夫は自分のことを英雄だなどと思ってい
るはずもないのだから。

会ってみれば、横島忠夫は、忠夫は、義に厚く、暖かく、そして
理不尽を許さない男であった。

私自身の生い立ちを聞き泣いて、過去を聞き拳を握り、今を知り
気炎を吐いた。

すぐに飛び出そうとして、一步でたところで止まり、手元の電話
で各所に電話し始めた。

そして最後の相手が、もう一人の恩人、「小笠原エミ」。

GS世界最高の呪術師にして超一流のGSであった。

話を聞いた彼女は、手持ちの仕事を一気に終わらせて、二日後に
は忠夫の事務所に乗り込んだ。

「・・・そんな腐った男なんて殺すべきなワケ！」

「実はすでに死んでます」

「・・・くそお！ 絶対に一度生き返らせて、エヴァンジェリンに
土下座をさせるワケ！！」

「賛成っす！」

さすがに反魂まではしなかったが、二人分の全力で見る見る解析
されてゆき、「登校地獄」は解呪されてしまった。

もう、あっさりど。

あまりの簡単さに声もでなかったが、二人は全く表情を緩めてい

なかった。

「エミさん、こりゃあ・・・」

「横島、呪力を追うワケ！」

「了解すす！」

なにかオカシイのか、二人は学園の地図のうえで、丸い玉のようなものを転がしていた。

「・・・ここっすね」

「横島、心当たりは？」

「中部部、学園長室」

「つまり、そいつが犯人なワケ」

暗い笑みを浮かべた二人は、なぜか釘バットを構えてダッシュしていった。

ついていった先で聞いた話だと、未だ学園長室にいたジジイに力チコミをかけて、真実を吐露させたという。

登校地獄とは別に、私の魔力を押さえる結界が、電氣的に発生されており、それを管理していたのがジジイだというのだ。

あまりのことに切れそうになったが、ジジイの土下座にひるんだ私と小笠原エミ。

が、忠夫はひるまなかった。

そして、学園に縛られた私に光を見せてくれた。

たとえ学園の外にでて、なにかしらの柵があるだろう。それでも、忠夫が共にあってくれるのならば前に進める。

私は、そんな風を感じている。

人間以上。

これが学園都市が下した横島忠夫霊能事務所の評価だった。

正確記載では「魔法生徒以上」というのが本当の所なのだが、彼らのプライドが「魔法先生以上」と言わせなかった。

初めて魔法先生たちの集会に現れた時は、軽いだけの少年と雰囲気悪い少年だと思われていた。

魔法先生である「葛葉刀子」や「シスターシャークテイー」をナンパしたり、魔法生徒である高等部女子を追い回したりと、きわめて信頼性のない軽い男の行動だったが、牽制するように動いた二人の魔法先生、「ガンドルフイーニ」「神多羅木」両名が呻く声で誰もが我に返る。

淡く光る手刀を、両名の首筋に当てる、二人の少年。

いや、横島忠夫と伊達雪之丞。

今までの行動が嘘のようにしなやかに動き、そして誰にも気づかれないように忍び寄っていた。

実践戦闘派である二人は、その一件以降、大いに二人を認め、そして前向きに彼らをとらえた。

さすが、人間以上だ、と。

実力を現す「人間以上」というのは、実は評価以外の側面もある。その「人間以上」とは、かの魔神大戦で実践された戦法のこと、魔法世界でも実現できるかどうかについて検討されたものだった。

それゆえに実践者の彼らは色々と注目が高かった。

中でも「魔神殺し」横島忠夫の名は俄然注目度が高く、かの大戦の英雄「ナギ」スプリングフィールド」にも劣らない英雄としている向きもあった。

が、あの「ナンパ」「セクハラ」で地に落ちた。

で、その直後の事態でそれが「擬態」と判断され、恐ろしいまでに鰻登りになった。

伊達雪之丞が見た目に反して心優しい不器用な人間だったこともあわせて、横島忠夫の評価も相乗的に高まったのだった。

そして、かの人物を招き入れた学園長の評価とGS協会の評価上昇にもつながり、まさにスパイラルと言った状況だった。

加えて、一月にわたる実践実績は彼らの絶対評価を固定化させるにふさわしいものがあり、最中に起きたエヴァンジェリンの呪いの解呪に対しても不穏な意見は皆無だった。

忙しさと、周りの不要に高い評価のせいで、横島忠夫は異常なくらいに高い節制を求められ、逆説的に高まった煩惱は文殊というはけ口に集中することになり、二日に一個という急速な生成を可能としていた。

伊達雪之丞は、これまで当たり前のように学校に行っていないなかった。

が、横島の事務所に入ったからにはそういうわけにはいかない。いかせない。

何しろ青春一筋ん十年という学校のエキスパート愛子が許さないからだ。

愛子による、短期集中講義が行われ一般高校生並の学力を身につけた雪之丞は、早々に高校へ編入させた。

とりあえず自分、横島忠夫もむりやり編入させられているため、同じクラスになっているのだが、そのクラスが異常に濃かった。

受けねらいとしか思えないリーゼント+バンガラや改造学制服空手家、柔術使いを自称するイケメン。

……ルチ將軍ルチしやうぐんの陰謀か？

思わず呟いた横島のせりふに正面の生徒が聞いた。

「ルチ將軍つてだれよ？」

「まじしひょう学園長」

「くくくくぶつ……」「」「」

大爆笑の渦となり、担任の男性教諭（魔法先生）ですら悶絶して倒れた。

男子は笑いのために痙攣し、女子ですら涙を流して笑っていた。

「しかし、あの將軍の孫っていうから、どれだけやばいかとおもったら……」

「あれだもんな……」

盛り上がる教室の一角に座る横島と雪之丞だったが、その話題に引つかかる人間も少なくなかった。

將軍の孫である「コノカ」が美少女であることは有名で、年下であることを差し引いてもナンパするにあたがう美少女だと力説するバカ数名。

女子は醒めた目で馬鹿をみてる。

「まあ、誰と誰がつきあつててもいいんだが、あの遺伝子を一族に迎えるちゆうのを真剣に考えるべきだろうな」

「ああ、あの頭蓋骨を看護が抱いて「パパでちゅよー」とか言ってきたら……」

横島と雪之丞の台詞で、妙な想像力を働かせた数名が再び悶絶。そんな学校生活を雪之丞は結構楽しんでいたのであった。

ナンパもできない、煩惱も高まるばかりという中で、GSであるという事実からか、校外の女子からの相談が多くなった横島。

やはり心霊やら幽霊や等の相談が多く、その多くが無料で霊視しているせいだというのが彼らしい。

実際、彼が霊視を無料にしているのは、営業活動の一環だったりする。

昔、美神がオカGに出向したときに感じたのだが、ネームバリューというものはバカにできないのだ。

逆に、都市伝説のように信用が浸透すればそれも使えるのだ。

学校などの閉鎖空間ではその噂は広がりやすいし、信用も深まりやすい。

魔法先生や魔法生徒の信用もあってか、そのスピードは光速をも越える勢いで定着してゆく。

ゆえに、手を出せない相手の女子からの誘いがひっきりなしとなり、手を出せない仕草を「純情」と勘違いする女子も加速度的に増えた。

実に横島的な不幸であったが、周囲からみれば「モテモテ」に見えるあたり、さらなる不幸といえる。

「タダオー」

すでに初等部でもその人気は高く、全学共通部である「図書館島探検部」や「占い同好会」「心霊研究部」などから引く手あまただった。

逆に、雪之丞は「中武連」や「武術連」などから引く手あまたであり、人気のほどは横島を越えつつある。

むろん男子にだが。

人気の低年齢化が進むと、今度は小学校低学年や未修学児に対する対霊教育やら教室という仕事も舞い込んでくるようになった。

本来は一線を引いたGSが受け持つような仕事なのだが、麻帆良にGSは彼らしかいないので、結構忙しい。

本日も保育園で霊に対する常識とか危ないところに近づかないとか、そんなことを「ヒーローショウ」形式で説明したりしていた。もちろん、怪人やセツトはタマモの幻覚。

そしてヒーローは自前で変身できる雪之丞。

今では幼児の大人気ヒーローだったりする。

ダークヒーロー「ダテ・ザ・キラー」と「ヨコシマン」は来年の麻帆良祭でも引き合いがでていいるほどだった。

「ご苦労様です、これどうぞ」

そういつてお茶を差し出した女性をみて、横島は涙を流した。

感激したのか、と雪之丞が聞くと、横島はオイオイ泣いた。

「なんでや、なんでこんなに完成された美女が、中学生なんや・・・」

「・・・え？」

驚く周囲。

彼女、那波千鶴はきわめて成長が早いせい、年齢通りにみられたことがなかった。

低めでも高校生、ふつうなら大学生、場合によっては主婦扱いであつた。

これはさすがに彼女もへこむ。

というか、彼女のトラウマでもあつたのだ。

が、目の前の男は、なんの会話もなしに自分の年齢を当てた。

直撃したのだ。
年齢も、ハートも。

「あ、あの・・・なんで私が、中学生だと？」
「わからないでか。わいは高校生以上のお姉さんじゃなきゃロリっつう鋼鉄の掟があるんや!!」

発言事態はアレだったが、千鶴にとってはそんなことはどうでもよかつたのだ。

自分が気にしていることを、全く気にしないでくれた初めての男性。

大いに気になるに決まっている。

「・・・お名前をお聞きしてもいいですか？」

「横島忠夫、高2や。千鶴ちゃん」

「え、なんで私の名前を？」

「名札」

思わず自分の姿を思い浮かべて真っ赤になる千鶴。

「千鶴ちゃんはかわいいなー」

まるで童女をなでるような仕草に、さらに赤くなる千鶴であったが、心地よいとも感じているようだった。

今ここに、「横島忠夫の正義破壊し隊」最強の戦士が誕生した。
その戦士の名は「那波千鶴」。
そのスキル、パワー、そしてソウル。

通常の中学生の三倍とも言われるそれが、熱く燃えていたのだ。た。

本来は姿形を整えて、中学に入学する予定だったタママだったが、
「なんとなく嫌な予感がするから、横島と同じ学校に行くわ」

と宣言して隣の席を陣取った。

それを聞いたルチ将軍、・・・学園長は悔し涙を流したそうだが、
悔し涙の理由や訳は正確には伝わっていない。

ともあれ、勉強にしろ昼飯にしろ常に横島の隣にいる姿を印象づけることにより、オープンな人間関係を強調しようとしたらしいのだが、実際のところはオープンなオカルト関係者なため、使い魔とか式神として見られていることに気付き齒噛みするタママであった。

そんなこんなで急速にもとの学校のようなオカルト混在型学校に変貌しつつある校舎に、見知らぬセーラー服の少女幽霊が現れるようになった。

名前は「さよちゃん」。

「永遠の中学三年生だそうだ。」

それを聞いたクラスの男子の一部が「エターナル」と叫んだところで撃墜されている。

何がエターナルなのかは不明。

ともあれ、ゆらふらゆらふらしていた小夜ちゃんをとっ捕まえて話を聞いているうちに、いつの間にか周辺の人間全員に見えるようになっていた。

「こ、これで友達百人できますか!？」

と大いに興奮した小夜ちゃんは、校内でもっとも害の無い浮遊霊として有名になった。

実は、彼女自身は昔から有名幽霊で、古参の教師などは彼女のことをどうにかしたかったらしかつたのだが、GSに頼むと除霊されてしまうという思い込みがあったため、依頼にまでならなかったらしい。

なんだったたら、寄代にでも括って実体持ちますか、といったのは横島忠夫。

彼の発案で作られた手法、人工エクトプラズムによる実体を構成し霊体と融和させるという方法で、彼女は60年ぶりに実体を得ることが出来たのだった。

その事にひどく感謝した彼女は、横島霊農事務所に顔を出し、事務や家事を手伝うようになったのだった。

現在、彼女の友達の数は64人。
百人まで36人だった。

もちろん、速攻で100人を超えることは間違いなかった。

第一話(改) 麻帆良にやってきたGS(えいゆう)(後書き)

てなわけで、書き始めましたが、ストックは殆どありませんw
とりわけ勢いのあるうちに書き込みますのでお楽しみに。

1 1 / 2 6 いろいろと校正しました

1 1 / 2 8 算数あわせましたw

1 2 / 1 1 もうちょっと直しましたw

0 2 / 0 6 大幅改稿(終わりのほうは弄ってませんw)

0 2 / 0 7 やっぱり誤字脱字修正w

0 2 / 2 6 長文が勝手に開業されている部分を修正してみたけど・
・・。

次話更新タイトルは「ファーストキスはたこ焼き味」!!

第二話(改)ファーストキスは、たこ焼き味(前書き)

第二話です。

全面改訂ではなく、部分改修です。

心情面とか色々の追加でした。

第二話(改)ファーストキッズは、たこ焼き味

「なんで、こんなに好戦的な馬鹿が多いんじゃー！バトルモンガー！」

ダッシュで逃げている俺を追うのは、腕に覚えのある男達。

基本、体育会系の格闘部で修行しているらしいのだけれども、最近俺を追うのが流行っているらしい。

で、そんなブームの火付け役は「クーフェイ」。

ウルティマホラなんていう総合格闘大会で、全学園を通して総合優勝したという猛者だったりする。

なんとというか、無茶苦茶な女の子だ。

で、彼女自身、むちゃくちゃ少年バトル漫画系のキャラで、強いやつと試合する！ というのが趣味みたいな存在だったりする。

もちろん、そんなユツキーみたいな相手と一度対戦すれば、生涯付きまとわれるのは必至だったりするので、思いつき逃げまくった。

そう、あらゆる手段を使って逃げるだけ逃げただけなのに、

「横島老師には、武術の始祖のカオリがするアル」

こんな発言を触れ回りやがった。

そして、その発言を面白おかしく新聞に載せやがった新聞部、ゼッターうらむ。というか呪う。

まあ、猿神老師の稽古の成果だといえる近接戦闘やらなんやらを考えれば、武術の源流って言うのも嘘ではないけど、どんな嗅覚してるんだか。

とはいえ今は逃げ出している途中。

ランナウェイ、いま、走り続けると言うわけで。

ちなみにユツキーは、片っ端から相手をしている所為か、一回りして落ち着いたそうさ。

オレもそれを考えないわけじゃないけど、痛いのも辛いのもイヤなので、勿論逃げ回るのだ。

ただ逃げるだけでは面倒なので、いろいろとトラップゾーンを仕掛けることにした。

夜な夜な仕掛けているせいか、色々と魔法先生たちに質問されたんだけど、昼間の騒ぎは知っているので、見逃してくれている。

正義正義というわりには、結構この辺が「ナロー」なんだよなあ。

まあ助かるけど。

次々と腕試しの挑戦者が現れ、数々の罠と逃走で切り抜ける姿は最初、クーちゃんの言葉をあざ笑うかのように言われていたが、次第に罠の精度の高さや何故か絶対に引つかかるトラップゾーンは有名になり、某忍ばない忍やバカンフーことクーフェイなどが修行のためと挑み、そして脱出不能になって俺の携帯にかけてくるという流れになってきていた。

トラップだってただじゃねーんだ、遊びに使うんじゃない！と怒ると、

「だったら、手合わせしてくれるアルか？」

「試合つて下されば、トラップで遊びませぬが？ ニンニン」

と聞く気が無いことを表明している。

実際、初めてトラップで宙づりになっている忍ばない者を見たとき、俺は血の涙を流した。

「なんでこんなに美味しそうなナイスバディーが中学生なんじゃあ
ー！！！」

その台詞に大きく喜んだ忍ばない者は、どこのエロゲーかという格好で畏にかかることが続いている。

救援の電話を受けて、ちょっとだけ嬉しそうな気分になってしま
う自分を発見し、心の底から叫んでしまった。

「わいはロリやないんやー！」

我が正義、ジャスティス風前の灯火かと自覚の日々であった。

二学期末試験を終え、学生らしく冬休み前の試験休みを謳歌していた俺たちは、空いた時間を近所幽霊への挨拶周りに当てていた。GSの活動と地脈安定化の呪符の影響か、よほど力が弱い霊以外は、結構安定して認識しやすくなってきていた。

ゆえに、霊に対する常識とか、霊が行うであろう問題に対しても啓蒙し続けていたし、霊になってやりたいほうだいしている新人にも注意を喚起していた。

全く靈感のない人には「危ない人」にみえる行動だが、魔法使いのお膝元らしく、表のオカルトにも寛容な土壌があり「ああ、幽霊相手にしているのか」とスルーしてもらえるのがありがたい。

クラスメイト達からも細かな相談を受けているし、雪之丞も結構独自に動いていた。

タマモや愛子も「怪異」であるが故に、ハイレベルな相談がくるらしく、結構女の子連中と集まっている光景をよく見る。

とても歓迎できる流れだと思う。

「そーなんですかあ？」

「そーなんですよ」

遊びに来ているという名目で事務所を手伝ってくれる少女さよちゃんは、まるで美神事務所のおキ又ちゃんみたいだな、と思った。

彼女もおキ又ちゃんも結構天然だし、芯は堅いし、それでいて可愛い。

なんだかこういう女の子って結構いるんだろうか、などと考えるのは不遜だろうか？

・・・ま、不遜だな。

そんなバカなことを考えながら、折り紙で事務所内を飾り付ける俺とサヨちゃん。

実はクリスマスと年末年始をみんなで祝おうという話になったので、いつそ一緒に飾り付ければ楽になるとか言う話で小学校のお誕生会レベルで飾り付けるということになっていたんだけど、正直言って調子に乗りました。

折り紙どころか模造紙とかで壁紙っぽくしたり柱を作ったりしている、サヨちゃんもノリノリになってゆき一緒に暴走してしまった。

学校が休みに入ったことを聞きつけたシロが遊びに来た瞬間、思わず叫び声をあげてしまったほどであった。

「な、な、な、なんなんでござるか、これはあ!？」

模造紙や折り紙で、ベルサイユな宮殿風にしてみました。とか言っていたら、帰ってきた雪之丞とタマモに怒られてしまった。

まあ、愛子の協力で「愛子空間」に収納してもらったんだけど、ちよつともつたいなかなたね〜とかサヨちゃんと言っていたら、再び怒られてしまった。

ふぎゃー!

「相変わらずでござるなー、先生は」

年末から年明けにかけて、おキ又ちゃんは氷室の家に里帰り、美神さんは海外バカンス+精霊石買い付け巡業といった感じで、美神事務所が開店休業になるためシロも里帰りの予定だったのだが、全力で麻帆良に遊びに来たいと訴えてきたそう、美神さんも根負けして許可したそう。

電話口で申し訳なさそうな声の美神さんから聞いた話。

俺自身、休み中も麻帆良にいるつもりだったので問題ないんだけど、こんな狭い土地にいても詰まらんぞ? とシロに聞いてみるが笑顔で「楽しいでござるよ?」とかにこやかに切り返す。

なんかつかみ所がなくなりつつあるなあ、とか思う俺であった。

独立した横島先生の元へやってきてみれば、結構地元の間人が入り乱れていたのをごさる。

おキ又殿と同じく、元幽霊というサヨ殿は性格もおキ又殿に似ており、穏和なゆったりとした方のごさった。

六十年も中学生をしていた中学生のプロと自己紹介をしていたのをごさるが、それもどうなのをごさるう？

同じく、15年も中学生をなさっていたという真祖エヴァンジェリン殿は「今年はまだ卒業だ。」とニコやかに語っておられる。

聞けばピート殿との面識もあるそうで、年末の宴会に来ることを伝えると実に嬉しそうな、まるで美神殿がイタズラを思いついたかのような笑顔で「私の存在は伝えなくてくれ。そちらの方が面白いからな」と仰ったのをごさる。

「いわゆる「さぶらいず」というやつでござるな？」

「うむ、やつは私との再会に泣き崩れるだろう。」

実に感動的な光景になることを期待するのをごさる。

拙者も友人知人が喜ぶ姿は大好きなのでござるよ。

そんなこんなな生活が続く中、年末が訪れようとしていた。

よくよく考えてみれば、東京って俺の地元じゃねーんだよな。

気持ちは関西、現住所埼玉県民。

帰るとか帰らないとか意味ねーわな。

そんなわけで、学園に遊びに来たシロも含めた事務所メンバーは年末年始を事務所で過ごすことにした。

もちろん、年末&新年パーティーをしようと思いをかけたら、集まる集まる。

まず、事務所の人間、俺、伊達、愛子、タマモ。

で、美神事務所からシロ。

続いてほぼ常駐している、高音、愛衣、エヴァンジェリン、茶々丸、チャチャゼロ。

さらにさらに、タカミチ、小夜ちゃん、このかちゃん、刹那ちゃん、千鶴ちゃん、夏美ちゃん、美空ちゃんとの辺でだんだんカオスになってくる。

で、遅れてやってきた ヨーロッパの魔王カオス、マリア、聡美、超、四葉、クーフェイ、忍者とくると、既に統制不能だった。

いつの間にか現れた魔鈴さんの異空間に皆で乗り込んで、呑めや歌えの大騒ぎとなった。

「横島さん、お招きいただきありがとうございます！！」

形式どおりの美形、ピエトロッド・ブラドールの登場と共に、会場が沸いた。

なにしろピートはGS協会宣伝の看板だ。

踊るGSと二枚看板かな？ 結構名前と顔が売れている。

「よー、ピート。じつは紹介したい人がいるんだ」

「どなたですか？ もしかして、横島さん、こっちでいい人……」

「いい人じゃねえけど、いい真祖だ。」

「……え？」

ピートは真っ青な顔になった。

「ご紹介しよう、真祖にして中学生、エヴァンジェリン=A=K=マクダウエル嬢だ!」

「よお、ブラドラーのどら息子。ひさしいな。」

「ぎゃーーーーー!」

まるで梅図か おの漫画のように恐怖に顔を歪めたピートが俺に縋りついた。

「よ、よ、よ、横島さん、あの方がどなたかご存じですか!? 御存じないんですね!? 知らなかったと言ってくれば許しますよ!」

「何を言ってる、ちゃんと「真祖」だつて紹介しただろ?」

「ぎゃーーーーー!」

まるでこれから滅ぶ怪獣のような声を上げたピートはひざまづいた。

もう終わりだ・・・とか呟いているピートの頭に、ひょいっと足を乗せるエヴァちゃん。

「そなた、真祖の血族でありながら、オカルトGメンに入るそうだな?」

「裏切ったな、裏切りましたね、横島さはーーーーん!・・・むぎゅ。」

「黙れ、馬鹿者。」

ぐりぐりと踏みしだいたあと、エヴァちゃんは笑顔を込めていった。

「ソナタに感謝を。ソナタがつけてくれた道筋のおかげで、多くの人が世になじめるだろう」

「・・・へ？」

「ソナタの活躍があれば、私とて人の世の生きる道が見いだせるだろう。」

足をのけたエヴァちゃんは、俺の隣に立った。

「横島GSが教えてくれた。悩んだ時間だけ選択は重くなる。しかしそれ以上に素晴らしくなると。」

天使の笑みのエヴァちゃんは俺にすがった。

「・・・私は今、とても幸せだ」

おお、と声が響く。

「そうかそうか、学園から自由に出かけられるし、日本趣味で京都奈良に修学旅行となれば幸せだよな。」

たちまち機嫌が斜めになって、俺の足を踏みしめるエヴァちゃん。

ストーンピンブ、ストーンピング・・・

いたたたたたた！

とはいえ、まあ、15年も足踏みしていたんだから、その分の進路だって重いんだろうし、色々と選べるんだぜ？

「・・・忠夫、私が進学を考えているといったら笑うか？」
「いいや？ バンパイアハーフがオカルトGメンを目指す時代だぜ？ それこそ何にだってなれるさ。医者にでも科学者にでも警官にでも、GSにでも、ね。」
「ふふ、私が六道に行ったら面白いかも知れんな」
「そりゃ面白い。でも、六道の当主も歓迎すると思っぜ？」
「そうか？」
「そうだよ」

さも面白そうに笑うエヴァちゃん。
ピートもなんだか嬉しそうだった。

その後の飲み会で、気付けばピートが横島さんがいなくて寂しいと泣いていたり、タイガーが笑っていたり、シロとタマモが仲良く寝てたり、クラスのやつらが乱入してきて騒ぎとなり、寝起きで不機嫌なシロとタマモに撃沈されたり。

そんな騒ぎの中、横島は笑顔のまま眠り落ちていた。
一人また一人と彼のもとの集まる。

全てを知るものもいれば、学園での人なりしか知らないものもいる。

しかし、彼が抱えている傷と歪みと涙は、なんとなく分かっていた。

それぞれが、それぞれの思う横島を感じていた。
そんな夜が明けると新年だった。

新春探検染なる企画に乗ったのは気まぐれだった。

シロが散歩をねだるので、学園から銚子港まで往復したところ、
追従していたさんぽ部の忍者が根を上げた後の事。

く流石にここまでくるのは散歩ではござらん、ゲフ。く

それが失神時の楓の台詞であった。

帰り、楓を背負って帰ってきたときに、役得だと思ってしまった
自分自身を封印せねばならないと大騒ぎであったが。

ともあれ、流石に散歩で何度も警察に追走されるのはいやだった

ので、密度を濃くしようということで参加したのが図書館島探検部の新春企画。

既に最下層到達記録を持つ俺だったが、殆ど勘によるものだったので、マッピングしていない。

数多の図書館島探検部員たちが涙を流したものだだったが、それに対して少女は言った。

「誰かがいけると判ったのです！ ならば、その道があることを信じてゆくのです！！」

デコが輝く少女の意見に皆が賛同し、数々の企画が打ち立てられていった。

その中の一つが「新春探検染」である。

まあ、何かにつけて人を集めて、探検の足しにしてやろうというだけなのだろうが。

その方向性は間違っていないだろうけど、いささか参加者を過信していないだろうかと思う俺だった。

「先生や、先生が来てくれはった！！」

「魔人さまや、魔人様や」

小躍りして喜ぶコノカとハルナ。

静かに鼻息を荒くするユエ、ノドカ。

つつか、なんで中学生ばかり集まってくるかねえ、と苦笑いの俺。せめて高校生以上が来て欲しい。

お姉さんタイプなら大歓迎だ。

で、シロはその規模に感激し、本を読むというよりも探検冒険すること自体に喜びを見出していた。

瀑布を乗り越え、谷を渡り、本能のままに駆け回った結果、再び底に到達してしまった人間（？）発生。

「（横島） 先生の弟子でござるから」

シロのその一言で、俺への弟子入りを望む探検部員が続出したのであった。

無論、中学生四人は自称「弟子」であることを譲らないのであった。

もちろん、その他でも自称弟子が多い俺なんだけど。

一部で師匠、一部では先生といわれる横島であるが、身分は普通の学生だ。

高等部2年というのが正式な立場だが、これも学園へのGS誘致の際の取引的な立場であるため、とりあえず学生といえる。

協会の方針とはいえGSの事務所を開いている時点で普通の高校生とは言いがたいのだけれども。

ともあれ、課題はこなすしテストも受ける、そんな生活のうえでGSとして活動しているのだから、さぞ成績も悪かろうと思いきや、実のところ成績は存外悪くないのだ。

これが以前まで居た学校ならば、何が起こっているのか、偽者が、人間もどきめ、などと驚きで迎えられるだろうが、これには種も仕掛けもある。

机妖怪愛子の体内空間で必死になっているだけであつた。

彼女の内部空間ならば時間の流れも自由自在なので、課題や書類処理のもつてこいなのだ。

これを知つた美神も、本気でスカウトを考えたという。

閑話休題

成績がよく、愛想もいい、明るく気遣いも出来る二枚目半となれば、間違いなく人気になるものだろうが、以前までは昔のイメージがあるため前の学校ではモテるまでになつていなかった。

でも、学園へ転校してきたという仕切りなおしのおかげか、今のイメージだけで見られるおかげで、随分と女子のイメージがいい。というか、かなりいい。

だから、実はもてている。

本人は全く気付いていないけど。

一級フラグ建築師とか特級フラグ固め師などと呼ばれているのは気のせいではない。

で、今更ながら人外にもてるというカテゴリーでも効いている。

そう、人外であるところの「魔法使い」にもモテモテなのだ。

英雄「横島忠夫」のイメージは、出会って三秒で崩れたが、五分後には再構成された。

魔法生徒である春日美空の紹介で会った瞬間、いまどき中学生だつてしないようなナンパを仕掛けてきた姿に幻滅したが、その後の美空やココネの扱いが余りに大人であったため、最初のナンパの姿を忘れてしまった。

いや、覚えているが「好印象」に摩り替わってしまった。

どんなマジックだろう、と頭痛を感じないでもないが、なんとなく、彼に悪印象を抱けないと思わされた。

「タダオ、肩車」

「おお、いいで」

軽く肩車した彼は、周囲を走り回る。

ココネはそれを実に嬉しそうに微笑んで迎えた。

「うー、このまえ私が肩車したときは、そんなに嬉しそうじゃなかった」

「美空は背が低い」

「があーーーーーん!!」

こんなやり取りをしていても、二人は笑顔だった。

悪戯や悪ふざけではない暖かい空気が満ち溢れている。

なんでしょうね、と神父に相談してみると、神父は微笑みながら言う。

「シスターシャーケティー。あなたにも春が来たのかもしれない

ね？」

「はあ？ とりあえず一月は新春と呼ばれていますが。」

神父の表情で見ると、どうもそういう意味ではないらしい。

ふむ、すこし刀子にでも聞いて見ましよう。

初め、怒鳴り込んで来た割には、すでに事務所の名簿にすら乗っているという浸透性を見せた高音「D」グッドマンの今の姿を見て、彼女の仲間の魔法使い達は本人だと理解できるだろうか、と雪之丞は考える。

ツン「O」デレ無し、ツン「D」デレというよりもツンドラと言われる高音「D」グッドマンが、横島の前に来るとデレデレになりつつも表面上は気位を高くしようとするものだから、イメージがバラバラになっっていたりする。

怒鳴り込まれた当初、かおりと同じ系統だと思っていたが、今になってこっちの方が「面倒」である事が理解できた。

半ば生物兵器として送り込まれたのではないだろうか、と伊達雪乃丞は考えていたりする。

まあ、そういう難しい事務所内人間関係なんてことを考えるのは自分の役目ではないので、日々、学園への侵入者たちをたたき伏せることに喜びを見出す彼であった。

「タダオ！ 今日こそ仮契約だ！！」

「横島さん！！ 私の従者になりませんか！？」

「横島先輩！！ 私と仮契約してください！！」

横島への、日々の誘惑が多いことこの上も無い。

年齢的にアウトなのが愛衣だけなのが更に業が深いところだろう。

ああ、誘惑が多すぎて死にそうだ、と血の涙を流す横島を見て、伊達は力かと笑うだけであった。

彼には彼で「彼女」がいるから。

事故と言うものは、様々な形で発生する。

罾と言うものは様々な形で仕掛けられる。

この二つの差は「故意か」「偶発か」の差だろう。

が、偶発を仕掛けることが出来る立場の人間が罾を張った場合、その切り分けはどこになるのか、論議の分かれるところだろう。

勿論、目的とする内容と意識の問題でもある。

ともあれ、サツちゃんキーヤンが嬉々として仕掛けた罾は、目標の人物に偶発的に発揮される。

さて、運命の歯車がどこにあるのか、見極められるだろうか？

少なくとも、いち高校生である横島には回避不可能であったらる

う。

そしてその不可能を超えるたえの力も使う要素が無かった。仕掛けた側からすれば大きな成果だろう。

しかし、仕掛けられた側からすれば、これは純粹に「事故」であった。

うちには、最近気になる人がおる。

その人の名前は、横島忠夫はん。

あの図書館島を最下層まで降りた猛者。

何時もふざけてて、おちゃらけとるんやけど、誰かを罠から庇うときとか、えろっ格好ええんよ。

で、かなり人気の高校生やった。

エヴァちゃんやらウルスラの先輩やらが集まってくる。

そんな横島はんは、学園唯一のGS。

除霊から浄化、オカルト相談まで何でもこなす頼りになるお人や。この前も商店街の浮遊霊を説得してはった。

その姿が格好ええんよ。

アスナの年上好きの気持ちが、少し解った気がしたわあ。

そんな気持ちになると、自然に視線で追ってまっし、機会があれば話しかけたくなる。

せやから、うちは図書館島探検部として網を張ることにしたんや。

「おりよ、コノカちゃん」

「あ、横島はん！」

聞けば貸し出し禁止の参考書を探してるという。

これはチャンスやな、ということで、司書さんかわりに案内すると、凄く喜んでくれた。

まるで子供みたいな笑顔や、キラキラしとる。

「あんがとんな、コノカちゃん」

「ええつて、師匠にはお世話になつとりますからあ」

「あ、そうや、帰りお礼にたこ焼きでも奢るわ」

「ほんま、ええん？」

「えーで。本場大阪に負けん美味さや！」

「期待しとるで！」

お礼にたこ焼きをおごる横島。

嬉しそうに二人で食べる姿は、まるで初々しいカップルのようだった。

そんな中、一陣の風が吹き、たこ焼きのパックが少し浮く。

コノカはもつたいないと手を伸ばし、横島はそんな彼女を受け止める。

瞬間、つまづくコノカは、横島におおかぶさる。

唇同士が正面から、ある程度の確度をずらして。

歯がぶつからなかったのは幸運だろう。

しかし、そのせいかかなり深いキスの状態になってしまった。

思わず目を見開く二人。

相手のことを思いやりすぎる二人は、このまま急に離れたら相手を傷つけてしまうと考える。

だから、ゆっくりとお互いの方に手を回し、そのままゆっくりとはなれた。

驚いたままの目で見詰め合う二人。

思わずコノカが笑った。

「ファーストキスは、たこ焼き味や。関西っぽい？」

瞬間、横島はその場で歴史に残るかのような土下座を披露した。

うちにとって、事故やったけど嬉しいことやった。

結構本気で狙うようになった横島さんと、偶然ながらキスしてもうたんやから。

ちよっと恥ずかしかったけど、それでも、うちは嫌やなかった。

横島さんと同じ高校生のタマモさんや愛子さんも横島さんを好き

なのはしつとるし、このキス如きでどうにかなるともおもつとらん。でも、乙女のファーストキスは軽いもんやないんやで？

「な、横島さん。謝らんでいいやで？　うち、横島さんのことすきやから」

「・・・コノカちゃん」

「・・・恋人にしるとかも言わん。うちに女の魅力が足りんのもしつとるしな」

「そんなことない！！　コノカちゃんは凄く魅力的で可愛くて、あと一年後には絶対ナンパするぐらいの美少女や！！」

うんうん、こういう正直な所は結構スキやけど、この高校生以下は手を出さんつうルールは邪魔やな。

なんとかせな。

・・・？　なんやこれ？

「・・・げ」

横島さんとうちは二枚のタロットカードをそれぞれ拾った。

二枚とも絵柄は同じで、それは何となく見たことのある軍服を着たうちが、翼を広げてニヤリと笑っている顔だった。

「うわー、なんやこれ、綺麗な絵柄でかわいいわー」

(げ、これって、もしかして仮契約、か？)

思わず引きつった横島の両脇に、何故か立っているタカミチ&セルヒコ。

「横島君、学園長がお呼びだ」

「横島君、腹を括りなさい」

「コノカ君、学園長室まで同行してもらえるかな？」

「もー、おじいちゃんってば……。大丈夫やで、横島さん。うちが守つたるからな？」

にこやかな笑みに囲まれた横島は血の涙を流す。

「わいはわいは、ロリやないんやー！ー！ー！」

解ってる、解っているとも、と肩を組むかのように横島を連行するタカミチとセルヒコであった。

魔方陣を仕掛けたのは、実はある魔法生徒だった。

というか高音と愛衣だった。

美味しそうなたこ焼き屋があるからと横島を誘い出して、契約を結んでしまう予定だったと言う。

で、その魔方陣で契約してしまったのが横島忠夫と近衛コノカ。事故ではあったが、学園長は何らかの運命を感じていた。

魔法も自分の出自も全て隠されていた少女は、このとき初めて真実に向かい合った。

通常の魔法使いをはるかに超える魔力。

東西の魔法世界のバランスを崩しかねない血統。

そしてそんな自分にだからこそ、普通の生活を知っていてほしいと言っ父の願い。

事故とはいえ、淡い思いを抱いていた相手とのファーストキス（たこ焼き味）。

一日で全てが変わってしまった。

そしてもう一つ、幼馴染の刹那が、なぜ自分と距離をとっていたかを説明されて、そして怒った。

自分を信じてくれていない、と言っ思いとそれ以上に自分ですら信じられないほどの傷ついていると言っ事実。

そこまで追い詰めた周囲の大人へ、そして親友と感じていながら、その事に気付いていなかった自分に。

怒りを感じ、理不尽を感じ、それでいて彼女は現状を破壊することを決意した。

つまり、

「うち、横島さんのところで『GS』になる！！」

「「「「「は？」「」「」」」」」

彼女の見解は明確で開明的であった。

秘匿された魔法世界に進むよりも公開されたオカルトに進むことにより、敵対組織及び敵対勢力を引っ張り出せると言っものだった。加えて西の長の娘がGSに流れると言っことで、現在の長の立場を低くし、自らの価値を貶めることで利用価値を低くすると言っ算段まで追加されていた。

この説明には周辺全員が驚き、そして感心させられた。

横島自身も感心して、おもわずなでてしまったぐらいだった。

実は、もつと現実的な理由もあった。

今現在横島が保護している妖怪とも友人関係を結んでいるコノカだったが、もつと昔から付き合いのある刹那がハーフだと言うことを知っていたのだった。

どこでそんな秘密を、とか言うレベル以前の話で、幼い頃遊んでいるときに見せてもらい、これは秘密なんだと約束しあっただけだったが、色々と追い詰められた刹那のほうが見せていることを忘れたため、更に追い詰められているだけなのだが。

ともあれ、隠れる関係ではなく、表だってふつうに友誼がむすめる関係になることを目指した彼女の判断は、稚拙ではあったが、それでも前に進むと決めた心は評価できた。

ゆえに、横島は彼女の弟子入りを認めた。
それが彼の正義ジャスティスの崩壊への序曲であった。

ルチ將軍ぬらりひよんに呼び出された俺は、今度はなにをしたっけな？と首をひねる。

すでにGSの仕事で何度も呼び出されている関係上、「ルチ將軍ぬらりひよんのお側付き」とまで噂されるほど出向いている学園長室だったが、そこにいるのはルチ將軍ぬらりひよんばかりではなく見知った顔もいた。

最近異例の霊力修行でメキメキ実力を「発揮」しているコノカ、そのルームメイトで一般人の明日奈、そして年齢よりも遙かに老け

顔のタカミチ、そして何故かスーツ姿の子供。

「ルチ將軍、出直しますか？」

横島の一言に、全員が「ルチ將軍」発言を思い出し、悶絶する。なにが起こったのか解らない子供と、將軍だけが笑っていないのだが。

「あー、横島君。そろそろ「將軍」扱いはかんべんしてもらえんかな？」

「え、かなり上々のあだ名で、さらには大評判ですが？」

「初対面の人にも言われるんじゃないよ」

「あなたの立場で初対面はないでしょ？」

「あー、そのじゃな、悪意がなく「將軍」とか言われると、地味に傷つくんじゃないなあ・・・。」

「またまたあー、隠れてプリンプリン 語をみてるのは知ってるんですよ？」

「・・・。」

こんな会話の最中でも新たな火種が投下され続けたために笑いが止まらない人々。

全く訳の分からない子供は、徐々に不安を感じているようだ。

「あー、すまんすまん、無視してて悪かったな。俺の名前は横島忠夫。きみは？」

「・・・あ、はい。僕の名前はネギースプリングフィールド です
!」

にっこり笑って握手する二人。

それは三界の英雄と、かつての英雄の遺児との出会いではなく、

一人の少年と一人の少年の出会いであった。

事務所の参加人数が増えたな、と横島は思っていた。

正式な所員である雪乃丞、愛子、タマモに加えて、エヴァ、茶々丸、そしてコノカが学園で加わった。

で、いつの間にか小夜ちゃんと千鶴ちゃんが愛子を泣き落として潜り込んでおり、最後にや高音と愛衣が所員同然で潜り込んでいる。表向きの立場としては学園からの正式なGS研修生で、裏向きとしては魔法生徒の出向だった。

これだけの密度で裏関係者がそろっていれば、千鶴にはれるのも早々だと判断した横島により「秘匿されている」魔法の開示が行われ、口外をしないようお願いしている。

快く受け入れてくれた千鶴であったが、代わりといっでは何だが、GS助手になることを受け入れさせられた。

命がけの仕事だし、危険も多いし、理不尽も多い仕事なので、思いとどまらせたかったが、彼女の意志は固く受け入れるしかなかった横島だった。

もちろん、コノカや千鶴が美女美少女である事実もあるだろう。

彼女たちの着替えが所内で行われる事実も彼の正義にひびを入れ^{ジャスティス}ていた。

横島が新開発したという修行は、エヴァを驚愕させた。

魔法も霊能も言葉にできない部分の伝達がスタートになるのは一
緒で、その部分は生まれつきの才能や体質に依存していた。

ゆえに、そのスタートにつまづくと、全く進まないモノでもある。
「そこ」を伝達してしまおうというのが横島の新開発修行だった。
単純に言えば、横島自身が経験した「心眼」による修行の再現で、
心眼の役割を横島が直接代行しようというモノだった。

彼が直接接触れ霊気の流れや集中の仕方発現の仕方を外から感じさ
せ、自身に覚えさせようというものがいかに難しいか、エヴァンジ
エリンが理解していたが、ひょうひょうとやって見せた横島の常識
外さに驚かされていた。

が、そこで思いつく。
逆に、だ。

エヴァンジエリンが行う魔法の起動を横島に覚えさせることはで
きないか、と。

これができるば、さらには横島が魔法を起動できるようになれば、
横島が覚えた魔法を周囲に振りまくことができるのではないかと。
さらには、高等な魔法技法や術の開発の助けになるのではないかと。
と。

結果として、数百年をかけて術の効率化を行ったエヴァンジエリ

ンの魔法起動を、横島はモノの数分で再現することができるようになった。

起動できるようになれば魔法の修得は才能によるモノなので、体にあつた魔法の属性を学べばよいだけなのだ。

が、もちろん我らが横島忠夫は、人の予想の斜め上を常にいく。

第二話(改) ファーストキッツは、たこ焼き味(後書き)

というわけで、本作では「魔法使い」|| 「人外」でいきます。

ゆえに魔法世界人は横島にメロメロです。

・・・こえーTTT

11/26 校正しました

12/11 ちょこつと修正しました。大まかな流れに変わりはありません

09/16 部分改修したっす

第三話（前書き）

第三話です。

第三話

彼が行う魔法の効率化の恐ろしいところは、魔法の起動部分を靈力で行うところだろう。

周囲の精霊への魔法起動励起の部分を靈能で行うことで、魔法世界では全く未知の速度とタイミングで魔法が完成する。

更にどこかで研究したのかわからない発展を遂げ、ついには魔法起動に詠唱を省くことに成功した。

正確に言おう、詠唱を他の部分に代行させることにより、詠唱無しで正しい魔法の結果を得られるようになったのだ。

魔法球内での実験に立ち会った近右衛門、タカミチ共に絶句していた。

実践したのは魔法の入り口に立ったばかりのコノカと千鶴。

魔法効果は魔法の矢、武装解除、魔法の盾の三種類だったが、身内の実験で千の雷までの実証が出来ている。

そのレポートを読んだタカミチは、なんの逡巡も無しに土下座をした。

彼は気づいたのだ。

彼自身が体質的に詠唱が出来ないが魔力も気力も使える、つまり外部代行技術が使えるれば魔法が使えると言うことに。

恐ろしいまでの低姿勢と土下座に驚いた横島だったが、エヴァンジェリン自身、タカミチへの思いいれもあるので、技術の伝達を横島に頼んだ。

拒絶されないように心の内で必死に祈ったタカミチだったが、横島は軽く受け入れた。

そして、魔法球から出て愛子の異空間に移った翌日、タカミチも使えるようになっていた。

その結果を聞いた近右衛門は、驚きのあまりに気絶し、そのうえで実証を求め、その結果を見て更に気絶した。

あまりに早くあまりに完全に習得された技術に驚き、この方面の才能があつたのかと思つたが、本人に否定された。

開示許可は受けていないので手法の大まかですら話せないが、あの手法なら才能全くないといわれている子供でも上位魔法が使えるようになる、それも一週間ぐらいで。

彼の言葉を聴いて、なんでもするから教えて欲しいと縋る近右衛門だったが、タカミチが止める。

「これは、魔法の秘匿どころの話じゃないレベルの問題を孕んでいる」と。

誰にでも出来るようになる、これが魔法の秘匿の根幹だ。

正しい習得と正しい技法を身に着ければ、本当に誰にでも魔法は使えるのだ。

ゆえに、魔法使いは魔法を秘匿する。

では、それ以上に簡単に魔法を身につけることが出来る技法があるとすれば……。

その怖さを近右衛門は実感した。

そして、秘匿事態を認めることにした。

何しろ、いかに秘匿していようと、近衛の孫娘はその技法を身につけているのだから。

100年単位で見れば、その手法を得たと言っても間違いないだろう。

その後、某NGOでは、最強と謳われていた男が更なる力を得たと大いに話題になっていた。

新技法は事務所内に蔓延していた。

何しろ魔法つばくないものだから、霊能と言うことで言い訳が立ち、ばんばん使って問題ないと考えたからだ。

コーヒーマグの温め直しから電球の交換、ドアの開け閉めからお風呂の保温まで魔法が使われているのを見て、本国だってここまで無駄使いはしないと苦笑いの魔法使いさんたち。

時々遊びに来る魔法先生たちも魔法蔓延の事実糾弾にきたのだが、あまりに魔法らしくなくてその矛を収めざる得なかった。

加えて、体から抜け出てしまう小夜ちゃんや、トコトコ歩き回るクグツ人形たちを見ると、もう魔法と言うよりも幽霊屋敷といったほうがしっくりと来る感じで、普通の人たちにもそういう受け入れられ方をされていた。

「しかし、あの雪之丞君の属性を込めた霊波砲には恐れ入ったよ。」

感嘆を込めて言うガンドルフイーニ。

そう、彼と同行することの多い雪之丞が、新技法で身に着けた魔法を組み込んだ攻撃をみて、思わず詳細を聞きに来たのだが、事務所内の光景を見てその気もうせていたガンドルフ。

最初は遅延魔法ではないかと思っていたのだが、事務所にきてみてそれが勘違いだったことに気付いた。

「相反する属性を打ち消しあうことなく混在させる。信じられませんでしたね」

聖属性オンリーのシスターシャークティーンであったが、横島が目の前で光闇両属性を同時使用したことを見て、其れなりに考えるところがあつたという。

彼女の知るところの範囲で言えば、「人間以上」には聖魔同時結界が実現していた。

つまりとところ相反する特性と属性の同時使用も視野に入ると言うわけだ。

もちろん、ガチガチのクリスチャンである彼女が、本格的に「魔」を使えるかどうかは疑問の残るところだが、横島が語る「洗礼を受けたダンピールGS」の話は興味深かつたらしい。

タオの話も含めた横島の話は、実のところ師匠の受け売りなのだが、師匠が師匠なので受け売りだけだったとしても、それなりに感銘を受けるものであったと言う。

で、気になるのは、未だ高校生である彼にここまでの知識を与えた師匠は誰なのか、と言う話になった。

もちろん、GS的に言えば美神令子なのだが、魔法先生的な回答は別のところ。

道具使いである美神に、今の彼のような専門外な、先鋭的な発想は出来まいという視点での問いだった。

実際、彼の発想と実行力の基礎は美神によつて鍛えられたものだったので、彼らの問いは的を外れであったが、その先の応用や知識については別の師匠によるものだったので、問い自体は無為なものではなかった。

それまでは饒舌だった横島ですら、師匠の存在は重いらしく、口に出すことがはばかられたようだったが、魔法先生たちはもう一歩踏み込んできた。

そう、紹介して欲しい、と。

流石に紹介は無理だと言う理由を込めて、その名を明かすと、二人の魔法先生は横島の非常識さの根本を理解したのだった。

「さすがに、ねえ？」「さすがに、なあ？」

背後で調査を命じていた学園長も、その名を聞いて全てを諦めた。アジア周辺で絶大な人気を誇る神仙にして神族、その名も高き猿^{ハヌ}神^{ミン}。

流石に魔法先生もその存在を知っていた。

GSであれば多くのものが知っている、至高の修煉場「妙神山」。其処に存在する最高難易度の修行を終了していると聞けば、すでに伝説レベルなのだろうと思うしかなかった。

その魔法に対する非常識さも。

ともあれ、エヴァンジェリンに言われてやってみたら出来た程度の認識だったので、横島としてはさほど常識はずれとは思っていなかったし、人に教える際も「発明」が上手くいった程度の感覚だったので、人に教えること自体禁忌は無かったのだが、エヴァンジェリン及びタカミチから強く留められたので広めていけないだけだったりする。

逆に新しい技術として美神には教えないと殺されるということ、そちらへの開示は許可されたのだが、全然別の方向から食いつかれた。

現在の「公開された魔女」魔鈴と、唐巢神父であった。

魔鈴は当然の話だったが、詠唱時間の短縮と言う面では唐巢神父にも大いに興味ある部分で、ピートと共に泊り込みで研究に来たぐらいだった。

その成果は3日ほど（魔法球時間込み）で現れ、疲労以上の喜びにあふれて帰って行ったのであった。

以降、聖句の大半を霊波の中に組み込むことにより、短時間化と増力を果たした神父の秘密を探ろうとGS協会も動いたそうだが、その真実は知られなかった。

思いのほか義理堅い神父であった。

で、魔鈴はというと、事務所に異界を繋げて毎日のように通いつつ、「秘匿された魔法」の研究と自分の店の切り盛りを両立させていたのだが、さすがに忙しすぎるらしい。

そこで、事務所に出入りしている女子、コノカ・千鶴・高音・メイに声をかけ、アルバイトを公募したところ、愛子・タマモも含め

てローテーションを組みアルバイトが入ることになった。

みんな美女美少女揃いなので、魔鈴さんも大喜び。

更に忙しくなってしまうと言う誤算もあったわけだが、魔法研究者としての彼女は「秘匿された」魔法との関係と横島による新技術の研究開発だけでも大いに得るものがあるともいえる。

「秘匿された魔法」サイドでも魔鈴との接触は大いに得るものがあった。

魔女狩り以降に発展した「秘匿された魔法」は、いささか科学よりの性質と精霊魔法に特化していたため、純粹に白魔法と言うものに興味があり、そして研究を求めた。

メガロメセンブリアでも大いに乗り気であるため、一部秘匿情報があったが、彼女の研究する白魔法が魔法界へ伝達されつつあった。もちろん、軍事的な面は一切を秘匿されていたわけだが、平和部分を軍事利用しようとする手勢については考慮しないことにした。それでこそ、治癒だって軍事利用できるのでから。

さて、着々と意図せぬ形でありながら魔法世界にその名を刻みつつある横島忠夫。

実に好意的な形でありつつ、その名の影響が、着実に現れたのは2月に入ってからだった。

忍者バカンフーホイホイに魔法先生がかかり始めたのだ。

初めはセルヒコ、続いてガンドルフィーニ、さらには式集院。

ほいほいと回収していくうちに、横島は墳血して倒れた。

そう、魔法先生の中でもかなりレベルの高い美女である刀子女史とシャークティであった。

あられもない姿で吊られる二人を見て、理性が切れた横島だったが、たまりにたまった煩惱の影響で意識を失うほどだったのだ。

それ自身が好意的に解釈され、「大人の魅力に失神した」と女性陣をつれしがらせたという。

他の魔法先生や魔法生徒までがホイホイにかかるようになったため、訓練に使うなら金を出せと將軍に直訴する一幕もあったわけだが、その影響か、魔法先生や魔法生徒の動きにキレが出てきたと評判だ。

メガロメセンブリアの練習コースでも導入が検討されているとか何だとか。

こんな話を聞いて黙っている將軍ではなく、金を出すから「修行」をさせて欲しい、と言い出した。
だれを？

それは決まっている。

「ネギ」を、だ。

そんなわけで魔法無しでコースを抜けることが課題となったわけだが、コース初めて毎日引かかる日々が続いている。

魔法先生の中には難易度を下げないように暗に意見してくる話もあるけれど、將軍が全て差し止めて最高難易度の維持を宣言させていた。

明日菜あたりから「いじめも大概にしなさいよ」という話が伝わってきているが、横島としても困っているのだった。

なにしろ、そのトラップゾーンは、結構やさしく作っているところだったからだ。

子供に優しい、というか甘い横島は、最高難易度なんてものは設置していないのだ。

細心の注意で怪我をしないように死なないように欠損が出来ないようにと真心を込めて作っているのに、その大半が生かさねずにギブアップ宣言がきてしまうのだ。

クリアする気が無いのかな、と思って聞いてみると、まじめに頑張っていることだけは伝わってきた。

「横島さんは凄いですね。あんなに凄い発想、ぜんぜん思いつきませんでした」

にこやかな笑みに影は無く、どうにも引つ掛けられている感覚は無いようだ。

「というか修行と思っている節が無い。」

魔法使いとしては、魔法無しでの修行なんかチャンチャラおかしいのではないかと思っっているのでは聞いてみると、そんなことは無いと微笑むネギ。

ただ、横島としても真正面から彼の意見を信じるわけには行かなかった。

そこで、未だ明かされていなかった魔法先生の一部を紹介し、そのコースを試してもらったのだ。

もちろんゴールまでは行かなかったが、全員が2/3以上をクリアする結果になった。

この事実には驚きつつも奮起するネギ。

生来の負けず嫌いといままで成績優秀であったというのプライド、一番でありたいと言う子供らしい感情に火がつき、3日ほどかけて他の先生たちと同じ畏まで超える所まで行った。

が、もちろんのこと、畏は毎日更新され、そして意地悪になってゆくせいで進まず、かなり追い詰められていたようだが、再挑戦一週間でコースをゴールできるようになっていた。

その自信は大きなものであったが、もちろん突き崩される。

「じゃ、練習コースはおしまい。実践コースだな」

導かれたのは忍者&バカンフォーホイホイ。

ネギ・スプリングフィールドの戦いは始まったばかりだった。

日に日にタフな笑い方をするようになるネギを心配してか、明日菜やノド力が見学に来るようになった。

が、大体のところ、忍者やバカンフーと同じようなところで動きが取れなくなっている。

身動き一つ出来ないレベルまでいつている三人のために明日菜が横島に連絡を入れると、まるでどこかで待っていたかのように現れた横島が、何も無い原っぱを歩くように三人に近づいて解放していた。

解放された三人は、横島によって放り投げられて、入り口の外に出される。

「流石横島老師、今日のトラップはなかなかだったアル！」

「味わつても味わつても尽きぬ味わい、スルメイカのようにござるな」

「・・・うー、酷いですよ横島さん。普通身長別に畏をしかけますかあー？」

あほ言つな！ とハリセン攻撃の横島。

「おまえらは、何の恨みがあつて『高い』畏ばかり発動させやがる！ くそー、大損や」

そういう意味では忍者とバカンフーの横島への攻撃は完遂しているのだが、ネギの توسطで修行にはなっていないともいえる。

天才と英雄の子供ともてはやされて「真っ直ぐ」に育ってしまったがゆえに、遊びも余裕も無い生活であったネギにとって、初めての挫折であり、始めてのリチャレンジであった。

加えて言えば、何度も何度も挫折を味わいつつも、折れない心が育ちつつあったとも言える。

別の世界の別の時間軸で、彼が周りにちやほやされながら学んだことを、横島と言う壁が甘やかさぬように味あわせているだけといえるのだが、より血肉の通った経験になったとも言える。

その壁とは対話できるし、そして直接学べるのだから。

二月も中盤、バレンタインデー。

横島も雪之丞もかなりの数のチョコをもらっていた。

霊能事務所の事務員、関係者はもとより、美神事務所からも弓からも送られたからだ。

加えて横島には表のオカルトファンや魔法生徒からも集まり、それはそれは一年前とは大違いであった。

雪之丞も横島のおかげだと泣きを入れていたのが何とも。

で、なぜかいつもお世話になっているから、と忍者とバカンフーからも送られたのはお約束だろうか？

「ところで何してるの？ 愛子」

「送ってくれた人たちのリストを作って、来月の準備をするの。」

「もしかして、俺の分も？」

「うちの事務所の男どもは、その辺ニブイですからね。」

愛子の言葉に、事務所の女子全員が笑う。

横島と雪之丞はただ頭を下げるしかなかった。

で、予想外だったのが、エヴァと茶々丸が送らなかつたことだろ
う。

なにゆえ、と誰しもが思ったが、実はエヴァのログハウスに招待された上でチョコフォンデュパーティーに組み込まれていたのだ。

そのアイデア自体に誰もが感心した。

自分のチョコに周囲の人間が持ち込んだチョコを足して、パーテ

イーで消化させてしまおうとか、いろんな意味で。

が、真の目的は其処には無かった。

そう、いろんな意味で罨が貼られており、その罨は発動したのだった。

<仮契約>

ログハウス全体に張られた仮契約の魔方陣により、偶発的なキスを演出したエヴァンジェリンは、横島忠夫と言う従者を得たのだた。

ずるいすると叫ぶ女子にエヴァンジェリンは笑う。

「なに、主は私以外ならタダオという設定になってるぞ？」と。

その真価に気付いた千鶴が横島に飛びついたのを皮切りに、参加者女子（コノカも含めて）全員がキスの嵐を降らせた。

コノカはすでに従者契約をしていたが、キスパティーに乗り遅れたくなかっただけだった。

このたび、従者契約したのは以下のとおりだ。

- ・タマモ（とうぜん）
- ・愛子（夫婦契約の方がいいんだけど）
- ・小夜（うれしーですー）
- ・千鶴（ふふふふ）
- ・高音（あ、あのその従者契約でもいいし）
- ・メイ（念願、かないました！）
- ・茶々丸（出来ました）
- ・魔鈴（大喜び）
- ・楓（狂喜乱舞）
- ・古（ちよっと恥ずかしい）

・横島（死亡）

実に恐ろしい話であった。

第三話（後書き）

第三話にして横島ハーレム第一期です。

魔法の起動部分の解釈や横島の万能性は、明らかにご都合主義です
ので、スルーの方向でw

AF情報は、別途後書きにて記載予定です。

従者がある程度出揃った時点で書き込もうかと思っています。

12/11 ちょこつと修正しました。

第四話（前書き）

第四話です。

12/3：あとがきAF表を修正しました。一応、余計なものもい
ますが、デフォルト公開と言っことでw

第四話

仮契約魔法陣を書いたルチ将軍・・・新種の頭長オコジヨには数十万オコジヨドルの臨時収入が入った代わりに、えらい勢いで正義を削った犯人として横島に付け狙われる事になったのであった。

目の前で行われたキスの嵐の中で、雪之丞は弓にLOVEコールをしていたのだから、雪之丞を主としたスカカードのことは忘れてあげるほか無い。

「ばれないといいねー、雪之丞。」

バレンタインデーの騒ぎを超えてみると、エヴァを除く事務所関係者全員がアーティファクトもちになっていた。

で、まほネット経由で調べてみると、全てのアーティファクトが未発見アーティファクトであることがわかった。

目を輝かせるメイであったが、高音のほか魔法関係者は「まずい」と言う顔になっている。

一度に九人もの従者を得るのも大概だが、コノカも含めて全員が未発見アーティファクトというのもあり得ない事だった。

「が、実は共通している特徴もあった。」

全てのアーティファクト共通で、丸い玉が入る穴があったのだ。

GS関係者はそれが何かすぐにわかった。

で、各々試したところ、間違いない効果であった。

さらには、追加機能なども発見し、かなり盛り上がっているところで、魔法関係者であるコノカが質問した。

「で、これ、なんの穴なん？」

口外無用で説明されたのは、横島忠夫最大の霊能「文珠」であっ

た。

曰く、万能の霊具。

曰く、神界の宝具。

曰く、伝説の神具。

奇跡と神意を現実に行うことが出来る、まさにオーパーツそれを横島忠夫が作り出せる。

さらには、それを組み込んだ機能があるアーティファクト。もう、例外中の例外だろう。

こんなアーティファクトが発見されているわけが無い。

で、ぐるりと周囲を見回したクーフェイの一言が周囲を揺らす。

「もしかして、みんな、横島老師のしりあいか？」

思わず一枚一枚を確かめた後、横島は苦笑い。

逆に気になるのはどんな知り合いか、だった。

で、一つ一つ解説すると、誰も彼もが呆れてため息をついた。

タマモですら其処までの友好関係があるとおもっていなかったの
で、目を丸くしている。

「というか、本当にカグヤ姫っていたんですね」

「私は、ハヌマンが老師の師匠だと言う事実には衝撃を受けているア
ル」

「ジークフリードにワルクキューレでござるか。驚愕でござるな」

「ふふふ、ヒヤクメ様の権能ですねえ〜」

わいわいと騒ぐ女子の中で、一枚のマスターカードを見つめる横
島。

それは茶々丸の仮契約カード「過去と未来を見通す者の娘」であ
った。

ちよっと笑った感じの茶々丸を中心に、少女ボディーの茶々丸、

ちよつと勝気な顔つきの茶々丸が挟んでいる。

そう、彼女たちを思わせる表情だった。

あの姉妹を模した、そんな絵姿だった。

何時までも完治することの無い傷が、ジクジクと痛むのを感じる。いつまでも忘れることの出来ない思い出が、ジンジンと響き渡るのを感じる。

ああ、まだまだ好きなんだな、と頬を緩める。

ああ、まだまだ忘れることが出来ないんだな、と涙が込みあがる。たとえ誰に説かれても説き伏されるとこの無い結論が胸を締め上げる。

たとえ誰に許されても自分自身が許すことが出来ない罪が心を締め上げる。

フラツシユバツクするのはあの時の彼女。

思い返すのはあの子の彼女たち。

ああ、ああ、涙すら流してたまるものかと自分を奮い起こす。そんな横島を何時しか皆が見ていた。

「忠夫、お前を受け入れたい。」

エヴァンジェリンの一言は、みんなの胸に響いた。

少なくとも「あの」当事者であった魔鈴でさえ、伝え聞いた情報しかもっていなかった。

だから知りたいと思った。

しかし、女の勘が叫んでいる。

「知れば後戻りは出来ない、知ってしまったえば勝てはしない」と。

だが、知らなければならぬ。

だから彼女たちは進むことにした。

そして知る、魔神対戦の真実を。
魔神戦争後の横島の変遷を。

文珠による記憶同期は、あたかも立体スクリーンに浮かぶ映画を
見ているようであった。

その上映を終える頃、横島は苦笑いで仮眠室に閉じこもった。
誰もが知って誰もが後悔した。

それは知らなければよかったと言っただけではなく、無用に不要に
横島の傷を暴いてしまったっという事実に関心したからだ。だからだ。
その中で一枚のカードを見つめる。

「過去と未来を見通す者の娘」

茶々丸のアーティファクトとして現れた一枚のタロット。
万感の思いを込めて茶々丸は召還する。

「アデアット」

その姿はみなが記憶で見たあの魔族の長女とそっくりであった。

「茶々丸、だな？」

「はい、マスター。しかし記憶ドライブに今まで知らなかった、そ
んな記憶が流入しています」

「それは、彼女のものか？」

「・・・はい」

それは一年に満たない、とてもとても短い間の思い。
それはひと月に満たない間の、とてもとても濃い思い。
それは一瞬に満たない生涯に起きた、とてもとても稀なる思い。
それはひと時の合間にあった幸せすぎる偶然。
戦いが、争いが、思いが、理想が、願望が……。
全てがドロドロになって、ぐつぐつと胸の内に渦巻いている。

仮眠室からでてきた横島が目にしたのは、彼女によく似た茶々丸。
ぜんぜん別人だとわかつているのに泣いてしまった。
ごめんごめんとつぶやきながら。
それでいてうれしそうに。

ゆっくりと抱きしめて、そつと頭をなでる横島をだれも止められ
なかった。

深いため息とにこやかな笑み。
ぐつと魂を捕まれた女たち。
茶々丸もまた混乱していた。

胸の内側から突き上げる激情とそれがアーティファクトからくる
感情だと冷静に判断する自分。

そしてその感情のままに動きたいと欲する自分。
もう、バラバラであった。

だが、その思いが、その心の動きがとおしかった。

その日の夜、ローテーションを無視して横島霊能相談所の所員関
係者は全員出動した。

思いの丈をたたきつけるように、思いの強さを試すように。
その強さ、その連携の良さ、その思いが彼女らを彼らを一つのモ
ノにしていった。

学年末試験を前にしても、横島霊能事務所は下火にならない。
むしろ、魔法生徒が抜ける分だけ出勤が増える。

成績の底上げやらその辺を契約条項に入れているに違いない、と
遊びに来た美空が不満を述べたが、小耳で聞いていたシスターシャ
ークティーが笑う。

何事かと美空が聞くと、彼女はいう。

「横島君も伊達君も、成績優秀者で表彰されるレベルよ？」

「またまたあ……。」

思わず苦笑いの美空の前で、小テストの結果を並べてみせる愛子。
愛子、タマモ、雪乃丞、横島の順で並べてみせると、ほとんどが
90点以上、最低でも80点以上であった。

「……うそ……。」

美空にとって悪夢のような本当の話。

とはいえ、教え上手の愛子先生が愛子空間で、時間制限なしで教
えてくれるのだから成績も上がるうというモノ。

そういう意味ではズルをしているといえなくもない。

そんな美空のよこで、ココネが横島の成績がよいのを見てうなず
いてみせる。

何事かと顔を寄せると、満足そうに横島をなでるココネ。

ほめたかったらしい。

ともあれ、じつはシスター彼らの成績の良さを当て込んで勉強を
教えてあげてもらおうと思ったのだが、地道な勉強しかしていない
と解って内心恥ずかしく思っていた。

何しろシャークティーはオカルト的なバックボーンがあるのだと思っていたからだ。

ある意味、愛子先生＋異空間という完全なまでにオカルトバックボーンなのだが、やはり本人のやる気なしにはどうにもならない問題であることがわかりそつと肩を落とす美空だった。

「しっかし、なんで今回はそこまで成績を上げたいの？」

いかに成績とおこずかいが直結していると聞いても勉強一つしなかつた美空が「なぜ」と聞いてみると、少し苦笑いのシャークティー。

なんと、ネギの今度の試験は、学年末試験のクラス平均成績を最下位から脱出させろというのだ。

それを聞いた横島は、思いの外怒りに燃え、そのままの勢いで学園長室を強襲した。

そこにはエヴァとともに茶を飲みながら囲碁を指す爺がいた。

「ど、どうしたのかのお、横島君」

しばらく命をねらわれていた関係から腰が引けている將軍だったが、彼の話がネギの課題と聞いて笑う。

実に教師向けの課題だろう、と。

なにをいわんや、と怒りを露わにする横島。

1-Aの頃から数えてはや数回、常に最下位をひた走ってきたクラスをわずか数日でどうこうできるモノではない。

「それをどうにかできてこそ、の課題ではないかな？」

言外、最下位では教師の能力がないと聞こえる、と横島が聞くと將軍は鋭い視線で肯定した。

「なら、タカミチは教員資格なしということだ」
「ふお・・・！」

やりとりを聞いていたエヴァンジェリンは大爆笑。

それをみて、どうにか矛を収めつつある横島。

とりあえず、最下位「失格」という公式だけでも撤廃するように進言したところ、ルチ將軍はうなずかなかった。

「学園長、おれはつすね、ネギにあのトラップゾーンにチャレンジさせてる修行を見て、すんげー教育者として尊敬したんすよ」

助け出すときに聞いたネギの生活は、およそ子供らしくないものであり、育児放棄といっても過言ではない放置状態だった。

しかし、彼の周囲はそれを全く異常とは思わず放置し続けたせいで、全く子供らしくないまっすぐに見えてゆがみきった子供ができてしまっていた。

しかし、トラップゾーンに挑むネギは、年相応の子供になっていった。

悔しそうに楽しそうに挑む姿は、重い使命を少しだけ忘れつつ何かに挑む喜びを感じている様子だった。

今まさに、幼い頃から失われていた少年時代を過ごしているんだとすら横島は思っていたのだ。

それなのに、それなのに。

「おれ、学園長のことかわからなくなっただつすよ」

そう一言残して横島は去った。

学園長は、少し落ち込んでいるようだった。

エヴァは終始笑顔であった。

横島霊能事務所は、それなりに関わりのある女子中等部2-Aのバックアップをすることにした。

とりわけ成績の悪い五人集のうち二人が横島と関わっているので、早々に愛子先生の登場となった。

加えて拉致されてきた桜咲刹那も成績が五人集一歩手前であることが判明し、愛子先生教室に拉致られる。

「ばび！楽々オカルト勉強タイム」という怪しげな歌い文句に誘われてきた残りのバカレンジャーも愛子先生に取り込まれ、吐き出されることには青春最高を叫ぶ、ちよつとイケテル少女たちに変わり果てていた。

愛子先生と熱心なネギ先生の補習効果が、日に日に成績が上がってゆくのわかり、ネギも手応えを感じていた。

「しっかし、オカルトってすごいわよね。」

「そうよねー、試験前にまいどおじゃましたいぐらいよー」

「いやー、愛子先生には頭が上げられないでござる」

「多謝、愛子先生」

「・・・あの空間だと、すこし洗脳されるのが怖いです」

「えー？ 集中力も上がるし、けっこうすきだなーあそこ」

「「「青春最高！！」「」「」」

「・・・残ってるです」

この介入には、魔法先生たちが眉をしかめたが、魔法生徒たちが便乗しようと動きだし制止された。

が、根強く愛子先生を求める声が響くのであった。

とまれ、成績は鰻登りとなり、総合平均成績でトップをとることとなった2Aであった。

食券トトカルチヨでも万馬券ともいえる配当となり、数少ない勝者となった桜子は、しばらくの食費に困らないのであった。

付け加えるならば、横島たちの在校する学校でもトトカルチヨが行われており、彼らのクラスがトップとなったのは記しておく。

愛子先生の実力はすごいのだ。

ルチ將軍もスカウトを本気で考えるほどに。

期末試験の打ち上げに参加していた横島・愛子・タマモであったが、電話で呼び出された。

呼ばれた先にいたのは長谷川千雨。

2 A関係者の中で数少ない常識人だ。

実はいろいろと悩みがあつてノイローゼ気味だったのだが、それを聞きつけたエヴァンジェリンに横島に相談して見ると勧められたという。

同じく、コノカや千鶴からも勧められ電話をしたということだった。

彼女は幼い頃から麻帆良にいるにも関わらず周囲ののりについてゆけないという悩みがあつた。

それが原因で人間不信になっていたし、体調が不安定になるのも日常茶飯事だった。

悩みがあつた、気持ちバラバラになっていた。

そのことを正面から相談すると、彼女にとって意外な答えが返ってきた。

麻帆良の雰囲気になじめないこと、麻帆良の町が異常に思えること、危険とか異常とか関係なしに突っ走る奴らが信じられないこと、エトセトラエトセトラエトセトラ。

その感覚すべてが正しいと、横島たちは肯定したのだ。

ただ、その正しい感覚を見極められること自体が異常だと。

「……え？」

横島たち、霊能者の感覚でいうと、千雨は「見ること」に優れた霊能者で、生まれついた能力のため制御できていないのだという。そのため、ふつうなら「なにも異常はない」と感じられるように仕掛けられている風景にも異常である事実を感じ取ってしまうのだ。もちろん、悪いのは異常な事実を覆い隠している麻帆良の町なのだ。

しかし、町全体が覆い隠された事実気づかない方向で動いているので、唯一の正常な感覚を持っている千雨が異常に見えてしまうのだという説明は彼女にも飲み込めた。

なんというか、すくとんと落ちる感覚だった。

だから一歩踏み込んで聞いてみた。

これからどうしたらいいか、と。

横島が示したのは三つの道だった。

一つは、このまま我慢して生きる。

一つは、見る力を封印して、みんなと同じように生活する。

もう一つは、見る力を修行してのばし、瞼を開け閉めするように制御できるようになる。

千雨は聞いた、どれがいちばんいいか、と。

だから横島は答える。

「心から、もっとも憧れる道を選ぼう」と。

千雨はしばらく考える時間をくれ、と言い残してその場を去った。

「ねえ、ヨロシマ。なんで選ばせるの？忘れさせてあげてもいいじゃない？」

「……オカルトに関わるってことは苦勞ばかりなんだけどさ……」

「ただけど？」

「おまえたちと出会えたのって、オカルトに関わってかたからんだよな。そうかんがえると、千雨ちゃんにもやめろっていえなくてさ・

・・・

「まあ、従者冥利に尽きる話だと思わない？」

「そうねー、学校から連れ出されたときにはどうなるかと思ったけど、結構幸せよね？」

しばらく考えた千雨は、GWあたりから修行させてほしいと切り出してきたので、横島は受けることにした。

短い間でもできるトレーニング方法をまとめたメールを出すよと、すごく恐縮したメールで感謝の言葉がつづられていたのだ。

第四話（後書き）

さてさて、気付けば第四話でもバキバキフラグが建設されてゆきま
す。

ネギフラグはまったく進みません。

ネギ無残TT

追記：一部AF情報が出ましたので、四話あとがきにてざっとし
た内容を公開します。

1 竜神の王杓（天竜童子）愛子

・ワンド 打撃武器でも使用可能

・竜族に対する指示権の発動

・竜族の権能の発動

・魔法効力を二段階上昇

・詳細権能は天竜童子の修行により追加される。

・文珠による追加効力合成可能

2 猿神の如意金箍棒（ハヌマン）クーフエイ

・本家如意金箍棒同様、伸縮自在。

・見かけ上の重さを8tまで増減できる

・手元と如意金箍棒の先との大きさ重さ関係なし。

・魔力・気・霊力の一定方向伝達能力あり

・文珠による追加効力合成可能

3 竜女神の神具（小竜姫）タマモ

・ヘアバンド：霊能を強化する（*120マイト相当）

・小手：霊能を強化する（*140マイト相当）

- ・神剣：霊能を強化する（*2000マイル相当）
- ・三種の同時起動で「超加速」を2分間展開可能。
- ・一度超加速を展開し、消耗すると6時間再起動できない。
- ・各装具の貸し出しは可能だが、超加速が展開できるのは召還者のみ
- ・文珠による追加効力合成可能

4 戦女神の翼（ワルキューレ） コノカ

- ・高速飛行／ホバリング可能
- ・装着時、銃器武器の使用時補正+二段
- ・魔法・霊能の使用補助（消費量15%軽減）
- ・自動魔力霊力回復（毎分2%）
- ・登録物の任意召還可能（無機物に限る）
- ・文珠による追加効力合成可能

5 倒竜戦士の闘剣（ジークフリード） 楓

- ・装着時、一部の体の箇所を除いて魔法・霊能・物理攻撃無効。
- ・対竜族攻撃時、12段階追加補正任意。
- ・耐竜族攻撃時、完全無効化。
- ・召還者以外の使用も可能だが、攻撃無効化以外の効果なし。
- ・装備をしていなくても、召還時以降、射撃補正・徒手空拳補正あり。（+15%）

- ・自動魔力霊力回復（毎分1.5%）
- ・文珠による追加効力合成可能

6 過去と未来を見通す者の娘（三姉妹） 茶々丸

- ・蛍モード：麻酔・幻覚・高速移動・蛍の眷属の召還
- ・蜂モード：毒・怪力・魔眼による支配・蜂の眷属の召還
- ・蝶モード：蝶の眷属召還（大量）・ケルベロス召還・人魔^{ホチ}召還
- ・三モード共通：霊能防御が200マイル以下無効・物理攻撃・魔法攻撃無効

・三モード共通：文珠による追加効力合成可能

7月女神の装具（アルテミス）　メイ

・装具は弓・剣・拘束具に変化する

・弓：放出系魔法および霊能の強化（1.5段階強化）、および射程の補正（+5段階）、必中権能

・剣：防御系魔法および霊能の強化（1.5段階強化）、および有効範囲の補正（+5段階）、矢避けの加護

・拘束具：捕縛系魔法および霊能の強化（1.5段階強化）、および全属性の封印、捕縛対象の時間を二十分の一にする。

・三モード共通：文珠による追加効力合成可能

8月神王女の権能（迦具夜^{かぐや}）　タカネ

・指輪型アーティファクト：魔法力・霊能力のリペアー（自分：常に全快・リンク先：毎分80%）

・ティアラ型アーティファクト：体力・精神力のリペアー（自分：常に全快・リンク先：毎分80%）

・イヤリング型アーティファクト：主従を超えて「仲間」へリンクを広げることが出来る。

・三モード共通：文珠による追加効力合成可能

9　百の瞳の女神（ヒヤクメ）　魔鈴

・イヤリング：魔法・霊能一切の解析を可能とする（霊能力を消費するため、自分の霊能力を超える解析は出来ない。）

・ノートパソコン：ヒヤクメの神機をもしたもの。イヤリングの情報照会・表示・まほネット・神界ネット魔界ネットへアクセス照会することが出来る。

・他からの霊力供給により、アクセス検索能力を2.5倍まで上げることが可能。

・共通：文珠による追加効力合成可能

10 ネクロマンサーの代行者（おキヌ） 小夜

・笛：ネクロマンサーの笛と同様の効果（+霊能追加可能、魔法追加可能）

・霊威：妖怪・妖魔・怪異に対する結界の強化（+霊能追加可能、魔法追加可能）

・幸運：リンクチームの絶対的幸運値の追加強化（+霊能追加可能、魔法追加可能）

・霊体分身：ドッペルゲンガーを霊体で召還することが可能。（+霊能追加可能、魔法追加可能）

・文珠による追加効力合成可能

11 女蛇神の瞳（メドーサ） 千鶴

・サス股：霊力による武器。霊波刀の一種。雷撃の追加効果あり

・ヘアバンド：ビッグイーターの召還可能（霊力により召還数上限あり）

・石化呪縛・石化解除の権能（大呪文以下のものならば他者の魔法解除も可能）

・火角結界、土角結界、水角結界、風各結果の作成維持解除権能

・未石化金縛り権能。

・文珠による追加効力合成可能

12 美の女神の宝物庫（美神） エヴァ

・ありとあらゆる霊具魔具を、設定レベルを越えて使用できる（レベル+3）

・一度使用したことがある霊具魔具を「美の女神の宝物庫」に登録することができ、それ以降霊気で具現化できる。（具現化された霊具魔具は、本物より1レベル能力が落ちる）

・具現化した武器は複製も可能で、リンクした仲間へ貸し出しが可能。

・固定呪文の發揮で、精神束縛や固定呪法などを跳ね返すことができる。

- ・文珠による連携で、具現化した武器の合成が可能
- ・文珠一個で横島との同期合体が可能

12/11 ちよこつと修正しました

第五話（前書き）

第五話です

第五話

三月、というか先月以降、自由な時間を一杯一杯使って横島はあるモノを作っていた。

一つはミサング風のアミュレット。

これをマシユマロを入れた袋の口部分で縛り、マシユマロとミサングアミュレットのプレゼントにしようと思ったのだ。

が、さすがに身内からもらったモノに、他の子と同一列的なものでは格好が付かないということで、ガンガンがんばったのだ。

まず、クラフト粘土風にまで柔らかくした銀を使ってアクセサリを大量生産。

加えて文珠を組み込むことにより、緊急使用もできるようにしたわけだ。

ホワイトデーに先駆けて美神事務所などに送っておいたところ、みんなでアクセサリをつけた写真がメールで送られてきており、結構評判がいいのだと安心した。

ゆえに、横島霊能事務所の身内用には一層力が入り、文珠を二個づつ組み込んだアクセサリを作ったところ、その価値を知る魔鈴は卒倒し、エヴァンジェリンは感動して涙を流した。

マシユマロを食べられない茶々丸には、さらにもう一つ追加したのだから、横島の価値観も怪しいモノだった。

花より団子のクーフェイはアクセサリもいいけどと照れつつも大老師との手合わせを望んでいた。

それを聞いた楓も、なんとなく自分も一緒に立ち会いたいでござるなあ、とつぶやく。

まあ、そこまで望まれるのならば、と横島、携帯片手にどこかの電話する。

いろいろと会話の後で、小さくOKサイン。

さすがに向こうも忙しいので夏期休暇時期におじやますることが決定した。

喜びはねる筋肉バカコンビ。

「もちろん、私たちも一緒にいつてもいいんですよ？ 忠夫さん」

千鶴の言葉に激しくうなづく横島だった。

横島霊能事務所の初旅行はずいぶんと激しいモノになりそうだった。

桜咲刹那にとって、横島忠夫の存在は難しいモノだった。

学園最強といわれる高畑先生を超える実力を持ちつつも高校生で、さらにいえば公表されたオカルトの頂点ともいえる伝説の存在だった。

聞くだけの立場であれば、さぞ増長しているだろうと思いきや、気さくで奇策で気軽だった。

いつでもピリピリしている自分にでさえ気軽に声をかけてくれて、あまつさえ食事や甘味をおごってくれる。

くわえて、お嬢様との距離に忠告をくれたり手合わせをしてくれたり。

そう、何となくだけれど、私に優しいのだ。

それは臍気ながら同情を起点としていることはわかっていた。

彼がGSで、その感覚的に私が異形であることを理解しているのだろう。

だが、彼はその異形に優しい。

彼の事務所には異形があふれている。

そんな空間なら私も受け入れてもらえる、そう感じる。

だが、私はあそこに飛び込めないでいた。
なにしろあそこには、お嬢様が、このちゃんがいるから。
あんなにも心から幸せそうに笑うこのちゃんを見るのは久しぶりだった。

神楽坂さんとともにいるときとは違う、まるで心を預けているときのような顔。

ああ、理解しよう、このちゃんは彼に引かれている。
いや、すでに結ばれている。

あの光景がそれを物語っている。
あの公園での、あの仮契約で。

それでもな、このちゃん、ごめんなあ。

うちも、うちも横島さんに引かれとるんよ。

ごめんなあ、ほんにごめんなあ……。

ホワイトデー当日、横島は早朝から活動を開始した。
いちいち呼び出すと問題だから、各寮のメールボックスに配達したり、自宅登校の子にはゲタバコ配達したり。

とりあえず女子校率が高かったので、守衛さんをお願いして同行してもらい、一気に配送をすませる頃には登校時間寸前になっていた。

手伝ってくれた守衛さんには感謝の品として瓶詰め飴を渡して、早々に学校へ移動した。

とりあえず、学校でくれた女子には学校で渡すことにした。
クラスの前までいって呼び出してみたり、授業移動の時にすれ違ったときに渡したり。

着々とクリアーさせ、最後の一人は昼休みに渡せた。
なんとかおしまい、と放課後ひと伸びしたところで、事務所に移

動。

今度は事務所で待機している女性陣へ、一人一人名前の書いてあるプレゼントを渡した。

みんな横島の目の前でそれをあけて、きらきらした瞳でそれをみつめ、身につけ、そして笑顔で感謝の言葉を発する。

もちろんエヴァンジェリンも例外ではなく、受け取ったネックレスとブローチのセットに目を輝かせていた。

そんな中、コノカが首をひねる。

周囲に比べると、ちよつと点数が多い気がするのだ。

正直にそのことを言うと、横島は笑う。

「桜咲と仲良しに戻ったら、友情の証ってことでお揃いでね。」

みればそのアクセサリーは色違いの、赤と青のアクセサリー。

そのことを理解して、喜びにあふれるコノカ。

周囲の女性陣もその気配りに頬をゆるませる。

エヴァにしてみれば、なにを恐れる関係かと思わなくもなかったが、ひとは自分の人生を尺度でしか人を計れないことを知っているので、黙っていることにした

それでなくともお節介な周辺が気をもんでいることだし、加えて「美女美少女の味方」を自称する横島忠夫が動いているのだから。

とはいえ気になることは気になるので、嚴重に口止めをした上でコノカと横島から事情は逐次聞こうと心に誓うエヴァであった。

それとなく事情を察していた千鶴であるが心の傷という問題が十把一絡げに出来る問題でもないことも知っているので、致命的問題になる寸前まで放置を決めていた。

このへんはエヴァと同じスタンスなのだが、十数年の年齢では得られない結論ともいえるだろう。

彼女自身もその自覚はあるが、それはそれで見た目による相談件数の蓄積は伊達ではなく、彼女自身の心を育てる結果となっていた。むろん、友誼を結んでいるコノカとの関係から、当たり障りのない会話を装った（つもり）形で、コノカの近況を聞き出そうとしている姿はかわいいと思う。

ただ、それと同じぐらいの重みで「横島忠夫」の話を知りたがっていた。

さてそれはどういうことなのか……。

まあ考えるまでもない話で。

照れたり恥ずかしがったり、頬を赤らめたりって。なにかしら、このかわいい生物は。

これはコノカがヨリを戻したいと思う気持ちが分かる、わかりすぎる。

静観を決めていた気持ちが大きく揺れる千鶴だった。

横島霊能事務所へコノカどころか千鶴、クーフェイ、楓などが加わった影響で、横島が余剰戦力化してきていた。

というかそういう評価になっていた。

そんなわけで、雪乃丞ばかりではなく、横島も他のチームを組むようになってきた。

週2程度で組む相手は色々に入れ替わったが、女子魔法生徒や女性魔法先生が多いのが気になると愛子の話。

ともあれ、彼自身のモチベーションを考えれば納得のいく話なのだが。

実際のところは、魔法生徒として即戦力となったコノカと千鶴に続けとばかりに魔法生徒や魔法先生が横島の教えを請おうとしたのが現実なのだが、改めて目の前で無詠唱の魔法をバンバン使われる

と圧巻であったという。

魔法の矢の光と闇の属性の同時使用とか、左右あわせて200あまりの魔法の矢とか、雷属性を付加された霊波刀とか……。

現実的に認められない現象を目の前にして、彼女たちは理解を放棄した。

「だって、横島さんなんだから」と。

離れたところでそれをみていたエヴァンジェリンは大爆笑だったという。

悪の魔法使いである自分ばかりが非常識な魔法に直面している事実にいらだちを覚えていたから。

実践してみれば今までの魔法がいかに進歩のないものか理解してしまう内容なのだが、古式ゆかしい精霊魔法を身につけた立場からすれば反則としかいえないものばかりだった。

ともあれ、唐巢GSがその手法を得て精霊除霊の成果を上げている事実を知っているシスターシャーケティーは、目の前のデタラメを他人以上に真摯に受け止めており、その開示を強く望む一人であった。

が、学園の見解でいえば、GSである彼はどちらかといえば正義の魔法使いとは対極にいる存在とされている。

立場的にそれを望むことが難しいと彼女は思っていた。

思っていたのだが……。

「ね、横島君。君のその魔法、教えてくれない？」

「いいっすよ？　ただ、メガロメセンブリアにちくらないでくれれば」

実に簡単に教えてもらえることになった。

そして、実質時間2分、体感時間で六日間ほど体得してしまったシャークティーは、驚く以上に畏怖を感じていた。

覚えてみて、体感してみても、そして実際に使ってみて。

これは「マズイ」と心底感じていた。

同じく体得した高畑とも話したが、どんなにぼかしても本国に報告できる内容ではないと見解はそろっていた。

自分の魔法生徒にはそれなりの形で修行させているが、あの手法を体感させるわけにはいかないと感じていた。

まず、簡単すぎるのだ。

そして安易すぎるのだ。

さらには容易すぎて話にならないのだ。

およそ車のAT免許を取る方が難しいと実感できる。

ゆえに、シャークティーは学園長に正面から申し入れた。あのでたらめを蔓延させることは容認できない、と。

そのでたらめさを知っている学園長は、致し方なし、とそれを受け入れたが、じつはシャークティーが体得していることに気づくことはなかった。

後日、お礼ということで事務所に食事を作りにきたシャークティーであったが、その競争率とレベルの高さにはがみしたのであった。

表の霊能業務として、除霊や浄化を行う横島霊能事務所だったが、除霊助手となった四人の少女たちにとって、今日が初現場だった。

古い建物の総合的な除霊の依頼で、結構手間がかかる割には難易度が低いというものだった。

まずは横島と雪乃丞が先行して安全を確保してから、目標を選定し、そしてタマモによって結界が張られた。

四人にはそれぞれ破魔札と吸引符が配られ、それぞれで実践して

みる事になった。

以外に物怖じしないコノカと千鶴は着実にノルマを果たしたのだが、楓が少々まごつき、クーフェイがうまくできないでいた。

目の前の驚異を身につけた技で対応しようとしてしまい、霊符が使えないのだ。

そのことにひどく落ち込んだクーフェイに、横島は指示を出した。

「クーフェイ、集中」

訓練の成果、瞬間的に瞑想状態になったクーフェイは驚く。

今まで感じたことのない霊気の変化を感じたから。

それ以上の光が自分から漏れでていたから。

「クーフェイ、両手に集中」

自分の光が両手に集まり、光拳になる。

「クーフェイ、打ち込め」

自然な動きで崩拳を打ち込むと、正面にいた霊が消し飛んだ。

それをみた少女たちは感心し、歓声を上げた。

「どうだった？ クーフェイ」

彼女は理解した。

これが自分のスタイルだと。

「最高アル！！」

館の除霊を終えた横島たちは、最後の仕上げに全体清掃を開始し

た。

はじめは掃除で除霊？という疑問を感じていた彼女たちも、みるみる清浄な空気になってゆくことに驚いていた。

霊力を込めて、きれいになれと思いつながら清掃するだけで、こういう効果があるのだと理解した彼女たちは、のちのち清掃自体に力を入れるようになったのだった。

第五話（後書き）

とりあえず、自転車操業状態w

まるでかわりのない話をばらばらに書き込んでいる内容ですが、それなりに作風になればいいと願っています。

ちなみに、除霊後の清掃は「魔鈴」さんの仕込みです。

第六話（前書き）

第六話です。

原作の言つところ、「修学旅行編」です。

第六話

学園長室。

横島は血の涙を流していた。

事の起こりは事故だったかもしれない。

しかし、その原因と結果について責任を取らなければならない立場であることは間違いなく、そしてその自覚も十二分にあった。

話の初めは何故その場に呼ばれたのか判らなかつた横島だったが、話が進むうちに当事者であることが判明し、崩れ落ちた。

中等部3Aの修学旅行先が京都。

先の大戦の英雄の息子が魔法先生。

いきり立つ関西呪術協会。

だから「中止」、ハワイに行き先変更〜というところで、絶望感を押し出したネギと感動した横島。

ああ、アナタこそ最高の教育者だと褒め称える横島を置いておいて、東西融和のきっかけに利用しようと思っっていることを打ち明ける学園長は、融和の大使としてネギに任務を与えた。

修学旅行の監督と大使の任務と言う二枚看板に重圧を感じつつ、ネギは任務を笑顔で引き受けた。

で、そういうえば3Aの修学旅行に関係ないじゃないか、俺は言うところの気付いた横島は、学園長に掴みかかる。

うちは、ハワイですよね？ と。

が、当然のことながら違う。

学園長はにっこり微笑んで、言った。

「婿殿に言い訳して来い」

関西呪術協会の長はコノカの父であり、彼女に魔法を教えないと決めていた人だった。

ゆえに、ばらした責任を取れ、となったわけだ。

ハワイは夢と消え、面倒が予想される京都市行きが実現したとあって、横島は大いに血の涙を流した。

が、男横島、こういうことからは一切逃げないが、悪あがきはする。

体制に取り込まれることを嫌う横島が打った手段は、最悪手一歩手前のものだった。

「六道婦人、このままだと近衛に取り込まれちゃいます」

その電話がきられたと共に、十分もしないうちに現れたロールスロイス。

優雅な動きでありながら、すばやい動きで横島を確保した六道婦人は、そのまま事務所の応接室で数々の資料を展開した。

くわえ、数着のスーツと紋付袴が並べられた。

もちろん、六道の家紋つきで。

「これを着て仕事してもらえれば、簡単には取り込まれないわよ？」

ついでに婿入りする？　なんて台詞を言うあたり、六道婦人も本気だった。

虫除け代わりにお借りします、と何の気負いも無く頭を下げる横島を見て、六道婦人も今のところは諦めたようだった。

ともあれ、関西呪術協会には六道一派の録を判でいる看板を見せておけば安全だと考えた横島だったが、もちろん現実には斜め上に行くものだ。

それが横島クオリティ。

本人達に自覚が無いだけだが、中等部でも高等部でも、雪之丞と横島の人気は高い。

男女関わらず人気があるので、彼らのクラスが学園長の強権によりハワイから行き先変更になったことを喜ぶクラスも多かった。

そして行き先が京都となって喜んだのは3Aばかりではなく、他の中等部や高等部も、であった。

逆にハワイ同行を意識していたクラスは、その強権に恨みを持つたらしいのだが、表立った非難は柄無かつたらしい

「なにしろルチ將軍のやることだから」

その横島の一言が、周囲の生徒の意見を代表していた。

ともあれ、事務所に来る京都行き勢は大いに盛り上がり、十数年ぶりの旅、それも古都京都への旅行に盛り上がるエヴァンジェリンを中心に、観光計画が積み重なっていた。

「くそお、なんでこんなににも日程が少ないのだ、いききれん!!」

「また行くときのために取っとけばいいだろ？」

「・・・何時またいけるかわからんだろが・・・？」

「じゃさ、皆で今度は一週間ぐらい京都とか回ろうか？」

蚊帳の外であった高音とメイが食いついた。

更にはもっと蚊帳の外だった魔鈴も食いついた。

観光案内やガイドブックを取り囲んで、まだ見ぬ京都力に酔いしれる横島霊能事務所であった。

ソフトバック一つにスーツケース二つと言う嫌な取り合わせの横

島は、まるで長期出張のサラリーマンのようだったが、基本、学生服のため違和感丸出しだった。

伊達も僅かにその気風はあったが、スーツケースは必要なかったのでかなり荷物が少ない。

いや、帰りに買う弓へのみあげのためのスペースを大量確保しているだけなのかもしれないが。

そんな彼らが集合したホームからちよつと離れた場所に「子供先生」率いる女子中等部3Aが見えていた。

結構知り合いが多いのでメールなんかをやり取りしていると周囲から冷たい視線。

「ロリじゃないって言うていたくせに」「やっぱり若い方がいいのかしら?」「つていうか、あれで中三つて無いんじゃない?」とかなんとか女子の声。

「おめ、アレだけのクオリティー独り占めかよ!」「シヨ、紹介しろ!!」「くそ・・・あのエターナルは3Aだったのか・・・」と男子の声。

ざわざわと騒ぐ周辺を担任（魔法先生）が押えつつ、車両に追い込んだ。

「バカやってると、自由時間に宿で課題することになるからなあ」

「げー!」

角刈りサングラス黒のスーツと言う神多羅木教諭も、見た目はマフィアだが面倒見のいい教師であった。

東京駅で乗り換えつつ、団体専用と書かれたN700系に乗り換えると、一部の人間がノートPCを開けた。

修学旅行実況スレを立てるとか騒いでいたが、横島にはよくわか

らないねたらしい。

もちろん雪之丞にも判っていないらしく、二人で首を捻っていた。

「忠夫、こつちにこい。」

わざわざ呼びに来たのは、エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウエル嬢そのひと。

たなびく金色の髪と西洋系の美しい顔、そして透き通るような白い肌で有名な「合法ロリ」というカテゴリ。

いや、横島に取ってみれば中学生は「アウト」なのだが、年齢が600歳となるとセーフなのかアウトなのか惑うところだった。

それはさておき、にやりと笑うエヴァンジェリンに連行されて、横島は甘酸っぱい中学三年生車両に消えていった。

それを見送った実況は燃え上がった。

ありえないありえない、と前置きをおきながら、目の前で起きたことを書き込むと、そんなドリームがあるか、いややっぱ夢だろ？

ああ、そういうゲームあるよな、などなどなける書き込みが続出した。

中には「俺達孤児達最強の味方を召還すれば、そんなドリームモテ野郎なんか呪殺出来る」という書き込みが入ったが、何度も依頼のメールを入れたけれど反応がないという結果に終わった。

車内実況組は血の涙を流したが、中学生車両から送られてくる粒揃いの美少女写メの連続に、溜飲を下げることにしたのだった。

あいた横島の席を女子が牽制しつつ取り合っていた頃、横島は何故かご満悦のエヴァンジェリンと茶々丸に挟まれて三人席に座っていた。

「あーんや、横島さん」

「あーんですよ、忠夫さん」

千鶴とコノカによるお弁当攻撃も、エヴァンジェリンの機嫌を損ねるものではなかった。

どちらかといえば、この楽しい旅行に彩りを添える風景の一つ程度に考えているようだった。

代わる代わるに現れる3A軍団だったが、これほどまでに機嫌のよいエヴァンジェリンなどみたこともなかったため、その笑顔をみるためにきているといってもおかしくはなかった。

「なあ、横島さん。」

「なんだい、千雨ちゃん」

「・・・こっちに来たままでいいのか？」

「あー、ほんとにだめなんだけど、ほら、小夜ちゃんの保護者だし、俺」

「あー、なるほど」

保護幽霊の責任者として、という話を聞くとさすがに思い至る千雨。

60年間も自爆・・・自縛霊をしていた彼女が、横島GSの力によつて寄り代を得たのは有名な話で、常識一本槍の千雨であっても彼女の存在は認めていいと思っていた。

というか、先日事務所におじゃました時、横島さんの元同僚という女性が、300年間も浮遊霊をしていたことがあるという強者であることが発覚し、小夜ちゃん大感激の上「おねえさま」と呼びたいと感動していた。

そんな存在をみると、小夜ちゃんがたとえ幽霊でもいいかとか思ってしまうのは、毒されているせいかなあと思わなくもない。

「ヨコシマーン、ウノしよ!」「そうです、ウノするです!」

絶対に年齢的に隔絶していると確信を持てる双子を相手にしつつ苦笑いの横島。

「エヴァちゃん、ちょっと席を外すね。」

「うむ、すぐに戻ってこいよ?」

「あはははは。」

お子さまコンビに引っぱられてゆく横島だったが、見送るエヴァの隣に座った龍宮が問いかける。

「・・・あのヨコシマンというのはなんだ?」

「ん? ああ。」

エヴァは、横島が過去、韋駄天に憑依されたことと、その際に活躍した時の偽名だったことを説明したが、龍宮は首を傾げる。

「風香たちは知っているじゃないか?」

「まあ、GS関係で有名な話だからな。調べればふつうに分かる話だ。」

実在の英雄の分かりやすい側面だ。

GS協会も宣伝しやすかるう。

アニメ化の話すらあったらしいが、格好が格好だけに避けられたとのことだった。

とはいえ、幼児や低年齢層の心霊指導のキャラクターとして「ダテ・ザ・キラール」と「ヨコシマン」は麻帆良でも有名になりつつあったのだが、龍宮もエヴァも知りはしなかった。

「ふむ、話半分でも信じられないが、毎日「あれ」をみていると、そうそう嘘ともおもえないしな」

結界の攻防では龍宮も傭兵として参加しているため、横島のデータ
ラメさを目にしていた。

だから、伝え聞く英雄像、成し遂げた結果を信じざる得ない。
表のオカルトでは、あまり言伝えられていない彼の実績は、秘匿さ
れているだけに魔法側から注目されているのだった。

「横島、荷物だ」

ふらりと現れた伊達雪乃丞は、横島の荷物を持ってきた。

「ん、そろそろ戻るぞ?」

「だめだ。ヒゲグラからの指示で、俺たちは3A付きだ」

「・・・げ」

思わずうめいて周囲をみると、なぜかニヤニヤ笑う女子数名。

「ゆつてみるもんやなあ・・・。」

「うふふ、手を回したかいがありましたわ」

「ふっ、じじいもよい手を使いじゃないか」

「ヨコシマン、一緒に回るの?」

「やった、ヨコシマンと一緒に!」

「老師、一緒に回るアル!」

「いやー、楽しさ倍増でござるなあ」

はめられたのか、と肩をふるわせる横島だった。

一日目が終わろうとしていた。

宿まで戻り、ロビーで一服している横島と雪乃丞の元へ数人の女子が集まってきた。

千鶴、コノカ、刹那、明日菜、クーフェイ、楓であった。

刹那は横島が直接コノカのガードをするように依頼し、明日菜は学園長経由でネギのフォローを依頼されていた。

さすがにオカルトメンバーがそのまま魔法に関わる人間だと思っ
ていなかったらしく、驚きを隠せない明日菜であった。

とはいえ、周辺の人間の实力はよく知っているのも、少しだけ安心した明日菜だったが、今回の目標がネギのもつ親書だけではないと知って顔をしかめる。

作戦のダブルスタンダードという形が、いかに問題のあるものかを彼女なりに力説するが、すでに犀は投げられている。

正面から叩き伏せる以外の道はないだろう。

そのように明日菜は考えていた。

もちろん、それしかないというのは真っ当な場合のみだ。

真っ当ではない事でスイスイ生きている横島霊能事務所では既に真っ当ではない手段が進行していた。

ダブルスタンダード上等、二重作戦目標という事は、敵の目的も作戦も二重三重に進めなければならぬということなのだから。

敵のねらいがわかっている、すべては自分のたちの手の内にある、常にねらわれている、こんな状況は慣れっこなのだから。

というか、すでに横島と雪乃丞は激闘済みであった。

バカバカしいレベルの霊符を片っ端から散らした後であり、23人も術者をお帰り願ったばかりだった。

新幹線車内から着替えたスーツには、六道の家紋が意匠されており、そこに霊気を込めるだけで、こう語りかけることになるわけだ。

「おいおい、六道と事を構えるつもりか？」と。

これに反応するのなら間違いなく「西」か「陰陽寮」の連中だと

断言できるし、反応しないのなら全力で叩き伏せて大丈夫なわけだ。この選別方法で10人が逃げ帰り、13人が雪乃丞に血祭りに上げられた。

かなり高度な術合戦だったため、実に満足そうな雪乃丞であった。ともあれ、安寧の修学旅行の裏側を知った彼女たちは、自分たちもそちら側へ参加する旨を表明したが、横島たちに断られる。

「もうちょっと遊ばせなさい」と。

それを聞いて、今以上に参加を主張する忍ばず忍者とバカンフーだったが、最終防衛ラインであることを納得させて、どうにかこうにか話が終わる。

もちろん、夜の女子区画の防衛は難しいので、彼女たちのメインの防衛任務はそちらといえるのだが。

宿の外の罾がガンガン動作しているのをみて、かなりの頭痛を感じる横島だったが、どこをどうしてかコノカやネギの動向を外側から察知している節があった。

ともなると、宿内にそれを手引きしている人間がいるはずだった。どこにそんなバカが？

外部調査を茶々丸に依頼すると、結構早くに答えがでた。

なんと修学旅行の情報の一部始終が、公共ネットの自由書き込みが出来る伝言板に書き出されているというのだ。

なにをそんなバカなことを、と言いかけて思い出す。

そういえば電車の中からそういうことをしているという話があった気がする、と。

「まさか、あのバカどもか？」「・・・それだ」

罾を仕掛けなおしてから自分たちのクラスの部屋を強襲すると、赤い目をしたままPCに向かい、恐ろしい速度でタイプしている男たちを発見。

心の籠もった説得を、主に拳と秘匿写真で実施したところ、情報偏向協力を得ることができた。

茶々丸もその情報板をアクセス監視してくれる約束をしてくれたので、アクセス異常があった場合は即座に反応してもらえる話になっている。

あとは……

「とっつかまえた奴らをどこに収容するかだな。」
「多すぎだろ、しかし」

時間停止状態で黒山になった術者の山をみて、ため息をついた横島と雪乃丞だった。

ここまで反感があるのかよ、東西の隔たりは根深いな、と思った二人だったが、じつは襲撃者の1/3は、リアルハーレム野郎に嫉妬した孤児だったことに気づくことはなかった。

気づいていれば、今後の展開も少し違っていただろうに。

翌日の見学は奈良地方での自由見学だった。

親書を守るネギチームと、それを周囲から守る横島チームと、横島チームのコノ力を密かに守る伊達チームという特殊編成で人の輪を作ったが、その実、お団子状態でソロソロ見学と言うことになった。

情報板の内容を微妙にズラしたところ、見事なぐらいに襲撃タイミングがずれ始めた。

悲しい事実だったと宿に残ったスレ住人に鹿と戯れるエヴァの写真をメールする。

時々こういう写真を送るといふ契約で、こちらの必要情報を「ズラして」アップしてもらおうという作戦に従事してもらっているのだが、恐ろしいまでに結果がでてしまった。

昨日の情報の正確さから、本日の情報ずれに何の疑問も抱かないであろう敵に少し同情する。

とはいえ、こんな隙間作戦は本日はかりだろつ事は間違いない。

ジレた敵が体勢を立て直して夜以降にくることは容易に予想できる話だ。

だから……

「今晚は徹夜になると思ってくれ」

「『『『『了解（アル）（でいぢる）』』』』」

そんなわけで、横島と雪乃丞の長い夜は始まった。

修学旅行二日目の宿の戦いは、身内から始まった。

なんとネギ先生、自分の生徒に魔法がばれたと泣きついてきたのだ。

「オコジヨだな」「オコジヨね」「ネギの体はオコジヨでできている」

雪乃丞、明日菜、横島の言葉に泣き崩れるネギだったが、その後から現れた朝倉和美とエロオコジヨによって話が変わる。

オコジヨの説得により魔法情報の秘匿に協力するというのだ。

それを聞いたネギは大いに喜んだが、横島と雪乃丞は懐疑的な視線を送っている。

そう、この二人はむちゃくちゃ被害を受けているのだ。

ガセニュースやガセ真実、ガセガセガセで記事を書かれて、そのたびに身内からの追求を交わす努力をさせられまくっていたから。とはいえ、その件に関しては朝倉にしても言い分があるのだ。

ガセとはいえ、全くの事実無根は記事にしない。

二人とも大量にバレンタインのチョコをもらった事実があるし、そのお返しを長期的な展望で進めていたことも事実だ。

さらにはマーケティングも完璧だったし、ミーハー以上の感情処理も芸能事務所かというレベルで完全処理されていたのだ。

つまり、火も煙もないネタはでてこない、というわけだ。

そんな事務所の身内から漏れ伝わる情報は面白いほど現実に合致していることが多く、それなりにおもしろおかしく盛り上げると、面白いほど売り上げが伸びる。

その後の訂正記事や修正記事まで注目されるのだからうま味がありまくりといえるのだ。

伝え聞く情報精度が低いとはいえ、彼女の聞く情報もまた真実だと言いたかった。

言いたかったが、今の冷たい視線を跳ね返せるほどではない。ゆえに、愛想笑いで切り抜けようと思った。

おもったが、なにやらずいぶん重い話がされていた。

魔法の真実、事実関係で進行している血なまぐさい事態、そして日々進行している怪異との暗闘。

平和な修学旅行や学園生活の裏側で進行している、戦争地帯かのような話を聞かせた上で伊達雪乃丞は問う。

「魔法の存在を忘れる気はないか？」と。

今魔法の存在を忘れれば、その暗闘に巻き込まれることはない。しかし、今から関われば、その暗闘に巻き込まれるばかりか自分の友人を巻き込む事になるぞ、と。

実に卑怯な物言いだったが、朝倉和美はその言葉で心を決めた。

最初は軽い考えだった。

ネギを丸め込んで情報をいただいて、手記やドラマや映画の台本にしてたとき売り、小銭を稼いでドロンを決め込もうと思っていたぐらいだった。

しかし、横島と伊達の話聞いて、逆に心が決まってしまった。

おいしい話で薄れていた報道という魂が輝きを取り戻したのだ。

あんなにも楽しかった毎日、あんなにもすてきな仲間、それを支えてくれている魔法使いたち。

彼らに感謝することはあっても彼らの負担になることをするわけにはいかない。

ならば、彼らの活動がうまくいくように動くべきではないか、とむろん真実は曲げない。

ただ、事実がすべてみんなに優しいとは限らないことは彼女もよく知っていたから。

「ところで横島さんたちが「魔法使い」だってばれてもいいの？」

「あ？ 俺たちはGSだから問題ねえよ」

「ああ。ネギはオコジョだけど、俺たちは、まあ、事務所閉鎖ぐらいじゃねーか？」

「・・・ええ！ そんなことになったら、学園都市中の女子に恨まれるわよ！」

「そうか？ まあ、多少残念に思うかもしれねーけど、しょせんオカルトなんか生活に必要なもんじゃねーし・・・。」

第六話（後書き）

GSキャラたちは基本的にまじめです。

まじめにおちやうらけているのですが、その辺のギャップは付き合わないとわかりませんよね

1 2 / 1 1 ちよこつとなおしました

1 2 / 3 1 もうちよこつと修正です

第七話（前書き）

第七話です。

原作の言つところ、「修学旅行編」です。

第七話

驚く明日菜を苦笑いでたしなめる横島だったが、朝倉は本気で動こうと心に決めた。

気さくで心使いができる同世代の少年なんていう反則的な存在で、いろんな意味で落ち込んでいる美女美少女がほおっておけないという博愛主義の横島が、事務所を畳んで学園から去るなんて話が伝わっただけで原因究明が行われるだろう。

やばいやばい、その原因の一端となる女はんながいると分かれば魔女狩りもかくやの暴走劇が始まるに違いない。

朝倉の横で話を聞いていたネギは「オコジヨはイヤだ」とガクブルしているが、魔法の危険の話についてはあまり気になっていない風だった。

当たり前と言えば当たり前だが、普通生活の中で魔法が当たり前のようにあつた隠れ里で育った少年だ、その辺の危険性や一般社会との摩擦が理解できていない。

それ故の失敗なのだが、少年は魔法自体が秘匿されている事実の方がストレスに感じているように見受けられる。

いかにお題目を素直に口にしても、発しているオーラが「みんな魔法を使えば、僕も隠していなくていいのに。」「僕の魔法もみんなの役に立てられればいいのに。」「というか魔法使いたい」という駄々漏れ感情に支配されているのが丸解りだった。

ルチ將軍曰く「使ってもいい状況になれば、ためらいもなく魔法を使い、後でいいわけを考える。」「というのが魔法学校卒業すぐの子供の行動パターンなんだぞうだ。

そういう意味では、明らかにその通りのネギなのだった。

真剣な説得と輝きを増した決意のおかげか、このとき、別時間帯

の別世界で起きたような「ラブラブ」でキツスな作戦は行われなかったが、エロオコジョはあきらめていなかった。

数々の未発見アーティファクトを発現させたという横島GSにもっと仮契約させるとオコジョ協会から指令がきているのだ。

すでにオコジョアビリティーで知りえたベストテンの女子は攻略済みという状況下で、どうにか出来ないものかと策謀を巡らせているところで気づいた。

主従逆転契約。

あの関係の中で、唯一他の子女と逆の契約をしているあの存在こそ、鍵なのではないか、と。

ゆえに、正面から話を持ってゆくと、わりと好感触であった。

というか、かなりノリノリであった。

従者である茶々丸も協力し、そしてふたたび横島は魔の手に落ちた。

あまりの状況に、さすがの横島も泣きながら宿を去った。

もちろん一時的なものだと確信しているエヴァは、出来上がったばかりの仮契約カードを満足そうに見つめていた。

そこに描かれている姿は、18才程度の体に成長した自分が、大量の魔具を背に腕を組んでほえんでいるもので「美の女神の宝物庫」という名は微妙に嬉しいものだった。

召還を試してみると自分の姿が、絵姿と同じになっていることが分かる。

加えて、その権能が完全に理解出来た。

あまりのデタラメさに、さすが横島が関わる「人間」だと感慨深い。

試しに呼び出した魔具の数々は、一度失われたものも有れば未だ使っているものもあるという幅の広さで、一度使ったことがあるが・
・というあやふやなものですら再現できるというものだった。

不意に、身内のアーティファクトも再現できるかも試練な、と思

い思い浮かべてみたが、さすがにそれは無理らしい。

同じく文珠もだめだった。

少しだけ残念に思いつつも、頭の中の目録を検索している中で、おかしな事に気づいた。

エヴァ自身が扱ったことのない道具が何点が混ざっているのだ。

もしかやと思いい目録に集中すると、なんと項目がいくつか増え、「主」項目という項目が現れた。

そこには膨大な「霊具」が列挙されており、聞いたことのあるものも多かった。

たとえば、イタリアの至宝魔法の箒「炎の狐」。

たとえば、天狗の「霊薬」。

たとえば、織り姫の「霊系の反物」

たとえば、たとえば……。

「さすが忠夫、デタラメだ。」

思わず笑顔で「炎の狐」を呼び出す。

現界した箒は大いに喜び、再び空を舞うことをかみしめた。

自分は悪の魔法使いだが、問題はないか？と問いかけると、箒はいう。

「この世にあるものは、飛ぶと気持ちのいい空と落ちると痛い地面だけ。それ以外はなににもとらわれない」と。

そのあり方を大いに気に入ったエヴァは、召還の際にはいの一冊で箒を呼び出すようになったのであった。

泣き濡れて飛び出した横島だったが、飛び出した瞬間はおいて敷地から一歩でた瞬間はもう泣いていなかった。

彼とてそれなりに実戦をくぐっているのだ。

必要なときと必要じゃないときぐらい弁えている。

故に、彼は自己否定の象徴ともいえるアーティファクトを呼び出した。

すると現れるバンダナの目。

「心眼、状況は？」

「ふむ、さすがに大軍ではないが、小隊単位の敵はいるな。」

バンダナの目の名は「心眼」。

かつて妙神山の竜神小竜姫によって授けられた神器を模したアーティファクトであり、その機能の一部は全く一緒であった。

横島の霊能を助け、そして効率的に行使することを助ける師匠であり相棒であった。

自らの正義を揺るがす事件ではあったが、この心眼と再び出会えた事を考えると、エヴァとのキスも悪いものではなかったとすら感じている横島であった。

「じゃあ、『権能』のダウンロード無しでいけるか？」

「ふむ、おまえ一人でいけるだろう」

「じゃ、ゴミ掃除だな」

瞬動と穩行を組み合わせてその場を去った横島を見失い、術者たちは騒然となったが、攻撃目標を変更することにした。

第一目標、最大の敵である横島忠夫から、美少女ハーレム教室の担任であるネギィスプリングフィールドへ。

もう彼らの目的は狂いまくっていた。

西洋魔法使いがどうしたとか、関西呪術協会がどうしたとか、もうどうでもよくなっていたのだ。

ただ、モテモテ野郎がにくい、ただそれだけになっているのである。

った。

たぶん、真剣に正面から向かい合えば、横島は同調し、彼らの良い指導者となったかもしれない。

しかし情報にすれ違いのある彼らは今、敵同士。

人と人が解りあうためには、大きな壁があるのだとわかるようなわからないような現実だった。

京都市内の某所で用事を済ませた横島が宿に戻ると、宿に張った結界を今まさに壊そうとしている集団を見つけた。

さすがに戻るまでにソコまで行くとは思っていなかったのも、真剣に感心していた横島だったが、その姿を彼らに見つかり、怒りを露わな視線を向けられていた。

「貴様、横島忠夫！！ 我々がこの結界に手間取っていたのを笑ってみておったのか！？」

「いや、そんな堅い結界を正面から破るなんて、よくできたなあと感心してた」

そういいながら、横島は彼らでも見えるように術を展開する。

「俺の普通なら、結界解析をしてその端っこから浸透分解するぜ。

小技で子供っぽい技だけど、時間をかけりゃ、宮内庁の神殿結界だって潜り込めるだろ？」

「……あ……」

男たちは啞然とした。

彼のいうとおりだったから。

そして彼らとて冷静ならその手段を選んだらろうから。

彼らは強引に冷静になることを自らに課した。

そう、「クールになれ、クールに」というやつだ。

もちろん、古今東西を探してもその台詞を吐き続けてクールになれたためはない。

とりあえずの平静を確保した男たちは、呪符や刀を構えた。

「のこのこと現れたその身の不幸をしれ!!」

発動する十数枚の攻撃呪符だったが、横島の手前ですべて呪符に戻り、紙になってしまった。

なにが起きたか解らない彼らは、いろいろとぶつぶつと言った後で再び攻撃態勢になった。

「のこのこと現れたその身の不幸をしれ!!」

どうやら今の光景をなかったことにしたようだった。

もちろん再び光景が繰り返される。

信じられないが、彼らの術がいつさい聞かないようだった。

刀で切りかかっても一切あたらず、ホイホイよけられてしまう。

二十分ほど絡んで彼らは絶望した。

なにをしても無駄だと。

呪符も術も刀も効かない。

俺たちは、このまま殺されるのか、と。

が、いつまでたっても攻撃はこなかった。

みれば横島忠夫はニコヤカに立っているだけだった。

なぜここまで恐怖していたか解らなくなるような笑顔。

心と体の動きにずれが出来ていた彼らは、瞬間的に正気に戻った。

そしてそのまま膝をつき頭を垂れた。

絶対的な実力者でありながら、少しずつでも伸び代を見つけて指導する。

実践の中でこんな事が出来る存在に頭を下げないでなにをしるというのか、と彼らは感じてしまった。

彼らにとつての天上人、それが横島忠夫のイメージだった。

で、そんな姿を幻術を駆使しながらみていた本人は、こんな事なら自分がでていれば良かったと思つた。

もちろん、男に土下座される趣味というわけではなく、相手のイメージがよくなりすぎている事への苦言だった。

はじめの術のキャンセルは、先ほど顔を出した清明神社のアツチヤンからもらった霊符によるものだった。

陰陽関係が多いので、弟子からの攻撃をキャンセルできるアイテムを貸してくれとお願ひしにいつたら貰えたものだった。

で、その効力はすさまじく、陰陽関係の攻撃すべてをキャンセルできたのだ。

が、さすがに全員相手はめんどくさいので、術のキャンセルでた余剰霊力を隠れ雲にしてダウンロードした権能で作つた幻影の自分と入れ替つたのだが、その操作も面倒だという事で、敵型の男たちが嫌だなと思う動きをトレースさせていたら、いつの間にか彼らは白旗を揚げており、さらには五体投地状態で尊敬の視線を浮かべている。

やべー、あの手の視線はやべーんだよなあ……。

とはいえ、幻覚と入れ替わるタイミングがないので、そのまま静観していると、男たちは口々に「お嬢様をよろしくお願ひします」と言つて、その場を離れていった。

誤解に誤解が重なつてすでに地上200階ぐらいになつてるよなあ、と思つていたが横島もまだ誤解していた。

横島にとつて、彼らの言う「お嬢様をよろしくお願ひします」「は「護衛を」だと思つているのだが、彼ら自身は「嫁として」だったわけだ。

この誤解はさらに加速する。

幻覚が彼らを見送った直後、地面から生えた円錐の石の槍が幻覚の横島を貫く。

結構格好良く血を吐きながら片膝をつく幻覚横島。

しかし、後追いで展開された呪符は無効化した。

どうやら彼らは「呪術無効化」だけだと判断したらしい。

「・・・ふ。不意をついたつもりだけど、これで身代わりとは恐ろしいね、横島忠夫」

真っ白な髪の毛の少年が再び石の槍を出現させたが、血を吐きながら幻覚横島はサイキックソーサーを出現させ防ぎつつ、瞬動で距離をあげる。

大量の血を流しているせいか青い顔だが、なんだか無駄に格好がいい。

少なくとも横島本人は比較されるのがいやであった。

「それだけの怪我でも集中力を乱さない、さすがは「魔神殺し」の英雄といったところかな？」

瞬間膨れ上がった本体横島の殺気を心眼は必死で押さえ込んだ。

どうにか幻覚に分離することで、あたかも幻覚横島が意識を乱したかのように見える。

結界の向こうでこちらを観察していたエヴァからも念話が飛んでくるほどだった。

どうにか幻覚であることを悟らせたのだが、それでもかなりびつくりしている用だった。

「ふ、少しの動揺しかないか、食えないね、どうも」

「ふえいとはん、それはどううことですか?」

メガネ巨乳陰陽師姿の女性が白髪の少年にささやく。

「知らないのかい? この横島忠夫といえば、魔神殺し、かの魔神戦争終結の立役者だよ? その力は人を越え、その人脈は三界を統べるまでいわれるほどね。」

「そ、そんなオヒトを殺めてええんかいな!??」

もちろん良くない。

「よくみなよ、千草さん。細部にわたるまで、骨格に至るまで細部に作り上げられた擬体、クグツだよ。」

「な、なんやて!?? せやかせ、この見た目、絶対生身やで!??」

「ソコまで作り上げたものだから、本体が身を隠している最中の変わり身なんだろうけどね。」

反応のなかった幻覚が、急に笑い始める。
無駄に格好いい。

「そこまで解っていないながら、なぜ、俺が攻撃もせずにいると思う??」

くわっ、と目を見開く少年と巨乳。

足下に展開されるのは見たこともない魔法陣。

「ま、まさか僕が移身と、しっけていて……!?!」

輝きを増す魔法陣とともに、白髪の少年は凍結した。

巨乳はそれを見て、驚愕に固まっている。

かかと笑う幻覚横島は、けっこう邪悪っぽい。

念話でエヴァから「こんどあの笑いを目の前でやってくれ」というオーダーが入った。

ともあれ、このまま放置というわけには行かないので、学園に緊急回収要請をかけつつ、巨乳の前に立つ。

「さて、千草君。君は投降してくれるかな？」

真っ青な顔で凄い速さで、正に振動ともいえる速度でで顔く巨乳であった。

巨乳を六道の手勢に預けた横島は、白髪を封縛しつつ宿に戻ると瞳をきらきらさせたネギに抱きつかれた。

彼の受けた感動は幻覚横島のもののだが、少年にとっては同じものらしい。

最後の超難易度の封印結界を瞬間的に展開するなんて、あり得ないといいつつもリスペクトしてます視線に辟易としていたところで雪乃丞が笑う。

「ネギ、今までおまえはなにを学んできていたんだ？」

その一言で、ネギは誘導された答えに行き着いた。

そう、「罨」だと。

「敵を知り、己を知らば百戦危うからず、ってな。」

「百戦百勝は上策ならざりけりってか？」

あらかじめ情報を集めること、あらかじめ勝つ仕掛けを仕掛けること、そして勝利という状態のために戦わないことすら視野に入れること。

交渉も取引もすべて勝利という状態を引き入れるための手段だということ。

それを説いたところ、ネギは素直な顔でうなづいた。それほどまでにあの一戦から学んだのだろう。

まあ、全部幻覚なんだがな、と胸の内で舌を出す横島。敵をだますにはまず味方から、とつぶやきながら。

翌朝、六道から「白髪」が脱走したと報告があった。

怒りの表情で巨乳を担いで京都に向かったという。

とりあえず、西にも伝達したが、六道の不手際を詰る言葉しか出てこなかったというので、対応無しだらうとのことだった。

それを聞いた横島は、にやにや笑った。

低姿勢の六道婦人に、なぜあいつが封印されていたかを説明したところ、向こうでも明るい笑いが響く。

「つまり、かっこうつけてだまされてはめられていたことに気づいたってことね？」

「ええ、あまりにも恥ずかしくて逃げ出したって事です」

「あはははははは」

余りに邪気のない笑いを振りまく横島だったが、電話を切った後周囲を見回した。

そこには、横島霊能事務所の仲間がいる。

ニヤリと笑って、昨日の顛末と、はめられていた存在、そしてそれに気づいたとたん恥ずかしくて逃走すら考えず感情的に一直線にこちらに向かっているとはなすと、みんなで吹いた。

「横島さん、あんまりまじめな子をからかっちゃだめやで。」

「そうですね、横島さん。ああいう子は自分が格好いいと思ってい

るから、失敗をあげつらわれると、本当に怒りますよ?」

結構笑いながら少しずつプロファイリングを開始する。

そして六道婦人から追加された敵情報を加味し、作戦方針を決めた。

畏ばかりのトラップゾーンにどれだけ相手が迫れるか、まさにその一点が今回の見所だろう。

刹那が走り、ユエ達が追う。

朝倉はそれに併せて周囲に警戒していたが、敵がどんな人間かも知らないで、注意は散漫になっていた。ともあれ、刹那が係員を突っ切って映画村にはいると、ユエ達も追わざる得なくなった。

時を同じくして、明日菜とネギは関西呪術協会本部前にいた。

無限に続くかのような鳥居に圧倒されつつも、鳥居に一步踏みだそうとそうとしていた。

決戦の瞬間は近い。

「・・・と、これがすべて幻覚なのですか・・・」

「そーよー、結構すごいでしょ?」

タマモの幻覚効果により、映画村に入ったユエ達であったが、もちろんの事敵にもその幻覚が見せられている。

さらには周辺の人々にも浸透しているのも恐ろしい。

詠春は、早朝突如転移してきた横島霊能事務所一行のやり口に驚愕していた。

まず説明もそこそこに結界の強化、さらには一室を改造しての魔法指揮所の開設、そして簡易式紙を起点にした伝説クラスの幻覚の乱用。

明らかに、明らかに、常識の斜め上に行っていた。

加えて式紙に全感覚投入する事によって不自然さを無くし、幻覚に真実味を増させていた。

さらにそれをすべて水晶で監視しているのだから、なにをしているのか、と思わされる。

「しかし、相手の見たい幻覚を見せるといふ幻覚は恐ろしいですな」

詠春のつぶやきに、エヴァが黒く微笑んで言葉を紡ぐ。

「ん？恐ろしかろう？一度かかっているといふのに、この小僧は再び呪中に嵌ってる。」

あまりの嵌りっぷりに横島も苦笑い。

その笑顔を見てエヴァは笑みを深める。

「せやなあ、昨日、あんだだけ見事にかかっておいて、またかかってくるしな」

「まあ、向こうも移身を増やして京都中を警戒してるからな。神経を持って行かれているのだろう」

京都中を、ね。

ニヤリと笑う横島忠夫。

併せて笑う周囲の女子。

「しかし、ネギ君はいいのかね？」

この雰囲気の中、まったく神経を払われていない存在を想い詠春は名前を出したが、横島は肩をすくめる。

「んー？一応今回はコノカちゃん優先で依頼を受けていますしね。」

いい修行になるでしょ？ と笑う横島。

たしかに、水晶の中でみるネギの戦いは恐ろしいまでに老練だった。

相手の感情を逆撫でしつつ、自分の実力をしたに見せ、さらには相手の全力を出しきらせる前にダメージを加算させるという手法は、まさに横島直伝の美神流。

生き残ることが至上命題という手法は、まるで幼い頃のナギを見ているかのようであった。

とどめの明日菜キックによって完全沈黙した少年を横目にみつつ、ハйтツチの二人は、意気揚々と奥を目指しつつ十分ほど。

やっと空間閉鎖されていることに気づいた二人だった。

焦った二人だったが、未だ気絶中の少年を縄で縛りつつ吊し、逆さにした状態で下から煙で燻すというナイスな処置を開始。

それを見て横島はニコヤカに笑う。

「・・・横島君、これは君の教育の成果かね？」

「え？ いやいや、俺の仕掛けた罠から独自に学んだだけですよ」

「・・・つまり君の入れ知恵と。」

「もちろん、ルチ將軍公認です」

「・・・誰だい？」

「学園長っすけど？」

ぶっ、と笑いつつ倒れた男の名は「近衛詠春」。

もちろんその姿を周辺全員が「写メ」したのであった。

実においしい脅迫材料であった。

犬上小太郎君を拷問しつつ聞いたところ、鳥居の一部に呪法が組

み込まれているそうです。

じゃあ、全部壊そうか、とすごく怖いことをいう明日菜さんは置いておいて、呪法を明日菜さんがたたいた瞬間に空間閉鎖が壊れました。

さすがはバカレンジャー、恐ろしいまでの破壊力です。

破られた空間から飛び出した僕たちは再び小太郎君を気絶させつつ、関西呪術協会の扉をくぐった。

第七話（後書き）

横島のAF情報

「千の女神たちの祝福」

・AFは「心眼」の形で発現

・心眼発動後、横島にかかわりのある（神魔人妖にかわりなく）女性の力（権能）を引き出せる。

・文珠とあわせ「全人格ダウンロード」を行うと、「横島が思う」その女性の最強状態が再現される。

・再現された人格は横島の上でエミュレートされていることを自覚している。

・全人格ダウンロードは、連続時間10分/文珠1個。

たとえばシロをダウンロードすると、横島は思う最強にまで鍛えられたシロが再現されるので、現時点のシロをはるかに凌駕する。

逆に、美神は出会ったところが最強すぎて、今のパワーアップ美神よりも過去の美神のイメージが強い再現となり、卑怯技で本人に勝つ流れになる。

とりもなおさず、本人を凌駕する再生が行われる、そんな感じ。

1 2 / 1 1 ちよこつと修正

1 2 / 3 1 もうちよこつと修正

第八話（前書き）

第八話です

ただいま修学旅行中

第八話

映画村の騒動は、再び自縄自縛に陥った白髪の少年とそれを看取って投降を申し出た巨乳、そしてより強い剣士との対戦を約束された少女、月詠も含めた全員が投降したのだった。

流れるように事が収まったためか、映画村のアトラクションと思われて流されたが、さすがにクラスメイトが流せなかった。

無茶苦茶なアクションとまるで映画のような立ち合いを刹那やコノカ、そしてその流れの中で自然に友人達を誘導した千鶴に視線が集まる。

もちろん、そのまま身を翻すのもありなのだが、三人ともその勢いでコノカの実家にいつてみる話を始めた。

先ほどのアクションも気になるけれど、ルチ將軍の孫娘という立場の実家にも興味があつたクラスメイトは、そのまま実家にくることになった。

「いらっしやい、みなさん」

「「「「「いらっしやいませ」「」「」」」」

目の前に広がるのは巫女パラダイス。

何かの花が舞い散る中、近衛詠春がにこやかにほほえむ。

その両脇には何故かスーツ姿の横島と雪乃丞。

いつの間にか移動したのか、千鶴・コノカ・刹那もいた。

見ればエヴァンジェリンや茶々丸、小夜もおり、横島霊能事務所のメンバーが集まっているかのようにだった。

「うあー、コノカの家ってすごかったのねえ！」

「本当にびっくりです。コノカさんってお嬢様だったんですね。」

銘々に驚きながら敷地をくぐろうとしたところで、朝倉を止めた横島。

「うえ、何の意地悪？」

「スソ抜い」

そういつて横島が光る腕を払うと、薄ぼんやりとした何かが離れていった。

横島は隠密性の高い幽霊が紛れ込もうとしていたと説明したが、実の所極限にまで希薄化した白髪の少年が、結界に紛れ込んで入ろうとしていたのだ。

もちろん、小夜ですら見分けるエヴァンジェリンが見逃すわけもなく、横島に払わせたのだった。

それを見取った詠春は驚くとともに手腕を高く評価した。

古来から闇払い怪異払いを行ってきた組織の長であったとしても、これほど隠された霊体を見極めることなど難しいのだ。

しかし、彼らは見極め、払う。

目的に応じた力を使い分け、そして成し遂げる。

信じられないほど一体化したシステムに詠春は感動すら感じていたが、それは一種の郷愁であることも感じていた。

かつて、自らの仲間達の行いと、一体感同じものように感じていたから。

そんな感覚を今味わっている娘に、少なからず嫉妬を感じつつ、詠春はにこやかな笑みで娘の客を招き入れたのであった。

さて、一方の少年、白髪の彼は追いつめられていた。

威力偵察のために地元のバカを炊きつけて欄乱を起こさせつつそ

の制動を観察しようとしたのだが、すべてが裏目に出ていた。

当初予定と違って少数勢力を糾合するつもりが呪術師の若者大半が合流し攻め込む事態が予想以上だったが、それを制する勢力も予想外だった。

その名は横島忠夫。

表の世界では核ジャック事件とか大霊症とか呼ばれている事件解決の立役者にして、神界魔界人界含めた最大の英雄「魔神殺し」横島忠夫。

彼が正面に出てきた段階で、英雄の息子などと言うものは三下以下に評価される。

そう、白髪の少年は横島の実力を並々ならない角度で上方修正していた。

なにしろ、彼自身は未だ自分に行われた処置が幻覚だと気づいていなかったから。

気配も感じさせない高度魔法処理をされた封印結界、それを起動するための魔力を込めた流血。

相手の攻撃すら織り込んだ畏の存在に畏怖を感じつつ、好敵手としての存在意義も感じていた。

上策も下策もなしに、目的のために手段を選ばない姿勢は非常に高く評価できるし、自分の損害を計算に入れない方向性も自分に似ている気がしたから。

彼をよく知る人間がいれば、なぜそこまで執着するのかを疑問視したかもしれない。

しかし、いまは彼一人。

白髪の少年の異常を知ることが出来る人間はいなかった。

現場に残されたクラスメイトを関西呪術協会本部へ招き入れる時点で、彼らが籠城戦に出ることが分かっていた。

ならばということ、結界内へ転移するための足がかりを送り込もうとしたところ、早々に見つかってしまった。

旧来の結界ならそれでも隙と属性効果を経て転移も可能だったが、現在の結界はさらに強化されているため、進入どころか透視も出来ないほどだった。

光学的な偵察情報もゆがめられていて、もう手はないかのように感じられた。

いや、と思い直す少年。

彼にはないが、「彼ら」にはあったではないか、と。

詠春に対して渡された親書によって、ネギィスプリングフィールズの任務は終わった。

蝶よ花よと守られた足跡ではあるが、彼自身も学び成長した証も立てられたのを見れば、近右衛門の企みも一部成功といったところだろう。

不足していた実戦経験と虚実入り乱れた攻防に対する経験は、横島トラップゾーンを走り抜ける仲間である忍者とバカンフーから得ており、きわめて急激な伸びを見せたのだった。

それが今回の修学旅行で一部開花したのだから、彼自身の自信にもなっただろう。

あからさまに吐息をはいたネギは、そのまま宴会場に通された。

で、その場に残った横島は、紋付き袴で座っている。

左右に刹那とコノ力を従えて。

まずはコノカに魔法をばらした一件とその後の身の振り方に対する見解、そしてコノカからあかさされたGSへの意志を説明すると、詠春は苦笑いとなった。

娘の正常な成長を願って秘匿した魔法だが、思わぬ方向に行ってしまったと。

とはいえ、娘が望んだ方向には行きそうにないことも感じていた。いや、本来の状況で何の襲撃もない状況なら、むしろ娘の書いた絵図道理になっただろう。

しかし、状況が斜め上に行く事態が発生した。若手術師たちの大量離反と、同じメンバーによる帰順宣誓であった。

はじめに起きた大量離反者は、そのまま娘の修学旅行の襲撃者であったはずだったが、昨夜になって全員が帰順し、涙ながらに処罰を願ってきたのだ。

それは恐怖ではなく心酔の力によって。

「かの術師、横島忠夫がお嬢様を娶るのならば、我らは派閥を越えて従いましょう」

罪の放免を行った際の台詞であった。

集まった若者は、各派閥のナンバー2や次世代のトップと言われるものばかりで、柔軟性のなさでは甲乙付け難い存在であったはずなのに。

そのことを指摘しつつ、彼が六道の祿をはんでいることを指摘すると、彼らはにこやかに微笑んだ。

「そんなことは関係ありません。」と。

柔軟になりすぎにも程がある。

若者たちは各派閥内でも活動を開始し、派閥のトップである老人たちの排斥も始めたというのだから本気の具合がしれるだろう。

彼らが修学旅行にきて三日目、それだけで数百年の膿が絞り出されよつと言っただから、今までの苦勞は何なんだろうと遠い目になりそうな詠春。

ともあれ、コノカのGS進出は、横島忠夫との関係を進める上で必須という形で理解されて以来、魔法世界側からの融和策の一環と評価されている。

護衛の刹那どころか魔法世界の「悪」、エヴァンジェリン「A」K「マクダウエルをも従える男を、関西呪術協会が押さえる意味は大きい。

力や契約ではなく信頼でつながる彼らを利用できる手勢は少ないだろうが、一度友誼を結べればその先は明るい。

故に、その一手を打った（と見られている）詠春は不動の長の地位を上り始めているのであった。

そんなこととはつゆ知らぬ横島は、涼しげな顔の奥で冷や汗をかいていた。

何しろ年頃の娘さんの唇を奪いました、ごめんなさいと言いに着ているのだから。

そりゃ、事故ではあった。

偶然だし悪気もなかった。

でも、しかし、だ。

娘を持つ父親のノリを考えれば、土下座は基本だ。

そんなわけで、詠春ですら見とれるほどの土下座を見せた横島の評価は、遠視をしていた協会中のもとなり、ストップ高を更新した。

「面を上げてください、横島君。コノカの現状は、私の歪んだ教育方針によるところが大きいのですから」

素直に顔を上げた横島だったが、再び伏した。

「ここをご覧になっていらっしやる皆様申し上げます。私、横島忠夫には、関西呪術協会に対する害意はございません。しかしな

がら敵対組織が皆々様にご迷惑をおかけした際は一声をかけください。GS横島忠夫が参ります。」

何十にも隠匿処置をした呪式が見破られている以上の驚きを彼らは感じた。

そう、ストップ高更新中の横島忠夫が、GS横島忠夫が関西呪術協会の協力者となると言っているのだ。

これにより、関東魔法協会における横島の地位と関西呪術協会の横島の地位が逆転した。

強烈な認識は事実を塗りかえる。

以降、関西の守護神として関西呪術協会では認識され、コノカ成人まで貸し出してるんだ、と言う認識が固定したのだった。

もう、六道の家紋なんざ知ったことではないと、誰の目にも留まらない状態になってしまい、六道婦人ははがみしたという。

もちろん、六道のためには「最悪、関東に『も』横島の血が残せればいい」ぐらいまで追いつめられていたのだが。

ともあれ、関東関西の亀裂は瞬く間に埋まり、酒宴もたけなわに盛り上がることとなったのだった。

さて、思い返してみよう。

横島忠夫は現状を見て頭痛を覚えていた。

確かに敵対組織がアホしたらよべっていったけど、そんなに直ぐにくるとは思わなかった。

そう、直ぐ、だ。

酒をちよつと飲んで、気持ちよくなつて、まわりの巫女のおねえさんにちやほやされて気持ちよくなっていた、さあこれからだ、と盛り上がるうとした瞬間だった。

宴会場に大量のガラス天狗が現れて、併せてスーツ姿のお姉さんたちが大量のディスプレイを設置し始めた。

あれよあれよという間に、宴会場はディスプレイの大量展示市のようになった。

で、そこに写っている映像がまた、頭痛。

光輝く巨人が、徐々に池からせり上がってきているシーンだった。それをみた詠春は震えた。

「リヨウメンスクナノカミ、なぜ復活を!？」

関西呪術協会本体は異界化しているのでダメージはないだろうけど、あのまま実体化すれば、京都は火の海だ。

どうしてこんなことになったのだ、と絶望している老人たちはさておき、若者は動きが早かった。

直ぐに装備をそろえ、立ち上がる。

横島も内心悔し涙を流しながら立ち上がった。

あわせるように、横島霊能事務所の面々が立ち上がる。

「タマモは本部のカバー、愛子は異界の維持。」

「わかったわ」

「あとは全員で叩きにいくぞ!！」

「「「「「おお!！」「「「「」

もちろん、事務所の人間全員で、と考えていた横島だったが、なぜかそこにはバカブラックやハルナ達までやってきていた。

「なんで？」

「ノリ」

まあいいか、と諦めた横島。

「とりあえず、ここで否定しても何だからいうけど、俺たちはGS
だけど、魔法は存在します」

そういいながら、横島は魔法の矢を20本ほど発射した。
その先にいた白髪の少年は、穩行呪式ごと吹っ飛ばされる。
転移も移し身の移動もできない状態で。

「で、その魔法って奴はGSの世界もかくやって程・・・」

顕在した光の剣が、背後にのばされた。

そこにはボロボロになった白髪の少年が現れた。

「血なまぐさいんだよー!!」

目にも留まらない速度で踏み込んだ横島は、白髪の少年を48分
割にする。

カードローンも真っ青な光景に血の気の引いた少女達だったが、
全く現実味を感じなかった。

そう、少年から血の一滴も流れていなかったからだ。

分割された少年は、地面の落ちる前に蒸発した。

「さ、これが魔法使いの世界だ。君たちには三つの選択がある」

両手を広げた横島に、三人の白髪の少年が切りかかったが、全く

刃が届かなかった。

かるで円柱の柱に切りかかっているかのようだった。

しばらく切りかかっていた少年だったが、急に方向を変えて少女達に向かった。

向かったのだが、見えない壁に阻まれたかのように動けなくなった。

行くも引くもできない状態、まさに生殺しの状態で放置された少年にも目を向けず、横島は少女達に選択の範囲と返答期限は学園に着くまでと穏やかにはなす横島は、実に大人の態度であり、高校生とは思えないほど頼れる存在だった。

少女達の心は大きく揺れた。

もちろん、途中で幻覚横島にすり替わっていたからなのだが。

では、実体横島はどこにいるかへ行えば、苦々しく光の巨人を見上げていた。

隣では「オラ、わくわくしてきたゾ」と言う風に見上げる少女と少年を配して。

もちろん、幼女の方は極めて実力面での裏打ちがあるのだが、少年の方は慢心と魔法を使えるという喜びに満ちあふれているだけだった。

まあ、そういうものなんだっけな。

ということに納得し、横島はエヴァをみた。

「とりあえず、満足するまでネギに遊ばせて、そのあとで決着付けてくれ」

「ふむ、なるほどな。私の全力ならば一撃だしな」

「え・・・、エヴァンジェリンさん、そんなすごい攻撃があるんですか？」

「魔法だけでもそうだがな、私のこれはもっとすごいぞ？」

そついいながらエヴァが取り出した仮契約カードを見て目を輝かせるネギ。

「とうか、ネギはじつのところ現実逃避中だった。」

なにしろ目の前の巨人に、自分の魔法が通じるだなんて思っていない。

しかし何もしないでいるのもイヤだったのでついてきたのだが、これがもう、まったく何をしていたかわからないぐらいに実力に差がありすぎた。

無茶苦茶だったが、なぜか横島の隣にいと肩の力が抜けた。

だから、彼のいう無茶苦茶を試みることにした。

「ふむ、雷系最大呪文4発、風系最大呪文5発か。さすがスプリングフィールドといったところか？」

魔力切れで倒れたネギの看病を茶々丸にまかせ、エヴァはアーティファクトを召還した。

瞬間、少女だった見た目は成人女性のそれになり、続いて呼び出された魔法の筭を握りしめる。

「お、ファイヤーフォックスじゃねーか」

「ふふ、今一番のお気に入りだ。」

そついいながら、彼女筭に腰を乗せ空を舞う。

数々の魔具霊具を大量に使い、そして大いに満足した彼女は氷系最大呪文で光の巨人を砕いた。

そして霊的な残滓は横島の手によって、完全に浄化された。

いまだ神世の時代から封じられてきた大神は、ようやく神の座に戻ることができたのであった。

きらめく霊体の昇天は遠く関東でも観測され、励起した世界樹も煌めいたという。

これが、まさかの「周期ずれ」を起こすとは、誰も気づいていなかった。

いや、唯一、その周期ずれに気づき準備を始めたものがある。

超鈴音、彼女は感じ、そしてかんがえていた。

自らが知る道筋とは全く違う運命をたどる世界と、その原因について。

あり得ないほど解放された神秘、届くほど近い存在の神魔、自分が思い描いたままに神秘が公開されているはずなのに、ありがちな不幸とありがちな問題が存在していた。

戦争も、闘争も、争いも、差別も、なにもかも。

利己的な人間が行う浅ましい悪事のレベルが、今の方が高いともいえる。

これほどまでに、ここまでの、こんなにまで自らの行いが影響するものなのか、と絶望に身を震わせた。

バタフライ効果などという甘いものではなかった。

求めたものの大きさとその代償の大きさがつりあうことなどまれなことなのだ、人生最大の賭の中で実感してしまった。

もう見知った未来には帰れない。

しかし、この変わってしまった過去をそのままにもできなかった。どうにかする、それ以外の言葉が生まれない。

天才と呼ばれた彼女であっても、今を説明できる言葉がなかったから。

超の見上げる空は光輝いていた。
それは希望の光というものではなかったのが、心残りであった。

(とはいえ、まさか公開されたオカルトにも秘匿があるとは思わな
かたネ)

麻帆良の歴史上なかった「GS事務所」横島霊能事務所。

これほどまでにおかしな存在を正常と認識してしまったのは学園
の認識阻害のせいだったが、自らもその内側に入っているとは思っ
てもいなかった。

しかし、その認識から一度はずれてみれば、これほど浮いた存在
はない。

秘匿された神秘を、まるで当たり前のように使っていて「ふつう」
と認識される存在、横島忠夫。

それなりにカモフラージュされているが、恐ろしいまでに改良さ
れた魔法、精霊魔法の新しいページを書き始めた異能者。

外見だけでは認識できない方法で発動されたそれは、無詠唱以上
の早さで詠唱呪文を越える威力を発揮する。

これだけの餌を与えられていて、何も調べる気を起こさせないと
は、学園の認識阻害は化け物か？

影響のなくなった時点で軽く調べたが、当たり障りのない情報し
かなかった。

GS資格取得自体は早かったが、その後の大事件に関わったおか
げで資格レベルがあがったとだけ記述されていた。

もちろんそんなわけがない。

表の世界でも有名な「現世利益優先」の美神令子が、そんな名前
だけの弟子を一人立ちさせるわけがなかった。

だから調べた、ありとあらゆる情報を、密かにバックアップした
茶々丸の情報も含めて。

すべてのデータが出そろったとき、超は突っ伏した。
なんだなんだ、このでたらめさは、と。

魔法世界の分だけで見ても、彼は一級討伐対象になってもおかしくないほどの常識を打ち壊した。

タイトルホルダーで読み上げれば、

「ラクラク、三分間精霊魔法発現」

「できる、上級魔法。」

「簡単、最上級魔法」

「やればできる、反発精霊のなだめかた」

「スローライフ。精霊魔法でアンチエイジング」

ほかにも猛烈な頭痛を覚えるタイトルが続いている。

正直に言えば、この情報の一部をゆがめて出版するだけで、魔法世界に御殿が建つだろう。

いや、傭兵隊でMM元老員をつぶすことも可能な金を生み出すことも可能だ。

・・・思わず妄想してしまった。

加えて横島忠夫の過去もすごかった。

収集した秘匿情報のさらに奥に存在した悲恋。

絶望と苦悩。

それでも生きろという遺言と決意。

まじめに男前すぎた。

道化としての生き方を貫きながら、それでも守ることをやめられない男の生き方は、無骨でそれでいて泣けた。

自分の不幸に酔いしれるつもりはないが、彼にこそ歴修正をしてほしいとすら思った。

思いはした。

しかし、その結果が今なのだと思います。

もしかすると、彼の不幸ですら自分が原因なのではないかとすら思ってしまった。

その思いは、信じられないほど心の闇を引き出す。

この世界に着て2年弱。

GS見習いから英雄となった男の激動時期と見事に合致してしま
う。

引き寄せられた世界なのか、はたまた、符合する不幸なのかはわ
からない。

だからこそ、彼女は気になっていた。

気になりすぎていた。

突き詰めた思いは思考を鈍化させる。

それ故に彼女は見過ごしてしまった。

大きな歴史変革における修正力というなの力を言及したレポート
の存在を。

これを見つけたときの彼女はさらなる絶望が待っている。

そう、さらなる絶望という名の光が。

第八話（後書き）

やっとクロスの真骨頂、世界融合によるブレとそれがわかる人、出現です。

頑張れ超！ わしは応援しておるぞ
・・・多分

12/11 ちょこつと修正

第九話（前書き）

第九話です

修学旅行編 終了です。

第九話

修学旅行最終日。

今までの鬱積をはらすように京都観光地を絨毯爆撃したエヴァンジェリンとその仲間達は、帰りの新幹線で意識を手放した。

早朝から始まった観光行軍は、事件で回れなかった観光地をダイジェストで回り、そのツケを事務所旅行に当てようと言うものだった。

ゆえに、非常に疲れた、と言うわけだった。

「忠夫、一週間だ。最低でも一週間。これはゆずれん」

横島達の車両まで着て、瞳を爛々とさせたエヴァンジェリンに、細かくうなづく横島であった。

ファイナルロリータと婚前旅行か！ と沸き上がる男共と、かわいい姿で凄みをきかせるギャップに萌える女子達には、ご馳走のような光景が麻帆良まで続くのであった。

一方、京都絨毯爆撃ツアーをするエヴァの背後でネギの護衛を受けていた雪乃丞は、観光行軍に参加せず、詠春との会談と自分の父の別荘を見学に行く集団に紛れていた。

雪乃丞自身、3A女子に人気で、こうやって紛れていても声をかけられたり話しかけられたりする。

亜子、円なども、ぶっきらぼうながら女子に気遣いをうまくする雪乃丞は気に入っており、彼女がいなければと、結構残念がっていたりする。

と言うか、彼女がいるのか、と盛り上がるハルナに対して自分の事のように風香が携帯の待ち受けを見せる。

そこにはお嬢様然としてほほえむ弓力オリ。

周辺が大いにどよめいた。
で、そこで……

「あれ、これって六道女子の制服じゃない？」

「あ、本当だ。じゃあ、本当にお嬢様？」

「ワーワーと盛り上がるなか、ぼそりとかたる雪乃丞。

「弓は、お嬢様と言うより、箱入りだな」

「うわあ！のろけだ！！」

「……鋼鉄の箱に入った、ICBMという箱入りだな」

「……え？」

なんとなく黙ってしまう周囲。

まさかの扱き下ろしかと思いきや、じつは「のろけ」なのだが、間違いなく伝わっていなかった。

「ね、ね、どうおもう？」「いやー、あれ、のろけ？」「いやいや、一応霊能課もあるし……。」

ぼそぼそと乙女会談をしている女子を後目に、雪乃丞はネギのガードを続ける。

到着した別荘を散策していた雪乃丞は一枚の写真を見つけた。
ネギによく似た少年が、周辺の男達を中心に腕を組んでいる。

よく見ればネギと同じ杖を持っている。

何か謂われのあるモデルなのだろうかと首をひねると、隣にやってきた詠春の頬がゆるんだ。

彼いうところ、その写真は若き頃のナギ＝スプリングフィールドとその仲間達だという。

そういう話題に直感力を発揮するネギは、即座に駆け寄り、その写真を見入っていた。

昔語りをするのは大人の特権だろう。

それを心地よい英雄談の様に聞きたがる子供がいるならばなおのこと。

冒険と活躍、その結果を聞き入った少年は瞳を輝かせていた。

だが、雪乃丞は再び写真を見て眉を寄せる。

なんとなく靈感に引っかかるのだ。

いや、気づいてしまった、写真の端に写っている、誰かにけ飛ばされて写真からはずれてしまった足先の存在が誰なのかを。

だから聞いてみた。

しかし、詠春の記憶には無かった。

どうやらヒト騒動がありそうだと、雪乃丞は苦笑いだった。

かえって翌日。

陶然として京都ショックを味わうエヴァはおいておいて、茶々丸プレゼンティス京都一週間旅行のプランは盛り上がっていた。

全部事務所持ちだと宣言したせい、割と高めの宿とか昼食とか夕食まで盛り込まれたプランができつつある。

もちろん、GWなんか今から予約できるはずもないので、秋あたりに紅葉を愛でつつ天橋立まで足を延ばしたりとか、いろいろと盛り上がっている。

盛り上がっているのはいいけど、なぜかシスターシャークティールや刀子までメンバーには行っているのはなぜだろうか、と基本的疑問を感じるのだが、「美人と仲良く」が座右の銘である横島は、その疑問を忘れることにした。

とりあえず、これだけの人間が一週間休めるだけの理由が必要なので、今から交代やら代替えやらを引き受け始める横島達だった。

京都わくわくバブルプランに一区切りがついたところで、来客があった。

大河内アキラ、雪広あやか、綾瀬ユエ、村上夏美、ゆーなぎキッド（W）、エロメガネ（爆）であった。

彼女たちは、この修学旅行で神秘に出会い、そして秘匿された方の魔法を知ってしまったのだ。

知られたのは横島なので、まったく処罰できないのだが、それはそれということで、事情説明と決断までのモラトリアムを幻覚横島が引き受けた。

自分が思う誰かの姿を見せる幻覚は、それぞれにとって理想と思わせる大人を演じさせた。

その最大公約数と、いまの子供っぽい横島とのギャップに彼女たちは苦しみつつ、こういうところにやられたんだなと周囲の女たちを見回した。

で、結論は、と急ごうとする少女たちを制止して、横島は茶々丸にお茶を出してもらった。

一息入れつつおいしいお茶に感動する少女たちだったが、それに横島は言葉をかぶせる。

「君たちのみた神秘は、このお茶の味みたいなものだ」と。

ほんのちよつと手を伸ばせば届くところにある、当たり前前何か自分たちの知らない知識にうらづけされた、ほんのちよつと違う常識やしきたり。

知っている人間からすれば、驚くほど簡単で当たり前前の日常。

でも、知ってしまえば二度とは戻れない終わり無き道。

そこに一步踏み出すつもりなら進めばいい。

戻りたいと願うなら、全力で戻してみせる。

にこやかな笑みは、先日の夜の笑みとは違いつつも、みてみたか

った笑顔だという事に気づいた少女たちだった。

お茶の後、ケーキまで舌鼓を打ってから、少女たちは決断を口にした。

秘匿された方とされてないほう、双方の道に進むことを。

目を向く魔法先生たちであったが、高音や愛衣はニコヤカにほえんでいた。

「そ、そ、それで、訓練はいつから!？」

意気込むユエに困った顔の横島。

「も、もしかして、試験とか適性とか問題アルですか!？」

いやいやと手を振る横島と事務所の全員。

では何が問題かというと……。

「簡単すぎるんだよ、横島が修行つけると」

雪乃丞の一言に首をひねるユエ。

基本、秘匿されている方の魔法を勉強し、実技に至るまで2000時間の修行が必要といわれている。

一日八時間を勉強して、実技に至るまで約一月かかる計算だ。

実際はそれに専念できるわけではないので、半年は必要だろう。

が、横島はその壁を飛び越える。

わずか一週間ほどで基本魔法を拾得させてしまうのだ。

その技は、ほぼ魔法関係者にも秘匿とされている。

「なぜですか？」

「綾瀬、おまえなら、読むだけで完全に頭に入り理解できる教科書があつたらどうする?」

その一言で、言わんとしていることが理解できる彼女も彼女だが、その希少性にぶち当たった自分の幸運に感謝した。

「あとさ、エヴァちゃんが使ってた、あの、アーティファクトってなに?」

ユウナの一言で、うなづく少女たち。

答えたのは刀子であった。

体液交換による主従関係の契約。

その際に呼び出せるようになる魔法道具。

本人の特性や主の特性に見合った何かが生まれるというものだった。

「へえ、で、みんなもってるの?」

アキラのことばに、頬を赤らめながら魔法先生以外の女子がカードを出した。

わりと際どい衣装のものばかりであったので、たぶん主となるヒトの趣味だろう事が伺える。

・・・そう、伺える。

じつと横島に視線が集中していた。

「そのお、やはり、契約しなければなりませんの? 横島さんと?」

「あー、魔法関係者やからって契約の必要はないで。せやけど、契約したらあかんちゅうわけでもない。」

うんうんとうなずいた後で、あやかの耳に横島がささやいた。

「・・・子供先生との仮契約、こーでいねーとしたるか？」

真っ赤になつたあやか、その場でダウン。

数分の後に再起動し、どこから出したかジェラルミンケース。

「い、い、いくらだせがばいいんおですのお！？」

ヒト箱、いいえ三箱は必須ですわあ！！とか叫んでいるあやかを千鶴が黙らせて、雪広財閥プレゼンツで京都観光旅行を押さえてくれるだけでいいというと、感動と感激で涙を流すお嬢様。

「結婚式には、結婚式には必ず皆さんをお呼びします！！ 今日最高の日ですわ！！ 本日は財閥指定休日になります！！」

すでにそこまで行ってしまったらしい。

テンパってるあやかを放置しつつ、ネギを呼び出したり説明の続きをしたり、罨にはまったネギをあやかに助け出せようとしてたり、ハプニングを演出してキスさせたり、飛び入りでハルナまでネギと契約したり、10万オコジョドルをせしめたり、明日菜にはれて横島がボコボコにされたり。

旅行翌日はそんな時間の中すぎていったのだった。

そんな騒ぎに参加できなかったタマモと魔鈴は血の涙を流して悔しかった。

やはり同じ様な時間を過ごした男女は似るものなのかもしれない。

仕事前の夕食会。

結構恒例となっていたが、実は参加者が増えている。

新規参加組が、アキラ、ユエ、夏美、ユーナであった。

実際のところは、あやかがネギの従者となった時点で強引な部屋替えが行われ、ネギ保護者の明日菜と従者あやか、そしてネギが一部屋となったのだ。

で、一人減った千鶴や夏美の部屋にコノカはいり、割と順調に横島従者部屋になった。

いや、夏美自身は従者契約していないのだが、千鶴が「時間の問題でしょ、ふふふ」と笑うので、間違いないという見解になったらしい。

で、三人とも料理はできるのだが、それなら一緒にあそこに行きましょうと言うことになり、堂々と夕食会を開いていた。

で、ユーナは部活帰りにちょうどいいという話であり、ユエは意外に博学な知識を持つ横島や、古代魔法の復活を目指している魔鈴というご馳走を前にして我慢できず、ちょこちょこ遊びに来る生活になっていた。

図書館島探検部でも一緒のコノカの存在も居やすくしており、魔法を知らぬとしても通っていたかもしれないと思うユエであった。

「・・・そうですか、そんなに怪異が居るですか」

「まあねえ、ここはほら、怪しげな餌であふれてるから」

「エサですか？」

「うん。図書館とか封印校舎とか幽霊学区とか」

「・・・図書館島以外初耳な件について、一層の説明を。」

「あちゃー、これって秘密だっけ？」

まずかったかなーと、高音の方を見たが、怪訝そうな顔で見つめ返される。

「・・・横島さん、私たちも知らない話ですわよ？」
「え？」

あれ、機密レベルに差があるのかな？ と偶々来ていたシスター
シャークティーを見たが、こちらも怪訝そう。

「・・・横島君、魔法先生でも知らない話を知っているってどうい
うことなの？」
「ええ？」

思わず驚く横島だったが、視線の先には小夜ちゃん

「えっと、その、けっこう長いこと幽霊していたんで、詳しいんで
すよ？ えへ」

恐ろしい秘匿破壊。

彼女の頭の中にどれだけヤバい話が詰まっているのかが知りたい
人々多数であった。

「ま、まあ、そのへんは、ほら、秘匿秘匿」

「こんだけ聞いちまったんだから、いつか漏れるわな」

「・・・えへ」

「ええい、忠夫。きさまがやって、きもいわ、馬鹿者が」

仕事前のじゃれあいとしては心休まる光景なのだが、流血まで至
っていることについてアキラは驚いているようだった。

そして一分もしないうちに復活した横島をみて、とりあえず疑問
を忘れて気にしないことにしたのだった。

夜の仕事と昼間のGSと学生という非常に恐ろしいほどの忙しさ

を見せる横島たちであったが、これに魔鈴のところのバイトや修行まで加わるとどうしようもないので、霊力はさっさと開花させ、魔法も基本的な部分は焼き付けることにした。

あとはマニアなユエと茶々丸でガンガンカリキュラムを作っていくと期待したところ、本気でそういう方向性になった。

図書館島探検部でも、いままで見逃していた本の多くが魔力なしでは読めないものばかりだったとかで、一階から探査し直したと喜びに目を輝かせていた。

コノカもコノカで、実践部分は焼き付けられていたので技術部分の勉強が始まり、治療や治療が向いている事実は今更気づいたくらいだった。

「早期修得の弊害がこれだな。」

「せやけど、両方できるようになるのはいいことやで。」

「・・・そうかもしれないがな。」

「コノカちゃんの治療のサンプルゲットしたけど、いる？」

「・・・おまえはあくどいな・・・。」

治療術の効率化を研究して、さらには解呪や解毒まで絞り込んだところで、さらに効率化をする。

最低でも通常威力の魔法が無詠唱で行えるところまで絞る必要があるとエヴァは語る。

なるほど、そういうものか、と感心しているエヴァのログハウスの中へ、久しぶりのタカミチが登場した。

なぜか見知らぬおっさんを連れて。

頭全体がオールバックなのだが、四方八方にピンピン髪の毛がたっているオッサン。

彼をみてエヴァは顔をしかめる。

「メガロメセンブリアの鬼教官が、何の用だ？」

吐き捨てる様に言うエヴァであったが、相手は何も感じていないかのように笑う。

「いやいや、この才能無しに魔法を仕込んだ驚異的教官が居るって聞いてな、あやかりてーってんできたつうわけだ、吸血姫」

「は、ご苦労なことだな」

そういいながら、殺す視線でタカミチをにらむエヴァ。

タカミチも苦笑い。真っ青になりながら。

「まあ、一応、本国にや知られちゃいねーよ。おれも休暇中のレクリエーションで聞いた話だしな。」

「・・・リカード殿。旧世界の戦場はあなたのバカンスではありません」

それを聞いた横島は全力で視線を逸らした。

「で、その究極神教官つうのは、だーれーかーなー？」

つかつかと近づいてきたオッサンは、横島の顔ほどもある手で肩をたたく。

知っているのだろう、分かっているのだろう。

「し、し、しらないなあーぼくわあ〜」

「ふーん、そうなのかあ〜しらないのか〜」ぼく「は〜」

ふつう、こういう言い方をすれば、男のおの字でも担いでいれば

気分を害するものだが、横島はにこやかな笑顔で答えた。

「ええ、知らないんですよ」

が、だめだった。

おっさんの目がいつていた。

『勝負しろや、おら』と。

おっさんと横島のガチバトルは、魔法球時間で三日間ほど続き、倒しても倒しても平気のへいざで完全復活する横島を「麻帆良の不死兵」と誉めたたえたそうだ。

そんな横島と戦ってすつきりしたオッサンは、ネギに絡んでガンガン鍛え、さらには横島トラップゾーンを魔法無しで突き抜けてゴール一歩手前まで行くという快拳をなし、一体何をしに来たのか分からないまま去っていった。

手合わせをしたのは横島以外だとガンドル・ヒゲグラ・セルヒコであったが、全く歯が立たなかつたらしい。

相性があるしな、と笑っていたが、実は隠れて雪乃丞と対戦し、ダブルノックダウンに陥っている。

横島以外でダブルノックダウンは初めてだと笑う雪乃丞は無駄に格好よかつたとの横島の話。

「リカード元提督……。なんでこの時期にこの場所にいるネ？」

メガロメセンブリアの元老員の一人であり、オスティアの元提督、
主席外交官がなぜこの場にいるのか？

たしかに麻帆良はメガロセンブティア直営だ。

だからといって主席外交官が遊びに来る場所ではない。

鬼教官として経験不足のネギを育てに来たという面もあるだろう、
不穏な動きの多い麻帆良の監視に来たという面もあるだろう。

が、説得力に欠くといわざるを得ない。

そんな役目にはもつと向いている人間が居るのだから。

なのに彼が来た。

それは必ず意味のあることなのだろうと考えると、一人だけその
予定調和に入っていない人間が居る。

横島忠夫。

再び浮かび上がるキーパーソン。

これはどうにもならない。

苛立ちとともに一つ思いつく。

彼を抱き込んではどうか、と。

金でも女でもない一つの権利。

数年前に戻る事ができる権利。

彼の立場でこれに心動かされないわけがない。

その考えがすごくいい考えだと思えるほど彼女は追いつめられて
いた。

超鈴音、天才であるが故に見落とした穴に飲まれようとしている
少女は暗くほほえんでいた。

魔法先生や魔法生徒が一堂に会する世界樹前広場。

一堂に会したその存在で畏怖を感じる、というのが予定だったが、予期せぬ鬼教官の到来に浮き足立った魔法先生と魔法生徒が手合わせに集まり、全く流れるままに流されて魔法先生の存在がネギに伝わってしまった。

加えていえば、現在一大勢力となりつつある横島霊能事務所の参加メンバーをみると、魔法先生は何となく華やかさにかけるように見えたりなんかするのがお約束あるう。

刹那や真名も友人が多い横島事務所側になっているので、ネギとしてもそちら側に立っていたりする。

みる人間にとっては勝ち組である横島だったが、実は結構困っていた。

調子の乗って助霊助手を増やしたももんで、給料を払うのに四苦八苦していたのだ。

横島自身は霊具を必要としないし、霊符だって自分で作ってしまうので問題ないが、除霊助手として雇っているからには其れなりの装備はそろえてあげたいし、維持だてしたいのだ。

加えて、何も仕事がなくても待機中の時給はかかるし、それなりに人件費がかさむのだ。

ここにきて、人件費をケチった美神気持ちが少しだけ分かったが、そこまでだ。

これで生活をしている訳ではない女の子ばかりだが、だからといって無給では横島の過去が許さない。

通常の霊能助手並の時給を渡したい横島にとって、其れは意地だった。

むろん、そんなやせ我慢は知っているコノカたちは、無理をしている横島を其れなりにフォローしているのだが、その心使いがうれ

しくて頑張ってしまうというスパイラルはプラスなのかマイナスなのか、判断が付かないところだろう。

そんな集まりの中、雪広あやかは胸を張っていた。

かつての英雄の愛息、ネギ「スプリングフィールドの従者でございます、というわけだ。

もちろん、第一従者はのどかに譲っているが、アーティファクトの性格上、ネギの背中を守るのは自分であり、共に立ち続けるのも自分であることを確信していた。

悪くいえば防衛専門のアーティファクトだが、防御治癒障地構築を一気に行える性能は間違いなくネギのためになると信じられた。

だから、とあやかは胸を張る。

どこからでもかかってきなさい！と。

「なあ、雪広はなにまえにでてるんだ？」

なんとなく、イヤなものを見るようにしている横島が隣にいる明日菜に問うと、明日菜も疲れ気味に答える。

「あ？ああ。勘違いしてんのよ、いいんちよ」

「なにを？」

「この集まりはネギの試しの場で、これをくぐり抜ければ心のパートナーになれるって」

「誰情報だよ、それ」

「朝倉」

「・・・ちよつとシメとけや、うん」

「最近調子くれてるし、やっぱシメとくわ」

心温まる会話で朝倉和美の罪状は明らかとなり、執行書にサインが描かれた。

朝倉和美の魂よ、天に抱かれて消え去れ。

「で、さ、横島さん」

「ん？」

「みんな、・・・そのお、仮契約したの？」

視線を逸らした横島だったが、アキラ、ユエ、ユーナ共にカードを見せた。

しゃがみ込んで「orz」状態の横島は「わいはロリちゃうねん」とつぶやいていたが、転校当初に比べてずいぶんと力無いものだったという。

じつは隠れてハルナもネギと契約していたのだが、本日修羅場で未参加。

第九話（後書き）

第二期 横島ハーレムです。

A F情報は以下のとおり。

13 ばてすと猫神の瞳（ミイ） ゆうな

・暗所、明所関わらず視界を確保できる。

・格闘射撃補正+12レベル

・体術、体力補正+12レベル

・当たり時攻撃力補正+5レベル

・幼子、子供を守る際、体力、体術、霊力、魔力、全パラメーター
EXへ変更。

・全EX時権能：霊刃爪（属性追加可能）

短距離転移（属性追加可能）

霊波砲（属性追加可能）

・文珠一個で横島との同期合体が可能

14十二の神の守護姫（冥子） アキラ

・12神将と呼ばれる式神の力を、自身で発揮できる。

・式神の力に属性を追加して効果を追加可能。

・霊力+1000マイト

・自動防御可能

・全能力を、一体の式神へ集約可能。

・文珠による追加効力合成可能

15全能なる知識の体現者（マリア） ゆえ

・子供サイズのマリアの召還。

- ・マリアのデータベースに直結しており、数百年にわたる魔法知識・魔道知識・オカルト知識を得ることができる。
- ・茶々丸とリンクすることでアクセス不能なまほネットへのリンクも可能。
- ・魔法消費軽減。電力でまかなう際、フルチャージで一万円分ほどかかる。（文珠動力化も可能）
- ・戦闘力は人間程度。オプションパーツは任意で追加可能だが、カオス以外にはわからない。
- ・文珠による追加効力合成可能

とりあえず計画しているのはあと3人です。

これでAFのネタが切れますw
つつか、後の三人もギリギリなんですよねw

追記：12/2 16時現在、PV102 / 433アクセス/ユニ
ーク12 / 845人

やべー、蝶嬉しい・・・。

12/11 ちょこつと修正

第十話（前書き）

第十話です

学園祭＋準備編の開始です

第十話

きゃいきゃいとちいさくアーティファクト自慢を会話している従者たちだったが、いつの間にか関係者会議が始まっていた。

数歩前に出た横島、雪乃丞、ネギ。

そして魔法生徒である高音と愛衣が続く。

魔法、そして秘匿、さらには世界樹とその効能。

告白成功率120%の真実は、従者たちですらどよめく。

「とはいえ、成功してもその先が続かんし、あんまり意味はないのだが、悪用する人間もおるからな」

というわけで、告白阻止のために魔法生徒や魔法先生がローテーションを組んで仕事をするのだという。

「うちはどうします？」

「一応、契約外出動に該当するぞい？」

「・・・ちよつとずるいですねえ？」

「そ、そんなことはないんじゃないかのお？」

「將軍、ちよつとohanasishimashyouか・・・？」

心温まる会話の末に、新たな契約が結ばれた。

どんな内容かは不明だが、契約書の写しをみた美神が「横島よくやった、師匠はうれしい!!」と叫んだぐらいだから、よほどうまくやったのだろう。

「あんまりおじいちゃんをいじめんといてなあ？」

「そんな事ないって、よく見てみて。ぜんぜんおかしくないでしょ？」

契約後にやってきたコノカに契約書を見せると、納得顔になった。よかったよかったとその場を離れるコノカと刹那だったが、後からのぞいたエヴァが吹き出した。

「忠夫、この該当事項1211は、ちと可哀想だぞ？」

「え？ふつつの、本当にふつつのGS契約だよ？」

「・・・本当に悪党だな、おまえ」

「悪の魔法使いに誉められて光栄だな」

カカと笑う横島忠夫。

該当事項に関していえば、エヴァがアーティファクトを使えば使っただけで契約金額が上がり上がるようになっていくのだから。

市場価格の最低価格で（中古価格でも）いい契約になっているが、エヴァの呼び出す魔具霊具の価格は、最低価格でも「とんでもない」値段なのだ。

単に具現化しているだけなので出費はゼロなのに、だ。

学園側が使用確認したものだけでもいいという話に落としたとしても、学園の予算が尽きることを請け合いだ。

無論、金を引き剥がすわけではなく、交渉材料の一枚にしようというのだから、すでに勝利が確定しているというのも面白すぎる。

そんな横島を見て、エヴァは胸のうちで囁く。

実に気持ちのいい悪党だな、忠夫。

おまえは私の伴侶にふさわしい「小悪」という悪を持っている。

命つきるまで側に置いてやるから、心の底から感謝しろよ？と。

高校生、横島忠夫。

この立場は風前の灯火だった。

授業には出ているし、テストだって結構いい点を取っている。

前の学校の人間がみれば……

いややめよう、それはさておき、だ。

麻帆良祭りで何をするという話になったとき、バカが一言いった。

「映画やんね？ ほれ、横島ってスタント経験あるじゃん？」

「……え？」「」「」

映画バカの話は不可解だったが、なぜかあの香港映画で主役アツプ以外の演技を横島がしていることがばれていた。

アクション映画を撮影して、主役部分を演技してとか考えていた映画バカだったが、其れが通るのは前の学校の横島だけだった。

なにしろ、この麻帆良の横島は女子に人気があるのだから。いろんな意味で。

「うそうそ、なんでおしえてくれなかったの？」

「いやだって、監督が急にイメージに合わない顔だからって、アツプの差し替えがはいつてさ、恥ずかしいじゃない？」

「えー！ あの主役より横島君の方が格好いいって……！」

実にうれしいことをいわれた横島だったが、もちろんお世辞だと感じているので有頂天にはなれなかった。

タマモも実は初耳だったので愛子や雪乃丞に聞いてみると、そのとおりだと答えられた。

雪乃丞はちよつとした扮装ででていたのだが、当時の術の構成が甘かった自分をみると恥ずかしいので言わなかったのだそうだ。

「でも、映画っていいかもね」

「なんで？」

「だって、当日、結構時間があくから」

「あ、それいいわね！！」

それなりに忙しい愛子とタマモは、映画プランに大賛成だった。

もちろん、其れが悲劇と喜劇の幕開けだったなんて誰も思いもしなかったのだけれど。

とりあえず、飛び跳ねてアクションができて、どうにでもなる横島は主役クラスになることになった。

加えて、バカみたいに器用で如才無く何でもできる男、横島は小道具や大道具の指導までしていた。

何しろこの男、ノコと金槌を持たせると何でもつくってしまうのだ。

原材料1000円ほどで、黒板をロココ調にした瞬間、男子はメイド喫茶に切り替えようとか女子は執事喫茶にしようとか大騒ぎになった。

まあ、それならば協力しないと言う横島の金言でおじゃんになったが。

それはさておき、女優選定ももめた。

麻帆良の一教室だけあって、無駄に美少女が多いため選考しきれないのだ。

もちろん頭三つほど抜けているタマモは女優確定だが、彼女自身ヒロインはいやよ、と宣言したため、ヒロイン選定が燃えてしまっ

ただ。

連日の会議で炎上し、最後には横島に選ばせようかとすら話があったほどだった。

で、なぜ主役辞退か横島が聞いてみたところ、彼女は苦々しく顔をゆがめる。

「美神達が見に来たら何を言われるやら・・・。」

なるほど納得、大納得だった。

そんな風にウンウンうなずいているところで、大きな問題に気づいた、気づいてしまった、とうとう理解してしまった。

そう学園祭に、みんながくるのだ。

「みんな」が。

「タマモ、俺、死んだかも・・・。」

「リアルタイムで分かるから、死んだら線香の一つでも上げてあげるわ。」

死亡などで縁が切れた仮契約のカードはその形態が変わる。そのことを言っているのだろう。

「ま、死にそうになったら言ってね。とりあえず助けてあげた後に考えるから。」

何となく病んだ視線の愛子を見て、かなり背中が寒くなった横島だった。

ともあれ、映画の内容も主演者達も、機材も何もかも決まり、撮影快調となった一週間目、事件が起きた。

学生映画とは思えないSFXや特殊効果で有名になり、撮影現場

も取材がくるようになった横島のクラスに、どうにも学生っぽくない人間が紛れ込んでいたのだ。

だれだ、とささやき会う男子だったが、鼻の利く女子が「もしかして……」と囁ききあっていた。

だれだろう、と首をひねっていたが、今日の分が終わったと言うところで怪しげな人間が近づきささやいた。

「よう、よこっち。学生映画とはいえ主役ちゅうのは流石やな？」
「……!!」

驚き声を上げようとした横島を押さえる男。

「ちと遊びにきたんや。ええやろ？」

コクコクとうなづく横島に気をよくした男は、横島の肩を組んで力かと笑った。

男の名は堂本銀一。

横島忠夫の幼なじみの一人であり数少ない心許せる友。

そして、芸名：近畿剛一。

当代きつてのアイドル俳優であった。

事務所にはいると、まず愛衣が声を上げた。

続いて愛子、魔鈴が声を上げてキヤイキヤイ喜んだ。

全く騒いでいないのはタマモ、高音、楓、クーフエイであった。

「愛衣、だれですか？」

「お……おねえさま、ごぞんじありませんの!？」

「知りませんわ。」

「・・・この方は、映画・舞台・歌手としても活躍なさってる近畿剛一さんですよ!」

「そうですの?」

まるつきり興味がないようだった。

「へー、ゆうめいじんだったんだ。」

「どこかで見ることがあったと思うっていたのでござるが、やっと分かり申した」

「強そうじゃないアルね」

実に張り合いのない環境だが、近畿、いや銀一はずいぶんとうれしそうだった。

「さすがよこつちの事務所やな。羽伸ばせそうや」

「ん? どういうこつちや?」

「あんな、今度映画の第二段やるんやけど、役作りができる環境がナインや。せやから親友を頼ってやな・・・。」

「まてまてまて、そういうことははじめにゆうてくれんと」

「美神さんがな、『最近タマモの報告があてにならないの。ちょっと目を光らせてきてくれれば、協会からいい話がいくと思うわ』って、ゆうてくれたんや」

それは流れるような土下座だった。

洗練されていて、それでいて神々しいまでの土下座。

横島忠夫は完全に折れた。

つつか白旗状態になったのだった。

「あ、それとやな、伊達くんがいいんかな? 君の彼女から『最近電話が少ないと思いませんか?』その原因がどこかにあるようにで

したらメールしてくださいませんか？ ええもちろん、六女の撮影協力はとりまとめさせていただきますわ』つうとつたで？」

伊達雪乃丞、心を込めた土下座は勇ましくも往々しいものだったと横島は語った。

さすがライバル、と共に認めあう土下座であった。

響きあう土下座の魂は麻帆良で神の座にまで上り詰めるのかもしれないと誰かが思った。

恒例の夕食会で当然のごとく質問が飛び交う。

もちろん、こんなおいしい状況を逃さない朝倉和美は、様々な質問をとばして見せ、周囲に満足されていた。

が、実のところ、最近扱いの悪い横島への意趣返しを込めて子供の頃の横島なんて話をしたところ、大失敗であった。

なにしろ本人達は隠しているつもりだが、横島に対してLIKE以上の好意を抱いているのだ。

関係ない人間からしれが砂吐き必至の話でも嬉々として聞きたがった。

仕事の時間になるまでの一時間ほど、朝倉は打ちのめされて倒れるかと思うような拷問に耐えきったのだった。

とりわけエヴァンジェリンの質問は巧妙で、まるで銀一が横島の恋人ではないのを確認する手段として会話をしているかのようだった。

巧妙な手法に感嘆を覚えたが、悔しいので今の会話をパルに売ろうと心に決めた朝倉だったが、それが朝倉の死亡フラグだとはこの時点で気づくことはなかった。

ともあれ、おいしいよこっちはなしをグチれた銀一と、レアな過去話を聞いた女子は一体感が生まれ、かなり仲良し状態になっていた。

これを見た横島はひどく嫉妬したのだが、嫉妬された事実を看取って彼女らは凄くうれしそうだったという。

朝倉情報千里をかける。

とはいえ、公表しすぎると横島からのお仕置きがあるものと分かっている彼女は、わりと単純な手法に頼る。

まず、秘匿会員用のメーリングリストへの投稿。
続いて特定会員へ細かな詳細情報。

加えて、部のデータベースへ詳細な人間関係も追加。

これで総合的に考えて分かった人間なら取材にいくだろうし、ファンだと言っただけなら撮影見学に行けばいいだけだと割り切った。

さらにいえば、公開方向は秘匿ものばかりなので、自分が特定されるはずもない、といいことばかりじゃない！

あはははは、と笑っていたのは朝だけだった。

次々と問い合わせが津波のように名指しで行われ、学園の掲示板にもガリガリ朝倉和美情報で転載されていた。

まずい、まずすぎる。

背筋が凍るほどの状況だった。

だれがそこまで追いつめてくるのか分からないけど、がっこうばっくれて逃げを打つ必要すら感じていた。

こうしている間も、もうすでに……

「よー、あさくらあ……」

「ぎゃぴ……!!!」

失神した朝倉をのぞき込むエヴァ。

先日の情報操作の際に朝倉の名前を使ったことを断るために声を

かけたのだが、いい感じで追いつめられていたらしい。

ハルナなどは自業自得つしょと笑っている。

たしかにいろいろと苦しめられているなと思いだし、そのまま放置することにしたえエヴァだったが、とりあえず事の真相をメモにして机に張り付けておいた。

悪の魔法使いもずいぶん丸くなったものだと自嘲するエヴァだった。

撮影快調、ギャラリー快調、飛び入り男優絶好調。

近畿剛一が横島の親友だったことはすでに知られており、次回作のための役作りのために麻帆良に滞在しているのは周知の事実だった。

加えて、横島が「浪速のペガサス」、雪乃丞が「ダテ・ザ・キラ」だと知られると、すでに飽和状態だったギャラリーがさらに増えてしまった。

女子なんかは「え、それなに？ おいしいの？」という反応だったが、男子は違った。

そう、浪速のペガサスと言えば、タミアカップ三年連続優勝という前人未踏の伝説を作り上げた男なのだから。

加えてダテ・ザ・キラといえば、制御不能とまで言われたプテラノドンX使い。

最強勇者とそのライバルがクラスメイトで映画を作っていると噂になればその効果は爆発的だった。

どんなクス脚本でも絶対観客でいっぱいと言われたわけだが、特殊効果やスタントが真に迫っていすぎて、警察出動まで発生することすでに三回。

最近では警官が常についているぐらいだった。

「学生映画の規模やないで？」

「……いわれてもなあ。」

まあ、それもこれも親友様のせいでもあるのだが、と横島は銀一をにらむが、全く通じていないようだった。

「横島、やべーぞ。ちよつと騒ぎすぎだつて『ヒゲグラ』が動き出した。」

「……ヒゲグラ？」

「見た目マフィア。声マフィア。実力マフィアのシチリアンだ。」
「それやったら、ずっとカメラ回しとついたらええやる？ そついうノンフィクションも組み込んだらええねん。学生映画やる？」

もちろん撮影班はのりのりだった。
相対する横島はげんなりだったが。

もちろん吹き替えはしたが、横島と神多羅木の対決は、実に絵になりすぎていて、脚本を大きく書き直したという本末転倒な事態になったのは笑える範囲だろう。

撮影も終了し、あとは声あてと編集作業となったため、男優女優はずいぶんと時間ができた。

そのため、いろいろとやっているGSっぽい仕事を見せてほしいと銀一が言った。

もちろんかまわない、ということで見聞きをしている浮遊霊をひつつかまえたり、悪霊になりそうな霊を浄化したり、暇そうな自縛霊の会話相手になったりと、まったくGSっぽくかんじないしことが続いていた。

「なーなーよこつち。ずばーっちゅうかどかーっちゅうか、ほれ、あの「飛行機」みたいな花道はニンか？」

「あほいいなや。こういう地道な積み重ねが、大きな事件を起こさせないそういうことなんやで？」

「・・・もしかして、わい、役作りまちごうてるかもしれん」

「ええんや、そっちのほうが派手やし、GSにあこがれるっちゅうヤツも増えるかもしれへん。せやけどな、駐在さんやホンカンさんがマモツトル日常も在るんや。そういうのは映画にむかへんけどな」

横島が横断歩道の少女、幽霊に手を振ると、彼女はうれしそうに駆け寄り横島に抱きしめられた。

見るもの全てを魅了するような笑顔で、少女は光になって消えた。

銀一は思う。

この一週間は無駄ではなかった、と。

事務所には怒られるかもしれないけど、GSという仕事の真実の一端を掴んだ気がしたから。

「よこつち、さんきゅーな。」

「ええよ、だちやる？」

さすがよこつち、おいしいなあー。

ということ、交際関係に関する報告書を書いた銀一は、いっさい手加減なしで報告していたのであった。

なにしろ銀一は横島の親友。

そう言うことに手加減はしない主義であった。

本番五日前にできあがった映画の試写会には、クラスメイト以外にも結構な人間が集まっていた。

事務所の人間もそうだが、強制的に参加させられた神多羅木教諭を始め、そのことを笑いにきた魔法先生各種と魔法生徒多数。

外にいる超一味は何をしているのか分からないが、盛大な試写会

となった。

一号試写の後、号泣の神多羅木教諭はそのまま逃げるように去った。

魔法先生や生徒も涙を流している。

やはり、秘匿された超能力とかそういう設定にしたのが共感を生んだらしい。

迫害されつつそれでも世界を守りたいだなんて設定は、ハート驚つかみだろう。

刀子さんからもお褒めの言葉を泣きぬれた声でもらっていた横島は、少し鼻息が荒かった。

万雷の拍手の後、二号試写会は入場誘導などの本番差ながらの練習を行いつつ上映したのだが、潜り込んだ朝倉やら春日に気を取られて、横島はあまり集中していなかった。

が、どうもかなり好評らしく、広報委員でも宣伝してくれる約束を取り付けた。

「つつか、講堂で上映しましょうよ、ね！」

「いやいや、予定いっぱいだよ？」

「終了式典中に流せばいいじゃないっすか！！！」

「おめーら、なんか興奮しすぎ」

どうどうと雪乃丞と二人で落ち着かせたが、朝倉どころか事なかれ主義の春日までがルチ將軍に掛け合つとか言い始めたのには驚いた二人だった。

「ま、感動はしかたないわよね」「そうねえ。まあ、ね」

妖弧と机妖怪はともに泣いていた。

そう言う内容だったのだ。

だから、シロや他の妖怪達にもリークした。

『横島主演で映画を作った。涙が止まらない感動』と

そのせいで起きた大混乱は、三界をあげたものになったことは間違いない、未来の歴史家もこの瞬間に歴史が動いたのだと証言したとかしないとか。

「いや、まじまじ。本気で感動して泣いて倒れるかと思った。」「ほんとうすね、準備さぼって見に行った甲斐あったすね」

自分のクラスに飛び込んだ朝倉と春日を迎えたのは、地も凍るような視線だったが、感動で震える二人には感じられなかった。

「ありや、DVD化して売るべきよね?」「ああ、それいいすね!!! 今から行って。。。」

「逃がすか!!!」

むんずと掴むはネギの保護者、神楽坂明日奈。

「ふふふ、ノルマはいっぱいあるんですよ」

ふんふんと、なぜか葱をふる千鶴は、横島事務所の主力従者。

二人の実力者に挟まれた朝倉&春日は涙ながらに準備に加わる。

「せやけど、このままやったら、ぜったいにまにあわん。」「せやな、このちゃん」

急激に距離を縮めたふたりは、幼い頃に戻ったかのようにほほえみあっていた。

「ふむ、さすがに難しいな。茶々丸、手配は？」

「はい、先ほど返答がありました。一時間ほどしたらくるそうです」「ん、わかった」

そういいながら、エヴァは雪広にささやくと、彼女の顔も明るくなった。

「みなさん朗報です。学園一のアーティファクト師が協力を申し出てくれました」

「・・・って、だれよ。いいんちよ」

「ふふふ、あなたもご存じの方ですわ、明日奈さん」

無造作に切る切る切る。

音もなく一気に一列に釘が並んでゆく。

まるでソコニアルノガ当たり前のように、塗装がされてゆく。

そしてできあがったものは、まるで高級家具のようだったり、十几年来存在しているかのような壁だったり、美術工芸店でおいているような日本刀だったり。

刀に至っては刹那ですらその手で持つまで本物だと疑いなかったという。

彼が取りかかった門は、見る見るうちにできあがってゆき、完成した瞬間から大理石製だと誰もが疑わなかった。

新田教諭ですら「雪広財閥によるテコ入れ」だと信じて疑わず、実際に自分で持つまで説教姿勢であった。

で、その制作者が「横島」だと知ると、急遽涙を流してバンバン肩をたたいて感想を流れるように。

三号試写に参加して、非常に感動したそう。

というか三号試写って聞いてないな、と思った横島だったが、宣伝になるしいいか、と思っただらしい。

第十話（後書き）

学園祭って、何だか憧れるネタですが、書いているうちに眩暈するほど多様性があって書ききれないのです。

逆に、横島による単一方向視点で書くと、かなり減量が出来ます。

つづか、空気にされているキャラの多いことTT

いろいろと修正しましちゃ・・・かみましたw

追記：作中で横島の言葉を「金言」と表現している部分があります
が、これは「上位の立場からの発言」「逆らえざる立場からの発言」として表現しています。本来の意味からは微妙にぶれています
が、スルーの方向性でお願いいたします

第十一話（前書き）

第十一話です

お祭りは準備が一番楽しい、そんなお話です

第十一話

みるみる大物ができてゆくと、小物小技に凝り始めるのが横島クオリティー。

怖さいっぱい心使い「いっぱい」のアイテムが溢れるように作り出される中、みんなの目が一点に注ぐ。

実にリアルで本当に動物から捕ってきたかのような「獣耳」。
犬各種、猫各種、狐、熊、などなどなど。

実際につけてみると、まるで自分の頭から生えているかのような見た目であった。

よく見れば、ナイロン線のような線がついている。

「あ、これな、これはこうして……」

背中の一部に張り付けたところ、意図せずピクピク動く猫耳。

おもわず萌え上がる周囲に気をよくして横島、全力運転で各バジョンを作り上げる。

それだけでは収まらず、鬼の角や牙などもリアルすぎて怖かったのだが、思わず聞いた朝倉。

「もしかして横島さん、本物って見たことある？」

「うん」

素直にみんな思った。

かれはびっくり箱のような男だと。

ともあれ、恐ろしいまでに完成度の高いお化け屋敷は、前夜祭に間に合い、プレオープンで失神者続出という新記録を打ち立てるこ
とになった。

ただ、その際……

「ル、ルチ將軍のルチ將軍の死体が、冷たかったんだ、絶対死んでるってあれ!!」

という謎の台詞があったとかなかったとか。

当初、教室内にレースカーテンでも張り巡らせておしまい計画でした。

女子校の雰囲気だけでいいじゃないか、という投げやりな提案が通ったのですが、その方針が変わったのは本番一週間前でした。

共学の教室に、ロココ調の黒板ありと噂になったのです。

聞いてみればなんと横島さんの教室で、その制作者も横島さんだとおっしゃるので、その技術について聞いたところ、話している目の前でもものすごいものが作られました。

そう、そんな質問をしている十分ぐらいの間で、割り箸製エヴァンジェリンさんのログハウスが出来上がっていたのです。

もちろん献上せよ!と叫ぶエヴァさんはおいておいて、同じく割り箸でネギ先生の杖を作り出したのを見て頭を下げました。

どうか、我がクラスの力になってください、と。

にこやかに笑って横島さんは引き受けて下さいました。

作業時間はひどく少ないのに、日に日に我がガラスの雰囲気が変わってゆきます。

なんととか、レースでリリカルでスールでホワイトな感じに。

教室の細部に意匠の凝らした細工が施されているうちはみんな笑っていたのですが、時計、スピーカー、テレビ、エアコンなどの見た目が、無駄に高級そうになってゆくのです。

掲示板、黒板、窓ガラスあたりに手が伸び始めた時点で変わってしまった娘が出始めました。

「ごきげんよう」

思わず言ってしまったというわけではなく、心から自然にでた言葉として。

それは野火のように広がり蔓延しました。すでにわたくしの口調の方が自然で、以前の方が異常に思えてしまう空間の出来上がりです。

背筋は伸ばし、スカートの裾を翻さずが乙女の嗜みだそうです。ええ、私は彼を甘く見ていましたわ。

本番間際で持ち込まれた年代ものの机の数々が、フリーマーケットで買ったいたいた廃材だなんて誰が信じるものですか。

ティーセットは手製？ クロスも手製？ なんですよ、この無駄に高いクオリティーは！？

さらに紅茶がおいしい！！

ああ、もう、なにがなんだかわかりませんわ……。

今年の学園門は大改修された。

某中学校のクラスにクオリティーで負けたからだと言う噂が流れており、その確認で訪れた人々はオープンを心待ちにしたという。

某金髪幼女は頭を抱えながら、

「気の弱い奴は近づくなよ、動けなくなるからな。あとプロも禁止だ。あれを見て本気で攻撃しないでいられる自信が私にもないと龍宮も言っていたいな」

と、煽っているんだか注意しているんだか微妙な発言をしていたりする。

それを聞いた魔法先生は拳って見に行ったらしいのだが、魔法封印のブレスレットを何度はずそうかと思っただかわからないと涙ながらに語ったという。

もちろん、それは未だこない未来の話。

横島が改修された学園門を見ながらうなずいていると、学園門制作者が集まってきて、次は負けなとか今度は一緒に作ろうとか言ってきた。

もちろんヤロウばかりだったので、適当に相手したのだが、その余裕に痺れて憧れた人間数名。

無駄に有名になりつつあった横島だった。

すでに映画館風の内装になった教室で授業を受けていると妙な気分になるな、というのは生徒ばかりの意見ではない。

授業を行う方も、先日の上映会の内容を思い出して涙ぐむ教師多数だったりするのだ。

それを見て、大々的に脚本の改修を行った人間も、撮影者も編集者も「グツ」とサインを送りあって喜んでた。

子供の評価はふつうだが、大人が涙を流してくれるという時点で彼らの学生映画は本物だといえるだろう。

たとえ身内しか見に来てくれなくても、それでも満足ができるみんなが思った瞬間だった。

結果を喜び合う、現時点でこんな風な教室は、実のところ皆無だったりする。

みんながみんな作業が当日まで引きずり、初日はプレオープンな

んてところもあつたりするのだ。

が、この教室に存在する、無駄に高性能な生徒のおかげで内装も設備も完璧になっており、あとは最終的な設備を取り付けておしまいになると言う状態だったこのクラスは、ある種の倦怠感に包まれていた。

映画はすでに撮影済み、上映反応も上々、会場練習も万全。

人事も天命もすでにあるじゆたいだったから。

そんな中、スーパー職人の需要は高く、様々なところに呼ばれていた。

演劇部の大道具小道具制作、ウルスラからの店内制作協力依頼、中等部女子からの制作手伝い依頼、教員からの出典物制作依頼等々細々と動くことが楽しい横島は、よばれるとほいほいってしまふのだが、実は結構やりすぎていた。

まるで実際の武器のような小道具が盗まれ、コンビ二強盗に使われたのだが、その場で逮捕。調べてみれば小道具が余りに本物ぽかったので・・・とか。

ウルスラの教室を小手先改装したところ、あんまりにも「お嬢様」な雰囲気当てられて、生徒がそれっぽくなってしまったとか。お化け屋敷の制作に参加したところ、余りにリアルなため、中身を知っている筈の生徒が泣き始めたとか。

で、未確認情報ながら、教員用のバザーで出されるはずだったクラフトシルバーで作ったアクセサリーの盗難が続出してるとか。

人騒がせなのは彼ではないのだが、彼が関わると明らかに事態が混乱するといういい例だろう。

ともあれ、彼自身は非常に頼れる存在なので、引く手あまたではあるが混乱は拡大していったのだった。

前夜祭はみんなで回ることにした横島。

事務所のみんなと、魔法関係のみんなと、従者のみんなと。

忙しい日々の中、夕食だけは結構みんな食べていたけれど、明日からはそれもバラバラになるだろう。

学園祭というのはそう言う時間なのだそうだ。

「こんなにも楽しい学園祭は久しぶりで、忠夫」

「お、そりゃ光栄だ。」

エヴァと手をつないだり、千鶴と腕を組んだり、コノカと刹那に挟まれたり。

夏美に射的で景品をあげたり、魔鈴さんにもあげたり、タマモがくじ引き不正を発見したり、愛子が飛びかかってきた男を飲み込んで青春洗脳したり。

茶々丸とも手をつないだり、酔っぱらった高音と愛衣に抱きつかれたり。

合流してきたユウナとアキラの抱きしめ攻撃に昇天しかけて、ユエの看病で目を覚ました。

なんだこの楽園。

いや、楽園とかそう言うんじゃない。

最後の晚餐なんだ、これ、うん。

ちゅっと頬をついばんだ小夜たんをみるまでもなく、これは最後に見る走馬燈に記録されてしかるべき楽園の記憶に違いない。

ああ、クーふえい、楓、今なら優しい気持ちだからいろいろお願い聞いちゃうよ〜

「老師、だったら、武道会と一緒にでるアル!!」

「うんいいよ〜」

って、え？

〈学園祭初日〉

朝から気が重かった、
何しろすでに死刑宣告がでているのだから。
まず第一。

『抜き打ちだとかわいそうだから、予告付きで業務視察に行つてあげる。10時に正面駅まできなさい。美神』
というメール。

第二に、すでに前日から弓さんがきていて、うちの事務所に泊まっていたりする。もちろん、雪乃丞とラブラブのためだ。

第三は……

「忠夫、そろそろ迎えに行くぞ?」

真祖の吸血姫さまが出迎えに同行する気満点なのだ。

スリーアウト確実なところで、茶々丸まで同行するというのだから、もうダメかもしれない。

深々とため息をついて、味方のはずのタマモを探したが、すでに姿をくらませた後。

くそ、危機意識は高けーな、無駄に！！

もちろん、現実逃避がいつまでも続くわけもなく、早々に待ち合わせ場所に行くと、・・・居ましたいました、人混みの中に動かない一団あり。

男連中が声をかけたたくても近寄れない女王様オーラを発散するスパー美人と、柔らかな印象なのに目を引きつけられるオーラを放つ純粹大和撫子系美少女と、そして銀髪赤メツシュ、パンクっぽい格好ながら元々持っている純粹さ純朴さが表にでていいる田舎っばい美少女。

全く、本当に変わらない。

そう思って手を挙げたとたん、シロがダツシュでやってきた。

「せんせー！ー！ー！！！！！！」

「いやー！ー！　こんなところじゃいやー！ー！ー！！」

シロ嘗めの嵐から抜け出すと、なぜかにこやかにほほえんで正面に立ち会うエヴァと美神。

なんだかすごい勢いで靈気がぶつかっているようだった。

「え、え、えつと・・・こちらは・・・」

「知ってるわよ、横島君。エヴァンジェリンⅡAⅡKⅡマクダウェル。真祖にして悪の魔法使い、だったわよね？」

「そうだよ、英雄の介添え人、美神令子」

びきつと空気がこおった

おキヌちゃんもシロも一歩離れて待避中。

「ま、余興はこの程度としよう」「そうね、丁稚をビビらせて満足したし」

「こんどは何の陰もない笑顔でほほえみ会う二人。」

「あ、あれ、これってどういうことっすか？」

「あのね、横島君。エヴァと私はすでに対面済みなのよ」

「・・・え？」

美神曰く、外にでれるようになって初めて訪れたのが美神令子除霊事務所なのだそうだ。

横島との関係を素直に告白し、仁義を通しにきたという。

エヴァ曰く自分はいわば愛人のようなものだが、本妻のいない今はどうしようもない。だから師匠筋に顔を出すのが礼儀だと思ったそうだ。

あまりの正面攻撃にアタフタとした美神だが、エヴァに自分と近しい何かを感じて、そのまま飲みに出かけたとか。

そんな中で、秘匿されている魔法のシステムやルールなどを聞いて興味を持ったので、結構頻繁に連絡を取り合っているとか。

「でね、横島君のアーティファクトっておもしろおかしいらしいじゃない？ ちょっと興味あるのよねー。」

「あ、私の能力ってアーティファクトがあるって本当ですか？」

「拙者はないんでござるか？」

至極当たり前になじんだエヴァと美神。

内心はしれないが、ずいぶんと近しい親友かのようにみえた横島だった。

「ねーねー、エヴァの魔法球で見せてよ、ねー。」

横島だった！！

抵抗むなしく魔法球。

横島のアーティファクトの性能をみて、激しく動揺する美神事務所一行。

シロなど啞然としつつも感動していた。

この能力で、某バトルモンガー少女版を飼い慣らしているんだけど、恐ろしいまでに従順になったよなーとか思う横島。

同じようにエヴァのアーティファクトをみてだだをこねる美神。

「ほしいほしい、これほしい~~~~~」

まあ欲しかろう。

なにしろ、美神がイメージされたアーティファクトなんだから。

「私自身がこんなに欲しいのに、なんでわたしにこれがないのよー
~~~~~！！！！」

現世利益が座右の美神、恐ろしいまでにポジティブな意見を発言。

「あ、じゃああたしが仮契約すれば……。」
「たぶん、魂の結晶か、メフィスト系になると思いつすよ？」
「……ぐ、あたしもそういう気がするわ。」
「じゃあ、わたしは……。」
「拙者も拙者も……！」

はいはいと諸手をあげる事務所員をみてため息をつく美神。

「一応、やめといたほうがいいわよ？ 魔力と霊力って反発するから、慣れないとしばらく霊力なしだし」
「ぐ……。」

さすがにそれは困るとの二人だったけど、内心「例」の技術があれば、と思っ言葉を止めた。

エヴァと美神さんがすごい勢いでみていたから。

そうか、美神さんも知ってるのか。
だから仮契約とか行ってたんだ。
恐ろしい人だ。

「とはいえ、そっちの魔法は怖いわね。」
「そうだな、どこからどうみても技術の体系だ。近代兵器を振り回すのと変わらん。」
「ま、こっちはこっちで問題山積みだし、どっちがいいとはいえないけど、どっちもどっちよね」
「まあ、そうともいえるが、さすがにこちらには「魔神」はおらんぞ」

「あははは、あれだって、私たちだけでは倒せなかったわ」

「ふむ、魔神殺しか？」

「いいえ、修正力ね。別名宇宙意志」

虚を突かれたような顔のエヴァに美神は説明をした。

巨大な世界変更には巨大な抵抗力がかかる。

急激な世界改造は巨大な抵抗力に阻まれるのだ。

その抵抗に負けたのが魔神。

その抵抗力を最後まで使ったのが魔神殺し。

しかし、たとえ魔神が勝っても、実のところ大した差はないだろうと美神は語る。

魔神がいかに世界を作り替えても、最終的な未来は、同じような形に集約するのだから、と。

それが宇宙意志と修正力。

すでにGS協会経由で提出されたオカルト論文であった。

エヴァはあまりの荒唐無稽な話に意識を失っていたが、徐々に理解し始めた。

なるほど、それは納得ができる話だ、と。

「よい話を聞いた。茶々丸、おまえの記憶をのぞいている奴らに何の加工もしない記憶として見せてやるがいい」

「・・・マスター」

「わかつていたさ。おまえの記憶がのぞかれていたことは確実に理解していた。そしてその上でいう、おまえは私の従者だ、忠義を尽くせ」

「イエス、マイマスター」

主と従者はこのとき再び結ばれた。

「だから、忠夫を独り占めするなよ？」

「・・・マスター／／／／」

甘々な主従だったが、それを見ていて面白くない面々も居る。

「あー、やっぱ横島殺す」

「横島さん、逃げないでください？」

「先生、先生は最低でござる！！」

踊りかかる陰から逃げようとした横島だったが・・・

むりだった、だめだった、ゴツトスピードだった。

事務所で運営状態のチエックをするという美神と別れた横島は、エヴァと茶々丸をつれ、おキヌとシロを案内していた。

とりあえず、ラグビー部の食い逃げ食堂を三度程クリアしたところで「横島おことわり」の看板がでてしまった。

爆笑のエヴァ。

顔を赤くしながらも楽しそうなおキヌ。

だらしないと不満げなシロ。

そして楽しそうに微笑む茶々丸。

そんな楽しい時間の最中、電話が入った。

「龍宮？」

電話の主はゴロゴ、ではなく龍宮真名。

告白連発で弾が足りない、補給の時間を稼いで欲しいというものだった。

移動中に事情説明を受けたおキヌは、自分も協力すると言い出した。

横島による呪い、エヴァによる系繰り、茶々丸による怪音波等々

あつたが、オキヌによるネクロマンサーの笛が一番の効果を示した。場所を移動させたり、世界樹の効果範囲外に一步踏み出させたり。横島もアーティファクトの権能で二重奏になり、その音に引かれてやってきた小夜まで加わって、ネクロマンサーの笛三重奏が生まれた。

GS業界でもあり得ない競演に周囲は聞き入り拍手の渦になった。そのまま休憩場になっている音楽堂まで誘導し、ふたたびネクロマンサーの笛で合奏し、ゲリラ演奏の取り締まりがくるまで演奏会が続いたのであつた。

「たのしかったですう！」

六十年間幽霊を続けた少女が、300年間幽霊をしていた少女と出会った。

お互いをお互いに感じ、そして今の生をお互いに喜んだ。

「ぜんぶ、横島さんのおかげなんです」

「ふふふ、わたしもそんな感じ」

おきぬと小夜、出会ったとたんに親友になれたとおもえるふたりだった。

「おや、終わりでござるか、横島殿」

「先生はお疲れでござる。」

正面の忍者に向かって顔を向けるシロ。

「ござる対面であつた。」

もちろん、速攻で仲良くなった二人は、延々と手合わせ中。

「あー、そろそろいくぞ。うちの映画の席取ってあるからな。楓も

くるならいいぞ。」

「あー、まってほしいでござる、いっっぱいまけこしてるでござるー!」

「せんせい、せんせい、シロもここにすみたいでござるう!」

「美神さんに言えー」

とかなんとか言っているうちにクラスにと到着すると、でてきたお客さんがキヤーキヤー騒いでくれた。

ありがとございますと頭を下げつつ、予約していた席に座る。

「忠夫、本当に無駄にクオリティー高いな、ほんとに」

「横島さん、この加工精度はすばらしいです」

「さすが先生でござる」

「横島殿の細工には、うちのクラスも助けられたでござる」

「さすが、長年の丁稚修行は無駄じゃないですね、横島さん」

映画はまだ始まっていないのに、はらはらと涙が止まらない横島だった。

スタッフフロールには、無理矢理参加させてしまった神多羅木先生やら協力してくれた警察官の人々や銀ちゃんの名前が流れた。

電動の幕が下りきったところで照明がつき、周囲の人たちの顔がみえる。

寝ている人間なんかいないのはありがたいけど、がんがん泣いて

るのは勘弁して欲しかった、って、鬼門、なんているんだよ!!
小竜姫様、はなでてますはな!

パビリオ、ベスパ、ひさしぶりだなあ……。

……みんなみんないた、人も妖怪もなし、神魔もなしで仲間と
呼べるみんなが。

ミイさんがけいがいた。

ワルキューレもジークも老師もいた。

エミさんも冥子ちゃんも冥那さんもいた。

魔鈴さんも西条もピートもタイガーも神父もいた。

美神さんも隊長もひのめちゃんも、美神さんのお父さんもいた。

おやじも、おふくろも。

「さ、主演男優君。挨拶してくれない?」

美神さんの一言に俺は立ち上がり舞台上上がった。

「……見てくれてありがとう!! どうだった?」

最高だった楽しかった面白かった。

もっと長く作れ、ビデオにしろ、今度妙人山で上映しろとかなん
とか。

「……うれしいな、ほんとうにうれしいな。」

ぼろぼろと泣いてしまった俺を、美神さんは優しく抱きしめてく
れた。

扉の向こうは、秘匿されていないオカルトの、あの魔神大戦の中

核がそろっていた。

敵も味方もなく、全員が。

少なくとも学生映画なんてレベルではないで気の映画を見て、うれしそうに笑いあう。

秘匿された魔法も、あんな関係を築けるだろうか、と埒もないことを考えてしまう。

「高畑君、あちらはあちらじゃ。こちらはこちらで頑張るしかないんじゃないよ」

「そう、ですね。」

「それにの、黙っていても彼が手助けしてくれる。なにせ……」

「「美女美少女の味方だから」」

第十一話（後書き）

えー、このGS世界はみんな「よこつち」にやさしいのですが、逆によこつちも頑張っていることを知っています。だから美神さんですら非常に甘甘です。

色んな理由で皆が助けたいと思っている、そんな一環が横島霊能事務所だと思っていただければ幸いです。

第十二話（前書き）

第十二話です
ネタバレすねw

第十二話

クーフェイの頼みを聞きつつ、横島さんの成長をみたいですねという小竜姫様の愛らしい笑顔にほだされて、麻帆良武道大会なるものにでることになった。

ルールは簡単。

刃のある武器禁止。

銃器禁止。

詠唱禁止。

「神魔禁止。」

この瞬間、老師と小竜姫は泣き崩れ、雪乃丞と横島はハイタッチした。

クーフェイは横島の師匠と手合わせがしたかったと目を潤ませたので老師の機嫌は直ったが、小竜姫は泣いたままだった。

そんなわけで、

「小竜姫様、小竜姫様。そんな貴方のためにとっておきを用意しておきました」

「・・・なんですか？」

「心ゆがみし悪の剣士。強い相手と戦うことに喜びを見いだしつつ、剣筋ばかりは正当流。指導次第では、正義の戦士に早変わり。どうです？」

「・・・横島、さん」

「すきでしょ？ 才能を無駄にしている人間の指導。」

「よ、こ、し、ま・・・さはーん」

歓声と拍手がまるで優勝をたたえるかのように鳴り響いたのだ。
た。

そんななか、辛勝でどうにか予選通過したネギは、なんて楽しそうに戦う人たちなんだろう、とうらやましく思っていた。

最近ポチが遊びに来てくれないと思っていたら、いろいろと面白いことをしているそうだ。

その中で面白かったのは、魔法球。

猿じじいの加速空間と違って、本当に時間を引き延ばしている。

これがあれば、ワインを寝かせるのも簡単自在と吸血鬼がいうと、小竜姫と猿じじいが本気で検討を始めたでちゅ。

酒もあるけど、じじいは攻略時間を叩き出すことに夢中でちゅ

で、もっと面白いのは「アーティファクト」っておもちゃ。

いろんな権能を引っ張り出す道具らしいけど、結構みんなの力が使われていた。

で、私たちの力が吸血鬼の従者に宿っていると聞いて驚いたけど、ポチと仮契約したらでてきたらしい。

その名も「過去と未来を見通す者の娘」。

アシュさまの娘って、私たちのことであちゅ。

そうおもってカードを見ると、確かに私たちに似てるであちゅ。

「めのまえで使っても不快ではありませんか？」

そんなことを聞かれてイエスといえるほど空気が読めないわけではないので、大丈夫だよって答えると、そのメイドロボははにかみ

つつ道具を使った。

「アデアット」

おどろいたことに、そこにいるのはルシオラちゃんでした。
靈気も格好もなにもかもそっくりな。

「る、るしおら、ちゃん？」

「・・・申し訳ありません、ルシオラ様の記憶はありますが、茶々丸である事実は変わりません」

わかってる。

彼女の優しさなんです、わかるのです。

でも、でも、その少しだけその胸で泣かせて欲しいでちゅ・・・
って！！

「やっぱり偽物でちゅね。」

「・・・やはりご不満が？」

「ルシオラちゃんの胸はそんなに大きくないでちゅ！！」

「・・・」

わりと素直な心の発露だったんでちゅが、視線がいたかったでちゅ。

その後、ベルパちゃんとパビのフォームにもなってもらったんでちゅが・・・。

「茶々丸ちゃん、これからしまいのちぎりを交わしましょうでちゅ」

完全に隆起した胸が私についているのを見て、目標にすることを

決めたでちゅ。

まんせ、茶々まるちゃん！！

実に指導しがいのある子供たちであった。

私の権能を得た少女、ジークの権能を得た少女。

まるで自分の子供を指導しているかのような、そんな錯覚を覚える。

加えて、権能を得ていないが十二分な力を持つ少女まで加わっているのだ。

小竜姫でなくとも指南したくなると言うものだ。

剣士の少女はジークとともに修行しており、ジークの権能を得た少女と私の権能を得た少女は、ともに私の指揮下で存分な力を発揮していた。

うーむ、いいな「これ」。

横島の従者だと言うし、人界任務のときに貸してもらえんかなあ。美神に言えばバカみたいな請求書が送られてくるだろうけど、横島なら……。

そういえば、横島の従者は、その、何というか、女ばかりだな。

それも少女ばかり。

・・・なんだか面白くないな。

よし、横島ここに来い。

久しぶりに説教だ！！

横島君がいつぱいお弟子をとっているって聞いて気になったけど、心配の中だったわ。

みんなかわいくて、しっかりしてて、それでかわいくて。

大切なことだから二回言ってみたわ。
そんな中、すっかりした体つきの女の子が私の目の前にきたの。
彼女も横島君お弟子さんなんだけど、その力を横島君がうまく教えられないんですって。

だから私に教えてあげて欲しいって言っただけど……。
そんな彼女が取り出したカードから、身近な波動を感じたわ。
スゴくスゴく、身近な波動。

「アデアット」

彼女が放つ力、それは、私と同じ力だったの。
魔法世界で私の力を模倣した道具が、彼女に宿ったんですって。

「だからこれを教えられるのは冥子ちゃんだけなんだ。」

すごく申し訳なさそうに言ってくれたけど、私は、私は本当にうれしかった。

この力の良いところも悪いところも全部知っている私が、この思いのままに、この感情のままに、この、この、感激とともに、彼女に、アキラちゃんに教えることができるこの喜び。

ありがとう横島君。

ありがとう横島君。

あなたはいつも冥子を救ってくれるのね。

そのまま泣き崩れた私を、アキラちゃんは優しく抱きしめてくれたの。

……どっちが先生かわからないわ。

このまま泣きつかれて寝てしまっても、外ではまだ一時間しか過ぎていないって、とつても素敵よね。

うちでも一個作るうかしら、魔法球。

公彦さんは爽快そうに寝ていた。

あの重厚な鉄仮面なしで生活できるなんて夢のようだと微笑んで今彼がしているネックレスは、横島君がこっちの魔法で研究したという認識障害魔法の固定化を行ったもので、よほど公彦さんが進んでしろうとしない限りテレパシーが伝わるおとはないという。

試しにひのめを抱いてみた公彦さんは、初めて抱きしめる娘の感触に涙を流した。

令子の方も抱きしめたかつたらしいけど、さすがに向こうも恥ずかしいらしく、早々に逃げられてしまっていた。

まあ、愛おしい妻でも抱きしめて我慢なさい。

そういうと、公彦さんはうれしそうに私を抱きしめた。

魔法がどういうものか、神秘がどうしたとははどうでもいい。

ただ、この幸せな時間を乱す存在がない楽園を楽しもう、と心の底から思った。

もう、横島君には頭が上がらないわね。

令子だけじゃなくてひのめもあげないとまずいかしら？

壮観と言ったところだろう。

目の前の人々は、ただ忠夫に会うために集まってくれた人々であり、神魔であり、妖怪であり、怪異であり、神秘であり・・・女体だ。

「さあ、日差しがあなたと汚さぬ前に、わたしとひとやすみしませんか？」

「あら、うれしいわ。そんなお誘いを受けたのは久しぶりですもの」

気絶しながら粗相して、愉悦の顔なんですよ……。
もう助けて……。

あ、ワルキューレだ!!

DSのワルちゃん助けてえー!!!!

「あ、すまん。私はあの3人の指導にくびったけでな。そちらの変態性欲には付きあえんだ」

「ま、まってください、せめてそっちの仲間に……」

「バカを言うな。こっちのまともなまで汚染するだろうが」

「いやー、汚染されるのいやー!!!!」

えーっと、カオスです。

なんとというか、なにが起きているのかわかりません。

まずアレほど楽しそうに戦っていた横島さんと伊達さんが、まさに死地へ行くがごとの形相でたっています。

僕を視界に入れた瞬間、スゴい早さで僕の両脇にたちました。

「老師、みてくれ。こいつが天才ネギ君だ!」

「そうだ、老師。見てくれ、この覇気のある瞳、やる気に満ちあふれた心! ちょっと闇っばいものを抱えているのがまた良い!!」

「え、え、え?」

「若い頃のやんちゃは買って買って買まくった老師ならわかるでしょ? この小ぎれいに纏まった良い子ちゃんの悪いところが!!」

「そうです、そうなんです、だから老師、このこをちゃきつと!!!!」

「そうだ、ちゃきつと!!!!」

あ、あれ、もしかして、横島さんの師匠が稽古を付けてくれるんですか？

願ってもないことです！！

おねがいします！！

「ふしゅー！ー！ー！」

「やべ、やっぱ理性残ってねえ。」

「あれだよあれ、如意棒。アレ食らったあたりで理性飛んだら？」

「しゃーねーべ！ クーちゃんの攻撃でおるのあれだけだべ！！」

「だけど、反撃食らって四散寸前だったろ！？」

「大丈夫だ！ ちゃんと文珠仕込んでるから！！」

なんでしよう、スゴく不安です、というか、今まで感じたことのない不思議な感覚がします。

そう、なんというか、死を忘れるな、というか、生と死が等価と
いうか、なんというか。

汗も涙もでません。

怖いとか苦しいとかそういう感覚ではありません。

よくわかりませんが。

「エミさん、神父！ 聖魔結界おねがいます！！」

「ピートタイガー、人間以上展開だ！！」

「逝くぞネギ、生きてりや英雄だ！！」

「うををををを、魔装術！！」

そうか、これが死線なんだ。

一步踏み間違えば即死。

こんな、こんな怖い世界があるなんて初めてだった。
だからみんなスゴいのか。

だからみんなスゴいんだ。

「こい、ネギ＝スプリングフィールド!!」
「・・・はい!!」

たぶん、十二回ぐらい死にました。
ヘラクレスもびっくりです。

明日菜さんの話では、その倍は死んでるというのですが記憶にありません。

最後に気づいたとき、お猿のおじいさんがみんなにしかられていました。

僕はこんなに楽しい場で喧嘩はよくないと思ったのでおじいさんをかばうと、みんな微妙な顔になりました。
空気を呼んでみましたがわかりません。

「ま、ネギがいいならいいさ」

そんな風に横島さんが笑ってくれるのがなぜかうれしかったです。

あとで茶々丸さんにビデオを見せてもらって、みなさんの微妙な表情の意味が分かりました。

教訓、人間は簡単に死にます。
だから生きてることを大切にしよう。
ええ、とつても大切なことです。

そういえば、横島さんのお友達が「英雄」と呼んでくれるようになりまし。

少し誇らしいけどくすぐったいです。

くーちゃんが老師と特訓し始めたのが始まりやったと思う。

どんなにがんばっても届かないせいで、ちょっと絶望していたクーちゃんに、老師が道具を使ってみなさいといってくれたんや。

それを出した瞬間驚いた老師やったけど、スゴくうれしそうやったん。

もちろん、偶然老師の頭に直撃するまで。

なんつうか、クーちゃんが吹っ飛んだのは覚えとる。

横島さんが召還して引き戻したんやけど、見た目でぼろぼろズタボロ人形状態やった。

せやけど、「まだセーフ」ちゆうて横島さんが文珠をつこうたら、息をふきかえしたんや。

「コノカ、みんなを連れて引け！」

横島さんがあせつとる。

どんなときでも余裕でわらつとる横島さんが！？

アキラちゃんと冥子さんが全員でレポートしたんやけど、ぜんぜん助かる気配がないんや。

そのへんから曖昧なんやけど、ネギ君が現れて、明日菜がカモ君盾にして、戦略的撤退した後、ネギ君が上下半分になった気がするんやけど、記憶違いやるか？

なんつうか、死線を越えたネギは新たなる力に目覚めました、てかんじだ。

靈能に目覚めるには「死ぬ」か「死ぬようなめにあつか」とはよくいったもので、クーフェイもネギも一発開花だった。

まあ、そんなもんだわな。

とりあえず、靈能に目覚めたので靈能を応用して無詠唱をする方法を教えたら、無茶苦茶感謝されてしまった。

いや、さすがに死線に引き込んだ責任があるしなあ。

で、一応、天才君はできるまで特訓のパターンで出来るようになったんだけど、その先がさらに哀れだった。

老師に才能を見込まれたネギは、ネタ技を死ぬほど特訓されたのだった。

ネギ無惨。

魔法の矢を「かめは 波」に見立てるのは良いけど、なんでドラゴンボール全巻を持ち歩いているんですか、老師？

つつか、回し読みでドラゴンボール祭りが発生している件について詳しく聞きたい。

って、あれ、月読さん？

なんでドラゴンボール祭りに参加？

ヤムチ にあこがれて？

なんで？

まあ、ドラゴンボール祭りはいいから、そろそろ外にできるとしま
すか、みなさん。

もうですってば！

第十二話（後書き）

えー、ネギ君つてば、無茶苦茶な目にあつて、無茶苦茶開眼します。そりゃ、ね。冷静に自分が死んでいくところなんか見せられた、トラウマでしょw

ともあれ、ネギ君は非常に生き汚くなってゆきます。

これは仕様ですw

12/11 ちょこつと修正しました

第十三話（前書き）

第十三話です

カシオペアが絡まないと、こんな感じかな、と思います。

第十三話

麻帆良武道大会

最強の人間を決めると題されているけれど、それなりに偽りがある。

まず、龍宮真名、横島忠夫、桜咲刹那、と混ざり物チーム。

次にクウネル・サンダース、田中さん、エヴァンジェリンってな人外さんチーム

で、魔法使いさんは、高音、愛衣、ネギ。

なんとなく少数勢力なのに詠唱禁止という段階で結構かわいそうなたちばな魔法使いさんチームだった。

というわけで、純粹な人間が勝てなさそうな、そんな大会。最強の人間を決めるなんて謳い文句は嘘っぱち。

実にかわいそうな話だが、エヴァに山下は敗れ、長瀬に中村は敗れた。

そして雪乃丞に愛衣は敗れ、横島に高音は破れた。

地力の差が大きすぎるのだから仕方ない。

地力の差でいえば、さすがに明日菜でも刹那に勝てるわけもなく、辛敗。

結構な動きのある試合で、かなり好評であった。

同じく好評であったクーフェイの試合は、実のところ真名をクーフェイが圧勝した。

さすがに猿神との訓練が効いていたらしい。

ここまでの実力差があるとは思っていなかった、さすがはクーだと真名もほめていた。

同じような意味でだが、圧勝した男がいた。

タカミチ・T・高畑。

ネギのトリッキーな動きに切れて、全力攻撃をしてしまい、池の藻屑に変えてしまったのだ。

その手加減のなさから「デスメガネ」ではなく「切れやすい中年」という評価になったのを記述しておく。

これを見て切れたのは明日菜ばかりではなかった。

クーネルサンダーズは自分の野望が費えたことをはがみし、某猿は時分のネタ技の代行者が消えたことを怒った。

その視線の先にいたタカミチは、かなりうなだれていたのだが、当のネギはじつのところすっきりしていた。

初めから勝てるとは思っていなかった相手にコテンパンにされる経験は初めてではないし、すでに何桁も違う実力の相手に対して、死なない程度に防御できて逃げ延びた時点で勝利だと思っていたのだ。

トーナメントの性格上、勝敗は打ち負けたという結果だが、それでもルール上の隙を衝ければ逆転も可能だったことを解っている少年だった。

隙を見せず、隙を見いだす戦いこそ、力量差が大きいときの戦いであることを学習したが、さすがに相手をおちよくり過ぎたと反省しきりの少年魔法使いであった。

そんなふうに関り切っているネギをみて、明日菜は何となく理解した。

彼の少年時代が急速に終わって行っていることを。

どこに向かっているかまではわからないが、あわあわとあわてていた魔法使い見習いはもう居なくなってしまうのかもしれないことを。

だから今のうちに子供を捕まえることにした。

「さ、これから老師に怒られに行きましょう？」

「・・・え？」

「せっかく神様が稽古を付けてくれたのに、するっと負けちゃったんだから、ね」

みればネギ少年、真っ青になつて震え出す。

明日菜はそれを見て、まだまだ少年時代を引っ張ることが可能なのだと少しだけ安心した。

二回戦もまた瞬間的に決まってしまう試合ばかりだった。

なぜか意気消沈したクーネルを雪乃丞が下し、周りの視線に負けたタカミチをエヴァが下した。

激戦となつたクーフェイと楓は、僅差でクーフェイが勝つものの双方の負傷が激しく、ダブルノックダウン状態であつた。

これにより雪乃丞の不戦勝が決まり決勝への進出が約束された。

第二試合最終戦、横島忠夫対桜咲刹那。

和製メイド対ネタ格闘の盟主。

どんなネタでくるのか、誰もが期待したところで、ネタが割れた。それはカーキ色の胴着、白の腰ひも、そしてそして、背中 of 文字は「亀」。

すでに会場は最大ボルテージ。

さすがに人気ネタの影響で、興奮しすぎた者達が泣いていた。

もちろん老師も泣いていた。「やっと、そのネタを使うんじゃない」と。

全国の青少年の黒歴史、トップ3に入るであろう、アレを実践してくれる、と誰もが感動している中でそれは弾けた。

長いタメ、低い姿勢、およそ武術とはかけ離れた格好から放たれたそれは、男の夢の結晶!!!

彼の突き出された両手から発せられた、ごん太の光の帯が、勢い

のまま反り返り客席を越えて空に吸い込まれる。

試合が全く進んでいないのに、盛大な拍手が会場を包んだ。もちろん、はじめっからずっと雰囲気は飲まれていた刹那だったが、それっぽく構えた横島に警戒しつつ一撃を加えた。

「なぜが直撃したのにすり抜ける。」

幻影か、と首を傾げたが、なぜか解説にいる老師がささやく。

「残像、じゃな」

再び大音量の歓声。

次々と現れる残像の山に興奮ひつきりなしの周辺観客だったが、すでに原理とか仕掛けとかどうでも良くなっていた。

次々とでてくるネタ武術に感動しきっていたのだ。

最後の最後で背後からの軽い一撃で刹那を気絶させた横島が勝利したのだが、同じ実力だのある状態でもこれだけの観客を沸かせたということ、評価が異常に高くなる横島。

タカミチももう少し余裕があれば、あんなことにならなかったのだが……。

気を失った刹那をお姫様だっこして会場からでようとしたところで、無数のフラッシュがたかれた。

その一つに向かって横島は、「焼き増しよろしく」とかわらって見せた余裕に、結構男子のファンが増えたらしい。

かわって選手控え室。

エヴァと横島は向かい合っていた。

当然のように愛の語りではないが、エヴァにとってはどちらも同じことだった。

「詠唱なしといっても、私もおまえも魔法が使えん訳ではない」

「ま、そうだな」

「おまえのネタ技は、おおよそつうじんど、私には」

「そりゃそうだろ、一緒に遊びで作ったモンばかりだからな」

「・・・ならばどうする？」

「もちろん、全力で遊ぶ」

「よかるう、こちらも全力で遊ばせてもらおう」

カカと笑うエヴァンジェリンは、茶々丸とともに衣装替えに向かった。

もちろん横島も着替えることにした。

今まで、純粋な実力という者が解らなかった横島が、実はすごいのだと気づいたのはこの試合のせいだろう。

まず一般人の観客席から見て、本当に見えないほどの攻撃なんてあり得ないのだ。

さらに、それを見事によけきり、加えて反撃に移るエバンジェリンもまた信じられない動きだった。

まるで決められていり殺陣をしているようにも見えるが、それでも早すぎた。

攻撃が、反撃が、全く解らないのだ。

そんな攻防の中、一気に距離があく。

そんな中、エヴァが声を上げた。

「フレ ・ アローー！！！！」

炎の矢が横島をおそう。

スレスレで避ける横島だったが、追加攻撃が加えられた。

「エルメキ ・ ランスー！！」

輝く槍が横島をおそおうとしたが、横島が叫んだ途端情勢が一気に動く。

「ひかりよ！！」

手元に生まれた光の剣が、光の槍を引き裂いた。会場が静まり、そして沸いた。

「リだ、リ　　インバーズだ！！」

「ガウリだ、ガウリ　　ガブリエフだ！！」

あまりのネタっぽさに大きく燃えた会場に答えて、詠唱なしで魔法が飛び交い、そして光の剣が切り裂いた。

最後に起きた赤い光の集中を切り裂いて発現をじゃましたところで時間切れとなった。

初めてのメールによる投票で、ガウリ　　ガブリエフ・・・ではなく横島忠夫の投票勝利となった。

そんな集計中、選手控え室での会話。

「むう、さすがにドラ　スレイブの再現はつらかったな」

「ありや、組み合わせがまずいだろ？」

「そうか？　　けっこう真に迫っていたと思うが？」

「いや、ほら、実状じゃなくて、ネタだろねた？」

「・・・ああ、そうか。結構本気で術開発をってしまったぞ」

「・・・まさか、あれって・・・。」

「うん、結構威力のある新技だな」

「・・・殺す気か？」

「いや、忠夫なら大丈夫だろ？」

じつに心温まる会話だった。

遺恨も不安もなく、お互いの今出せる力を面白おかしく打ち合える、まじめで不真面目な関係。

エヴァにとつて生涯にわたり経験したことがなく、それでいて生涯味わっていた日常であった。

もちろん、何かが原因で壊れてしまったとしても、この瞬間が生涯最良だったと思えるほどの幸福感だった。

あとは可能かどうか解らないが、この男の子供でも孕めれば最高なんだろうな、とすら思っているほどだったのだが、さすがに羞恥心が先に立ち口に出来ないでいた。

やはり「あの人と」似たもの同士らしい。

派手に壊れた会場修復のため、しばらく休憩になったので、横島は会場内の友人や事務所の人間達のところに顔を出した。

するとそこには中等部女子の3Aメンバーがかなりおり、今までの対戦を面白おかしく再生したオーロラビジョンを見入っていた。そこに本人達が登場したのでさらに盛り上がり、あれがよかったとかこれがよかったとか、そんな話で盛り上がった。

「で、横島さん。次のネタは？」

当然とばかり聴いてきたので、反対側から歩いてきた雪乃丞と視線を絡めて笑う。

「ま、かみ合えば、それなりにみんな楽しめるんじゃないかな？」

「そうだな、かみ合えばな」

思わず笑いあう二人に噛みつくユウナであったが、エヴァが取りなす。

「きさまは父親が内緒に準備している誕生日プレゼントの中身を、箱を開ける前から知っていたいのか？」

かなりピンポイントな攻撃だったが、ユウナ撃沈。

納得の姿勢を見せたユウナに代わり追求を始めた双子少女だったが、ぐりぐりと頭をなでられているうちにどうでも良くなった模様だ。

それを見ていたネギは、小さく「横島さんみたいになればな・・・」と言ったところで、周囲の爆笑を得た。

なぜか解らないネギだったが、横島の友人達のその笑いの中身が解らずむっとしていると、美しい女性、美神がネギの頭をなでる。

「そうね、成し遂げたこと、今までのことを考えれば十分子供にあげられてもおかしくない男なんだけどね」

指折り数え始める美神。

「セクハラ、ナンパ、覗き、下着泥棒、逆恨みで呪い・・・」

「えっと、なんですか、それ？」

「横島君の得意技よ？」

「・・・え？」

過去の所行を聴いたネギは、今の横島に全くつながらないので驚いていた。

「なんでそんな犯罪者みたいな人が野放しなんですか？」

「まあ、横島君だしね」

にこやかな笑みには人を見下すような者はなく、さりとして特別扱

いで線を引いているわけでもなかった。

彼の人成りがしれる、とネギは思う。

そして、だからこそ、人以外をも引きつけるのだろうとも。

犯罪的な過去と同じぐらいの彼がなしえた伝説を聴いて、意識を失うかと思つたネギ。

「さ、さ、さすがに、生身で大気圏突入は、むりですよ？」

「あら？（魔法を覚えたから）今度はもうすこしうまくできるつて言つてたわよ？」

急激に興味がわいたネギは、横島にそのことを質問してみると、想像以上にうまく行きそうな気がしてきたのだったのだが、それが彼と彼の同行者の命を助けるとは、このとき誰も解らなかった。

麻帆良武道大会決勝戦。

それは伝説の風景だった。

赤い空手着の男と白い空手着の男の対決。

全てをなぎ払う竜巻旋風。

神妙の輝きを放つ波動。

そして点にも届かんばかりに打ち砕く昇竜。

同門のそれでいて何かに特化したもの同士の戦い。

それは魔法でもなく霊力でもなく、ただただ夢の対戦だった。

最強の人間を決める？
ルール？

そんなものに意味はない。

彼らの目の前には、語り継がれてきた唯一の最強が、最強と云うイメージが現実に闘っていた。

3D？

リアル？

何を馬鹿なことを！？

空を裂くこぶしが、激しく打ちしだく足が、汗が、血が、全てを彩る。

まさに其れは現実になった夢だった。

無限に続くかのような戦いが、時間制限一分前に終わった。
赤胴着が放った気を、波動を掻い潜り、白胴着が放った昇竜がヒットして。

車田落ちの赤胴着が起き上がらないのを見て、朝倉は白胴着の勝利を宣言した。

「勝者、RYUー!!」

「横島だろっが。」

「「「「「.....あ「「「「「

もう、単純に皆そう思ってた。

すでにネタ格闘とかそういう次元を超えている為、惜しみない拍手と歓声が会場を包んでいた。

周囲から「私の師匠になってください!!!」「強いお前に会いに行く!!!」「波動 だけでも教えてくれ!!!」との熱い声援を受けながら。

その闘いを見て、猿老師は、再び「スト2」からやり直そうと心に決めた。

そんな感動を広めた二人は、会場中心で握手を交わす。

「まさか、 竜拳で決められるたあ思わなかったぜ。」

「いや、最後はアレの打ち合いで、打ち負けると思ってたんだけどなあ……。」

「読み負けたぜ、 動拳の打ち合いのつもりだったからな」

つまり、お互いの土俵で戦うつもりだったらしい。

そんな会話が朝倉のインタビューで流れたものだから、更に会場が盛り上がる。

かなりチンチンに沸いた会場へ、主催者が現れた。

一位二位に賞金授与が行われ、表彰が行われた。

「正直、全く意図してなかった動きだたネ」

「そうか? こういうトンでも格闘が好みだったんだろ?」

「……やパリ、予想の斜め上に行くのが横島クオリティーかネ?」

「ああそうだ、こいつはそういうやつだ。」

軽く笑いあう彼らに、優勝賞金と準優勝賞金が渡された。

が、じつのところ、この横島の賞金の大半の行き先が決定していたりする。

事務所主催の優勝祝賀会、神魔の方々へのおみあげ代、事務所のみんなのバイト代、その他モロモロ。

実に所帯じみた内訳だが、雪之上にしても弓かおりへのプレゼントで大半を使うつもりなので、たいした違いは無い。

それよりも、清々しいまでにネタ格闘できたほうが嬉しかったらしく、かなりご機嫌な二人だった。

大会の終了宣言と共に集まる雪乃丞及び横島関係者。

口々に善戦をたたえつつ、駄目だしたり次回のおねたの話をした
り大いに盛り上がった。

話が区切れたところで、学園内のマスコミが殺到し、其処にいる関係者の多くが神魔やGSであることに驚く。

雪之丞と横島がGSなのは有名だが、ここまでの友好関係があるとは思われていなかったのだ。

その場で横島が言った「気の良いやつらに、種族は関係ないだろ？」の台詞と表情は、速報の売上に大きく貢献したらしい。

ともあれ、チーム極楽と横島霊能事務所のメンバーは、その賞金を元に二日目を楽しむのであった。

その一部が、ウルスラの某お嬢様喫茶で散財され、各方面からの感謝が来たのは蛇足。

三日目の朝食時のことだった。

いままで頻発していた小規模な時空震とは比較にならないほど大きなものが発生した。

即座にその場に走ったGS神魔麻帆良事務所混合「チーム極楽」は、過度に衰弱したネギと明日菜、ノドカ、ハルナ、和美、楓、ク

「フエイを発見した。」

彼らの語ることを総合すると、未確定未来から戻ってきたそうだが、その世界では、超の作戦により「秘匿された魔法」が強制認識魔法によって世界に伝わっていて、魔法関係者の多くが更迭、収監されているという。

では、そのころの横島といえば、超の策謀により当初から魔法世界側に拘束され、一切攻防に関わっておらず、無罪放免で釈放されたという。

その横島から渡された手紙を持っていたノドカが、この時間の横島へ渡される。

それを読んだ横島は、ぐっと手紙を握りしめた。

「横島忠夫霊能事務所は、この「横島忠夫」からの依頼を受ける。」

手紙にはいつていたのは、金色に輝く文珠だった。
まるで、菅原道真の権能のような。

「んで、私たちには？」

美神礼子が笑う。

小笠原エミが笑う。

六道冥子がほほえむ。

「神魔は「横島忠夫」への便宜を約束しています」

小竜姫が笑う。

ワルキューレが笑う。

ヒャクメが笑う。

「さすが、「千の女神の加護」といったところか？」

エヴァンジェリンの一言に、周囲は笑った。
刺々しかった雰囲気は吹っ飛ぶように。

消耗しているネギは愛子の「中」に入れて回復させようとしたが、彼女たちが、ハルナ達がいやがった。

どうやら魔法球で罫を仕掛けられたのが堪えたらしい。

仕方なく、図書館島の一室で作戦会議をしているところで、ネギも一時的な復活を遂げた。

彼の説明では、すでに学園祭前から超の接触があり、その際に渡された「タイムマシン」によって、この学園祭を飛び回っていたそうだ。

学園結界内のことなので神魔は不干涉を決め込んでいたが、ずいぶんと危ないことをしていたものだ。と横島や美神が冷や汗をかいていた。

それはさておき、そのタイムマシンも大量の魔力を必要とするため、本来ならば学園祭終了後は使えなくなってしまう筈だが、裏技でどうにか帰ってきたという。

その時間、一週間。

魔法球に仕掛けられた、強制時間転移の罫によって一週間後にとばされた時の混乱はさておき、帰ってきたからには敵作戦や動向が解るであろうと聞いてみると、それなりのことが解る。

まず、敵集団は「超一味」の超・ハカセがメインで、これに加えて真名が雇われているという。

さらに、工学研のロボが数千体、大型ロボが数百体、そして鬼神兵が四体。

大物量であった。

その物量に負けた魔法先生は次々と敗北し、残った魔法先生と魔法生徒が避難誘導したが、暴走したロボや鬼神兵により多くの死傷

者がでてしまった。

その中には3Aの生徒もあり、報道を見て泣いてしまったと聞く。この事実だけでもどうにかしないといけない、と叫ぶ彼女たちから、横島は絶対に名前を言わないでくれと頼んだ。

そりゃ聞きたくないだろうけど、とすねるユウナだったが、実際の理由は別だと話すと驚く。

彼の言う話に納得させられたユエはその記憶だけでもピンポイントで消せないか、と提案し実行した。

知り合いは死んだかもしれない程度の危機感になった彼女たちは、どうにか前向きな活力に燃え上がった。

が、唯一、ネギは記憶を消さなかった。

そうでなければ今、起きあがれなかったからだ。

暗い、黒い思いではあったが、意識のためには必要だとエヴァは思ったが、横島は違っていた。

「てりゃ」

とチョップした後、ネギをのぞき込む。

「おまえ、初めて俺の罠にはまったときと同じ顔をしてるぞ？　ずるいぞ、卑怯だ卑怯だって顔だ」

はっ、と顔を引き締めるネギ。

「罠つてのは、卑怯でズルくてヒドいもんなんだよ。それでもな、それを食い破った先にこそ、避けきった先にこそ、相手をぎゃふんといわせる勝利があるってモンだ。」

曇っていた瞳に力が入る。

濁っていた瞳が輝きを増す。

「よし、得意げに勝利宣言をしている超が、ちり罫にはめて、ずっぱり落としてあとでうめんぞー」
「はー！ー！ー！」

……じつさら瞳は潤ったままのまじでした。

第十三話（後書き）

美神印の横島せんせいですが、確実にネギを汚染しています。

「イイカンジ」になってしまいうネギですが、こういうセンスが必要なんじゃないかと思うわけですよ、はい。

この段階で小太郎と正面から当たっても、あらゆる意味で小太郎ボロ負けです。

決め技は「平安京エイリアンの術」ですかねw

1 2 / 1 1   ちよこつと修正しました

1 2 / 1 2   名前をなおしましたw

1 2 / 1 7   ちよつと直しました

第十四話（前書き）

第十四話です

学園祭も終了ですね

第十四話

作戦開始 4時間前

Act 1

ぷろろろろろろ
ぷろろろろろろ
がちゃ

「あ、真名ちゃん？」

「おお、横島さんか。どうした？」

「いやさ、ちよつと依頼をしたかったんだけど」

「それは困ったね、本日貸し切りなんだが……。」

「違約金つてどのくらいになる？」

「これはこれは、ずいぶんと強引だな。すこし気分を害するところだぞ？」

「うん、それについては本当に謝るけど、やっぱだめ？」

「……そうだな、あと半月前に予約してもらえれば、そうすれば私も身の振り方を変えられたのだがな」

「……そっか、それじゃ仕方ない、か。」

「……横島さん、一応言っておくが、殺しじゃないぞ？」

「それでも、意図せず事故でしんでしまったら、君も心に病むでしょ？」

「これでもプロでね。そういう神経は別だよ」

「別の神経が傷つく。そして生涯治らない。経験者から言わせてもらうと、その神経は日常の神経も傷つけるよ？」

「私も経験者だよ、横島さん」

「その経験に民間人は？ 無関係の人は？ 一年以上過ごした一般

の友達は？」

「・・・今日は意地悪だな、横島さん。」

「ごめんね。でも、将来有望な、あと一年もしないうちにナンパしたい美少女の将来を考えるとね、うん、ごめん」

「・・・契約は破棄しない。」

「そっか。」

「それでも、友達は見殺しにしない、それでいいか？」

「うん、最善」

がちゃん。

ぷーぷーぷーぷーぷー

Act 2

ぷろろろろろろ

ぷろろろろろろ

がちゃ

「はい、ご用ですか？ 横島さん」

「あ、茶々丸ちゃん、元気？」

「損傷はありませんが、不機嫌です」

「え、え、え、何か問題ある？ 相談に乗るよ？」

「はい、横島さんが、GSな方々とはかり遊んでいるので、非常に寂しくて不機嫌です。」

「・・・ごめん。なんなら今から遊ぶ？ 今からなら二人っきりのデートもできるけど？」

「心から望ましい展開ですが、私にも契約があります。本日はお相手できませんのでマスターで我慢してください。」

「そっか、残念だな。」

「はい、心から残念です。」

「でもさ、茶々丸ちゃん。」

「はい、横島さん」

「愛してるよ、茶々丸」

「わたしもです、ヨコシマ」

がちゃん。

ぷーぷーぷーぷー

A c t 3

「ちゃ、茶々丸？ どうしたの、どうしたの！？ それ、なに？

アーティファクトが囁くつてなに！？ 超さん、超さん！！ 茶々丸止めて止めてー！！」

「くそ、敵性防壁を破るウイルスだト？ どこでそんな技術ヲ！

横島忠夫、やぱり、巨大な敵だたネ！」

学園のある地下での大騒ぎ。

それを仕掛けた男もまた大騒ぎだった。

「きさま、我が従者をたぶらかしおつてー！！」

「横島さん、茶々丸ちゃんは、2歳、2歳ですよ！？ ロリコンで

すか、ロリコンですね！？ はっ！そういうば……」

「な、なんだ、氷室キヌー！！」

「……ルシオラさんは一年の命でした。つまりゼロ歳……」

「……貴様、そこまでか、そこまで行っているのかあ……！！」

思わずノリノリで折檻中のみなさんでした。

そのバックグラウンドでも、作戦は進んでいた。
そんななかで最近横島の事務所で修行兼事務のバイトをしている
千雨が言う。

「なんかさ、学園最中なのにネットがかかるいな。」
「ああ、それは……」

折檻中の分身をおいておいて、無傷の横島がそこに立っていた。
さすがにビビる千雨。

「……茶々丸ちゃんの中にいるルシオラががんばってるんだよ」
「……?」

何となく聞いてはいけないような気もするが、それでも聞きたい
千雨は瞳をのぞき込んだ。

「どうしても聞きたいなら、作戦が終わってからゆっくりみんなに
話すよ」

「……わかったよ、横島さん」

さすがに自分一人にでも早めに教えてほしいとはいえなかった千
雨であったが、実のところ事務所の人間大半が知っている話と

聞いて怒ったのは未来の話。

作戦開始 2時間前

神魔双方から装備が転送されてきた。

それは力を抑えるものであり、監視するものであった。思わず思いつきり揮ってしまっても問題ない程度に抑えるためにつまり、神魔を問わずこの騒ぎに参加していいということになっただけだ。

老師感激、小竜姫も感激。

魔族一同様も不気味に笑っている。

が、と横島。

ワルキューレの肩をたたき、笑う。

「狙撃手が向こうにいるんだわ。だから・・・」

「・・・え？　ほんとか、まじか、え？」

「うん、だから暴れるのは駄目ー」

「・・・ひどい・・・。」

「こんど埋め合わせするから、ね？」

「・・・絶対だぞ？」

「あ、そうそう、ジークは盾な」

「ひどー！！」

「もちろん、おまえには埋め合わせ無しだ」

「うわ！　もつとひどっ！！」

そんなわけで、魔族姉弟はネギのフォローに回ってもらったことを宣言。

治療術や結界に先行している人員を集めて、救急施設まで開設。

雪広と交渉しつつ、開始寸前まで漕ぎ着けたところで、まさかの敵襲。

流石にあせった彼らだが、にやりと笑う美神。

「いいじゃない？　向こうがやりたいっていうなら相手しよっじゃないのー！！」

作戦終了後」に飛ばされてしまいます」

「何より大きいのは、横島さんが押さえられていないことなんだろう？」

「そうですね。未来では、横島さんが魔法世界にとらわれてしまったせいで、GSの協力が得られませんでしたから」

よくもまあ戦力分散してくれたものだ。と千雨はため息をついた。

「さて、そろそろ行かないと、おいしいところは全部もってかれちゃうわよ?」

「そうですね、ネギ先生。私たちがついてます」

「・・・はい！ いきましよう!!」

時はまさに機械鬼神兵が起きあがった瞬間。

ネギと明日菜は戦場に向かい、ノド力は作戦本部ともいえる世界樹中心に向かった。

昨年の三日目イベントが盛り上がりすぎたせいで、今年は地味になるはずだった。

しかし、噂にもなっているマホラ武道会や遊びに来ている神魔の存在がいやがおうにも期待を盛り上げた。

そして、やっぱりやってくれた、と歓声上がる。

「火星ロボ軍団VS学園防衛魔法騎士団」

ネタ兵器の数々で拠点防衛と共に敵を倒せ！ と銘打たれたそれは、準備段階でフライング開始された。

開始60分前で始まった攻防は、序盤、学園防衛魔法騎士団の優勢で進み火星ロボ軍団を押し返していたが、中盤で投入された大型ロボの装甲が厚く、攻撃の通りが悪くなっていた。

あわや拠点陥落かと思ったところで、現れた其れは、結構有名な存在だった。

「波動　！！」

それはまほら武道会優勝者と準優勝者。

いや、「RYU」と「KEN」！！

「いくぞ、俺たちは強いやつらと闘い（あい）に行くんだ！」

拳を振り上げた二人のその姿に、引いていた足が、誰もが一步前に出た。

その瞬間、その場の攻守が入れ替わった。

他の防衛拠点でも魔法先生や魔法生徒、さらにはまほら武道会参加者がヒーローユニットとして防衛線を押し上げる。

さらに、横島霊能事務所のメンバーが、霊力を使ったネタ格闘でさらに盛り上げる。

そんなお祭りが視界に入った者たちのテンションはうなぎのぼりだった。

「うををををを！！　まけてらんねえぜ！！」

「くそお、おれだって、ネタ技ぐらい！！」

「やるぞ！！」

気と呼ばれる力や、独自の霊力を発揮するもの達もあふれた。魔法を微弱に使えるものも、回復しか使えないものも、会場を走った。

後ではなく、前へ、前へ！

デカイやつらには届かないけど、打ち出した攻撃が当たる限り、ただただ攻撃するだけだ！！

「避ける、来るぞ！！」

人の体ほどもあるチームが学園防衛魔法騎士団を薙ぐ。

すると男女関わらず「脱げ」た。

奇声を発する学園防衛魔法騎士団。

その中で、一人、脱げずに立っている男がいた。

いや、ちがう、それもまた全裸の一形態だったが、それを全裸だとは思わなかっただけだった。

全身毛だらけで、まるでキングゴングの気ぐるみを着ているような存在。

それが何かを振るうと、瞬間的に目の前の大型ロボ数体が吹っ飛んだ。

伸縮自在の棒を振るう、そして宙返りして雲に乗る、加えて、分身。

もう、疑うまでも無い存在だろう。

「孫悟空だ」

「孫悟空だ！！」

「斉天大聖孫悟空だ！！」

伝説の神仙にしてアジアで最も愛されている神仙。

彼がその武器、「如意金箍棒」を揮うと当たってもいない大型ロボまで吹っ飛んだ。

「やべえ、無双だ!!!」「悟空無双だ!!!」

大まかに斉天大聖が敵をふつとばし、学園防衛魔法騎士団が止めを刺すといった流れで、その防衛拠点はスコアーを伸ばしていたのだった。

その防衛拠点は地味に思われていた。

しかし、それは大きな間違いだった。

其処に現れた、女子大生っぽいお姉さまとゴスロリ少女の強さはもう、何の比較も出来ないほどで、早いとか凄いかではなく「強い」のであった。

ロボも建物も関係無しで、一撃で切り裂くお姉さん。

自分のダメージとかなんだとか一切関係無しで飛び込んで切り裂くゴスロリ。

対極でありながら二人が織り成す剣戟のハーモニーは実に美しかった。

スコアーは伸び悩んだが、少なくとも眼福ではあったと誰もが感じていたのだった。

実況中継で、数々の魔法先生が「ヒーローユニット」として紹介されてゆく中で、それはすべて前座だと言いつつ朝倉。

では、本命は？ と聞けば、恐ろしい名前が続いた。

美神礼子、小笠原エミ、六道冥子、唐巢和宏……

続く名前は、有名すぎる名前だった。

そう、それは過去世界を救った実際の勇者、英雄たちだった。加えて誰もが知っている神魔が続く。

本日なぜか遊びに来ていた神族、救世の女神「ヒヤクメ」（という扱いになっている）と、アジア最強の神仙と言われる「斉天大聖孫悟空」。

聞けばあの「RYU」「KEN」は斉天大聖孫悟空の弟子だという！！

やばい、強い、強すぎる！

強さを求めるものたちには失神ものの感動が満ちていた。

そうでないものたちにとっても、いわば歴史的有名人と時間を共にしているという状態は精神を高揚させていた。

見知った街角で、大好きな歌手のゲリラライブに当たったようなそんな感動？ いやそれどころではなかった。

その何倍もの感動が満ちあふれる。

やってくる、雪広財閥！！

そんな賞賛が乱れ飛んでいた。

作戦開始 + 2時間

失敗はやはり、あの男を押さえつけられなかったことだろう。

あの男がすべての原因だとは言わない。

しかし、あの神魔やGSが敵対しているのはあの男のせいだし、こちらの主力がハングアップしているのもあの男のせい！！

くそお・・・、ここまでひどい妨害をしてくるとは思わなかったぞ！！

いや、自分とて魔法世界側とあの男との不仲を演出し、この作戦に関わらせなくさせようとしたのだが。

だが、茶々丸の戦線撤退の影響で情報操作が不完全に終わり、あの男の自由な動きを許すことになってしまった。

そればかりか、あまりにも自然に一般学生や魔法生徒、魔法先生が連携し、あたかもイベントの一部、そう、あの麻帆良武道会の会場のような雰囲気にも包まれていた。

あの常識を、あの常識知らずを「ネタ」として容認してしまう流れ、あまりにも信じられない非常識。

麻帆良という空間を嘗めていたとしか言いようがなかった。

加えれば、現状だろう。

カシオペア同士の戦いになるはずだった。

それなのに、どこに仕掛けてあったのかわからない蠅取り紙やら取り餅やら金盞やらが、雨霞のように降り注ぐ。

これでは移動もできないネ！！

「こ、これが、正義の魔法使いのやりかたかネ！？ ネギィスプリングフィールド！！」

少年の心をかなり傷つける言葉をたたきつけたのに、彼はにこやかに微笑んでいった。

「日本の言葉に、こんな言葉があります。・・・『勝てば官軍！

！』」

だめだ、信じられないことだけど、あのまっすぐすぎて突き抜けて英雄になったはずのご先祖様は、あの男に汚染されてイイカンジになってしまっている。

どんな未来にたどり着くかわからないけど、その先にあるのは「生存」だろう。

やばすぎる彼には早々に退場願う！！

右拳の時空跳躍弾を仕込んだ一撃を、少年に、ネギ坊主にたたき込んだ。

たたき込んだら、突き抜けた。

そして何かに当たった。

・・・拳を中心にして、それは発動した。

作戦開始 +2時間・・・+2時間

超が飛ばされた場所に、神魔GS混合部隊が包囲していた。

その中心で、超は時空跳躍と修正力に関する論文を読みふけていた。

加え、成功したはずの未来の記憶の一端を見せられ、少なからず絶望していた。

そんな超が引くまでもなく、火星ロボ軍団は戦滅され騎士団側の勝利となった。

後夜祭ではその成績発表があり、女子中等部3Aが結構上位にはいつていた。

また、ヒーローユニットやネタ格闘の人気投票もあり、魔法先生よりも魔法生徒や霊能事務所の人間の名前が多く挙がっていた。

やはりトップは「RYU」「KEN」であったが、「リナ」に扮したエヴァはかなりの人気で、ファンクラブすら計画されているとか。

さておき、自らの行いとその結果について考察する時間を得た超は、完全に抵抗をやめ投降することを宣言した。

だが、周囲の人間は首を傾げる。

『え、やめちゃうの?』と。

あせつたのはネギだったが、超も驚いた。

なにしろ時間変化に関する危険性や問題をさんざん突きつけておいて、あきらめるのか、とは何事か、と。

それに対して、女性が進み出る。

「時間変化のコツは、いかに世界修正力を起こさない程度の変更でとどめるか、なのよ?」

たった一人で神魔すら相手取って魔神を倒すための時間を生き続けた女の言葉は重かった。

重厚なボディーブローのような指南を聞いた超が顔を向ける。

「ワタシ、またやってもいいかね?」

「ま、次やると、俺たちとは全く関係ない時間になるだろうが、な」

「でも、まあ、今度はそっち側に誘ってもらえりやおもしろいかもな。」

「神魔としては容認できませんが、私たちと関係ない世界なら目をつぶりますよ?」

なんとというか、優しいのかそうでないのか判断できない超だった。

クラスみんなに別れを告げ、カシオペアの力を使う超に横島は文殊を渡す。

「おまえの思う、おまえの旅を続ける。そこに「至」るまであきらめるな」

「・・・ありがとネ、横島忠夫。私のミスはあなたを敵にしたことだたネ」

「そうか？ 一緒に遊べて楽しかったぞ？」

輝く光の中、超は消えた。

「横島、文珠にや、なんて入れたんだ？」

「『至』だよ」

「・・・そうか。」

ふり仰ぐ夜空。

麻帆良の夜に星が降る。

そんな雰囲気をぶちこわすような大騒ぎは続いていた。
もちろん、大騒ぎに参加する二人だった。

「ヨコシマ、ふたりつきりに・・・」

「ええい、あれは私のだ、アホ従者」

「マスター、ヨコシマの前世からの恋愛遍歴をみますと、重度の口
リ確定です」

「ぐぐつ、わたしとて、見た目だけなら・・・」

「見た目制限は16以上、二重にアウトです、マスター」

「だーーーーー！ 誤解やーーーー！ わいわロリちやうわーーーー！」

こんなやり取りをみて、血の涙を流す横島であった。

「雪乃丞、火の系統の魔法を納めました。」

「お、かおり。おまえも火か？」

「そんなわけで、超必殺忍び蜂の練習台になりなさい」

「・・・おまえも、たいがいな無茶言っな」

「雪乃丞がアンディーなら、わたくしは舞でしょう？」

「・・・」

「なんです、その不快な視線は？」

「なんでもありません」

こんな会話にひるまない3Aクオリティー。

神魔もGSも何も関係なしに盛り上がる、そんな後夜祭だった。

第十四話（後書き）

茶々丸と横島の掛け合いは結構好きで、暴走してしまいます。というか、この茶々丸さんが蝶好きですw

実は、今まで執筆した中でも14話はかなりのお気に入りです。茶々丸が暴走すればするほど嬉しくなっちゃうんですよ、ええ

12/11 ちょこつと修正しました

第十五話（前書き）

第十五話です。

ちょっとした日常編のつもりでしたw

第十五話

狂乱の学園祭は終わった。

一晩たつて脱力する生徒たちだったが、解体中の設備の中でわりとありがちなのは、そのままにしておきたい、というもの。

お祭り気分が抜けないだけだ、と教師たちが騒ぎを収めようとするのだが、そのじつ騒いでいるのは生徒だけではなかった。

たとえば、ウルスラの某教室。

たとえば、女子中等部の某教室。

たとえば、共学区の某教室。

各美術担当教師が、造形の勉強になるはずだからと、絶対保存を訴えて、学園長までねじ込んだ。

さすがにウルスラ以外は通常授業に弊害があるということ却下された。

逆に、ウルスラの教室は他の教室でも評判で、自分たちの教室にも追加してほしいという要望すらあった。

一応、見積もりを一般工務店に発注したところ、一教室あたり200万という内容になった。

もちろん、発注などしなかったわけだが。

見積もりを受けた工務店も、さすがに発注はないと思っていたらしいが、施工された部屋の単価を聞いて目を向いた。

そんなばかなと逆に怒る工務店の前で、その男はモリモリ作り上げていった。

何の図面もなく切りバラされた部品が、見る見るあいだに組あがってゆく。

木目も違和感もなしに一つになってゆく。

塗装がどんどん進んでゆく。

全く違和感なしにくみあがってゆく、出来上がったものは信じられないほどの精度だった。

目の前で使われた材料と時間をみれば、自分たちの見積もりとあわないことおびただしいが、自分たちにはそれができないことを認め、工務店は怒りを撤回しつつも正直に「自分たちには無理だけど、日本中どこの工務店でも無理だ」と告白していった。

その男、横島忠夫の名が、無駄に高まった瞬間だった。

とりあえず、ウルスラの一部の部屋に施されることが決定したのだが、完全にランダムで実施されることと、どの教室かは夏休み明けまで秘密となった。

実にユニークな校風だが、学園長の差し金と思えば理解できると誰もがうなずいていたという。

毎年行事として、とりあえず展示物が撤去された教室でも、造形が秀逸だったものや再現が難しいものなどは美術倉庫へ送られているが、今年はかなりの点数が増加し、そして紛失も多いらしい。

細かいことを気にしない校風でも、さすがに紛失件数が多いので家捜しをしたところ、多くの紛失物が美術教師たちのテリトリーに移動されていたことがわかり、事件の根深さが話題になったが、一般生徒にはあまり関係のない話であった。

で、一般生徒、であったものたち。

伊達雪乃丞は、武術を愛好するものたちからの絶大な人気と支持者、そして弟子入り希望に翻弄されていた。

かなりの實力は以前から知られており、普通の枠を越えている者たち（気を飛ばしたり、トンデモ武術を収めている者たち）の相手をしていただけだが、さすがにあのネタ武術は刺激が強すぎたらしく、彼を師と仰ぐ者が後を絶たなかった。

一様に断つていても埒があかないということで、気の放出が出来なければ弟子入りかなわず、気がでて雪乃丞が相手にしていた気使いたちを倒すようにという条件を付けてやっと数を減らせている

状態だった。

理性的に、条件的に減らすことが出来るので、どうにかしよりにきているが、闇討ちのような力試しも多いので、実に迷惑をしているのであった。

が、さらに斜め上に迷惑しているのが横島だろう。

彼の場合、気の使い手よりも魔法生徒や魔法先生たち方の手合わせを求める声が多かった。

単なる手合わせばかりならまだいいが、新型の魔法の揮発や改良をしていると聞いては黙っていられないとばかりに襲いかかっていた。

むろん、単純に攻撃は受けないのだが、そこそこ無詠唱の防御や反撃をする場合でも見たことも聞いたこともない呪文を使うせいで逆に興味をかき立ててしまっている悪循環。

霊能力だけで防げばいいのかもしれないが、収束に特化している横島の霊能では、広域を攻撃する対軍型の攻撃の防御に向かないので、比較的効率化した魔法や圧縮した魔法を使った方が楽なのが災いしている。

ともあれ、条件付けをしているにも関わらず、やれ理想のためだとか正義のためだとかお題目を掲げて情報公開を求める魔法先生や魔法生徒に対して、さすがに横島も学園長を通して苦言を呈した。

現在研究中の手法は伝達を封印している、と。

その方向性については「高畑」「シャークティー」両名の推薦もありつけていた、と。

詳細をあかしていないが、その二人の言めに威力があつてか、情報公開の話は収まった。

が、魔法先生＋魔法生徒が集まる会合で、毎度毎度手合わせを求められるのには飽き飽きしつつある横島。

愛子もそれを感じているので、飛び込みの手合わせの都度に請求書を送っている。

そのうち会計が根を上げるころには学園長からストップがかかる

だろう、と愛子がいうので横島も我慢している。

なにせよ、その請求書一枚一枚がルチ將軍への貸しになるのだと思ひこむことにした横島だった。

そういう意味では、横島霊能事務所に出入りしている少女たちも大きく注目されていた。

元より美少女ばかりであったので噂を呼んでいたが、数々のネタ格闘技やネタ技を披露した影響で、先日の人気投票を独占していたともいえる。

一般男子からダントツ人気だったのはエヴァンジェリン「A」K「マクダウエル」。やはり実体効果を伴った「リナ」には誰もが目を奪われたらしい。加えて可憐な容姿が影響して、即日のうちにファンクラブが設立されている。

続いて男子に人気だったのは高音「D」グッドマン。式神の影が「オリジナルスタンド」として認識され、高い評価になっていた。

意外に女子に人気だったのは小夜で、彼女の演奏で恐怖心がなくなったとか、勇気がでたとかいう感想が集まっていた。

そんな彼女たちも今回の騒動で自分たちのアーティファクトの多様性と利便性、そして特異性を実感せざる得なかった。

普通ではあり得ないレベルの多様性と、それを得られたであろう契約主の特殊性。

仮契約に詳しいエロオコジョ曰く、「100年に一度の快事」だという。

でてくるアーティファクトでてくるアーティファクト全てが未発見アーティファクトだなんて事態は今までなく、異常ともいえた。

以前、愛衣が高音と契約していた際のアーティファクトは数打ちの筈であったが、横島との契約こそがその契機であったかもしれないが、彼女としてはアーティファクトがほしくて仮契約したわけではないという心の動きが影響していると感じている。

だからこそ、横島の従者たちは感じていた。
主従を越えたつながりと、その背後にあるであろう感情を。

「だーかーら、このおあげ料理ははずせないのよ。京都よ？ 豆腐がうまいのよ？ おあげでしょ？」

「まーまー、待ってください。湯葉、湯葉をはずしては意味がありませんですよ？」

「はいはい、とりあえず、秋口ですよ。松茸を忘れないでください」「さんせー」「」

「くそ、数の暴力ね。さいごにゃヨコシマに泣きつこうかしら？」」「」「はんそくー！！」「」

まあ、夏休みを前にしても、こんな秋の旅行の話が出来るぐらいには落ち着いている彼女たちであった。

「ところで、冥子はこっちにいても大丈夫なの？」

タマモの問いに首を傾げる六道冥子。

「ほら、アキラを覚えてくれるのはうれしいけど、あんまり遊びに来ると、おばさまがうるさくないのかなって？」

重ねた愛子の問いに、ああ、と理解を示した冥子だったが、その答えは流石だった。

「横島君のところの～アキラちゃんが～、私の権能を持つてるから～指導したいの～ってお願いしたら～、おかあさまったら～半年分のお仕事を～キャンセルしてくれたの～」

わー、ぱちぱちと盛り上がる冥子。

そして結構うれしそうなアキラ。

が、タマモと愛子は結構冷や汗ものだった。

なんのかんのといつても六道冥子といえば名門中の名門にして実力派のGSだ。

仕事を受ければ一件数億という物件もざらだという。

そんな彼女を半年間も押さえるという時点で、どれだけの貸しになるのか？

正直に言えば恐ろしい負債に思えたのだが、後ほど横島と雪乃丞に聞いたところ、差し引きゼロだろうという。

まず、冥子自身の報酬は確かに数億になるだろうが、事故や破損による賠償も同程度あるので、働かないほうが儲かるともいえるのだ。

また、依頼失敗によるマイナスもつかないとなれば万々歳であるともいえる。

加えて、アキラという後塵の育成と自分の能力の見直しという依頼達成よりも難易度が高いながらも評価につながり、さらには問題発生時は横島に責任を押しつけられるという良いことづくめの状況を見れば、二年三年単位で派遣していてもおかしくないはずだと語る二人。

「も、もしかして、アキラちゃんの進路次第じゃあ……。」

「ああ、横島&六道霊能事務所とか言う名前になっている可能性もあるな。」

「……うつわ。」

「横島がハメられれば『六道夫婦霊能事務所』じゃねえのか？」

「こえーこというなよ……。でもそのころにや、おまえも『弓除霊事務所』だろ？」

「……あいつ、GS試験に通るかねえ？」

「まあ、あの遊び心があればいけんだろ？」

軽い会話に挟まった重い現実には、さらなる怖い思いを感じるタモトと愛子であった。

ともあれ、事の大小はあれども、学園祭は、超による世界改変は大きな傷と思いと、そして小さな成長を残していったのであった。

むろん、この少年、ネギィスプリングフィールドにも影響があった。

というか影響どころか、バンバン変形させてしまったともいえる。彼が言い切った「勝てば官軍」は、確かに目指す形であったがそれでもそれが全てではないと考えていた。

しかし、基本姿勢として「負けないこと」が骨子に入った影響で誰もが理想とする「正義の魔法使い」から大きくはずれてしまっていた。

逃げもすれば隠れもする。

よけるし避けるし挑発もする。

罠を張り油断を誘い、そしてトドメを躊躇しない。

全く、学校を出たばかりという魔法学校の生徒が実践する手法ではないが、最悪でもタカミチ以外の魔法先生に負けないと断言できるレベルまで練り上げてしまった。

あとは正攻法の地道な修行を重ねるだけだな、と横島に言われて嬉しそうにほほえんだネギィ。

かなり深いところまで信頼しているのであるう事が理解できる笑顔だったという。

「で、正攻法ってどこで習えばいいですか？」

「妙神山」

ダッシュで逃げるネギィ。

もちろん逃がさない横島。

あらゆる虚実をいりみだらせて逃げようとするが、16分身の楓

の前で無駄だった。

泣いて縋って哀れを誘ってもだめ。

成績を餌にしても無駄。

なんとか、どうにか助けてもらおうと従者に助けを求めるが、すでに懐柔済み。

四面楚歌で泣き崩れるネギに横島が一言。

「一定の強さを示したら、魔法世界へ親父さんを捜しに行く許可を取り付けてやる」

目を見開くネギにほほえむ横島。

嬉しそうにほほえんで、ぎゅっと横島を抱きしめるネギ。

感激にふるえつつ、ネギは気合いが入った。

あの晩の、あのひの父親を探しに行ける、と。

うをををををつと叫ぶネギを、結構うらやましそうに見たエヴァにきいてみる横島。

「エヴァちゃんも行ってみる？ 妙神山」

「いいのか？」

「もちろん」

「うちも」「わたしも」「あー、わたしもですう！！」

なんだか事務所全体で行く騒ぎになってしまった横島霊能事務所であった。

で、そういえば……

「月読って、小竜姫様についていったけど……」

「ん？ ああ、ありや完全なSMレズプルになっておつたな。」

エヴァの言葉に、思い当たる節を感じた周囲がうなずいていた。

「さー、アキラちゃん。今日の練習しましょー」

「はい、冥子姉さん」

「んー、かわいいわー」

着実に実力を伸ばすアキラと、それに引きずられるようにしつかりしてゆく冥子であった。

これもまたよりよい形の師弟であろう。

さて、試験休みに突入し採点やら成績付けにアクセクしているネギをよそに、生徒側は気楽な日々を堪能していた。

いや、もちろんの事、日々の業務は熾烈を極めている。

ただ、地力の上昇が激しい霊能事務所メンバーにとって、超という中ボス戦以降は、マップを戻ったスライムに等しい難易度になっていることは間違いなかった。

もちろんの事、怪我や負傷を嫌う横島なので、絶対に無理や無茶が出来ないように事前の準備やファーストエイドキットの徹底はさせている。

しかし、日々の訓練の影響で、自分たちが使うよりも、他の魔法生徒や魔法先生に使うことが多かった。

そんなためか、負傷対応やら処置治療の技量も上がるのだからなにか幸いするかわからない。

「ちょっとうちの生徒も研修させてもらえないかなあ・・・」

そんな風にセルヒコも飲み会で呟いてしまうほどだった。

それを聞いたガンドル・神多羅木も思案顔であったという。

逆に、シャークティールや刀子はすでに自分の教え子を事務所の準メンバーレベルに押し込んでいたので、それなりの成果を得ている。

じつによい手腕である。

加えて、ココネが「老師」に懐いており、「老師」も個人的に面倒を見ているそうだ。

これは魔法世界からの初めての弟子取りになるかもしれないシヤークテイーは期待している。

もちろん、最も早く潜り込んだ弟子は別にいたわけだが。

そんな日常の最中でも、時間と言うのは着々と流れてゆき、そして一つの結果をはじき出す。

それは技術の上昇かもしれないし、成績の上昇かもしれない。

ただ、そんな日常とはまったく別の歯車も、まったく見えないうちに進んでいるものなのだ。

それを身にしてみるのは、もう、少しだけ時計のハリが進まなければならぬはずだった。

「はず」だった。

第十五話（後書き）

12/11 ちょこっと修正しました

第十六話（前書き）

第十六話です。

オリジナルですね

第十六話

青空の下降り立った人影は二人。

成人女性と少女だった。

一人は黄金色の髪の毛の女性、一人が赤毛の少女。

成田空港に降り立った二人は、カウンターを出てそして日本という国へ降り立った。

「ねー、アーニヤちゃん。本当にネギに連絡しなくて良かったの？」
「やーねー、ネカネさん。ネギ如きが先生出来る国ですよ？ なん
でそんな国の案内をアーニヤさまがネギに頼まないといけないんですかあ！」

わははと笑っていたのは初めのうちだけで、移動中にその笑いも途切れ、色々と乗り換えて環状線に乗っているとところで既に涙目になっていた。

もちろん、ネカネによる救援要請連絡はネギに届いていたが彼自身も職務に精励していたため身動きが取れなかった。

そんなわけで更なる救援要請が出された。

今現在、もつともネギに信頼されている男、横島忠夫に。

もちろん、当初は非常に嫌がった横島だったが、アスナ似であるというお姉ちゃんの写真を見せられた瞬間に、トップスピードで事務所に向かった。

もちろん、事務所から都内にある魔鈴の店を経由するためだ。

電車をケチるアタリ、微妙に横島らしい。

さほど資金に余裕がないわけではないのだが、こういう細かいところから気が付くあたりが彼の事務所の成功の秘訣かもしれない。

ともあれ、移動中の二人と連絡を取って、待ち合わせたところで思わずネカネの手を取る横島だったが、不安に泣きかけていたアー

ニヤの頭をなでることも忘れない。

簡単に自己紹介や話をしているところで、切符の清算や乗換を手続きした横島が二人を連れて行ったのは魔法料理の店「魔鈴」だった。

結構おながすいていると言う二人のためではあったが、このゲートを通れば事務所まで「無料」なので、すばらしいとも考えてはいた。

そんな横島の考えとは別に、アーニヤは感動していた。
なにしろ日本で行きたいところベスト1の場所だったから。

彼女が修行しているロンドンで師事している師匠から、本格的な占いをするなら表のオカルトの関係者を頼るべきだと薦められていたのだ。

加え、表のオカルトの本場と言えば日本であり、更に言えば、先の大戦の功労者のなかに「魔女」と名高き女性もいる。

聞けば、魔法界へ移住する前の魔法の研究者でありつつも新たな魔法研究としても有名で、無詠唱魔法の開発効率化ではトップレベルの「人間」であった。

これはもう、「魔法使い」であつてもリスペクトするでしょう！と大騒ぎ。

一応店内には認識阻害の魔法がかかっているけれど、その興奮具合に驚いた使い魔のノアールたちは思わず避難していた。

「お味はどうですか？」

「最高です！ マーリン！！」

伝説の魔法使いの名にあやかって、彼女は最近海外でそう呼ばれているそうだ。

「ヨコシマ、あなたにもすんごい感謝してるわ！！ ネギの代理だつて言うから期待してなかったけど、凄い知り合いがいるじゃない

「!!」

「あー、まー、ネギだつて結構頑張ってるぞ?」

「ふーんだ。あのボケネギがどんなにがんばったつて、ボケはボケでしょ?」

「んー、確かに視野が狭くて暴走気味だけど、それなりに矯正してるし、けっこうやるようになったけどなあ?」

その一言にネカネは目を丸くした。

気安くて気軽に、それでいて暖かな少年は、自分が危惧していた事を明確に捕らえていて、そのうえで正してくれていたことに気付いて。

「ふーん、ヨコシマも結構見てるのね。あのボケネギ」

「ま、そりゃな。とりあえず学園長からも依頼されてるしな」

へー、と感心したアーニヤであったが、不意に眉をよせる。

あれ、つと首をかしげた後で、恐る恐る声を書けた。

「あ、あのさ、ヨコシマ。ヨコシマのフルネームつて、タダオヨ

コシマよね?」

「ああ、そうだよ。」

「・・・ヨコシマの兄弟で、GSっている?」

「兄弟はおらんな。GSは俺本人だ。」

「じゃ、じゃあ、もしかして、魔神殺しつて・・・」

「・・・」

苦笑いの横島にアーニヤは真つ青。

「ば、ば、ば、バカネギイイイ! あいつは人類の英雄に何させ
てんのよお!!!!」

「まあまあ、俺も暇だったし、ネカネさんを直接見たかったし」

大興奮のアーニヤをなだめつつ、落ち着いたところで麻帆良の事務所に移動した。

異界を利用したゲートはかなり珍しいものだったらしく、二人とも非常に感心してくれた。

魔鈴も本国の魔法使いに感心されていることが嬉しいらしく、始終ニコニコしていたが、店の仕込があるために残念ながら店に戻った。

横島に連れられて二人は学園長と面会をした。

関東魔法協会のトップへ話を通しておかないと、はぐれ魔法使いとして処理されてしまう可能性があるからだ。

二人の面会を快く受け入れた学園長は、そのまま横島の案内で麻帆良を楽しんでくれ、と語り受け入れを表明した。

もちろん、ネカネという美女とデートできると言う機会は横島にとって願ってもないことなので、喜んで引き受けたのだが、如何せん横島の運は悪かった。

行く先々で高校のクラスメイトに出会い冷やかされたり紹介を求められたり追いかけられたり、中等部3Aから冷やかされたり大騒ぎされたり取材されたり。

そんな中、朝倉からネギのお姉ちゃん来る！との報が広まると猛烈な勢いで歓迎会の準備が始まった。

もちろん旗振りには雪広アヤカ、ネギⅡスプリングフィールドの従者であった。

俄然やる気満々の彼女に続くのは宮崎ノドカ。ネギⅡスプリングフィールドの従者であった。

加えてネギに好意的な女子は張り切り、瞬間的にファミレスに大集合した。

3Aのほぼ全員が集まったところで、事務を終えたネギが合流し会が始まった。

アヤカが歓迎の意を謳いあげて乾杯の音頭を取ると、こんなにも慕われていたなんてとネギが泣き、それに感動してネカネも泣いた。

「ねえ、ミスターヨコシマ」

「横島でいいって」

「でも・・・」

「名前でよぼうや、アーニヤちゃん」

「・・・うん、タダオ」

彼女は目の前の光景が正しいものかどうかについて自信がなかった。だから横島の意見を聞くころと思ったのだ。

横島は苦笑いで「しかたないやろ」と言ったが、それでもネギが先生として慕われていて、それでいて結果を残していることを語る。アーニヤがネギの幼馴染と聞いて、昔のネギの話を知ったが、実際に事細かくアーニヤが語りだすと、ネギは涙目になった。

横島はにこやかに笑いながらネギを押えて「もつともつ」とサインを出す。

其れを受けてアーニヤ全開。

過去の悪行と凶状がさらされることとなったのであった。

ネギ無残。

もちろん、子供の頃の話だが、ネギにとって忌々しい過去なので忘れたい話であつただろう。

が、子供先生の過去と言つ美味しいねたを逃すはずもない朝倉和美の取材によつて、ネギは文字通り丸裸にされたのであった。

さらにネカネによる「カワイイ弟」っぷりが披露され、さらにダ

メージを食らったネギは灰色に燃えつきていた。

全部の話を聞いたアヤカはツヤツヤしつつ、ネギを回収して慰めていたりする。

一粒で二度おいしいとはコレのことなりや。

そんなネギの姿を見ている保護者役であった明日菜は、実に落ちて着いた笑顔を見せていた。

普段であればアヤカと敵対してでも彼を守っただろうが、今のところそんな気すら着なかつた。

それは、彼のパーティーの中の問題だと切つたからだろう。

もちろん、ネギの面倒は見続けるつもりだったが、こと魔法となると関わる事ができなくなってしまったのだ。

この試験休み中いろいろとあつたが、一番の出来事は記憶を思い出したことだろう。

自分が「神楽坂明日菜」ではなく、「アスナ」であったこと、そしてネギの父たちと旅したこと、色々と思いだしたのだ。

そう、本当に色々。

その記憶の結論として、自分は今までみたいに気楽なスタンスで魔法に関わることができなくなつた。

逆に魔法から身を守らなくてはならなくなつたのだ。

自分がなぜ保護されているのか、その保護の理由とその勢力分布さらには自分が関わることによる危険性まで見えてくれば早々遊んでもいられない。

だから彼女は記憶を取り戻してすぐに学園長に相談し、そして策を打った。

まずは記憶が戻つたことの秘匿、そして表のオカルトへの参入だった。

記憶が戻つたことがばれれば、黄昏の御子としての立場が戻って

きてしまう。これにより動員される元ウェスペルティア王国は非常に危険だった。

本物と工作員が入り乱れて、きな臭いことになることは必死だから。

加えて表のオカルトに入ってしまったえば、秘匿されるべき魔法の介入が一切出来なくなり、保身がはかれる。

いや、魔法世界からの介入が防げる、といったところか。

腹芸が向いていないネギには絶対に相談できないことなので、学園長へ直接相談したところ、当然の流れで横島に相談が行った。

はじめは何でだろう、っっておもっていた明日菜であったが、実のところ横島は秘匿された魔法から表のオカルトへの移住窓口みたいな役目をも背負っているという。

自分でもそれは可能であろうか、と聞いてみると横島は微笑んだ。

「わいは、将来有望な美少女と美女の味方や。まかしとき」

こうして正式に横島のGS助手として登録された明日菜は、横島霊能事務所の所員として迎えられた。

表向きは他の従者たちと同じくアルバイト扱いだが、以後彼女は次回のGS試験に向けて修行を開始することになった。

もちろん、それを聞いて表のGSになると宣言していたコノカも同調し、千鶴もまた参加を表明、ワレモワレモと続く彼女たちに、せめて時期をずらしてほしいと頼み込む。

最高でも32人。

さらには二次試験を越えた後に同門同士が潰しあうことすらあるのだと説明したが、ユエは笑う。

「ラプラスダイスなどぐり抜けるのです」と。

とはいえ、ぐり抜けようにも同門同士討ちをしてしまうレベル

で人数は出せませんと横島反対の意見を打ち上げると、事務所内トーナメントが行われてしまった。

とりあえず、二度ほどに分けるであろう挑戦で、だれがどちらに行くかを決めるとかなんだとか。

厳選なる予選の結果、次の結果になった。

- 1 アスナ、コノカ、セツナ、ユエ、エヴァ、ユウナ、楓
- 2 タマモ、愛子、千鶴、クーフェイ、小夜、アキラ

愛衣と高音は「魔法使い」なのでGS協会としても別枠なのだが、逆にエヴァは特別扱いするには高名すぎるので一般の試験をという流れになっているとか。

「魔法使い」はGSになると言うことは、いわば移住や亡命に近い。

だから彼女たちが本気で試験を受けるときになったら、心から後ろ盾になるうと決めた横島だった。

また、愛子やタマモの試験が後になったのも、横島霊能事務所の名前と実績を初めの固めたあとで、名声と実績で押し切ってしまううと考えたもので、結構面白いことになるだろうと考えていた。

少なくとも、同士討ちにならなければ初めの試験のメンバーは絶対に落ちない。

というか、ふつうの見習いレベルのGSでは絶対に勝てないことが決まりきっている。

少なくとも、美神や神父が試験に潜り込んでいない限り合格だろう。

そんなわけで、単なる観光目的だった妙神山行きが物々しい修行旅へと変わっていても彼女たちは嬉しそうだった。

それは、信じられないくらい早いけど、それでも未来を決めた少女たちの笑顔だったから。

そんなわけで基礎練習を始めた明日菜は、みるみる追いついてゆき、霊能開花を「転写」されるまでになった。

くわえて霊能による魔法発現も「転写」され、たぐいまれなる実践感覚も相まって、見回り補助をしている事務所の前衛部隊に組み込まれるほどになった。

日々の前衛を続けていればわかるのだが、ネギという少年が如何に「不自然に」育てられているかがわかる。

いや、育てられていたか、がわかるのだ。

実践にはほど遠いながらも、災害級の攻撃魔法の修得が許されているのにも関わらず、自分を治療したり解呪する手段を持っていない。

強力で威力のある力を持っているのに制御や収束が全く出来ていない。

そう、なんとというか、中途半端なチート。

明日菜にとってそれは、まるでゲームの中のヒーローのような存在に思えた。

だから正直に横島に相談してみると、彼もうなずいて見せた。

だからこそ、トラップゾーンであり妙神山行きなのだ、と。

もちろん、一人で何でも出来る必要はないし、仲間を増やして協力しあえばいいだけのだが、ネギ自身はそういうことに向いてはいない、というかそういうことが出来るほど精神が成長していかないのだ。

だから、その基礎を学ぶ必要があるという事で、トラップを学ばせて、そして自分のあり方を学ぶために妙神山につれてゆくという。

「最終的には魔法世界に叩き込む予定や。」

たぶん、ネギの渡航にあわせて騒ぎを起こすバカはいると思うので、それをひっかける目的もあるとか。

よくよく油断の出来ない男だ、と明日菜は笑った。

一步も二歩も離れてネギを見ることの出来るようになった明日菜は、もう一月前の自分には戻れないことを理解していた。

高畑を、タカミチを大好きと叫んでいた自分を懐かしく思いながら、ナギの忘れ形見を一步離れて見つめる明日菜。

すでに立場としてネギから一步離れてしまうと、そこが如何に守られた立場であったかを知る。

そう、常に横島霊能事務所のメンバーが守っていたのだ。

そのことを守る側から知ると、心の底から感謝の念が絶えない。

ありがとうという気持ちがあふれるほどだった。

でもこれからのネギパーティーを襲うのは今までなんか目じゃないほどの危機と危険だ。

というか、時系列の予定表を見せられたとき目が回った。

だからこそ、コノ力たちは必死になって修行しているのだ、と理解できた。

付け焼き刃でどこまで付いて行けるか解らなかつたけど、過去の記憶を思い出すことで使えるようになった技の数々を思い出しつつ、今日の修行を思っって身を引き締めた。

ネギを取り巻く環境を冷静に観察したネカネは、現在のネギの師であると判断した横島に申し入れた。

「ネギの修行をみたい」と。

もちろん、無茶をしていたら止めるつもりを決意を持っていたが、横島はそんな思いを受け止めつつ微笑んで「いいよ」と返した。

で、つれられてきたのは敷地奥の森の中。

なんと魔法関係者でも何でも無い生徒まで一緒に。

つれてこられた森の中には、なぜか成人男性が数名縄に絡めとられて吊されていた。

「あー、またガンドル先生失敗してるうー！」

「セルセルの「吊り」げつとー！」

「うひゃー、神多羅木先生、その姿勢でたばこ吸ってもカツコツかんでー」

やんやんやとはやし立てる生徒たちを見れば、コレが日常だとしれる。

「さ、ネギ。いってみるや」

「はい！ー！」

まるで陸上選手のようにダッシュしたネギは、木の間をすり抜けて、飛び回り、吊された男性すら踏み台にして森の奥へ走り抜ける。

「おお！ さすがネギ。吊された男にや畏が無いとみたか。」

「さすがネギ君やな。忠夫さんの趣味をわかつとる。」

「あ、式集院先生を踏み台にしたら、一緒に落ちましたよ」

ドゴーン！ー！

「うまいでござる！二集院先生を盾にシタでござるよ！ー！」

「うーん、さすがに生き汚くなってきたアルね」

カーン、バコ、チーン。

およそ真剣なとらップとは思えない連続音でネギ沈黙。

オロオロとするアーニャとネカネを苦笑いで見ながら横島はネギ

の回収に向かった。

股間を押さえて悶絶しているネギに向かって訓辞をたれると、ネギは苦悶の中で「是」の意を示す。

ではでは、本日のアマアマコース、ということで森の密度が少ないところに案内する横島。

俄然やるきになった生徒たち。

聞けば、このトラップコースを走破したら、横島が焼き肉食べ放題につれてゆく、という約束をしているそうだ。

このコースの走破者は「ネギ・アスナ・クーフェイ・楓」であり、転校してしまった超も走り抜いていることが伝えられている。

どうにか復活したネギがわりと自然に走り抜けると、アーニヤもやってみる、といい始めた。

やる気全開の3A軍団は、急遽おもしろ観戦軍団に早変わり。

普段苦労させられているトラップコースで、どんな笑いが見られるかと、大いに期待を盛り上げた。

結果は見るも無惨。

最初の2分は笑っていたが、さすがに笑いも越えると悲しくなり、アヤカによって早々に救援されることになった。

さすがにトラップ発動率90%はヒドすぎる、と泣きのはいる横島であった。

「日本にいる間に、ぜーったいクリアするんだからね!」

この負けん気はネギ以上で好ましいと横島は思う。

第十六話（後書き）

・・・とうとう、明日菜、横島ハーレム入り。

やっておいてなんですが、本当によかったのかしら、と苦笑い。

基本、ネギの保護者の位置は変わりませんが、横島と共に、という枕が付くようになっただけです。

ともあれ、本編終了後の布石ですので、改修予定はありませんw

12/10 色々と修正しました

第十七話（前書き）

第十七話です

日常っぽい話です

第十七話

一般生徒を解散させた後、魔法秘匿の内側の生徒をつれてネカネヤアーニヤと共にやってきたのはエヴァのログハウス。

もちろん別荘目当てだったのだが、その別荘が改装されていてさすがに驚いた。

レーベンスシュルト城という昔アフリカにあった城を移築したものだそう、周辺の大自然も含めて維持しているのだからすごい話だった。

当時の生態系すら取り込んでいるのだから、いわば「ランドロツク」「ロストワールド」ともいえる環境だろう。世界中の生物学者が血の涙を流すな、と笑う横島にエヴァは「すごかるう」と高笑い。

そんな中で真っ青なのは二人。

ネカネとアーニヤ。

エヴァといえば、過去600万ドルの賞金首にもなったという悪の魔法使いにして真祖。なんでそんな凶悪犯が、とガタブルしていたのだが、とりあえずネギの説明で落ち着きを見せた。

そこから始まる各員の魔法や技の練習をみて、泡を吹くネカネ、怒りに興奮するアーニヤ。

「そんなの禁呪書庫にだってないわよ！！最上級呪文を跳ね返すつて、どんなチートなのよ！！」

明日菜につかみかかるアーニヤであったが、明日菜も自身がチートなのは自覚しているので、苦笑い。

そんな中に放り込まれたネギは、わりと実力が平均の下っぱいの

が更に気に入らないらしい。

そう、アーニヤも魔法戦闘の指導を受けているので、無詠唱での魔法格闘が可能になっていたのだが、この中では全く役立たずであることを自覚してしまったのだ。

「アーニヤちゃん、きにせんでもええんよ？　うちの先生が変態やったんや。」

「コノカちゃん、変態やなんて、ひどい！」

「そうですね、変態忠夫さんの指導のおかげで三日ほどでこの実力ですから」

「・・・コノカ、チツル、それ、ほんと？」

「はいな、間違いないで、アーニヤちゃん」

「最高でも一週間あれば、わたしたちぐらいにはなるわね。」

キラリと瞳を輝かせるアーニヤは、横島に掴みかかる。

「タダオ、私にもおしえて!!！」

むーと首をひねる横島。

現段階で「転写」する事は簡単だが、それをするとメンドクさいことになる気がする。

この霊感は間違いない。

が、逆に、彼女に授けないとまったく破滅的なことになる気もするのでも確かだった。

これは「モガちゃん」の時の美神と同じだと気づいた。

霊感に従って、簡単にダイスを振ってみると、結果は「行くは地獄、引くは破滅」と出た。

程度に違いはあるけれど、どちらもヒドいことになるなら進むしかないとおきらめる横島だったが、この判断が後々の自分を救う。

なにしろ、彼は、常に地獄と共にあった人生を送ってきているの

だ。

ならば地獄があるというのならば「いつものこと」なだけなのだ。しかし破滅はまずい、未来の終局だ。

そんな意味では彼は正しい未来を選択したといえるだろう。

その力に瞳孔が開いた。

今まで効率かと集束を集中的に研鑽してきたアーニヤだったが、それが子供だましかったことが解ったからだ。

無詠唱ですら今までの集束効率化の12倍。

詠唱すれば既に倍率計算など無駄というほど隔絶していた。

今なら炎をともすだけで都市を塵に変えることができる確信がある。

もちろん、そんな力に酔うつもりはないけど、それでも無詠唱の障壁を無意識に働かせることができるようになったことや、周囲への探査を反射的に出来るようになったことはすごすぎると思った。

で、もつとすごいのは、そんな私やネカネさんですら踏破できない畏のコースを造るタダオ。

さすが魔神殺し、そう、実力差の倍率なんか数字にできないほどの相手を倒した勇者の一人。

あれほど正義の魔法使いに凝り固まっていたネギを「生きている」事中心に鍛え上げる事ができたのはスゴすぎるんだけど・・・

「なんで、ネギには大技を「転写」しないの」

私の問いに、タダオはにこやかに言った。

「あいつは、モテモテイケメン予備軍やぞ？ 魔力もチートで顔もチート、それで術までチートなんて許せるか？」

やばい、タダオ面白すぎる。

タダオがネギの成長を助けるために手を貸すことはあっても、ネギ自身の成長を阻害する行為はしない、そうネカネさんから聞いた。逆に周囲を促成栽培するのは、ネギを守る盾として選ばれた人たちが、傷つき倒れるようなことがないようにタダオが守る意志で勝手に進めていることだって言っていた。

ということは、私も守る側？

「アーニヤちゃんは今までネギを守ってきた。これからはお役返上か？」

「そんなわけ無いじゃない！ あのポケネギをここまでにしたのは私の手引きがあつてこそなんだからね？」

「そやな、アーニヤちゃんがおつたから、ネギもあんなバカのままでも卒業できたんやな。」

「あ、タダオもネギがバカだと思う？」

「ああ、あいつは真っ直ぐでわき目を振らずって評価されとるけど、真っ直ぐしか見えなくて評価ができない、直情式バカだな」

「そうそうそう！ うっわー！ やつと同じ理解者が現れた！！」

「せやけどな、アーニヤちゃん。こっちの諺でな、男子三日あわざれば活目して云々、つうはなしがあるんや。三日も目をなはしていれば、がんがん成長しとるっつうはなしや。」

たしかにねー、と肩をすくめるアーニヤ。

戦闘技術もそうだけど、治療や抵抗の無詠唱が出来るようになってるのはスゴかった。

学校でも教えているけど、無詠唱であそこまでの制御が出来るようになるのは何人もいない。

本国の治療士でも殆どいないだろう。

確かにチートだわ。結構ム力つく。

とはいえ、修行というなのフルボッコにあつたネギは肩を落とす
ていた。

「ねえアーニヤ。僕はさ、英国紳士であることを教育されて、女性
を守るとか、いや、アーニヤ、女性蔑視とかそういう事じゃなくて
ね、女性を守るって心構えがあるつもりだったんだけどさ……」

「

次々と語られる女性対戦遍歴と一度も勝てない事実。
本気で泣いてるわね、ネギ。

「あはははははは、麻帆良にきてから勝つたことがないんだよ、
アーニヤ。負けっぱなしなんだよ、アーニヤ。あはははははははは」

やばい、やばいわよ、タダオ。

壊れる寸前じゃない!!

え、一度壊す? なんで?

え、ああ、なるほど、エリート意識を粉碎して周りの期待と一度
切り離して鍛える? あ、それいいかも!!

じゃ、私も一撃ね!

「あつたりまえじゃない! あんたなんか英雄の息子ってだけで鼻
屑されてたんだから!」

がーんと打ちひしがれるネギ。

背後で「GJ」と親指を立てるタダオとその仲間たち。

みればエヴァが腹を抱えて笑い転げている。

なんだかこうやってみると、タダオを中心に一家族って感じ。

って、なんでネカネさんってばそっち側にいるんですか?

ねえねえ、ネカネさん。なんでタダオに寄り添って頭を預けてる

んです？　ねえー！ー！？

城のお披露目とネギの親族を歓迎して酒宴を開いたが、大半が未成年だと言うことを忘れていたのは失敗だった。

さすがに忠夫は平気だったが、大半が酔いつぶれていたが、悪い酔い方をしているものもいる。

トップバッターはネギだろう。

アーニヤによるトドメはかなり効いたらしく、忠夫相手にクダを巻いていた。

よせばいいのに正面から相手して、周りの大人がなにを期待していて、なにをさせようとしているかを説明すると、理不尽だと泣いている。

まあ確かに理不尽だわな、とエヴァは思ったが、ネギの周辺状況を考えると、その理不尽の斜め上を行かないと生き残ることすらできないだろう。

未だ息を潜めつつ活動をする「完全なる世界」。

その先兵となりつつあるMM元老院残党。

戦災孤児や思想洗脳された子供たちを率いる傭兵団。

ネギが魔法世界にやってくるのを虎視眈々とねらっている。

ただ、ラストピースはネギの手から表のオカルトに流れてしまった。

あのアスナが横島と仮契約をしたと聞いて驚いたが、やつの出自を思えば正しい判断だろう。

そして受け入れた横島は、全力で自分の身内を守る男だ。

それは自分の敗北すら計算に入れた完全安全を手に入れる手打った上であろうが。

あいつには自分の安全は計算に入っていない。

聞けば否定するだろうが、それでも自分の守るもののためならば、首だつて差し出す。相手の殲滅を引き替えに。

そんな相手だと見定めたアスナは、自らの身を捧げることで魔法世界との隔絶を、いや、事件の中核としての役目からの救出を事務所に依頼したのだ。

そんな意味を込めた仮契約は、アスナに恐ろしい武器を与えた。

「人狼姫の剣」

伝説の魔狼、フェンリル狼の末裔である人狼「シロ」の権能によつて召還される剣「八房」は恐ろしいまでの力を持つていた。

直接切りつけた相手から、ごっそり魔力霊力をドレインし、半径1キロまで届く八葉の剣風には属性までつくのだ。

魔力の刃、霊力の刃、気力の刃まではいいだろう、たいがいチートだが仕方ない。しかし、魔法完全無力化属性はなかるう？！

ありやチートどころではないぞ！！

本物の「八房」は「妖刀」であつたと聞いたが、AFとなつた時点で「神刀」とクラスチェンジしたようだ。

そんなAF、敵に回ればあれほど恐ろしいものはない。

少なくとも横島の従者であるうちは安心だが、ちと血でも吸つとくか、とすら思わされるチートっぷり。

恐ろしいことに霊能では横島二世と言つべき集束に優れており、シールド、剣まで再現している。

加えてこつちにも無効化の属性がついている！！

ぎゃー、まじでやばいだろ？

心からGS試験で当たらないことを祈るぞ。

・・・というか、今のアスナを倒せる奴が思いつかん。
横島が潜り込めばいいだろうが、そう簡単には・・・。
ああ、なやみがつきん。

横島さんにアーティファクトの元になったヒトを紹介された。
その女性は「人狼」のシロという女性で、横島さんの一番弟子なの
だそうだ。

私のアーティファクトをみて感激して、八房モードになったときに
でる犬耳としっぽをみて感激してくれた。

強化された聴覚や嗅覚、そして遠吠えの意味や役目を教えてくれた
のは有り難かった。

この姿になると、記憶のなかった頃の私が蘇ってきてうれしくて
弾けてしまう。

だから横島さんが止めるのも聞かずに、全力で「おさんぽ」して
しまった。

・・・さすがに不味かったかしら？ 葉山御用邸見学往復サンポ
は・・・。

ともあれ、サンポがてらにシロさんがいろいろと教えてくれるよ
うになった。

非常にうれしい。

そして、子供の頃の私を忘れないでくれた横島さんに感謝。

非常に優秀な妹弟子アスナは、先生のもっとも新しい弟子。

事務所を開いてから先生はGS助手を何人も雇っているのですが
るが、お披露目はずっとされていなかったでござる。

でも、学園祭の時に見せられた妹弟子たちは、きわめて有能でか
なりの力を持っていたでござる。

中でもクーフェイ・楓の二名はすぐにも美神殿が雇いたいと言ったほどの人材で、さすがは先生と感心させられたでござる。

が、この程弟子入りした「アスナ」は、なんと魔法で拙者の権能を再現したという者で、その力、素質、並々ならぬものがあつたでござつた。

だから美神殿に「へつどはんていんぐ」を勧めてみたのでござるが、メンドクサそうに顔をしかめたでござる。

難しい話はおいておくでござるが、アスナは政治的に微妙な立場だから、麻帆良の外に所属できないそうでござる。

それは寂しいこととござるな。

そう思つた拙者は、毎朝のコースを変更して麻帆良に往復することにしたのでござる。

日々の感じ方や、匂いの追ひ方、音の聴き方感じ方、幼いときに母上から得るであろう知識を拙者が教える。

まるで先生と拙者の子供を育てているようでござる。

「・・・シロさん、どうしたの？」

高速道路を併走するアスナをみて笑うシロ。

「何でもないでござるよ、アスナ。さあ、今日は銚子港にダッシュでござるー！」

「はいー！」

そういえば、最近すんなり高速に乗れるのでござるが、何ででござるつな？

朝市で買ってきたという魚を目の前にして、コノカも千鶴も絶句

していたのは最初のうちで、最近ではサンマの季節はサンマの刺身が食べられそうだと大喜びだ。

身が悪くなるのが早い魚は、刺身で食べられる範囲が狭い。

そういう意味では、ほぼ直送の状態なので何でも刺身でいけるだろう。

帰りがけに魔鈴の所によって荷卸してから帰るといつシロを見送って横島霊能事務所+アーニヤ+ネカネの朝があける。

日本食に毎食感激するアーニヤを可愛がる千鶴。

事務所内で平然と使われている魔法を「霊能」と偽っている事実
に驚きを隠せないネカネ。

そして「いつまで日本にいるのかなー？」と聞き出せないネギと、まあ、スプリングフィールド御一同様は微妙な感じだったが、それ以外の横島パーティーはいつも通りであった。

かきこむようにドンドン食べる雪乃丞と横島。

うれしそうに給仕するコノカ。

眠そうだがバクバク食べるエヴァ、世話をする茶々丸。

朝練から戻ってきて朝食参加をするユウナ、アキラ、クーフエイ。
追加分を世話する千雨、そして魔鈴。

「おふぁよー」「くうー」

寝ぼけ顔の愛子と子ぎつね形態のタマモが現れたが、小夜とユエが現れない。

どうした、と横島が聞くと、今日は寮の方で寝ているそうだ。

事務所だと惰眠をむさばれないというのがユエの意見。

まあいいさ、と笑う横島。

「おはようございます」「おやよーございます」

高音と愛衣も現れると、ほぼ全員集合だ。

「おや、拙者を忘れておりませんか？」

「いや、だって、あさから天井裏にいたたる？」

「ご存じでしたか、これは修行不足。」

ひらりと天井から降りた楓だったが、驚いたのはウエールズ組だけ。

「じゃ、ドンドン食べて、がんがんいこう！」

「「「「「はーい！」」「」「」」

「あ、横島、今日俺有休な」

「お、デートか？」

「・・・一応修行だよ。俺たちの妙神山行きを聞きつけて、自分も鬼門に挑戦するって聞かなくてよ・・・。」

あー、と頭を抱える横島。

「一応、インスタント技は・・・」

「効くと思うか？ どっちかつつと、あの女は秘匿された魔法に向いてる性格だぞ？」

「あーあー、なるほどな」

といいつつ横島と雪乃丞は高音を見つめた。

「な、なんですか？」

ちよつと赤くなった高音をみて、大きくうなだれる雪乃丞。

「やっぱよ、おめーってすげーわ。」

「そっか？」

意味が分からぬのは高音ばかりなり。

一般的見解で見れば、高音と弓は相似である。

が、横島霊能事務所とのつきあいで、かなり丸くなった高音をみると、その偉大さを感じる雪乃丞だった。

ともあれ、弓自身が変わるためには雪乃丞自身の成長も必要だろう。

まあ、それなりにネタ技なんかを練習している時点でかなり丸くなっているわけだが。

本日中に「転写」した火の系統の魔法を固めたいというので、早々に行かなければ拗ねるんだよ、とか言っている姿は「のろけ」だったが、事務所員からは好意的にみられていた。

「じゃ、いつてくるわ」

と、魔鈴の店の異界方向へ消える雪乃丞を見送って、本日の修行が始まる。

雪乃丞から事務所員の半分がGS免許受験をすると聞いて弓は驚いた。

学園祭でみている実力をみれば間違いのないところなのだが、それでも「霊能」ではない。

そのことを指摘すると、雪乃丞は困ったように説明した。

あの魔法の数々は霊能をベースにしているので、霊波は出るし霊的攻撃にもなっているので試験通過も難しくないという。

なんというズル、と思ったが、霊能の家に生まれて霊能開花に苦労しなかった自分がいっても無駄であることを自覚して黙った。

それよりも、中学生の受験は問題ないだろうか、と試してみると政治的には魔法世界からの亡命扱いになるので問題すらされないだろうと言う。

ともあれ、逆説的に弓が魔法を持っていても雪乃丞経由なので問題にされないと言う利点もあるわけだが。

それにしても、雪乃丞から聞かされた横島の弟子の実力は高く、そのうえで妙神山に行くというのだからすぎる。

だから無理を言い自分も連れてゆくように説得し成功したが、今の実力では怪しい。

そんなわけで、特訓につきあってもらうことにしたのだが、かなり微妙だと言われてしまう。

近接戦闘を得意にする水晶観音と「舞」はかみ合いが悪いというのだ。

確かに、あまりかみ合わないかもしれない。

というか、何となく、イメージに合わないかしら？

そんなわけで、イメージ変更をしたところ、がっちりあってしまっ
うキャラがいた。

近接戦闘のトンデモキャラ、「サクラ」。

波動、昇竜、旋風、どれをとってもイメージできる。

なにしろ自分の恋人が放った技だ。

加えて、超必殺技の方にも心当たりがあった。

いけない、自分がこれを使っているイメージが明確に出来る。

派生技で「ユリ」もいける。

というか、そっこのほうがいいかもしれない。

ああ、悩みますわ。

雪乃丞なら、どっちもやれよ、というんでしょっけど。

ああ、迷いますわ！

そろそろ妙神山行きの準備をしている俺たちの元に、美神さんから連絡があった。

曰く、「エヴァちゃんのアーティファクト、ドンドン使いなさい！」だそうだ。

まあ、使うこと自体は問題ないし、訓練でも使えるのでおもしろおかしく使っていたのだが、さすがに理由が知りたいな」と言うことで事務所におじゃましてみると、目を血走らせた美神さんが出迎えてくれて、そのまま拉致られた。

なんでも、最近始めた500万以下の仕事が好調すぎて報告書が間に合わなかったそうだ。

そんなわけで、我が従者軍団を召還して、愛子空間で報告書作成をしたところ、どうにかこうにか間に合って、万々歳。

ご機嫌の美神さんの奢りで夕食会を開いたのだが、疑問解消していないことを思い出し聞いてみると・・・。

「じつは、エヴァちゃんが使った道具は、信じられないほど強化されてるし、うちにはない知らない道具は、いつの間にか入庫されてるの」

美神さんは道具使いだ。

見知らぬものでも何でも、本能的に使い、組み込むことが出来るで、そんな美神さんの倉庫が、使っても使っても中身が尽きない霊具倉庫になったとなれば話が膨らみ大きくなる。

なにしろ、あの美神さんに人件費しかいらなくなるのだ。

・・・そりゃ儲かるはずだ。

今のところ、人件費だけを考えれば、200万以上なら引き受けるというオカルトGメンびっくりのプライスダウンで、横島がいたころに通じるノリになりつつあるという。外から見ている神父な

ど、「やつと美神くんが改心してくれた」と泣いたそうだが、内情を知っている隊長は苦笑いだそうだ。

「まあ、肖像権がわりと思ってくれ」とエヴァが言うと、月間使用量とか未知のアイテムなどの話で盛り上がっている。

「クオン」「クウン」で会話できてしまっているアスナとシロは既に別世界だし、タマモもそれに加わって、ペット喫茶の勢いだったりする。

亡命とか、移住とか言う話はあるが、個人的につきあえば、こんなものだよ、と笑う横島だった。

第十七話（後書き）

明日菜のAFはハリセンではありませんでしたw

16人狼姫の剣^{シロ} アスナ

- ・見た目人狼化
- ・体力、魔力、攻撃力・特殊能力も人狼準拠。
- ・霊波刀の顕在化（霊・気・魔・無効化属性付与）
- ・神刀「八房」召喚（霊・気・魔・無効化属性付与）
- ・文殊による追加効力合成可能

個人戦闘上、一番のチートは横島ですが、マホラのチート一番はアスナですかね、いまのところ。

12/11 ちょこつと修正しました

第十八話（前書き）

第十八話です

やってきました妙神山、ちょっと矛盾はありますが、そのへんはキャラが多いのでご勘弁w

第十八話

その風景を見て日本だと確信できるものはいない。

逆にクーフエイなどは懐かしい風景だとすら感じていた。

世界に108ある霊的拠点、先の大戦における最後の拠点、神魔融和の拠点。

妙神山修煉場

その拠点始まって以来の千客万来となった。

まず、横島忠夫が連れてきた弟子たち。

若年ながらよく訓練されており、三人セットチームながら鬼門をよく下した。

1チーム平均10秒というのだから言葉もないだろう。

加えて、一人でいけると評価された各三人（エヴァ、コノカ、アスナ）は、一流GS以上の力を示した。

最後に出てきた刀使い「アスナ」などは、鬼門＋月詠すら下した猛者ということで、小竜姫直々に鍛えるとまで言い切る。

というか、まともそうな剣士が何人もきてくれたと泣きながら横島に縋ったとか。

もちろん、正面から抱きしめて堪能した横島。

さらにももちろん、従者にボコボコにされる横島。

どこにいても横島クオリティー。

弓かおりもまた鬼門を越えた。

で、なぜかついてきた一文字も鬼門越え。
どうも鬼門は大暴落の模様。

「そっぴゃあ、一文字さん。ひさしぶり」
「横島さん、ちわっす！」

体育会系の一文字は、美神から一人前の証として独立を認められ、さらにはかなり有能な弟子を何人も抱えて育てている横島は十二分に尊敬できる存在であり、今までの奇行や評判を無視してでも襟を正して向き合うにあたがう存在になっていた。

そんな風に見てみると、自然にタイガーや雪乃丞の言う「横島像」がスツと入ってきて、そして理解できた。

そう、いま感じている「横島像」こそがおキ又や美神たちが感じているものなのかもしれないと一文字は思っていた。

襟を正して向き合うと、得るモノは大きかった。

多彩な制御、精密な集束、極限まで束ねられた霊能。

これが、この基礎が一人前と認められたモノなのだ、一文字は背を正した。

これがあつてこそその「おちゃらけ」なんだ、と。
ちよつと襟を正しすぎた一文字は、少しだけ盲信の道へ入り込もうとしていた。

基礎、基礎、基礎、と続く修行であつたが、実際の内容からみれば基礎とはいいがたいモノばかりであつた。

霊能の、権能の発揮と発展の研究。
振るわれる武とその修正。

半死半生まで続く特訓とその治療。

妙神山のこれが「基礎」なのだ。

横島はこの基礎を乗り越えてさらに「最高難易度」を越えていると知ると、ネギはさらなる憧憬を深めた。

むろん自分から進んで受けた「最高難易度」ではないが、歴史上数名しか成功していない試練ともなればGSでなくても憧憬に値するだろう。

確かに横島が受けている基礎は、ネギたちが受けているモノとは数段差があり、自分が受ければ「死合」だとすら感じたが、横島曰く「一週間以内にこのレベルにきてもらおう」そうだ。

エヴァはおもしろそうに笑っていたが、それ以外は絶叫。

もちろん引く気はないのでがんばるが、愛子空間での自習が増えたという。

そんな姿を見て実にうれしそうな小竜姫。

なにしろ最近着た修行者は「一か八か」「一発逆転」「煩惱全開」「死んで元々」というモノばかりで、こういう前向きな修行者がいなかったから。

この感動はどう表現しようか、などと考えている方向性は、過去愛子を受け入れた高校の教員たちに通じるだろう。

ゆえに、指導に熱が入り、メキメキと実力を伸ばすネギや従者たち。

一週間の期間より遙かに短い時間で修行を終えた彼女たちのみたのは、もやは人間同士とは思えない速度で組み手をする横島と雪乃丞であった。

一文字から見れば、すでに憧憬の対象である横島なのだが、弓にとってみれば、やっと見る対象を正すことができたと言うところであった。

自分が全く歯が立たない雪乃丞を、自分が全く目で追えない速度で組み手をしている。

しかしその速度は速いものの、間違いなくお互いに手加減しているのだ。

間違いなく二人は靈的戦闘における最高峰に近いことが伺える。

「忠夫、そろそろ体もほぐれたじゃろ。ひとつ、組み手をするぞ」

どこからか聞こえた老師の声に、身構えた二人。

「準備はいいか？」

「おう!!!!」

そこから始まる組み手という戦争は、各員の常識と想像を超えたものであった。

少なくとも、最高難易度の修行は、この先にあるのだと確信を持った各員であった。

そんななか、押さえられぬ激情を発するモノもいる。

「大老師、ワタシもシたいアル！」

「拙者も!!!!」

バカンフーと忍者が飛び込む。

「ぼ、僕も!!!!」

少年勇者が飛び込む。

「ネギ、遠距離から攻撃！ クー、楓、アーティファクト！」

「あわせるよ!!!!」

「『はい！』（アル）」

見れば横島と雪乃丞が前衛となり、中程に楓、後ろにネギ。そして直接打撃を遊撃するクー。

何の打ち合わせもなく連携するそれは、チームであった。

「ふむ、こうなれば、少し手加減をせんでもいいかな？」

始まったのは天災。

気合いで消される魔法。

腕の一振りではじかれる武器。

全く通らない攻撃。

何度死にかけたか、いや、本気で死んでいる時間すらあった。

しかし、手が人が加わる。

アスナが、千鶴が、ユエが、ユウナが、アキラが、刹那が、コノ

カが、高音が、愛衣が・・・

みんなが連携してゆく。

未だその輪にくわわれていないアーニヤとネカネはうらやましそ
うに見つめていた。

「忠夫！　いくぞ！！！」

「きてくれ、エヴァ！！！」

瞬間的に空間があいたそこに、たたき込まれる幾百モノ魔具霊具。
はじめは弾いていたが、一つ二つと攻撃が通る。

「水系と雷だ、忠夫！！！」

「よっしゃー！！！」

文珠に込めた霊力が、全く通らなかつた攻撃を通した。

この瞬間だけでみれば勝利だが、もちろんそんなことで倒れる老
師ではなく、一気に逆転して全員を気絶させた。

わりと半死半生状態の雪乃丞と横島であったが、実になれた手順

で蘇生を果たし、周囲も文珠で回復させてゆく。
回復した瞬間、最後の一撃を思い出して叫ぶモノ多数であったが、自身が届いたであろう世界を感じてほほえむ。

「ふむ、よい連携だったな」

老師のほめ言葉に誰もが歓喜した。

この一時が全員のレベルアップにつながり、二週間にわたる修行の成果ともいえるものとなった。

二回目からはアーニヤもネカネも加わり、真の意味でパーティーメンバーに加わったようであった。

アーニヤはネギパーティーに、ネカネはなぜか横島パーティーにさらにいつの間にかエロカモが十万オコジヨドルを得ていたりした。

近年まれにみる修行だったとうれしそうに見送った小竜姫であったが、もう一つの見送りもしていた。

「お姉さま、今までありがとうございましたあ〜」

月詠がネギたちについてゆくといいのだ。

内心の歓喜を押さえつつ理由を問うと・・・

「向こうの方が、血肉踊るころしあいになりそう」だからだそうだ。
凶人の勤、おそるべし。

ネギは小竜姫によって改心したものと考えているが、横島はそれが擬態だと知っていた。

ネギについてくれば、横島のAFで小竜姫と対戦できるし、あの激闘をする二人もいるのだから命がけのやりとりができるという計算があるのだろうと読んでいた。

さすが、キングオブチキン、横島の勘であった。

とはいえ、雪乃丞自身は「いいんじゃないね？」と考えている。

その程度の凶人は裏にゴロゴロしているし、弱い奴には興味なしと言う姿勢も好感が持てたから。

そんなわけで、妙神山お墨付きという押しつけで、月詠が横島靈能事務所に所属することになったのであった。

修行者達が去った後、小躍りで喜ぶ小竜姫の姿があったとかなかったとか。

どれだけ強くなったのか、そんな疑問が魔法先生側からあった。

試したいと思ったのもしようがないだろう。

が、セルヒコは後悔した。

なにしろ、正面の少女には一切攻撃が届かないのに、自分にはダメージが通っているのだから。

主に心に。

ネギや高音の実力上昇は恐ろしいまでの評価を得た。

戦闘系従者も評価が高く、夏休み明けの巡回に是非とも組み込みたいという話で盛り上がる。

が、非戦闘系の従者は、という話になったところで、一人の少女が進み出た。

「私で評価してください」

宮崎のどかであった。

彼女もまた、妙神山で修行し、そして乗り越えたのだ。

最初は手加減の魔法先生であったが、全く攻撃が当たらないこと

に苛立つてか、全力で攻撃してしまう。

が、攻撃は通らなかった。

そこから恐ろしい。

全く攻撃が通らない彼の、セルヒコの赤裸々な過去がのどかのA Fによって暴かれ始めたのだ。

最近の刀子へのアタックとその遍歴が語られ始めたところでギブアップ。

そんな光景を見ていた魔法先生の誰もが思った。

・・・ぜつたいに舞台上に上がらない、と。

続いて現れたユエもまた、攻撃が当たらない上でマリア（小）による遠隔攻撃がきまり、ガンドルフィーニを悶絶させた。

当たった場所が股間だったためだ。

そんな光景を見ていた魔法先生の誰もが思った。

・・・ぜつたいに舞台上に上がらない、と。

すでに評価も高かった従者たちの力を目の当たりにしてルチ將軍・
・・・学園長は声を上げた。

「このものたちを、魔法世界へ派遣することに異議があるモノはあるか!？」

もちろんあるわけもなく、麻帆良をあげて応援をすると言っ話になつたのであつた。

「つつことは、俺の力もあつた方がいいよな？」

現れたのは熱血筆頭外交官。

「よー、久しぶりに見てみれば、ずいぶんタフになったな？」

頭をなでられてうれしそうにするネギ。

「で、うちの部隊の教官になる話は考えてくれたか？」

「美人のねーちゃんしか指導せんぞ？」

「そりゃこまったなー」

げらげらわらうりカード筆頭外交官と横島。

「じゃ、書類とか手続きとか任せていいか？」

「おお、いいぜ。で、誰が嫁だ？」

「「「よ、よめ!？」」」

「おいおい、そういう冗談は勘弁しろよ」

「いやいや、夫婦で入港してもらった方が楽なんだよ。書類経るし」

「ならば！ この私が忠夫の妻となつてやろう！」

「まちや、エヴァちゃん！ うちの方がむいとる!!」

「いいえ、お待ちください。マスター、このかさん。この場合、種族もなにもかも飛び越えた偉業という形で、私が妻になれば・・・

そう、マスターは娘で。」

「まてまてまて、茶々丸!!」

「マスター、外見年齢をいじれない以上、忠夫さんのペド疑惑がついて回ります。それでしたら外見年齢が上の私の方が・・・」

「それゆうたら、茶々丸ちゃんは2歳やる？ロリやで。」

「お待ちください、このちゃん。横島さんの正義では、私たちも口リです。」

「・・・桜咲刹那、なぜ自分も入れる？」

「・・・は!？」

「みなさん、ここはひとつ、私が妻でエヴァちゃんがつれ。みなさんは級友という線で」

「やべえチツねえ、自然な流れだ。見た目自然だ!!!」

大騒ぎの横島従者団を大爆笑で見るリカード。
頭痛を耐えるようにしながら横島が黙らせた。
とりあえず、夫婦はなしということ。

「「「「ええええええええ」「」「」「」

不満のみなさんを押さえつつ、横島は学園長に向き直った。

「とりあえず、俺らは「イングランドゲート」も「ステイツゲート」も使わねえつす。」

「な、なんじゃと?」

驚く学園長の前に差し出されたのは一枚の手紙。

差出人は「帝国第三王女」であった。

「よんでもいいかね?」

「どうぞ」

開かれた手紙は、インクによるものであった。

「貴殿より送られた映画は、大変評判になっており、学生が作ったとは思えぬ内容に宮廷内でもファンが増えている。このたびその主演役者と友人知人を招待すると言ったと歓迎することとなった。過日臨時ゲートの開設もすんでいるので、来訪を心待ちにしている。過追記 そなたの従者ならば、たとえ真祖であろうとも受け入れ、守ることを誓う。」

目をしばかせて、そしてがっくりうなだれる学園長。

してやったりという顔のリカードと横島。

そんな横島の裾を引くエヴァ。

「どや、エヴァちゃん。細工すればどこにでも行けるしだれとも会えるんや」

感涙、そんな言葉のままのエヴァは、横島に飛び上がり抱きしめ、声を殺して泣いた。

それが感激の涙であることは間違いなく、そしてその光景こそ光の光景だと言えるものであった。

「しかし、横島君。イングランドゲートのほうが安全じゃぞ？」

その言葉に横島は首を横に振る。

「あー、あつちはだめっすね。」

「なぜじゃ？」

「・・・たぶん、行くまでは安全で、行った後でデッカい事故に巻き込まれつつ破滅するって卦がでてるっす。」

「・・・」

「それに、そのMM元老院ってところが安心できないっすよ」

なにしろ、と自分にかぶりついていうエヴァを撫でつつ、歌うようにほほえみながら、

「真祖に妖怪、半魔なんつうのがいたら、絶対正義の魔法使いたちが鼻息荒くおそってくるでしょ？」

なんて言うものだから、魔法先生たちはおるか魔法生徒たちも視線を逸らした。

「ま、第三王女は、ネギのお父さんに救われた事もあるつつうことだし、ネギもその話も聞けるぞ?」

「ほんとですか!?!」

「おう、本人からの手紙で、そういうことを書いてあったからな。楽しみにしてる?」

「はい!?!」

うれしそうに微笑むネギをみて、学園長はあきらめた。

確かにネギの生い立ちの不幸や事件の背後には、常にMM元老員の陰が見え隠れしていた。

それから守るために日本の麻帆良へ呼び込み、そして表のオカルトへの亡命ルートまでつけたのだが、現実はかくも縮れるものかのため息がでる。

唯一の救いは、そのファクターである男、横島忠夫が思いの外頼れる存在で、さらに言えば最強の部類、いわばGS世界のジャックIIラカンであったことだろうか?

本人たちが聞けばお互いを否定するような感想だが、周囲の見解を聞けば間違いないだろう。

「つつうわけで、八月に入っつてすぐに、ネギの従者と俺たちは魔法世界にわたります。お土産待っててね」

ぶらぶら手を振る横島に、思わず魔法先生全員が手を振ってしまったことを記載しておく。

七月開きの8月3日。

世界樹を媒介にした仮設ゲートが開いた。

何の気負いもなく飛び込んだ横島に続き、雪乃丞が、ネギが、従者たちが飛び込んだ。

魔法先生たちがそれを見送りしばらくすると、ゲートは閉じた。約一月にわたるであろう魔法世界旅行の始まりであった。

帝国第三王女の招きで歓待されている横島及びネギー一行は、絶叫に迎えられた。

まあ、絶叫したのは王女で、驚いた対象はネギだった。

「う、う、う、うそじゃろ？な、嘘だと言ってくれ。この品行方正のいい子ちゃんが、ナギの息子じゃと!?!」

うそなのじゃー、と妙齢の女性がゴロゴロ転げ回る姿はすごかったが、なぜか見慣れたものに思えたのであった。

「王女、王女、お耳を拝借」

そういつて横島はささやく。

英雄の息子としての重責、ままならぬ現実、それでも高まる期待、挫折……

「・・・というマイナス要因を一切省かれて、純粹培養されるといふようになります」

指さされたネギは、「えへへ」とか笑う。

もちろんアヤカ鼻血。

「くそあ・・・そうであったか。リカードがしきりに旧世界に行くから何かと思っておったが、こんな「ネタ」があつたとは・・・。」

品行方正のナギの息子なんてネタがあれば、どんなに苦労しても見に行つたのに！ と地団駄王女。

しかし、もっとすごいネタがあるよーというと、目をきらきらさせる王女。

「な、なんじゃ？ 真祖にネギなんつう鉄板を越えるんじやろうな

あ？」

「もちろん」

そういつて指を鳴らすと、AF稼働状態のアスナが元の姿になる。

「あー、おひさしぶりです、テオドラさま」

「なんじゃとー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

飛びつき抱きしめのぞき込みまた撫でて、十二分に堪能して再び驚く。

「な、な、ななななな！ー！ー！ー！」

何で！と声に出す前に、横島が口をふさぐ。

しばらくもぐもぐしていたが、落ち着いたところで会話再開。

アスナが実は魔法世界の人間だったこと、そしてテオドラの旧知であったことが横島から語られたところで、彼の従者にもその真実は知られていないことを感じたテオドラはそれに合わせた。

旧知であることとか、昔は無表情であったこととか、そういえばとアヤカが昔のアスナを語ると、テオドラが「それぞれ」と盛り上がる。

「・・・アスナさんは何で教えてくれなかったんだろう？」

「ネギ、最近まで魔法世界のことは記憶喪失だったんだってよ」

「・・・え？」

「魔法世界の戦争に巻き込まれて、いろいろあったって言ってたぜ。」

「そうですか・・・。おつらかったんですね」

「ネギ、同情はするなとはいわねえが、同情だけで見るのはやめろ。おまえもイヤだろ？」

「・・・はい。」

「ま、いつも通りに話しかければいい、それだけだ。」

「はい。」

二度と会うことはないだろうと思っていた旧知に出会えた喜びでアスナとテオドラの笑顔は輝いていた。

「して、アスナ。そなたの主は誰じゃ？」

「・・・」

真っ赤になって視線を横島に絡めるアスナ。

「さて、真祖殿もそうではなかったか？」

「そうだが？」

じーつと横島をみた後、テオドラ質問コーナー。

「ネギの従者は何人じゃ？」

「四人です」

ノドカ、アヤカ、アーニヤ、ハルナ。

「横島の従者は？」

残り全部であった。

「……よう、英雄。色を好みすぎじゃろ？」

「……三分の二ぐらいは不可抗力やねん」

「後の三分の一は？」

「……ごちそうさま」

今ここに宣言しよう。

横島の正義は地に落ちた、と。

それをつぶさに見ていたヒヤクメの報告により、天界ではお祭り騒ぎとなり、魔界では大事件になっていた。

今まで高々と掲げられてきた横島の正義が、年齢制限が、輝く金看板が、音を立てて崩れ落ちたのだから。

歓声を上げる横島従者団。

軽く握り拳を固めるエヴァ。

手を取り合って喜ぶ娘たちをみて、テオドラは自らが年をとったことを自覚したのであった。

……ところで。

「忠夫さん、年上もOKですよね？」

「もちろん、おっけーでーす！！」

神々しいまでのルパ ダイクをみて、テオドラは旧世界の勇者の恐ろしさをかいま見た気がした。

くわえて、撃墜したエヴァに続き従者団のフルボツコも驚いたが、一分もしないうちに復活した横島をみて「さすが麻帆良の不死兵なのじゃ」とつぶやいてしまったテオドラだった。

第十八話（後書き）

正義、ついに陥落・・・！！

ヒヤクメを通して監視していた神魔は大騒ぎ、最高責任者達は大爆笑であつたそうだw

とりあえず、うちのよこっちは強行にロリは否定していきませんが、行動が伴わなくなりますw

第十九話（前書き）

第十九話です

第十九話

歓迎式典やら例の学生映画の上映会をするのだが、それまで時間があるというので、城下町を観光することになった。もちろん一人でフラフラとすると危ないので何人かで移動することになった。

が、誰が誰と移動するかで大いにもめる。

そんななか、熾烈な戦いに勝ちのこり、千鶴は横島とともに買い物に出かけた。

保育園の子供たちへのみあげを買いたいという彼女であったが、魔法世界でふつうのものでも、旧世界ではまずいものと言うのは結構あるので、お目付け役としてついてきてほしいという理由だった。むろんもちろん、その辺で疑うことを知らない横島は、にこやかに了解しつつ腕を組んで歩いていたりしてうれしそうだったりする。食材やアクセサリーをみて回っていると、周囲から視線が集まっていることに気づく千鶴。

これが麻帆良ならば気にもしないのだが、魔法世界で、それも視線が横島に向いているとなると気になる。

「忠夫さん、なんだか注目されてませんか？」

「ん？ 千鶴ちゃんが美人やからなあ。」

うれしくはあるが、それが勘違いで、横島が注目されているのだと言うと、彼は首をひねった。

自分が注目される謂われはない、と。

なんだろう、と思っていると、犬っぽい顔の少年が駆け寄ってきた。

「なーなー、あんちゃん。あんちゃんはもしかして、英雄？」

「ん？ちやうぞー。」
「えーでもー、これを同じかおやる？」

少年が見せるのは「Magics News」という雑誌の表紙で、そこには確かに横島の写真があった。

「ボン、みせてもってもいいか？」
「ええで」

手渡された雑誌には、

「二桁の従者をしたがえし英雄。」
「全従者のAFが未発見AFと判明！！」
「今あかされる魔神戦争の真実！！」
「赤き翼 高畑ⅡⅡタカミチの強化の陰にあの英雄が？」
「MM筆頭外交官が語る英雄の素顔」

と、毒々しい色合いで書かれた記事が……。

「な、な、あんちゃんやる？ な？」
「あー、ボン。書いてある内容は嘘ばかりやけど、写真は確かにワイヤ。」
「やっぱそうやー！！ ほらみてみい！ これが旧世界の英雄、タダオⅡヨコシマヤー！！」
「……………わ……………！！！！！！！！！！」

黙っばい子供たちが駆け寄り、角付きの子供たちが踊り、魔族っばい子供やいろんな子供たちが取り囲んだ。

「なーなー、あんちゃん。このねーちゃんは「これ」か？」「ええ

なー、美人のねーちゃんはべらせとるなあー」「英雄やど、びじんつれとるにきまつとるやる?」

「うちも英雄のおんなになりたいわあ」「むりむり、おまえブスやし」「さいてーや!!! うちブスちゃうもん!!!」「ブース、ブース!!!」

もう、ほとんどカオス。

「なーなー、ウチ、ぶすちゃうよな、なー?」

ショートカットの、どことなくルシオラを思わせる魔族の女の子を撫でる横島。

「かわいいやないか、うん。お嬢は絶対美人になるで。」

「ほんま? ほんま!?!」

「ああ、げつつう美女美少女みてきたワイやから解る。お嬢は絶対美人になる」

「うれしい〜!」

きゅつと横島に抱きついた少女は横島の頬をついばんだ。

「あんな、英雄さん。美人になったらお嫁にもろてくれる?」

「無茶言いなや。ワイにはもったいない。どこの王様かて頭を下げて結婚してくれちゆうて来るような美人になる女の子が、簡単に自分を安売りしたらあかん」

ほわーと頬を赤らめた少女は、ふたたび頬をついばんで横島から離れた。

「いまもろとかなかったことを、後悔させたるからな、英雄さん!」

色男！女泣かせ！なんて声援が周囲に満ちあふれ、商店主たちがこやかに嬉しそうに横島を囲む。

「ええ男やないか、英雄！」

「ごっつい気障かとおもつとったけど、感じええやんか！」

「美人連れとるけど、ええやつや！」

「おい！ 酒もってこい！！！」

「おお、飲もう飲もう！！！」

「英雄肴に飲もう！！！」

英雄はやめてーな、と頑張ったおかげで、どうにかタダオと呼んでもらうことができた横島だったが、始終隣にいた千鶴が従者ではなく「妻」だという噂が定着するのには時間はいらなかったらしい。

なんというか、魔法ってすごい・・・訳ではなかった。

アキラにとつての魔法は、横島やエヴァが基準だったから。

で、本場の魔法使いはもっとすごいと思っただけに肩すかしであつた。

そういう意味ではユウナもそう感じていた。

そう、買い物にでて、絡まれたので、横島ネタ技の「ライジングタックル」を決めたところ、我も我もと弟子入り志願者が殺到して驚いていたユエをみるまで。

アキラもユウナも巻き込まれて、混沌としたヤジウマの山の中にいた。

とりあえず、ネタ技の「真空波動」で群衆を突っ切って王宮ま

で戻った三人だったが、一部始終をみていたテオドラ王女が真剣に技を習いたいとすがりついてきた。

もちろん、お世話になってるのでとっかかりを教えたが、いまいち理解できない模様。

なにが違うのか、と三人＋角つきで考えていたが答えがでなかった。

「あ、いいところに！」

千鶴とともに買い物にでていた横島がきたので相談すると、それは適正だと言う話になった。

技には本人が向いているわざと向いていない技があるという話を聞いて真剣に聞くテオドラだが、もちろんユウナ・アキラ・ユエは胡散臭そうな顔をしている。

彼女たちは知っているのだ、その辺は思いこみだと。

「では、ワレに向いているのは？」

「ハリケーンミキサ だろ！？」「

現れた雪乃丞とハモった横島。

二人でグッドサイン。

蕭々と惑ったテオドラであったが、愛子空間から引つ張り出された「キン肉 ン」を読み切って拳を振りあげた。

「バッファ ーマンを身につけたら、次はブロッケン」なのじゃ
「！！」

そのセンス、その好みに感動した雪乃丞と横島は、ネタ技修得への協力を申し入れた。

ネタ技超人二名の協力により、帝国王宮には「ハリケ ンミキサ

」の嵐が吹き荒れることになった。

タマモ・アイコ・エヴァ、茶々丸という非人間カルテットは結構な人気だった。

エヴァは魔法界にとどろく「悪」の有名人だし、タマモも又、旧世界の王朝を股に掛けた傾国大妖怪だったりする。加えて愛子

、茶々丸とくると、もうなにがなんだかわからない集団になり、「美人だしまあいいか」という明らかに判断基準が狂いきった状態になっていたりする。

「お、あそこで騒ぎを起こしてるのは、ユエか。」

市場の真ん中でライジングタツクルをかますユエ。

春風脚を決めるアキラ。

トラップショットを決めたユウナ。

とりあえず魔法戦闘であることは周囲に理解できたが、どうやっているかがわからなくて弟子入りとか言う騒ぎになっている。

「まったく、派手よね」

「技を使いたいんじゃないで、即死しないような技がネタしかないって言うのも問題じゃないかしら？」

「かまわんだろ？ 逆に深刻にならないように忠夫も教えてるんだし」

「そうですね、あのネタ技じゃない場合、あの場の死亡人数が二桁になります。」

そうこうしているうちに、ユウナとアキラのダブル真空波動で

ヤジウマを吹っ飛ばし、王宮まで逃げ帰る三人であった。

「まあ、魔法界といっても、あいつらチートにやかなうまい」

「まあねえ・・・あ、これなに？」

「ん？ おお、いいものではないか。」

「マスター、これは「倉」にないものです」

「そうか、うん、使ってみたいがいいか？店主」

「はい、有名なエヴァンジェリンさまにお使いいただいたと聞けば、職人たちも一層気合いが入ります！」

「冗談でも皮肉でもなく、本気でそういつているようであった。

「・・・ん、これはいい魔具だ。一つもらおう」

「あ、エヴァちゃん、これこれ！」

「おお、これもいいな！」

「でしょでしょ！」

「うわぁ・・・なんつうか、女の子会話なのに場所が合わない」

彼女たちがいる場所は、攻撃用の魔具販売店。

実に物騒な話であった。

ネギは、自分の従者であるノドカとアヤカそしてアスナと刹那・コノカと共に散策していた。

横島の配慮により最大戦力ともいえる三人がついているのは、ネギ自身のガードもあるが、アスナが横島の従者となって以来隔たりのある関係に配慮したものであった。

アスナ自身が魔法世界で有名なため、常にAF起動をして人狼モ

ードになっっているのだが、実はこの姿が獣人の方々に大好評で、ぜひとも孫の嫁に来てくれとか、結婚してくれなければ死んでやるとか、大きくなったら結婚してほしいとか、もう信じられないほどのモテモテであった。

「アスナは、このまま魔法世界に永久就職やるか？」

「あのねえ、絶対これって横島さんの影響よ？」

「ありえへんわ、アスナ。こちらは影響でとらんもん」

「くう……。」

とりあえず、仮契約していただきますので、と断るという流れになっているが、しつこいになると相手を教えろとか絶対自分の方が幸せにできるとかいい募るので、最後には相手を教えることにしている。すると、「……くう、さすが英雄。」と悔しそうに引き下がる。五回も続くとオカシク感じるので、直接聞いてみると雑誌を見せられた。

そこには聞いたことのある横島の過去やら、従者の人数やら、未発見AFのことやらが書いてあった。

どこからこんな情報が漏れるんだ、と頭が痛い彼女たちだったが、一緒になつてのぞき込んでいたネギがキラキラした瞳になっていた。

「横島さんってすごいんですね」

思わず視線を交わす横島従者。

アヤカはどうやってネギの感覚を正常にしようかと考えているようだったがアスナの方が早かった。

「ネギ、よく聞いて考えて」

「はい？」

「もし、あの日の夜。あなたを助けるために、あなたを助けたせい

でとおさんがしんだとするわ」

「……!!」

「その事を、誰もがほめる。あなたのお父さんはすごいわ、あなたのお父さんがすてきだわ、あなたのお父さんを誇りに思うわ」

「……」

「いま、横島さんをすごいと思ったネギは、そういう人と同じよ」

じわりと瞳を潤ませるネギ。

雑誌を貸した獣人も、ばつが悪そうに頬をかいていた。

「横島さんを身近に知る私たちは知っていなければならぬわ。あの人は英雄なんかじゃない、ただ巻き込まれてそれで英雄に祭り上げられてしまった人なんだって事を」

「……はい。」

意志を込めた瞳で見つめ返すネギ。

そう、知っていたはずだ理解していたはずなのだ。

だが「英雄」という名の甘い毒は、周囲の人間も気づかないほどゆつくりと本人を苦しめる。

だから私たちは気づいていなければならない。

彼がどれだけ傷ついていて、そしてそれでも笑っていてくれるかを。

熾烈な戦いに敗れたクーフェイは楓・小夜と共に演奏をしていた。市場で見かけた月琴のような楽器を使って演奏していると、楓も同じような楽器を見つけてきて、さらには小夜がネクロマンサーの笛を使って演奏を始めた。

誰もいなかったその広場に、いつの間にか満員御礼の観客が集まる。

お捻りやら食べ物なんかを持ち込まれて、アンコールやらリクエ
ストが飛び交う。

曲にあわせて歌う人や、楽器を持ち込んでセッションを始めたり。
それはまるで音楽の祭典のようであった。

「たのしいアルね」

「そうでござるな」

「・・・すんっごくたのしすぎです!」

しみるような響くような、そんな音色を広げつつ、彼女たちの演
奏会はずいぶんと長く続いたのだった。

高音と愛衣に請われて組み手を受ける雪乃丞であったが、周囲に
集まってきた王宮兵たちにはうんざりとしていた。

テオドラから無理に手合わせを求めないように厳命されているせ
いか、一応絡んではこないのだが、組み手や訓練をしていると、遠
くから観察してくるのだ。

そろそろ我慢の限界だ、とおもって組み手を中断してのぞきみし
ているあたりに瞬動してみると、かなり驚いているようであった。

その、女官が結構いっぱい。

「あー、その、なんだ、何のようだ?」

その一言で「きゃー」とか喜ぶ女官たち。

思わずため息の雪乃丞は、もしかするとこれは、と思に至る。

「もしかして、高音たちをみてたのか?」

するとブンブン首を横に振る女官たち。

「もしかして、俺をみてたのか？」

今度は縦振り女官S。

「・・・楽しいか？」

「かつこういいです！」「すてきです！」「うつくしいです！！」

結構好評な様子に、人生的な懷疑を覚える雪乃丞。

「あー、なんだ、みるのはいいけど、仕事はさぼるなよ？」

「「「はい！！」「」」

まあいいか、と諦めて組み手に戻る雪乃丞であった。

遊びに来ていたりカードと切り結んでいた月詠が、全身骨折状態で戻ってきたあたりで式典の時期になった。

とりあえず文殊で回復させると、感激のあまりに横島に飛びつく月詠。

死なない限り無限に戦い続けられるなんて幸せだそうだ。

まあ、静かにしていること聞いてれば世話する、と横島にいわれ、嬉しそうに横島に侍る月詠であった。

それはさておき、王宮大広間で行われた式典には、従者たち全員が招待されており、扱人も賓客であった。

で、テオドラの左右に横島とネギが配されていて、和やかに会談している風景が国内中継されていた。

方や、三界の英雄、横島忠夫。

方や、魔法界の英雄の遺児、ネギィスプリングフィールド。中継に値する映像であった。

テロップには、現在旧世界でネギは修行中であり、その師の一人が横島忠夫であることが流れ、視聴者の感心をあおった。かつての英雄の遺児を、もっとも新しい英雄が育てる。

なんとも伝説的な光景ではないだろうか、と。

そんな画像に緊急報道のテロップが流れた。

メガロメセンブリアのゲートが何者かに破壊されたというのだ。

さらに、その映像が公開されると、驚きが広がる。

そう、英雄の遺児がゲートを破壊している映像が流れているのだ。

ありえない、と絶叫が響く。

そう、ありえないのだ。

リアルタイムで流れている映像とは別に、ここ数日のネギは城下町を散策していて、それは完全に目撃されている。

それこそ間違いない事実である。

ならばこの映像は？

「欺瞞だ。かつての英雄の遺児を貶める欺瞞だ!!」

「そうだ、かつて紅き翼も落としたじゃないか!!」

「くそ、あいつらはまた同じ手かよ!!」

「俺たちはだまされないぞ!!」

帝国国民はその情報を信じなかった。

だから、ニュース映像と共に流れた賞金情報を無視する。

その速報を聞いて苦笑いの横島。

「これが、そなたの懸念か？ 横島忠夫」

「あー、ここまで派手だとは思わなかった」

「アーニャとお姉ちゃん、無事でしょうか？」

「ん？ ああ、まあ、大丈夫じゃないか？」
「でも……。」

心配そうにするネギに横島は真剣な顔で聞く。

「もし、あの白いのがでてきたとして、老師に立ち向かうのと同じの、どっちが安全だ？」

「……横島さん、僕が間違っていました」

うんうんと頷きあう二人だったが、テオドラは笑顔のままささやく。

「（あとで詳しい話を教えるのじゃ）」

もちろん聞いた後で聞かなければよかったと思うテオドラではあったが、それは未来の話。

時はちよこつと遡って、イングランドゲートの魔法世界側。麻帆良から魔法先生が来るということでネカネと共に出迎えにきたのが間違いであった。

転移されてきた魔法先生と、なぜか白髪の男の子が戦っている。魔法禁止区域でなにをしているのか！ と思っただけど、ネカネさんについて隠れた。

戦闘が始まったら身を隠す、これ鉄則。妙神山の常識。すごい勢いで破壊が始まったり悲鳴が聞こえたりすごいなんのって。

こりゃ、全滅かしら、と思っっているところで、戦闘現場から驚きの声。

「・・・まさか、貴様等がいるとは思わなかったぞ、ネギィスプリングフィールド!!」

え？

思わずネカネさんを見ると、狐耳とナインテール。

あ、アーティファクト、ね。

ネカネさんのAFは攻撃的ではないけど、えげつない。

あの老師ですら一度は戦闘不能にした程だ。

で、白髪はどうもボケネギを知ってるらしい。

ちよこつと魔法で様子を見てみると、かなりの超人戦闘をしていたりする。

というか、ボケネギあそこまでじゃないわよね？

それにちよつとカツコいいし。

さすが幻覚ね。

「くそ、やはりあの男に弟子入りしたというのは本当だったのか！

」!

「ならば、この後は解るよね？」

嫌みつたらしく指を鳴らすと、信じられないほど精密な魔法陣が現れた。

「くそ、神魔捕縛結界だとお!？」

「永遠に眠れ、軀!!」

「くそおおおお!!」

体を四散させながら転移を繰り返す白髪。

というか、幻覚ネギに向けてランダム転移をかける。

が、かなり精密な魔法陣でレジスト。

「じ、このままでは、このままでは終わらないからな!!」

転移した白髪を見定めた後、深くため息をついてネギは消えた。

「どうだった？ アーニヤちゃん」

「すごかったです、ネカネさん」

ニヤリと笑う私たちは、石化した魔法先生たちの救助に向かった。

急ぎ体を変え、情報操作をした白髪であったが、責任を押しつけたはずのネギは、リアルタイムの電波で帝国で会談中であることがしれた。

つまり、再びしてやられたのだ。

あの師にしてあの弟子あり。

あれほど精密な躯を、あれほど遠隔地にいながら操るセンスと技術に脱帽せざる得ない白髪であった。

ゲートポート破壊に関する短編映像が、魔法先生及びネカネ&アーニヤ組によって持ち込まれた。

幻覚ネギカッコいい、と評されて、本人ネギは大いに落ち込むが、現地の映像には幻覚ネギは写っていないかった。

まあ、幻覚との比較はそんなもんだと横島は笑う。

ともあれ、その映像は帝国発の映像としてニュースとなった。

ニュース映像の撮影者は魔法先生の神多羅木。

インタビューなんかも受けてもらって信憑性を増させている。

加えて、イングランドゲート破壊犯である「白髪」の指名手配を

訴えた。

実に遠回しにネギを支援しているわけだが、ネギ本人はあまり気づいていない。

大体はそう言うものなのだ。

第十九話（後書き）

ネギ、明らかに格下扱いですが、しかたありません。
ラカンが何人もいる状況なんですからw

ちなみに、ネカネさんは横島従者入り記念AF表です。w

18 幻影女王の灼丈（タマモ） ネカネ

- ・ 見た目が妖狐化
- ・ 嗅覚聴覚の上昇（+15段階）
- ・ 幻影幻覚の無条件成功
- ・ 火系統の魔法強化（+15段階）
- ・ 狐火の召喚（霊力・魔法力・気力の属性付加可能）
- ・ 俊敏性の上昇（+15段階）
- ・ 文殊による追加効力合成可能

・・・ネギはあと何人NTRされるんですか？ と聞かれました。
あと・・・？ですw

第二十話（前書き）

第二十話です

ちーとだなーw

第二十話

魔法先生たちも加えた一団は、帝国の賓客として遇され、記念上映会にも招かれていた。

そう、あの学園祭の学生映画が、きわめて好評だったので上映会をしておしまおうという話になったのだ。

「ご存じ神多羅木先生も「なぜか」撮影協力しており、周囲の王族たちに誉められて真っ赤になっていた。

真っ赤になるシチリアンマフィア。

つける、という事で3Aメンバーは露骨に撮影をするのであった。

初めて見たというメンバーもいて、ボロボロに泣いている。

ユウナとアスナも始めてみたらしく、大いに泣いていた。

「よごじまざーん、これ、DVDにじまじょうよー！」

「うちでもみたい……おとうさんにもみせるう……。」

明石教授は二号試写に見に来てたというと、怒りに燃えるユウナ。

「ひどいひどい、こんなにいいものを教えないなんて!!！」

見回せば身内でも結構冷静にみれていないのがわかった。

あの雪乃丞ですら目を潤ませている。

「って、おまえ何回みてんだよ、と思ったけど、まあいいさ。」

「して、横島忠夫。これは続編など考えておらんのか？」

「いや、だって、高校三年最後の文化祭の映画だぞ？」

「……続編はつくらんのか？」

「じゃ、さ。魔法が表に情報開示できたら、紹介するよ。監督と脚

「本家」

「よし、我ら帝国は、独自路線で表のオカルトとの融和をはかるぞ」

そんなテオドラに笑いかける女性が一人。

「あら、独自なんていわないでくださいな、テオドラ様」

「なんじゃセラス。」

「我がアドリアーネも協調路線を求めていますのよ?」

「・・・誠、か?」

「ええ。はじめから考えておりましたが、この映画に心動かされて、と言った方が聞こえがいいかしら?」

「ふふふ、そうじゃな。」

そんな角のつき合いを、ぼーっとみている横島だったが、左右に立った妖狐と真祖につつかれる。

「(なに、ぼーっとしてるのよ)」

「(いやな、ええ乳しとるなーっ)」

「(忠夫、それが辞世の句か?)」

「しゃーないやん! 美人と美人が向かい合ってビリビリしとるんやぞー! こわいやないか! せやったらせめて乳の鑑賞でもしとらにややっとなれへんわ!」

なんとというか、ここまで真っ正面から正直な心の叫びはなかっただろう。

さすが「英雄」。

俺たちの出来ないことをやり遂げる。

そこに痺れる憧れる、と盛大なる拍手とウエーブが会場を包んだ。照れたセラス総長はしゃがみ込み、怒りのテオドラの「ハリケーンミキサ」が唸りをあげる。

公式行事で初めてお披露目されたテオドラ初のネタ技は、王家の技として語り継がれることになったのであった。

上映会の後の酒宴は、さすがに非公式ということでカメラは入っていないかった。

やっと息が抜けるとイスにタレる横島とそれを支えるエヴァとタマモ。

公式に二人の主として管理下にあるという表明のための席順だったが、カメラも引けたのでそろそろ崩壊だろう。

初めてはなつたハリケ ミキサーが絶好調であったため、諸侯に向けて連発したテオドラは現在特設反省房に放り込まれている。

出てくる頃には「青春万歳」とかいつているに違いない。

それはさておき、王族と王権族だけになったとたん、堅苦しいのりがなくなつたのはありがたいが、全員が雑誌片手に真実とやらの検証にきたのには、さすがの横島も困っていた。

一問一答で真実と嘘を判定していくだけでどうにか納得してくれたのはありがたいが、いろいろとこの情報の出元がわかってきた気がした横島。

「ほう、誰から漏れたんだ？」

気配にさといエヴァの問いに、ため息一つの横島。

「たぶん、魔界だな」

「ヘラス帝国は魔族流入があるからな。そう言うこともあるだろう」

「この辺の情報の密度と、この辺をしらないっぷりは魔族だろ・・・」

雪乃丞も思い当たったようだ。

「あー、人間以上の情報があるってことは、あいては蝶の嬢ちゃんか？」

「そうだろうなあ。パビのこったから、おこずかいでつられたな」

まあ、お仕置きだな、と苦笑いの横島。
こちらも苦笑いの雪乃丞。

「とはいえよ、しばらくぶりにあえて嬉しくて、口が軽くなってたんだらうよ？」

そう言うこともあるな、と思案顔になった横島。

「おお、英雄も飲んでください」

「英雄はやめてくれて、国王」

互いに酒をつぎあって乾杯。

「しかしな・・・、成した事実だけでも英雄だぞ？」

「それは、誰かの不幸があつてこそその事実です。人の不幸の上に立つ英雄など不要ですよ」

「英雄、人を助ける立場全員がそうではなかるう？」

まるで禅問答のように言葉を交わす二人をみて、ネギも加わりたかったが加われなかった。

横島の痛みを知っていたが、それでもそれは偽りの知識、そう感じているだけのものだから。

「おっさん、こいつはな、英雄っていわれるたびに自分で殺した女を思い出さされているんだ。勘弁してやってくれ」

「……すまん」

やはり盟友、伊達雪乃丞。

一番のトドメを刺しつつも救う。

こんな友人が自分もほしかつたと、ネギは心から思っていた。

別の時間、別の歴史には確かに居たはずであったが、ここにはいない。

そんな存在はいつか得られるのかもしれないが、其れはまだ未来の話であった。

以降、国王自身が名前で横島を呼ぶようになったことから、王族も王権族も「タダオ」と呼ぶようになり、結構素早く周囲になじめた横島であった。

逆に従者たちの方が置いてけぼりにされていってしまったほどに加えて雪乃丞も大いに気に入られた。

無骨な気遣いと女官からの人気が噂になっており、王権族でも話したいと願っていたそうだ。

苦笑いで王権族の子女や武官たちと話す中で、なぜかネタ技の話になった。

「あれほど多彩な技の体系は、いずこの修練場で？」

テオドラどころか、最近市場などのもめ事の際に繰り出される従者たちの技の数々を見知っているものたちの質問だろう。

もったい付けるのも何なので、横島たちは「単なるサブカルチャーのネタ技です」と正直に言ったが通じなかった。

ならば、と愛子が自分の異空間から、様々なゲームハードやソフトを引っ張り出す。

そしていきなりゲーム大会となり、王族は「旧世界」との交流を

堅く決めた。

とりあえず、最新ハードとソフトの輸入を目指して。

武官たちがネタ技に走りつつも上手くないと言っ迷走状態にある中、テオドラの「ハリケーンミキサー」は絶好調であった。

やはり「角付き」には絶好の技だという評判だ。

宮廷内で嵐が吹く中、外からも嵐がやってきた。

その名は伝説の傭兵「ジャック＝ラカン」。

「よーよー、ここに伝説の神教官がいるんだってえー？」

にやにや笑いながら、片手挨拶で王宮に入ってくる。

「なんでも、あの、才能皆無のタカミチに魔法を教えたばかりか、あの「ナギの息子を弟子にしてるってえー？」

もちろんダツシユで逃げる横島。

やっぱり回り込まれた。

「なーなー、その神教官って、だれだかしらねーかー？」

がつん、と肩に手をおかれた横島は、にこやかに笑いながら答えた。

「し、しらねーなー？」

だめだった、全くだめだった。

「まあ、そんなの関係ねえから、いっちょ殺しあおうぜ」

直球だった。

それは、何というか、表現に困る光景だった。

観客として集まった王宮武官や王族はどん引きであったが、彼らの従者は大いに盛り上がっていた。

さすがにこの超人戦闘は無かるう、と聞いてみると従者の一人がにこやかにほほえむ。

「横島さんの師匠との組み手を思えば、ぬるいですよ?」

こ、これで?

「双方ともに必殺技を使っていませんし」

いやいやいや、障壁が壊れるばかりの魔力たっぷりの技が!!

「ネタ技は即死させないための技ですよ?」

にこやかな笑みの、そう、童女のような笑みの少女はちょっと陰のある顔になった。

「どうしても通したい攻撃があるなら、あんな正面から勝負するはずがありませんわ」

金髪の少女も苦笑い。

と、つまり、これは、ネタ合戦なのか?

そんな疑問の中、間合いを取った二人の力が、一気に膨れ上がった

た。

「エターナル・ネギ・ファイバー！！！！！」

「超級霸王ネギ影弾！！！！！」

真っ白になった空間と同時にその闘技場が吹っ飛んだ。

旧世界の従者たちは予想済みだったらしく結果が張られていたようであったが、もちろんほかの方々は吹っ飛んだ。

爆発の中心では、大爆笑の二人の男。

なにしろ決め技は「ネギ」に修得させようと考えていたネタ技だったからだ。

啞然とする帝国王族であったが、いち早く我に返ったテオドラのハ ケーンミキサーが決まった。

「王宮を破壊してどうするんじやー！！！」

「ぶぼろっ！！！」

ともあれ、飛んでも格闘に吹っ飛ばされた王宮の一部再建の費用を稼ぐため、闘技大会が開かれることになった。

優勝者にはオステアの闘技大会への参加資格も与えられるという。やる気満々の従者たちであったが、AF禁止令が出て鼻息は変わらなかった。

「大丈夫なのか？」

テオドラの言葉にエヴァはにやつく。

「やつらは無詠唱の方が殺傷力が高いぞ？」

「マジ？」

「まじ」

目を見張るテオドラにエヴァは周囲へ声をかける。

「おまえら、魔法の矢を空に向かって最大本数はなってみる」
「「「「「はーい」「」「」」」」」

テオドラが見たのは光や闇や雷や風や、様々な属性の力の渦だった。

空に放たれた瞬間、王宮の防空警報が鳴り響き、軍が飛び交い、非常警報が鳴り響いた。

対都市魔法の警報が鳴り響くのをテオドラは呆然として見ていた。

「どうだ、驚いたか？」

「常識を考える！！」

「ふむ、一応、死人は出ておらんし、いいだろ？」

「おまえ等、たいがいじゃな！！」

「ふふふ、誉めるな」

「ほめとらーん！！」

わははと笑う旧世界の従者たち。

こいつらを予選に出しちゃまずいと思うテオドラであった。

急遽布告した割には選手も集まり賭も盛況だった。

まあお祭り好きの国民性と主催がテオドラであることも関係しているだろう。

予選から参加させると食いついた雪乃丞にはハンディをせおわせたが、ネギにはそのまま参加させた。

なにしろメガロセブンティアがゲート破壊犯の濡れ衣を着せたこ

とで有名で、顔も出自も有名すぎた。

親子二代でMM元老院に指名手配されたということで、実に客入りがいい。

割と実力ありということで、有名賞金稼ぎや軍人崩れと対戦が組まれており、その試合を盛り上げた。

加え、彼の従者である「あやか」の鉄壁な守りは、魔法攻撃どころか物理攻撃すらネギに通さず、彼の勝利に貢献していた。

実質2対1をかけたのぼるネギは、父親たる「ナギ」の再来として注目を魔法世界中から集めていた。

いや、どちらかといえば、今注目といえば、あの伝説の傭兵「ジャック・ラカン」がネギを指導しているという噂があることだろう。たしかに、デタラメで正攻法とはいいがたい強さであった。

対戦者が「卑怯もの！」と叫んだのに対して「は？ それは美味しいんですか？」と切り替えてポコポコにした姿は在りし日の「ナギ」のようだと感動しきりの関係者であったとか。

ともあれ、その卑怯っぽい戦法と微妙な強さから、なんちゃって英雄などといわれているのがおもしろい。

そう、おもしろいのだ。

従者たちはもとより、テオドラなどの王宮関係者も舌なめずりだ。

本戦当日、会場が沸いた。

有名格闘家や聖騎士、魔法戦士などが次々と負けていつているからだ。

勝っているのは艶やかな衣装の少女たち。

その技を知っているものたちは歓声を上げる。

加えて、生存中心であったネギの戦い方が、実に雄々しく軽やかなものになり、人々の視線を奪う。

それは正に「正義の魔法使い」としてのスタイル。

誰もが思い描く正しい英雄の足跡。

試合相手も負けて納得といった風情であった。

「勝者、ネギィスプリングフィールド!!!」

歓声が響きわたる。

会場が極低周波で振動する。

それは勝者への祝福。

それは敗者への期待。

ふたたび良い試合を求め、そんな想い。

それを浴びて背を伸ばし一礼したネギは、控え室へ戻った。

三日間にわたる試合は途中シードでラカン参入やマスクドピエロ（正体ばればれ）の参入により大荒れにあれて、ネギとラカンの準決勝でまさかのダブルノックダウン。

ネタ技に見せかけて「風雷神の腕」というバグ魔法を完成させたネギの勝利かと想われたが、魔法もなにもない殴りあいにラカンが持ち込み、最後にクロスカウンターで試合終了。

事実上の決勝戦であったと評判で、夜の酒場もネギが上だとかラカンが上だとか大騒ぎになったほどであった。

ともあれ、次の準決勝は事実上の決勝だが、さすがに翌日は盛り上がらないだろうという素人の見解は大いにはずれる。

マスクドピエロとブラックターティ。

二人の卑怯使いが正面からぶつかり合ったのだ。

魔法をはらんだ拳、大呪文を込めた蹴り。

瞬動を織り交せて拳を交わす二人に声もなく集中する視線。

声も拳がらず、息すら吸えない時間の中、二人が数メートルの距離で対峙する。

「ウォーミングアップはここまでか？」

「アリアリでいくぞ」

「手加減しろって。」

「いいだろ？ 猿以外で全力出せるのなんか、おまえぐらいだぜ」

「筋肉ラカンがあるだろうが・・・」

「け、ほざいてる！！」

裂帛の気合いとともにそれを身にまとう男。

それを見て会場で声が挙がる。

「魔装術だ・・・」

「ダテだ、ダテだ、「人間以上」のダテだ！！」

わっと盛り上がる会場にマスクドピエロは笑う。

「なんだよ、大人気じゃねーか」

「へ、おめーにゃ負けるよ！！」

繰り出された拳を引き戻した拍子に、かぶりものはぎ取る雪乃
丞。

そこに現れた顔が、なぜかカメラのあっつぷになる。

瞬間、会場が再び盛り上がった。

「タダオ！！」「タダオ！！」

親しみを込め、驚きを込め、喜びを込め、絶叫のような歓声が響
いた。

すでに「英雄」の字を呼ばないことを約束した国王から布告され
たその名「タダオ」。

魔神殺しは字よりも名前で呼ばれることを選んだ。

「さつて、じゃあ、いつちよやるか!!」

「くそー、手加減しろよなあ!!」

全く正反対の言葉と同方向の意志がぶつかり合った瞬間であった。

会場中で魔法酔いのため急病人が続出した決勝戦は、僅差で伊達雪乃丞の勝利で終わった。

ただ、雪乃丞は不満であったという。

なにしろ横島は「切り札」を最後まで使わなかったから。

もちろん、その力の本質を外部に知らせるわけにはいかないのは理解しているが、それでも不満は残るのであった。

彼の世話をしたがる女官たちや高音などは正面から誉めたたえていたが、空気の読める愛衣などは苦笑いであった。

ともあれ、見事デラメーズに仲間入りしたネギは、日本に帰ったら「最終試練」を受けてみるかと横島たちに勧められた。

「え、なにかすごい修行をつけてくれるんですか!？」

「おう、越えれば英雄だ」

「……え?」

瞬間、滝のように脂汗を流すネギ。

「ま、ま、まえに聞いたことのあるせりふなんですが……。」

「ん? おお、記憶にあったか。そりゃ迂闊だったな」

わははと笑う横島に肩をつかまれる。

「……にがさんぞ?」

「……よこしまさは——ん！！ かんべんしてえ——！！！」

再び妙神山行きが決定したネギであった。

ともあれ、興業収益でホクホクになったヘラス帝国王宮は、客人である横島たちを王族が視察でゆく「オステア記念祭」へ招待することになった。

誤報と虚実で名を落としたメガロスブンティア連合は、これを機にテコ入れを考えているようであったが、ネギの訪問でどうなることや等と首をひねる一同であった。

第二十話（後書き）

判明、ラカンと同等のバグ^Wよこっち。
つうことで、雪之丞も同等です^W

そのうち強さ表でも作りますか？

第二十一話（前書き）

第二十一話です。

最強A F使用の登場です。

第二十一話

横島さんの危機回避能力はすごすぎる。

はじめの予定で動いていれば、絶対にあの「ゲートポート破壊事件」に巻き込まれていたことは間違いないから。

麻帆良の教員たちが巻き込まれたのは、多分私たちの身代わりだろうと横島さんは語る。

詳しい話を聞けば解るけど、一度イングリッドまで渡った魔法先生たちは、何かと理由を付けられて順番を入れ替えられ、急遽呼び出されてゲートを通ったと言うから。

つまり、あの犯行にあわせて順番を合わせられたのだ。

それは魔法先生の名前を借りてネギー一行が潜り込もうとしていると向こうは判断したのだろう。

そんなことを予期していたわけではないのだろうけど、横島さんはMM関係を全く宛にせず魔法世界に渡ってきたものだから事態が動く。

暴走する向こうの現場、なぜか妨害行動がハマったネカネ&アーニヤ。

そして囷としての性能満点の魔法先生。

なんとというか、はじめからこういう作戦で囷にさせたのではないかと疑いたくなるほどのハマりっぷりだ。

もちろん、イングリッドゲートの危険性とメガロセブンティアへの不信感を表明して警告しているのだから、横島さん自身の責任はないけど、それでも、あのトラップワーカーとしての腕を見ると勘ぐってしまう。

「ん？ どないしたん？ 千雨ちゃん」

なんでもない、と首を振って私は「逆転号」を手で遊ばせる。

私のアーティファクトを初めて見た瞬間、横島さんは腰を抜かした。

手のひらサイズのカブトムシっぽいそれをみて、横島さんは「なぜ、逆転号」とつぶやく。

何事だろう、と見ると、茶々丸が教えてくれた。

このカブトムシはある「兵鬼」を模したものだそうだ。

それは、

「世界108の霊場を破壊し、霊的世界征服を事実上成し遂げた三姉妹が乗っていた、それです」

思わず手放しそうになったが、なぜか手放せなかった。多分、私と関わっている、そう感じたから。

「こんなに小さいのに、すげえなあ。」

「あー、これはでっかくなると、かなりの大きさになるんや」

なるほどと思い、王宮広間で大きくしようとする、横島さんから止められた。

絶対また「闘技会」が必要になるから！と。

まさかと思って闘技場で大きくしたら、すごいことになった。

なんつうか、でかすぎだよ。

大きさの比較なんかできないけど、絶対空母よりでかい！倍以上でかい！！

さすがにみんな驚いているところで、逆転号が声を出した。

『な、なんでわしが・・・こ、これは逆転号か！？』

その声を聞いて横島さんが驚く。

「お、おまえ、トグラマゲラ土偶羅魔具羅か!？」

『その声、ポチか!！』

ゆっくりと地上に降りる逆転号はハッチを開けて私たちを招く。
戦艦の環境のような場所にいたのは土偶だった。

『そうか、おまえがわたしの召還者だな?』

わずかな時間で自分がAFとして召還されたことが解ったらしい
土偶は、いろいろと教えてくれた。

この逆転号の通常運行には殆ど魔力を必要としないことや、
ホテル並の設備があること、そして土偶経由で魔界軍のメインフレ
ームにアクセスできること。

「つて、まずいだろ、それ!！」

『なに、わたしの本体がメインフレームなのだ。写し身の私にアク
セスできないものなのだぞ』

胸を張る土偶は、この逆転号の戦闘運用時に必要な処置を教えて
くれた。

まず、戦闘運用時には「人柱」が必要になる。

これは莫大な魔力運用の要となって制御する人間が必要なだけで
あって、人柱から力を吸い取るというものではない。

加えて通常攻撃兵装は人柱の能力に依存し、その増幅を逆転号が
行う。

防御装備も同じで、人柱の能力の増幅で対応。

固定武装「断末魔砲」は「横島忠夫」の人柱と文殊の追加が必須

だが、威力はオリジナルを超える。

「・・・まずいだろ、これ。」

「ふふふ、私の召還者よ。世界を破滅させる力を持った感想はどうだ？」

「おいおいおい！」

「そら、私に一度命じれば、魔界軍が総出で神界に・・・ぶげらっ
っ！」

どこから取り出したのか、ハリセン片手に横島が微笑みかける。

「千雨ちゃん、君の特性を考えれば、この逆転号は戦艦じゃなくて前線基地になるんじゃないかな」

長谷川千雨の霊能というか魔法は、不器用なものであった。

彼女がイメージした（出来た）魔法が横島の文殊だったせいもあるが、実に効果時間が短いのだ。

結界や守備に関しても、三分と持たない。

が、それでも恐ろしいことがある。

何しろイメージ元が「文殊」。

短時間ながら超超超高出力なのだ。

試しに防御結界を張ったところ、その効果はほぼ文殊並、魔法での再現不可能強度にまでなっているのだ。

治療に関しても魂が体から離れていなければ蘇生すら即時可能で、生成の必要がない点で考えれば文殊を越えているともいえる。

が、逆に汎用性にかけるため、本人が地味だと思っっているが、チーム・パーティーという形で見ればこれほど頼りになる人間はいな

い。

たとえば、自分がどうにかこうにか倒した敵がいたとしよう。

自分の仲間も巻き込んでどうにか倒した強力な戦力。

さあ、一番いやな奴を倒した、これで一気に巻き返す、なんていつているところで、ホホイノホイと一気に蘇生、戦局が振り出しに！！なんて目に遭わせることが可能なのだ。

敵にすれば最速抹殺対象、味方に付ければこれほど守りたい相手はいない。

そんなわけで、そんな能力をAFのおかげということにすれば、それなりに身を守りやすいというわけだ。

だから千雨は「逆転号」を常に侍らせることとなった。アスナと似たような立場といえる。

さすがに逆転号でオスティアに乗り込んでまずいだらうということ、船団がくまれたわけだが、記念祭にぎりぎり間に合うだろう程度のタイミングで船は進んでいた。

というか、ぎりぎりになるように横島からの依頼であった。

「なんでなん？」

「お祭り終わっちゃったらもったいないよ」

コノカとユウナの台詞に苦笑いの横島だったが答えはなかった。言葉にできない予感のようなものだけど、それを感じているのは横島ばかりではなかった。

雪乃丞もまた、遅れてゆくべきだと考えていた。

こちらは靈感とかではなく、いままでの挑発的な行動や行為に対

して考えれば、滞在時間が少なければ少ないほどよいと考えていた
のであった。

事件が起きた現場で巻き込まれるぐらいなら、少し離れた場所で
現場を観察して緊急急行したほうがマシだと考えていた。

どうせ敵は十分な時間をかけて下準備し、電撃作戦で進めるのだ
ろう。

ならば即時展開可能な罠を多数そろえて対応するほうが良いに決
まっている。

へたに先行して知り合いでも作って人情話など持ち出されては、
行動の自由がなくなるといふものだ。

いやもちろん、助けないとか見捨てるといふ問題ではない。

何かを取捨選択するとき、切り捨てなければならぬ選択が重
すぎると心が壊れてしまうのだ。

それを身を持って知っている横島は、そういう選択をできるだけ
しないように本能的に動いている。

本人は意識していないが、麻帆良に着てからの選択の多くは、切
るべき相手に踏み込まないというスタンスが中心にある。

学園側が積極的に横島を巻き込む意志を見せなければ、ここまで
従者は増えなかっただろうし、神楽坂も従者にはならなかっただろ
う。

しかし、しかしだ。

横島は身内に数えてしまった。

美神の事務所からタマモを、前の学校から愛子を。

そして、麻帆良で多く従えた従者たち。

こうなつては守るための行動が世界を飲み込むものであつても引
かないだろう。

雪乃丞にとって横島はそういう男だ。

随行している月詠も同様に感じているらしく、小物を刈るよりも、

でっかい獲物がでてくるまで待つという方向性に喜んでいる。

・・・おもに性的な意味で。

そんな月詠放置で未だ来ぬお祭りを語り合っただけで、急報が入った。

オステアにて謎の軍が侵攻中、と。

色めき立つ帝国陣営をよそに、雪乃丞は笑った。

なにが起きてるかなんて解らない。

しかし、それは大きな喧嘩だ、と。

「いくぜ、横島」

言われた横島は苦笑い。

やはり「地獄」がついてまわる、と。

AFを構える従者たち。

発動体を構える「魔法使い」たち。

そして拳を会わせる横島、雪乃丞、ラカン、ネギ、エヴァの「でたらめーズ」。

そう、彼らの「祭り」の始まりであった。

「時間は少しさかのぼる。

オステアの祭りを記念して、祝賀パーティーが開かれた。

総統府の主催で行われたパーティーには、政財界や各王族などが出席していたが、彼らが求める来賓はまだ着いていなかった。

大戦の英雄の遺児にして帝国闘技会で見事な活躍を見せた「ネギ」スプリングフィールド」。

伝説の傭兵にして赤き翼のメンバー、「ジャック」ラカン」。

魔神大戦の功労者にして英雄「人間以上」「伊達雪乃丞」。

そして、「魔神殺し」「横島忠夫」。

これだけの蒼々たるメンバーが招待されると聞けば、話題のほしい上流階級なんていう人間が集まらないわけがなく、このほど行われたオスティア闘技祭の本戦出場者見物も含めた招待客で溢れかえっていた。

開会が宣言された後、招待客の中でも上位に位置する王族などが読み上げられ、そしてどよめきが響く中、帝国一行とともに移動中の主賓が遅れている旨の発表があると、失望のどよめきが響く。

それでも本戦シードには間に合う連絡があつたと聞き、腕に覚えのある闘技参加者に喜色が広まる。

そんな雰囲気を受けて、パーティー招待客も機嫌を立て直す。

では、いつも通りの酒宴外交の始まりだ、という雰囲気の中、主席外交官リカードは不機嫌そうにしていた。

あのメンバーで間に合わないわけがない、と確信している彼は、このパーティーに参加したくなかった横島たちとめんどくさがったテオドラの利害が一致したことは間違いない。

自分も面倒に思っているので、貧乏くじを引かされた気になっていた。

が、本当に貧乏くじだとは思っていなかったりカードにとって、それが真実になったのは一時間後であった。

全身黒ずくめ、黒い仮面をかぶった大量の騎士団がオステアを襲う。

騎士の長剣で切られた者たちはチリに消え、あらゆる属性の魔法攻撃すら効かないシールドを張っている。

防衛騎士団は見る見る削られてゆき、指揮をしていたリカードに絶望が感じられた。

いや、まだだ、と思い直す。

先ほど出動要請したウステア空軍戦艦が、すでに制圧された区域を一斉攻撃して・・・。

そう思っていたが、攻撃がいつさい聞こえない。

まさかと思い、窓をけやぶってみると、空軍戦艦の多数が黒い怪物にとらえられて地上に引き落とされようとしていた。

これでは避難できた人間まで！！

ちくしょう！

胸の内に黒い感情が開こうとしたところで、信じられないことが起きた。

戦艦にとりついていていた怪物の触手が、瞬間的に消えたのだ。

他の戦艦にとりついていていた黒い怪物も、まるで大きな刀に切り裂かれたようにちりじりになる。

もしか、と視線を向けると、そこには見たこともない空中戦艦が猛速度で接近してきていた。

空中戦艦から半月型の何か四方八方に散ると、それに切られた怪物が四散する。

なんだ、この戦艦は！？

いや、なんでもいい、この戦局を覆すものなら悪魔であっても継ってみせる！

決意を胸にしたりカードであったが、瞬動で現れた人影を見て驚く。

「忠夫、雪乃丞!！」

「よ、おっさん。おまたせ」

拳をぶつけ合うリカードと雪乃丞。

「おっさん、被害は？」

魔装術を発現し、霊波砲を連続で放つと、周囲の黒騎士団は消し飛んだ。

「・・・魔法がきかんシールドと、人をチリへと変える長剣で大半がやられた。」

悔しそうにするリカードであったが、横島たちが行う攻撃が信じられないほど効いているのを見て大きな疑問を感じる。

「おっさん、俺らの攻撃方法を「付け焼き刃」で焼き込むぞ。」

そういつて横島がリカードの腕をとる。

するとリカードは驚きで目を丸くした。

「こ、こいつぁ・・・広められんな」

その効力よりも威力よりも、身につけ易さが問題だと即時理解する。

「つつわけで、ちと、攻撃してみ」
「おう！」

霊力を基礎とした無詠唱魔法の矢を放ったところ、直撃した黒騎士が吹っ飛んだ。

ダメージは別にして、通らないはずの攻撃が簡単に通った。
つまり……

「やつらは、「魔法」しかレジストできねーってことだろ？」
「そういうこつちゃ！」

不意に溜を作る横島と雪乃丞。

気づいてりカードがフォローする中、通路の大きさを無視した光の柱が横薙する。

知っている人間はそれを見て、反撃の狼煙だと理解した。

逆転号の艦長席には千雨が。機体管制には茶々丸が、攻撃管制にはユウナが、運行指示にはコノカがついた。

そして人柱、チャンバーにはアスナが入っている。

AFによる攻撃能力もさることながら、霊力発現以降に身につけた「サイキックシールド（属性多数）」と「カンカホウ」が戦艦防御に向いているとされたためだ。

他のメンバーは下鑑し、オステア避難民の誘導と黒騎士掃討に向かっている。

一般的な魔法が全く通じない影響で、防衛騎士たちは人々の盾になるほかなく、瞬く間に散っているのが監視映像で知れた瞬間、高音は立ち上がった。

すぐに行くべきだと。

もちろん反対意見はなかった。

逆転号へ強襲メンバーを乗り込ませ、チャンバーへ「タマモ」を配備して「超加速」。

その加速力で接近したところで作戦説明が行われた。

逆転号への配備、現地誘導の手法、そして黒騎士対策。

横島と雪乃丞でオステア中心に転移し、中央部を救出。

外苑部から従者たちにより中心に向けて進軍し、黒騎士を掃討。

逆転号は大型召還獣を掃討しつつ空軍戦艦のフォーロー。

「つつわけで、いくぞー！」

「「「「「おおー！」「」「」」」」

まるでそれは絵巻のような風景だったと後に老人は語った。

騎士もかなわぬ怪物たちを、輝く武器で薙払う乙女たち。

誰もが笑顔で人々を救出し、だれもがニコヤカに敵を薙払う。

目にも留まらぬ手技の乙女がいた、信じられぬほど華麗な足技の乙女がいた、幾人にも分身し、そして敵を押し返す乙女がいた。

誰もが可憐で、だれもが恐ろしいまでに強い。

「だいじょうぶですわよ。私たちが守りますわ。」

天女のごとくにほほえむ少女を見て、老人は神世の世界が戻ってきたことを感じた。

「横島さん、この地区は制圧です。リカードさまに救援養成を、はい」

カードを顔の横に当てつつ、乙女がほほえむ。

が、老人はその会話の中で効き捨てならない名前を聞いた。

「お、おじょうちゃん、いま「ヨコシマ」っていったかい？」

「え？ ええ。」

「じゃ、じゃあお嬢ちゃんたちは、もしかして、ヨコシマ乙女従者騎士団なのかい!？」

「え？」

首を傾げる乙女に、老人は手に持っていた雑誌を見せた。

そこにはヘラス帝国主催の闘技会で活躍したネギヤラカン、そして雪乃丞と横島の特集記事が載っていた。

横島の情報には乙女ばかりで構成された従者団「横島乙女従者騎士団」なる記事が載っていて、超望遠撮影された乙女たちが移っていた。

隣からのぞき込んだ一人の乙女は頬を赤らめている。

そんな姿を見て、老人はひどい目にあつたがそのひどい目ですら目の前にした伝説の一部かの様に思えて誇らしかった。

「なに？ その横島乙女従者騎士団って？」

粗方の掃討を終えた逆転号のチャンバーからでてきたアスナがジト目で千雨をみた。

千雨とて自分が言い出したわけではないと言っているが、サブスクリーンに映し出されたマホネット情報ににやけていた。

正面から否定はするが、千雨も横島に引かれてしまっているのだ。だから彼の身内と評価されるのは、結構うれしいことらしい。

ちよつと気だるい時間を感じていると、館長席の真上の、ちよつと乙女ばい彫刻の目が光った。

なれた手つきで操作すると、サブスクリーンが愛子の顔に変わる。

「いまから避難民を逆転号に誘導するわ」

「オステア空軍は手いっぱいなのか？」

「・・・お偉い方々が、もっとも安全そうな船にのせろってウルサイのよ・・・。」

「乗艦拒否してえ・・・。」

「はいはい、艦長さんはがんばってね」

軽く笑い声をあげて、アスナは回復のための休憩にはいった。

「艦長、チャンバー内のユウナさんから『妙なものが見える』との報告です。」

「電探は？」

「反応なしです。魔力霊力ともに反応ありません」

ちよつと考え込む千雨は、横島に連絡を取った。

「（わり、横島さん。いまだいじょうぶ？）」

「（ん？ こつちもひとだんらくや。ええで。）」

懸念されることを念話すると大いにほめられた。

「（ええ判断や。ユウナにチャンバーで待機、高音に逆転号へ戻ってもらい。）」

「（わかった。後の連中は？）」

「（こつちで回収する。）」

是、の意味を横島に渡し、千雨は顔を上げる。

「ユウナ、なんかやばそうだ。偉い奴ら積んだら一時撤退。身内は

転移で回収。」

是の意が伝わってくる。

「・・・やっぱ変更。偉い奴らは愛子空間で確保のまま解放せず。一番安全だからな?」

「わかりました、そのように伝えます、艦長」

何となくだが、その偉い奴らには何かが混じってる気がする。それは絶対に間違いない。

そう、あの京都で払われた幽霊みたいな奴が必ず。でも愛子空間からは魔法ですることは不可能だ。

なら、あそこに交流して時間感覚を狂わせておくのが上策だろう。

愛子空間内ではドラゴンボール祭りが続いていた。

翻訳版の愛憎版が二セットあり、仲良く回し読みをしていた。

実はテオドラの希望によりキン マンも全巻そろっているのだが、まだ発見されていない模様だ。

もちろん、その空間で苛立っている存在もいる。

ああ、はやく24巻を・・・。

いやいやいや、なぜこの異空間に封じられていて、誰も不満に思わないのだ!?

おかしいおかしいとは思いますが、なぜ全員の口から「青春だ」という合い言葉が聞こえるのだ?

なぜ僕の口からも「青春」という単語が何かとでてくる。

彼らの船を威力偵察するために、政治家と入れ替わって混乱させようとしたのに、なぜか異空間に閉じこめられたままだった。

それを不満だと騒ぐつもりが、なぜか、本当になぜかわからない

けど、マンガを読む大人の集団の一部になっていた。

中には内容を暑く語る政治家達もあり、給仕に現れた少女も巻き込んでいる。

というか、月詠。きみがなぜここでメイドのまねを？

さらになんで「ヤムチ」を熱く語っているんだい？

わからない、わからない、わからない……。

第二十一話（後書き）

でしたが、恥作最強のAF使い千雨！！

仲間がチートであればあるほどパワーアップ。

恐ろしいAFです。

17世界破壊の箱舟（ドグラマグラ土偶羅魔具羅） 千雨

- ・手のひらサイズのカブトムシ形態で召喚。
- ・合言葉と共に戦艦サイズへ拡大。
- ・通常運用時の魔法消費皆無。（防御力は装甲のみ。攻撃力なし）
- ・戦闘運用時、防御攻撃担当者がチャンバーに入る必要あり。
- ・チャンバーの人間の能力を増幅して防御・攻撃を行う。
- ・固定装備「断末魔砲」は「横島チャンバー」+「文珠」という装備で無いと発射不可能

つえーTTT

第二十二話（前書き）

二十二話です。

えー、色々とあるでしょうが・・・スルーの方向でw

第二十二話

愛子からの報告で、精神状態まで安定させる愛子空間内ですいぶんと追いつめられている人間がいるという。

名簿からオステアの評議会員であることがわかったが、実のところ空軍巡洋艦に収容されているのがわかっている。

どちらかが偽者、となれば……

「ま、こつちが偽物でしょ？」

「そつだろつなあ、うん。」

タマモと横島はキツネウドンをすすりながら画面を見ていた。

キキとして食べていたタマモだが、不意に自分の井の中からオアゲがなくなっていることに気づき、かなり寂しそうな顔になる。

と、間髪入れず横島が自分のオアゲをいれてやると、もの凄く嬉しそうな顔になってウドン攻略を進める。

一度もタマモの方をみやしないが、横島も嬉しそつにほほえんでいる。

「せやけどなあ、どうするん？」

「そつですねえ、うーん。」

コノカと刹那が首をひねっている。

まるで双子のようなシンクロニティーにテオドラが「いやされるのじゃあ……」とか感動してる。

「そつでござるなあ、ひとつ、拷問でも……」

「出したら逃げられちゃうわよ？」

「ラカンさんあたりを入れちゃうとか……」

「愛子さんが壊れますわ」

楓の提案はいまいちであるとか鶴はいうが、ならば拷問機を愛子空間に入れようという愛衣の意見も大概だ。

高音での常識的にもあり得ない話だった。

「下手にはいつて、こっちの情報が漏れるのはイヤアルね」

「そうですね、少なくとも異常を異常と感じつつそれ以上思考できない空間で時間まで引き延ばされてますです。できるだけ足止めしたいですね」

クーフェイに珍しく戦略思考になっているところにユエの考えが重なる。

後ろ向きだが相手にとっては痛手だ。

問題は、どれだけのバックアップが相手にあるか、だろう。

『にゃー、そろそろおなかへったにゃー』

「あー、もうちつと頼むわ。」

『うにゃー』

チャンバー内のユウナに謝る横島。

「で、のどかちゃん。読めた？」

「は、はい・・・」

ネギ以外の男性に対して苦手意識を持っているノドカであったが、実のところ横島には忌避感がない。

なぜかは本人がわかっていないが、緊張や恥ずかしさでドモル事はあっても、彼自身を嫌っているわけではない。

しかし、さすが横島。

嫌われているとは思っていないが、苦手にされていると思います。できるだけ負担をかけないように意識している。が、いまは必須を先行し彼女のAFに頼った。

「いどのえにつぎ」

対象者の名前から表層意識に接続し、その内容を読みとるというものであった。

愛子空間で全員の名前がわかっているのに一人だけ読みとれない人間がいるとなれば、名前が違うのだ。

では、正しい名前は？

「フェイト、そう呼びかけてみる。」

ラカンの言葉にあわせて起動すると、でるわでるわ秘密情報の数々。

魔法世界の現状、このままで進めば崩壊するであろう魔法世界。

崩壊時に起きる混乱は大戦時のものなど目ではなく、まさに全滅級。

ゆえに、「人間」だけを救う計画を立案実行しているのが「完全なる世界」であるとされていた。

この情報を見て、魔法世界の人々は震えた。

そう、この情報では「MM」以外の「ヒト」は「幻」だと断じていたから。

憤るテオドラ、絶望に駆られる魔法使い達。

が、首を傾げる横島とラカン。

理解できないわけではないが、なんで絶望？ と。

確かに読みとれた情報は絶望しかないかも知れない。

確かに未来予想は真つ暗闇かもしれない。

でもそれは、魔法世界を魔法で救うことが出来ないというだけのことなのだ。

たったそれだけのことで、なんで絶望？

ニヤリと笑う伊達雪乃丞。

眠そうに欠伸をするジャック＝ラカン。

そして、悪巧みをする笑顔の横島忠夫。

「基本的にさ、世界の修正力って、ハッピーエンドを求めてるんだわ。」

だから、好まれない終演に対抗すると世界修正力の後押しがあるんだ、と。

それを聞き豪快に笑うラカン。

「そりゃあ、身に覚えのある話だわな」

事実、物理的な戦力など比較するのもおこがましいほどの状態で、紅い翼の彼らは生き抜き勝ち得た。

運がいいとか強いかという問題ではなく、後押しという言葉には覚えを感じる、とラカン。

「気楽に、必死にいこうじゃねーか」

絶望感で真っ青になったネギの肩をたたく雪乃丞。

「……な、なんで、何でみなさんは……恐ろしくないんですか？」

んー、ん？ と本気で疑問のある顔の雪乃丞であったが、不意に気づく。

「あー、そっか。おめー老師の本気を覚えてねえのか。」

不意に、今まで感じていた恐怖なんか目じゃないほどの恐怖が呼び覚まされる。

「手が届いてよ、時間が間に合ってよ、ダメージが加えられる。そんな相手になにがこえーんだ？」

「背伸びしてな、必死になってな、何かが出来るとて時は、緊張しちやいけねーのさ。」

「ま、毎日死ぬような目に遭ってれば、神経も磨耗するっての。」

わははと笑う「でたらめーズ」であったが、不意に視線が横島に集中する。

「横島、おめえは別だろ？」

「そっか？」

「さすがに俺も大気圏突入は無理だ。」

「わいかて、やりたくてやったんちゃうわ！」

「さすがだよなー、うん」

「おがー！ーん！ー！！！！」

床で泣きぬれる横島を踏みしめながら、エヴァは腕組みでネギをみた。

「小僧、おまえは勝てそうだから戦うのか？」

ネギの瞳に光が戻った。

「……ぼくは、救いたいという自分の意志で戦います」

背を伸ばし、そして息を整えたネギに、エヴァは笑う。

「そうだ、ネギ。スプリングフィールド。生かすのも殺すのも自分の意志で行え。その背中に背負い、それでも光に生きる。それがスプリングフィールドの名を背負ったものの宿業だ。」

「……はい。」

精神を立て直したネギをみつつ、踏みつけた足に力を入れるエヴァ。

「まったく、貴様等のような馬鹿者と一緒では小僧がつぶれすぞ？」

「いやー、でもな。」

「口答えするなー!!」

「すんまへーん、できごころやったんやー!!」

いつもの空気が流れると、周辺から肩の力が抜ける。

そう、これが麻帆帆良からの雰囲気であった。

「ま、そこまで気楽なら、なにか手だてがあるんだろ？」

「あ？ とりあえず、魔界に疎開だな。」

「……な!!」

「そのうえで、世界調査と修復。神魔の合同でやりやあ、5年とかからねーだろ？」

「……本当に出来るのか？」

「出来なきゃ、出来ないで別の異界を作って一時避難だな。規模は小さいけど、目星はあるし」

「……本気なのか、横島忠夫。」

「百億ぐらいはいけるだろ？ それに魔法球みたいにして内部の時間を遅くすれば、ヒトもふえねえし、精神負担もすくねえし。良い

「ことだらけだろ？」

軽々しく語る彼に魔法使いから詳細なプランを求められたが、横島は顔をしかめて肩をすくめる。

「出来そうな話を的面のは、あんたら頭のいい奴らの役目だろ？」

剣で戦う人間にペンを求めるな、とエヴァも笑う。

「で、可能か、ドグラマグラ。」

『可能だな。というか一枚かませると最高責任者達からの伝言だ』

「さっちゃん？きーちゃん？」

『両方だ。』

「うっわー、暇なのかよ……。」

苦笑いの横島から、神魔の最高責任者から作戦や計画のバックアップがあったことが伝えられると、魔法使い達はうめいた。

「そんじゃ、まあ、分ならず屋どもに拳骨を食らわせにいくぞ！！」

ラカンの言葉に拳を振りあげるモノ達をみて、テオドラは全く思いもしなかった方向性に驚いているのであった。

後の世に「世界脱出大戦」「世界創造大戦」「伝説の七日間」と呼ばれた戦闘は幕が開き、わずか一週間で幕を閉じた。

多くの人間が死に、多くのヒトが塵にかえったが、麻帆良からやってきた人々は、無事に帰ることがなかった。

それは多くの犠牲や決断をした上での結果だが、捕らえられていたヒトビトを取り戻したという結果も含めればマイナスではなかっただろうと魔法世界のヒトビトは評価している。

たとえそれが「幻想」であったとしても、そこにいる気持ちのいい「ヒトビト」を守ることになるのなら、彼らは再び剣をとってくると、そう語り継がれていた。

↳ The Day After + 1

魔界軍からの反応が悪いことを気にした横島が調べてみると、なんと魔法世界の時間進行が早くなっていることがわかった。

逆浦島太郎だ、夏休みを存分に楽しめると喜んでいたのはつかの間、その速度比が加速しすぎるとゲートがつかなくなる事が判明した。

さすがに帰れなくなるのは困るということで検討した結果、「文珠」しかないだろうということになった。

とはいえ、複雑な構造であり魔法の技術としては高度すぎるため呪式の再現はほぼ不可能だと横島。

が、それを覆したのはエヴァンジェリン「A」「K」「マクダウエル」だった。

横島の文珠制御能力と、エヴァの魔法解析能力があれば再生可能だ、という。

はじめは何のことかわからなかった横島だったが、一つの結論を思い至る。

「『同期』合体か？」

「そつだ。」

ニヤリと笑うエヴァに対し、横島はひきつった笑みを浮かべている。

過去、魔神大戦において切り札ともいわれた文珠の最大利用方法の提案に会議室は歓声に包まれた。

これで何とかなる、魔神殺し万歳、真祖の従者万歳といった勢いで。

作戦は即時実行された。

イングラウンドゲートの魔法世界側では、横島とエヴァの同期合体によって、光の柱が立った。

基礎はエヴァであったが、見た目はまるで美神のように成長しており、絶世の美女であるかのように見える。

『忠夫、解析』 『おう』

片手で示された空間に、精密な魔法陣が描かれる。

『忠夫、再生』 『・・・ん』

精密な魔法陣尾真ん中に、二つの文珠が浮かび上がる。くるくると回りながら、ゆっくりと光を強くさせてゆく。少し、眉をしかめつつ、美女はもう片方の手を差し出した。

『忠夫、やれ!』 『うおおおおお!!』

瞬間、美女は精悍な顔立ちの青年に変わる。

「(ち、結句ギリギリだな)」
「(小僧達の帰り道のためだ、気張れ)」

獣のごとき叫びをあげているなか、ゲートポートはまるでフィルム映画の逆再生のように修復されてゆくのが人々の目に写されていた。

無限に続くかのようなその光景が、いきなり終わった。

青年は「ポン」と音を立てて二人に分かれる。

童女のエヴァと横島が、まるでかがみ写しのように首をひねり伸びをする。

「「ま、こんなものか」「

歓声は爆発した。

ゲート管制管が昨日復旧を叫ぶ。

イングランドゲートの旧世界側から問い合わせの通信が入り、それもまた喜びに変わる。

管制室では書類が舞い、種族に関わりなく抱き合い喜びを共有した。

こうして、魔法世界の一番長い夏が終わりを迎えようとしていた。大戦で活躍した傭兵団は名をあげたし、作戦の中心となったヘラス帝国は魔法世界での不動の地位を得た。

世界復帰したアリカ王女は、望まれるままに王権を復帰させ、旧オステア国民を元とした国家樹立を宣言した。

夫にして英雄、ナギ「スプリングフィールドとともに国家運営を全うすると宣言したのはいいが、その夫が旧世界に逃亡したのがわかり、怒りの追っ手を差し向けたのは、実に仲の良い話であろう。

ともあれ、国家や政府を指導力ある人間がまとめ、そして次に実施される作戦に備える。

勝ち得た魔法世界が行える、長い長い戦いの始まりが幕開け他のであった。

失ったモノは大きく、これから失いモノも少くない。

しかし、前に進み続けるしかないと誰もが知っていた。

再びこの世界に帰ってこれるように。

この懐かしい大地が失われないように。

イングランドゲートからウェールズへ転移したネギ&横島一行は、ネギの生まれ故郷である魔法使いたちの村へ立ち寄った。

なにしろこの訪問どころかイングランド経由で帰ること事態がイレギュラーなため、いろいろと整合性をとるために時間を必要としたのだ。

滞在許可を得るために全員で村長のところへやってきたところ、大歓迎されてしまう。

すでに魔法世界での騒ぎが届いており、ネギの活躍も何もかも知っていた。

で、知らせた本人

「よ、遅かったな」

「お、お、お父さん!？」

オステアの共同統治者であるはずの、ナギ「スプリングフィールドがそこにいた。」

「けっ、俺が王様？ やるわきゃねーだろ？」

吐き捨てるように言ってから、そのうえでネギを撫でる。

「強くなったんだってな、ネギ」

「・・・うん」

実に感動的な場面だと思っっている人間多数だが、横島は違った。類希なる危険予知能力と直感力で、ナギの瞳の中の「ソレ」を読みとっていた。

「ソレ」は、あの戦闘民族とおなじ目。

「ソレ」は、ヒトの言うことを全く聞かない男たちの目。

「ソレ」は、一つの欲求をみたさんとする野獣の目。

そう、「おら、わくわくしてきたぞ」「っていつやつだ。

思わず視線を逸らしてネギの無事を祈る横島であったが、どこい成長したネギはひと味違っていた。

「でもね、忠夫にはぜんぜん勝てないんだ。」

ナンデスト!?

思わずネギをみると、実にさわやかな笑みで「グット」サイン。言われたナギも、ギギギとくびを横島に向けた。

「ほほお、おれの眼力から逃れるたあ・・・上等だ。」

一歩一歩近づくナギに対し、横島は不適な笑みを浮かべた。

「やるな、ネギ。おれを父親に当てて、力を削いだ上で乗り越えるつもりか。大人になったな」

言われたネギ、真つ青。

急遽理解し合うナギと横島はハイタッチ。

「ま、とりあえず、どこまで強くなったかを確かめてやろう。」

「ああ、一応、羅漢インパクトで無傷なぐらいには鍛えたぞ」

「そりゃうれしいな、うん。」

「そうそう、虚空瞬間も仕込んだから楽しめよ、ナギ」

「うを、まじかよエヴァ。うれしいプレゼントだぜ」

わははと笑うナギと、ドナドナされてゆくネギ。

一見は異様だが、村人たちには初めての親子の対話を照れながら進めているように見えて、涙を誘われていた。

もちろん、横島や従者たちには真実が見える。

「た、忠夫さん……。」

「ネカネちゃん、とりあえず『エターナル・ネギ・ファイバー』クラスを覚悟して結界を手配してくれ」

「む、無理です！ 本国じゃあるまいし、そんな結界師いません！」

絶望的な気持ちになったが、この村を消すわけにはいかない、という思いで横島従者もネギ従者も一つになった。

手合わせはナギの圧勝であったが、途中「エターナル・ネギ・ファイバー」がネギから発射され、結界の一部が貫通し、大騒ぎになったが、それもこれも笑い話ですむに違いないと、横島は思いこむことにした。

旧世界の国境を越える処理が出来ないという連絡が届いたのはゲートをくぐって三日目であった。

とりあえず魔法先生たちは通常ルートで麻帆良に帰ったが、横島たちは、という段階で思い出す。

逆転号があるじゃないか、と。

そんなわけで、ネギ&横島一行は逆転号で麻帆良に帰ることになったのだが、もちろんナギもついてきた。

旅費を稼がなくても世界旅行が出来るAFを持つ千雨を心底うら

やましがり、紅き翼を再結成した際には是非とも入ってくれと縋り付かれて迷惑しているようだった。

とりわけ急ぐ用もないので、通常運用のチャンバーなしで移動したところ、ほぼ一泊で麻帆良に到達した逆転号は、そのまま認識障害をかけながら世界樹広場の上空に戻ってきた。

時は8 / 15。

およそ二週間弱の旅であったが、魔法世界で一月ほど過ごしていたせいか、まだまだ残っている夏休みを謳歌できる喜びに学生たちは打ち震えていた。

「忠夫、おめーの事務所に泊めてくれよ。」

「ん？ ええけど、妖怪大將軍には話とおせや？」

「おお、わかった」

そんなわけで、一時期銀一が宿泊していた一部屋が、しばらくのナギ部屋になったのであった。

ナギ「スプリングフィールド、麻帆良滞在中というニュースは、秘匿された魔法使いばかりではなく表のオカルト陣営にも広がっていた。

サウザンドマスターの名はソレほどまでに重く、そして注目されているのだ。

加えて、彼が「横島霊能事務所」に世話になっているという事実もまた騒ぎの元になっている。

先の魔法世界での事件は、魔法世界の秘匿事項になっているために詳細が伝わっていないが、大きな事件と事故が発生して、ソレの解決に横島GSが関わっていること自体は公開情報だ。

が、それ以上の情報は「秘匿契約事項」である旨を伝えられており、協会への報告書もそのようになっていた。

もちろん、事件のさなかに「ナギ」スプリングフィールド」との交流があったことなども記載されていたが、一步踏み込むと「機密」の壁が立ちふさがる。

非常に苛立ちつつ、自分たちも公開していない情報があるので無理も言えないという状況であった。

で、そんなあたりは「表」の話で、実際に直接聞いてみようと思われたのが美神美智恵、オカルトGメントップであった。

突然、麻帆良の横島霊能事務所に飛び込むと、そこは何かというか、夢のような世界であった。

小さな人形たちが給仕をし、子供たちと対話し、いろんなお話をしてくれるお姉さんたちがいて、カ一杯遊んでくれる男の人たちがいて。

男性陣は横島と雪乃丞、そして噂のナギ「スプリングフィールド」であった。

目の前の光景を見て、美智恵は、自分の娘も連れてくるべきだったと後悔する。

いや、後悔しているつもりであった。

なぜならば、令子の事務所で子守をしているはずのシロが、なぜか娘のひのめを子供たちの輪の中にまぜて面倒をみていたから。

「これは美智恵殿。ここに用だったのですか？」

「……ええ、そうなのよ。」

霊能からカンノムシがヒドいひのめだが、霊能のあるシロやタマモを相手にしているときは「機嫌」なので、結構任せているのだが、一番のお気に入りには「にーにー」事、横島忠夫であった。

どんなに泣いていても機嫌が悪くても、横島が抱き上げるだけで

ご機嫌になり、興奮もそこそこに寝てしまつ。

ぎゅっと抱きしめるようにする姿は、大切な何かを誰にもとられないようにしているようでもあると美智恵は考えていた。

「あ、隊長。なにかご用ですか？」

超ご機嫌のひのめを抱きあやしなから、もう一人の小さな子供を抱きかかえる。

わりとワガママなひのめだけに、横島を独占できない不満を見せるかと思いきや、一緒に抱かれた子供ともご機嫌のままだった。

「あー、そのー、噂のナギさんのお話が聞きたいなーって・・・思つて。」

「ん、ああ、いいつすけど、できれば後にしてもらえます？ 千鶴ちゃんのバイト先の保育園が急な事故で閉鎖になつちゃつて。一時的に子供を預かつてるんすよ」

第二十三話（前書き）

第二十三話です。

第二十三話

とりあえず事故とは言っているが、ヨコシマンショウに乱入してきたナギが大暴れしたせいで、施設が壊滅したのだが、認識阻害のおかげでガス爆発と言うことになっている。

とりあえず、子供たちはそう信じ、親御さんも横島が預かると言うことで了解していた。

だったら、とにこやかにほほえむ美智恵。

「なら、私にも手伝わせてちょうだい。」

これでも二児の母なのよ？ と笑う美智恵へタマモのつつこみ。

「半分ぐらい投げ出してるじゃない」

ぐふうっ……

まるで血を吐いたかのように倒れた美智恵をみて、ひのめはきやつきゃと言んで見せたのだった。

美神の血はおそろしい。

スプリングフィールドより呪われているかも。

ひのめ、怖い子、と少女マンガ調でリアクションをとる横島を、周囲の子供たちがまねた。

後日、この芸風が麻帆良に蔓延したとかしないとか。

恒例夕食会で美智恵のナギへのインタビューが行われた、

とりあえず、魔法世界の事件や詳細は神魔による情報封鎖があることだけでもわかって彼女は安心した。

建前だけでも聞き出せない理由がないと、オカルトGメンのメンツの問題があるからだ。

「表のオカルトつうのも、面倒なもんだな」

「そうね、表だけに公開された問題や柵も多いわね」

その点、王政の色濃い魔法世界では、ごり押しでの情報統制も楽なので、その辺はうらやましいと語る美智恵。

「そういえば、ナギ君」

「ん？」

「君にオステアから指名手配がきてるわよ？」

「・・・ああ、知ってる」

「何したの？」

「あー、ただ渡り鳥のように生きていたいと・・・」

「・・・こう言ってるけど、実際は？」

「嫁の下でこき使われる王族稼業から逃げ出して遊んでいるっす」

「てめえ、忠夫！」

「あ、今日のバイト代」

「社長！ いや、こんちまたいいお天気です」

えへへへと笑うナギと給料袋を渡す横島。

ちっとも英雄っぽくないのに、完全に彼らっぽいのはなぜだろう、と笑える美智恵であった。

夕食を食べ終わった横島たちは、全員でストレッチを始める。

何事か聞いてみると、タマモがにっこりほえんだ。

「これから業務営業開始よ」

軽い打ち合わせを見学した美智恵は、この麻帆良という土地自体をねらう怪異や妖怪が多いことや、積年の恨みを持って西洋魔法使いを襲う関西呪術使いが多いことを思い出す。

秘匿された魔法の関係上、この都市への不干渉を貫いていたが、横島が開業して以来詳細な情報が集まるようになった。

主に月間平均出撃数や撃破数から、麻帆良の敵の分布やらが報告書の形で集まるのを見れば、おおよその状況がしれる。

物理的な襲撃数は減っており、組織分布も縮小に向いているのは魔法世界がそれ所ではないからであることは間違いない。

加えて、表のオカルトヒーローが陣取っているのだから分が悪かろう。

先のアシユタロス侵攻に前後したオカルト事件は、秘匿事項も含めて麻帆良と共有している。

麻帆良自身はそこから先へ情報を流出していないそうだが、メガロメセンブリアの圧力が高い頃は、ずいぶんと苦心惨憺したそうだともある、MM元老院の幹部のほとんどは失脚し、残りの元老院メンバーでの運営が不可能となったため、合議性の議会を復興させた。

もちろん、最終決定権は元老院で持っているのだから、意味はないのだけれども。

つまるところ、元老院の独裁を隠しただけだが、民の不満を政治家が引き受けてくれるのだから笑いも止まらないだろう。

実にうらやましいと感じる美智恵。

「じゃ、各班がんばろう」

「「「「「はーいーいー」」」」」

「隊長は、ナギに付いていきますか？」

「ええ、おもしろそうですね」
「じゃあ……」

そういつて渡してきたのは「文珠」。
え？

「正直言ますとね、こいつが人間だって事が疑わしいほどデタラメなんすよ。せめて一撃だけ耐えて逃げきってください」

この時、横島君の言葉が信じられなかった自分を攻めたい。事務所へ帰ってきて私は、一番手薄なところにナギ君しかいなかったかを身を持って知った美智恵であった。

ナギ本人から得られた情報を元にICPO本部やGS協会、政府関係筋への事情説明を行ったところ、先方から「もういい」という流れがきた。

どうやら数年の範囲で魔法世界による「情報公開」が行われることになったそうだ。

ゆえに、いま無理に情報を入手する必要はない、というわけだ。もちろん、企業局からは様々な利益誘導を求められているが、そのへんは無視していいことになっている。

ともあれ、私の今の仕事は、横島霊能事務所の窓口業務の繋ぎをとり続けること。

あそこが一番情報が早いから。

夏休みという事もあって、魔法生徒や魔法先生の大半が休みを取るものだから、毎日事務所の出勤がある。

というか、交代出勤ではなく全員出勤があるのだ。

それでも手が足りないことがあり、シロや冥子の手を借りることも少なくない。

シロも冥子も嬉しそうに手を貸すし、その際の助っ人代も請求されないのが恐ろしいと考える横島。

もちろん理由はある。

エヴァが盛大に魔具を使えば美神の懐が潤うし、冥子は冥子でアキラの面倒をみるようになってから急速に安定してきてる。

いわば、誰にとっても利益が大きいのだ。

六道婦人はこのままアキラを六道助学園に入学させたいようだが、横島事務所を辞めるつもりがないアキラは、通学が厳しいという理由で尻込み。

ともあれ、事務所についていうなら異界経由でゲートを造るという手もあるんだけど、と横島は思ったが、とりあえず言わないでおいた。

そんなことが一言でも伝われば、確実にアキラ「たち」は六道女学院に持っていかれてしまうだろうから。

横島とて進んで六道にいくという話があれば反対もしないし最大限のバックアップをするつもりだ。

さらに言えば、アキラたちが六道にいくというのならば、講師の話すら受けてもいいとすら思っていたぐらいだ。

しかし、今の段階では彼女たちが進んで六道にいくつもりはないようだし、エスカレーターのまま麻帆良で進むという話を聞いている。

なら、そちらの方向で全面バックアップだな、と考えている横島であった。

逆に雪乃丞は、横島事務所の戦力アップを鑑みて独立の準備を考えていた。

さすがに高校卒業までは無理だが、卒業に時点で横島に相談しようと考えていた。

麻帆良からは正式な魔法先生になってみないかという話しも受けており、教員免許の取得も視野に入れた勉強をしているところであった。

その関係については既に弓に相談しており、彼女からも「貴方のなさりたいように」と歓迎されているという。

この夏休みは、子供先生ばかりか関わる全員に将来を考える事件を与えたといってもいい。

ともあれ、そんなアンニュイな雰囲気破壊する人間もいる。

そんな人間、横島曰く、享楽の日々を過ごしていたナギにも年貢の納め時がきた。

朝からネギをいじって遊んでいたナギであったが、急に直立不動となり周囲を見回す。

「お、どうしたんや？」

「・・・忠夫、おれは今から旅に出にやならん」

ふーん、と欠伸をしつつ解放されたネギを受け取る横島。

ちよつと涙目だけど構って貰えて嬉しいと目が語っている。

すこし子犬なMっぽいかもしれない。

「で、どこいくんだよ？」

「まだみぬ世界だ。」

「ふーん、一人でか？ 我が騎士」

「そりゃそうだろ！ こぶつきで逃亡なんかできるかっての」

「逃亡、逃亡か。何から逃亡するというのだ？ 我が騎士」

「そりやえめえ……」

「そりや、おめえ、何だ？ 我が騎士」

ぐいとナギの肩をつかむのは、美しい金髪の女性。
が、それをナギはこの世の終わりとはばかりにみていた。

「ふふふふ、忠夫が教えてくれなんたら、しばらく見つからなかつたぞ、我が騎士」

「て、てめえ！ 忠夫！！ 俺を売ったんだな、売ったんだな！！」
「売るつつうのは、対価があるもんだ。こつうのはスルーつつうんだな。」

「くそお！ はなせアリカ！！」
「なぜ離さねばならん？ ソナタの代わりに政務をこつこつと、こつこつと、こつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつこつ、魔法球でこなした私が、享樂の日々を過ごしていたソナタをなぜ離さねばならん？ 我が騎士よ」

微妙に病んでるアリカ王女であったが、そんな空気を読めない少年は八二カみながら近づく。

「……あ、あの。おひさしぶりです、お母様」

ばきっ！！

アリカのつかんでいたナギの肩が砕ける。
ナギも激痛に泡を吹いている。

「た、た、ただお、い、い、いま、いま、ネギはなんといったのだ？」

「ん？ アリカ王女を「お母様」って呼んだんだよ」

「だ、だ、だがしかしだな、私はネギを放置して……。」

「その子を産んだんだろ？ だったらお母様だろうが」
「……………」

真つ赤になって照れるアリカを見据えて、ネギは深呼吸の後、一歩踏み出した。

「ぎゅってしていいですか？ お母様」

言葉もなく、ぶんぶん頷いたアリカをネギは抱きしめる。

感涙激しいアリカはおいておいて、ナギは別世界への旅立ちを始めようとしていた。

「親となるのはいいことだな、我が騎士」

「……………」

気絶中のナギをつかんだまま、アリカは今の喜びをかみしめていた。

生死の堺まで追いつめられたナギは、そのまま政務用の魔法球に押し込まれ、魔法世界に返送された。

アリカは「休暇じゃ」とにこやかに宣言し、慣れない母親業を時々やってくる美智恵とともに楽しんだのであった。

大戦の英雄とて、嫁には勝てないのだと妻帯者の魔法先生は涙を流したのであった。

麻帆良中、ネギはアリカを連れ回した。

自慢の美しい母である、知り合い知人生徒たちに紹介して回った。アリカもアリカで「母親」をできる機会が嬉しいらしく、得られなかった時間を取り戻すようにネギとべったりだった。

さすがにべったりすぎてネギも照れたが、それでも、母の温もりには勝てなかった。

それを間近で見せられてネカネもずいぶん焼き餅を焼いたが、アーニヤの心中はと思うと気が気ではないネカネであった。

が、ここに一つの解決が生まれる。

魔法球で研究を続けていたエヴァから「目処」が立ったと連絡があつたのだ。

それを聞き、横島は全員召集をした。

ネギも含めた召集に誰もが驚いたが、詳しく話を聞いて歓声を上げる。

ネギ「スプリングフィールドの心の原点、石化された村人たちの回復の目処が立ったのだ。

急遽の呼び出しに不機嫌そうだった千雨であつたが自分の役割を理解しており、即座にAFの発動。

認識障害をかけた上で戦艦サイズにする。

魔鈴を除く横島従者団とアリカも含めたネギ従者団は即座に乗り込み、一路ウエルズを目指した。

戦闘機動確保のために楓とクーフェイが交互にチャンバーに入り、わずか半日で到着したのには誰もが驚いた。

思い詰めた瞳のアーニヤの前で、横島とエヴァによる魔法陣が描かれてゆく。

村人が納められた保管室は、魔法の光にあふれた光の空間に変わっていた。

「小夜ちゃん、全員にリンク」「はい」

「高音、全員にリンク」「はい」

「忠夫、コノカ同期！」「はい！」「」

エヴァの声にあわせて横島とコノカが同期合体する。

まるで上位の神魔が現れたかのようなプレッシャーだったが、そればかりでは収まらない。

「忠夫、コノカ、アスナを加えろ！」

「はい！！」「」

目を閉じ、明鏡止水に達していたアスナが、二人の取り込まれると、そこには黒髪の女神がいた。

『ヴ・・・ン』

半眼で視線に立つそれに畏怖を感じるものの、アーニヤが叫ぶ。

「お願い、忠夫、おねがい！！」

がっと思開いた瞬間、そこには中性的ながら意志の強い瞳の人がいた。

『コノカ、A F 起動』 『はいな！』

瞬間、真っ黒な翼が羽を散らして広がる。

『アスナ、A F 起動』 『はい！！』

まるで神話の半獣神が現れたかのような神々しさの中、いくつも

の光の玉が現れた。

』とぎすませ、救うぞ』

「「「「「はい！！」「」「」

その空間に暖かな光が満ちあふれた。

あの、「災厄の村」の被害者救済にアリカ王女がネギィスプリングフィールドと共に、英雄団を連れてやってきた。そして三界の英雄横島忠夫と共に彼らを救った。

これが公式発表であった。

もちろん真実の方は別に伝わっているが、聞こえのいい話を報道で巡らせることにより「大脱出」自体の成功率を上げるカリスマ作りを目的としているので、どうしても魔法世界寄りの報道になってしまう。

そのことをアリカが詫びるが、「へ？」と疑問顔の横島及び従者たち。

既に事実上の従者である刹那も同じ感じであった。

苦笑のネギは母親に言う。

「お母様、横島さんたちは虚名を求めているんじゃないやなくて、アーニヤと僕の故郷のためにやってくれたんですよ。」

「せやな、もう厨二っぽい二つ名は一杯一杯や。」

「うちらも『従者乙女騎士団』はないわあ」

「うんうん、向こうでそれを言われる旅に転げてたもんね」

「・・・かなりはすかしかったかも」

術の維持や成功率の上昇、そして遠隔監視の妨害や物理干渉からの防御を各で行った乙女たちはにこやかに笑いあっていた。

その連携にアリカは心を奪われていた。

自分にその力があれば、そんな風に思ったが、ぐっと飲み込む。

自分には自分お仲間がいるのだから。

激しく涙を流しつつ両親にすがりつくアーニヤ

それを歓迎する村人たち。

長きにわたる封印には困惑するが、目の前の、ナギ「スプリングワールド」を思わせる男が救ってくれたことに気づいていたから。

世界復帰記念とオステア女王来訪記念と称して開かれたパーティーは大いに持ち上がり、108の宴会芸を持つ男、横島忠夫はその真価を大いに発揮した。

次々と魔法関係者が祝福に集まり大いに盛り上がる。

魔法世界での活躍、麻帆良での実績、そしてこの村人たちの救出だけでみても十分だということ、ネギを呼び戻そうという話が大きくなっていると聞いた横島は少し怒った。

何のために修行をしていたのか、修行の内容はどうなのか、しっかり考えて発言しろ、と。

メガロメセンブリアは実際のところ失地を回復するための駒を必要としていた。

その点で言えばネギは良い駒なのだ。

今までの、麻帆良学園祭前のネギであれば飛びついたであろう話

だが、今は鼻で笑う。

何しろ彼は、自分の両親がメガロメセンブリアに陥れられた数々の事件を聞いているのだ。

いかに浄化された組織になったと聞いても気を許せるはずもない。さらに言えば、自分自身も指名手配されたことも相まって、心底嫌悪しているといつても良い。

書類や過去の類似例から、母親の悪行とされている大半が当時の元老院の陰謀であったこともわかり、「敵」とすら考えるようになっていた。

もちろん、そんな悪感情を表に出すほど程度の低い教育を受けているわけではないネギは、にこやかに拒否したわけだが。

ネギ自身、「偉大なる魔法使い」を標榜する政治家たちに辟易としていた。

聡いネギにはその看板の裏は見えていたし、そのせいで周囲にかける迷惑も読めていたから。

もちろん、固辞し続ければそれなりに迷惑はかかるだろうが、それでも、老人たちの駒になることを考えれば、まだまだまだ。

そう、師である横島譲りの危険関知装置が警報をあげるのだ。向こうには「破滅」しかない、と。

ゆえに、メガロメセンブリアの英雄認定も偉大なる魔法使い認定もすべて断っている。

そんなこともまかり通るのも、MM元老院の求心力が皆無になっている事と彼らの名声が高いことに直結していた。

権力にしかよれないものが権力を失うとどうなるかが見える話といえる。

とはいえ、飛び込みで勧誘にくるバカもいる。

元オステア総督府 クルト総督であった。

元々は紅い翼の支援者だったらしいのだが、武力で人々は救えな

いという理由でナギ「スプリングフィールドを見切り、政治の世界に飛び込んだ人物なのだそうだが、なんつうか、だめ人間だった。アリカ女王至上主義で英雄思想推進派で、伝説に立ち会ったことが人生最大の興奮の人であった。

ゆえに、本国に通達なしで行われた石化解呪に正式な抗議を申し立て、実行した横島を正式に告訴するとか言い始めたのだ。

あまりのことに驚いたMM行政府であるが、自らの治安管轄内で好き勝手に暴れてくれた事実が浮かび上がったと小躍りし、思いつく限りの罪状で横島を捕らえようとした。

捕らえようとした、捕らえるように命令したのだが、誰も実行しなかった。

警察官僚も、軍関係者も、民間賞金稼ぎも、だれも。

気づけば行政府からだれも人がいなくなり、官僚機構もストップした。

なんとメガロメセンブリア市民は、元老院及び行政議員達のあまりのバカさ加減に嫌気をさして、どの国よりも早く「大脱出」をしてしまったのだ。

民あつての国とはよくいったもので、すでにメガロメセンブリアは国としての体裁を失った。

一人の英雄へ嫌がらせをしようとしたら、国がなくなりましてという伝説が残れば、新たな歴史のページになるところであったが、どちらかと言えば仕掛けた方が有名になるだろう。

クルト「ゲーデル。

偽りの罪で英雄を断罪したものとして、オステア関係国からの永久追放を受けた。

が、恐ろしいことに、彼は本当に「アリカ至上主義」だったのだ。自分の評判も地位もなにもかも関係なく、アリカとその息子のプ

ラスになるからと言う一点のみで横島の告訴に踏み切ったのだ。

その狂信っぷりにはアリカですら引いていたが、とりあえず反省しろ、と殴られていた。

その拳の痛みですら喜べる彼は、心底だめな人間だろう。

とりあえず、世界を巡って再びアリカの役に立つ日を夢見ているとか、なんだとか。

おそろしいストーリーカーである。

第二十三話（後書き）

・・・あれえ？

クルトってこんなやつじゃなかったはずなのに・・・。

おかしいなあ？

第二十四話（前書き）

第二十四話です

とうとう原作も届いていないであろう未知の世界が・・・w

というか、その、認定記念日ですw

第二十四話

長きに渡った夏休みも、そろそろ終わり。

のこり三日と言うところで、事務所に飛び込んできたのは明石ユウナ。

「た、たいへんだ、大変だ横島さん!!」

必死の形相のユウナであったが、なんとなく乗っこない横島。一応つきあいもあるので愛子が先を促す。

「どうしたの、ユウナちゃん」

「大変なことが起きてるんです、愛子さん!!」

飛びつくようにしがみつくユウナをなでながら先を促す。

「じ、じつは……」

ぐっと溜めたユウナは叫ぶように言った。

「アスナのやつ、夏休みの宿題が終わってるんですう!!」

「……………へえ……………」

余りに薄いリアクションに憤るユウナであったが、実のところ横島や雪乃丞、愛子はその場をみているので知ってるので、そういう

集めさせると、3Aの半分も集まる。

「で、なにするアルか？」

「精神と時の間で存分に宿題しろや」

びつくり目のクーフエイを先頭に、3Aの生徒たちは愛子空間に飲み込まれたのであった。

で、飲み込まれて数秒。

「で、愛子先生、どんなかんじ？」

「・・・あの子達馴染みすぎ。」

苦笑いの愛子。

「ほぼ無限に時間をのばせるとか言いだして、ドラゴンボール祭り開催よ」

「ま、飽きれば始めるだろ？」

愛子内時間一晩で、一度外にでたいと言い出したが、「終わるまでださへん」という横島の伝言を受けて大騒ぎした。

が、致し方なくこつこつと始めたそうだ。

愛子内時間20日で全員が終了し、外にでてきたらわずか2分の出来事であった。

愛子内時間のはじめのうちは横島を恨む声であふれていたそうだが、出てきてみれば数人の土下座と体が折れんばかりの礼で横島に感謝を表した。

あと三日では、どれだけがんばっても終わらない量だったことが身に染みたからだだった。

さらに、夏休み終了寸前にみんなで宿題って青春よねーという説得にも引つかかっている面もある。

別名「洗脳」とも言うが。

計画的に進めている人間にはわからない青春ではあるが、少なくとも愛子は存分に満足したようであった。

閑話休題

夏休み一杯は学園に居る予定であったアリカ女王もさすがに休暇は終わったようだ。

とりあえず、周辺に挨拶しつつ、ミアゲを買って帰るということで、東京観光という名の外交をもらった。

で、改まった席だと面白くないので趣向を凝らせ、とアリカが言うので、横島忠夫、一世一代のアイデアを引っ張り出した。

その名も、東京の休日計画。

東京観光を綿密に計画し、それに併せて「偶然」顔を合わせた形を装うというものであった。

参考プランとして、東京デジャブーランド観光中のアリカ女王と家族サービス中の某官僚が出会う、みたいな。

準備期間は一日、実施は二日ということもあり、閣議もそこそこにバカみたいなプランが通過して、恐ろしいまでの予算が投入され

た。

東京休日初日、なぜか麻帆良に横付けされたハトバス。

アリカも「ハトバス」を知っているようで、「おお、これが」と感心しきり。

ネギは知らなかったようで、アリカもうれしそうに説明していた。そんな親子を取り囲むのは護衛乙女。

横島従者団を中核にした女王護衛は、どちらかというところアリカ先生と女子中学生といった風情だったりする。

これに横島を雪乃丞という不良学生もついているのが一体感を高めていたりもするのが面白い。

ともあれ、一応宿題の終わった3A集もついて来たが、仕事の範疇なので横島事務所に人間以外はお断りとした。

そういう意味ではネギパーティーも参加禁止なのが可哀想ともいえるが、あきらめてほしいと横島が頭を下げると収まりがついたようだった。

そんな集団が乗り込むと、

「本日は、極楽観光をご利用いただき、ありがとうございます」

キリリとしたバスガイドスタイルは、六道婦人。

「・・・なにやってんすか？」

「なにつて、こんなに面白そうなこと、仲間外れはするいわ」

ばったり倒れた横島を、嬉しそうに見つめる六道婦人。

はじめの予定では美神美智江がバスガイドをする予定だったのだが、六道婦人が横からしゃしゃり出てきたそうなの。
恐るべき六道パワー。

とはいえ、この茶番で隊長のパワーは効きにくいから、六道婦人の方がいいかも、と横島が思ったのは内緒だ。

で、かなり六道パワーが効いたのか、タイムスケジュールは着々と進み、都内観光の後に東京デジャブリゾートに到着した。

観光中もあたかも偶然かのように国政政治家や高級官僚、外務関係者などがわらわらとあらわれ、顔を見せていった。

この中で本当に覚えてもらったのは一握りだろう。
なにせこのプランを立てたのは横島だが、選別方法を示したのはアリカだから。

そんな彼女のハードルは異常に高い。

何しろ「これを機に家族サービスをして、子供が腹を立てずつきあってくれるぐらい円満な家族」しか顔も名前も覚ええないと言うものであったから。

それを聞いたユエは、国内でそんな官僚はいないと断言したものであったが、それでもアリカの合格圏に引っかかる人間はいたようで、あとから茶々丸の記録映像で確認していた。

ではではデジャブリゾートで一泊だ、というところで知人関係者が現れる。

美神美智江、令子、ひのめの美神女傑列伝。

横島大樹、横島百合子の横島一族

六道冥那、六道冥子の六道グループ

・・・って。

「なんでアキラちゃん、は冥子さんの隣に？」

「だって、アキラちゃんは、私の弟子みたいなものだし」

そこで立つたらと声を上げる美神。

「エヴァは私と運命共同体よ！」

主にAF的に。

アスナはシロ、小夜チャンはおキ又ちゃんの妹、とかなんとか大騒ぎ。

「ま、何のかんのいっても、みんな横島んところの弟子だろ？」
「ぐう」

雪之丞の意見にうめく令子。

そんなこんなな騒ぎはよそに、大人達はアリカ王女を囲み、話に花を咲かせる。

成功失敗いろいろあるが、少なくとも英雄とまで言われる存在にまで子供を育てた美神美智江と横島百合子の言葉には感銘を受けたようであったが、美智江自身は穴があつたは入りたい気持ちであった。

なにしろ、隣で微笑んでいる横島百合子が一子、横島忠夫を絶望と苦難へ追い込んだのは自分なのだから。

その上で英雄などと呼ばれるようになったといっても何の慰めにもならない。

この一件に関しては、全霊を持ってナルニアまで謝罪に赴いたのだが、すべては終わっていた。

ナルニア横島邸で土下座までした謝罪のあと、百合子氏より見せられた手紙。

それは横島忠夫本人からの直筆の手紙であり、そこには今自分が置かれている状況と、なぜそうなったかが綿々と綴られていたのだ。誰を恨んでもおかしくなかった。

全てに呪いをかけていてもおかしくなかった。それなのに彼は書いていた。

「しゃーないんや。ああなるしかなかったんや」

手紙の端はしに修正液が使われており、その裏をみれば文字が滲んでいた。

紙も波打っていた。

もう、なにが起きているか、なにを思って手紙を書いたかを思わずにはいかなかった。私は、私はそのとき、声を立てて泣いてしまった。

まるで幼い子供のように。

落ち着けた私は、正面から横島夫妻と話すことができた。

恨みもあるし、怒りもある。

しかし、本人が飲み込んだことで騒ぎ立てるつもりはない、と。

許されたわけではない。

しかし、飲み込んでもらえた。

それだけを喜びに変え、私はナルニアを立つた。

後日、令子が同じように横島夫妻へ土下座をしたと聞いて、親子だなど笑ってしまった。

裏も表もない笑顔の裏でどれだけの涙を流したのだろうか、と思

つたが、それを表に出すほど子供ではない。
だから笑う、笑ってみせる。

関係者父母会は大いに盛り上がり、アリカより魔法世界への招待まで話が進み、きわめて円滑にして自然に進んだ。

これを政務官などがみれば血の涙を流しただろうが、これ幸いとポイントを稼ごうとするのが悪いとしが言いようがない。
他人の禪で勝負をしても何ら得るものなどないのだから。

翌日、両親という立場の先輩たちと大いに語らって胸のつかえがとれたアリカは、ネギの母として、親として、十二分に休日堪能した。

あまりにふつうの母親になってしまったため、偶然を装った対面を仕組んだ政府関係者が見つけれなかったほどであった。
後々そのことで恨みや逆恨みをぶつけられた横島であったが、もちろん屁の河童で一部始終を録音した内容を週刊誌に売ったり、ふがない恨みを持ち続ける政府関係者という記事で投稿したりして小銭に換えている。

わりと良い収入になると小気味よい笑いをあげながら。

イングラントゲート経由で帰るというアリカを逆転号で送りつつ、ゲートポートまで見送った横島達は、ボロボロに泣くネギをつれて再び麻帆良の地を踏む。

さすがに涙でボロボロの姿では始業式に出れまいということで、愛子空間に放り込み、落ち着きを持たせて出てきたそのときは、立派に強がりがいえるようになっていた。

よし、と横島が撫でると、実にうれしそうに微笑む。

新学期、横島達は久しぶりに登校したのだが、実は結構休み中に級友たちと結構あっていた。

おおよそ、GS横島忠夫やGS伊達雪乃丞、そして現役バリバリの妖怪タマモと愛子として相談を受けていたのだ。

夏場は幽霊怪異の活発期で、麻疹のような霊症が多発するのだ。

ゆえに、協会に依頼するほどではないが恐ろしいという事件を解決してほしいと、程々頻繁に話が舞い込む。

もちろん、協会報告が必要なレベルの依頼となると流石に依頼料金が必要な旨の相談を親レベルに持ち込むが、それ以下の場合、学園側、ルチ將軍が一括で処理するという約束になっていた。

本来なら霊具代にもならないものでも、基本的に霊具代のかからない横島事務所だけに利益がでるのが恐ろしい。

そんなこんなで前の学校同様に「除霊委員」になっているようなものだが、こちらは依頼元が学園長が纏めているので、協会にも言い訳の立つ合法的なものだった。

まあ、実益的な話はおいておいて、目の前のGSや妖たちが、自分たちの味方である事実はきわめて刺激的で非日常的で、クラスメイト以上の関係でお付き合いしたいと考えるのは仕方ない話だろう。ゆえに、

「おいおい、横島！ この前の礼させろって！」「雪乃丞君！ チヤミ元気になったの！みてみて！」「タマモちゃん、弟がまた会いたいって！」「愛子先生、またお願いします！！」「しまっす！！」

あははと笑う四人だが、その勢いには辟易としていないわけではない。

この集団の中には魔法生徒もいて、向こうの活躍も聞かせると念話が混ざっているから。

もちろん、ヒゲグラかガンちゃんを説得しろと言うと黙るけど。

「そういえば、あのエターナルロリとの婚前旅行、いついくんだ？」

明るい雰囲気で盛り上がっていた空気が凍り付いた。

エヴァンジェリン「A「K」マクダウエルことエヴァと横島が京都一週間旅行に行く約束をしていることは有名だ。

ちっこい体で女王様気質、西洋人形のような美しさと横暴さが兼ね備わった彼女は、学園祭以降、全校レベルでファンが増え、認識阻害の影響もあって、成長阻害された存在という形で認識され、一部の人間から「エターナルロリタ」として絶大な人気を支持されている。

同様に永遠の中学三年生であった小夜チャンも同方向の人気があるが、体を得た時点で人気の質が変わったらしい。

それはさておき、凍った空気の中、視線が、鋭く冷たい視線が横島に集中していた。

本来なら「キャンキャン」と逃げ出す横島であろうが、彼には余裕があった。

なにしろ「エヴァ」しかバレていないから。
心に余裕がありません。

だから、エヴァちゃんの事情や今まで健康上の理由で学園都市外へ出られなかったこと、それが霊的な事情であることがGS横島によって判明し解決したこと。

以後、感謝とお礼の意味を込めて事務所に来ていることなどを説明すると、関心や同調が発生する。

そう、わりと軽微ながら霊症に彼らも苦しめられたから。
が、もちろんそこで収まらないのが横島クオリティー。

「ま、いくのはエヴァばつかじゃないしな」
「「「「「え？」」「」」」」

視線の先の雪乃丞は笑う。

「ゆ、雪乃丞君、それ、どういうこと？」

「ああ、なにしろ、それは事務所旅行だからな。」

横島霊能事務所は有名だ。

現役高校生でGSの2人と妖怪一人が始めたGS事務所だから。

その依頼料の安さと気軽さは定評があり、学園外からも依頼があるほど。

加えて、事務所参加している除霊助手も有名だ。

何しろみんな美少女だから。

総勢十数名の女の子全てが美女美少女。

みんな、美女美少女。

視線は横島に集中した。

した先には横島はいなかった。

「追え！ まだ遠くに行っていない！！」

「我ら孤児たちの恨みを背負わせる！！」

「モゲ、砕け、チギレ！！」

「「「「「うををををを！！！！」」「」」」」

狂乱の孤児たちは教室を駆けだし、逃亡したであろう横島を追ったのだ。

そして神多羅木に見つかり、全員が反省室に直行、ボロボロになつて寮に連行されたとか。

無論、横島は逃げていなかった。

文珠で「穏」して教室の端にいたのだが、流石に認識障害も相ま
って見つかることはなかった。

それが一時しのぎだと言うことは横島とて知っている。

それでもその場だけでも逃げを打つ、それが横島忠夫という人間
だった！！

神多羅木からボコボコにされた恨みをも加えた孤児たちが、夜な
夜な牙を研いでいる頃、横島従者団は、宿題が終わらないため缶詰
になっている、阿呆生徒、いや魔法生徒の穴埋めで活躍していた。

その姿を見て、やっぱり正式な魔法生徒になってくれないかなあ、
とセルヒコは涙を流したとか。

そんな従者たちの中に、新たな従者が加わっていた。

いや今までも従者同然であったが、このたび正式に従者になった
少女、桜咲刹那は、真っ白な翼をたなびかせて空を舞っていた。

あれほど忌み嫌っていた翼をなぜ、と関係者は驚いたが、それ以
上のことを見、受け入れた彼女にはもうそんな事はどうでもよかつ
た。

ただ、その人に認められた、その人とあっても良いと認められた、
そのことだけが全てであったから。

求めて求めて、そしてあきらめていた存在。

横島忠夫。

本当にあきらめていただけに、彼の従者となれたこと自体がうれ
しくて、信じられなくて、そして喜びであった。

自分の白き翼とコノ力のAFの翼が織りなす攻撃と防御は壮観で、
周囲の目を奪う。

さらに、お揃いのイヤリングが二人の動きを同期させていた。

コノカが友達の証として横島から刹那にわたるように渡されたそれは、仮契約の上で使うと、まるで双子のように意志が通じ同期できた。

そう、そんな遙か前から自分を思ってくれていた、そう感じるだけで幸せが胸の内からあふれる。

あまりのデレっぷりにエヴァが「墮落しおって」とつぶやいたらしいが、そんな評価など全く気にならないほどの幸せで一杯な刹那であった。

加え、得られたAFも恐ろしいものであった。

武装強化でも霊能強化でもなかったが、ある種、最高の反則だと横島もうめく。

その名も「美の女神の権能」。

出てきたのは文珠用の穴のあいた懐中時計だったが、一目見てネギたちはそれが何かがわかったのだ。

試験型時間航行機「カシオペア」そのものであった。

が、よく見ればいろいろと見た目が違ったり大きさがちよつと大きかったりしている。さて、どんなものか、と首をひねったネギたちであったが、逆に横島たちが思いついた。

そう、「美の女神の権能」なのだから。

「・・・うあわ・・・隊長のAFかよ・・・」

「うげ、これまじくねえか？」

「せやな、ちとさっちゃんかキーやんにお伺い立てんと・・・」

顔の青い横島と雪乃丞から、オカルトGメンのトップ美神美智恵を模したAFと聞き驚く刹那。

さらに、表のオカルト関係では時間跳躍が禁忌とされている事に

も驚く。

「じゃ、もしかして学園祭のあれは……。」

「あー、一応学園内で決着してるから黙認ちゅうことになってるな。」

ほお、と安心するネギたち。

しかし、このAFは、と首をひねっているところで、電話が鳴る。一瞬びっくりした愛子だが、いつものように電話をとって、そして真っ白になった。

「どないしたん、愛子」

「……出て」

渡された横島が相對したのは……

『あ、よこつちかあ？ わいときーやんの分御霊おくるさかい、あつてやってなあ？』

さっちゃんでした。

しばらくすると現れたのは、ちょっとパンクな感じの若者と、ヒッピーな感じの若者。

「よー、よこつちきたでー」

「おひさしぶりですね、横島さん」

「……さっちゃん、キーヤン」

「いやー、いつも楽しく見とったでえ、よこっちのハーレム」

「ハーレムちゃうわー!!」

「いえいえ、ご謙遜を。女子中学生とはいえ何人も女の子の唇をゲットしているんですよ？ もう、このロリコン！」

「ロリコンいうなやー!!」

「Yes、ロリータ。Yes、タッチ。You、よこっち!!」

「うまいことってんじゃねー!!!!!!」

横島は絶叫とともに転げ回る。

周りで少女たちは、ロリコン扱いに怒りを覚えるものの、転げ回る横島をどう扱うにしていれば良いか困っていた。

第二十四話（後書き）

ああ、よこっち、ロリコン設定神魔公認w

まあ、前世最後の女が「メフィスト」で、今生魂の恋人が「ルシオラ」という点で逃げ道はありませんけどw
というか、茶々丸とラブっている時点で確定申告w

・・・ロリと言われようとなんだらうと、茶々丸とラブれるのはうらやましいですTT

第二十五話（前書き）

第二十五話です

連日投稿がまだ続いています（^^；

第二十五話

会議室に持ち込まれた料理の数々。

和洋中何でもありで並んでいる様は壮観だったが、さらにはそれを掻き込むように食べ尽くそうとする男たちがいた。

横島、雪乃丞、そしてさっちゃんきーやんである。

久しく還俗したという事で、とりもなおさず食事を所望。

横島が三人に頼んだのは、コノカ、千鶴、茶々丸であった。

それぞれが横島を想い、思い合っていることを知っている同士であったので、こうなるともう勝負しかなかった。

異空間でつながった魔法料理魔鈴のキッチンを使った熱い女の戦いが幕を開ける。

事の始まりは、ほぼ全員集合状態で刹那のAFの話をしてきたときのこと。

突然現れた横島の知人を紹介されていたところでGS関係者以外が固まった。

「神魔の最高責任者、きーやんとさっちゃんや。」

「魔族の最高責任者、明けの明星ル　ファーことサタ　や。気軽にさっちゃんってよんでな」

「神族の最高責任者、神の子ことイエ　キリ　トです。気軽にきーやんってよんでください」

さすがの横島忠夫霊能事務所もドン引きだった。

「なにしにきたん？　ふたりで遊びに来るなんてふつうやないやろ

へ〜、と感心する周囲。

「しかしや、よこつち。あの時空周辺はだめやで。」
「わかってるよ、さっちゃん。」

苦笑いの横島を見て、ぐっと拳を握りしめた千雨が神魔をにらむ。

「・・・何でだめなんだよ、何でダメなんだよ！ 横島さんが、横島さんがどれだけ傷ついて、どれだけ苦しんだと思うんだよ！！」
「わかってますよ、長谷川さん。しかし、あの時間をやり直してしまつと、あなた達とよこつちは出会えなくなってしまうかもしれないよ？」

「かんけーねーよ！！！ てめえの事情だけで、あたしの気持ちだけで、自分が好きな人の不幸を願うわけねーだろ！！」

切り裂くような言葉に誰もが黙るが、横島が口を開く。

「ありがとな、千雨ちゃん」
「・・・いいんだぜ、俺たちのことなんか忘れても。あんたが幸せなら絶対に後悔しない！！」
「でもな、いくらやり直しても、いくらやり直せても、ルシオラが死んだつちゆう歴史は変えられへんのや。」
「・・・え？」
「一応な、いろいろと調べてな、結論はでてんのや」

横島は笑顔だった。

ただ、滝のような涙が流れていた。

「ありがとな、千雨ちゃん。ありがとな、みんな。やっぱ俺はヘタ

レやなあ、こんなかわいい美少女を泣かしたる。」

横島は千雨を抱きしめた。

千雨も滝のような涙を流していたから。

「うー、うー、・・・ごめんなさい」

つらい思いを思い出させて、苦しい記憶を掘り起こさせて。

「ええんや、千雨ちゃん。俺はな、この想いと共に生きる、そう決
めとんのや」

実に感動的であったが、盛大に鳴り響く腹の音が苦笑いを引き出
す。

横島は横島、それでいいらしい。

「千鶴ちゃん、コノカちゃん、茶々丸ちゃん。さっちゃんときーや
んの歓迎会用に料理お願いできる？」

「・・・はい!!」「」

綾瀬ユエは驚く以前に自分の目を信じられなかった。

神魔の最高責任者達が、事務所の男性達と我を争うように食事し
ているのだから。

負けられないネ! といってクーフェイが参戦すると、食わなき
ややってられねえと言い出して千雨も加わった。

そうなると、誰も彼もがそれに加わった。

とりわけ、高音参戦が一番遅かったが、それは仕方ないだろう。

一応ミッション系の高校に通っているのだ。それなりに折り合い
がつくまで時間がかかろうというものだ。

「では、デタントというのは昔から進んでいたですか？」
「ええ、そうですね。時間にして千年ほど前からですね」
「では、きーやんの任期からですか？」
「いいえ、一応先代も進めていましたが、実際に形になっているのはここ数年の話ですね」
「くくへえ……」

神魔に興味津々のユエや高音、ネギあたりがきーやんの話に食いついている。

「なーなー、魔族にならへんか？ いまなら魔王の一柱があいとるで？」

「こ、こまりますう……」
「……明日菜が魔王に勧誘されてる。」

朝倉の目の前で明日菜が魔王から勧誘を受けていた。

「あ、茶々丸ちゃん。うちの秘書にならへんか？」
「……申し訳ありません。マスターの従者にして所長の従者。このあり方を私は気に入っています」
「今すぐでなくてええんや。死んだ後でええんや」
「……？ 私は死ぬのではなく壊れるんですよ？」
「なにいうんや。茶々丸ちゃんには魂があるで。魔王公認や。」
「神公認でもありますよ？」
「……！！！」

驚きに瞳を見開く茶々丸の肩をたたく横島。

「俺ら霊能者には一目瞭然何やけどな。こつやって最高責任者もい

つとる。認めてもいいんじゃないか？」

「・・・はい、横島さん」

おかれた横島の手をいとおしそくに重ね、頭を預ける茶々丸。

「・・・お、せやせや、茶々丸ちゃんが望むなら、魔族の体をやつてもええで。」

「なあ！ 待つてくださいい！！ 神族も同じですよ！？ 神族の体なら、特典で権能一杯つけますって！！」

「ああ！？ きーやんそりやないやろ！？」

「さっちゃんこそ卑怯です！！」

偉い勢いでにらみ合う神魔をみて、思わず苦笑いのエヴァ。

「茶々丸、再就職先には困らん様だぞ？」

「・・・マスター。出来ますれば終生おつかえしたいのですが？」

「かまわんが、安逸の少ない人生だぞ？ なにしるあの男と共に歩く道だからな」

「はい、望むところです」

穏やかな笑顔の主従にくらべ、汚い言い争いを続ける神魔を、周囲は冷たい視線で見えていたのであった。

そんな騒ぎも収まったところで、刹那のAFを使えば、歴史上影響の少ない過去なら見物できるという話になったところで、実に幅広い希望が集まった。

というか、すでに妄想の範囲だろう。

たとえば、恐竜時代を望むネギ。
たとえば、維新の京都を望むエヴァ。
たとえば、大戦期の魔法世界を望む高音。

「・・・あ、それはいかなーと不味いっばいぞ」

「どういうこと？」と視線が集まったところで雪乃丞がナギの別荘で見た写真の話をする。

ダラダラと汗を流す横島であったが、神魔の最高責任者がにこやかに肩をたたく。

「いくときには声かけてや。」

「ヒヤクメに実況させますからー!!」

「おめーら、のりのりやなー!!」

「よこつちの不幸は密の味（ですから）（やから）」

「あー！ー！　そういうとおもってたよー!!　どちくしょー！ー

ー!!!!」

久しぶりに床を転がる横島を見て懐かしそうな顔の愛子とタマモであった。

「で、誰連れてくんのだ？」

にこやかにほほえむ雪乃丞だったが、じつは自分がいける要素はないと思っている。

なにしろ自分と横島が抜けてしまうと、この事務所が稼働しなくなってしまうから。

A Fの機能を詳しく調べてみなければわからないが、大きな時間移動をするとなれば精度がずれることもあるだろう。

時間ずれが大きければその間、横島は不在となるのだから、だれ

かが事務所を回さなければならぬ。

で、横島と刹那がいくことは決定しているから、あとはだれ、という話になる。

A Fからして刹那がいくならコノカもセットであることは理解できる。

逆に、今という時間に縛られるユエ、千雨は残留だろう。

加え、なにかと不味い立場の明日菜も残留といえる。

攻守のバランスを考えれば高音、ユウナ、アキラ……

「愛子、タマモ、クーフエイ、コノカ・刹那……かな？」

瞬間、雪乃丞は目をむいた。

コノカと刹那を別にして、その三人を引っ張り出すということは、竜族に対する全能権と竜族の権能、そして猿神の代行権を引っ張り出すと言っているようなものだ。

そこまで、そこまで使うつもりなのか？

そうになると、茶々丸はつれていけないだろう。魂が干渉してしま
うだろうから。

「よこつち、その布陣は感心でけへんで。」

「そうですね、横島さん。」

「せやけどなあ、とりあえず、最高の布陣せなあ。」

「でしたら、高音さんとユウナさんも加えるべきですね」

「なんでや？」

「最近、落ち担当で出番がナニですし」

「せやったら、愛衣ちゃんもつれてかんと……」

「「ひどー!」」

涙に濡れるユウナと愛衣。

「たしかに、大戦期やったら、ユウナ最強かもしれんなあ……。」
「どういうことですか？」
「戦争っちゆうのは、女子供が一番わりくつもんや」
「そうですね……。」
「愛衣ちゃんも大軍向けにも対人向けにもなる権能ですからね。」
「高音ちゃんがおれば、補給も万全や。」
「コレが最強の布陣（せいじゆうもくじん）ですよ」「」

わははと笑う神魔はおいておいて、いつ行くなーと腕を組む横島。

とりあえず、秋の京都旅行の後に考えようと思う横島であった。

さっちゃんきーやんの話が終わったあたりで、新たなお客がきた。横島曰く「りっちゃん」「まーちゃん」だそうだ。

その出自を考えて、高音は再び固まった。もちろん、他の従者達はすでに理解することをあきらめていた。実に正しい対処法だといえる。

「ごめんなさいねえ、うちのが暴れてえ〜」
「おほほほ、うちのもバカでしょ？ でも、バカな子ほどかわいいのよ〜」
「ほら、よこっちみてればわかるでしょ〜？」「」

なるほどとうなずく事務所女子。

含蓄のある女性の言葉に、ぐいぐい引き込まれる女子群であった。

楽しい時間はすぐに過ぎる。

そろそろ巡回時間だ、というところで「きーやん」達が・・・

「ああ、今日は大丈夫ですよ？」

「せやせや、今日は神魔が結界補助しとるからな。出勤はないで？」

「……え？」「……」

「学園長にも話を通ってるわ」

「だから、ゆっくり楽しみましょ？」

神魔狂乱は終わらないようだった。

聖母の名で知られる「まーちゃん」は、手の掛かる旦那にして息子をのことを語り、それを興味深く聞く少女達と仲良くしていた。

というか、ふらふらと現れたアヤカとノド力には琴線に触れる話らしく、ガンガンいろいろな話を引き出している。

が、どちらかというと、事務所の主力である横島従者は「りっちゃん」集まっていた。

やはり墮天した旦那を追いかけて、それでも添い遂げたというのがポイントの高い話らしい。

エヴァや刹那が話を聞きだし、そして自分達の事情や状況を示して助言を得たり。

「そうねえ、よこっちの『ロリ否定』発言は、逆なのよ」

「……ふんふん」

「ロリを否定したいんじゃないくて、女の子を守りたいの」

「……ほっほっ」

「逆に、高校生以上の女の子には甘えたいのね」

「……おおおお」

実にタメになる話のせいか、ノートを取る人間多数。

「そういう意味では、ユッキーの方がマザコン呼ばわりされている割には自立してるわ」

「・・・雪乃丞さんは、自立じゃなくて依存の対象がかわっただけでは？」

「そういうのも自立の一種よ」

「」「」「」

さらに深い台詞に尊敬が高まる。

まさに女子大盛り上がり。

「ちゃ、茶々丸ちゃんは、いかんでええんか？」

「・・・はい。みなさんのお世話をいつかっていますので。」

「無理せんでええで、茶々丸ちゃん。」

「横島さん・・・。」

ちよつとつるつとした茶々丸の頭をなでる横島。

「望むことを望むようにする、自立の一步やからな？」

「・・・はい」

盛り上がる女子部をよそに、実にいい雰囲気横島の横島と茶々丸。

のちほどメンテナンスでその内容をみたハカセは「茶々丸、恐ろしい子」とか劇画風になったとかならないとか。

狂乱の神魔来訪の影響か、そこから暫く出勤がなかったのだが、歓迎料理と仕事激減で泣いた横島が居たのであった。

六道主催の新霊具発表展示会に招待された横島事務所。

是非、皆さんでおいでください、という招待状であったが、実に怪しげだと眉をひそめる横島と雪乃丞。

基本、霊具をほとんど使わない上に、AFによる除霊すら可能な横島事務所には、そういうセールス自体が無用なのだ。

ではなぜ？と首をひねると、お茶を入れてきた茶々丸が答えを提示した。

「マスターに試供品を使わせて、美神さまが倉庫へ入荷したいのは？」

「ああ！」

実に納得のいく話であった。

「加え、アキラさんを六道の閥として紹介したいものと推察します。」

「ああ、なんて納得できる理由なんだ！」

思わず納得した雪乃丞と横島だったが、別の側面もあることに気づいた。

招待状は六道のものであったが、協賛でGS協会や関連省庁が名前を並べているのをみれば、これはどうみても証人喚問の類に違いない。

「なんのだよ？」

「・・・アリカ外交失敗の責任を俺らに押しつけようっちゅうやる？」

「・・・うわあ、うげえ。」
「で、六道の助けがほしければ、アキラちゃんを連れて来いって事
やるうなあ・・・。」

そういう理由で皆さんを招いているのであるうと横島は思った。
茶々丸もその理論展開は無理がないと考えていた。

「つうことは、八方ふさがりか？」

「いや、一つだけ突破口がある」

「何ですか？ 横島さん」

「エヴァちゃんだけ連れてく。」

「？」

「そうすれば、美神さんのフォローで切り抜かれる。」

「うっわー、あらかじめ話は通しておけよ？」

「大丈夫だつて。あの人が握ってるお偉いさんの弱みの一部だけで
切り抜かれるって。」

ひきつった笑みで笑う横島であったが、実のところ、六道が今回
の矢面に立つつもりであったのを止めたのは美神であった。

最近、倉庫の件や報告書の件でたまっていた借りを無理矢理かえ
そうと仕組んだことだったのだ。

そういう点では横島の読みは実に正確に読み切っていたものなの
だが、大きな負債を抱え込むことを覚悟しているあたり、未だ丁稚
根性が抜けていないともいえる。

「つうと、エヴァと横島で行くのか？」

「んー、茶々丸ちゃんも一緒にきてほしいかなあ。」

「何のためだよ？」

「証拠のログと緊急要請、かな？」

「うわ、おめえ、正面から事を構えるつもりかよ」

「いやいや、念のためですよ？ええ」

胡散臭い笑顔の横島をみて雪乃丞は苦笑いであった。

エヴァと茶々丸、そして横島の組み合わせで行くつもりだったのに、当然のように美神が加わり、冥子もなぜか加わった。

「あら〜？ アキラちゃんはあ〜？」

「冥子さん、平日ですよ、今日。」

「ああ〜、そうだったわ〜、ざんねんね〜」

「そうっすね〜」

コロコロと笑う冥子であった。

どうやら六道冥那プレゼントな計画には加わっていない模様だ。それどころか、杞憂である可能性すら感じたのだが、美神の囁きでげんなりする。

「・・・さすがにあれだけあからさまじゃあ、横島君でもわかるのね」

「・・・やっぱ、そうっすか・・・」

実際、せっかくの外チャンスを叩き潰したようなものなのだ。それなりに恨まれているだろう事が伺える。

が、しかし。

機会は均等に与えられたし、そのハードルは高かったけど、乗り越えた人間も居たのだ。

ともなれば、アタックした人間自体の力量が足りなかった、それがすべてだろう。

そんな風に思っているのは自分が失敗した側ではないからだ。

外向的な失点を珍妙キテレッツな遊びの中で背負わされたというのだから納得も出来ないし恨みもする。

それが横島の見解であると美神に告げると、おおよそ当たりとのことだ。

今回の新作霊具の発表会にかこつけて呼び出し、政府機関で確保してしまい、イジイジと苛め抜いて溜飲を下げようと言っことらしい。

「・・・もしかして、俺らバカにされてますか？」

「・・・所詮、高校生の子供だつて思われてるわよ。」

「えーつと、オカルト法違反以下でならありつすよね？」

「とりあえず、私の名前で「なんとか」出来る範囲なら自由になさ
い。」

「うつす。」

にやりと黒く笑う横島をみて、自分の指導が生きてるなあ、と弟子の成長を快く思う美神だった。

新作霊具の発表会会場は、怒濤の混乱に包まれていた。

発表会場の各所に設置されたプロジェクターに町中や遊園地の中で撮影された内容が映し出されていくからだ。

その映像の中で、下手な演技をしている外交官やGS協会幹部、政府閣僚などが次々に映し出され、失笑にさらされていた。

そんな中でも「花丸」がついた映像は実に巧みに、そして自然に会話している。

一緒に行動していた家族との関係も良好で、見ていて心癒される光景といえるだろう。

最初は不当な映像ジャックだと騒いでいた人間たちも、花丸映像

を見た後では自分の不手際が明白となっており、声も少なく羞恥にふるえていた。

映像を流した人間がどうやったかは知らない。しかしこれは先制攻撃なのだ。

彼らが行おうとしていた愚行に対する先制攻撃。

この映像を、もっと広い場で公開されたいですか、という実に性格の悪い。

もちろん、攻撃側はあの少年だろう。

三界の英雄などともてはやされて、いい気になっているあの小汚い小僧だ！！」

不意に男は視線を上げた。

そこにはなぜか、その小僧が立っていたが、かれの肩のスピーカーからどこかで聞いた声が聞こえていた。

『なんだ、この思上がった小僧は？ どうせ貴様などおらんでも事件は解決したのであるうな！・・・なぜだ、なぜ私が考えていることが・・・！！』

思い切り自分の口を押さえた男は、周囲を見回す。

『やめろ、やめろ！！ 俺をそんな目で見るな！！ 貴様等のような化け物とは違うんだ！！』

真っ青になって口から泡を吹く男。

思わず横島も真っ青になっていた。

横島にしても、さすがにここまでになるとは思っていなかったのだ。

第二十五話（後書き）

横島の周辺は超一流どころばかりです。

ネギ感覚でいえば、学校入学前のネギの周りに紅き翼がぐるりと取り巻いている状況でした。

加えて言うならば、今現在、それにタメを張る横島も超一流、というかバグです。

もちろん、超一流はそれを認めていますし、世間の評価も追いついているところですが、横島自身の自覚は一生得られない、そんな感じですよ。

第二十六話(前書き)

第二十六話です

第二十六話

今回の首謀者を見つけたと美神から聞いた横島は、新作霊具の一つを借りだした。

人間の表層意識の一部を音声化すると言うもので、意識レベルの低い霊などに使えると言うものであった。

で、人間でも使えるんじゃないか、と試してみると、わりと洒落にならないレベルで使用できた。

美神が試しに横島に使うと「わいは、わいは、ロリやないんやー！ー」と叫びだしたし、横島がエヴァに使うと「横島、らぶー！ー」とか叫びだした。

真実かどうかは別にして、いやなベクトルで喋り出すものだと思っただけの横島は、霊具を装備してその男の前にやってきたら、なぜか本音だけ漏れ状態になってしまったというわけだ。

もう少し洒落のきく「お金大好き（美神）」「令子ちゃんとお出かけ楽しいな（冥子）」などの本音が聞けると思ったのだが、正面からでてきたのは永遠に黒々とした本音の数々で、正直、周辺全員が引いた。

加えて、周囲の霊能者を化け物扱い。

六道からの献金どころか今後の活動すら危うい。

これでは政治生命を絶たれたと言っても良いだろう。

「・・・ちよつとかわいそうなことをしましたかね？」

「いいんじゃない？ このオッサンが裏で何を言っていたかなんて結構有名だし。」

霊具をはずした横島の横で、美神は肩をすくめる。

「で、これからは？」

「ん？ エヴァちゃんにガンガン試使用してもらって、ガンガン在庫よー！」

「あー、やっぱり？」

「べつにいいぞ、美神令子。私の権能の幅にもなるのだからな」

「さっすが、闇の福音！」

「はっはっは、ほめるな」

けたけたと笑う二人女王。

入れないなーと思いつつ、茶々丸と冥子と横島は微笑ましい光景のようにそれを見ていた。

出展された大半は試供品レベルであったが、それがエヴァの手に渡ると輝きが増し、さらに美神が使うと唸りをあげる。

この流れを見ていた霊具制作者たちは挙って美神やエヴァに新作や自信作を送りつけるようになるのだが、それは少しだけ未来の話し。

帰りに六道夫人の奢りというで、都内ホテルのレストランで食事会が開かれ、今回の発表会の成功と様々な協力に対するの感謝が申し入れられた。

発案横島、実行茶々丸のゲリラ映像は、六道の閥に一部のヒビを入れたが、それ以上に得るモノがあったといえる。

新作の霊具の有用性とそれを扱える人脈を確保していること。

その人脈は子供じみた陰謀など打ち砕く力があるという事。

そしてそれ以上に六道夫人を喜ばせたのは横島からの提案であった。

横島は、今回不利益を被った関係各員へ何らかの便宜を図る機会を与えてほしいとやってきたのだ。

さすがに魔法世界へ直接の橋渡しは無理だが、その出先機関である麻帆良への橋渡しや、関係者の紹介などなら請け負う、と。

はじめは敵対者など徹底的に叩き潰せばいいのに、と思ったが、横島の意見を聞いて感心させられた。

「……あれだけ、家族を犠牲にしてもカジリ付いた仕事が失敗したんすから、そりゃ絶望するっすよ。今の立場になるまでにいろんな努力や犠牲を払ったんすから、一度の失敗でオジャンじゃ酷いっす。」

救いの手をさしのべ、それを手に取るなら助ける。

それを否定するなら無視する。

実に横島らしいと六道夫人は感心した。

これは横島の師としての姿勢に似ている。

さしのべる手を握ったものは、容赦なくその高さまで引っ張りあげられ、手を取らぬ者にはそれ以上の関わりを持たない。

賛成も反対も批判も肯定もあるだろう。

しかし、それが横島の姿勢であると言われれば納得できるものと六道夫人は考えていた。

横島の中途半端な悪の有様に憤慨していたエヴァであったが、了見が狭い事を美神に指摘された。

これは救済ではなく、防衛にして攻撃なのだ、と。

何も横島自身が損をするわけではない利権が誰に渡ろうと問題ではないし、魔法世界はそれどころではない。

加えてメガロメセンブリア直系であった麻帆良にコネが出来たとしても、今後の魔法世界への干渉は難しいことは間違いないのだ。

逆に魔法世界からの移民や移住に対応しなければならぬバーターが発生することを考えれば、負債としか言いようがない。

それを見た目で貸しとなるように相手に擦り付け、加えて利権を行使するまもなく責任に追い立てようと言うのだから質が悪すぎる。そんな説明を受けたエヴァは、自分が政治に向いていないことを自覚する。

逆に、横島ほどの若年の人間がそこまで政治に詳しいことを疑問視すると、肩をすくめる美神。

「横島君のご両親が、結構「すごい」人たちのよ。だから、そういう判断の指南も「教育」してるんだと思うわ」

うちでも揉まれたし、とも笑う美神。

なるほど、と深く感心するエヴァであった。

何しろ実物は学園祭で見ている。

あのバイタリティーと行動力は到底一般人とは思えず、一角の人物であることは確信していたが、美神がそこまでいう人物なのかと言うことでさらに評価を深めた。

「・・・ふむ、義父母となるやもしれん。関係を深めておくか？」

ニヤニヤし始めたエヴァの横で、小刻みに左右を見ていた茶々丸の動作が止まる。

「ところで横島さん、この場を撮影している人たちはどうしますか？」

茶々丸の言葉に視線をきつくする六道夫人。

「茶々丸ちゃん、それはどういうことかしら」

冥子の言葉に茶々丸が、この場を三台の一眼レフカメラと二台の動画カメラがねらっていると答える。

場所はテーブル上に水滴を垂らして指示する。

「六道夫人、あなたが配置したのは何台ですか？」

横島の問いに六道夫人はにこやかに答えた。

「……一眼レフはうちのだけど、動画は知らないわ」

何に使おうとしたのやら、と頭痛を覚える横島であったが、エヴァに視線を送ると彼女もうなずく。

パチンと指を鳴らすと、周囲に展開されるのは認識阻害魔法。カメラの視線が周囲に散らばった。

「動画はテレビ撮影カメラです。ドキュメント系を制作している製作会社のもんです」

そこで詳しい経営状態や、今まで制作された内容などがズラズラとでてくる。

流れとしては政経スキャンダルや贈収賄関連のニュースを扱う製作会社らしい。

「つまり、六道と美神さん狙いつすか？」

「六道と美神と『横島』狙いよ。」

ほえ？ と惚けた顔の横島。

「あのね、横島君。君は既に公開された最若手のGS事務所持ちで、

加えて言えば、協会報告内容でトップクラスの成績を上げてるのよ？」

注目されて当たり前、と笑う美神。

「でもですね、美神さん。俺、全く除霊してないっすよ?」

「・・・このまえ近畿君が遊びに行ったとき、周辺除霊をボランティアでしてるって言ってたわねえ」

「ふぐっ！　そ、それはあ・・・」

「別に責めてるわけじゃないわ。麻帆良には霊的な防御がなかった分吹き溜まってるけど、処理できる人間がいなかったんだもの。こつこつやらないと、一気に溢れかえってきてしまっ、だから地道に押さえて回ってる、そうでしょ?」

「・・・ええ。霊団なんかにならたら、災害レベルになるほど居るんすよ。」

「その行為が、師匠である私へのアンチテーゼだって協会では受け取ってるのよ。」

「へ?」

「簡単に言つと、美神令子に対抗できる逸材で、さらに魔神殺しの字持あひなち。で、今回の政府関係の虐めから協会が救ってやれば恩に着るだろうとかなんだとか。」

「うっわー、クロいっすね!」

美神の話しでは、唐巢神父のような存在として良いように使おうとしていたようだった。

エヴァはそんな協会の行動を見て、いつの時代も組織は変わらな
い、と苦笑い。

「そんな協会にも便宜を図ってあげるの?」

「そりゃそっすよ、自分の上部組織に恩が売れるなんて機会を逃

がさないっすよ」

ケケケと笑う横島。

が、事態は少しだけ斜め上に向いていた。

食事も終わりホテルを出ようと言うところで、偶然人に会う。

「よこっちやないか！ なにしとん？」

「んあ？ 銀ちゃんこそ何しとんのや」

パンパンと手を打ち合わせあう横島と堂本であったが、隣のマネージャーが咳払い。

「ん、ああ、すまんすまん。これからお仕事や。制作発表に出なならん」

「ああ、踊るGSMムービーか？」

「せやせや。・・・ああ、そうや！ 制作発表見ていかんか？ G S協会の後援やら六道さんから協力してもらっとるし。・・・どうでっしやる、六道さん」

にこやかな笑みで六道夫人を見る銀一に、六道夫人は笑顔で答えた。

「そうね、協賛してるし、横島君の親友ですものね、ちょっとおじやましましょう」

言われた銀一は満面の笑みで横島の肩を組む。

「な、な、この前の学生映画の話してもええよな？ 結構ええ出

来やったし！」

「・・・とりあえず、クラスの了解と将軍の了解を取っとく」

「たのむで！！」

極上の笑顔の銀一がその場から去ると、ちよつと恨めしそうに六道夫人を見る横島。

今回の食事が仕組まれたものであることを理解したからだ。

さすがに居心地が悪いのか、視線を逸らして「ほほほ」と笑う六道夫人であった。

「まあまあ、男の子でしょ？ 細かいことを気にしちゃだめよ？」

「だー！ー！ それ、美神家の固有技っすか！？ いずれ ひのめちゃんも使うんすかあ！？」

さすがに泣きながら叫ぶ横島を哀れに思いつつも笑うエヴァと、内蔵メモリーへ動画撮影する茶々丸であった。

踊るGSという映画は知っていたが、主役が横島の幼なじみとは知らなかった冥子は、結構うらやましいと感じていた。

幼い頃、そう、彼が大阪にいた頃というのだから小学生の頃の話だろう。

六道の調べによると、彼は小学生の頃から男女共にモテていたという。

本人は否定するが、彼とつきあいのある女子の多くが彼に引かれていたし、今でもその頃の思い出を大切にしているときいている。

心優しく、行動力があり、それでいて安心感を与えてくれる異性

というのだから、モテないわけがない。

が、やはり子供故だろうか？ 好きな子に意地悪したりとか、横島だから大丈夫という扱いをしてしまうため、誤解の溝は埋まらず、モテていたという事実が横島の記憶と経験から失われることになる。加えて優秀な両親によるスパルタとも言える教育と圧力の影響で、彼は大きく歪んでしまった。

押しつけられた影響か、その後の人生で極めて損をすることになるのだが、その環境が彼を大きく成長させた。

未だ癒えぬ心の傷と共にだが、信じられないほどの大きさになったと言えるだろう。

冥子にとつて、それは酷くまぶしく、非常に嬉しいことであった。いや、最初は妬ましく感じていた。

どんな恐怖であろうとも、どんな苦しみであろうとも、それが糧になるのならば、と思ったこともあった。

しかし、それは大きな間違いであった。彼の弟子であるアキラを指導するようになって、彼の事務所に向くようになって、それが体感できた。

常に前を向き、常に前に進み、常に友の手を取り、常に弟子を支えて、常に光を向いていただけだったのだ。

それを知っていると、今日の前で行われている記者会見など茶番に等しいものだとわかる。

これは友である「近畿剛一」こと堂本銀一への手向けであり、応援歌なのだ。

宣伝などの意図はなく、彼の為になればと思っただけなのだ。後付けで色々と話があるかもしれないが、それでも横島にとつての真実はそれだけだと言える。

自分も強くなれるだろうか、そんな思いが少しだけあるが、強くなるんだという気持ちは追いついていなかった。

強い決意と思いがなければ、あそこまで強くなれないのかもしれないと思う冥子であった。

「・・・不安？」

美神に問われ、うなずく冥子。

「直接言うのもなんだけど、最近安定してるし強くなったんじゃない？ 冥子」

「・・・ほんと？」

「アキラちゃんを教えていて、色々学ぶものがあったでしょ？」

「・・・うん。すごく勉強になったの。」

そう、制御も集中も使役も、いままで流れてやっていたものを説明しようとする、すごく難しく、すごく大変であったが、説明の前段階で文章や言葉にするために思い悩んでいると、横島たちが現れて協力してくれるのだ。

式神使い独特の感覚を言葉にしようと言うのだから非常に難しいはずなのに、極めて明確な表現や言葉にしてくれるから、逆に冥子が教わっているかのような感覚になっていた。

「師になったことで、逆に勉強になったって横島君も言ってたわよ？」

「・・・わたしも。」

そういう意味では横島が麻帆良に来て一番の恩恵を受けているのが冥子なのかもしれないと、彼女は自分で思う。

それを返せていない、とも。

「あのね、冥子。貸し借りで厳しい関係じゃないでしょ、あたしたち。」

不意に、目頭が熱くなった冥子。
この瞬間に「お友達」意味を、心から感じた。

テレビを見ると、横島が映っていた。

女子寮の共同スペースだったので、結構な人間が見ていて驚いていた。

横島と交流の多い3A以外でも有名な横島が、近畿剛一と友人の現役GSだということで記者会見に招待されており、質問などをされていたり、近畿と掛け合いしたりと盛りだくさんなニュースになっていた。

「へえ、横島さんって、有名人だったんやねえ。」

亜子の言葉にアキラがうなずく。

一時期、横島の事務所に近畿が寝泊まりしていたのを知っていたが、あまり口外できない内容なので黙っていた。

「そうそう、このまえ横島さんの事務所に遊びに来たときに撮らせてもらった写真が・・・」

そんな朝倉の台詞に、むちゃくちゃな勢いで寮生達が集まった。

「あ、朝倉、見せて!」「朝倉先輩!」「わ、わたしも!!」

もみくちゃにされながらも引つ張りだしたプリントアウトをみて、ため息をもらす女子達。

横島と共に鍋をつつく近畿。

おかずを取り合う近畿と横島。

テレビゲームで競いあう横島と近畿。

なんというか、近畿ファンにとってご馳走な写真だった。

逆に、横島に興味のある女子にも、かなりのご馳走写真だったりする。

ふわー、とか、ほわーとかいう台詞の渦巻く中で、愛衣が朝倉を掴みだした。

「朝倉さん、あれ、出しちゃまずい写真ですよね？」

「あはははは、自慢したくってさーw」

「みんな携帯で写真に撮ってますよ・・・！」

「うわ、まじいー!!」

広めないってことで撮影許可されただけに、携帯で広まるとまずいのだ。

が、一応、横島事務所に出入りしている女子は広めないことを約束の上で持っていたりする。

長谷川千雨も実は持っていて、自分の部屋で同じ番組を見ていつ、自分の用の写真をのぞき込んでヘラヘラ笑っているのだが、それはさておき。

記者会見で近畿が喋っていた「学生映画」の話で共同スペースは盛り上がっていた。

学園祭で横島のクラスで上映した映画は結構有名であったが、あの学園祭の開催規模だけに泣く泣く巡回ルートからはずし、結局見えていない、という話し多かった。

見ている人間の評判が非常に良すぎるため、再度上映してもらえないかという希望が集まっていた。

「ねーねー、コノカ。横島さんのところに入りにしてるんでしょ？
何とかならない？」

占い同好会で一緒の友人から声をかけられ、思わず苦笑いのコノ力。

他にも横島事務所に出入りしている人間へ再上映の話が投げ込まれ続けた。

むろん、そんなことをしても上映などされるわけがないのだが、どれだけ言葉を重ねても理解されず、周囲に不満が重なり始めた。

「そんなわけで、上映してみたらどうじゃろうか？」

クラスの代表として横島と雪乃丞、そして監督をしていた生徒が学園長に呼び出された。

魔法関係抜きで話がきているので、そっちの話話で。

「で、ですが、俺たちの映画はそんな大それたものじゃなくて……」

「そつかのお？ ワシも見たが、良い出来だったぞい？」

学園長の話しは本当だろう。

だが、横島は少し引つかかっていた。

というか、底意が透けて見えるなあ、というか分かっていった。

つまり、映画上映会を実施するという形で会場を準備して、そこで外交をしておもうという算盤勘定が見え隠れしている。

もちろん、後ろ盾を失った麻帆良は岐路に立たされているだろう。しかしながら一方的に利用されるのはおもしろくないな、と考えってしまうのは美神事務所の教育が行き届いているおかげだろう。

「学園長、ちょこつと提案があるっす」

横島の提案は、実に奇妙なものであった。

学園長が招待したい人数と同数を横島たち生徒が招待できるとい
うものであった。

学園長は「おもしろい」と正直に感じ、それを容認した。

さすがにそれが大騒ぎに変わるとは思っていなかったのだが。

第二十六話（後書き）

陰謀とか野望とか、黒い感情も似合う横島ですが、それって自分が
樂をできるとかギャルといい事で着るとか、そういう方面で発揮さ
れる能力ですよね？

つうわけで、うちのよこっちは路線が違つかもw

第二十七話（前書き）

二十七話です

第二十七話

さて、全校映写会なるものが開かれた。

はじめは希望者のみのプレ上映のつもりだったが、全学園規模で希望者が多すぎたため、逆に全校上映をしようということになったのだ。

学園都市の各校と、都市内の映画館を使って行われた上映会はきわめて好評で、続編の制作を期待する声にあふれていた。

監督である佐原と脚本である雪間は、その事実に感激し、そして感謝した。

物書きであろうと映像屋であろうと、それだけの人数の感動を得られる機会などそうそう有るものではない。

それが学生の内に味わえたのだから人生自体が歪んでしまってもおかしくなかった。

しかし、二人共に極めて精神的なバランス感覚がよく、自らの実績とまで思っではいなかった。

周囲からの好評や好感の大半が主演者や関係者の人気によるものであることは理解していたし、撮影効果や脚本効果などは学生の域を出ていないのだ。

ならば飛び抜けているのは何か、と考えれば自ずと答えが出ようものだ、と考えていた。

だから浮かれもしなかなければ思い上がりもしなかった。

しなかたのに……！！

「つつわけで、こちらが南洋の小国ヘラスの王女、テオドラ様です」
「宜しくなのじゃ。」

ズギヤーン、という効果音でも聞こえるほどの美人が、佐原と雪間の前でお辞儀をしていた。

横島の話では、先の学園祭の時に映画を見ていたらしく、どこか配給会社のものかを調べている内に時間切れになり、さすがと帰国したが諦めきれず、いろんな伝で探している内に主演が「GS横島」であることが発覚。

追って制作配給や問い合わせ先を調べている内に今回の上映会にぶち当たったという。

「とりあえずテオドラ様は、国内配給許可とその際の利益配分について相談したいつう話で……。」

ぱったりと倒れた佐原と雪間。

バランス感覚が崩壊寸前だった。

「……確かに主演の忠夫の演技やキャラクターは良かったのじやが、脚本や撮影はもっと良かったのじや。もし続編を作るなら、わらわが後援するのじやが？」

「い、いや、その、あれは学生映画であって、利益や収入のために作ったものじゃありませんから……。」

「そ、そうです!! だから配給とかそういうことは全く分からないっす!!」

じつに木訥とした反応に快くされてしまったテオドラは、にっこりほえむ。

「ならば、そなたらに迷惑がかからぬよう配慮させてもらおう。」

すつと視線を横島に向ける。

横島もそれに併せてうなずいた。

「じゃ、さ。みんなに内緒で卒業旅行の資金にしちやわね？」

「「!!」」

それだ！ と指を指しあう男たち。

「ならば、我が国に来てくれれば、盛大に歓迎させてもらおうかの？」

おお！ と喜びにあふれる男たち。

「（いいんすか？ それ・・・）」

「（なに、南洋に島でも買っておくさ）」

いざとなれば、横島のクラスメイトごとカミングアウトしてしまえばいいさと、わりと投げっぱなしのテオドラであったw

実際の事務関係や法律関係は、霊能事務所経由でやっておくことを約束した横島は、二人を送り出したあと、テオドラを別のところへ案内する。

そこには美神美智恵・六道冥那のオカルト二大女史がいた。

それぞれが自己紹介した後、本題に入る。

魔法世界の今後と現在の状況、そしてそこから派生する権益とその割り振りに関する情報交換が今回の目的であった。

もともとはGS協会経由で政府間協議をしようとしていたのだが、全く期待のもてない相手であったため、もっと話の分かる相手を準備せよと横島に無茶振りをした上での会見であった。

実際、この二人に何かの力があるかといえは、逆に政府でも何でもない事を考えれば交渉の相手としてあり得ないものだ。

が、魔神殺し横島忠夫が、何においても頼れる相手を紹介しろと言ったところで紹介された相手だけに疎かにできなかつた。

そして実際に話せば、打てば響くがごとの見解と相似。深い洞察と高い目的意識。

じつに気持ちの良い相手であったと感じたテオドラは、帝国の窓口に彼女たちを指名した。

さすがに身に余ると辞去する二人であったが、強引に取りまとめられた承させられてしまう。

実のところ、アリカからも窓口としての依頼を受けており、かなり困惑の二人であった。

「いやー、さすが六道夫人と隊長っすね」

にこやかにほほえむ横島を見て、かなり殺意を覚えた美神と六道であった。

異世界間外交を知り合いに振りきった横島は、実に安心しきっていた。

夏休みでの大事は、これで専門家たちに任せたようなものだし、政府や組織の交渉なんてめんどくさいことも他人任せにできたわけだ。

ああ、やっとGSに戻れる、それが正直な感想だった。

最近では麻帆良学園都市外からの除霊依頼も少なくなき、学園敷地から出て除霊に行くことが多くなってきていた。

その所業か、美少女だらけの除霊事務所の噂は次第に広がり、彼女たち見たさに依頼してくるバカも少なからず見られたりする。

もちろん、そんなバカにはタマモ的な制裁が加えられるのだが、詳細には書かない。

オカルト法ぎりぎりらしいので。

そんな美少女除霊団な彼女たちの除霊には横島か雪乃丞が同行するのだが、それがまるで援交を監視するヤクザのようだと評判が悪い。

まさにそういう光景だったということで、近所のバカが女の子を助けるとかいつて突っ込んできたのだが、それを止めたのが運の悪いことに神多羅木教諭。

ヤクザの小僧の上役が来たという事で大騒ぎになり、一時は機動隊が出動する事態になったほどだ。

いたしかたなくGS本免許と依頼状や事務所証明やらを見せて、小僧たちの暴走が原因だったことを説明すると、どうにか納得してくれた。

では、ということとで神多羅木教諭を連行しようとする警察を、あまりに自然な動きだったため、思わず見送りそうになった横島と雪乃丞だったが、どうにか引き留めることに成功。

さんざん神多羅木教諭から愚痴を言われたが、警察に教員であることを理解してもらえた。

この件で一件落着かと思いきや、恐ろしい風評が世間で吹き荒れる。

なんと、麻帆良周辺の警察とヤクザとマフィアがツルんでいるというものであった。

それを聞いて倒れて死ぬかと思った神多羅木であったが、それが誤解であることを説明することが不可能であると判断し、見た目の改善を初めから放棄した。

ではヤクザと称された横島たちはというと、これもまた何もしなかった。

いや、ちょっとだけ嫌らしい工夫をしていた。

そう、修学旅行の時に渡された六道のスーツを身にまとったのだ。

いかにも学生っぽい少年をヤクザと称するのもいいが、さすがに六道の家紋をつけたスーツを着ている者たちを問答無用で制することはない。

一般人ならまだしも、組織的な流れで行動している人間ならば手を引かざる得ない。

そんなわけで、圧力をかけてやろうとしたところ、ぱたりと噂が消えた。

そう、消えたのだ。

つまり、一介の小僧たちには強く出るが、六道の閥には強く出れない方々が相手というわけになる。

そんなわけで、冥子に聞いてみると、意外な名前が出てきた。

鬼道の分家、鬼雅ではないか、という。

「鬼雅はねえ、まーくんのところの分家なんだけど、小物でうまみがなくて、無能だから、六道でも相手にしないって決めるの。」

はつきり、きっぱり、はっきり、であった。

「……ずいぶんはつきり言うねえ。冥子ちゃん」

「だってえ、ちょっとでも良い事言つと勘違いして寄ってくるんですもの。」

冥子がここまで嫌うのだから、それなりに問題のある人間なんだろうと思う横島。

にこにこ顔にも歪みが出ているし。

過去のセクハラ横島でもこんな顔をさせていないのだから、その上をゆく存在といえる。

とはいえ、うまみと無能がないという切り離し方も凄いなと思、
少しだけ聞いてみる。

「・・・じゃ、俺はうまみと能力があるからお友達なんすかね？」
「ひつどーい！ 横島君はそんなの関係ないのよ〜！」

冥子は六道としてつきあっているのではなく、冥子としてつきあ
っているのだから、そんなのは関係ないのに！ と怒り心頭。
さすがに悪かったと思い、平謝りの横島だった。

鬼雅の干渉は、麻帆良の中までは及ばなかったが、一步外に出る
と細々と始まった。

依頼現場に干渉したり、依頼主から直接依頼を受けて仕事を奪つ
たり、協会に伝えられる情報をゆがめたり、間違えさせたり。

基本的に、横島忠夫霊能事務所にとって、全く障害にならないレ
ベルだったので、初めの内は気づかなかったのだが、そんなことが
10件も続けば気づかないわけもない。

ではその原因は、とGS協会経由で問い合わせてみると、犯人は
@@@です、自分の縄張りを荒らされたから復讐です、今は反省して
いますので二度としません、これ以降の行為は私ではありません、
と、トカゲの尻尾が差し出されるといふ流れであった。

もちろん、その背後に「鬼雅」が居ることは分かっているが、所
詮木っ端のやることと軽んじていたのが悪かったらしい。

とうとう実力行使に出てきた。

深夜暴走するダンプカー五台。

ツルハシやハンマーなどの土建具を担いだ男たちが麻帆良に降り立った。

そこは商業地区の一部で、結構有名なビル事務所。

横島忠夫霊能事務所、そんな看板を見た男たちは、怒声をあげる。

「やつちめえー！ー！！！」

「「「「「おおおおお！！」「」「」「」

結果は実に単純だ。

巡回中の魔法先生の捕捉された彼らは、早々に意識を奪われ、その場に倒れていた。

「ガンちゃん先生、どんなつすか？」

「ん？ ああ。直接鬼雅から雇われてるね。」

魔法で記憶を汲み上げていたガンドルフィーニ教諭は苦々しく顔を歪める。

それを聞いて横島はうれしそうに笑った。

そろそろつき合うのが面倒になってきたので、決着をつけたいなあと思っていたところの凶行だ。

最近まめに連絡を取っている美神美智恵にメールを打つと、即座に電話がかかってきた。

「じゃあ、鬼雅の犯行決定ね？」

「ええ、鬼雅当主からの直接依頼って記憶になってますし、書き換えられてる痕もないそうです。」

ふう、とため息をもらす美神美智恵。

「実際、六道の閥だって思われてるはずの俺に、なんでちょっとしかけるんすかね？」

「んー、とりあえず、鬼雅にとっては、麻帆良っていう美味しい稼ぎ場所を奪われた上に六道の次期党首に取り入る憎き若造なのよ。横島君って。」

「えーっと、もしかして、六道のスーツ着たのって失敗っすか？」

「そうじゃなくても別の理由で同じ事したと思うわ。鬼雅ってそういう所だから」

どこの昭和ヤクザだよ、とつぶやく横島に美神美智恵は苦笑い。

「本当にそういう役目だったのよ、以前の六道ではね。ただ、先生がそう言うことを嫌っていたから左前になってしまったのよ。」

「で、新しい小僧どもはチンピラっぱいの荒稼ぎ。そりゃム力つくわけですね」

「・・・一応、女の子ばかり引つ張り回してるのもム力つくらしいわよ??」

ぶぱつと吹く横島を、何事かとのぞき込むガンドルフィーニ。

「・・・と、とりあえず、一件落着にしてもらっていいんすよね？」

「ええ。・・・ただ、ちょっと外国関係で相談にの手もらいたいのよねえ??」

「えーっと、今度の土曜、いいつすか？」

「ええ、令子の事務所で待ってるわ」

うはあ、東京出張ですかあ、と肩を落とす横島であった。

くじ引きで同行者が決まった。

横島の腕を組んでぶら下がるアスナは実に機嫌がよく、道すがらの寄り道も絶好調であった。

おなじく、クーフエイもバカンフーレベルを落とし、横島の腕にぶら下がってうれしそうにしていた。

「おい、そろそろ行くこうぜえ。」

「ええ〜〜〜」

不満の声をそろえる二人の少女を引っ張るように美神の事務所にやってきた横島であった。

「人工幽霊、久しぶり」

『はい、横島さん。美智恵さまがお待ちです。』

「うわ、待たせたか？」

『いいえ、時間の指定はありませんでしたが、先ほど事務所にいらつしゃいましたので、それなりに良いタイミングかと。』

「お、そりゃよかった。」

「おじゃまします」「おじゃまするアル」

従者二人を連れて門をくぐると、玄関が勢いよく開く。

「せんせー！ おひさしぶりでござるう！！！！」

飛びついてきたシロを捌きつつアスナに放り投げると、それはそれで嬉しいらしくクンキユンいって抱きしめあう。

子犬のようなじゃれあいは置いておいて、事務所をのぞき込むとおキヌが小さく手を振っていた。

「横島さん、お元気でしたか？」

「おお、おキヌちゃん。髪型かえた？ 結構いい感じ」

「え、ええ？ ちよつと切りそろえただけですよ？」

「それがええんや。やつぱおキヌちゃんはそうじゃないとなあ。」

「・・・えへへへ。ちよつとうれしいですねえ。」

顔を赤くしたおキヌが「お茶入れますね」といってキッチンスペースに立つ。

かわりにソファァーにクーフェイとともに座ると、所長室で何かの言い合いが聞こえた。

「おキヌちゃん、もしかして隊長、美神さんと「これ」？」

人差し指同士で「バツ」を作ると、おキヌも苦笑い。

「もう！ ママー！ これは私とエヴァちゃんの共同作業みたいなものなのよ！？ いくらオカGだって干渉してほしくないわ！！」

「そんなこと言わないでよ、令子。ちよつとエヴァちゃんに口添えしてもらっただけでいいのよ」

「だーかーらー！！！！」

鬼女もかくやという表情の美神が所長室から飛び出てきたところ

で、思わず構えてしまうクーフエイ。
それをみて少し冷静になった美神。

「……って、あら、横島君、今日はどうしたの？」

「えーっと、隊長に呼ばれました」

「ママ？」

「……えへへ」

「ママ!!」

「だってえ！ 強力な認識阻害の魔具が足りないんだものお!!」

曰く、移民や移住の受け口にオカGがなったことは非常に評価が高く、ICPOからも高評価を得ていたが、資金や人員までの補助は得られなかった。

では、移民希望の第一段を事務人員として受け入れようとしたところで問題発生。

なにしろヘラス帝国系の国民には純粋な人間が少ないのだ。

というわけで、いかにオカルト慣れしている表の世界でも、半獣人や魔人はかなり奇異の目で見られてしまう。

いたしかたなく麻帆良経由で認識阻害のアミュレットを入手してみたが、非常に高くして非常に入手困難になっていたのだ。

では、ということ、多数エヴァに使ってもらい、令子の倉庫から卸してもらえないかというのが相談の大本であった。

エヴァの関係なら横島に話を通せばいいし、倉庫からの卸だって令子の懐が痛むわけではないのだから、良いではないか、という訳らしい。

まあ、理解はできるわな、と横島。

価格が高いのも入手しにくいのも魔法世界がガタガタになっているせいだ。

その一端を担っている自覚のある横島も首をひねる。

ヘラス帝国の人間が旧世界に移住するとなれば認識阻害は必須だ。だから移住しようと言う人間が準備しないわけがない。でも必要と語る美神美千恵をみて首をさらに深くひねる。

これは試されているのかな、と。

悩んでいても仕方ないので、美神美千恵にそう聞くと彼女は素直に認めた。

ヘラス帝国からみた一介の美神美千恵にどのような応力があるのか、と問われているのだ。

「さすがに月産百個は予算的に無理なのよ」

深いため息の美神美千恵をみて、横島は少しうなずいた。

「隊長、ようするにAFを使いたいんじゃないかって、認識阻害のアイテムが、月産100必要なだけつすよね？」

「・・・ええ、そうよ」

「だったら。」

美神美千恵にとってそれは解っていたが思いつかなかった手であった。

関西呪術協会。

関東魔法協会と対になる組織であり、日本系呪術の流れを強くまとめた組織だ。

かの組織をもってすれば、月産100の認識阻害符など簡単なことだとこのことで、いつから納めるかという話にすらなっていた。

とりあえず、予算面のすりあわせもあるので、後日、また、ということになったが、美千恵にとって魔法のような手腕に思えてならばかった。

「ああ、ちよつとしたコネっすよ。うちの従者に関西呪術協会のお偉いさんの娘がいますよ。」

・・・近衛コノカ、そう、関東魔法協会の会長の孫娘にして関西呪術協会会長の娘。

こんなカードがあること自体忘れるだなんて、自分はずいぶん抜けていたように思える。

「それに、呪符のことで、あそこの若手と交流があるんすよ。」

さらに、そういえば、横島の前世である京の陰陽師の知識があれば、今風の呪術師たちは興味津々であろうこと間違いなしだ。

「・・・ね、横島君。今度一緒に京都行かない？」

「およ？ 美神タイチヨーも行くアルか？」

クーフエイの話、秋の事務所旅行の話聞き、天命を感じた美千恵であった。

「その事務所旅行、同行させてね？」

「横島君、うちも行くわよ？」

「やったあー！」

「やったでござるうー！」

小躍りのシロとおキヌ。

寝ていたひのめも起きたけど、横島の気配を感じて嬉しそうに微

笑むのであった。

第二十七話（後書き）

とりあえず、かけた分を着々とアップしています。

ゴールは決めているんですが、途中で書きたい人が増えて増えてw

従者関係の日常もいっぱい書きたいし……。

ちょこつと間隔をあけて仕切りなおすかも……。

第二十八話（前書き）

第二十八話です

第二十八話

鬼雅は刑事訴追されたそうだ。

いろいろと余罪もあり、すでにオカルト事務所としての実体も失われたという。

とりあえず使えそうで実害のない者は六道で引き受けたそうだが、直系はまったく「ハシボウ」だという話で、相手にしたくもないというのが六道夫人の話。

ではどうなるのだろうか、と聞くと「そんなことは気にしなくていいのよー」と六道夫人の言葉。

しかし、長い期間オカルト以外で食べたことのない人間が、一般職に就けるはずもなく、彼らが世に出ればモグリのGSになるかアランダーグラントで糊口を凌ぐしか無くなるだろう。

そうなっからでは遅いので、という話を美神隊長に話を持ってゆくと、軽い調子で追跡調査を引き受けてくれた。

先日、関西呪術協会の実質的なナンバーワンである赤道氏を紹介したら、以降ずつとご機嫌で、西条からも感謝のメールが来たほどであった。

さすが美神親子。

機嫌の悪いときの八つ当たりは同じらしく、最近の直接被害者は西条だとか。

「将来、美神さんの旦那になるなら、隊長と美神さんのダブルで受けることになるんじゃないか?」

と電話口でささやくと、本格的に歯の根があわないほど震えてい

るのが聞こえて結構申し訳ない気持ちにさせられた。

美神に横島クラスで折檻されたら死にそうだな、西条。

ともあれ、麻帆良にきてから距離を置いたせいとか、西条と横島は結構電話をしたりメールをしたりしている。

事務的なことや業界情報やら魔法関係の話に至るまで様々。

美神親子に関する情報を密にしていることで、お互いに死なないようにしているだけなのだが、わりと重要な情報の受け渡しルートになりつつあった。

たとえば、先日のナギ長逗留の折りにも、魔法世界からの指名手配が、かなり高いレベルになっていることに気づけたのも、このルートのおかげだったりする。

逆に西条もこのルートのおかげでオカルト犯罪の捜査協力や情報収集がうまく行っており、活用しているといっても過言ではない。

ゆえに、現状はお互いに益するところなので、進んで壊すことがない関係ともいえる。

英雄とまでいわれても、収入にもつながらない除霊や霊害対策指導なんかを学園内で行っている彼の姿勢は評価しているし、対魔法世界外交で失点を重ねた官僚への救済は、実に見事だった、と西条は感心していた。

昔の小狡いイメージのままではなく、加えて常識的になったと西条は感じている。

むろん、あのころの小物感はずけていないが、それでも幅が広が

ったように思えた。

ゆえに、鬼雅の動向には眉をしかめていたが、想像以上に落とした所を極めた内容であったといえる。

手足のゴロツキは六道に押さえられ、財産一切を没収され、刑事事件犯として収監されるのだから手も足も出ず、加えてオカルト犯罪ということで重度の監視下に置かれる。

今までの余罪を考えれば軽すぎる刑罰だが、法律上どうしようもない。

死刑とまでは行かないが無期懲役とか離島懲役とか遠方収監とか日本にはないのだろうかと考えてしまった。

「まあ、こっちはこっちで身を守る手段があるし、問題ねーだろ？」

横島君自身はそうだろうが、と思ったが、彼の周りの弟子たちも常識外な事を思い出し苦笑い。

少なくとも、オカルトゴロや特定犯罪者程度では傷一つつけられないだろう事は間違いのない少女たちだったから。

そのへんは先日オカGの訓練施設で間近に見せられており、GS試験への参加を認めさせられてしまったばかりであった。

というか政治的背景が解決すれば、即時にオカルトGメンに勧誘したいぐらいだった。

というか、先生、どうにかしましょうよ、ねえ！！

「西条君、とりあえず人員確保はできるから、興奮しないの」

最近機嫌のいい美神先生の話では、魔法世界からの移住組を優先的にオカルトGメンに回してくれるそうだ。

政治色が強い人員だが、明確に魔法というメゾット（方法）を持っていて、さらに簡単な訓練で戦力となるのだから一般職員を教育するよりも戦力強化になる。

しかし、あの「一騎当千」には、あの魅力にはかなわないのですよ！？

「一流GSの確保は急務だけど、関東圏内なら「応援」要請できるでしょ？ 料金は令子より常識的に」

その辺が妥協すべきところか、と肩を落とす西条。

「でもね、西条君。君がそうやって「使える」ところばかり使いたがるから、二線級以下のGSが嫉妬して、結構オカルトGメン（うち）の負担になってるのよ？」

ぐう、それは、仕方ないだろう。

同じ料金なら依頼達成率が高い方がいいし、バカは言っても常識がない方がいいに決まってる。

いいや、バカで非常識だが確実に仕事ができる方がいい。

方針や戦略が似ているだけに、横島事務所に依頼する方が数百倍楽なのだ。

しかし、それによる弊害が大きいと言われては黙るほかない。

ただ、逆に、二線級のGSなどに任せられる仕事がないことも事実なので何とも良いがたいわけだが。

「・・・西条君、あなたはずいぶん視野が狭くなったわね」

呆れたような視線の美神美智江に西条は少し気分を害したようだ。

「西条君。少なくとも、横島君が学園でやっているようなパトロー

ルや除霊活動なら低予算で、それでいて霊的防衛線になるはずよ？」

確かに視野が狭くなっていたことを自覚した西条だった。

「そうですね、先生。確かに視野が狭くなってました。」

苦笑いとともに、西条は細々とした心霊現象対応や相談に関する書類をまとめ始める。

一件一件を別業者で行えば安すぎる物件も、一括発注すればある程度の金額になるし、難易度も高いわけではない。

仕事仕事の合間に西条だけで纏めて見てみても、細々した対応が必要な物件というものが、かなりの量で集まった。

試しにGS協会の方でも纏めてもらっていたのだが、規模が小規模すぎて放置されている物件も含めてかなりの数であった。

もちろん、協会で吹き溜まっているような物件なのだから、依頼料と内容があわないものなのだろうが、それはオカルトGメンを通せば問題が無くなる。

逆に、装備の損耗が少ない状態で件数をこなして実績に出来るといふ点では上々な話だし訓練にもなる。

これは、日本国内におけるオカルトGメンの権威を固定を目指すための試金石となるだろう。

かつて、横島は銀一に「GSにもホンカンさんが要る」と語ったという事を思い出す西条。

彼らの方言の話だが、意味合的には常時霊的な治安を意識できる警備員のような存在が必要だと語っていたのだらうと西条は理解

している。

的外れではないし、芯をとらえた見解であった。

さらにそれは、西条の自意識を刺激するものであった。

自らの出自を語るつもりはないが、逆に出自から来る責任感には常に背負ってきたつもりであった。

「Noblesse obligation」、いや、自分の出自で考えれば「noble obligation」。

本来は言い訳の意味で使われていた貴族たちの社会的な責任を表す言葉。

しかし、いま、霊能という特異技能を持つものがあふれる世界では、この言葉を表の意味で活用すべき時、そう感じている。

むろん、責任や義務感で生活が出来るわけがないことも理解していた。

だから、資金面や責任面でのバックアップをオカルトGメンが行い、形上使役することで彼らの負担を減らしつつ既存オカルトGメンの戦力拡充に手を打てるものと確信する。

「美神先生、これは一大転機、なのですね」

そんな言葉に、うれしそうに微笑む美神。

エヴァの別荘で勉強会をしていた横島は、休憩時間に手元の手紙を見ていた。

「なんなん、それ？」

ある意味自然に横島の隣に座ったコノカが手紙をのぞき込むと、ぱあっと明るい表情になる。

「おとうさまからや〜」

「そうそう、詠春さんからやで〜」

笑いつつ読み進めた二人は、同時にガッツポーズ。

「やったー！ これで宿代チャラヤー！！」

「うれしー！ 横島さん、いろいろ案内させてヤー!?」

「おお！ 家も小川も花見も紅葉がりも、みんなでいこなあー!!」

コノカを抱き上げてくるくる回る横島。

抱き上げられたコノカもうれしそうに両手を広げていた。

何事かと集まる横島従者団とネギパーティー。

「あんなつ、今度の秋旅行、宿をうちの家にしてもええって、おとうさまの許可が取れたんや！」

へえー、とちよつと気持ちの下がるネギパーティー。

何しる秋旅行は横島事務所の旅行だ。

関係ないと考えると少しつまらない。

「これで、みんなを招待できるっちゅうわけや」

「「「「え?」「」「」「」

さすがに学校もあるので一週間全部は誘えないけど、秋の連休にネギのクラス全員を招待しようと言った横島が言う。

「あ、あ、あ、あの、いいんですか!？」

驚きに目を丸くするネギへ、横島は微笑む。

「ネギ、おまえもずいぶんがんばってるんだ。少しぐらいご褒美があつた方がいい。」

あまりの喜びに、横島の首根っこに飛びつくネギ。

「横島さん、横島さん!！」

それを見ていてクフウ!と鼻血を流すアヤカ。

「まあ、秋連休中はクラス全員。後の行程はうち事務所の修行旅行って形になるから、ネギ達は先に帰ってもらうけど、勘弁な」

小さく、うれしそうに「はい」と答えるネギ。

「・・・あ、せや! ネギ君、あの別荘も使えへん?」

「「それだ!」「」」

わいわいと騒ぐ3A衆を余所に、横島とネギはちょっと離れて座る。

「・・・横島さん、ちょっとだけ聞いて良いですか?」

「ん、なんだ?」

「……横島さんは何でそこまで強いんですか？」

エヴァはその場にいなかったことを後悔した。

別荘内なのでなにが会話されているかを感知していたが、まさかその話がでてくるとは思っていなかったので、対応が遅れた。

瞬動で一気に距離を積み、拳を振りあげたエヴァを横島は止めた。

「ええんや、エヴァちゃん。いつか話さにやらなんことやから」

まず、横島が語ったのは、一般的に流布されている事とは違うアシュタロス侵攻の真実だった。

永遠に魔族としての縛られる魔王。

過去、古の女神としてあがめられていた存在と同一の神族であったというのに。

どんな存在であっても、どういう形であったとしても消滅も許されない「魂の牢獄」。

狂うことも出来ない永遠を過ごす中で、足掻きのたうち回る魔王。踏みにじりたくない愛おしい魂達を踏みにじり、黒き感情をぶつけられ続ける中で彼は確信する。

消滅も許されるほどの罪を犯せばいい、と。

それがアシュタロスにとっての人界侵攻、三界征服の真実であった。

征服できれば自分にとって最高の世界を作ることが出来る。

出来なくとも神魔から消滅を受け入れることが出来る。

勝つても負けても「勝利」であった。

「……なんでそんなに詳しいんですか？」

人の身で、なぜ魔王の慟哭に詳しいのか。
ネギは一步踏み込んだ。

「奴と戦つてるときにな、『模』の文珠でアシユタロスを模倣したんだ。」

「「な!」」

驚きに声を殺したのはエヴァと高音。
その無謀さを感じたのだらう。

「まあ、無謀だったし失敗だったけど、あいつの考えてることは色々とわかってな。せやから、あいつの絶望もわかったんや」

真つ白に顔色をなくしているネギをなでる。

「あいつはな、純粹で、複雑で、真つ黒で、真つ白やった。せやから、あいつの娘はみんな光を目指すんやろつなあ。」

気づけば涙を流す横島。
それを自然に抱きしめたのはエヴァ。

「坊主、これ以上聞く権利は貴様にはない。忠夫が如何に喋ると言っても私が、私たちが許さん!」

ネギは後悔した。

なんて、自分は思慮が足りないのか、と。
以前も、横島の過去にふれようとして、そして後悔したはずだった。

全く活かされていなかった。

「まてつて、エヴァちゃん。ネギは知る必要があるんや」

ほんぽんと自分を抱きしめるエヴァの背中をたたくと、ゆっくりと離れた。

「ネギ、強さを求めるのは悪いことやない。どんなにすばらしい技を持っていても、蟻には像は倒せん。」

離れたエヴァをきゅっと抱きしめる横島。

「せやけどな、個々の蟻は勝てんけど、「蟻達」なら勝てるんや。」

近くにいた千鶴の手をつなぐ。

「手を繋ぐんや、ネギ。抱きしめるんや、ネギ。守りたくつて、守れないなんつうバカはワイ一人でいいんや。一緒に守り守られ、前に、前に、一緒に進み続けるんや。それがワイの強さや」

ゆっくりと繋いだ手を、抱きしめた腕を放してネギを抱きしめた。

「ゆっくりで良いんや。強大な敵も理不尽な話も食い破ればいいんや。ワイらた手を繋げば、どんな運命かてはじけ飛ばせる。ワイはそれが解らなかつたけど、ネギはまだ大丈夫や。失つたらん。」

ネギもまた横島を抱きしめた。

それは初めての、本当に初めての兄と呼べる存在、タカミチ以上に身近な同性。

涙ながらにネギは、今を喜ばしく思っていた。

とりあえず、アヤカはその光景に涙を流しつつ加わることにした。

「ネギ先生。あなたには私たちがいるじゃないですか。」

横島とサンドイツチするようにネギを抱きしめるアヤカ。

ふと、優しい瞳の横島に目を奪われる。

「・・・いいんちよ、なに忠夫さんを見つめてるの？」

「アヤカ、あなた、もしかして・・・。」

怒りに顔を赤くするアスナと、ヤバイ雰囲気を漂わせる千鶴。

「あ、いえ、その、わたくしにはネギ先生という、心に決めた方が・・・。」

じゃあ、と顔を寄せる二人。

「ときめいてないのね？ いいんちよ？」

「ときめいていないのね？ アヤカ？」

小刻みに頷くアヤカを引きはがしつつ、アスナと千鶴は横島の隣を陣取った。

「あ、ずるい、うちとせっちゃんも」

「あ、あの、わたくしも、おじゃましても・・・」

ふらふらと現れるのはコノカ刹那の幼なじみペア。

ユエもユウナもアキラも続く。

指をくわえつつも我慢しようかどうかと悩んでいるタマモ。

愛子は結構余裕で苦笑い。

「さあ、休憩はおしまいや。そろそろ再開やで。」

「・・・・・・はい」

二学期の中間テストの結果如何では秋旅行は中止になってしまった、と横島が語るとかなりの気合いが入る横島従者とネギパーテイーであった。

横島事務所からの秋京都旅行招待の話はすぐに伝わっていた。

雪広アヤカの扇動で一気に広められつつ、3A全員に広がった。

横島事務所以外の人間でも参加できると聞いて大いに盛り上がる彼女たちであったが、成績不良なら参加できないと聞き鼻息を荒くする。

「でもさ、何で京都なの？」

春日の意見にエヴァが不機嫌そうに答える。

「はじめは私が横島に、修学旅行で堪能し切れなかった「京都」に連れていってもらえるという話から始まったのだ。参加者が増えたからといって行き先など変えられてたまるか。」

「なるほどです」

鳴滝姉妹の感心の横で楓が頷いていた。

休み前まで横島事務所寄りの生活であったため「さんぽ部」を軽視していたようだが、最近は同じぐらいの比重で参加していた。

そう、夏休み前まで横島事務所を第二の部屋のように使っていた従者達であったが、その結果が横島を苦しめていることに気づいた。そう、彼女たちはGS助手、事務所に詰めているときは遊んでいても時給が発生するのだ。

はじめは気づかなかったが、夏休み中の給料をもらって初めて気づいたのだ。

経理関係にも噛んでいた千鶴がその事に気づき臍を噛む。

神魔降臨の影響で仕事は減ったのに出費が増える。

事務所の運転資金には問題ないが、遊び気分で詰めているだけなら、さすがに気の毒だと言うと、従者達は理解を示した。

では、ということ、ローテーションをくみ詰め人員を決めると、魔鈴の店と事務所と部活の三交代が一番効率的だという話になった。

加えて、定期的な事務所休みを入れることまで従業員によって決定された横島はかなり当惑していたが、彼女たちに隠された意図を雪乃丞から知った途端うれしくて泣いた。

嬉しすぎて各自の手当を上げてしまったものだから、出費があまり減っていないという事実気づき、愛子と千鶴は少し肩を落としたのであった。

わりと成績優秀組からふつつ組までの範囲にはいったアスナを別にすると、未だ成績下位に存在するバカレンジャーは結構必死であった。

とりあえず成績改善により脱退したアスナ以外で言うところ・・・

ブラック 興味が持続せず、成績が乱高下。

イエロー 成績低迷中

ブルー 一応改善しつつある

ピンク ダメダメ

ホワイト 徐々に改善中

新規参入「ホワイト」こと刹那は、コノカと千鶴の手により成績低迷時代を終えようとしていた。

逆にピンクこと佐々木マキエは今一見えない未来に不安だけを感じており、その不安で勉強という行為に身が入らなかった。

ゆえに成績が低迷し、勉強が解らなくなりという負のスパイラルに陥っていた。

元レッドことアスナの脱退も少なからず影響している。

いつまでも「バカ」友達でいてくれると信じていたアスナが、急遽性格が落ち着き、成績も急上昇してしまったのだ。

キツカケもあっただろうし努力もしただろう。

しかしマキエにとって、それは大きな欠損に感じられた。

失われた、そんな思いが加速していたのだ。

だから彼女は走った。

その原因と思われる、そんな存在を確かめるために。

「アスナのバカが直ったのは、横島さんと経験したせいって本当ですか!？」

「「「ぶうつ!!」「」」

時間は正に昼休み。

場所は横島が通う高校の教室。

思わずダツシュで窓から逃げる横島を、何の保証もないのに窓から飛び降りて追う男子生徒。

「「「「「ころせー!」」」」」

「・・・あれ?」

勘違い魔性の女、佐々木マキエ。

今、伝説の幕開けであった。

第二十八話（後書き）

うちのよこっちと西条は、実は結構仲がいいです。

・・・また男臭い話になっている気がしますね・・・TTT

第二十九話（前書き）

第二十九話です。

第二十九話

実は結構好評な愛子先生の愛子空間自習。

試験前の部活停止期間になると、女子寮にご招待まである。

愛子自身「青春よねー」と感動しているし、そのへんはいいんだけど、と横島と雪乃丞。

「なんで、事務所にクラス（うち）の男子が集まるよ、おい。」

なぜか高校のクラスの奴らが集まるうちの事務所。

美少女がだれ一人おらん、とグチを垂れる男どもであったが、試験前など関係なしで現れるエヴァ、茶々丸、千鶴などが顔を出すと歓声を上げる。

とりあえずお茶でも、と動こうとする千鶴に「こいつら客やないから」と押しとどめる。

「そんなあ、美少女のおちゃ〜」

「やかましいわい！」

思わず抱きしめて、誰にもわたさん、という体制になると「あらあら」と言いながら嬉しそうな千鶴。

「おめー、何人美少女抱えてやがるんだ！」

「ちよつとぐらい分ける！！」

怒声をあげる男子に指を突き立てる横島。

「やかましいわい！　うちのお姫様たちは、親御さんから預かった

大切な宝もんや！！　この子たちが心から選んだ道が見つかるまで、大切に大切にせなならんのだや！！　それがバイトとはいえ雇ったわいの心意気や！！」

あまりに男前な意見に感動する男子たち。

がつついて紹介しろとかいつていた自分たちを恥じていた。

「とはいえ、わたしは忠夫と共に生きるから、道など決まっているのだがな」

「私もマスターと忠夫さんとともに」

「あらあら、私も同じなのに、二番煎じみたいでいやだわ」

とはいえ、事実上のモテっぷりに全男子が嫉妬した。

「おいおい、そろそろ勉強にもどらねーと、ここにきてる意味がなくなるんじゃないのか？」

「だってよお！！」「ひでーだろ、じっさい！！」「おめー、くやしくなえのかよお！！」

いい募る男子達だったが、深いため息の雪乃丞。

「おめえら、そういうガツガツした態度が駄目なんだと思うぞ？」

「ぐ、う……」

あまりの上から目線に声をなくす男子達。

「……言っておくがな、伊達は彼女持ちだぞ？」

エヴァの言葉に男子達は目を剥く。

そういえば、お嬢様然とした女子と学園祭でデートしていたとい

う噂が……。

「ん、かおりのことか？」

何でもないことのように出てきた言葉に、血の涙が流れる男子。
たとえ何処の女だろうと、彼女がいるという時点で雪乃丞は敵に
思える男子達であった。

「……伊達え……、やっぱりGSってもてるのかあ？」

「どうだろうなあ？」

首を傾げる雪乃丞。

「もてる奴はやっぱもてるけど、GSだからって訳じゃねーだろ？
顔がいいとか頭がいいとかでき合い始めても長続きしねーだろ
うしな。」

おお、と声が挙がる。

「横島、おめーはどうおもう？」

「もてない街道まっしぐらの三枚目に聞く言葉じゃねーだろ？」

「……………はあ？」「……………」

「ちょ、ちょっとまってよ、横島、おまえ今なんて言った？」

「そ、そうだぞ、お前、何言ってるんだ？」

現実を認識させようと色々という男子達であったが、横島は全く
理解しなかった。

「やべえ、やべえよ。どんなエロゲ主人公かと思ってたけど、これだけ理解できてねえ奴なんて始めてみたぜ。」

「いやいや、これだけ朴念仁だからモデルのかもしれないぜ。」

「・・・おれ、普通でいいわ。」

「そうだな、おれも・・・。」

なんだかゾロゾロと勉強に戻る男子達。

「どういうこつちゃ？」

「気にするな。横島」

苦笑いの雪乃丞であったが、疑問のつきない横島であった。

「忠夫さん、ここを教えてくださいませんか？」

「ん、ええで。」

「所長、お茶が入りました」

「ありがとな、茶々丸ちゃん」

やっぱりモテはうらやましい男子達であった。

寮の自室で試験勉強をしていた高音は、手元の聖書をみてため息をついた。

たしかに一神教の系列の学校に通っている。

通ってはいるだけに、今の気持ちで神学を勉強できる気がしなかった。

なにしろ、あの「きーやん」がトップなのだから。

多くの逸話があり、多くの伝説がある。

その裏舞台や細かな裏話を聞くと、どうしても身を入れて勉強しづらいのだ。

いや、物語や伝記のようなものだと思って暗記すればいいのは解っている。

だがしかし、あの話の内容が生々しすぎて記憶から拭いがたかった。

「あーん、それもこれもみんな横島さんのせいですわぁ・・・。」

べったりと机に突っ伏す高音であったが、端から見ていると恋に悩み集中できない乙女のようにうであったとかなかったとか。

むろん、ウルスラで横島の知名度は高い。

ゆえに、轟々と噂が立ち上がる。

「ウルスラの女王、GS横島にお熱」と。

本人はひどく動揺したが、ウルスラ校内は大いに燃えたのだった。

愛衣は実の所、一般生徒との交流が少なかった。

自分が魔法生徒であるという立場もあるが、いつ何時魔法がばれしてしまうかという切迫感があったので、できるだけ交流を少なくしていたのだ。

が、この前、反射的に魔法を使ってしまったときのことだった。

階段から転落しそうだったクラスメイトを風で助けると、周囲から賞賛の声が集まった。

「さすがGS見習い。」「いやはや、GS見習いってだけですごいね」「たすかったわ、ありがとうー!」「」

どうやら魔法じゃなくて「霊能」と思われたらしい。

それからと言うものの、霊の相談や紹介を求められることが多いなあってしまい、横島にお願いして勉強させてもらったぐらいだった。そんなこんなで、試験前の勉強で「勉強会」が開かれるなんて初めての経験で、少しだけ感動していた。

とりあえずGSっぽいので、鎮静用の符を部屋のインテリアに隠して張っておいたのだけど、そうそうに家捜しをされてしまい見つけられてしまった。

「さすが、GS」

もはやこれが合い言葉になりつつあるな、と苦笑いの愛衣であった。

アヤカは目の前で黙々と自習するアスナをみていた。

変われば変わるもので、実に効率的に集中している姿が新鮮だった。

横島事務所の事務員である机妖怪の愛子の力を借り、3A有志の勉強会をしているが、最近のアスナは教える側になってきている。

はじめはみんな違和感を感じていたけど、最近は素直に教えを受けていた。

「アスナさんは、六女を受けますの？」

「・・・ん？」

集中状態から戻ってきたアスナが、ぱちくりとアヤカをみる。

「ん、ああ。いかないわよ？」

受ける受けないではなく「いかない」。

「ですけど、GSのお勉強には・・・」

「まあ、私が霊能に目覚めたばかりって言うなら行く意味があるけど、ね。」

苦笑いのアスナの説明で、アヤカは自分の把握が間違っていたことに気づいた。

六女に行く生徒はいくつかに分類されるが、おおよそ三つのパターンに分かれるという。

一つ、一般人以上GS以下の霊能の子女。

一つ、六女や六道のネームバリューが必要な子女。

一つ、六女や六道のバックアップを求めている子女。

「二つ目と三つ目は一緒ではなくて?」

「あー、やっぱりそう思う?」

あははは、と笑うアスナも横島から聞いたときに同じように思ったそうだ。

が、説明を受けると全く違うことが解る。

つまり、

「六道の閥を利用するか、使役されるか、そういう差になるって言われたの。」

アヤカは、実家の閥の頂点に座ることになる女であった。

ゆえに、自分の不明を恥じたが、横島の見解に関心もした。

貸しも借りも作らず、というのは難しいので、よい距離において

おきたい関係、それが横島にとっての六道らしい。

「でも、六女にいけば、横のつながりもあるんじゃないですか？」「まあね。でも、横島さんの事務所を離れてまで行く意味はないかな。だって、あそこはGS免許を取るための学校だもの」

アスナの説明では、六道のカリキュラムは対人戦闘に特化し過ぎて、現場の除霊向きではない場合が多いという。

言うなれば、霊能を対人に鍛えて見栄えをよくしたお嬢様学校、という怪しげなものになるらしい。

「それは・・・、すこしイメージと違いますわね。」「うん、私もそう思った。」

あれやこれやと話しているうちに、今度のGS試験に、事務所から何人か出場することが話題になる。

「じゃあ、それに受ければ、はれてGSですか？」

「まさかあ。そのあとじっくり修行して、師匠の許可を得て初めて一人前になれるのよ。」

「あら、長い道のりですわね」

「そんな長い道のりを、わずか18歳で乗り越えた人もいるんだけどね」

ひゅんひゅんとシャーペンを回すアスナは、実に嬉しそうであった。

「横島さん、誠実な方ですわね？」

「え、あ、うん、その、うん、いいひとよ」

真っ赤になったアスナ。

あれほど高畑に熱を上げていたとは思えない姿だったが、今のアスナの方が年相応の恋する姿に思えるアヤカであった。

アスナとアヤカの会話を小耳で聞いていたノドカは、正面に座る親友をのぞき込んだ。

はじめはネギのことを一緒に好きになる仲間だと思っていたけど、いつの間にか横島に恋慕していた。

それ自体をどうこう言うつもりはないけど、少しだけ寂しく思ったことも事実だ。

正直にそのことをユエに伝えると、苦笑いの親友。

こんな表情も横島に似てきたと思うノドカ。

「そうですね、確かにそういう可能性もあつたとおもつです。」

初めて知る神秘がネギの魔法であつたなら、そしてその魔法から伝わる決意や運命がネギのものであつたなら、もしかするとそういう関係になつていたかもしれない、とも思うと語るユエ。

「でも、です。」

この心は既に一つに縛られている、と。

もちろん、相手を縛るわけではない。

しかし、この想いも、この心も、この定めも、この運命も、あの人とともにありたいと叫んでいる。

そんな風に語るユエは、もう「恋」をしているのではないのだと理解したノドカ。

身を引き裂かれんばかりの、魂が碎かれんばかりの「愛」をその身に秘めているのだと、そう理解できた。

「ユエ、わたしも早くそこまできになりたいな」

「ゆっくりでいいのですよ、ノドカ。ネギ先生にはその時間があるのですから」

「横島さんにはないの？」

「横島さんは、法律的にいつでも結婚できるのです。そして、収入的には同年代の誰よりも上位なのです。さすがに安心していられないです」

あー、と思わず声を上げるノドカは、すでに親友が何歩も先に行っていることを確信した。

そして親友にメールを送る。

「がんばって、ユエ。横島さんは既に「ロリ」だっていうし！」

「がんばるです！」

どこかでその発言を感じた横島が叫んだとか叫ばなかったとか。

自室で勉強中のアキラはユウナとマキエの面倒をみていた。

ユウナはかなり順調であったが、マキエはどうも集中し切れていない様子であった。

詳しく聞いてみると、何となくクラスの中で壁を感じるという。

もちろん、将来や神学を意識しているかしていないかの差なのだが、ユウナもアキラも壁をある程度作っている側なので、ドキリと

させられる。

「なんかさー、横島さんの事務所の人たちは解るんだけど、うん、あれでしょ、オカルトの守秘義務、だっけ？」

「そうね、仕事の色々とかは守秘義務つてのがあるしねえ。」

「結構大変よ。でも、しゃべっても信じてもらえないようなことも多いけど」

アキラもユウナも同時に、先日話を聞いた四柱を思い浮かべる。
有名にして強大なあの存在を。

「そっか……。」

ふう、と深いため息のマキエであったが、もう一枚の壁が気になるらしい。

「なんだかさ、ネギ君を中心にもう一枚壁があるよねえ。」

「（バカピンク、するどい！）」

さすが恋する乙女、鋭い勘が唸っていた。

「……ねえ、何か知ってるう？」

「……。」

どう答えたものか、と逡巡するアキラだったが、ユウナは苦笑いで答えた。

「たぶん、知ってる。」

「……それって教えてもらえること、じゃないのかな？」

「……ねえ、マキエ。今クラス楽しい？」

「・・・うん」

「そういう楽しさから、その壁はマキエをのけ者にしてる？」

「してないと思う。」

「だったらさ、その壁ってさ、マキエを守ってくれている壁なんじゃないかな？」

まるで目が覚めたかのような視線のマキエ。

「それって、守秘義務にひっかかる？」

「実は、すんごく引っかけたって怒られるレベル」

くるりと視線を向けられたアキラも強ばった顔で頷く。

「そっか・・・、守られちゃってるのかあ・・・なあ？」

ごろりと寝ころぶがって背を伸ばすマキエ。

ふにふにとシャーペンをいじっていたマキエであったが、ムックリ起きあがる。

「よっし、今度の秋旅行で横島さんに色々きいちゃお！」

「ん？ ネギ君じゃないの？」

「だって、ネギ君のガード、怖いんだもん」

「あはははは」

このとき、雪広アヤカのくしゃみが愛子空間で響いた。

横島事務所では主力になったものの、通常業務では活躍の場がない千雨は、およそ事務所での事務が多い。

とはいえ、試験休み中は勉強優先を言い渡されているので、寮の部屋で試験勉強なんかしていたのだが、ふらふらと勉強を一緒にと言う人間が結構いる。

いわゆる、横島事務所やネギ従者関係者以外、となるのだろう。

基本、千雨も横島事務所のメンバーなのだが、表向きは事務所での事務員なので霊能者というイメージではない。

さらには、事務所つとめを始めてから「私に関わるなオーラ」が形を潜め、接しやすくなったのも原因だろう。

そんなわけで、本日は鳴滝姉妹と桜子、そして円が集まっていた。それなりに進む勉強だが、やはり話題は横島の話になる。

どんな感じとか、普段の言動とか、今度の京都旅行のこととか、色々である。

「エヴァは長いこと学校敷地以外に出かけられない霊症だったんだけど、横島さんが治したんだ。だから無茶苦茶懐いてんだよ」

「「「おお〜」「」」

エヴァの話はその方向でまとめることになっていた。

「じゃあ、秋京都って・・・。」

「横島さんからの今まで外に出かけられなかったエヴァへのプレゼント、プラス、みんなと仲良くしましよってな男気だよ。」

「「「おおおお〜」「」」

「ヨコシマン、格好いいですう〜！」

「すごいです〜、ヨコシマンー!!」

こんな感じで事務所のスポークスマンをしている千雨であった。

「じゃあさ、あたしら、呼んでもらってよかったのかなあ？」

「そ、そうだよ、うん。エヴァちゃんとそんなに仲良くさせてもらってないし……。」

「ま、気にするなつて。横島さんの合い言葉を知ってるか？」

「……？」

「美女美少女の味方」

「……ぶっ！！」「」「」

思わず爆笑の四人に、千雨も笑う。

あの人はその場にいなくても周囲の気持ちを和らげてくれる。いいよなー、従者でよかった。

心底思う千雨であった。

試験結果発表に沸く校内。

というか学園全体で盛り上がっていた。

返却されたテストでも発表でも大きく問題はなく、格段の進歩があったわけではない成績に、どうにかこうにか安堵の息を吐く横島隣で雪乃丞も苦笑いでテスト結果を眺めていた。

「どうだったのよ？」

タマモの問いに、ふたりでセーフのゼスチャー！

タマモと愛子もセーフと返す。

四人でハイタッチしていると、クラスメイトたちが取り囲んだ。

「よお、おめーらはどうだったんだ？」

「セーフ！！」

「おお、と歓声を上げて全員でハイタッチ。実に青春だと愛子感動。」

「そんな中、横島の携帯がなった。ディスプレイをみれば「アヤカ」。

「よお、あやかちゃん。そっちはどうや？」

「全員参加ですわ。」

「そりゃよかった！」

事務所メンバーにそのことを伝えると、再びハイタッチ。

「愛子さんにもよろしくお伝えください」

愛子先生がかなり活躍したためだろう。

3Aでは愛子先生の愛称で呼ばれていたりする。

「もちろん、うちのクラスでも愛子先生と呼ばれているのだが、こっちはどうも担任扱いだったりするのがすてき。」

日向の担任である魔法先生は草場の陰で泣いていることだろう。

「ねーねー、愛子先生受験しないの〜？」

「一緒に東大目指そうよ〜」

「などという話がまことしやかに囁かれているのだが、さすがに妖怪を入学させるだろうか、と横島も首をひねる。」

「ここで問い合わせていけば、その運命という奴も少しは違っていたかもしれないが、実際のところは学校で青春したかった愛子なので、青春の実像とは少し離れた存在である大学には今一興味が無いらしい。」

「ともあれ、秋旅行にはみんな出席ね」
「おお、せやな。」

ぱん、と手を合わせる横島と愛子。

いいなーと視線は集まるが、その実が元病弱っ娘エヴァの慰安であるということを知っているクラスメイトたちは、横島を男前だとは思っていても嫉妬に刈られることはなかった。

「じゃ、美神たちにも言つとくわね」

「おお、タマモ、任せた」

・・・？

思わず疑問の声が形になる。

美神といえは、あの「美神」違いないが、なんで秋旅行で名前がでる？

「なんで？」

誰かが聞いたとたん、横島は再び窓から身を踊らせた。

「・・・そういうことか。」

確信を得た男たちは後を追う。
窓から身を踊らせて。

「」「」「追えー！ー！！ リア充もげろー！ー！！」「」「」「」

ダッシュで校庭を走る横島を見つつ、地面に向かって前回り受け身をとる高校三年のある日の男たちであった。

このクラスも日に日にダメになっている。

第二十九話（後書き）

かなりグダグダな内容でした。

キャラクタースポットを意識するところになってしまつのが悲しい限りです。

第三十話（前書き）

第三十話です。

秋旅行開始、です。

・・・展開遅いのはキャラが多い所為、だと信じたいたいTT

第三十話

秋旅行。

当初の目的は、修学旅行期間という、数日のそれも短い自由時間程度で私の京都愛が満足できるか、私は一月ほど京都に住む、いや京都に居を構えることもやむなし！！ というエヴァの入れ込みっぷりをみて、気の毒に思った横島がまた来ようと誘ったことに端を発する。

その当初計画での参加者は事務所人員だけであったのだが、いつの間にか魔法先生の刀子やシャークターが加わり、さらには3A全体、そして横島と親交のあるGSが参加することになった。

参加GS関係者は、美神事務所、六道冥子、美神美智恵、ひのめ、そして弓、一文字であった。

美神事務所関係で氷室、雪乃丞関係で弓の参加があつて一文字が呼ばれないのでは可哀想だということで、横島が誘ったところ、体育会系の縦社会的な了承で参加したりしている。

3A全体を呼んだのも同じような理由だった事を考えると、横島自身が友人関係を極めて重視している事とらえられる。

ただ、ここでピートやタイガーを呼ばないあたり、男の友情というか遠慮の形というか、プライドを認めあつた関係ともいえるだろう。

招待するのは楽し、口八で呼ぶのも難しくない。

しかし、そういう関係が続けば、いずれ友情という形がゆがむだろう。

だから、その一歩を進まない。

そういう風にも考えている。

ちょっと離れたからこそ、べたべたしない人間関係でいられると横島は感じていた。

集合は二カ所。

はじめは大宮駅で麻帆良勢。

修学旅行と違い、はじめから私服なので3A女子も横島事務所女子も彩り鮮やかだったりする。

逆に横島と雪乃丞、そしてネギは実に地味なスーツ姿であったが、少女たちの華やかさを際立たせるといふ意味では実に上々であった。

「横島君、全員集合よ」

「・・・本当に、ココネも呼んでよかったのかしら？」

「何度も言っただじゃないですか。大歓迎ですって。なー、ココネ「タダオ」」

ゴスロリ子供服（エヴァ制作）を着たココネが横島めがけて飛び上がると、実になれた感じに抱き上げてみせる。

ココネはそれが嬉しくて、きゅっと横島を抱きしめた。

「ココネも楽しもうな。」「うん。」

お互いに笑顔で微笑み合う姿は、全く顔かたちが似ていないのに「兄妹」のようで、関係のない旅客も微笑ましそうに見ていた。

ココネは私服もシスター服だったのだが、それをみたエヴァが「もったいない」とため息をつき、丸々一日別荘に籠もって数着の服を仕上げた。

黒と白を基調とした数着のゴスロリドレスは、喜びを押し隠せないココネの姿をエヴァに見せた。

はやりお姫様願望があるのだろうと、エヴァは思ったが、ココネ自身の本心は分からない。

ただ、私服が嬉しかったのかもしれないが、実に嬉しそうにゴスロリを着ているので、誰も文句は言えなかった。

聖職者であるところのシャークティーにとって、教え子が真祖のプレゼントで喜ぶ姿というのがどうも素直に嬉しくなかったが、その真祖を直接見ると、その気持ちもうやむやになる。

あれほど嫌っていた真祖の正体が、目の前の少女だと思つと、自分が如何に風評で人を見ていたかを思い知らされる。

無論、彼女自身が直接聞いた話を考えれば、確かに人を殺している。それも大量に。

が、その殆どが返り討ちであり自衛であり、逃亡のためであった。

逃げずに投降してみれば、拷問の末の毆殺をされそうになって再び逃亡。

もう、誰も信じる事が出来ない状態だったと苦笑いの少女。

それが、真祖に祭り上げられた少女エヴァンジェリンの語る真実だった。

不幸自慢が好きなのではない、と笑いつつ隣に座っていた横島にぶら下がった彼女はそのとき泣いていたとシャークティーは思う。そんな少女のために、横島は旅行を企画した。

「でもほんとうによかったの？ 私たちもそうだけど、一クラス分のご招待って、かなりよ？」

横島にすり寄るココネを撫でながら、刀子が言うと、横島は寂しそうに微笑む。

「自分が、自分たちがネギにしてやれる事って、そろそろ無いと思うんですよ……。」

「……。」

「あいつは既に、学園長たちが望む形ではないっすけど「それ」になりました。「それ」についてはネギも自覚があると思うっすけど、そんな自覚だけで切り抜けられるほどこの先は甘くないっす。」

言外、この先こそ本当の戦いだと言語る横島。

「そうね、確かにそうだね。」

「……ほんとうに、ね。」

シャークティーも刀子も、魔法世界の今後は聞いているし、麻帆良の母胎であったMMについても聞き及んでいる。

絶対に樂觀できない状態だし、今後を考えれば、今という時間は「凧」の様なものだった。

だから、と横島は語る。

だから今だけは、ネギ先生と巻き込まれた生徒たちに普通の中学生で居させあげたい、と。

だが、魔法の秘匿やオカルトに関わったという時点で絶対に普通の人生は送れない。

それも関わった相手がネギだと言うのだから、可能性は最低だろう。

だから、自分の紹介できる人材と顔合わせをしたり、イメージが残る機会を作って身を守ってほしいと願っていた。

「それに、今回の旅行で、ネギの生徒全員に魔法をぶつちやけます」
「……!!」

「……横島君！」

「これは学園長に了解を得てるっす。」

「!!」

驚く二人の女性であったが、横島は性根を決めていた。

「今の段階でオカルトにも魔法にも関わっていない生徒の方が希少っす。こんな状態じゃあ、関わってない生徒の方に悪い影響がでるっす。そんなの許せないっすから。」

なにしろ美女美少女の味方、横島忠夫。

何人もクラス内の壁を感じて困惑している美少女が居ると聞けば手を打たないわけにはいかない。

ましてや、今では弟子の一人と言っても過言ではないネギのクラスだ。

世話の一つでもしたいというのも仕方ないだろう。

いかに、未来の敵であつたとしてもモテモテW

魔法の秘匿は絶対だが、オカルトに秘匿なんて考えはない。

だから、秘匿された魔法の情報をオカルト側から偏向して教えることで、クラス内での壁を払拭する。

さらには、従者などの立場の危険性や魔法使いの、オカルトの立場の危険性を確認することで、自分が積極的に関わるべきものなのかどうかを判断してもらおう、というのが、横島が考えるもう一つの旅の目的であつた。

「そ、そうなの・・・、なんだか申し訳ないわ・・・。」

シャークティーは実に申し訳なさそうな顔であった。

何しろ、その壁というのは魔法世界の掟によるものだし、自分たちはその払拭も考えず認識障害に頼りきっていたから。

こと普通の人間の心の問題に対しては、魔法使いたちにとって軽い問題で、軽視され続けていた。

しかし、横島事務所ができてから行われているオカルト側からのケアは、実に細かく、念入りに行われていた。

魔法世界が起こした矛盾や違和感を、実に見事に「オカルト」にすり替え、巧妙に解決して見せて安心を与える方法は見事であった。しかし、「魔法使い」達には実行不可能な手法な為、受動的な対応に頼らざる得ないともいえる。

つまり、今後も起きるであろう矛盾を背負わせ続けることになるわけだ。

シャークティー自身も神父とともに宗教的なケアは行っているが、信仰心の薄い日本では上手く活用されているとはいいがたい。

そんな意味では、さらなる負担を横島に背負わせること自体に負い目を感じているし、ネギの成長を一番に支えているという面でも感謝こそすれ、含むところは一切ない。

これだけの心の負債を抱えると、学園長の言うように体制に組み込んでしまえばチャラとかいう考えを飲み込めるはずもなく、ただただ申し訳ないばかりなので、できるだけ行動をとみにしてフオロ―出来るところをしようと考えているシャークティーであった。

「そんなことして、あなたは大丈夫なの？」

実は刀子、横島を個人的にかなり心配していた。

横島が麻帆良に着た当初から「GSって高収入なのよねえ・・・」
という実に「乙女」な理由で気にしていたのだが、時間とともに
その気持ちも変わっていった。

偶然と必然の中で交わされたコノカとの従者契約。

さらに次々と増える従者、そして早々に開花する魔法能力。

ほぼ万能ともいえるのではないかという霊能との融合とその指揮
能力。

すでに学園防衛の要とも言えるほどになっていた。

加えて、横島事務所と大きく関わっている妹弟子、刹那の成長は
著しく、今まで見られていた未熟さは形を潜め、大胆さと精密さが
同居するような太刀筋になっていた。

これほどの成長をどこで、と言うまでもないことだろう。

あそこで、あの魔法世界で成長したのだ。

濃厚で濃密で絶望的な戦いを繰り返し、そして「そこ」に至った。

刀子自身は学園防衛のため渡航していないが、ガンドルフィーニ
達の話で聞けば魔法世界での戦いは常に最前線にあったという。

対妖怪などというレベルでは済まない攻防と「戦争」レベルの魔
法。

鼻を膨らませて語るガンドルフィーニには辟易とさせられたし、
自分は活躍したと語るセルヒコの話はスルーしたのだが、全体的な
話となるとやはり横島従者とネギ従者の話になる。

そしてそれに随行した刹那の活躍も興味深かった。

初めは従者達に劣るかのような話であったが、自らの未熟を理解
し、そして自らの技を理解してからは他の従者に負けぬ戦働きであ
ったという。

その働きの一端は、学園防衛でも現れており、あれほど嫌ってい
た白き羽を、美しいまでに使って空を舞っていた。

翼ありで稽古をした際、さすがに負けはしなかったが、危ないと
思わされることがしばしばあったりもしたのであった。

そんな風に刹那を、麻帆良を変えてくれた男、横島忠夫は実に頼

りがいを感じる年下であり、見た目は別にしているいい男に思える。
というか、彼って「ロリ」じゃないっていう割には、周りの女の
影って「ロリ」ばかりなのよね……。

「ええ、うちは普通のGSにくらべて道具代が少ないっすから、結
構利益おおきいんすよ。まあ、税金対策だと思ってつきあってくほ
しいっすね」

……う、やっぱり、ちょっと気になるかも。いろいろと……。
これを機にちょっと誘惑してみようかしら？

まあなんとというか、豪勢な話だ。

GS横島忠夫の誘いは実にありがたい上にこの上もないものであ
った。

彼が麻帆良に来てからと言うものの、いささか仕事のじゃまになる
ことが多かったのだが、この夏休みで払拭された。

彼らがない間の出勤は連日にわたり、実に収入の役に立って
くれた。

帰ってきた後もローテーションのためか、こちらの出勤実績を考
えてくれる余裕も感じられ、かなり嬉しすぎた。

「よ、真名ちゃん。今回は荒事抜きだから、ゆっくり楽しんでな」
「うん、ありがとう、横島さん。しかし、私なども呼んでよかった
のか？」

「いいに決まってるやる？ みんな仲間やんか」

そう彼は仲間だという。

半ば雇われの私ですら、クラスメイトだと扱われるのだから恐れ入る。彼は初めから私を用兵としてみていない気がする。年齢通りの少女として扱われること自体になれていない私にとつて、実に新鮮なことだった。

「では、存分に楽しませてもらおうかな？」

「おお、楽しんでな」

「あ、横島さん、ご招待ありがとうございます」

「ひゅーひゅー、こんな美少女集めてハーレムですかー？」

「チャラくないところが売りだったのにい」

亜子たちが横島さんに絡み出す。

「じゃ、先に行ってる」

「おう、またな」

からつとした、冬の青空のような人。

それが今のイメージだった。

はやまった。

それが横島の内心だった。

大宮から新幹線にのって東京駅で乗り換えて東京組と合流。

そこから東海道新幹線で京都までと言うルートなのだが、大宮をでた時点で後悔しまくっていた。

なんとというか、こう、私服姿で見ると、なんとというか、まずい、

のだ。

体のラインや成長具合が中学三年生に見えない女の子ばかりで、有り体に言えば煩惱爆発。

さらには、横島の座る三人席を向かい合わせた中に居る女子が積極すぎて泣けた。

千鶴、コノカ、茶々丸、エヴァは積極組だが、これに楓が加わり猛攻を始めていた。

そう、このメンバーの中で見た目のロリはエヴァとコノカだけという状況であり、エヴァもエヴァで少女らしからぬ雰囲気のためマズイ。

加えて、コノカも最近少女めいた仕草の中に女性を感じさせるものがあり、もう、ヤバイ。

これに加えて刹那やクーフェイが代わる代わるアタックしてくるものだから、横島の耐久限界もアップアップ。

早く東京について欲しいと心から願うほどであった。が、この願いは大いなる勘違いを含んでいたものであった。

なにしろ、東京から京都までは二時間近くかかる道のりであり、今のメンバーに加え妙齢の女性加わるのだ。

心休まる時間など訪れるはずもない。

まさに煩惱大爆発。

さすがに大宮から東京までの時間で文珠が生成出来るとは思わなかった横島であった。

東京組の集合場所に来てみると、すでに六道冥子と美神事務所メンバーがいた。

これに加え弓と一文字がおり、氷室と楽しげに話している。

「よお、はえーじゃねーか。」

「遅いですわよ、雪乃丞」

待ち合わせ時間の30分前なのに来てるって、どれだけ楽しみなんだよ、と言うと、弓は真っ赤になる。

まあ、解らないでもない。

弓はお嬢様然としているけど、実のところは本格格闘家も裸足で逃げ出すような武術一本槍体育会系の家で過ごしているので、こういう学校行事以外の旅行なんて経験無いことだろう。

加えて美神事務所のシロやおキ又あたりも旅行経験が少ないので、押し切られて早く来たと言ったところだろう。

美神の旦那あたりは、結構眠そうだし。

「あら、みんな早いのね」「だぁー」

元気いっぱい乳児ひのめを抱いた美神隊長の登場。
にこやかに周囲へ挨拶し、俺に微笑んだ。

「伊達君、今日はありがとうね？」

「横島が決めたことだ。きにすんなって」

「ゆ、ゆ、雪乃丞！！　なんて無礼な口のききかたをするの！！」

「いいのよ、弓さん。伊達君はこう言うところが良い所なんだから。」

「……ですが……。」

「あなたも、萎縮して対応する伊達君なんてみたくないでしょ？」

「……」

顔を赤くする弓。

よくわからんが、弓がうるさくないのは大歓迎だ。

「じゃ、雪乃丞。そろそろ行きましようか？」

やっとこさ目が覚めたらしい美神の旦那の台詞とともに、準備を始める。

「今日はよろしくね、雪乃丞」

「おう、まかせろ。」

「先生は、まだでござるか？」

「シロちゃん、横島さんは大宮から新幹線で来るから、ホームで待ち合わせなのよ。」

「・・・おお、そうでござった」

「しつかしよお、あの横島さんもすっぱーよなー。あれだけの人数を招待できるって。高校生のレベルじゃねーよ」

「そりゃ、毎日毎日地域紛争レベルの退魔をしているんですよ？収入で考えれば美神お姉さまに近いんじゃないかしら？」

「そうね、あがってくる報告書で見れば、一回一回の報酬は多くないけど、毎日出勤があるって言うのが大きいわ。一月の収入で見れば美神事務所よりも多いこともあるかしら。」

「え？ 本当ですか？」

美神事務所の報酬は激高である。

その事務所より収入が高いつて、とひきつる弓。

「最近ね、うちも結構単価の安い仕事もしてるのよ。だから結構毎日仕事してるけど、向こうに比べると、さすがにねえ？」

美神の旦那の説明を聞いて弓と一文字はかなり感心していた。

一文字は道具使いの系統だが、弓は呪符さえどうにかなれば横島事務所と同様に単価を下げられる。

かなり参考になるはずだ。

「雪乃丞、その辺詳しく後で教えてくださいませ？」
「おお、いいぜ。」

まあ色気のない話だが、俺たちらしいとも言える。

「なーなー、伊達さん。私も聞いていて良いか？」

「いいぜ、問題ねえだろ」

「・・・ありがとう。・・・あと、弓、すまん」

「・・・まあ、こういう奴だって知ってましたから」

？

なにを言っているんだろう？

雪乃丞、横島感染中・・・無惨

第三十話（後書き）

というわけで、秋旅行です。

この話で4〜5話いってしまっ感じですよ。

とはいえ、メイン執筆環境であるポメラ不調のため、ちょっとペー
スが悪くなる予定です。

第三十一話（前書き）

31話です。

話の構成をいろいろと模索しています。
皆さんの意見が「よこしまほら」を変えますW

第三十一話

案の定、休まることの無かった新幹線の道行きは、横島へのアピールやネギへのアピールに終始していたかと思いきや、クラスメイト同士の盛り上がりを中心となっていた。

これは、横島からの希望によるところが大きい。

クラスメイト内での隔たりを伝え聞いて、横島なりに関係者へお願いしていた。

そのお陰か、少々漂っていた隔たりも旅行のハイな気分押し出され、きわめて良好な空気になっていた。

それを見てかなり安心した横島であったが、左右にエヴァと茶々丸が居る状態は変わらなかった。

で、三人席の正面にはアスナ、シロ、タマモの新生ケモノトリオが座っていたりする。

最近アスナも、AF無しでクン、キユンで会話できるらしく、かなり人間離れしてきていた。

そんなわけで、それ以外のGS組も適当に散らばって生徒達と会話し、オカルトに対する耐性をあげていたりする。

これにより、開示の際のショックを和らげようと言っているのであったが、ちよつとした誤算もあった。

実は、一般的な目で見ると「魔法」はオカルトで説明できると感じられていたのだ。

確かに、白き現代の魔女「魔鈴めぐみ」は有名だし、海外でもその存在を知られている。

魔法と言えば彼女と言うほど関連つけられていて、そのうえで彼女はGS免許を取得している。

ああ、魔法ってやっぱり、というイメージになっているわけだ。

いささか気の抜ける結果だったが、カミングアウトの方向性が見えたと言えるだろう。

京都に着いた横島達は、かなりの大人数であるため、バスまでチャーターしていたりする。

そのおもいつきりの良さに驚く3Aであったが、喜びが先に立ち舞い上がっていた。

初めは修学旅行と同じ清水寺からであったが、その後は足で歩き八坂神社までのコースを辿ることになった。

その際、エヴァとユエが語る語る。

一般観光客や外国人観光客も意識してか英語での解説も絡めるものだから、横島達を追うように外国人観光客が追従したりしていた。八坂神社までついたところで、一度バスに乗ろうと言ったところで、一声かかる。

「えーっと、美御前社、もいきたいかなあ……」

ちょっと恥ずかしげに言う美神美智恵。

何事かと聞いてみると、エヴァが答えた。

「なるほど、美の神、というわけかな？」

「えー、っと、そのお……」

「そこには、肌の健康を守るという「美容水」があるという、だったかな？」

「……その所を詳しく……」

がつつり食いつく美神令子、シスターシャークティ、刀子の年かき三人組。

思わず3A女子もつられて参拝してしまった。

学園の先生ばかりではなく、一線のGSが必死になっているくらいだから御利益も深かるう、とつられた生徒達であったが、実の所「藁をも縋る」心境だとは思いつくことはなかった。

初日の観光を終えた横島たちは、そのままバスに乗りコノカの実家である関西呪術協会本部へ向かった。

長い鳥居と長い階段を抜けた先にあったのは大きなお屋敷。

「うっわー、すごいところに住んでるやねえ。」

「んー、中学からは麻帆良やからなあ。」

私の台詞に苦笑いのコノカ。

「亜子、引いた？」

「びっくりはしたけど、いいんちよの家みたいなんもあるからなあ。」

私の笑顔に安心したのか、コノカの笑いも戻る。

人生主役級ともなると悩みも大きいもんだと羨ましいやら羨ましくないやら、悩むところだ。

モブ人生を歩いてきた身としては、羨ましいことこの上ないのだけれども、では波瀾万丈人生に身を投じたいかという別だつてことに最近気づいた。

そう、2年になってから知り合った高校生、横島忠夫さんと知り合ってから。

彼は波瀾万丈の人生を地で行く人だった。

高校生でGSで事務所持ちで、怪異霊事件を次々と解決する主人公人生で、うちのクラスの女子を何人も虜にしているハレム男。

顔とかは普通なんだけど、気遣いができる人で優しい人。

私も少し惹かれてる。

うちのクラスではコノカやチヅ姉あたりがメロメロだと思っただけだ、エヴァちゃんや茶々丸さんがあそこまでメロメロだと思わなかった。

惚れた腫れたで人生を決めてしまふのはどうかと思っていたんだけど、今日の新幹線の中での話を聞くと、割と真面目にGSしてたことが解った。

今まで麻帆良の中って、GS的には無法地帯だったそうさ。

何となくバランスがとれていたの、大事件はなかったけれど、ちょっとした刺激で大事故が起きていたぐらいの状態だったそうさ。それを未然に防ぐために無償で除霊をしていたのが横島さんと横島事務所だという。

小さな地縛霊を払い、惑いかかっている浮遊霊を導き、地脈霊脈をゆっくりと直す。

金額にすれば数億にもなる仕事だそうさ。

思わず私が「もったいない」とつぶやくと、美神令子さんが苦笑い。

「そうね、確かにもったいないんだけど、数億かかる理由って言うのが横島君には当てはまらないのよ。」

基本、本当に基本の話、除霊には除霊具が必要になる、らしいんだけど、それはあくまで基本なのだそうさ。

中には必ずしも除霊具を必要としない人もいて、その一人である横島さんとその弟子である横島事務所の人たちは、ほとんど除霊具を使わないそうだ。

だから、普段の仕事に加えて、麻帆良で霊的災害が起こらないようにポランティアをするのは予算的にありだという。

また、未だ見習いであるコノカやチヅ姉達にとって、とても良い練習相手なんだそうだ。

「そうですか……。じゃあ、無償って事実の貸しを学園に作り続けている、つうことですか？」

「あら、亜子ちゃん。ずいぶん頼もしい考え方ね？」

よくできました、と頭をなでてくれる美神令子さんであった。

そんなやり取りで、私はオカルトというのが経済活動の一環だと初めて気づいた。

そう、パン屋や花屋、八百屋に喫茶店。

警察や消防や病院と同じ存在なんだと。

そういう意味では、未だ高校生の時点で、そんな存在になっていること自体はすごいけど、全く手の届かない世界ではないと言ったことが理解できた。

いわば、半歩だけズレたプロの世界。

誰にでもなれるわけではないけれど、その人達以外に理解できないわけではない経済活動。

それがオカルトなのだ。

その思いつきがうれしくて、私は美神令子さんにそういうと、彼女は実に驚いた顔になった後、ぎゅっと私を抱きしめた。

「あなたは頭が良くて、そして懐の深い子ね。あなたみたいな人が世界にあふれていれば、人も妖怪も神も魔も、等しく世界を謳歌できるんでしょね」

なぜかそのとき周囲で拍手は起きてしまったのは何でなんだろう？

それはさておき。

私は波瀾万丈に思える人生をおくれる訳ではないけど、あの人の友人では居られることに間違いない。

日常の表徴として、日常の指標として。

だから、あの人達が不安に揺れているときは笑顔でいよう、私はそう思った。

「私は、こういう和風な感じ、すっきやな。」

「・・・ありがとうな、亜子。」

こんなやり取りの中、うれしそうに笑って私を撫でてくれる横島さんを見とれていてしまった。

やっぱり、ちよつと気になるわあ。

子供達の騒ぎは置いておいて、私たちは大人の話を開始した。

関西呪術教会による「認識阻害符」供給は、オカルトGメンの地位を数段高いものに変えた。

現在の魔法世界の重鎮であるヘラス帝国との人材交流と移民受け入れ、それに比例するようにオカルトGメンの実績の上昇と地域オカルト事件の減少。

大きな事象を秘匿された魔法使い達と一流GSでこなし、周辺事象を二線級以下のGSへ依頼され、もはやGS協会抜きでも大丈夫では、とすら政界の一部で囁かれるほどになっている。

そんな風潮に歯がみする派閥もあるが、逆に危険部分をそのままオカルトGメンに引き継いでもらい、事務処理や管理関係をGS協

会が行う方向で進めれば、権益も守れて危険も責任もないと喜ぶ向きもあるという。

もはや権益の拡大とか権利拡大という方向ではない進出が可能になっている。

これもそれもすべて関西呪術協会の協力があつてこそであり、その渡りを付けてくれた横島君のお陰なのだが・・・。

「なんで横島君はそっちに座ってるのかしら？」
「さあー？」

私、美神美智恵と相對するように座るのは関西呪術協会長、近衛詠春。これはいいでしょう。

が、なぜか近衛氏の隣にスーツを着た横島君が控えていた。

「いえいえ、何しろ家の娘を従者にして居る強者ですから、ええ。」

まあ、確かに聞いていることは聞いている。

今年度はじめの頃の修学旅行とその際に交わされた約束。

関西呪術協会の後ろ盾になると、彼は言ったのだ。

その言葉に嘘はなく、陰日向となつて交流し、今回の認識阻害符の件でも「表沙汰にできて税務申告が大っぴらにできる」収入が出来たと大歓迎なのだ。

事、退魔行や護衛などの仕事は表沙汰に出来ない金の流れである場合が多い。

そのため、表沙汰に出来る収入に対する出費が多くなるとそれなりに収入をでっ上げなければなくなることが多く、その言い訳にも苦慮していた関西呪術協会にとつても渡りに船であり、きわめて良好な関係といえた。

逆に、表のオカルトである京都陰陽寮からのオカルトGメンに対する反発は大きかったが、元より符の関係は大量使用することを前

提にした海外産を使っていたので、あまり実害はなかった。

「お互いに益するところが出来、さらには表への筋道が出来て、我々も感謝しているのですよ」

詠春氏の言葉に、私もほっと肩の力を抜く。

「いいえ、私どもの感謝はその上をゆくものです。この関係がいつまでも続くことを祈りますわ」

「そうですね、関係が腐敗しないように、我々が、我々同士が目を光らせなければなりませんね」

そう、組織は腐敗する、関係は凋落する。

これは真理であり事実だ。

ならば、自分達の目が届く時間だけでもいいから、自分達の目が届く範囲だけでもいいから、常に正さなければならぬ。

「大丈夫つすよ、長、隊長。みんなやる気だし、次世代もがんばってるし。信じましょうよ」

にこやかな横島君の台詞に私たちは苦笑い。

そう、この若さが今、どちらの組織にも満ち溢れていた。

この勢いがあるうちは大丈夫だろうと確信させられた。

入浴と食事も楽しく終わったところで宴会になりそうなどころだつたけれど、今回の本題が開かされることになっている。

そう、秘匿された魔法の開示だ。

新幹線の中の会話で「オカルトの魔法」と「秘匿された魔法」の

差が曖昧なことはわかったけれど、やっぱり秘匿されているだけあって「秘匿された魔法」は理解できていない人間が多かった。

「なんで禁止なの？」

マキエの台詞を聞いた横島さんはまるで宴会芸のように炎をともしたり、風を起こして見せた後、こんな台詞をはく。

「これな、訓練すると誰でも出来るんだ」

「」「え？」「」

驚くみんな。

「アキラちゃん、ユウナ、ちょっと前にきて」

私とユウナを呼んで、みんなの前で実演させる。

もちろん出来るのだが、クラスは沸いた。

そりゃそうだ、霊能と違って誰にでも出来ると聞けば。

ここで頭の回る人間は気づく。

誰にでも出来る、と。

「横島さん、つまり、それは、凶器と一緒になん？」

亜子の台詞に横島さんは苦笑いで「正解」と答えた。

つまりそう言うことなのだ。

誰にでも出来る、誰にでももてる人以上の力、それは武器や凶器だといえるだろう。

私は、私たちはあの「魔法世界」で心身共に刻みつけられた。

後悔はしていないが、心に大きな負担になったと思う。

その負担も成長の糧なのだから文句は言っまい。

「握手をする手が拳になって人を傷つける、それは一つの真理アルヨ」

クーフエイの言葉を聞いて、理解していなかった娘達も理解できたようだった。

「魔法で人を傷つけることも出来るけど、魔法で人を治すことも出来る。でも、それは武器で人を傷つけることや治療で癒すことと変わらない、そう思う。」

私の言葉が広がったところで、横島さんは笑顔で言う。

「これが、あの麻帆良学園でみんなが不思議な目に遭ってきた真実だ。オカルトとは違って誰にでも取得できる魔法、秘匿された魔法を使うもの達の町、それが麻帆良。」

魔法の秘匿の意味、そしてその危険性を開示された娘達は混乱していたけど、それでも魔法を使ってみたいという話に落ち着く。

では、どんな訓練が必要になるか、と言うところになってネギ先生の説明が始まった。

さすが先生、一朝一夕には行かない話をしていただけだけど突っ込みが入る。

「・・・アキラがそんなに訓練しているのをみたことないんだけど？」

「あははは、それは、ほら、秘匿されてますので・・・。」

く、苦しいですよ、ネギ先生。

「・・・裏技があるに違いないです」

「抜け道のおいがプンプンするです」

さすが鳴滝姉妹、その嗅覚が恐ろしい。

「「教えるです!!」」

「いやー、幼女におそわれるのはイヤー!」

襲いかかる鳴滝姉妹を避けつつも、教えないとならないなーと言
う顔になった横島さんだった。

希望者に簡単な魔法の素養を焼き付けることにした横島であった。

鳴滝姉妹と柿崎・釘宮は炎をとませてご満悦であったが、桜子・

マキエは不満そうであった。

何事かと聞けば・・・

「武道大会の時の横島・雪乃丞のような技が使えると思ってた」・・・
そうだ。

その件はかなり質問が集まったので横島が説明する。

そう、あれは霊力と魔法の複合技であると。

その辺は近衛詠春も興味があるらしく、食いついてきた。

何しろ魔法世界での活躍は有名だったから。

とはいえ、その辺は「ネタ技」なんだよなーと笑う雪乃丞。

霊能をそれっぽく見せてみて、さらに魔法で補強したりしていた
という話を聞いて、目を輝かせる生徒達。

見せて見せてと言う話になり、道場へ移動した。

RYU・KEN技に始まり様々な格闘技を披露していたところでクーフエイや楓が乱入。

異種格闘技戦闘になつていたところにネギまで加わつて、かなりカオスなバトルロワイヤルに発展。

あまりの展開についてゆけないもの続出かと思いきや、実写の映画を見ているようなシーンに大興奮。

気づいてみれば関西呪術協会の人々も観戦していた。

まるで熱い戦いで酒盛りをするかのように、というかすでに酒盛り中。

確かに見応えのある派手な技の押収であつたが、それ以上にすごいのは、千鶴・コノカによって張られている障壁型結界だろう。

無詠唱、発動体無しで張られた結界に驚きの声を隠せない関西関係者であつたが、これこそが関東修行の結果だと言うことで納得する向きもある。

加えれば、オカルトGメンへの呪符販売による資金増加は、派閥を越えて益するものがあり、その紹介を行った横島にさらに高い評価がついて回っている。

派閥の中では横島事務所を通してGS資格を取るという方向性すら検討されていた。

解明的で開放的な思考だと自画自賛して、周囲から一歩ぬけだそうとしていたが、正式な試験は春口なので、それまでに話をまとめようとか考えていたりする。

もちろん、そんな話を聞いていない横島が、今度行われる臨時試験の存在を話しているわけもなく、実にありがちなすれ違いであつた。

わかったことがある。

魔法も、霊能も、私の新体操も、全部努力の先にあるってこと。魔法と聞くと、チチンパイパイで可能な安易な手段だと思っただけど、それは大きな間違いだった。

発動する努力をし、勉強をし、練習をし、そしてまた発動させる。心底体育会系の世界だった。

逆に、学園に魔法部とかあったら、ランニングとかの持久力アップとか筋トレとかストレッチとか絶対にやってると思う。

そんな風に思った。

なぜかというところ……

「あだだだだ……！」

「い、いたいです……」

「ああああ、お姉ちゃんさわっちゃだめ……」

普段使っていない魔力という力を使ったせいで、全身が筋肉痛っぽい症状になってしまった。

これもなれば大丈夫と言うけど個人差があるらしい。

まあ、クギミ程度酷くないからいいか。

彼女は、歩くのすら苦痛っぽいし。

「ま、簡易的なやり方ってのは、それなりに危険があるって事だ」

ケタケタと笑うエヴァ様は、秘匿された魔法側の存在だそうで、過去600万ドルの賞金首だったという吸血姫だそうだ。

その割には十字架とか太陽が平気だと聞いてみると、そう言う弱点を克服したそうだ。

一応今でも流れる水とニンクは苦手らしいけど死ぬほどではないと言う。

私たちが入学した頃は、ネギ君のお父さんの呪いで学校に縛り付

けられていたらしいんだけど、最近横島さんに呪いを解いてもらったそうで、それに恩を感じて仕事を協力しているんだと本人から説明された。

でも……

「ラブ、だよねえ？」

「……まあ、ラブだねえ……。」

ざわざわとクラスがざわめいた。

この手のラブ臭に敏感なハルナだったけど、相当な濃度のせいで気絶したほどであった。

ラブ臭警報発令！！ とスケッチブックに書いて倒れたのは前向きさを感じないでもない。

第三十一話（後書き）

書いていて思うのですが、マキエは言い狂言回しだなあと。

そういう意味ではお気に入りですが、最近出番の少ない茶々丸が一番ですw

追記：色々のご指摘を受けまして、早々に書き直しました。

ただ、方言っぽい言い回しを意識して記載した点やキャラクターを意識した記載については修正していません。その辺はご勘弁ください。

第三十二話（前書き）

三十二話です。

新年更新、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

新たな年試みの所為で時間の進行が急激に遅くなっていますが、どんなものでしょう？

第三十二話

ゆったりとした旅になるはずが、どうにも大騒ぎになるのは仕方ないことなのかもしれない。

夜も騒がしく、翌朝も元気な女子中学生及び女子高生であったが、それについてゆけない人間もいる、というか少くない。

もちろん、美神親子、学園教員勢、そして魔鈴めぐみであった。気持ち若いつもりであったが、さすがにあのパワーはない、とひざを折る。

魔鈴自身、参加は夜からなのだが、それでもパワーの不足を感じていた。

無論、美神達につきあつて、浴びるように酒を飲んだ事も関係しているはずだが。

ともあれ、大人には追従できないノリであることには間違いなく、このノリについてゆけない時点で大人なのだと言わざるを得ないところだろう。

子供の力、恐るべし。

二日目もエヴァ計画に基づく観光順路であったのだが、ちょっと疲れたという話が多く出た。

確かにテンションを高めすぎていたことを自覚したエヴァは、ちょっと休憩を挟むことを考えた。

が、折角観光に来たのだから風景や雰囲気を楽しめつつ、観光にもなるといった良いところにしたいのだが周辺で良い所がない。

どうしたものか、このまま全国チェーンの喫茶店やファミレスで

は気分が悪いし味気ない、等々考えていたエヴァの所へ良い所を知っているという美神。

「どこだ？」

「ま、いいところだから。」

そう言いながら連れてきたのは晴明神社。

とりあえず観光客に人気の名所である。

が、喫茶施設の話は聞かない。

「ああ、あっちゃんのところっすか。」

「私とも縁深いしね」

気軽に和む横島と、にやにや笑いの美神は、境内に入る前に拍手を同時に行った。

「パン！」

瞬間、周囲の空気が変わった。

みんなその差がわからなかったが、刹那には理解できた。

あの拍手と同時に異界が広がったのだ。

「なんや、よこっちゃんいかあ！」

平安の道士服を身にまとった美丈夫が、境内から現れた。

「今日は、楽しい人を連れてきたぜえ。」

「なんやなんや、あれか？ 今話題のよこっちロリハーレムか？」

げたげた笑う男を、さも面白そうに見つめた美神は、ゆったりと

した口調で話しかけた。

「12になるまでオネシヨしてた男が、ずいぶんと大きな口を利くようになったもんだねえ？」

「なあ！？」

思わぬ過去の暴露に目を白黒差せた男だったが、まるで近眼の人が焦点をあわせるかのように美神を見つめ、そして、急遽顔色を白くさせた。

「ま、まさか……」

「晴明って名乗ってるんだって？ ぼーや？」

まさに電光石火、目にも留まらぬ早さで土下座をする男は叫ぶように声を放つ。

「今生のお母様につきましては、ご機嫌麗しく……」
「うるわしくないわよ」

にこやかにほほえみながら、男の後頭部に足を乗せ、力を掛ける。

「とりあえず、客よ。茶ぐらい出しなさい。」

「は、はい！――！」

ダッシュで境内に走る男をみて、肩をすくめる美神。

「とりあえず聞くが、あの男は誰だ？ 美神令子」

「ああ、前世で産んだ不祥の子供。」

「……もしかして、晴明って……。」

「ん？ ああ、この神社の神様、安倍晴明よ」

べさんは泣き顔でした。

ああ、何となく老師に修行をつけられている自分を思い出し
ました。

思わずもらい泣きです。

「少年、わかるか、わかってくれるか！」

「ええ、ええ、わかります。力をいくら付けても逆らえない存在、
それが目の前に立ちふさがって動かない絶望感、わかります!!」
「そうだ、その通りだ、少年! ああ、なんてことだろう、こんな幼
い少年の同志を得られるとは!!」

言葉にできない共感で、僕とアベさんの心はつながりました。

「ところで少年の『壁』の名は？」

「猿神老師です」

「・・・なんと、それは絶望的な・・・」

「『横島忠夫』という名の壁も厚くて高いです」

「まさにダブルインパクト！」

ああ、この空間は安らぐなあ、連れてきてくれた美神さんにお礼
を言わなくちゃ。

負け犬たちの癒され空間に浸っていたネギ先生をひっぺがして、
私たちは元の空間に戻りました。

よほど気に入られたのか、清明神社のご本尊から、通行証をもら
ったネギ先生は必ずまたきますと約束していますです。

というか現実には小説よりも、という話通りに超へタレな清明はお

いておいて、横島さんと美神さんお話は実に興味深い話でした。

過去、事故で古代京都に転移した際の風俗は興味深いものでした。横島さんが罫でよく使う「平安京エイリアンの術」はこの当時に開発したものだそう、趣深いものがあります。

受験勉強や試験のための勉強となると興味が向かない話でも、生でみてきました、という話だとコレほど興味深いのはなぜでしょう？

「それはな、綾瀬。おまえが実学主義だからだろう。」

エヴァンジェリンさんの一言で私は理解しました。

そう、それです。

体を通じた知識と、体に生かせる知恵を求める実学。

そうです、そうなんです、さすが600歳、言葉の重さが違います。

「綾瀬、おまえ、何か不穏なことを考えてないか？」

「いいえ、恐れ多くも賢くも、時代の生き証人であるエヴァンジェリンさんを尊敬することがあってもおろそかに扱うことなど・・・。」

「ふ、ふん、その気持ちを忘れすなよ、綾瀬ユエ！」

「はいです」

ふふふ、お子さま思考のエヴァンジェリンさんから本心を隠しおやすなど赤子の手をひねるより簡単なことです、ええ。

夕闇前の最後の明るさの中で銀閣寺を前にした私たち。

修学旅行の時は、有名すぎて候補からはずした名所旧跡だけど、実際に来てみればわかる。

ここはいい場所だって。

「神楽坂アスナ、どうだ？」

「・・・感動してる」

エヴァちゃんの一言に私は答えた。

今まで騒がしかったクラスメイトも今の光景に見入っている。

「・・・感動です。」「そうね、愛衣、私も感動してるわ」

高音さんと愛衣ちゃんも、じんわり涙を流している。

この感覚は、純粋な日本人にはわかってもらえないかもしれないと思う。

この切ないほどの光景、この締め付けられるほどの感動。

たぶん、日本人の心の中に必ずあって、そして他国人には存在しない光景なんだと思う。

「あたし、エヴァちゃんが何で京都好きなのか解った気がする。」

「それはな、神楽坂アスナ。おまえの心が異邦人になった証拠だ。」

「・・・そうね、たぶんエヴァちゃんの言うとおりね。」

私の記憶が戻ったせいか、修学旅行の時に見た京都と今では全く違う風景に見える。

「大人になって京都に來ると、子供の頃に理解できなかった風景を理解できるようになるって言うわね」

「・・・そうね、実感してるわ」

シスターシャーケティと刀子先生の言葉に大人はみんな頷いてい

る。

クラスメイトは単純にきれいな光景としてみてるけど、たぶん、学生という立場を離れた後にこの感覚を覚えるのだろう。

私は半ば学生という立場を失っていると言っている。

だから、こんなにもこの光景に感動しているのだろう。

「アスナさん、これをつかいなさい」

「・・・ありがとう、いいんちよ」

ラベンダーの香りのハンカチを使っても、私は時を駆けることはない。

それでも目の前の光景は千年もの時間を越えてやってきた。

はかなくも力強い光景。それに私たちの心はふるえる。

ああ、京都に住むというのはいい話だ。

ネギの別荘でも借りて生活しようかな・・・。

「それだ、それがいい！ 神楽坂アスナ、それは素晴らしいアイデアだ！！」

・・・あ、口からでてた。

これって、横島さんの癖だったわよね。

暴走エヴァちゃんが横島さんに飛びかかるのはいつものこととして、あれだけ熱心に説得する姿は流石に可愛いと思ってしまうた。

秘匿された魔法とオカルトについての講座が二日目を迎えました。誰にでも使える魔法、才能のある人間にしか使えない霊能、これが今までの常識でしたが、その常識を打ち破った天才がいます。

その名も「横島忠夫」

我が主、エヴァンジェリン=A=K=マクダウエルの想い人であり、仮契約における我が主。

かの靈能は恐ろしいまでに汎用性が高く、反則的でした。

呪文詠唱ができないことで魔法使いとしての人生をあきらめていた高畑=T=タカミチ教諭に無詠唱の固定魔法を授けた手並みも恐ろしいものでしたが、魔法の世界に入って間もない少女達に高等攻撃魔法が使えるように指南してしまう手並みも恐ろしいものでした。流石に簡単に進めすぎたため、逆にマスターから魔法世界への開示が禁止されたほどでした。

そんな天才、横島忠夫の歪んだ事實は、少女達にもう一つの真実を見せていました。

魔法も靈能も才能の一端でしかなく、努力や研鑽に左右されるものの一つであると言うことでした。

新幹線での行きで亜子さんが語った内容と同じ内容でしたが、その双方で成功している横島さんが語ると重みが違います。

少女達はうなずき、そして受け入れます。

「なあ、横島さん。横島さんがオカルト始めたのって何で？」

その答えは実に信じられないものでした。

両親から生きるのにも足りない程度の仕送りしかもらえなかったので、仕方なくアルバイトをしようと思ったのはいいけど、美神令子さんの色香に迷って時給250円で荷物持ちを引き受けたのが始まりだと語ると、はじめは誰もが冗談だと思いました。

が、視線を逸らした美神さんや横島さんの顔色から真実だと察するみなさん。

とはいえ、始まりがそれであっても、今の横島さんには大きく関係ないと感じています。

そんな風に私が言うと、大量の涙で「茶々丸ちゃんはいえこや」と泣いて感動してくれました。

勿論打算あつての発言なので、あまり騙されないでください、横島さん。

始まりはどうあれ、忠夫さんは現在GS業界でもトップクラスの実力者になっているそうです。

流石「美神令子の弟子」という事になっているそうですが、美神さん曰く「そのうち横島忠夫の師匠って言われるようになるわ」と苦笑いでした。

事、攻撃力という点において、妙神山に修行にいつている時点で日本有数の攻撃力を持っているGSと言えるそうです。

その上で猿神老師の最高難易度の修行を越えているという段階において、歴史に名を残す霊能者だといえます。

・・・確かにあの修行は・・・。

わりと本気で死にかけたこと数回。

これだけで霊能力が強化されてしまったほどですから。

「ま、何にしても、行くも引くも自由なんだから安心していなさいね、千鶴ちゃん」

「はい」

正直に言えば、霊能も魔法もどうでもよかった。

基本、私は忠夫さんに心奪われたからこそ霊能と魔法を志向して

これで女つ誑しじゃなければ、結構好きなタイプなんだけど、これだけ女の影が轟々と立ち並んでいては、好きとか好ましいとか言う話など論外だ。

そんな恐ろしい関係を気にしないで居られるほど気合いが入った「好き」じゃないんだけど、何故かコノカもチツ姉も自分の側にいると信じてるのが怖い。

強引に行われた部屋替えだって、何故か私が横島さんの隣にすることが前提だし、千雨ちゃんと一緒に事務に入れられてるし、魔鈴さんのところのバイトローテーションにはいつてるし！！

あの千雨ちゃんですら「あれ、なんで村上にAFねーんだ？ 仮契約してなかったっけ？」とか言い出すし！！

なんだかチツ姉に外堀を完全に埋められている気がするよお！

そんなわけで、私ははじめっから魔法とかオカルトの秘匿とかの内側に放り込まれていた。

そのおかげで秘匿の外にいるクラスメイトと秘匿の内側にいるクラスメイトの間を取り持つような役目を仰せつかっていた。

これはエヴァちゃんや横島さんが掛け合ってくれて学園長公認だとか。

おかしいな、へんだよね？

何の実力も能力もないのに、なんでこんな変な役目を背負うかな？
あーもう、本当によくわかりません！！

横島さんのオカルト講座の間中、村上が身もだえている。

まあ、あれだ。自分は普通なのに、なんでこんな立場に・・・っ

て、いつもの勘違いだ。

正直、あの那波に付け狙われて今まで無事な時点で異常だし、かの神魔が降臨した際も結構普通に給仕できていた時点で異常だ。

流石に魔法世界への旅行は欠席させたけど、あれだけ魔法であふれた横島事務所に馴染んでいる時点で「普通」じゃない。

私らにとつて村上は「日常」の象徴とも言える存在だった。

魔法もオカルトも関わっていない普通のスタンスを異常なくらい堅持できている。

勿論、生活や思考というものは周りの人間に影響されて変わってゆくものなのに、だ。

いわば固定化した日常、歪むことのない普通。

この時点で「異常」だって事に村上は気づいていなかった。

話に聞くとところで言えば、美神事務所の「幽霊おキヌ」だろうか？

氷室になったあの人は、世界有数のネクロマンサーになったそうだけど、幽霊であった頃は幽霊以外の才能（？）のないお母さんのような役目であったとか。

帰ってこれる日常、帰りゆくための指標。

そんな存在だからこそ、あの六道冥子さんも村上に気を許しているのだろうと思う。

私は思う。

村上はいつまでも仲間で居てほしい。

できれば事務所に参加してほしいし、従者になるのもありだと思うけど、全く一般人の立場で協力してもらうのもありだと感じてる。愛子さんも言っていたけど、あれだけ普通に事務処理ができる中学生って言うのは貴重なはずだ。

むー、横島さんに落としてもらおうか、そんな風に考える私だった。

「なんつうか、横島さんスゲー。」

目をきらきらさせている一文字さん。

「そうですね、今の魔法世界外交の要ですからね」

雪之丞さんの話をよく聞くのか、結構詳しい弓さん。

「でも、雪之丞さんもかなり活躍してるって聞いてますよ？」

私の一言に一文字さんは微笑み、弓さんは真っ赤になった。

今回の旅行が単なる遊びで無いことは美神さんから聞いていた。

3Aというネギ君受け持ちクラスの中で発生している隔意の解消。既に少数税となっている魔法秘匿の外にいる生徒への魔法開示。

そして未だ詳しい事情すら把握していない魔法世界やオカルト世界の実状の説明と意識定着。

加えて、美神隊長の関西呪術協会への外交とか京都本尊の神社仏閣へのオカルト外交とか、もう霊能科学生としてはお腹一杯になるほどの実地研修だった。

そんな最中で一般学生の防御や先制攻撃で目覚ましい動きをしているのが雪之丞さん。

恋人として鼻が高いだろうと思う。

「お姉さま〜」

60年ほど幽霊をしていたというさよちゃんは、私が300年ほ

ど幽霊をしていたという過去を知って「お姉さま」と慕ってくれる。誰かの妹分であることはあっても姉となることの無かった私には新鮮で、可愛く思える。

「さよちゃん、楽しんでる？」

「はい！」

抱きついてきたさよちゃんを撫でつつ、こんな思いを感じさせてくれた横島さんに感謝していた私だった。

第三十二話（後書き）

よこしまほらにおいて、よこっちの評価は難しいものがあります。知っている人間の評価は天井知らずですが、過去にとらわれている人間にとっては信頼できない存在なので。もちろん、協会や政府関係者は、いつまでもそっち側で描かれます。

第三十三話（前書き）

話の区切りなので、ちょっと短いです

第三十三話

なんつつか、劣等感を感じる。

これは仕方ない話だろう。

確かに霊能の開花は自分の方が早かったけど、くぐり抜けた修羅場が違っているのだから。

それでも、そうであっても、あれだけの人脈と経験は普通の人生じゃ無理だ。

ちよっと前まで軽蔑していたし、タイガーやおキヌちゃんが何と言おうとも軽蔑していたけれど、成し遂げた実績まで蔑むつもりはなかった。

そうやって、立ち位置を変えてみると、実績もそうだけど、横島さんの生き方というのがいろいろと共感できた。

神魔妖怪怪異関係なしの友好関係、差し伸べた手を取るのものはじくのも相手任せ、そして弾かれたときの徹底抗戦。

人間視点に立った、傲慢ともいえる判断基準だけど、実に解りやすい方向性だった。

そんな方向性を持っている事務所は殆どなく、卒業後の修行先にもお願いしたいぐらいに思える。

この前の妙神山で見せられた横島さんの弟子たちの連携は見事で、手加減をしていたが隔絶の実力を発揮する猿神の攻撃を打ち返していた。

並のGSには、いや、一流GSと言われる人たちでも不可能だろう。

かく言う私も攻撃に参加してみたが、全く通じ無いどころか弾かれて気絶の連続だった。

つまり、弟子の育成に関しても事務所の経営に関しても政治的な手腕に関しても一流に認められた存在なのだ。

ならば認めないわけには行かない。

で、浅ましい話なんだけど、いざ認めると相手の格の上さが気になって劣等感を感じたりする。

本当に浅ましい話だ。

「きゃー、これかわいいですねー」

私の隣で土産物を選ぶおキ又ちゃん。

彼女はそんな思いを感じないのだろうか？

でも、自分の浅ましさを知られたくなくて、どうやって聞けばいいか解らない。

内心のため息をどうやら弓に聞かれたらしい。

「……一文字さん。相手の有能さを見て溜息を漏らすより、自分の無力さを嘆きなさい。」

「……一言もねえな。」

「過去、横島さんは「丁稚」と呼ばれていましたし、今でもそう名乗っています。でも、なし得た事実がそれを変化させています。それを忘れずに努力することでしょう」

「弓、おめえいい女だな」

「……これでも私も悩んでいましたよ？」

そりゃそうか、と苦笑い。

弓だって、自分のつき合っている男の有能さを目の当たりにして何も感じないほどバカじゃないし、悪あがきするのが当たり前なほどの女だ。

こんな結論に至るまで、どんなに苦しんだのか解らない。

しかし、内臓が焼かれるほどの苦しみを感じたであろう事は間違いないだろう。

そういう意味では、タイガーにとって私はそういう存在なのかもしれない。

あいつのストレスをなくしてやるのはいいかもしれないけど、その苦しみがタイガーを大きくすることができると考えると、方法を考えざる得ない。

まあ、次回の正式なGS試験で私が受ければ、お互いに研鑽できるだろうし、ね。

オカルト的にも政治的にも極めて成果のある京都旅行を果たした美神隊長を引率に、事務所員以外の3A生徒が帰郷する。

これ以降は霊能的な修行と言うことになっており、一般生徒とネギパーティーは一足先に帰ってもらう。

霊能関係なので、六道には許可をもらい、六道女子勢と美神事務所、そして冥子ちゃんも残って、新幹線ホームでお見送り。

帰る生徒は半ば羨ましそうであったが、霊能関係の危険さと非常識さは十分にこの旅行中に体験したので、修行が大切なのも理解していたようだ。

「じゃあ、学園でまた会いましょう」

「おう、またな」

ぎゅっと握手するネギと俺。

隣にいた雪之丞ともネギは握手した。

「あ、あの、チツねえ、私も帰る方なんだけど・・・」

「夏美、解らないことを言わないで。あなたはこっち」

「そうだな、こっちだな」

「夏美ちゃん、こっちやでえ。」

事務所勢に拉致された村上夏美に合掌。

修行というのは名目だ。

ここから先はエヴァによるエヴァのための京都観光となるため、マニアックすぎて普通は付いて来れないと言う判断になっただけであつた。

が、実は事務所やGS関係者だけの人間だけにしてよかつたという事が立て続けに起こり始めた。

封印されていた妖魔が復活したり、悪霊が暴れたり、天狗が暴れにきたりで大騒ぎとなつていた。

その都度、土地神や神社などの神から依頼され倒したのだが、なんでここまで騒ぎが重なるのか、と詠春も首を傾げていた。

が、夏美の台詞に3A勢が理解を示した。

「ほら、桜子が帰つたから・・・。」

「「「「ああ、なるほど」「」「」」

椎名桜子。

最強の運を持つ女。

しかし、一度去ると、その場にあつた幸運も粗方持ち去つてしまつたというバットトラックな面も持つ。

「まあ、それでもおもしろいだろう？」

雪之丞の一言に、エヴァと美神は笑顔。

なにしろ、神や土地神の依頼に際して、神器や神具の使用を許可させたのだから。

神にしてみれば一度使わせてほしいという程度の話だったが、エヴァのAFを考えれば、かの無限な倉庫に神の武器がガンガン投入されるようなものだ。

これほど笑いが止まらない話もないだろう。

同じくバトルバトルで笑いが止まらない雪之丞とクーフエイは、実に爽快な笑顔でお互いを誉めたたえていた。

強さの上限が一段突破したクーフエイは、今までのように狂ったような強さへの渴望は見せていないが、ひたむきな努力は健在で、その実力を着実に伸ばしていた。

同じように努力を続ける楓であったが、彼女の方は強さに一定の上限があるものと感じており、その上限突破を模索し続けていた。

とはいえ、未だ中学生だ。

その上限も、更にその先も、未だ至らぬ未来であることは間違いない、そして目指すことの出来る目標でもあった。

そついう意味では、悪霊だろつと天狗だろつと、強いものと戦えることは喜びであり、己の力量を測る上では有用すぎてうれしかった。

逆に、身内が強すぎて癒しの力の使いどころがなくてコノカあたりは不満であったが、身内が怪我することを嫌がる横島を思い、我慢することになっていた。

実はこの騒動で一番うれしかったのは関西呪術協会であった。

京都一帯の怪異を押さえる役所であったが、さすがに人員が不足しており、それなりに問題が出始めていたところであった。

が、このほどの横島忠夫功業により、問題のあった怪異は鎮圧でき、さらには縁の薄かった土地神とも交流が出来るようになったからだ。

御山の土地神は修学旅行の時に横島と縁が出来、その伝で関西呪術協会も良くしてもらっていたのだが、町中の神神との縁が浅かった。

しかし、この騒動の収集で関西呪術協会が頼りになるものと判断してか、土地神や神社の本尊たちから連絡が入るようになったのだ。これに気を良くした協会幹部は、一気に神達との縁を深め、今後の活動の下地にすることに成功する。

ひとえに、腰の重い老人達が一掃された良い影響だろう。

そんなわけで、毎夜毎夜の宴会は毎日に豪華さが増し、訳の分からぬ横島を恐縮させるばかりであった。

長かった秋旅行は終わりを迎えた。

今度は年末にでも来てほしいという詠春に、さすがに年末の防衛戦に加わらなければならぬと断りを入れる横島。

ならば、我らが戦力を出しましょうぞ、若の手勢ぐらいの穴は埋めましょう、とかなんとか言い出す協会衆。

「わ、わかあ？」

「姫のいい人ならば、すでに若でございます」「」「いざいます！」「！」

力が点になる横島であったが、うれしそうに身をくねらせるコノ

「ややわゝ、まだ早いけどうれしいわ」

「姫、これからお幸せに!!」

「おしあわせに!!」「」「」

「ありがとなあ、みんな」

コノカ無双、ここにきわまれり。

なんでエヴァが静かなんだろうとみんながのぞき見ると、かなり重度の妄想中であることが判明した。

「マスターは、コノカさんを本妻にした際、横島さんの妾になって、ネギ先生の別荘を接収する計画を綿密にたてているところです。」

「そつちでもいいんだ」「」「」

思わぬ反応に驚く彼女たちであったが、それはそれでありかもしれないと思う女子多数であったことだけ記載しておく。

京野菜や漬け物や、小物などをいっぱい買ったエヴァを含めた全員が、この秋旅行を堪能しきった。

はじめは色々と考えさせられた内容も多かったが、終わってみれば京都を信じられないほど堪能したといってもいいだろう。

誰もがエヴァと横島に感謝し、また行きたいね、という話題に盛り上がる。

「横島君は、学校を卒業したらどうするの?」

刀子の言葉に横島は笑顔を向ける。

「暫くは麻帆螺にいるっすね。事務所が好調ですし、それなりに理

由あつての開業つすからね。」

「そう、それは嬉しいわね」

「・・・えーっと、それはちょっと期待していい関係って事つすか？」

「ふふふ、逆に聞くけど、それって私一筋になってくれるって事かしら？」

「あ、あたたたたた・・・。」

横島の両脇に立つエヴァと茶々丸に抓られた横島は、大いに痛がるのであった。

事務所に戻り、一息付いたところで、ポストに一枚のはがきが入っていることに気づいた。

「臨時GS免許試験のお知らせ」

六道主導で協会が実施した、今年二度目のGS試験開催のお知らせであった。

事務所はその時から、ゆっくりと本気で動き出したのであった。

第三十三話（後書き）

さて、原作にない秋旅行が終わりました。
今度は更に原作にない臨時GS試験です。

ここには当然のごとく政治的な圧力や思惑が入り組みますし、この臨時を足がかりにしようとする手勢も多く存在することになります。ちよつと軽快なのりだったのが、一気に「警戒」になります。お楽しみに。

第三十四話（前書き）

お待たせしました、第34話です！

ちよつとグダグダなのはご勘弁ください。

あと、皆さんの内心が「黒い」のは、よろしまほらの仕様ですw

第三十四話

なんつつか、ヨコシマの周りに女増えすぎ。

最初は「小娘」、なんて思ってたけど、まあ、みんな「女」だったわけ。

それなりに独占しつつ譲り合う姿勢は既に「ハーレム」の様相を見せているんじゃないか？

そんなことをエヴァに言ってみると、ゲラゲラ笑い始めた。

「そう自覚しているのは少ないが、自覚している奴らが中心に状況を作っているともいえるな。」

「たとえば、千鶴とか？」

「魔鈴とか。」

「アスナとか？」

「コノ力を忘れちゃいかん」

結構だな、つつか相当だ。

逆に、ユウナちゃんなんかは出し抜こうと虎視眈々としているけど、アキラちゃんに牽制されている感じだ。

で、アキラちゃんは妾根性の集大成みたいな感じ。

その辺が引つかかるらしく、千雨ちゃんなんかがよく絡んでいる。ユエちゃんなんかは色恋沙汰よりも術や霊能の開発に余念がないため、エヴァちゃんと結構話しているのをよく見かける。

そういえば最近白魔術にも興味があるらしく、魔鈴さんの店に結構出入りしている。

霊能に魔法に白魔法、この分野のテッペンでも取るつもりかいな。

「あ、タマモさん、ちょっと訓練につきあってもらえませんか？」

「タマモさん、よろしくて？」

愛衣ちゃんと高音は、最近私を霊動訓練装置だと思っているんじゃないか？

たしかに自分どころか精霊だって騙しおおす幻術なんてのは、正にバーチャルリアリティーだけど、それを積極的に訓練に使ってあたりがマニアックすぎる。

「大黒堂のオアゲをお土産に持ってきましてよ〜」
「いくいくいく〜！」

うまいこと使われている気もするけど、気にしちゃ負けね、うん。美人は仲良く、これ、うちの事務所の方針だし。

最近、一人で任される仕事が増えたです。

「霊視」のレベルがかなり高いということで、横島さんに直接指導を受けて「ご近所巡回」に回っていたですが、早々に「一人前の許可をもらって、一人巡回することになったです。

体よく扱われている気がするですが・・・

「どうおもってます？」

『そりゃー、だんながわるいよ。』

「だんなと言うほど身近じゃないですよ？」

『奥さん、そんなこと言ってるからバカだんなは調子に乗るんだよ』

「いやいや、最近確かに横島さんは調子に乗ってるなあとは思いますが・・・」

『そうそう、その惚れた弱みってやつにつけ込んで来るんだよ、そういう男は』

「・・・深いですね」

『男と女の関係なんざ、千年たっただってかわりやしないのさ』

「今日も勉強になったです」

『またおいて〜』

お礼にお線香をたき、一礼してから道祖神から離れたです。

ここの神様は実にわかりやすいので、割と好きなのですが、他の人にはあまり見えないのがかわいそうなのです。

直接相談に乗ってもらえれば、こんなにはばらしい「人」なのに、いや、「柱」ですね。

うん、この業界に入って得るものが多すぎるのです。

これでは不通の勉強が進まないのは仕方ないのです。

そんなわけで、横島さん。

試験結果が悪かったら「バイト禁止」は撤回して欲しいです。心から願うです。

『そりゃ奥さんが悪いよ』

ぐす・・・やっぱりですか・・・。

忠夫さんのおかげで、事務所と幼稚園のバイトをハシゴ出来ている。

私の将来について真剣に考えてくれている証拠でしょう。そんなことをしなくても、生涯ついていくのに、本当に世話焼きな性格だとおもう。

釣った魚にもまんべんなく「餌」を欠かさない性格。本当に釣られた立場には嬉しい相手だ。

彼に近づいたのは、はじめ「独占」を狙ったことだったんだけど、彼を得るための立場としては「無理」だと悟った。

さすがに多くの女性を相手にして「独占」は無理だと悟ったのだ。しかし、一歩進めた「近衛」さんを主軸にして、私も含めた共同戦線を張ることにより、彼の中の意識を塗り帰ることが出来るものと確信した。

高校生以下は「ロリ」という意識の。

もちろん、彼最大の城壁はそこではなかったんだけど、でも、私たちは彼の身内であることを認めさせることに成功した。

それは、タマモさんや愛子さんに身内扱いされていることを見れば解るだろう。

その影響でか、私にもあかされた「魔法の禁忌」。

そしてその瞬間から認められたと私は感じた。

忠夫さんの秘匿を、忠夫さんの記憶を、忠夫さんの想いを私たちが受け止めることを許されたのだ、と。

その晩は、本当に、本当に、信じられないほど幸福で、今までにないほどの至福。

・・・まあ、その後になんかそういう人間がドンドン増えたのは腹立たしかったけど、それでも私は飲み込むことが出来た。

なにしろ、後追いで現れた仲間、従者の多くがクラスメイトだったから。

つ、ま、り、彼の精神防壁の一部が崩れたの！！
ああ、なんて至福。

もちろん、来年になればそれなりの防壁を再構築しないといけな
いけど、いまはこの至福を味わいたいわ。

「あー、千鶴ちゃん。どうしたの？」

「何でもありませんよ、忠夫さん。」

「・・・そっか。」

ふふふ、この会話って、新婚っぽいわよね？

関西呪術協会から、真帆良へ人員が派遣された。

主な理由としてはコノカへの護衛増員であるが、裏の目的は真帆
良ばかり「コノカ」をかまえて悔しいという親ばか節だと踏んでい
た横島であった。

が、「彼ら」の真の目的が「横島忠夫に直接陰陽術を習いたい」
であるとは思っても寄らなかつた。

とはいえ、日頃呪符の情報をメールでやり取りをしていたメンバ
ーが真帆良にきたので、結構頻繁に呪符の構成や無駄なところ、意
味不明なところの研究会みたいなことをしていると、知識の餓鬼と
もいえるユエとミニマリアが参加してきて、内容は和洋折衷のオカ
ルト談義に進化する。

平安の時代の符知識を持つ横島と、600年の蓄積知識を持つマ

リアとリンクしたAF、そして知識量は不足しているものの「何でも知りたい病」罹患者であるユエが絡まれば、書かれた符が和紙であろうと何だるうと、実に国際色豊かな内容になってしまう。

最初書かれた内容は「万能治療符」であったはずだが、なぜか出来上がったものは「万能符」であった。

表面の式をちょっとイジるだけで、どんな符にも変わるという恐ろしいもの。

ただ、大きな問題は、いじり方が微妙すぎて「治療符」に変わったのか「爆雷符」に変わったのかが解り辛いところだろう。

遊びでダーツのように筆を投げて、一筆入れて、なにに変わったかを当てる遊びをしていたのだが、雪之丞が投げた一筆で、魔界全体の「大召喚」を起こす札ができてしまい、札遊びが禁止になった。なにげに恐ろしい男だ、雪之丞。

とはいえ、まじめな研究も進歩しており、鏡召喚札は恐ろしい成果を見せた。

召喚しが召喚した鬼や悪魔を、全く同じ戦力で召喚して削り合わせるというもので、膠着状態を作ったところで召喚者を襲撃するという流れが一般化するほど便利な札になってしまった。

表のオカルトでも鏡召喚符は爆発的にヒットしていて、関西呪術協会の大きな資金源になっていたりする。

この一事だけでも「麻帆良」派遣は無駄ではなかったと首脳陣は鼻息を荒くしているという。

秋旅行から帰ってきた横島達にとって、最も重要なのは日常であった。

日常で真帆良の霊を宿め、日常で霊能相談を受け、日常で修行をしていた。

今行われている修行は、この冬に行われる臨時GS試験に向けてのもので、それなりにみんな燃えていた。

もちろん、今度の冬に受験するのは、横島従者の中でも半分程度なのだが、合格するかしないか不安という娘は誰一人いない。

自らの試験を振り返って、俺みたいなのはいるはずもないかと笑う。

もちろん、横島は昔から強者であったと頑なに信じる雪之丞は「俺や横島みたいな突発事故みたいなやつがいなければ、ベスト32を独占だ。」と笑顔を浮かべた。

とりあえず、表のオカルトの立場をはっきりさせたい従者達、エヴァ・アスナはかなり前向きに修行していたし、同じく試験を受ける者たちも鼻息は荒かった。

そんななか、横島忠夫霊能事務所に来客がきた。

美神美智恵、美神令子、六道冥那、六道冥子。

業界騒然アンタツチャブル親子であった。

冥子ちゃんはわかる。

アキラちゃんに会いに来るのは一週間ぶりだけど、仕事が忙しくて「アキラニウム」が不足してきたに違いない。

で、六道のおばさんもわかる。

冥子ちゃんの修行を見るために、ちよくちよく来るから。

で、じつは美神さんもエヴァちゃんと会うために結構来る。

隊長も来ないわけではないが……。

この四人が一緒にくるって、絶対作意的だよな？

「・・・で、今日はどのような難題を？」

「やだわ、横島君。まるでいつも私が無理難題をふっかけてるみたいじゃない」

美神さん、自覚ないんっすか？

いや、ネタっすよね？

「まあ、令子が言われるのは仕方ないわね。でも、私はいつだって横島君の安全を考えているのよ？」

えーえー、そうっすよね？

まあ、敵ごと殺されそうになったこともあるっすけど。安全が「有る」か「ない」か、考えるだけっすよね？

「横島く〜ん、そんなこといわないで〜。冥子悲しいわ〜」

あー、ここで泣かれると、俺が悲しいっす。

おもに修繕費用的な意味で。

「も〜、冥子がお世話になってる事務所の所長さんに〜、私が無理を言うはずないわ〜」

あー、その言葉を正面から信じられるような人間関係を構築したかったっすよ、おばさん。

つつか、冥子ちゃん常駐って段階で無茶振りっすよ？

まあ、その辺はネタとして流すとして・・・。

「で、どんな無理難題を持ってきたんスか？」

「「「「「「「「「「「「「「」

・・・否定しない。

やっぱなあ・・・。

時期的に見て「臨時GS試験」関係なのは間違いないわな。
となると・・・。

「おキ又ちゃん」と美神さんを指さす。

「オカルトGメン職員」と隊長を指さす。

「で、うちの事務所員を、六道派閥に入れたい」とおばさん。

「あそびにきた」と冥子ちゃん。

「「「「あつたり」「「「「

嬉かねえって。

まあ、解るぞ。

おキ又ちゃんを正式なGSにするためには、現行ルールじゃきつ
い。

でも性格的に神通棍を持たせるわけにはいかない。

しかし、ここの劇的な何かが必要。

さすがの美神さんでも、都合のいいアイテムはなかったらしく、
それだったら、ということでも麻帆良に交渉にきた、ということころだ
ろう。

で、隊長は、今回のGS試験は「受かるため」の試験だと位置つ
けられていると判断し、うまくいけば自分の手ゴマにGS資格者を
増やせるものと判断した。で、その枠を一番持っていそうな俺に交
渉にきた。

加えて六道のおばさんは、今のところ一番ホットなオカルト関係者である麻帆良勢を押さえて、六道の派閥の拡大をしたい、と。ついでに冥子ちゃんは、みんなでアキラちゃん達に会いに行くなから私も、ということでもいいですかね？

「……あ、あははははは」「」「」

よし、全部当たったばい。

あははは……。

「なんで、やつかいごとを持ってきますか？」

「そりゃ、横島君なら何とかしてくれると思うから、かしら？」

隊長のその人ことに、頷くみなさん。

つづか、冥子ちゃんは厄介ごとじゃないからいいよ？

「ええ、私だけ仲間外れ？」

あー、頷いてて結構ですよ。

事務所の皆さんも避難はいりませんよ。

まあ、おキ又ちゃんにはGS免許を取るならコッチから話を振ろうと思つてたし、うちの事務所の娘がGSになったら、六道グループの一端にかませてもらおうと思つたので、さほど無茶な話ではない。

ただ……。

「合格枠かオカルトGメン人員をよこせっていうのは、結構法律的に問題有りませんか？ 隊長。」

「ええ！ 私だけ答えが渋くない！？」

合格枠なんてものは貰っていないからこそその修行だし、実際の試験に向けての模擬戦だ。

となると、枠をよこせというからには、トーナメントで当たったときに手加減もしくは負けるということに相違ない。

真っ向からお断りだ。

となると、オカルトGメンに人員を、となると……。

無理。

「隊長、ピートは何で高校に入ったんすか？」

「……あ。」

この人は無茶苦茶な戦略を進めてたくせに、最近では抜けてるなあ。まったく……。

「……うううう、私だけひどいわ……。」

まあ、六道のおばさん経由で、女学院の生徒の研修なんかを組んで貰えば、就職希望者とか次女三女の腰掛け先になるんじゃないっすか？

「……!! 先生!!」

「も、美智恵ちゃんはげんきんね」

それはエヴァからの相談で始まったのであった。

「どうやら坊やは今の自分が伸び悩んでいると思っているようだ」

基本、ネギパーティーの動きについて、徐々に独立性を高めよう

と思っていた矢先の話だけに答えに窮していた。

むろん、あの年であの強さで伸び悩みだなんて言葉自体が幻想と
いうかバカなのだが、それに気づけるほどネギの視野は広くないし、
周囲に比べて自分の実力が高いと妄想できるほど甘い現実に囲まれ
ているわけでもない。

挫折させすぎたか？　と思わないわけでもないが、魔法学校卒業
までのダダ甘環境を考えれば、間違いなく薬になっている。・・・
のだが、横島自身がそれを知るわけでもない。

「・・・で、何かまずいことに手を出しそうだとか？」

「・・・闇の魔法、だ。」

「ああ、エヴァちゃんのオリジナル魔法？」

「そうだ。適正のない者には暴走の上死亡と言う結果が出るものだ
が、あの小僧には適正がある。いいや、ありすぎる」

適正があると使える、というものではなく、使えるとどんどん「
進行」して、末は魔族か魔物か大怪物、という運命らしい。

基本、人間や普通の魔法使いが使う手ではない、というのがエヴ
アの意見だった。

とはいえ、そういう術ってどこかで聞いたことがあるなあー、と
視線を巡らせてみて気づく。

「・・・魔装術、か。」

「ふむ、なるほどな。」

エヴァもそれに気づき、感心してうなづいた。

逆に、だったらいいか、とかいう軽い気持ちまでわいてきた横島
だったが、失敗した人間も知っている、というか思い出した。

「オカマ」と「チンピラ」

名前は思い出そうとも思わないあたり、ひどい男だった。

「失敗しても、まあ、魔物人生もおもしろいだろ？」

「そのへん感覚が解らんよ」

エヴァは肩をすくめたが、実際のところは「アリ」かもしれない
と思っていた。

ネギ程度の適正ならば早々に浸食はされないだろうし、浸食され
ているところをリアルタイムで観察できれば手の打ちようもある。

もしこれが魔法世界への旅立ち前で自分が見送るという立場なら
止めていただろうが、春までじっくりと育てることが出来るのだ。

さらに、横島忠夫という心強い「経験者」がいる。

加えて、伊達雪之丞という心強い「体現者」がいる。

「ふむ、悩むほどではなかったかな？」

「そうなんだがなあ、そろそろうちのパーティーから一人立ちを経
験させたかったんだよな。」

「・・・それは悩みどころだな。」

「たしかにエヴァちゃんはネギの師匠だから、まあつきつきりはあ
りなんだけど、GS試験もあるしな。」

ふむ、と腕を組んだエヴァは一つのことを思い出す。

それは己が滅された後でも「闇の魔法」を継承する人間気手ほし
いという思いで作った、浅ましいまでの魔導書。

仮想人格の自分が導く、そんなアクションがおもしろいと思った
エヴァだった。

対GS試験用の練習となると、ふつうは「対戦」になるんだけど、基本、対人戦闘に置いて横島事務所勢の戦力は無敵であった。

ゆえに、細かな霊視による分析が行えていれば、早々負けることはない。

もちろん、呪術系での戦闘経験が不足していることから、即実行性の呪いや幻覚などには弱いので、そちらの特訓としてみたのだが、引っかかりすぎて申し訳ないほどであった。

AFによる能力で横島が「小笠原エミ」となって呪術を行使したところ、明らかに初心者レベルの呪いもかかってしまっただけで、事務所員が続出した。

呪い世界のニューウェイブ、横島忠夫のわら人形をモテ男が避けられないのはいいとして、オマジナイ程度も耐えられないのはおかしい。

何か原因でもあるんだろうか、と首をひねる横島。

そこにババンと登場したのが「小笠原エミ」そのひと。

「すべては聞かせて貰ったワケ！」

まあ、彼女も「合格枠」の融通を交渉にきたわけだが、そんな細かいことはどうでもいいらしい。

事、呪いに関して業界トップの実績と自信がある彼女が調べると、すべては学園結界と認識阻害の魔法の相乗効果によるものと判明した。

危険や異常に鈍感になる魔法のせいだ、ふつうはレジストできる呪いを危険だと感じる事ができず、簡単に引っかかってしまうぞうだ。

「……あの妖怪爺めが……。」

エヴァのつぶやきを聞くまでもなく、事務所全員が頭痛に耐えるかのような仕草。

「逆に、学園の外から呪いを仕掛けたら、魔法先生全滅か？」

雪之丞の言葉に、誰もが肝を冷やす。

そう、この事実が外に漏れれば、もう、まずすぎるのだ。

下手をすれば魔法先生全滅の上で、大戦争という状態にもなりうる。

こうなっては結界を何とかするか、呪い対策をするしかない。

「一番手つとり早いのは、お札つすかね？」

「まあ、手つとり早いけど、難しいと思うワケ」

「なんでつすか？」

「・・・人より秀でたる魔法使いが、人の技術である霊符をしいたがるか、というところなワケ」

「・・・あー、なるほど・・・。」

とはいえ、うちの事務所の子は持たせるしかないなあ。

あと、高音と愛衣ちゃんは、必須。

そんな風に言う横島を、エミは結構まぶしそうに見ていた。

「横島、あんた、成長したワケ」

「そうっすか？ これでもかなりみんなに助けて貰ってて情けないんすけどね」

「そういう事を平然といえるのが、成長って事なワケ」

「それで言えば、タイガーだって成長してるでしょ？」

「亀の歩み、のほぅがまだ早いワケ」

「え〜？」

と、そういえば……。

「なんでタイガーのやつ、事務所の玄関先で呆然としてるんすか？」
「……一応改善したとはいえ、女性恐怖症はまだ完治してないワケ」

「あー、なんつうか、その、頑張れ。」

哀れ、タイガー無惨。

というわけで、簡単な呪い返しの符をエミさんと作っていたら、関西呪術協会組が乱入してきて大盛り上がり。

エミさんという最強の呪い師と呪術協会の最若手ががちりスクラムを組んで作り上げた符は、それはそれは強力なものになってしまったとき。

第三十四話（後書き）

いかがでしょうか？

こんなかんじで、徐々に間合いを詰めていくつもりです。

まあ、ほら、本編のほうが「二次創作」真っ青の内容でブッチギリなので、ちよっと様子が見たいな」とかw

第三十五話（前書き）

えー、試験的に視点の合図を入れました。
そんな試験の話です。

あと、今回の話は「偽者」さんのアイデアをいただいたところで思
いつきましたことをお礼申し上げます。

皆さんの友愛で「よこしまほら」はできていますw

第三十五話

くサイド 三人称

表情は追いつめられ、気配は戦場にあるかのごとく。

ネギは今、死線に立っていた。

くサイド ネギ

始まりはやはり、麻帆良に来たことです。

今考えれば恥ずかしいことですが、僕はあのころ自分が万能だと思っていました。

学校では飛び級を重ねていましたし、魔法はトップクラス。

周囲の大人の方々にもほめられ、期待される、正義の魔法使い候補、そんな自負があったのです。

ああ、手元にタイムマシンがあるのなら、カシオペアが使えるのならば、あの頃の僕を殴りつけて教え諭したいぐらいです。

・・・まあ、聞かないし理解できないんでしょうけど・・・。

はじめは、本当にはじめは、魔法使いの修行としてしか考えていませんでした。

でも、時間が進むにつれ、「教師」をする事の難しさ、魔法修行の難しさに打ちのめされました。

僕は、僕は、本当に何でもできるのだと自分を過信していたんです。

魔法も学校を出た後で修行とちよつとすれば、すぐにお父さんに追いつけると思っていましたし、麻帆良の生活も今までの努力を考えば、簡単だとすら思っていたのです。

でも、それは大きな勘違いで、とても恥ずかしいことだったので。

僕に必要なだったのは魔法の攻撃力でも成績でもなく、人を助けることができる力と、周りの人々と協力できるだけの人間関係を築ける心、・・・そして仲間。

僕はすべて足りなかったことを感じたそのとき、手遅れでした。

あの七日間の決戦で、僕は生徒の皆さんとともに戦うことは出来ても、横島さんや伊達さんとともに前線に立つことは出来ませんでした。

力が足りない、心が足りない、そして、自分が足りない。

だから僕は、エヴァンジェリンさんに力を求めました。

・・・そうすると、なぜかお父さんとお母さんが目の前に現れました。

・・・・・・・・・・なぜ？

くサイド エヴァ

なんというか、こつ、もうちょっとバカにならんもんかな？

追いつめられるとそのまま追いつまる。

戦うときには一本やりの力技。

魔法世界で振り切れたかと思ったが、全く余裕などなかったようだ。

正直、正面から「強くなりたいです！」と聞いたときには正気を疑ったが、ラカン式強さ表による自分の位置を示して、その場所では不満なのだ、と改めて表明した。

実にはかばかしい話だ。

今、坊主の年齢でその強さを手に入れようと思えば、未来をいずれ失うほどの過酷な経験と修行を必要とする。

さらにいえば、寿命ある身で手に入れられる強さではない。

もちろん、想像を絶する経験と修行により手に入れた超越者達はいる。

少なくとも私もその範囲に入るだろうが、それでも600年の蓄積と研鑽、そして真祖であることのアドバンテージと言い切れるだろう。

それをわずか十歳で到達しようとはおこがましいにもほどがあるが、坊やはみてしまったのだ。

それに匹敵する強さを。

高校生でありながら「最強」のカテゴリーに踏み込んでいる人外達がいるのを。

彼らは常に、自分達よりも遙かに強い相手と戦い続けており、そして負けない戦いを続けていた。

それは「子供」である坊やにとって、実に分かりやすい目標だろう。

そんな存在と毎日のように打ち合えるのだからテンションもあがる。

が、そのテンションも続かない。

なぜならば、いつこうにその差が縮まらず、一向に勝てる気などしないからだ。

どんなに手が届きそうに見えても、どんなに手に入りそうに見えても届かない幻影。

これほど心を疲弊するモノはない。

故に、忠夫は早々にネギパーティーを一人立ちさせようとしたのだろう。

しかし、忠夫のやさ滋賀がその時間を先延ばしにし、そして疲弊は疲労となって亀裂を生んだ。

この亀裂により坊やは確信する。

「自分に必要なのは「力」だ」と。

いかにも少年マンガ的思想だといえる。

忠夫とは真つ向から反対に向いた発想だ。

近く見えるように見えて伊達雪之丞とも方向があわない自爆発想であるともいえる。

力を手に入れるために力を手に入れる。

力を越えるために力を付ける。

方向は間違っていないが、やり方が「脳筋」すぎて泣けてきた。

始めてみたときは「なんでこんなお坊っちゃんナギの息子なん

だ？」と思ったが、この脳筋具合はどうにもこうにも「息子」であることを感じさせられた。

学校の成績も魔法も、脳の筋力に任せて振り切ったのだろう。

ああ、もう少し「ばか」になれないものか？

・・・そうか、本家を呼べばいいんじゃないか？

「忠夫、三者面談だ」

「・・・え？」

くサイド 横島

エヴァちゃんの一言で始まった「ネギ修行会議」の参加メンバーがスゴすぎた。

学園側からは魔法先生関係者は抜きだけど、エヴァちゃんと俺と雪之丞。

親として、アリカ女王と王配ナギ。

何故か潜り込んできた美神さん。

で、学園長^{めらりひびん}。

これで終わればまだよかった。

ナギがいる時点で大騒ぎなのに、アリカ女王の配下は集まるは、こんなお祭り騒ぎの仲間外れはイヤだと帝国第三王女まで来るわ・・・。

「よお、坊主の改造計画だつて？ 一枚かませろや」

とか伝説の傭兵だの鬼教官だのが集まってきたからだ。

この光景をドキュメント番組にさせてほしいとかいう話を魔法世界の放送局が来たので正面からお断りしたわけだが、GS協会のお偉方の来訪記念外交は断りきれなかった。

悔しいが、GSでやっていく以上、最低限の権限を認めてやらないと身動きがとれんし。

ああ、なにもかも貧乏が悪い……。

と、そんなわけで、三者面談のはずが「魔改造」会議へとすり替わるところだったんだけど、さすがに母親が「我が子を何者にする気じゃ!!」と切れて中断となった。

助かったのやら何なのやら。

くサイド アリカ

深夜にわたるような執務にキリがついたこのごろ、思うのは息子のことばかりだった。

放置状態であった10年弱でかなりイビツに育ってはいたが、それでも可愛い我が息子。

写真や手紙だけでは我慢しきれない。

ああ、この手で抱きしめたい。

そう何度も思っていたところで、最優先事項のタグの付いた手紙が来た。

宛先は「スプリングフィールド夫妻さまへ」。

差出人は「横島忠夫・エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」。

見た瞬間から心躍るものであることを確信した私は、ペーパーナイフを踊らせ、中身を一気に読み下す。

その内容を、その込められた思いを見取って私はほほえんでしまった。

まったく、やつらは本当に私が望むものをくれる。

思わずニヤニヤとしていたら、いつの間にか現れた我が騎士も手紙をのぞき込んで笑う。

「なんだよ、これって本当に親らしい話だよな？」

「そうだな、我が騎士。国主ではなく「母」として話を振られては対応せぬ訳にはいかぬよな？」

「おう。国が傾こうとも、「父」として立ち会わせ」

にっこり微笑んだ私たちは、その場でハイタッチをした。

「では、我が騎士よ。その時間を削りだすために「10徹」だな。もちろん魔法球でだが。」

「・・・げっ」

ふふふ、至らぬ親をいやらしく扱ってくれる友達に答えねばならないのだから、少し無理をさせるぞ、我が騎士よ。

その後、魔法球まで使用して一月分の執務を終えた私たちは、旧世界への旅支度を急いだのであった。

何じやるう？ きわめて不当な扱いを受けている気がするのぉ？

それはさておきじゃ。

昨日、横島君とエヴァから来た書状をみて驚いた。

何しろネギ君の修行の方向性を「親」と話し合うというのだから彼の親といえば「女王」と「王配」。

そんな親を呼びだしてどうにかなるのかと思いきや、二人から「親として来訪することをご許可いただきたい」という書状まで届きよった。

加えていうなら、MM主席筆頭外交官だの伝説の傭兵だのからも内緒で遊びに行くぞ、なんていう書状まで。

・・・やつらは麻帆良を戦場にするつもりかのお？

まあ出会ったとたんに殺し合いになるような連中ではないが、それにしたって・・・。

ああ、まあ、そうじゃな。

すでに本国が崩壊しておる麻帆良のパトロンの一人である女王様からのご要望じゃ、動くしかあるまい。

「かぁ・・・、予算もきついし、もめ事も多い。片づいた事件よりも後かたづけの方が多いのも「GS」故かのお？ 横島君よ」

くサイド ネギ

えー、なぜか三者面談が行われるという話だったんですが、いつ

の間にか「ネギ（ボク）改造会議」になりました。

議事進行は横島さんです。

初めは現状の戦闘値と技、能力なんかを書き込まれ、そして追記事項が書かれます。

改めて書かれると、実はいろいろと認めてもらっていることに気づきました。

そう、僕が勝てないのは、劣っているのが力ではなく、その戦略や心だっただんです。

ええ、今確信しました。

絶対の確信です。

そう、絶対！！

「だから、そんな死にそんな修行イヤですー！！！！」

「！！！！はははははは！ 遠慮するな！！！！」

「無理ですよ、無理！ こんな量の修行なんて無理に決まってるじゃないですか！！」

「愛子空間がるしなあ・・・。」

「死んじゃいます、絶対に死んじゃいますう！」

「即死じゃなけりゃ、俺が何度でも直しちやるぞ？」

いやー！！！！！！！！

くサイド アリカ

我が息子が、まるで生娘の如くに叫び声をあげている。
バカ大人どもが子供をからかって遊んでおるわ。

「しっかしよお、忠夫。ネギも結構鍛えてるのな？」
「おうおう。俺も気になってたんだ。どんな鍛えかたしてんだ？」

我が騎士とジャックの言葉に、首をひねる忠夫。

「ふつうだぜ？」

「ふつう？」

「ふつうに、生きるか死ぬか、かな？」

「ああ、ふつうだ（笑）」

どうにもこうにも、バグだな、こいつら。

こんなバグに憧れるというのだから、我が息子もバカというか何
というか。

もちろん、そこが可愛いのだがな！

「うはははは！ どうしたどうした！」

「いやー！ー！ いたいいやー！ー！」

なんというか、ただただ逃げまどう姿には胸が詰まる思いだが、
忠夫曰くこれは擬態なのだそうだ。

相手の隙を伺っている段階なのだそうで、瞬間にでもそれを見つ
ければ、大反撃が始まるという。

が、その隙がなければ単純に逃げるだけだがな。

とはいえ、リカード。そなた、嫌な顔になっておるぞ？

「どうしたどうした、英雄の名が泣くぞ！」

「そんなの泣かせておきますよ、ええ！ 僕は勘違いしてたんだ！

！ 正義の魔法使いじゃなくて家族が守れるお父さんになれればい
いんだ！ きれいなねーちゃん嫁にもらって退廃的に生きるのが夢

なんですよー!!」

「「「おお、いい夢だ」「」

三バカ（ナギ・ラカン・忠夫）が、いいえ顔で笑っている。

「せめて、気絶するなら宮崎さんの膝枕希望!!」

結構元気なことを叫びながら吹っ飛ぶ我が息子。

・・・んー、なんだか忠夫っぽくなってきたのではないか？

「坊や、どうした？ 強くなるんだろ？ 老師に比べれば大したところあるまい？」

「僕より絶対的な力の差がある人と三倍以上の力の差があったら逃げていいと、神様もおっしゃいました!!」

ずいぶんと碎けた神様だな？ 我が息子。

「で、どんな神様だ？」

「横島さんお友達の「キーヤン」です!!」

なぜだか真祖が膝から崩れて倒れた。

「あいつ、絶対イメージを守るきないよな？ 忠夫」

「まーな、キーヤンって結構はじけてるしなあ・・・。」

「忠夫、きーヤンってだれだ？」

忠夫は我が騎士にささやく。

すると、何故か我が騎士も膝から落ちた。

サイド アスナ

ひさしぶり、というか半年もしないうちに再会というのも感動しきれないというかなんというか。

ネギのご両親+バグキャラフェスティバルとなった横島さんの事務所には、たぶん政府が聞いたら泡を吹くほどの有名人が集まっている。

まずはネギのご両親、アリカ女王にナギ。

これだけでパニックなのに、これに加えて伝説の傭兵ジャックラカンにリカード筆頭外交官と、この時点で魔法先生達はパニックだった。

高畑先生も懐かしそうにナギと話しているし、アリカ女王はうれしそうにネギを撫でていた。

そんな心温まる光景の背後、ホワイトボードでは横島さんとエヴァちゃん、そしてラカンさんとリカードさんがニヤニヤしながらいろいろと書いていた。

「つまり、闇の魔法は、「魔装術」と同じ地平線にあるってことか？」

「まあ、俺の理解はその通りなんだけど……。」

「だけど？」

「ぶつちやけ、おれ、闇の魔法自力でできるし」

「……ああ、バグだしな」

「なんかおまえ等腹立つな、なんだかとっても腹立つな!？」

どこからか引つ張りだしたわら人形をみて、ラカンさんもリカードさんも身構えました。

横島さんのわら人形は有名で、何の媒体もなしに呪えることで「

呪いの固有魔法」として魔法世界では有名でしたから。

「ま、忠夫なら出来るだろ？ 坊やより素養が高い」

「そ、どうだよな、うん。」

「ああ、やはり素養だよな、うん」

そうなんだ、結構横島さんって「太陽」のイメージなんだけどな。

「そういうがな、神楽坂。忠夫は坊やなんか目じゃないほど闇を背負っておるぞ？」

「・・・そっか？ 俺も男の背中を背負ってるなあ・・・。」

「主にエロイ事ばかりだがな」

「やっぱりそういう落ちかよ、どちくしょー！ー！ー！ー！」

血の涙を流して悔しがる横島さんだけど、私にはちょっとわざとらしく見えた。

たぶん、千鶴さんがみても同じだろうと思う。

ともあれ、ネギの無駄に強くなりたいたい主義は、強力すぎるPTAにより潰えたのでした。

「・・・横島さん」

「なに？ アスナちゃん」

「老師のところに修行に生かせればてっとりばやかったんじゃない？」

「・・・それじゃあ、ネギ、死んじゃうから」

「・・・ああ、なるほど」

納得しました。

サイド マナ

最近の刹那は隙があるが、隙がない。

見せている隙すべてが罠であり、手痛い反撃が準備されていた。

私もあの罠のワンダーランド、通称「横島ランド」にはお世話になつているので、それなりに研究しているが、刹那ほど自分の剣技や戦略に組み込んでいる者も多くないだろう。

さすがに会話や仕草には仕込んでいないが、もしそれが可能になれば「傾国傾城」が実体化することだろう。

まあ、照準は一人に向いているので、そんな事をするまでもないのだろうけど。

「龍宮、そろそろ接敵だ。」

「わかった、先行してくれ」

「ん。・・・今日はちよつと試したい技があるんだ。先にそれを試させてくれ」

「おいおい、敵もわからず随分余裕だな」

「？ 敵がなにであろうと、自在に対応すればいいだけだろ？」

これが以前の刹那の吐いた台詞なら警告するところだが、今の刹那は実に自然体で無理がない。

そう、この程度はふつう、になっているのだ。

まったく、どんな戦場を潜り抜けてきたのやら。

そうこうしているうちに、二十に届く召還鬼達の前に行き着いた。その瞬間で五体の鬼が、上半身とか阪神に分かれて飛ぶ。

ひるむ鬼の三匹が縦に切られる。

それまでの時間はわずか三秒ほど。

私は本当に驚いた。

が、驚いてばかりでは意味がない。

召喚鬼が還元された際の「光」を元に、私は術者を特定して狙撃した。

「がっ！」

結構離れているつもりだが、声が聞こえるとは驚く。

いや、狙撃着弾と同時に刹那が切り伏せていた。

『龍宮、どうした？ 援護のタイミングが合っていないぞ？』

「すまん、刹那。おまえの技量が上がらすぎてな、見ほれていた」

『ふん、軽口はかわらん』

無線の向こうで苦笑いの刹那。

切り伏せた術者に封印措置をとりながら、危なげなく会話できるのだから、やはり別人のようだと苦笑いの私だった。

サイド 横島

学園防衛のラインで、霊能者が増えているのが気になった。

比率的には大したことはないけど、明らかに「GS」崩れでございというバカが増えた。

魔法使いの一つや二つをかつさらって、うっぱらおつと言つ流れらしいことを六道家からの情報で知る。

では、何故「今」なのか？

簡単な話、今のところ「秘匿されたオカルト」は表面化していないので、法整備が追いついていない。

この隙に色々とやってしまつて、売買のルートを確立してしまおうという事らしい。

まあ、なんだ。

「半殺しじゃ生ぬるいな」

「とりあえず、男は不能、女は胸ゼロだな」

俺と雪之丞の言葉に、事務所の人間と魔法先生が背筋を凍らせる。もちろん俺たちは、実行有るのみということで、専用の呪符まで制作を始める。

「わ、若。さすがにそれは……」

関西呪術協会の若者が真っ青な顔だったけど、正面から言わないといけない。

「なにも、削ぐとかモグって言うてるワケじゃない。無期懲役だよ、せいぜいね」

「おめえら、自分の嫁子供がヤツラの手に落ちても同じ事がいえるのか？」

雪之丞の意見で、とりあえず、反対意見は消滅した。

中でも愛妻家で知られる魔法先生は「・・・消すか」とか呟いたのが怖い。

そんなわけで、霊的防御上昇こそが対抗策であることを納得させて、予想して反対意見も無く、アミュレットを持つことを了承させることができた。

しかし、やっぱりあっち側はきな臭いな。

どこまでやったら洒落にならないかをイリーガルなバカにやらせて探ろうとしてやがる。

そろそろちよっと痛い目に合わせねえとだめかな？

第三十五話（後書き）

さて、いつもの調子の話に「サイド」を追加した実験話でした。

次回はそろそろGS試験に入ります。

おたのしみに。

第三十六話（前書き）

テスト投稿第二です。

元の形式に戻してみつつ、話をいざりました。
実はこっちのほうが楽なので、前話に戻そうかと考えています

第三十六話

最近ネギ先生が変わった。

にこやかな笑みも、愛らしい姿も変わらないのだけれども、なんというか、男らしくなられた気がする。

この雪広アヤカが言うのだから、間違いない。
もちろん、裏付けもある。

先日行われたというネギ先生の進路相談で、「宮崎さんの膝枕で気絶したい」と発言したというのですから。

「というわけで、横島さん、死んでくださいませ」

「なんでや!？」

決まっているではないですか!!

あの、あの、あの、宮崎さんの膝の上で気絶したい?

明らかに横島さんの横島さんの影響に決まっているではないですか!!

「いや、ありえんって。俺は、むちむちプリンプリンの……」

「エヴァンジェリンさんの膝枕で耳掃除をもらっている姿勢では説得力がありませんわあ!!」

「……あー、これは、ほれ、な?」

「忠夫動くな」

「……うへーい」

「ご覧なさい!!」

合法ロリの急先鋒であるエヴァンジェリンさんに籠絡された横島さんに影響されたネギ先生は、凹凸の少ない女性にあこがれを……

！！

「あー、とりあえず、ネギはマザコンだぞ？」

「そうですの？」

「で、ネギの母親は金髪巨乳美人系だ。よかつたな、雪広あやか」
「・・・エヴァンジェリンさん」

ああ、なんて朗報！！

マザコンのネギ先生は、容姿的には私のアドバンテージ！！
まさに朗報！！

「とはいえ、容姿で言えば雪広に引かれるはずのネギが、なぜ宮崎のどかを指名したか、そこが問題なのだろう？」

「その通りですわ、エヴァンジェリンさん！！」

「事は簡単だよ、雪広あやか。ネギにとって、宮崎のどかは癒しなのだ。ゆえに、求めてしまうのだろうよ。」

がぁー！！！！ん！！

私は、私は、ネギ先生の癒しに足らぬと、そう仰いますの？

「貴様は、自分が癒されるばかりで相手のいやしなど考えておらぬだろ？　そこは過去私も陥った穴だ。」

もう一つ、がぁー！！！！ん！！

なんと言うことでしょう！　この横島さんがエヴァンジェリンさんと寄り添っているのは、そんな理由があったとは！！

わたくしは、横島さんが「ロリ」になったのだとばかり思っていましたわ！

「わいはロリちゃうわぁー！！！！」

「忠夫、動くな」

「・・・うへーい」

なんとということでしょう、なんとということでしょう！

あの横柄で尊大なエヴァンジェリンさんが癒しを、横島さんに癒しを注いでいるなんて！！

今日は実に勉強になりましたわ！！

そう、与える愛が全てではない！

いやしにこそ鍵がある！

おほほほほほ！！

「・・・あー、もうええか？ 千鶴ちゃん。」

「ええ、もういいですよ、忠夫さん」

あー、かたこつたなー、と体を起こそうとしたら、エヴァちゃんに押さえつけられた。

「動くな、忠夫」

「いや、ほら、もう演技は・・・」

「・・・せつかくだから、少しこのままでいさせる」

「・・・うへーい」

思わず頭を預けると、なんだか嬉しそうに微笑むエヴァちゃん。そんな顔を見ると、まあいいかと思ってしまう。

「つぎは、うちや。」とコノカ。

「うふふ、私も参加しますわね。」と千鶴。

「あー、横島君、わたしも！」愛子まで。

「なんなら愛子さんの空間で時間無制限でどうです？」

「あ、千鶴さん、それナイス！」ユウナちゃん部活は………
？

なんや、癒されるはずが疲れるって解せないなあ。

お父さんやお母さんが来たとき、いろいろと喋ってしまいました。そう、その、宮崎さんの膝枕で気絶したい都下なんだとか。アスナさんからは「あんたも男だったのね」と笑われたけど、お母さんからは「その宮崎さんとやらを紹介するように」と言われてしまいました。

とりあえず、帰国前にご紹介したんですが、お父さんは頷くばかりでお母さんは不機嫌そうでした。

「あの、ほれ、私に似てる方はどうした？」

「いいんちよさんですか？」

「・・・せめて名前で呼ばぬか。」

「雪広あやかさんですか？」

「従者であるう、ことう、フレンドリーにだな・・・。」

お母さんが何を言いたいのかがわかりません。

それはさておき、そのあとでいいんちよさんを「あやかさん」と呼んだところ、大量の鼻血を噴出して倒れてしまいました。

・・・本当に何が起きているんでしょう？

実に疑問です。

「ネギ、あんたってそういう人間よね」

「え、何か変ですか、アスナさん？」

肩をすくめるばかりのアスナさんでした。

・・・村上夏美です。

モブモブといわれている私ですが、人生主役になりたいわけではなく、それなりに幸せならばいいかなーと思っっている一般人です。

「夏美、気合い入れるワケ！」

・・・村上夏美です。

そんな私でも、「あなたには光輝くものがある」と言われれば舞い上がるわけで。

そんな自分に絶望中の中学生です。

「夏美ちゃん、いくですジャー!!」

・・・村上夏美です。

今私は、なぜか小笠原エミさんのところでアルバイト中で、なぜか幽霊がいっぱいいます。

「・・・さすがね夏美。その隠密性、恐ろしいほどなワケ」

「すごいですジャ、夏美ちゃん。感知能力が高いA級霊まで素通りですじゃ!!」

・・・村上夏美です。

幽霊にすらモブ扱い。

・・・泣いていいですか？

「バカを言うんじゃないワケ！ 幽霊や妖怪に気づかれることなく近づいて、正面からお札をはれるだなんて、これ以上にGS向きの才能はないワケ！ 今すぐにもうちにスカウトしたいぐらいなワケ！」

「でも、この才能は悲しすぎますっ!!」

「横島が魔法もプリントしてくれたんだから気にすることないワケ」

「すごい才能ですじゃ。GSどころかオカルトGメンだってねらうほどの才能ですじゃ。」

「それって、目立たない一般人ってことですよねえ!?!」

「違うワケ。」

小笠原エミさんは、ほほえみながら私に説明してくれるんだけど、主役の才能じゃないよねえ。

「あら、女はいつだって主役なワケ。それに気づかないうちは子供子供。」

・・・生涯子供な気がする・・・村上夏美です。
というわけで、ボスっぽい幽霊に「えいつ」。

『な、どこから攻撃が・・・』

なんででしょう、滝のように涙がでできます。

横島さん、私のこんな才能を見つけたことを恨むのですよ、ええ。
何でもいいから一番がほしいとか叫んだ過去の自分も恨むのです
よー！

ぐぎゃー！

「エミさん、夏美シャンが暴走モードですじゃー！」

「・・・勝ったワケ」

「それどころじゃないんですじゃー！」

「タイガー、肉の壁！」

「ぎゃー！」

「ぐぎゃー！」

人生そのものに疲れたという顔の夏美が帰ってきたのを迎えて、本日の営業はおしまい、となった。

エミさんはスゴく夏美をかっていて、学校卒業したらうちのオフイスに是非とも来てほしいと熱心に忠夫さんを籠絡していたりする。鼻の下を伸ばしきった忠夫さん。

でも「それは夏美ちゃんが決めることやから」と正面から断る姿が格好いい。

夏美がそんな才能を見せたのは、先日のネギ先生魔改造会議の時。私の手伝いでお茶を出していたのですが、その存在にだれも気づかず、心霊現象扱いだったときに端を発します。

で、いろいろと横島さんやエヴァンジェリンさんが調べたところ、独自の呪式で「認識阻害」を発生させていることが分かった。

これを意図的に定着させることで、目の前にいても誰にも気づかれないという荒技になるそうだ。

長瀬さんなんかは羨望のまなざしを向けていたけど、本人は「最強に目立たないだけじゃない！」と絶望していたのが何とも。

が、周囲の英雄たちの絶賛で調子に乗って「一番になる」宣言をしたために、その場で魔法として定着させられ、さよちゃんを越える隠密魔法使いとしてデビューしてしまった。

本人は不幸そうだけど、一部の人間からは羨望が集まっている。

忠夫さんなんかは「・・・ええなあ。」とか小さくつぶやいているし、長瀬さんは「拙者に転写できませぬか、横島殿」とかカブリツいている。

ネギ先生もその有用性が気になるらしく、研究を始めてるし、夏美を中心に、にわかには活気づいてきてしまった。

まあ、やっぱりこつち側にきたわねえ。

「ちづねえのせいだから!!」
「あらあら」

もう、夏美も素直じゃないわね。

屋号「横島屋」。

これが我々が東で活動するときの正式名だ。

若、横島忠夫様の指揮の元、我々が開発した呪符や霊具を販売する際の名前でもある。

多彩なる才能を示す若は、西洋魔法やオカルト術式を呪符にまとめることを得意としているため、きわめて手広い種類の商品を扱っている。

先日試しに作られた「魔法の矢」を呪符化したものなど、オカルトGメンから大量発注されて、本部もパニックになったほどであった。

外貨獲得の一因であった呪符制作が、最近では本部での獲得予算の九割にまで拡大したおかげか、若をお嬢様の夫と迎えることに異論はない。

というか、長老たちは既定事項として捉えており、内外にも触れ回っているぐらいだ。

まあ、そうやって外堀を埋めるのはいいことなので、我々も協力しますが。

何しろ若、オカルトでも魔法でも英雄ですが、我々にとって別の

面でも英雄なのです。

そう、「タミヤカップ 三年連続優勝」の英雄、浪速のペガサスその人なのですから！！

さらに、あの伊達雪之丞さんは永遠のライバルとまでいわれた「
ダテ・ザ・キラー」その人！！

燃えるでしょう、燃えるでしょう、燃え上がるでしょう！？

関西に黄金三期をもたらした英雄、その人の元で物作りに集中できる快樂、仲間内も噛みしめていたりします。

「おお、この呪符ええな。」

「ありがとうございます、若！」

照れながら若は笑ってくれる。

「でな、これを試作してみてほしんや。君ならかなりのレベルで
きるやろ？」

「・・・これは？」

「夏美ちゃんの認識阻害を呪符化したもんや」

「あの、隠密魔法の天才の！！」

すばらしいことだ。

あの魔法世界の英雄たちの認識すらすり抜ける天才隠密魔法使いの魔法を呪符化する若もスゴいのだが。

「これを販売するのですか！？」

「いや、これは出回るとまずい類やから、マーケティングして本部倉庫とエヴァ倉庫行きやな」

「・・・少し残念ですが、仕方ないですね。」

まあなあ、といいつつ、いい呪符は作らずに入られない。そんな呪符屋魂を分かってくれる若には感謝の念が絶えない。

「で、や、「あれ」は出来とるか？」

「はい、人数分出来とります」

「そか、ありがとな。」

「いいえ！ 無茶な仕事を振ってくれる方が、呪符屋冥利に尽きるつてもんです！！」

「あははは、わかるなあ、それ」

さすが若、我らの想いを汲んでくれる！

ソコに痺れて憧れるう！！

呪具は全員分用意できた。

奥の手も全員分できたという。

本番一週間前に間に合ったのだからいうことはないだろう。

六道から参加社用の書類も届いたし、GS協会からも色々打診がきた。

まあ、何人が落ちるかもしれないが、そこは公正な勝負だからあきらめてほしい、という内容だった。

つまり……

「そこそこ強いGSを潜入させて、俺たちの何人かを落とし、公正な試験だったのですよ」とアピールしたいらしい」

「プロ潜入させて、どこが公正なんだか……」

「アスナ、そこはほれ、あいつ等の正義だっただけだからなあ」

「まあ、わかるけど」

で、と周囲を見回す。

「今回参加人数を絞るつもりやったけど、やめや。」

「……え?」「……」

「超一流なんつうGSは今回潜入したらん裏はとれてる。せやったら、一流程度のGSにおそれをなす必要はない。」

だから……。

「今回の試験、全員で受けてもらおう!」

「……」
「……」
「……」

「もちろん、受けたくない子もおると思うから、それは自由意志やけど、受けたい子は進み出てほしい。全員書類通したる」

ふっつてわいた話に燃え上がる従者たち。

「よ、よ、横島さん! 私も受けていいですか!??」

「おお、ええで。ユエちゃんが一番受けてほしいかもしれんしな。」

「え? なんですですか?」

「ほれ、ご近所の幽霊に一番評判いいんや。」

そう、綾瀬ユエちゃんは、ご近所回りの経験レベルが高く、麻帆

良の幽霊の大半が彼女のGS資格取得を望んでいる。

「……がんばるです」

一応同席したネギパーティーは受験差し止め。

まあ、靈感関係は何もしてないしな。

「ヨコシマ、私と愛子は？」

「受けたけりゃ、絶対に受験させたるぞ。」

まあ、六道の派閥に属することになるけど。

タマモも愛子も冥子ちゃんに評判がいいので、ウケるだろうなあ。

「……あたしはパスかな？」

「えーっと、未永く保護妖怪の線で」

タマモも愛子も不参加、ということらしい。

「あたしは、いいのか？」

「千雨ちゃんはイヤか？」

「んー、ほら、あたしのアーティファクトは有名じゃない方がいいしな。」

実は逆転号が千雨のAFであることは、関係者のもトントンとも知らない機密事項だ。

正直、チートすぎて困るのだ。

高音や愛衣も魔法使いである立場からGSを辞退。

茶々丸も現行法律の抜け穴がなくて断念。

となると、

「エヴァ、千鶴、コノカ、セツナ、楓、クーフェイ、ユウナ、アキラ、ユエ、アスナ、さよ、かな？」

そこに一步踏み出した夏美。

「あ、あの、横島さん！ わ、わたしも！！」

「ああ、わかつてる。ただ、夏美ちゃんはどうしてもエミさんが自分の事務所から出したいっていつてな。」

「え、ほんとですか？」

「ああ、エミさんが無茶苦茶気に入ってたなあ、もう、そのままお持ち帰りしたいぐらいらしいぞ？」

「え、ええええええええ！！」

「ま、横島^{ちほ}事務所としては、夏美ちゃんみたいな重要戦力は、出ていかれると困るんだけどな。」

「え、私重要？」

「だって、千鶴ちゃんを押さえられるような人材、ほかにないし」

「ええええええええ、またちぢねえ~~~~！！」

「ま、冗談冗談。まじでGS関係じゃ一番優秀だよ。」

「・・・ほんとに？」

「今度はほんと」

飛び上がらばかりに喜んで、試験を受けることを宣言。

「じゃ、直接戦闘訓練に組み込みやな。・・・せんせーせんせー」

「・・・おれにまかせろお！！」

伊達雪之丞によるスパルタ訓練の開始であった。

「おー！ 伊達さん、私も参加するアルヨ！」

「こいこい！ どんどん来い！」

「ヤーーーーー！」
「いやーーーーー！」

いやはや、エヴァちゃんの別荘でやっててよかった。
そんな安堵をしている俺の隣へアスナがやってきた。

「・・・横島さん、ありがとう」
「ん？ 何でもねえぞ？」
「でも、ありがとう」
「ん」

すつと右手に両手を絡めてくるアスナ。

「まで、神楽坂アスナ。それは共有財産だ」
「・・・え、そういう扱い？」
「アスナ、抜け駆け禁止でござるよ」
「そうそう、みんなでおいしくにゃ〜」
「おいおい、本人の許可は・・・」

戸惑う俺に、千雨ちゃんが顔を寄せる。

「横島さん、とりあえず、周囲みんな見回せや。」
「あ、うん」

「で、キスしてねえ女は何人だ？」
血を吐いて倒れる俺。
「・・・もうダメかもしれない。」

「まあ、忠夫さんの回りはこれからも騒がしくなるんだから、せめ

「てこれ以上増えないようにしないとね」

「うむ、那波千鶴、いいことをいう」

「・・・マスター、私も賛成します。」

もう本当に再起不能です。

第三十六話（後書き）

ちょっと短めですが、次こそは、つぎこそはしけんです。

第三十七話（前書き）

やっとこさ、GS試験です。

毎度のことですが、びゅんびゅん視点が変わりますので、しつ注意ください。

第三十七話

さて、この人数を移動させるに当たった問題がいくつもあるけど、自薦してきた人に任せたのは失敗だった。

きたのは何故かマイクロバス。

で、窓に網がついている。

不要にカーテンが山ほどついている。

それも無骨な奴。

「・・・隊長？」

「なに？ 横島君。」

「これって、護送車じゃないんすか？」

「うん、そうよ？」

なんで、何かおかしい？てな顔ができるんだ？

「なんつう車を用意してくるんじゃあ！！」

「あん、これって結構いろ色と考えたのよ？」

なぜや、このおばはん。

自信満々やないか。

「あのね、横島君。今回の試験で一番の注目はだーれ？」

「・・・あ」

ねらわれる魔法世界。

守られるにはメンドクさい認識の差。

で、護送車なら、守っていても問題ない。

つつか、結構自然。

「あくど・・・」

「華麗に卑劣と違ってほしいわ」

おほほと笑う姿は娘と一緒に。

ひのめちゃんもこうなるのかなあ・・・。

「というわけで、アキラちゃん以外はマイクロね」

「何でアキラちゃん？」

「・・・それは・・・」

視線の先に止まるのは「六道」のロールスロイス。

「あきらちゃんくん、いきましょ〜。」

「おばさんはりきつちゃったわ〜。」

顔をひきつらせたアキラちゃんを六道親子にまかせて、俺たちは護送車に乗った。

特別仕立ての護送車だったらしく、くやしけれど、結構乗り心地がよかった。

受付をすませると、横島従者騎士団たちは控え室に、俺と横島は役員たちの前に引つ張り出された。

色々とメンドクさい話だったが簡単にいうと・・・

「半分負けると？」

横島の直球のせりふに眉をしかめる役員たち。

とはいえ今回の臨時試験には、業界大手の事務所が、自分たちの名を売る機会だということ、絶対合格レベルの弟子を何人も投入してきているという。

つまり……

「うちにテリーマンになってってことか？」

俺の台詞に役員たちはうなずいた。

強制はできないし、強制しない。

しかし、今後のことも考えて……とか役員がいい始めたので横島は笑う。

「みなさんに今後の事があればいいんですがね？」

ばんつ、と開かれる部屋の扉。

そこには数人のスーツ姿の男性と、和服の女性がたっている。

「神聖なる試験で、愚かなたくらみは、万死に値するわ」

「……欲にまみれた現体制にはホトホト愛想が尽きましたよ、婦人」

「じゃあ、唐巢くん、ひきつけてくれる？」

「いいでしょう、本日この場から、引き受けさせていただきます！」

胸を張る唐巢神父は、その場から協会トップを引き受けた。

これより先の苦難を想い、横島は「増毛」の文珠をおくったとか。

「さつてと、これで気軽に応援できんぞ、雪之丞」

「あー、横島君。とりあえず、会長初仕事という事で依頼だ」

「・・・なんすか？」

「きみの弟子の霊力が高すぎるせいで合格者レベルが高くなりすぎだ。ちょっと手加減させてくれないかい？」

「あー、正直すまんです」

「あのよお、神父さんよ。手加減の強要もままずくねーか？」

「・・・このままでは将来の良い種も捨てられてしまうのだよ」

「・・・あー、わかった。理解しとく」

さすがにあの「チート」が足切レベルじゃ、誰も合格できねーし。

今回の試験を好機と捉えている人間は多い。

少なくともこの半年以内に二度の試験があるのだ。

今回を練習として次回を本番とするとかいう人間も少なくないだろう。

そういう点では、美神事務所のおキヌちゃんや弓さん、一文字さんは受からないまでも勝ち抜けるかもしれないという期待で受験していた。

一時試験は三人とも通ったが、自分たちの後に続いた麻帆良勢の霊力をみて落ち込んでいた。

エヴァちゃんはいいだろう、あれは別格だ。

しかし、コノカちゃんや千鶴ちゃん、アキラちゃんの霊力はすでに一流といって過言なかったし、クーフェイちゃんや楓ちゃんももう「プロ」だった。

他の子も一線の霊能者レベルであったが、一番驚いたのは夏美ちゃんだろう。

彼女はドコをどうみても「一般人」なのに、霊力を計ると一流な

のだ。

私たちの超感覚や靈感を潜り抜ける隠密性は既に流派の祖といつても過言ではない。

聞けばエミがご執心で、中学校卒業後は自分の所で修行させるんだといきまいているとか。

六道はアキラちゃん、小笠原は夏美ちゃん。

うちはエヴァちゃんとさよちゃんかしら？

修行で確保っていうのは横島君も許しちゃくれないと思うけど、研修って事で月3ぐらいで来てくれるだけでもいいんだけどなあ。。。

・・・主にエヴァちゃん。

年度末は愛子ちゃんと茶々丸ちゃん希望、熱望。

美神さんや皆さんに修行をつけてもらって、それなりに自信をつけていた自分が恥ずかしいです。

自分には「死霊使い」というアビリティがあるという自信ですら打ち砕かれた気分です。

美神さんは「あれはチート（ずる）だから」と笑いますが、それでも確固たる力があることは必須の職業なんです、GSというものは。

美神さんや横島さんと仕事していたときには気づかなかったんですが、他の人と仕事をすると、いかに三人で一つのチームだったか

を思わされます。

幽霊時代から、ずいぶんと長いこと仕事を一緒にしてきた気もしますが、それでも二年とたつていなかっただんだと思うと、すごく濃厚な時間だっただんたつてわかります。

私は、そんな金色の時間に浸されて、その真価を解っていなかったんだと思います。

美神さんがいて、横島さんがいて、そして……。

「おキ又ちゃん、二次試験の抽選が終わったみたいよ?」

「え、ええ! もうですかあ!？」

「氷室さん、結構時間たってますわよ?」

「おキ又ちゃん、大丈夫か?」

「……ちよつと、ぼーっとしてました」

なんだか恥ずかしいですね、本当に。

ああ、なんだか横島さんに会いたいな……。

ラプラスダイスの陰謀か、はたまたダイスを振っている唐巢神父の幸運か、奇跡的なことが起きた。

「おお、見事に分かれたな。」

我が忠夫の事務所勢は全員二回戦終了まで当たらないようにはばらけた。

更に言えば、美神事務所の氷室キ又やその友人とも二回戦終了ま

で当たらないだろう。

・・・なんとも広いトーナメントマップだな。

「ま、今回は「臨時」だから、ちょっと受かりやすくなってるって話だ。」

忠夫は苦笑いでトーナメントマップをみている。

とりあえず、全員が霊具なしで攻撃手段を持っているので、追加で持ち込む物はなににしようかと悩んだが、全員が「アーティファクト」で通すことにした。

霊衣の規定はないので、呪符を非常用に仕込んでいるが、相手との戦力差を考えれば使うことはあるまい。

「つうことで、第一試合、がんばってな、エヴァちゃん」

「ん、任せる忠夫。相手に負けたことを気づかせぬ間に・・・」

「おいおい、相手は幼女かよ!」

「ひゃっはー、兄貴、やりたい放題っすね!」

「うひゃひゃひゃ、おれは行動派ロリだぜ!」

「「「ぎゃははははは」」」

・・・あー、まあ、なんだ。

「忠夫、アーティファクトを使うぞ」

「んー、殺さんていどになあ。」

「保証はできんああ・・・。」

あー、なんつうか、虐殺？ そんな感じ。

アキラと私ことユーナ・ザ・キッドは結構ワンセットで行動している。

まあ、色々とあるんだわ。

で、みんなから離れてみているのは、アキラの試合が背後の会場が終わった後なのと、私の試合がエヴァちゃんの後なせいである。

しかし、怖いぐらい切れてるなあ、エヴァちゃん。

エヴァちゃんが切れて、はじめっからAFを召還。

百一本の神通棍を雨嵐のように相手に叩きつけ、ノックダウンした。

持ち込める武器は一つだけとなっているので反則だと騒いでるチンピラがいたが、持ち込んだ霊具が「ゲート」であり、そこから霊気で具現化しているだけであることを説明すると、エヴァちゃんの勝利が確定した。

で、結構結界に負担がかかったらしく、修復が行われるらしい・・・って、関西の兄さん方だ。

うおーい、がんばれよ。

あ、手を振ってくれた、うんうん、なんかうれしいねえ。

「ユウナ、私そろそろだから・・・」

「うん、アキラなら一撃だよ！」

「・・・そんなこと無いと思うけど、がんばるね」

「うん頑張れ！ 私もがんばる！」

「うん！ー！」

拳を重ねる私とアキラ。
よし、気合いはいった！！

エヴァちゃん、の虐殺のあと、アキラちゃんも悠々と勝ち上がり、ユウナちゃんも結構余裕だった。

他の試合会場でも、多少苦戦したユエちゃんもミニマリアとの挟撃で活路を見いだしたり、楓ちゃんがほぼ忍術で圧倒したりとデタラメな内容だった。

直接見ることはできなかったけど、さよちゃんも結構余裕だったと美神さんの話。

とはいえ、ちよつと悩みがあった。

うーん、アスナはAF禁止の方が良かったかなあ・・・、なんて思ったのだ。

実はアスナのAFは、この手の対人戦闘において最強を誇る。

靈気をまたとえば何でも切れて、マジックキャンセルの力で靈術を切り裂き、そして人狼の力で力押し。

もう、なんつうかチート。

相手の、蛮なんとかとかかという男は、涙目でギブアップしてるし。運悪いなあ、本当。

同じく運のないのはタイガー。

弓さんに当たってしまい、ボコボコにされてしまった。

またエミさんに起こられるんだろっとなあと思っていたが、エミさんガン無視。

なぜか圧勝でもないのに、無抵抗の相手を打ち破って勝利した夏美ちゃんに熱い声援を送っていた。

うーん、ピートの時以来に燃えてるなあ、エミさん。

それはまあいいとして、弟子、友人女性全員が二回戦に進めたのはいいことだ。

よほど相性が悪くなければ、みんな免許が取れるんじゃないや無かろうか？

まあ、上手くいけば、だけどね。

横島よこしまの事務所は盛況を極めていた。

ほぼ全員二次試験に進み、ほぼ全員二回戦に駒を進めたのだ。かおりと一文字の対戦相手が「プロっぽい」のが気になるが、さすがに今から入れ替えるのは難しい。

すでに黒幕が発覚しているのだから、ばか「プロ」も辞退すりゃあいいものを、意地になって受験を続けているのが面倒だった。

「横島、なんとかできねーのか？」

「あのなあ、そういう権力はつかわねーほづがいいんだぞ？」

「でもなあ、さすがに、ほれ？」

「弓さんも一文字さんも、老師の所で修行済みだろ？ 大丈夫だつて」

「・・・うー。」

「雪之丞、私を信じなさい。」

「・・・わかったよ」

かおりが簡単に負けるとは思っていない。

霊具も何も無しであれだけの力、あれだけの能力。

・・・ウチに来てくれないかしら？

・・・ああ、だめだめ、最低でも三年以上経たないとダメなんだ
ったわ。

あああ、もう、本当に悔しいわ。

「隊長、さすがにあの超人戦争には勝てません」

「解ってるわよ、そんなこと。」

ただ、あのおこぼれに預かれるかなあ、と思ったただけなのだから。
今回は横島君の神経をGS協会が神経を逆撫でしたらしく、かなり強引な手法で事務所員のほとんどを受験させてきたので、半年後のGS試験では出て来ることは無いだろう事だけが救いとも言える
けど。

でも、あそこの事務所の促成栽培には伝説的な異名があるし、新
入生や新規加入組が現れれば、試験枠がまた減ることになるだろう
し・・・。

あ、そうか、魔法世界からの移住なんじゃない、そうよ、それだ
わ、内にも枠があるし、協力を求めればいいだけじゃない。

あー、失敗したわ。試験前に気づいてれば何とかできたのに・・・。

次回試験には協力してもらわなくっちゃ。

期待してるわよ、横島君。

第三十七話（後書き）

まさに超人戦闘ですw

基本、身内以外には圧倒、身内同士だと「似非格闘ゲーム」状態になります。

基本ですw

第三十八話（前書き）

見苦しい大人が出ますが、基本大人は見苦しいものなのです。
えっへん。

第三十八話

さて、問題だ。

二回戦のトーナメントに横島事務所の人間と関係者がトーナメント半分を占めている状態、これをみてどう思う？

まあ、普通は……

「不正だ、不正が行われているぞ!!」

「なんだこの状態は!?! あからさますぎて声もでんぞ!!」

「君たちの気は確かか!?! こんな明らかかな不正が許されるわけがないだおるが!?!」

もう、騒ぐ騒ぐ。

まずは一回戦で落ちた方々の師匠筋が騒ぎ、それを押ししていた関係者が騒ぎ、その関係者からリベートをもらっていた役人が騒いでいる。

とはいえ、確かに今の状況は突っ込み所満載だしなあ。

この状態を指さして、正常な対戦による結果ですって言いきれんわな、うん。

基本、霊力の足切りがある一時で落ちている奴らまで騒いでいるのが笑えるけど、それはさておきで、純粋なGSにとって、うちの娘達と対戦での相性が悪いことは間違いない。

言うなれば、対GS霊能者といっても過言ではないのだ、うちの娘たちは。

とにかく実戦経験相手に事欠かないし、その相手が対人戦闘だと

いうのだから強くもなるわけで。

だからこそ、この試験方式では無類の強さを見せるわけだ。

勿論、そればかりではないし、それ以外でもある。

しかし、直接戦闘を念頭に置いた対人戦では、そうそう負けることはない。

それがわかるからこそ、自分達の押していた見習い達の負けが悔しいし、認められないのだろう。

「では、どのような不正があったというのですか？」

「この小僧の事務所関係者が、誰も二回戦まで当たらぬではないか

！」

「あからさますぎて気絶しそうじゃー！」

ふむ、つまり強そうな奴らが潰しあっていないのが気に入らない、と？

おれの台詞に誰もが黙る。

本音では肯定。プライドで否定。

そんな姿を見て、唐巢神父は苦笑い。

「実際のところはですね、皆さんのお弟子さんがたが一人一殺していれば、横島事務所のお嬢さん型は全員敗退していたはず何ですが？」

大上段からの正論空竹割り。

誰もが声を失った。

「相性もあるでしょうし、現在のルール上では「力押し」が認められてしまいますので、ルール改正が必要でしょうけど……。」

ニヤリと笑う唐巢神父。

「・・・今更ですよね？　すでにGS免許を取得しているはずの数が敗退している今では・・・。」

なんとというか、神父、こえー。

「とはいえ、将来優秀なGSが心折られてしまつのも何なので、特別枠を考えています。」

「「「おおー！！」」」

どのようなルールで？　と瞳が語っている。

「ここにいらつしやる、伊達GSと横島GSに勝てたら、免許発行しましょう」

「「「・・・！！！」」」

殺気にあふれた会議室。

「じ、事実上、拒絶ですか？」

「いえいえ、勝つ、と申しましたが、それぞれに得意分野が違います。それなりに対策すれば不可能ではありませんよね？　なにせ露出の多いGSです。対策はばっちりでしょう？」

「まあ、直接戦闘では負けねえけど、それ以外はちよつとなあ。横島もそうだろ？」

「俺は逃げるの専門だな。俺に追いつけるか？　ねんてな」

思わず笑う俺たちに、老人達は苦々しそくに顔をゆがめる。

「おっと、そろそろうちの娘達の試合なんでね。失礼しますよ？」

「お、いいじゃんじゃねーか。」

「クーフエイのAFは禁止したんだろうな？」

「あつたりめーだろ？ 猿の気を失わせるような一撃、会場消えんだろ。」

なぜだろう、背後の殺気が薄らいだ。

まあいいか、うちの娘、うちの娘。

なんか嫌らしい攻撃やなあおもったら、鞭に呪いを込めとった。霊衣に呪いを追加して、身動きできなくなるまで攻撃する、そんな手法らしいわ。

背中の方で「ひきょうな！」なんて叫んでるせつちゃんがおるけど、まあ、なんとというか、詰めが甘いとおもうんや。

なにしろ、「衣服」しか呪いをかけておらん。

つまり、衣服が替われればそれまでや。

というわけで。

「アデアット！」

髪の毛以外はワルキューレはんそつくりの私。

銃も霊力で作つとるから、ルール上OKや。

あとな、

「この格好には呪いはきかへんで！ー！」

驚きで身を堅くしていたおっさんは、こちらの射撃に驚いてぴよんぴよんはねとる。

「優雅な舞いを見せてくださいねえ？」

につこり笑って見せたつもりやけど、なぜかまさかのギブアップ。審判はんに「た、たすけてくれ、ころされるー」ってひどすぎやないの？

「まあ、これで二回戦突破、GS免許取得や！」

って、なんで視界の端でワルキューレはんが見えるんやろ？

結構うれしそうに手を振りつつ、ビデオ構えとるみたいに見えるなあ？

うん、てーふつたる。

あ、むっちゃうれしそうやあ、こっちも嬉しいなあ……。

あ、せっちゃん、うち、GS免許取得やで！

何にしる楽勝だと思っていたが、さすがに私の出自を知っているか、小細工に走ったバカがいる。

目の前で私に踏まれているバカだ。

試合開始直後、男は懐から何かを出して宙に蒔いた。それは刺激的で猛烈なおいの……。

「ガーリックパウダーか！？」

「はっはっは！ GSのダンピールがダメージを受けるといふ。純血の吸血鬼ならばダメージもでかろう！！」

わははと笑う男に、私はドロップキック。

「ぐはあ！ な、なぜこの空間で動ける・・・？」

「バカか貴様は。霊力以外の攻撃が通らぬ結界で、こんなもの効くわけがなからう？」

「・・・あ。」

「私が真祖なのは周知徹底されてる。ならばその弱点を突くなど無駄に決まってるだろう。バカか？ バカなのか？ 死ぬのか？」

ダメージになるように霊力を込めた私の攻撃が、男に決まってゆく。

徐々に力を失った男は、譫言のように「ギブアップ」を宣言した。

はあ、実際のところな、ニンニクなんてものは克服済みなのだよ、馬鹿者よ。

あんな畏にかかって、克服しないままなわけがなからう？

はあ、本当にバカばかりだな。

私はGSにどんな夢を見ていたのやら。

忠夫さん曰く、私のAFは試合において最強だそつだ。

どういふ意味か聞いてみると、

「瞬間的な石化は相手の時間を奪うし、未石化の金縛りは相手の気を奪う。試合である以上このアドバンテージは反則」

そんなわけで、第一試合はサスマタのみで勝ったんですが、第二試合はそういうわけにいかない相手でした。

見た目で言えば美神GSを感じさせる相手。

たぶん、表か裏で第一線で戦ってきた女ひとというイメージが離れません。

輝く神通棍がそれを裏付けているかに見えます。

負けるかも、そんな風に思った私でしたが、彼女の向こうに見える人影に疑問を感じました。

なんというか、こっ、イメージと合わない人が見えました。

清らかで爽やかで穏やかな、そんな忠夫さんが柔らかな笑顔でこちらに手を振っているのです。

・・・正直に言いますよ？ ありえませんが。

いかに私が忠夫さんにメロメロとはいえ、あれはあり得ませんよ、ええ。

そういう風に見てみれば、こっ、何というか違和感ばっちりなことに気づきました。

・・・もしかして、と思い、AFを呼び出すと、正面の彼女はほほえみます。

それで勝てるのかい、と言っているきもしますが、直感がそれを嘘だと見破ります。

うそ、というか、こっ言うのって実は私たちはよく知っていたのです。

誰よりも強い、自分ではかなわない誰か。

そんな「幻」を！！

だから、関係なしに、すべてを！

「石化！！！！」

えー、結論から言いますと、タイムアップ勝ちです。

結界内のすべてを「石化」させたものだから、審判まで石化してしまいました。

とりあえず、すぐに解除しましたが、審判までおびえて端に逃げます。

・・・ちよつと傷つくわ。

あ、なんででしょう、忠夫さんまで冷や汗をかいていませんか？

先に終わったさよちゃんの試合は、実に参考になりました。

ネクロマンサーの笛は補助でも何でもなくて、このGS免許取得における最大攻撃力なんだとわかりました。

私は、ずうつと勘違いしていたんです。

笛として吹いていて、それが力に変換されているだけですべてだと思っていたんです。

一度は理解していました。
でもそれは例外だと思いこんでいたんです。
違いました、勘違いでした理解が足りなかったのです。
この笛は霊具ですが、楽器でもあったのです。
そのことを思い出させてくれたさよちゃんに感謝です。

「く」「や、やめてくれ……」
「く」「思い出させないでくれ!!」
「く」「おがー……ちゃー……んん!!」

泣き崩れた男性は、そのままギブアップ。
攻性呪符を笛に仕込んでくれた美神さんには悪いですが、これが
ネクロマンサーの戦い方なんです。
へへへ、ちょっと強くなれたかな？

……村上夏美です。

別に隠れているわけでも何でもないのに、なぜか視認されない夏
美です。

いえね、目の前で忍者っぽい女の人が、
「くう、やりますね。このどこにも隠れるところがないところでの
認識攪乱、どこまでのレベルですか!」

……いいですね、メリハリのあるからだとキャラの立っている
見た目。

その上忍者ですか、忍者ですかあ？
いいですねえ、明らかに属性があるじゃないですか。

「……目の前でしゃべっている気配があるのにドコにいるかわからない……こんな経験は初めてですよ……。」

あー、それってあれですか？

見えない聞こえない、透明ちゃんってわけですか？
ひどいですねえ、ひどすぎですねえ、それって虐めですよね？

「な、なんですか、このプレッシャーは！」

ははは、横島さんが呪う気持ち分かったなー。

やっぱ呪っちゃおうかな？

「は、話せば分かりませんか？ わかりましょうよ、ね？」

わかりあう？ だったら何で私に向かってしゃべらないんですしよ
うねえ？

「はっ、いえ、ほら、私の方が格下なので視線は合わせないように……。」

ふふふ、うそですよ、嘘だってまるわかりですね。
だ、か、ら……。

「美人死ねー美人死ねー！ くそー、キャラが濃い奴らなんて嫌いだー！ー！ー！」

「ぎゃー！ なぜか心臓がいたいー！ー！」

「くそー！ 胸なのね、胸なのね！！ 巨乳が憎いー！！」

「ぐ、ぐあー！！！！！！ もげるもげるいたいいたい！！」

「ぐぎぎゃー！！！！！！！！！！」

「ぎぎあつぷー！！！！！！！！！！！！」

・・・村上夏美です。

なぜでしょう？ 勝ったのに拍手しているのがエミさんだけです。
おかしいなあ？ 華麗な勝利なんですけど。

こ、こわかったー。

仕事の時の夏美ちゃんって結構怖かったけど、あれが本気なのか
と思うと背筋が寒いわ。

横島さん式の速攻呪いは小笠原エミさんも認めるほどの天才的な
呪いなのだそうで、それを独学で再生している夏美ちゃんは同じく
天才だとか。

それに比べれば私なんて平凡平凡。

「くっ、霊波刀がきかぬだと・・・！！」

あ、いけないいけない、私も試合中だった。

「アスナ！ 気合い入れや！」 「アスナさん、集中してください！」

うーごめんごめん。

でもさー、遅いし威力ないし、なんつうか、スポーツチャンバラよ、これ。

一応、私には魔法が効かないし。

これは霊力も同じ。

私が拒絶する限り通用しない。

で、この結界は「霊力しか通じない」結界だ。

つまり、そのー、チート。

とりあえず、千鶴さんの石化を瞬間的に決められると、数分は動けなくなるので、その最中に場外に出されると負けるけど、ふつうのGSには負ける要素がほとんどない。

とはいえ、攻撃すると一撃で殺してしまう可能性もあるので困ってしまう。

さすがに生死は試合の中でならOKというのを主張するほど腐ってないし。

「くう、さすがは英雄の弟子か・・・。」

「やめて、横島さんはそんな呼ばれ方をしてもらいたい訳じゃないわ!!！」

「いいや、英雄だ・・・我ら人狼のな!!！」

直立した狼、そんな姿に変わった男に向かって、私はほほえむ。

「へー、それが本気なんだ？」

「ふ、怖じ気付いたか娘！」

「だれが！」

私はAFを求めた。

そして、その姿を見せる！！

「アデアット！」

脇から抜くのは「房姫」

構えるのは正眼。

ふつと息を抜く。

視線は少し落とし気味。

気持ちはいつでも研ぎすます。

それは、明鏡止水。

「・・・その力、ソナタも人狼か・・・。」

「いいえ、これは借り物の力。でも、これも私の力」

「よいぞ、その力。存分に切りあおうぞ！！」

「切られるのは貴方だけだけどね！」

これは剣道じゃない。

つばぜり合いなんてしない。

振り抜かず切り替えし、突き立てて突き抜いて。

電光石火が達筋の意味。

虚実が現実を塗りかえる。

さあ、尋常に勝負！！

私の房姫が相手の腕を深く切り上げて、霊波刀が消える。
ざっくりと袈裟切りにし、ドレインした影響で、男がひざを突いていた。

「さ、さすが八房・・・、かないもせぬか」

「・・・この娘は、房姫。」

「そうか、うむ、よい名だ。」

ぱったりと倒れた男は、ギブアップを宣言した。

ふう、シリアスって私の性分じゃないんだけどなあ・・・。

「アスナ、格好よかったえ〜！」

「アスナさん流石です！！」

ま、いいか。

あの妙神山の修行は効いていた。

横島さんたちに紛れるように同行した妙神山だったけど、あの鬼門の試しを越えることができたおかげか、修行をつけて貰えることになった。

弓もおキ又ちゃんも力を付けたけど、一番の上昇率を示したのは

私だろう。

なにしろ、喧嘩武術で鬼門を越えた人は始めてみました、これは鍛えがいがありますねえ、とか小竜姫さまに言わせたぐらいだから……。

正当派剣術ってやつは合わなかったけど、それでもどんな剣術があるかを覚えられたのは上々で、さらに自分の力を磨きあげられたのもよかった。

そのおかげか、学内選抜で私たちのチームにかなうものはなかったし、今回の臨時GS試験受験には、学園からの推薦すらついたらいだ。

が、正直に言えばくじ運に助けられたといって過言ない。

だって、アスナちゃんやらエヴァちゃんに当たったら、舜殺だぜ、あたし等。

卑下とかそういうことじゃなくて、冷静な戦力比較で。だから、正直に言っこのくじ運は今回最高だった。

二回戦までで「横島事務所」とも身内とも当たらなかったんだから。

逆に弓はちょっとかわいそうだった。

タイガー相手に「……ごめんなさい」とか言って滅多打ちにしていたし。

後であたしに謝ってもいたし。

……仕方ないじゃん、あいつに向いている戦いをあいつがしてないのが悪いんだし。

前衛は私で後衛があいつ、それを納得できるまで無理なんだろうなあ。

その点で言えばおキ又ちゃん、あれはいいわ。

後衛の強みを前面に押し出した全面攻撃。

あれ食らったら、私もどうなることやら……。

「あー、一文字選手。そろそろ始めたいのだがね」

おっといけねえ、相手の準備が長すぎて寝てた。

まあ、呪術的な防御は、ちよつとチートで完了してるし、ガンガン叩き臥せるかね!?

「よつしゃ、たこなぐりだ!!!」

地味に、本当に地味に潰れてるわね、バカが。

はじめは私も、おキ又ちゃんや弓さん、一文字さんの全員が二次試験を通るとは思っていなかった。

正直に言えばくじ運以外の何者でもない。

が、三人ともにこの試験で「バケ」たのも間違いのない事実で、成長期と十分に感じさせるものがあつた。

とはいえ、流石にこの先は横島君のところの「反則」少女たちと当たるので、そうそうは勝てないだろうけど、気心の知れた仲だけに、十分な結果が残るだろうことは間違いない。

まあ、なんというか、おキ又ちゃんたちには荷が重い「プロ」は、アスナちゃんとエヴァちゃんが舜殺したし、セミプロは夏美ちゃん

が潰した。

私も気づかなかったんだけど、横島君曰く、アキラちゃんが倒したのって、某国のオカルト捜査官だという。

まったく泥臭いGS試験になってしまったものね。

ママも随分色々と企んでいたみたいだけど、まあ小細工程度でどうにかなるような娘たちじゃないし。

なんだか、年寄りめいてきたみたいない気分だわ。

あー、でも、あの「A級」。

今回の試験で落ちたことで名を落としたわよねー。

というか、あそこの一門も、あそこの派閥も全滅。

こりゃあ、協会もヒト波乱かしら？

とりあえず、今回の免許の責任者欄は、誰の名前になるかが楽しみだわ。

とうとう、横島事務所同士の対戦です。

なんというか、第一試合でこうなっていたら、半数は残らなかつたでしょう。

他の試合でも所長の知人と事務所員が対戦しているので、純粹に身内の戦いともいえる状態です。

こういう状態になると、ネタに走ってしまうのは悪い癖でしょう。

「茶々丸ちゃん、撮影できてる？」

「Yes、大丈夫です、横島所長」

「マリア、そっちは？」

「ハイ、横島さん。大丈夫です」

横島所長や雪之丞さんまでカメラを構えていますし、こっそり忍び込んだ神魔の方々もビデオ片手に撮影なさっています。

各、ご臍肩の所員を中心に撮影しているのがほほえましい限りです。すね。

そうそう、GSへの亡命行動の監視ということではいらしている明石教授も、ビデオ片手に絶賛撮影中だったりします。

これが親ばかというものですな？

かく言う私も、マスターエヴァンジェリンの撮影を中心に行っているので他人のことはいえませんが。

さあ、殺さない程度に相手をグロッキーにする訓練の成果は、ここで生かされるか否や。

実に楽しみですね。

第三十八話（後書き）

えー、まだ試験は終わりません。

戦闘描写が少ないのは、筆者の技量不足です。

少なくとも「がきーん」とか書きたくないという意固地な拘りでもあります。

お付き合いいただければ幸いです。

そういえば、いつの間にかPVが200万を超えていたよこしまほら。

そろそろ「ゼロ魔」を差し込もうかなーとか思っていますが、試験が終わった後のほうが良いかな

3 / 16 対戦の一部表記を消しました。 悪あがきですねw

第三十九話（前書き）

・・・30時間車移動中にマッハストレスの中、書きました。

第三十九話

それは剣戟と言っているのかを迷う光景だった。

ひと振りでも八つの剣筋が走り、相手を襲う。

人の潜る隙間もないような剣筋を余裕ですり抜けた少女が、反撃の拳をふるうものの、その光の拳を剣士の少女ははじく。

拳士少女は迷わず接近しつつ、身を翻す。

振りおろされた剣に拳を合わせてはじいた。

「くう、一応（マジック）キャンセルしてるんだけどなあ・・・」

「だと思って、全部根性と努力で打ち合ってるんでや〜」

「うわ、まじ?」

「ふっふっふ〜、雪之丞さん直伝のGS技なんだにや〜」

拳がうなる、剣が叫ぶ。

およそGS試験とは思えない加速で相手の手をつぶし合う二人の少女。

これが先ほどまでのアツサリトした試合なのかと目を疑う関係者。やはり、資格審査制限年齢を引き下げるべきだと拳を固める某人妻。

魔法関係者じゃなければ、絶対スカウトするのに!! 孫弟子なんだからそのぐらいの権利があるはず!! と拳を固める某人妻の娘。

「アスナ! そいで〜じわる!〜!」

なりふり構わず声援をあげる人狼娘。
もう、大声援が渦巻いていた。

「くく、流石アスナ。そうそう上手いことさせてくれないね!!」
「ユウナこそ!!」

声を掛け合い一度離れる二人。
裂帛の気合いが急激に鋭さを増す。

大樹の気合いが徐々に絞られ、針先ほどになった瞬間に二人は動いた。

「!!」

房姫を振り抜いたアスナは、口元をゆがめ膝から落ちた。
ユウナは指先の霊波による爪を、いつもの倍ほど出していた。

これが勝利の鍵だった。

「いやー、アスナって結構相手のことをなめてるからね。油断大敵」

はっはっは、と笑ったユウナであったが、そのまま気絶した。
まさに壮絶。

ダブルノックダウンの様は、あたかも雪之丞と横島の試合を彷彿とさせるとして、会場を大いにわかせたのであった。

いやいや、本当にお互いの死力を尽くした試合だった。
俺と横島を思わせる試合に、思わず握り拳を握っちまった。
多彩な攻め手を隠しつつ、才能に胡座をかかない天才肌のアスナ
に対して、一点集中で努力を重ねたユウナ。

正直に言えば、俺はユウナに肩入れしていた。

横島の写し身ともいえる天才アスナを秀才ユウナに破ってほしか
つたんだ。

だから色々と仕込んでいたのだが、それでも紙一重しか差がなか
ったのが悔しい。

努力が才能を凌駕する瞬間を示してほしかったんだが。

「さすがに天才達は違いますわね」

なに？ かおり、ナニを言っている？

「ですから、貴方達に才能を認められてGS試験を受けているので
しょう？」

・・・ナニイッテル？

「・・・かおり、あいつらは確かにちょっとした才能はあったが、
それ以上の修行と努力があつてこそその実力だぞ？」

「・・・でしたら、早くから修行していた私たちの立場というもの
が・・・。」

「自分達の努力をいいわけにして、それを凌駕するものを「天才」
とかいって思考放棄するのか、おまえは」

「・・・ごめんなさい、雪之丞。妙神山の修行を忘れていましたわ」

そんな彼女を抱き起こす雪之丞さんが格好よく見えました。結構あこがれるけど、そういうのって負けないと格好が付かない。

暴力は嫌い、争いごとは嫌い。

それ以上に負けるのが嫌い。

そう、負けるのが嫌い、なんて言えるようにされてしまった事を恨めしく思いつつ、私は構える。

「アキラちゃん、がんばれ!!」

背後から横島さんの声が聞こえた。

もう、雪之丞さんの彼女なんかうらやましくなくなった。私の後ろにはあの人がいるんだから。

「アキラちゃん、がんばって~~~~」

冥子さんまでいる。

わたしのAFのすべてを引き出してくれたあの人がいる。あの人たちがいる!

「大河内アキラ選手、一文字魔理選手、前へ!」

「はい!」

私がかードを構えると、一文字さんも輝く木刀を構える。

見た目は怖い人だけど、心優しい女性だとわかっている。

逆に、私は見た目おとなしいけど、中身はちょっと変わってきてしまっている。

なんだか似たもの同士かもしれない。

「試合、はじめ!」

「でやーーーーー!!!」

私のカードをねらう一文字さん。
でも、甘い。

私の身には既に「十二神将」が生きている!!

「キメラ・アンチラ・サンチラ!」

瞬間移動、手刀、電撃を同時使用。

「ぐっ、さすが横島事務所!」

「一文字さん、これを避けますかあ!?!」

瞬間的に前に倒れた一文字さんの背後を、私の手刀が薙いだ。
もちろん当たってはいいない。

が、電撃の余波を彼女は感じているはずだ。

「……くそー、接近戦ならいけるとおもったんだけどな……。」
「こちらだって、この一撃で倒せなかったのがつらいですよ」

思わずニヤリと微笑んでしまうと、向こうもうれしそうだった。
やっぱり似ているのかもしれない。

「……じゃ、まあ、いくぜ!」

降り下ろされた木刀を受け流し、拳をすり入れる。
腕が伸びきる前に肘で決められそうになった。
これは、雪之丞さんから散々決められている!!

「っふお! まじかよ!!! これがきまらねーって、どんな訓練し

てんだよ!!!」

「毎日三度死んでます!!!」

拳と木刀の撃ち合い。

まるでアスナとユウナの試合みたいだけど、私には「十二神将」がいる!!!

拳、ハイラ（毛針）、拳、サンチラ（電撃）、拳、アジラ（火炎）!!!

「ん、んん、ちくしょ!!! まじでイケルな、アキラ!」

防戦の一文字さんの気合いが切り替わる。

これは、私のリズムを読んだ、そういうことだろう。

アスナと対戦しているからよくわかる。

本能系の人の特長と言っている。

だから私もそれに合わせる!!!

拳、ハイラ（毛針）、拳、サンチラ（電撃）、拳、アジラ（火炎）

.....

「ここだ!!!」

脚+インダラ（亜音速）!!!

降り下ろしかけた木刀ごと、私の足が一文字さんを吹き飛ばす。攻撃にすべてをかけた一文字さんの防御を私の速度が飛び越えた形だ。

いかに靈力しか通じないとは言え、衝撃波や勢いは殺せない。そう、これこそがGS試験における私の裏技。

各員が一人に一つ身につけるように言われた、最後の最後で出す必殺技だ。

最高の形で決まった私は、思わずガッツポーズを決めると、声援が渦巻いた。

「勝者、大河内アキラ！！」

横島さんが手を振ってくれている。

冥子さんと十二神将たちも飛びついてきてくれた。

冥那さんも、フミさんも、メイドのみなさんも手を振ってくれている。

うれしいな、本当にうれしいな。

なんだかこのまま試合が終わってもいいかもしれないと思ってしまった。

あ、そうだ、フミさんにビデオをコピーしてもらわなくちゃ。

うっわー、完全に決まっちゃったよ。

アスナと組み手をしたときに見いだした裏技だったけど、アキラちゃんには完全に向いていたみたいだ。

最強とは言えない攻撃の連続の中で、最後の最後に相手の油断を誘つやり口は、実に美神さん好みだろうと思う。

背後で「ぜったいうちの事務所に!!」とか雰囲気だしてるけど、冥子ちゃんが一番のお気に入りなので、手は出せまい。

「よ、横島君。彼女たちはどんな訓練をしているのかね?」

唐巢神父の質問に、俺は首をひねる。

大したことはしてないはずだし、と。

「神父、毎日臨死体験です。」

「というか、文珠がなければ三途の川のメドレーリレーなんか勘弁してほしいのです」

アスナとユエの一言に、柳眉を逆立てる神父だったけど、それほどの強さを必要とするのが彼女たちの立場なのだ。

その辺を考えてほしい。

「・・・横島君。よそ様の娘さんを預かっているのだからね・・・」

「で、かわいいかわいいと可愛がって、檻に閉じこめて監禁保護っ

すか？ 一週間がいいところっすよ？ うちの娘達は、あのときの美神さん以上っすよ？」

「ぬ、む、うん……。そうだね、そうだった……。」「

「横島君、まるで私をやんちゃんな小娘扱いね？ 本気？」

「いやー、だって美神さん、いつまでも可愛いじゃないっすか？」

よこしまのこうげき！

「な、な、なにいつてるのよ！ もうー！！」「

真つ赤になってそっぽを向いた！！

よし、攻撃成功！！

「「「……。横島さん？」「「「

……。やば、アスナとユエちゃんがおった！！

って、なぜ千鶴ちゃんまで？

「なぜ？ ああ、先ほど試合を瞬殺したからですよ？」

な、夏美ちゃんだよな？

いきてるよ、ね？

「当たり前ですよ、ええ。」「

真つ黒な笑顔の千鶴ちゃんが怖い。

ああ、夏美ちゃん、無事でいてくれ。

そして俺の無事を祈っていてくれ。

気づくと医務室でした。

三回戦の相手はちづ姉。

はじめから勝てる気はしなかったけど、試合開始前からいやな雰囲気だった。

何しろ、横島さんにアスナとユエちゃんがベツタリくっついてい
るからだ。

アスナは敗戦の傷心を慰めてもらおうという言い訳で、ユエちゃん
は試合前のアドバイスを、ということらしい。

もちろん、嫉妬の鬼であるちづ姉が黙っていられるわけがなく、
曹操に、いや、早々に試合を終えるはずだ。

なら、私にも勝算がある。

何しろ私は「発見しにくい」のだから!!

・・・泣いていい？

ともあれ、試合開始と共に全力で魔法を使ったのに、ちづ姉の視
線が私からはずれない!?

「・・・夏美ちゃん、ギブアップはしなくていいから、速攻で終わら
せるわ」

「・・・ち、ちづ姉え、なんで私ができるの!??」

「ふふふ、それはね?」

きゅぴーんと光る目で私をみたちづ姉は、何かを差し出す。

「・・・夏美ちゃんが「私の」夏美ちゃんだからよ？」

ちづ姉え、わけわからないよ—————!!!!!!

気づいたら医務室でした。

・・・生涯、ちづ姉には勝てないのでしょうか？

・・・村上夏美です。

・・・村上夏美です。

・・・村上夏美です。

「ぐぐぐ—————!!!!!!」

いやー、この結界はたまらないでござるよ。
靈気の伴わない攻撃は無効にするという結界。
実に楽しいでござるな。

「楓、食らうアル！」

基本、靈気を意図的に乗せることが苦手なクーの攻撃大半が、当

たつてもダメージにならないでござる。

「クー、また攻撃に靈気が乗っておらんでござるよっ?」

「あいやー、横島師兄に怒られるアル」

そんな会話の中でも、拳も脚も衰えないのだから、日頃積み重ねた修練というのは恐ろしいものでござるな。

「本気で来ねば、お互い千日手でござるな。」

「・・・横島師兄に、本気の本気は禁止されてるアル・・・」

ならば、ちょこつとだけ本気で言けばいいでござるよー!

「・・・そうアルね!」

私とクーはお互いにカードを構える。

「アデアットー!」

・・・これって局地災害とか、そういうものですよ？

お店を早めに終えて解消に篤で乗り付ける私が見たのは、アーティファクトを呼び出した二人の少女が構えた瞬間でした。

歓声が渦巻き、これからの試合を期待する声が大きかったのですが、私は背筋が冷たくなりました。

あのクーちゃんの「如意棒」は、斉天大聖ですら意識を瞬間的に失うほどの威力だと聞きます。

さらに楓ちゃんの「剣」はドラゴンスレイヤーそのもの！！

どんな惨事になるのか、と結界を張ったのですが・・・。

洒落つけを出したクーちゃんと楓ちゃんのAFが打ち合った瞬間、結界が消し飛んで、会場が半壊しました。

あまりの事に茫然自失の関係者だったけど、なぜか目鼻耳から血を流して倒れている術者が多数いたことが判明しました。

調べてみれば各国のオカルト諜報員であり、各国の胃リーガル工員であることが判明した。

音に聞こえし横島事務所の魔法関係者を調査し、うまくいけばGS資格取得前に拉致してしまおうという乱暴な話も発覚し、オカルトGメンやら政府やらが現れて試験自体の終了を宣言しました。

もちろん、資格はそのまま認める旨の説明があり、今回の事務所からの受験者全員の資格取得が認められたのでした。

お祝いですね、と私が微笑むと、横島さんは苦笑い。

「どこまでも、似たような話になっちまったなー」

？

ああ、横島さんの時のGS試験ですか？

「ええ。あのとときの試合結果も完全秘匿されたんすけど、今回も同じ流れっすかねえ？」

「いいえ、横島君。今回はちょっと違うわよ？」

現れたのは美神美智恵さん。

オカルトGメンの実質上のトップ。

「どういうことっすか？」

「試験結果とイリーガル大量捕縛はそのまま発表して、オカルトGメンで正式に資格取得を保证するわ。」

「・・・あー、つまり、GS協会だけじゃなくてオカルトGメンにも噛ませろ、と？」

「・・・よこしまくん、いいわよねー？」

するりとすり寄る美智恵さんは、背後から横島さんを抱きしめま
す。

ふーっと背後から耳元に息を吹きかけたりして・・・。

「は・・・はふう・・・だ、だ、だめや。わいには、わいには、
まもらなあかん弟子がおるんや、きもちいとかさいきんごぶさたや
なーとか煩惱出したらあかんのやあ・・・。」

横島さん、顔にでてますし、声にでてますよ？

「はあっ！ 何つつ攻撃するんや、この悪の人妻！」

「やだわー、スキンシップよ？」

あかんあかん、と頭を振る横島さんは、バンバンを顔を両手で張ってから顔を上げた。

「国民守るのは国のつとめ、オカルトから国民守るのはオカルトGメンのつとめ、裏取引なんか必要ねえっすよ！」

「ちい、気づかれちゃった」

「まさかの騙す気満々!!」

「いやねえ、冗談よ、冗談」

「くそー、この親子は俺をどこまで色気で騙すきなんや!？」

がながんと自分の頭を近くの柱で打ちつける横島さん。
なんだか懐かしい風景ですねえ。

「騙す気なんてないわよ？ ただ、ちょっとだけ協力してほしいだけなんだけどなあ……。」

だらだらと額から血を流しつつ、横島さんは顔を引き締めました。

「……正式な依頼なは検討します。でも、だまし討ちは絶対いやっすよ?」

「……解ってるわ。あなたがどれだけあの娘達こを大切にしているか。だから、是非とも検討してちょうだい」

そついいながら両手に余るほどのファイルをどこからか引っ張り出す美智恵さん。

「ママ! ちょっと待ってちょうだい!! 横島君のところは美神令子事務所系列、いわば美神令子グループよ! 勝手に手を出さないでちょうだい!」

「大丈夫よ令子。ばんばん霊具を使う仕事を回すから。」

「・・・・・・・・はっ、だめだめだめよ！ 横島君のところは霊具なしの採算が一番なんだから！！」

「あら、そういう依頼もあるわよ？」

「そういう問題じゃないわ！ うちの事務所と横島君のところはいろいろと契約があるの！口約束でも困るの！！」

さすがは美神さんですね。

こつこつ状況を読んでいたとは思いますが、それなりに防波堤はあるみたいです。

「あらー、令子ちゃん。アキラちゃんは冥子のお友達よー？ 令子ちゃんも横島君もお友達だし、それで冥子のグループよねー？」

「あらあら、だったら、令子ちゃんも横島君も「六道」グループかしらー？」

でました、六道親子。

混沌決定ですね。

「あー、冥子ちゃん、ちやうねん。冥子ちゃんと俺らはお友達。これは決定、間違いなし。だから助け合う、これも決定」

ぴつとてをあげていう横島さんを見て、冥子さんは実にうれしそうだった。

「でな、今はなしとつたのは、仕事を誰経由で受けるかって話や。冥子ちゃんかて、友情がお仕事でつながってるなんていややる？

お友達つうのはもつと嬉しくて楽しいもんやから」

「そうねー、そうだわー。横島君はいいこというわー」

心から嬉しそうな冥子さんに比べて、六道現当主は笑顔をひきつけている。

逆に美神親子は「よくいった!」と満面の笑顔。

「冥子、お友達だから仕事も手伝うし一緒に仕事もする。遊びに行くし旅行もする。でも、お仕事をもらうって関係は上司と部下、クライアントとの関係じゃない? 私たちの友情ってそんなものじゃないでしょ?」

「令子ちゃん……。」

感激で涙を流すが式神は暴走しない。

これがアキラちゃんとの修行の成果。

これが横島さんを困い込みたい真の理由。

「まあ、うちも未成年ばかりの事務所つすから、協会保護の元である程度自由にやらせてもらう予定です。」

そう宣言して横島さんは私の手を引き事務所の娘たちの元に歩き出しました。

顔は、そう、家族を率いる大黒柱、そんな表情でした。

……ふふふ、この顔、結構好きなんですよ、横島さん?

第三十九話（後書き）

いやー、まさかの主席無し終了!!

・・・よこっちのときと同じながれっすねw

批判は甘んじて受けますが、この流れが一番自然に感じている神代です。

第四十話（前書き）

一日に二度更新!!

オチですw

第四十話

臨時GS試験は、魔法世界の移民試験的な様相があったはずなのに、いつの間にかGS協会は不穏分子を、政府は工作員や不良関係者検挙による外交カードを、そしてオカルトGメンは、落ちつつあった名声を高める事を得ることができたという、国内三方一両得状態になった。

今回、オカルトGメンが試験に落ちたのですら、会場潜入を自然にするためという後付けの噂ですら信憑性が出てきたぐらいだ。

「まあ、世間というのはそういうものじゃよ」

事務所をあげての免許取得万歳パーティーにお呼ばれたカオスは、苦笑이었다。

カオス自身、次のGS試験に再び出ると宣言している。

その際の所属事務所、横島事務所を指名させてほしいといいにきたというわけだ。

新進気鋭の霊能事務所で魔法関係とも縁が深いともなれば、カオスの研究意欲は際限なし。

加えてユエのミニマリアとマリアの通信機能を自分に当てはめて、外部記憶装置を開発してからは、発明や開発の精度が急激に上がった。

GS世界の注目株が俺たちだとすれば、オカルト開発の注目株はカオスだといえる。

で、麻帆良の秘匿科学と融合すれば、とニコニコ顔のカオスが語るのを見て、誰もが「マッド」と思った。

常駐一步手前の聡美ちゃんも乗る気で、共に高みを目指しましょうとか大騒ぎ。

すばらしいことだとカオスも唱和。
ますます「マッド」だつたりする。

GSは表のオカルトなので、魔法関係じゃない人間もいっぱい呼んだ。

彼女たちのクラスメイト、美神・小笠原・六道事務所関係者、魔法先生や魔法生徒、そしてふつうの先生。

「いやいや、君はすばらしいな、横島君!!!」

「はい、ありがとうございます、新田先生!!!」

ほろ酔い気分の新田先生に捕まった俺は、今日あり得ないほどの好青年だという評価をもらって身悶えしていたりする。

「君が、彼女たちの面倒を見初めてから、成績も授業態度もすべて満点だ。やはり生活を共にし、背中を見せる姿がきいているのかね？」

「いいえ、先生。新田先生を始め先生方が基礎を固めてくれたからこそその結果です。俺なんか、ちよつと方向修正しただけっすから」

「えらい!!! 謙虚にして冷静!!! すばらしいじゃないか、なあ、高畑君!!!」

「ええ、そうですね。僕が二年かかっても正せなかった彼女たちを一年かけず、ですから。教師の自信なくしますね」

「・・・うん? いやいや、高畑君はよくやっているよ。しかし、横島君はそれ以上にうまかったただけだ。」

「いいえ、新田先生、それは違うっす。高畑先生が奔放に育てたからこそ、今の彼女たちがいるんっす。ぜったいっす!」

思わず力説の俺を、グイグイ撫でる新田先生。

「いい言葉だ。心のこもったいい言葉だ。横島君、いつかGSを引退することがあったら、教師になってみないかね？」

「え？」

「言葉に力を込められる人間は、どんな仕事にも就ける。しかし、私は君のような青年には教師を目指してほしいと心から思ってるんだ。」

目を白黒差せた俺をのぞき込むように新田先生。

「君の瞳には、憂いと悩みと、それを制御する賢者がいる。」

「……!!」

「そんな人間は、人間に安心を与えることができるんだ。だから、そんな人間には「先生」と呼ばれる仕事を勧めているんだよ。確かに君はGSとして一流かもしれない。しかし、教師になれば数倍数十倍の人を救うことができるかもしれない。わたしはね、そんな人間こそが教師として子供を守り導いてほしいと心から思っているだよ。」

いつの間にか、周囲の生徒達も大人達も新田先生の言葉に聞き入っていた。

「……ああ、すまないね。教師というのはドコにいても教師らしい。さあ、今日は祝いの席だ、説教は今で終わり。ぱーっというんじゃないか!!」

「「「「はい!!」「「「「」

横島君が教師、ね。

「三年B組、セクハラ先生って？」

「美神さん、横島さんはそんなことしませんよ」

ちよつと怒った顔のおキ又ちゃん。

「そつすね。横島さんは結構誠実つすね。」

一時期とは評価を一転させた魔理ちゃん。

「……誠実かどうかは判断できませんが、頼りがいはございますね」

かおりちゃんは、普段の横島君を知った上で評価を上方修正できた希有の娘じゃないかな？

足下で泣き崩れているタイガーは置いておいて、少なくとも彼女たちの同期の実力者はこれで払拭されたはずだ。

だから、本試験は楽勝でしょう？ タイガー？

「そうだけ、さすがにあれだけの実力者が集まるなんて、早々ないだろう？ だから、次の試験、頑張れよ。」

「ま、魔理しゃん……。」

「……タイガーさん、ずるいですね。幸薄いという強力なアビリ

最近、夏美も自分の本心をさらけ出すようになって嬉しいわ。

「あれ、本心ちゃうやろ？ 本性ちゅんやとおもつで？」

「あらあら、同じようなものでしょ？」

「ちゃうちゃう、本心ちゅたら」「らぶらぶ」で、本性ちゅたら「えるえるー」やからな」

「忠夫さんのに？」「横島さんのに」

「「ふふふふふ」」

実に分かりやすい話だったけど、どちらも私にとっては同じ意味なので関係なかった。

らぶらぶでもえるえるーでも、私にとって受け入れるべき人だから。

「ちづ姉はつよいなあ」

「そう？ コノカちゃんだって、結構強いじゃない」

そう、コノカは強い。

少なくとも、彼女の立場であれば、彼を、横島忠夫の占有権を行使できるであろうし、私であればそうした。

しかし、彼女はそうしなかった。

それは、すでに横島忠夫の心が占有されているから、と。

この世に無き存在に。

それでも彼女は前向きだった。

「うちひとりじゃ、むずかしいんよ。せやから、みんなでラブラブして、横島さんのところをこっちに向かせたるんや。」

少なくとも私は感動した。

自分の恋心ではなく、死ぬ向かい合って生に向かえない忠夫さんの心を救うために自分の占有を失ってもかまわないというのだから、その強さに私は感動し、そして敬意を失うことはないだろう。

その姿は感動的でした。

参加したみなさんが全員合格できるほど試験のレベルが低いわけではないことを私は知っていますが、彼女たちを全員コネで合格させることができるほどバカな試験でもないことをしています。

委員長として、彼女たちのクラスの長であることを誇りに思います。

それ以上に、横島さんには大感謝です。

我がクラスのバカレンジャーの大半を引き受けてくれたばかりか成績上昇を果たさせ、一人バカ状態になったピンクをも救う手腕は、まさに救世主。

加え、私とネギ先生の間を何度も取り持ってくれたばかりではなく、その神髄まで熱演してくれるなんて……。

「やはり、披露宴では一番前にきていただかないことには済みません」

しかし、懸念はあるのです。

宮崎のどかさん。

彼女はネギ先生に一番近いところにいることは間違いありません。現在私の好感度が急上昇しているため、私のイベントが優先され

ていますが、いつでも彼女が気になる位置にいます。

今も、私の反対側でネギ先生をかがいしくお世話しているのが
気になります。

私の手を取るよりも、宮崎産の手を取る方が一回多い！

『いいんちよう、いやしだ、いやしをわすれるな』

はっ！

思わず左右を見れば、視界の端でにっこりほほえむエヴァンジェ
リンさん！

さすが癒し師匠！ 忘れていましたわ！！

ほほほ。本領を思い出した雪広あやかの癒し力、全力全開ですわ

ああああああ！！！！

なんか「いいんちよ」が燃えてる。

まあ、ネギの事であるう事は間違いないだろう。

それはそれ、すでに私の手を放れたことなのでいいんだけど・・・
。。。

『では、かんぱー！ーい』

『『『『かんぱーい！ー！』』』』

「ご近所の幽霊までお祝いにやってくるって、さすが横島さんの事
務所だと思う。」

「アスナ、呑むでござるよー！」

「あ、シロ姉、ありがとう。」

というか、未成年にお酒は勧めないでほしい。

「アスナさん、あなたはすばらしい剣士です。正しい剣士です。これから修行にきてくださいね、是非ともきてくださいね」

お酒を飲んで顔を真っ赤にした龍神さまが、自ら修行に勧誘しにきるってどんな事務所ですか？

「ソナタの剣技に惚れ申した！ 弟子にしてくださいね！」

あー、何度も断ってますよね、人狼の犬川さん！！

「この、駄犬！ アスナは拙者の弟子でござるよ！」

「ならば私も弟子に！！」

「ええーい、よるな下郎！ この方をどなたと心得る！！」

あ、だめだめ、シロ姉だめ！！

「・・・えーつとなんであったでござるかな？ か、神楽坂アスナ、でござったよな？」

せーふ、せーふ！！

「シロ姉！・・・もう。あのですね、犬川さん。私の剣術は所詮魔法や霊力で底上げされた素人剣術なんです。だから貴方が負けている霊力をあげれば、いずれ追いつきますよ？」

「なんたる優しさ、なんたる指導力、さすが我が姫！！」

「拙者の弟子を勝手に姫にするなでござる！！」

さすがに私も変身して、シロ姉と一緒にダブル人狼キックをかま
してしまった。

修行が足りないなあ。

横島師兄には怒られるかと思った。
でも優しく撫でられただけでだった。

「怒らないアルか？」

「もう十分自分で責めただろ？」

横島師兄は修行じゃ鬼だけど、こういう時は優しい。
本当に優しすぎて困る。

「それよりも、GS免許取得おめでとう」

「・・・ありがとう、アル」

こうやって正面からいわれると嬉しいな。
心底嬉しく感じるな。

だから、正面から、ぎゅっとしてみた。

「なんだ、甘えんぼだな」

「・・・甘えたいのは横島師兄だけアルよ」

「そりゃ光荣だな。」

そういつて、だきしめてくれて、それで・・・

「という夢を見たアルよ」

「・・・夢でござるか」

試合会場を吹っ飛ばした私たちは、さすがに気絶していた。その間になにがあったかという話からこんな話になったアル。ちよつと恥ずかしかったけど、乙女っぽい内容よ？

「拙者はもう少し熱烈でござつたなあ。」

「ね、熱烈？」

「熱烈でござる。」

「聞いていいアルか？」

「いいでござるが、十八禁でござるよ？」

「・・・聞きたいアル」

.....

.....

..

.

とりあえず、自分が子供だったことを自覚したアル。

人外＋大人組が酒盛りをしていた。

妖怪ぬらりひょん。

人外デスメガネ。

吸血姫エヴァンジェリン。

半吸血鬼ピート。

人外が一番年下なのが恐ろしい話。

「しかし、ピエトロ・ド・ブラドー。貴様まだ「克服」をしておら
んのか。」

「・・・いやぁ・・・結構つらいですよ?」

「克服してしまえば、何ら生活に問題ないわ」

「克服」とは、弱点の克服のこと。

エヴァンジェリンはすでに殆どの克服は済んでおり、あとは流水
で泳げれば完全だというのが、ピートは日光以外克服が完了していな
い。

半分人なので、その辺の克服はエヴァンジェリンより楽なはずな
のに、だ。

もちろん、真祖でもダンピールでも克服はつらいものだが、克服
しているからこそ広がる戦略もある。

それを理解していながら、人を守る仕事に就こうという人間であ
りながら克服していないのは、エヴァンジェリン自身許せないもの
であった。

「はあ、あのエヴァンジェリン様に、こつこつ説教を食らうようになるとは思わなかった」

「バカものめ。当時から克服に関しては口がチギれるほど注意しておったわ」

「ああ、こつこつ言われ様も懐かしいことです。」

「はん、ふぬけたな、ピエトロ・ド・ブラドー」

「そつこつエヴァンジェリン様は丸くなりましたよ？」

「ふ、いいよるわ」

ピートの一言に、エヴァンジェリンは苦笑いだ。

「そつこつじゃな、エヴァはずいぶんと丸くなったものじゃ」

柔らかな真祖の顔を見て、学園長も口が軽くなる。

「ふん、一番のストレスの元が無くなったのだ。丸くもなるう」

たしかにそつこつだろつ。魔力も行動も封じられる。

それは緩慢な死刑に近いに違いない。

「ま、そつこつだね。今も外にでれない状態だったらどうなっていたや
ら。」

「どうにもなつていないと思つぞ？ 百年一日の如くだ。退屈な三年を終えて一年に戻つていただろつ。」

「いや、ネギ君もいるし……。」

「それは忠夫がいなければという話であるう？ そつこつであれば、坊ややMMの駒としてしゃぶられ、そして魔法世界を救つという名目の生け贄にされるだけだろつな。」

高畑の問いには甘えがあつた。

いまがいいのだから、少し過去を考えてみよう。
しかし、エヴァの切り替えしに肝を冷やす。

「・・・否定できんのお」

「そうですね、今となってはそのレールが引かれていたとは思えませんね。」

そう、どういつ筋道であっても、ネギ＝スプリングフィールドという英雄の生け贄を必要としたらう。

それを理解してなお過去を検討しようなどと考えることなど出来はしない。

会話は続く。

しかし、過去はすでに語られない。

エヴァの瞳は前を向いている。

今まで光を目指しつつも見つめることができなかつた未来という光に向かつて。

「で、エヴァは卒業したらどうするんだい？」

「とりあえず、忠夫のところで修行せねばならないからな。高校にエスカレーターだ。」

「なっ、では、麻帆良にまだおるのかの？」

「居ては不味いか？ とりあえず、事務所に所属するなら高校にはいるのがルールだといわれているのでな。仕方ないので高等部に行こうと思ってるのだが。」

「も、もちろんOKじゃ！・・・警備の仕事もしてくれるのじゃる？」

「むろん、事務所の仕事ならするが？」

「(G)じゃ、横島君！！」

小さくガッツポーズをする学園長をみて苦笑いの高畑。

「エヴァンジェリン様は、GSになるのですか？」

「ん？ まあ選択肢の一つだがな。ゆくゆくは横島事務所の共同経営者なんていうのも有りだと思っておるぞ？」

「「「ぶー」」」

思わず口に含んだものを吹く三人をみて、満足そうに笑うエヴァ。ともあれ、有給休暇や連休は、給金を使って京都の某別荘を利用しようとして心に決めていたエヴァンジェリン。A。K。マクダウエルであった。

みんな、前に向かっているんだなー、と思った。

アスナたちは、日本で持っているだけで食いつばぐれないとまていわれるほどの免許を取った。

GS資格免許。

正式な名前はいろいろとあるけど、これを持っていて修行が終われば正式に「GS事務所」を開くことができる。

報酬は莫大、仕事は波瀾万丈、夢と冒険の毎日、なんていう風に思っていたら違うといわれた。

「亜子さん、それは違うのです」

GS見習いとしてユエがしていた仕事は実に地味だったけど、と

ても大切なことだという。

未来の大地震を納めるために、日々の作業を積み重ねることで小事に納める。

依頼も収入も無い仕事だけど、地域を救う大仕事なのだそうだ。

最近ではその実績が必須という事で、GS協会やオカルトGメンでも仕事として成立させようとしているそうだけど、受けが悪く派手ではないので嫌われている仕事だという。

GSというとしても「踊るGS」みたいな活躍を思いつくけれど、実際はもっと泥臭いと教えてくれた。

「亜子さん、どんな仕事も同じなのです。泥臭く、小さな事を積み重ね。音楽も指の皮がいかにもむけるほど地味に練習するにかかっているですよね？」

ずっと私は息を吸った。

そしてとめて、ゆっくりと吐く。

「そうだね、そうだった。勉強も仕事も音楽も、地味な積み重ね、そうだね」

「そうですね。」

今日はパーティーに来てよかった。

本当によかった。

六道のメイドふみさんが持ち出したアキラのビデをを皮切りに、小竜姫様がアスナと楓の試合を持ち出し、ワルキューレもコノカの試合を持ち出すと、全員分の試合が集まるのに時間はかからなかった。

あれやこれやと話しながらも批評解説が飛び交って、わりと和やかな話し合いだったはずだ。

が、いつの間にか妙なことになった。

誰が一番、か？

これは不味い流れだ。

横島さんに視線を送ったが、すでに撤退済み。

伊達さんもすでにいねえ!!!

くそ、私も逃げなくちゃ!!!

「千雨さん、ちょっとまってください。」

むんずと私の肩をつかむのは千鶴!!!

「や、やめろ。わたしや、あんな化け物対戦にや興味ねー!」

「いえいえ、もちろん対戦しろだなんていいません。ただ、四方を結界に守られて、人界から隔絶された例の場所までお願いしたいと……。」

くそ、横島さんたち、見えてたな!!!

……にがさねえぞ。

「そついやあ、マクダウエル。横島さんは？」
「……！ 逃げたな忠夫！！」

ぴつと出したパクティオカードで横島さんを召還するマクダウエル。

「なっ、なぜ気づかれた！！」

「ふん！ 従者を見捨てるからこういう目に遭う」

「いややーーーー！ いやいのもこわいのもいややーーーー！」

「往生際が悪いぞ！ 一位になったものは忠夫と寝屋をとにもする権利を受けるといふ事がいいな！！」

「「「「はーーーーい！！！！」「「「「「」

なぜか魔鈴さんまで参加。

うわー、まじだぞ。

「というわけで、長谷川千雨。妙神山まで頼むぞ」

「おっけー、じゃ、村上、チャンバーな」

「え、なんで？」

「ストーミングレベル最強だろ？」

「ぐぎやーーーー！！！！！！」

こうして真なる最強主席決定戦が行われた。

結果は妙神山修練場壊滅。

加えて参加者全員、神魔最高責任者からの説教。

労働奉仕で修行場再建となった。

・・・自業自得だよな？

第四十話（後書き）

てなわけで、対外的な臨時GS試験が終わりました。

こうして有耶無耶のうちに各勢力が横島事務所を守ろうと動きます。

以降は修行編ですので、いっそう地味になる予定ですが、虎視眈々と出番を狙っている親友なんかもいるので油断大敵？

第四十一話（前書き）

えー、いろんな人の視点を書きました。

お楽しみいただければ幸いです

第四十一話

GS協会、というよりも唐巢会長からの要請がきた。

「・・・というわけで、様々なレベルの様々な仕事を、いろいろな事務所の人たちと研修してみないかい？ 横島君の所は、いろんな権能を持つGSが一杯だからね。個々に修行をさせるより、より近い権能を持つGSに学ぶところが多いと思うんだよ。というか了解してくれないかな？ 本当に突き上げが厳しくてね、毎日の抜け毛が、抜け毛が、ががががが・・・。」

要請じゃなくて、哀願だったけど。

そんな訳で、うちの娘達こに聞いてみると、見事に流れを読み切っているようだった。

「あたしは、シロ姉のところですね？」

アスナの言葉に頷いた後、さよちゃんにも視線を送る。

「で、さよちゃんも美神さんの所だな。」

「はい。おキ又さんの権能ですものね、これ」

パクティオカードを愛おしそうに見つめる「さよ」。アスナも同じく微笑んでいる。

「わたしは、エミさんの所ですね。」

通常状態の夏美ちゃん。

「千鶴ちゃんもエミさんの所に頼む」
「はい、忠夫さん。」

これで、村上夏美暴走編対策はOKなんだけど、積極的にいじる事もあるので悩みどころではある。

「アキラちゃんとユウナは、冥子ちゃんの所に頼む」
「はい、横島さん」
「えーっと、私も？」

ちよつとびつくり目のユウナ。

「ああ。冥子ちゃんの霊能は後衛型なんだけどな、彼女がそれに気づいていないんだ。だから逆にこつちから教えてあげて、それなりに考えてもらおうと思つてな。」

「・・・もしかして積極的に私たちを売るつもりですか？」

「いや？ GSの総本家に「魔法使い」をアピールしにいくだけだぜ？」

「じゃ、優秀なセールスマンにならないと。ね、アキラ」
「うん！」

胸を張る若年巨乳コンビ。

・・・アカンアカン。
そんな俺の隣で腕組みの雪之丞。

「なあ、横島。」
「ん？ なんや？」
「・・・新人GS同士の研修つて必要じゃないか？」

あー、そういうこと？

まあ、受け入れるのは吝かじゃないけど……。

「……おまえも苦労してるな、雪之丞」

「……すまん、ほんと」

そんなわけで、週末だけ弓さんと一文字さんを受け入れることになった。

「……ついでだからさ、六道女学院の霊能課の研修も受け入れっか？」

「そこまで自棄になることはねえだろ」

「いやいや、そうじゃなくて。麻帆良ほど退魔の研修に向いてる土地はねえだろうし、わざわざ遠出しなくても往復二時間で来れる修行場としては最強だろ？」

貸し借りで言えば借りが多くなっている最近。

ここで一気に巻き返せるカードを切れば、俺たちが麻帆良を拠点とする上で、これ以上の好条件はない。

雑霊相手の宿泊研修よりも経験値が高く、認識にも大きく役立つこと請け合いだ。

「そうか、なら、ありかもしれないねえ。」

「で、その試験運用つうことで弓さん達を受け入れればいいって事だ。」

「たすかるぜ、横島」

なーに、なんでもねえさ。

というわけで……。

「愛子、関係各所への連絡と契約書の借り受け渡し準備を頼む。タマモは学園と六女の調整と打ち合わせを頼む。千雨ちゃんはマトメとGS協会への報告、あと三人で契約書の詰めを頼む」

「了解」^{ラジヤ}

「で、エヴァとかユエちゃん達残りは通常業務と研修受け入れつうことで、頼む」

了解の意味を込めて頷く全員を見渡して、俺は内心嘆息する。

俺、なんか柄にもないことを言ってるなあ、と。

さすがにエヴァは無理だったみたいね。

手元の研修計画表をみて苦笑いしてしまった。

シロとおキ又ちゃんは大喜びで、アスナちゃんとさよちゃんが研修にくると騒いでいる。

確かに戦力倍増だし、二人とも霊具を全く必要としないタイプなので出費は最小限と言っている。

加えて、この契約書。

魔法世界の足場になることと二人の立場を守ることを意識すれば、給与面などは勝手にして良い契約になっている。

・・・横島め、あたしを試してるな？#

ここでガメツく給与を削れば、その分を横島君が負担するつもりなのだろう。

逆に優遇すれば、以後に続く「魔法使い達」の給与の基準にしてやるうという事に違いない。

つまり、私の基準で出しすぎではなく、今後の基準にもなりうる給与基準を出してみろ、と言ってきているのだ。

ふっふっふ、この美神令子に勝負を挑んだからには、それなりの結果を返してあげるからね、横島君

とりあえず、麻帆良からでるなら美神令子に頼ろうと思わせるだけの環境に浸してやるんだから。

想像以上の戦力を回してもらった。

横島には感謝、神父には大感謝なワケ。

前に行われた臨時GS試験で落ちたタイガーには悪いけど、あれは落ちてしかるべき試験だったといえる。

GS協会の一部の暴走のせいで、数年にわたって浸透するはずだった魔法世界の第一陣が、一度に一つの試験に集まったのだ。

GS見習い程度では、一撃で散らされるのが分かりきっていた。逆に言えば、トップクラスの見習いを今回の臨時試験で潰してもらったのだから、次回のGS試験はかなり楽になることが見受けられる。

とはいえ残念なのが、補助霊能として優遇されるはずだったネクロマンサーが通常形式のGS試験に通ってしまったため、補助霊能

技能者に対する優遇措置が休止してしまったことだろう。

が、今回の試験で学んだことを生かせれば、次回の試験は通るはずだとタイガーの発破をかけると、実にいい笑顔で感動して見せた。

同じ「モブ」出身とはいえ、横島とはずいぶんと離れてしまったように感じる。

ここは一つ、近づけてみるべきだろうか？

「夏美ちゃんとエミさん、それに千鶴ちゃん……。美女と美少女の最高職場じゃー！ー！」

うん、うちのオフィスから離そう、というか横島預かれ。

速攻で携帯メールを打ったところ難色を示されたが関係ない。

高校は魔鈴のゲート経由で行けばいいし、なんなら横島の行っている高校に短期で入ってしまったても良いはずだし。

というわけで、横島、面倒みる。

メールの押し問答の末、修行は引き受けるが、仕事はウチでと言うことにされてしまった。

横島め、交渉が上手くなったワケ。

まあ、タイガーはさておき、夏美はいい感じだし、千鶴って娘も私に通じる何かを感じつつ、前衛ができるという。

うー、このままの体制でオフィス運営したいわ。

ピートも引っ張ってこれれば、美形事務所で売れるわね。

お母様からのお話で、アキラちゃんの研修がうちに来る事を聞いたの。

あんまりにも嬉しくて、みんなと大喜び。

このまへの試験のときにアキラちゃんが見せてくれた連携を私も練習していて上手く出来たこともあって、嬉しさが何倍にもなったわ。

それに加えて、アキラちゃんのお友達もうちで研修してくれるって言うの。

横島君みたいな感じの女の子、ユウナちゃん。

試験の時も格好よくて、是非ともお友達になりたいと思っていたの。

だから本当に嬉しくて。

「横島君って、本当に冥子のことを考えてくれてるわ〜」

今回の研修で、私とアキラちゃんとユウナちゃんが、楽しくできる訓練やお仕事なんかを考えてくれた横島君。

嬉しいわ〜、本当に嬉しいわ〜。

横島君に何かお礼しなくちゃいけないと思うわ〜。

何がしてあげられるのかしら〜？

驚きすぎて声もでん。

横島君の事務所から提案された内容は、実に驚きに満ち溢れたものじゃった。

GS見習いや研修を受け入れて、学園防衛の穴に埋める計画もある事ながら、六道女子と提携し、交換留学の形式で中期研修に招き入れつつ魔法生徒を送り出し、双方の事情と社会になじませるといふ内容には、是が非もなく飛びつくだけのウマミがあった。

さらに言えば、麻帆良運営の上で六道からの援助があることはプラスにしかならず、魔法使い達の「移民」にも大いにプラスだった。こんな話を、何の要求もなしに持つてくる真意を問うた所、横島君は照れくさそうに言った。

「魔法側の事情からもう抜けられないほどドツプリっすから。」

つまり、身内を見捨てられないと言う気持ちでワシ等をみているという事らしい。

実に甘い理由じゃが、実に嬉しい理由じゃった。

寄るべき背後組織を失った麻帆良には得難い援軍じゃろう。

「……ふむ。実務面はワシ等に采配させてもらえるかの？」

「よろしく願います、学園長めいひびき」

……なんじゃろう、実にいやな感じを受けたんじゃが……？

横島君が正面から話を受けてくれたのは嬉しかったが、思わぬ所から、というか予想すべき方向から横やりが入った。

オカルトGメンの美神美智恵君と日本政府関連である。

美神くんは、「魔法世界との接点はうちにもあるんだから、こっ

ちにも噛ませてほしい。」という直接的な話だったが、政府関係からは「魔法世界との折衝は政府間で行うものだ。越権行為ではないか」というバカバカしいものであった。

美神君の方へは「横島君と直接詰めてくれ」とにべもない返答をしておいたが、それなりに策を弄した後で行動をするだろうから置いておける。

ただし、政府関連については正面から受けなければならないので、関連省庁関連部署、各政治関連への圧力を強める事にした。

魔法世界との霊能的交流はすでに閣議決定で承認されており、その後の政府の不手際は協会に責任はない。

今回の臨時GS試験にしても、政府承認があっても協賛すらない事なので、後付けで騒がれても困ると言うものだ。

それだけの先を見ることが出来ない相手に対して諭しても仕方ないので、現実を突きつけることにした。

今回の試験で、完全な魔法世界にしか戸籍が無い人間は三人だけ。ほかは魔法も使える一般人。国が国民の主権を主張すべき相手ですが、何か？と。

罵声はこなかったが、不満は数十倍もぶつけられた。

が、その不満をぶつけた部下を叱ったという事実報告とお詫びという書状が何通もきたところをみれば、こちらの意見が通ったとみていい。

あとは横島君を通して魔法世界と連携がとれれば完璧だろう。

ふう。私も横島君も、一年前では思いもしなかった立場に立ってしまったね。

君が高校を卒業したら、卒業祝いにワインの一本でも送ろう。

なに、聖者の血だ。

法律も何もあったものではないのだよ？

私がつこり微笑むと、横島君も余裕たっぷりて笑う。
実に苦々しい思いを胸の奥で感じつつ、直接交渉を開始。

「うちでも研修しない？」

「年齢制限がありますよね？」

第一回戦、敗退。

「あら、六女の研修を受け入れているのはご存じ無い？」

「実務じゃなくて、訓練と見学っすよね？」

第二回戦、敗退。

・・・手強い。

「・・・そんなに、私のこと嫌い？」

「うちの子には、死なない環境で研修してほしいんすよ、出来るだけ」

「・・・うつ、ぐう・・・。」

完全敗北。

血を吐いて倒れるかと思ったわ。

「しかしだね、横島君。何もGS現場一線での戦いをしてほしいわ

けではないんだよ」

隣の西条君、いいこと言った!!

「君の所の、綾瀬君かい？ 彼女の活動はめをみはるものがあったね。出来ればこちらが研修させてほしいぐらいなのだが、オカルトGメンまで麻帆良に入り込むと、政治的にどうもね。」

「だから人員を貸してくれ、教導してくれ？」

「正直に言えば、そのとおりだ。」

なるほど、と深く考える横島君。

以前は子供の喧嘩のように争っていた二人だけど、最近は実に男の顔をするようになったと思う。

「教導、っていうなら、指揮権はないものとして考えていいですか？」

「最低限の指揮権は持たせてもらうが、人事権は掌握しないことを保証する。あと、政府からの横やりもすべて突っぱねる方向で約束しよう」

「民間からの無茶からも守ってくれるか？」

「・・・確約する」

瞬間、横島君と西条君の手が握られていた。

・・・もしかして私、いらぬ子かしら？

ともあれ、ユエちゃんとか何人かを派遣してもらえることになった。実務経験者の派遣ということで、すごく期待してしまった私だった。

その期待は、いい意味で裏切られることになった。

最近、魔法使いとしての修行が進んでいないと感じている、ネギ
「スプリングフィールドです。」

もちろん、こんな事を打ち明けようものなら、ものすごい勢いで
事態が動くこと請け合いなので、自己鍛錬にとどめています。

・・・魔改造は遠慮します。

そんな中、3Aから何人もの「GS」が生まれました。

横島霊能事務所に参加している方々で、いわゆる「横島パーティ」
」の参加者です。

パーティーの中で、長谷川さんはGS試験を受験しませんでした。
なぜかと聞いてみると、苦笑いで肩をすくめる。

「私は切り札の一枚だからな。露出は少ない方がいい」

実に戦略的に正しく、実に賢明な判断でした。

長谷川さんのAFは、恐ろしく強力で恐ろしく反則です。

彼女のAFが表の世界に公表されれば、かなりの確率で国や世界
の干渉を受けるだろうことは間違いありません。

つまり、戦略的な判断を横島さんから任されていることに相違無
いのです。

僕は心からの尊敬を込めて長谷川さんを賛美したのですが、彼女

は苦々しく笑います。

「あのな、ネギ先生。自分が求めるものを相手が持っているからっていつても、相手が偉い訳じゃないからな？」

「え、でも、でも、ぼくは僕の望む形の未来に近づぐために……。」

「で、勘違いする。何でも出来る万能型の天才なんか、この世界に何人もいない。そんな万能人間も一点集中型の天才には負けるんだ。自分の出来ること、自分のやりたいことに集中して才能を磨くべきだと思っぜ？」

「で、でもでも、何でも出来る方が……。」

「そんな奴に仲間なんて必要じゃないんだ。おまえには宮崎や雪広がいるだろ？」

……!!!

僕はまた勘違いをしていたみたいです。

僕はあの戦いで学んだはずだったのに。

僕はあの修行で学んだはずだったのに。

僕はあの「魔改造」で学んだはずだったのに……。

「あのなあ、ネギ先生。私がいくら言葉を重ねても、ネギ先生が普段どう感じてるかが一番重要だぜ？ 今悩んでいることを無理に解決なんかしないでいいんだ。でっかい悩みはそのまま抱えて進め、時間が解決する問題の方が多いんだ、な。」

「……はい、長谷川さん！」

でっかい悩みは抱えて進め。

僕の胸の内に書き込まれた至言の一つになりそうです。

最近、横島君の関係者に純粋な霊能者が増えだした。

学園防衛を研修に使うだなんて、とガンドルフィーニあたりは怒ってるけど、私や弐集院あたりは歓迎している。

異なる体系の技術や知識、そして戦略は実に参考になるし、我々の在り方にも影響がある。

先日來、私の元に研修で来ることになった「一文字」君は、強面の私に物怖じせず、実に真っ直ぐに好意を寄せてくれる。

そんな様子に疑問を感じて正面から聞いてみたところ、彼女は微笑む。

「先生は、見た目マフィアっすけど、いい先生だって映画で知ってるっすから。」

正直に言う。恥ずかしかった。

しかしそれ以上に嬉しかった。

無理矢理、それもだまされるように出演した学生映画だったが、このような評価がいつまでもついて回り、見た目の誤解を和らげられる。

実に嬉しい。

しかし……

「そんなにマフィアかね、私の見た目は。」

「はい。見た目はマフィア、声シチリアン、その実カモツラ、て感じっすよ?」

一文字君の意見を聞いて、周囲の魔法生徒はなぜか拍手。

そうか、そこまでか。

・・・妻に相談してみよう。

無理矢理ねじ込んだ形の麻帆良研修でしたが、いつの間にか六道の正式研修という形になっていました。

横島さんの政治力が働いた様子です。

学年だけで言えば、一学年上なだけの横島さん。
しかしその影響力は計り知れないものがあります。

GS協会、神魔、魔法世界。

聞く話によると月神族にも影響力があるとか。
わずか18、それも霊能の一族ではない一般人出身者としては破格の状態といえると思います。

そんな意味では、その影響力の庇護下に入れたことは存外の幸運であり、雪之丞のおかげの贖罪ともいえます。

むろん、その点を自分の実力と勘違いすることはありませんが、日頃の積み重ねの結果と言い切ってもいいのではないかと感じています。

「かおりさん、参りますわよ!」

「ええ、高音さん!」

魔法世界で知り合った、高音=D=グッドマンさん。
彼女とは呼吸が合う。

「「愛衣^{さん}、遅れないでくださいね！」」
「は、はい!!」

彼女の後輩である愛衣さんも、なんだか六女の後輩みたいで可愛いかもしれない。

なにより……。

「いきますわよ!!」「よくつてよ!!」
「はあああああ!!!!!!」

この一体感、なんでしょう、こう、すごい!

「横島さんには感謝ですわ! かおりさんみたいな人を紹介してください!!」

「私だつて大感謝ですわ! 高音さんみたいな方と引き合わせてくれて!!」

「あーん、私の分も残してくださいー!!」

ふふふ、このまま横島さんの事務所で修行つてわけにはいかないかしら?

六女のみんなには悪いけど、ウルスラへの交換留学は私が手に入れると心に決めてしまったわ。

もちろん、高音さん、六女に行つては嫌ですわよ?

「もちろんですわ、かおりさん。大歓迎ですわよ!!」

「嬉しいわ、高音さん!!」

躍動的で刺激的で、雪之丞が麻帆良から出たがらない理由の一端を感じた私は、この霊的な成長期を過ごすにふさわしい環境での新生活を夢見ていた。

「背中を預けることが出来る「相棒」と戦える、こんな幸せな環境が他にあるかしら？ 高音さん」

「無いわ、ありませんわ！」

惜しむらくは高音さんが今年卒業だと言うこと。

お互いに惜しむ環境ですね。

「でも、かおりさん。あなたのように中谷後を任せられるかもしれないと言うこと自体が私の幸せよ。」

もう私たちの中ではウルスラ留学が決定していた。

・・・横島さんに頼るしかなさそうだわ。

第四十一話（後書き）

かおりちゃんの視点は書くつもりなかったんですが、書いていたら暴走してしまいましたw

第四十二話（前書き）

さて、日常修行編の続きです。

横島事務所の混沌が、世間を汚染してゆきますW

第四十二話

「さて、本日の訓練に協力してくれるのは、この子たちよ」

先ほどから注目を浴びているのは、隣に立つ男性たちが有名なこともあるけど、私自身が規格外な事もあると思うのです。

頭の上にチャチャゼロさん、腕に抱えるAFのミニマリア。すでに頭の暖かい娘状態なのです。

「こつちの二人は知ってるわね？ 噂の横島GSと伊達GSよ」

お二人は業界でも有名です。

禁呪「魔装術」を極めた伊達さんと神魔にとどろく有名人の横島さん。

この二人を知らない関係者はいないのです。

「それに、横島君たちの弟子に当たる「綾瀬ユエ」ちゃんよ」

か、か、勘弁してほしいのです！

その紹介では、私も「バグ」扱いなのです！！

「彼女はこれでも妙神山の修行にも通っている新進気鋭のGSよ」

おお、とスゴクドヨメかれてしまったのです！

ああ、なんで嬉しそうに頷いているですか、お二人とも！？

「まあ、戦力で言えば、ここに集まってもらった人間で一对一で綾

瀬に勝てる奴はいねえだろうな。」

「そうやな、ユエちゃんはかなり手強く訓練したからな。サバイバリティーレベル高いで」

二人の賞賛にさらにどよめく人たち。

……何の恨みがあつて……。

「つうてもな、自衛以上の行為はせん。それが今回の訓練内容や」

しんと静まる周囲。

「自衛つて聞いて気が抜けた奴いるか？ そいつ等全員不合格だ。

自衛つうのはな、最後まで自分の命を守りきれんっつう技術体系だ。どんなに過酷な現場でもどんなに悲惨な現場でも生きてかえつて報告が出来なきや意味がねえ。」

ゆ、ゆ、雪之丞さん、格好いいです！

「なにしろユエちゃんは、あの麻帆良の戦場を無傷で駆け抜けることが出来るんや。その技術を習得するだけでもプラスやろ？」

よ、横島さん……、勘弁してください。

「そんなわけで、格闘講習は横島君と伊達君。そして霊的治安講習は綾瀬さんをお願いすることになってます。みんな、予算が少ないから怪我しないようにね。」

治療費も惜しいと言つことですか、なんともはや。

「ちやうちやう、治療はヒーリングの訓練にするから、予算はかけ

ませんつうこっちゃ」

・・・ああ、なるほど。

確かに、初期の訓練当初、コノカさんのレベルが一番あがって
ました！

なるほどなるほど、実に勉強になります。

「ケケケ、切り刻ンデヤルゼ・・・。」

「チャチャゼロさん、約束通り、皮膚一枚までですよ？」

「髪ノ毛ハ、無制限ダツタヨナ？」

「はい、横島さんと伊達さんもOKです。」

「ケケケケケ」

「「おいおい！ そりゃねーだろ！！」」

「お二人の訓練にもなりますので。」

「ケケケケケ」

その日、チャチャゼロさんに全てを剃られた男子局員を抱えるオ
カルトGメンが、宗教組織に変わったという噂が流れたのです。

内心、あのロン毛の人が剃られなかったのが少しだけ残念な
のでした。

ネクロマンサーの笛を反響範囲ぎりぎりまで干渉させて、広域低級

霊除霊をわずか三分で行ってしまったのが奇跡ならば、悪霊が集合してA級まで力を付けた存在を、たった二人で散らしてしまうのも反則だった。

ダブル死霊使い、ダブル人狼。

恐ろしいまでの攻勢組織だ。

こんなの間近でみたら、ママも黙っていないだろう。

うちの事務所ごと接收とか言い出しかねない。

というか、横島君の事務所を接收しないのも「麻帆良」であるからだけで、あれが在野の事務所だったら強制執行で接收しているに違いない。

「みかみさーん、こっちはおわりましたあ〜」

「ご苦労様、さよちゃん。」

「美神さーん、こっちも完了ですー」

「アスナちゃんごころうさま」

そんな挨拶とともに二人は双方書類を引っ張りだした。

何事だろうと思つてのぞき込むと、それは現場報告書だった。

何時から何時までかかつて、道具はなにを使って、相手の霊位と規模・数、そして依頼書との差が克明に書いてあった。

「・・・えつと、これ、は？」

「え？ ああ、あの、うちの事務所のやり方で、仕事が多いから細かに書き込んで資料に残すってことで・・・。」

「あ、あの、何かまずかったですか？」

「まずくないわ！まずくない！！ これからもおねがいね！！！！」

くそー！！！！！！！！！！ 横島ー！！！！！！！！！！

こんなに来るワードをよこしやがってえーーーー！！！！
私を羨ましがらせて内蔵ちぎれさせるつもりかあーーーー！！！！

だめよ、絶対にだめ！！

この子たちを戻す？ 出来る分けないじゃない！！
がーーーー！！！！

横島ーーーー！！！！

事務所に戻ってきてえーーーー！！！！

この子たちと一緒ににはたらいてえーーーー！！！！

「み、みかみさん、全部声にでてますよ？」

「あ、あははは、ちよつと嬉しいかも。うちの事務所では、事務関係できない子なんですよ、あたしたち」

「愛子さんみたいには行きませんよねー、アスナさん」

「そつよねー、愛子さんは偉大だわ」

く、くくくく、やはり愛子ちゃんを口説き落とすべきなのね、
私は。

愛子ちゃん、みてなさい！！

最高の雇用条件を叩きつけてあげるんだから！！

「冥子さん、結界をお願いします！」

「わかったわ〜」

前衛のユウナちゃんは、まるで私がすべきこと全てを知っているみたいに感じるわ。

「冥子さん、いきます」

「わかってるわ。アジラちゃん！」

アキラちゃんはまるで私の分身。

というか、目指すべき未来という感じ。

「さ〜、みんないくわよ〜」

「はい！！！！」

なんかね、みんなといるのってすごく安心できるの。

アキラちゃんやユウナちゃん、そして十二神将。

・・・本当はね、ずうっと一緒にいたい。

でも、それはダメだってわかるわ。

私が何時までも成長できないから。

私が何時までも一人前になれないから。

今ならわかるわ、なにが足りなくてなにをしなければならぬか。

「ユウナちゃん、前衛から下がってちょうだい。」

「はい！」

「アキラちゃん、バサラちゃんを吸引して、最後にユウナちゃんが仕上げで切り込むわ〜！」

「はい！！！！」

みえるわ、みえるわ、導かれた正しい結果が見えるわ。

「冥子さん、そろそろおなかいっぱいです!」

「冥子さん、一気に行きます!」

さあ、みんな。

「ユウナちゃん、GO! アキラちゃん、アンチラちゃんとGO!」

「はい!」

私は、ビカラちゃんとともに進む。

私が本陣なのだから。

毎日のように処理している書類の中で、六道からの感謝状が毎日混ざっている。

婦人曰く「冥子が人を使う自覚を『ビシバシ鍛えられてるの』」
ということ。

アキラちゃんやユウナからの報告でも同様で、仲間と連携をとれるという経験が、尋常じゃない経験値になってレベルを押し上げて
いるらしい。

まあ、ほれ、美神さんやらエミさんあたりと仕事しても、失敗を
分けあうという認識しかしていなかったわけ。

そんな冥子さんからすれば、自分が守らなくちゃいけない女の子

とともに仕事をする経験はプラス以上だと思っていた。

結果が出てなによりだ。

美神さんからは、電話・メール・直接交渉とまあ多彩な移籍嘆願がきている上に横島事務所の運営システムについての説明を求められている。

あの現場で簡単な書面化をするというシステムが気に入らなかったらいい。

美神事務所では、昔から書面は美神さんしかしていなかったので、事務にかける労力軽減は本気で必須だったりする。

まあ、うちも最初は苦勞していたけど、記入に苦勞していた部分なんかは現場で書いてしまえば早いということではじめたけど、わりと便利で、思いついた愛子に感謝感激だったりする。

で、代わりにこちらから抗議しているのがエミさんのところ。

本気で夏美ちゃんと千鶴ちゃんを週末拉致しやがった。

確かにお世話になっているので、多少の無茶は許すけど、海外研修ってなによ!?

ベガス研修って、ぜったい勧誘だろ?

まあ、千鶴ちゃんも夏美ちゃんも理解していないっばいけど。

「主役っぽい人たちから、粗方むしつてきました」とほほえむ夏美ちゃんの怖いこと怖いこと。あと千鶴ちゃんの「これで式の費用は完璧ですよ、忠夫さん」も怖かった。

まじ、人生詰んだかと思っただ。

それはさておき、海外研修だのしているエミさんも、弟子がいなわけではないけど、その弟子がうちに通ってきてる。

「・・・横島しゃん、ここは天国ですかのお？」

茶々丸ちゃんにお茶を入れられ、上げ膳据え膳の食事、そして自分の能力が賞賛される世界。

・・・まあ、タイガーにとって天国かもしれんがな。

「・・・わっしも、ここに住みたいのお・・・。」

タイガー、タイガー。

思わず泣いている雪之丞が肩をたたく。

「・・・タイガー、おまえも「人間以上」の中核だったたる？ 忘れんなよ」

「そうだ、タイガー。おまえは神魔も欺く幻術使いなんだぞ？」

「横島しゃん、雪之丞しゃん・・・。」

なんつうか、必要以上にうちの事務所では幻術に対する評価が高い。

本家本元のタマモやら俺やらが反則的な使い方しているので、その効果が本格的に認められているのだ。

もちろん、それを破るための訓練も本格化しているので、慢心している足下をすくわれるのだが、それでも敬意を正面からぶつけられて困惑していたタイガーが、ここまで自信を持てるようになったのは環境のおかげだろう。

エミさんも良く見てるよ、うん。

でも、海外拉致は勘弁してください。

「横島さん、そろそろ行くです。」

「おう、じゃあ、エヴァちゃんと気をつけてな。」

「安心しろ、忠夫。教導は私が引き受けるからな」
「ケケケケケ、今日こそ ロンゲヲ剃ツテヤルゼ」
「チャチャゼロさん、ガッツです」
「マカセロ！」
「はははははは」

実に楽しそうだなあ、ユエちゃんとチャチャゼロ。

「ああ、姉さんがあんなに楽しそう。」

茶々丸ちゃんも嬉しそうだなあ。

エヴァちゃんもネギの指導で目覚めたのか、オカルトGメンの教導に喜びを見いだしている。

時々俺たちが行くと、彼らは実に嬉しそうに飛びかかってくる。

「おめーら、あの「鬼」をなんとか「してください」！」「はいつくばれ、この「疫病神」ども！！」

もちろん速攻で返り討ちにしてるけど。

しかし、美神隊長曰く「次のGS試験で合格者がでる確信が出来た」ほどだというのだから良好だろう。

「横島さん、そろそろ私たちも参りますわ」
「雪之丞、今日は一緒に頼むわね」
「おう、任せろ、かおり」
「んじゃ、タイガーと俺は一字さんとだな」
「うつつ、よろしく願います。」
「魔理しゃん、よろしくですじゃ」

さつとと、本日も営業開始だな。

「千雨ちゃん、後よろしくね」

「わかったよ、横島さん。」

「タマモ、各位フオロ」。愛子、美神さんからの連絡待ちな」

「了解、ヨコシマ」「わかったわ、横島君」

実のところ、私とクーフェイは無視されている気になっていたの
でござるが、勘違いでござったよ。

私は日常に埋没することで綾瀬殿のしていた巡回を指示されてこ
ざったし、クーフェイは再修行がメインだったのでぞざる。

なにしろクーフェイは、霊力を込めないで攻撃してしまう癖が抜
けない。

これには横島殿も外に出せないと判断したようでござる。

同じく外に出さない組のコノカ殿と刹那殿は、学園防衛の要なの
で外に出さないということらしいのでござるが、実際のところは
学園防衛ではなく「政府干渉」防御でござるう。

コノカ殿はいわば、秘匿された側のオカルト姫。

麻帆良直営の王族といえるでござる。

そんなコノカ殿をどこかに研修に出せるはずもなく、出せたとし
ても妙神山がいいところでござるう。

それも有りだとは横島殿も思っているらしいのでござるが、刹那
殿が大反対を展開しているので実現は難しいでござるうなあ。

「というわけで、いらぬ子ではなかつたのでござるよ」「

『ほうほう、糸目のねーちゃんも苦労してんなあ。』

「心労という苦労は目に見えないのでござる」

『心労ねえ、中学生の言葉じゃないだろ?』

「大人も中学生も小学生も、たとえ幽霊であっても心労はあるのでござるよ?」

『ちげーねー。』

バイクで事故ったという幽霊殿の話聞くのは、もはや何回目かわからない。

最初は狂気しかなかった彼でござるが、最近は普通にはなせるでござるよ。

『糸目のねーちゃん、あの銀行、やばくねーか?』

「およ? 確かに変な雰囲気でござるな」

『さつき入っていった男3人、挙動不審だったぜ?』

「ふむ、では、ちと見てくるでござるよ」

『おう、またな!』

さて、横島殿に連絡でござる!

楓の連絡に、満面の笑顔のかおりと高音。

にてるよなー、この二人。

「伊達さん、私たちが行かないとまずいですか?」

「そうだな、魔法先生がストレス発散で大騒ぎになるはずだ。俺た

「ちは人払いと人員整理だな」

愛衣の問いに俺が答えると、分かりやすく落胆の二人。ほんとうに分かりやすすぎだろ、この正義の味方たちは。実際、この二人は似ている。

昔は正義を体現していると公言していたこととか、今はその正義の介助者であることを公言しているところとか、介助者なのに前に出たがるところとか……。

そっくりだな、本当に。

「だ、伊達さん？ やはり早々に事件をまとめるには我々が手を下した方が……。」

「雪之丞、私たちが手を出せば、被害も最小で……。」

「で、建築物倒壊、被害甚大、赤字山積ってか？」

「……うっ」

「こういつ仕事はどちらかという横島が得意だ。

密かに除霊、密かに誘導、密かに逮捕。

密かすぎだな。

「まあ、その辺の手際を見学するのは許可するから、見に行くか？」

「ぱあーと明るい顔になった。

「なんだか猛獣使いかもしれんぞ、俺。」

「伊達さん、お姉さまたちの扱いが上手ですね」

「いうな、愛衣。俺もなんだかそう言う気になるから」

ま、猪二人つてのもおもしれーかもしれねえけどな。

魔法先生え、自重お……。

いや、ひでえことひでえこと。

一般人相手に魔法連発つて、まじでやべえつて。隣のシスターシャークティーなんか震えてるし。

それも、普段着にマスクをしただけで「マスクドⅡグラス」とか「マスクドⅡブラック」とか、まずいつしょ？

とりあえず、お約束なんで正体が分からないという演技で周辺みんな流してるけど、一般人まで「ヒゲグラかつけー」とか言われてるっすよ!？

最近、美味しいところをみんなヨコツチにもって行かれててストレスたまってるのはわかるけど、高笑いしながら現れて、魔法の絨毯爆撃つてやりすぎでしょ!？

あ、逃げそうなのが一人……。
つて、グラスもブラックも気づいてねえ!!

「美空、ココネ、ここを頼みましたよ。」

ふわ、さすがシスターシャークティー。しめるなー。

あの殺人^{キリングドール}人形は、なぜ僕だけ付け狙うんだ！？

「ナ、チツトダケデイインダ、根本カラバツサリ、ソレダケダ」

くう、この年になるまで伸ばした髪の毛の手入れがどれだけ重要かわかっていないだろお！？

「・・・ン、コツチニ気配ガアルナ」

最近では、気配まで感じるか、殺人^{キリングドール}人形。横島君のところは、人形まで規格外だ・・・。

「チャチャゼロさん、ここにいますよ」

「オ、マリア殿、今行クゼ」

なあ！！なぜここにマリア君が！？

「ふふふ、西郷さん。これで、Gメンのみなさんと、お揃い、ですね。」

小さな体で微笑むミニマリアをみて、僕は剣を抜いた。

「じ、じ、じ、このまま刺られるわけには行かない！」

胸を張り、恐怖を振り切って僕は殺人^{キリングドール}人形を迎え打つ。

「サー、マルハゲシヨウノ始マリダ」

「「「「「チャチャゼロさん、かつこいいー！」「「「「」

いつの間にか男局員たちに囲まれていた！？
なぜだ、君たちも怯えていただろう！？

「西条さんだけ無事なんてズルいっす！ 堕ちる地獄は共に歩くのが上司と部下つてもものっす！」

がー、死なばもろともって訳かい！

ええい、この修羅場くぐり抜ける！！

今日デート予定の彼女のためにも！！

「くそー！モテ上司め、モゲローー！」

「ダンディー上司をソレー！」

チャチャゼロ君に同期してかかってきた部下たちをいなしながら、僕は撤退を開始した。

デート優先だ！！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

魔法先生のストレスがマックスじゃと聞いておっしたが、まさか白昼堂々と魔法を使って憂さ晴らしなんてするとは思わなかった。

あのシスターシャークティーまで参加しておったというのだから、そのストレスがしれると言うものじゃて。

とりあえず、伊達君たちが情報処理をしてくれたからいいものの、こつという事が続けば今までの努力がフイになるところじゃ。

ここは一つ、表のオカルトとの融合か、麻帆良科学との融合を進めるほかないかもしれんな、とため息がでる。

麻帆良科学との融合案は、葉加瀬聡美ちゃんや横島君あたりから出てきていて、秘匿された魔法を科学によって浮き彫りにされた魔法として認識させるといふ荒技じゃった。

確かに論理的で、適正があれば誰にでも使えるという形を見れば似ていなくもない。

適正レベルで使える力の大きさも違うし、説明も楽じゃろう。

とはいえ、即座に決断できる話ではないので、「マスク」先生を増やす方向で認識を広げるほかないやもしれんのじゃがな。

そうになると、暴走組と情報操作組を作らねばならんか。

どうにもストレスがたまるのお。

わしも暴走したいのお。

第四十二話（後書き）

麻帆良も世間も大混乱の中、収まったかに見えた何か動きます。

聞き分けのいい人間ばかりではない、というわけですねw

第四十三話（前書き）

お久しぶりの更新です。

当然のように荒れています。荒れてない所もあつたりして、まあ、そんな感じですよ

第四十三話

会議というモノに効率には存在しない。

効率化できれば打ち合わせですむからだ。

会議、それも結果がでない会議となれば参加者全員の害悪でしかない。

とまれ、開かれるべくして開かれた会議が、何の結果もでませんでしたですまないのがこの国の特徴なのかもしれない。

先日行われた臨時GS試験から続く、魔法世界からのオカルト干渉は大規模なものになりつつあった。

初めは六道関係だけへの干渉であったが、オカルトGメンの指導や実地訓練なども行われ、かなりの成果が上がっているという。

加え、一流どころのGSに研修に来ている魔法世界陣営は、実に優秀であるという報告も上がっていた。

こうなると、全く関係の無い人間ですらこう思う。

「あいつらだけ、ずるい」と。

コネや個人的な人間関係だけで利益を独占しているのは卑怯だ、というわけだ。

とはいえ、GSの関係などというものは、基本、個人のつながりが発展したものであり、六道が得ている利益だって、今までのコネ

クシヨンに対する投資の回収とも言える内容でもある。

それを、何もしていない人間が受けられるかというところ、それこそありえないのだが、そんな風に考えられないからこそ不満が高まる。政治的な圧力を持ってGS協会に対して研修先を変えさせようかという話もあったが、だからといって自分達に利益が出るようになるわけではない。

それでも自分達が損をしている気になるのが気に入らない彼らは、諦め悪く知恵を絞り、時間を浪費していくのであった。

アドバイザー、アシモト元総理大臣は、そんな姿を見て内心のため息を止められなかった。

彼は、以前、オカルトテロの被害にあったのだが、美神事務所に救われていた。

加え、横島忠夫自身に国を救ってもらったという思いがあるため、この会議自体に参加することを決めた。

そう、誰にも伝えることなく、彼自身は、その恩義に答えるつもりだったのだ。

「アシモト先生、なにか良いお知恵はありませんかねえ？」

実に汚い笑顔を向けられたアシモトは、内心の反吐をさておいて、笑顔で答える。

「国内勢力だけでは難しいのではありませんかな？」

まあ、正面から聞けば「あきらめるよ」と聞こえるはずだが、彼らの耳には「福音」に聞こえたらしい。

「ならば手を組むならば、アメリカですか？」「いえいえ、大陸

も・・・」「ここは一つ、オカルトテロ殲滅ということで、中東の某国を」

本格的な馬鹿らしい。

小銭のためにオカルトヒーローを売り払おうというのか？

「皆さん、私個人としましては、国防の英雄を国外に売り払うのは良しと出来ませんが？」

私のその一言で、更に笑みを深める外道たち。

「なるほど、生体情報売り払うのですな？」

「素晴らしい思い付きだ」

「なに、彼の両親にも協力してもらおう」

「すばらしい、誰も損をしないのが素晴らしい・・・」

だめだ、もうだめだ。

私は手元のタバコを折った。

もう、我慢が出来なかったから。

瞬間、周囲の風景が変わる。

「・・・静粛に」

その声と同時に現れたのは、GS+魔法使いの合同チーム。

ここに居るクズども全員を押さえ付けていた。

転移符と魔法による協調で、この場全てを抑えている。

「こいつら全員、オカルト法違反だ。終身刑以上になるのを覚悟し

る」

「ば、ばかな！アシモト、貴様も同じ穴のムジナだろう！？」

「私は既に身の潔白を証明されているよ。アンダーカバーというだけだ」

「違法捜査だ！」「落としいれられた！」「我々も潔白だ！！」

喚く男たちを見て、自然苦々しい思いに溢れた。

「オカルト捜査だよ。心靈捜査に違憲はない。貴様ら全員の行為が白日のもとにさらされている。観念しろ」

男たとして家族がいただろう、愛する妻子が居たに違いない。

なのに何故、他人のことは言え少年を売り飛ばすことができるのだろうか？

私には生涯理解ができないことだと思えた。

「アシモト閣下、撤回します」

「閣下はやめてくれ。単なる政治家だよ、私は」

そう、恩義ある少年を直接守ることもできない無力な政治家なのだ。

「そうそう、ところで……」

あの、マスクドシスターのプロマイドは無いのかな？

ユエちゃんがニコニコ顔だ。

なぜかと聞いてみれば、とうとう一部を剃ることに成功したそう
だ。

・・・西条の。

「眉毛なのですが」

さいじょお、すまん。

チャチャゼロも大いにご機嫌で、祝杯を上げていた。

「次こそ、あのロン毛を！」「オウ、マカセナ！」

なんつつか、目的が変わってるよなあ。

オカルトGメンへの教導は順調で、たまに俺と雪之丞が行っても
驚くほどの練度になっていた。

隊長が自称するとおり、かなりの数で次のGS試験を通るだろう。
というか、協会から抗議が来てるもんなあ。

オカルトGメンに肩入れしすぎだつて。

とはいえ、警察の内部のオカルト関係は秘匿外部組織扱いで正式
筋では接触できないし、国防の一端である組織の内部オカルト部隊
も無理とくれば、表のオカルトの最前線はオカルトGメンかGS協
会となるわけで。

さすがに秘密組織に協力は出来ねえつて。

国民に公にできない予算の組織なんて、やくざやGSゴロと一緒にだ。

関わるなら慎重に、高圧的に、逆らう気にさせないほど強く、だ。美神さん仕込みのヤクザ操縦法だったりする。

国からの圧力の一部は、政治的権益をねらう層だろう。いわゆる国益族という奴だ。

こいつらには、細かに箸にも棒にも引つかからない「国益」という飴玉をしゃぶらせていければいいので六道当主にお任せだ。

が、国益じゃない「利益」に噛みつくバカはしゃぶらせるだけ無駄。駄。

キリがないし、底がない。

バカみたいな量と期間を求める姿は「餓鬼」そのものだったりする。

しかし、政治家なんて仕事をしていると、確実に「猫」のかぶりかたが上手いので、真摯な政治家と「真摯に見せている」政治家の境目なんか見えない。

だから一様に拒絶しているわけだ。

市議会議員も国会議員もおしなべて拒絶。

これが顔が広くなってしまったGSの宿命らしい。逆に利用しているのは美神さんやエミさん。

まあ、あのぐらいの根性がなければ駄目だったことだ。

「ところで、横島さん」

「ん？ なんや、ユエちゃん」

「そろそろ、警察関係の人たちも研修しませんか？」

「オツ！ イイカンガエダ、ユエ！」
「おまえら、剃りたいだけだろ？」

なにも考えず、エヴァちゃんやユエちゃんを派遣しちゃうのもしいかもしいなあ、と瞬間だけ思ってしまった。

まあ、派遣するだけ信用のできる組織が少なすぎるんだけど。

その辺自分で解ってるのかねえ？

そういえば、先日、アシモト元首相からの連絡で、オカルトゴロに与っていた議員が検挙されたという。

GS協会と魔法世界が主導になっている合同捜査本部だそうで、警察やら自衛隊や等の本部が「自分たちをないがしろにした」と大騒ぎなのだそうだ。

縄張り争いって見苦しい。

とはいえ、その辺の縄張りで言うと、バリバリ魔法世界側の敷地にある六道傘下の関西呪術協会支部、という看板を出さないといけないような我が事務所。

いつの間にもやらマールブル模様のようになっちゃっている。

所員も「妖怪」「人間」「人外」「魔法使い」「バグ」と多彩で・
・
・

「おいおい、一番のバグ。自覚はねーのか？」

「ん？ ユツキー、寝言は寝て言うのだ」

「そりゃこっちのせりふだ」

まあ、心温まる会話だけだね。

「ただいま戻りましたわ」

「忠夫さん、仕事完了ですわ」

高音とかおりさんの真性お嬢様「言葉」コンビは絶好調で、口調に合わない超攻撃性前衛のかおりさんと、後衛型使い魔使いの高音の相性が合いすぎて、愛衣が嫉妬しているほどだった。

とりあえず、愛衣には一時的に全般的なバツクアップをしてもらっているけど、結構落ち込んでいたりする。

どうも、自分は持て余されていると感じているらしいので、ちょっと仕事を入れてみた。

「へ？ 寅さんのバツクアップですか？」

「め、愛衣ちゃんと仕事ですじゃ？」

タイガーがかなり頻繁に研修にきているので、実地研修をしてもらうつもりなのだけど、そのペアに愛衣ちゃんを、というわけだ。

愛衣ちゃんぐらいに幼い女の子なら、タイガーも過敏な反応をしないし、愛衣ちゃんもタイガーの教育のために協力という目標があれば、張りがあるだろうと、そう思ったわけだ。

「横島さん、わっしも事務所に入れてほしいのお・・・」

こんな感想がでるほど、タイガー&愛衣コンピが上手くいった。元来自分に自信がないタイガーだが、年下から賞賛されるという体験と、3A関係の幼い組に「いいやつ」と思われた上で遊ばれているおかげで、かなり精神的な成長がみられた。

で、そんな環境だけに「ここに住みたい」発言になるわけだ。

気持ちは判らんでもないけどな。

「・・・だが、だめだ」

「そっじゃろうなあ・・・」

まあ、結果が分かっている話なんて言うものもあるのだから気にするな。

タイガーはタイガーで彼女と仲良くできる道を模索すればいいのだよ、うん。

「寅さんは、こんなにすごいのにGS試験に落ちるんですね。レベル高いんですねえ」

愛衣ちゃんの台詞に、色々な意味で涙するタイガー。虎吉。

愛衣ちゃん、タイガーのライフはもうゼロだから。

話は変わって、一文字さんの木刀が、靈気を込めた成果で靈刀化していることが判った。

と、どうやら本気で愛子を落とすにきているみたいだった。

とかなんとか。

まあ、なんだ。

「信じられねえけど、結構軌道に乗ってるよな？」

「ま、いろいろと手を借りちゃいるがな」

そりゃ仕方ねえし、と俺が笑うと、雪之丞も苦笑い。

「俺は、何でも一人で完結できるほどの強さがほしいと思ってるんで
たんだがなあ」

「ユツキー、そりゃどんな超人だ？」

ラカン
筋肉達磨でも不可能な話だな。

「ま、この事務所の雰囲気も嫌いじゃねえ」

「ユツキー、ツンデレ」

茶々丸ちゃんの入れてくれたお茶をすすりながら、久しぶりに落ち着いた気になった俺たちだった。

「タダオ、あそびにきたのじゃー！ー！ー！」

「「ぶー！ー！ー！ー！」」

マツタリにやあ、まだ遠いらしい。

第四十三話（後書き）

久しく更新できませんでした。

というか、引きましたw

そんなわけで、続きは出来るだけ早くにアップします

第四十四話（前書き）

えー、書き溜め宣言をしながら、全くたまらない神代です。

がんばりまーす

第四十四話

帝国のお姫様ことテオドラ王女が、角も隠さず現れた。

さすがに不味かろう、とつつこみを入れるネギたちだったけど、本人は得意顔。

なにしろ、麻帆良につくまでの間、何人にも声をかけられ「アクセサリー」として買った場所を聞かれたというのだから。

「ふふふ、旧世界もチョロいもんじゃな？」

増長しまくっている第三王女だった。

まあ、日本だからだろうなあ、と思う。

何しろ、今の日本は「人外」が溢れまくっているせいで、視覚的に美人だったらスルーという文化基本ができつつあるのだ。

・・・少なくとも俺はそう思ってる。

「で、遊びの目的は？」

「遊びは遊びじゃよ？ まじ、バカンスじゃ」

聞けば、何度か麻帆良に遊びに来ているアリカ・ナギ夫婦に自慢され、結構悔しい思いをしていたそうだ。

で、政務に区切りがきつつ、旧世界の行事も区切りがついている今なら遊びに行っても問題なからう、と言うことだったらいい。

「というわけで、エスコートをするのじゃ、タダオ」

「どこに？」

「マンガ喫茶じゃー!!」

あんたはドコにオタク外人だ!

「ならば、部屋にこもってビデオゲーム三昧……」

「いいところしてるぞ、格闘ゲームなら、一週間徹夜ぐらいでつきあってくれる猿がいるぞ」

「おお、それはすばらしい!」

大いに乗る気になったテオドラに、魔法球を渡す。

「これは、魔法球ではないか?」

「うん、そのゲーム猿からの受注だね。一応、このコネクターを通すと、中でゲームもネットもできる」

「おおおお! では、この魔法球で……」

「廃人生活ができるんだな」

「タダオ、妾にも作ってほしいのじゃー!!」

廃人魔法球、ヘラス帝国から受注しました。わー。

そんなわけで、ユエちゃんが基礎練習の仕上げということ鬼門の所までオカルトGメンを連れてゆくと行っていたので、テオドラも同行させることにした。

今回は俺のお使いなのと老師のゲーム相手なので、ゆるりと鬼門も通すだろうけど、いざ勝負となっても平気だろう。

やつのハリケーンミキサは、かなり極悪だから。

のりと勢いでついできたテオドラ王女。

実際、彼女の实力は知っているので安心なんです、西条さんと美神隊長がパニツクになったのです。

なにせ魔法世界の重鎮、ヘラス帝国でもっとも外交特化した王女が、何の予告もなしに遊びに来たかと思いきや、手続きもなくオカルトGメンの訓練に参加しているのだから。

半ば命がけの修行と置いていた局員たちは、警護対象ができたことで真価を問われてると感じたようです。

「でも、油断していると刺るのです」

「油断シロヨ？ ケケケケケ」

なおも上昇する緊張感の中、全員が鬼門のまえに到着した。

「一切の希望を捨てよ」

という言葉に震え上がる局員達でしたが、鬼門の試しが始まりました。

驚いた、と言うよりも期待以上だった。

一流の霊能者でも越えることが出来ないと言われていた鬼門に挑み、局員達の大半が乗り越えることが出来たのだから。

敗れた人間も居たわけだが、それでも2名と非常に少ない。

その二名も、小竜姫様のご厚意で基礎練習に加わることが出来たのが良かったのか悪かったのか。

なにしろ、半数は落ちることを予想していたので、落ちた人間を目当てにローテーションを組んでいたのだから。

さて、どうしましょ、と腕を組んだところで、ユエちゃんが携帯片手に通話。

しばらくして通話を終えたユエちゃんは、にこやかな笑みで語る。

「一応、西条さんから、巡視の依頼を受けていますので、ご安心ください」

ふわぁ！ 西条君、いつのまにそんなに優秀に……。

「先生、一応、彼らの実力を一番知っているのは僕なんですよ？」

最近、両眉毛を剃って書いている西条君は、笑顔でほほえんで見せた。

くう、なんか私って、いらな子かしら？

くう、たまらんのじゃー！！

この魔法球は正に「廃人」魔法球じゃった。

電信電話が可能な上にネットも可能な環境で、さらに時差は「一時間：三日」と高効率じゃった。

恐ろしい、恐ろしいほど居心地がよい。

くわえて、このゲーム猿老師が、じつに話の合う老人じゃった。

ゲームやキャラのセレクトががちりかみ合って、心底うれしすぎた。

これはもう、帝国とこっちで通信対戦がしたいのお。

うむ、タダオに相談じゃな。

いや、発注した魔法球に追加機能で異界通信機能を入れるのはどうじゃろっ？

そうすればタイムラグなしで・・・

なんとすばらしい思いつきじゃ！

「老師、これからも末永いおつきあいをお願いするのじゃ！」
「うきー！」

くう、もえるのお！！

長命種に生まれてコレほど嬉しいことはないのお。

今回もきました、外交ルートを開かせろ、というかマジで渡り付けてくださいお願いいたします、このとおり、というお願いが。

今回はマジ土下座です。

これって日本における最低最悪の必殺技だよ。

というか俺も得意だからわかるけど、これ、心底心の底から土下座してるわ。

なんつうか、もう、上から言われて無理矢理してるとかじゃなく

て。

誠心誠意、というのが目の前で展開されたりするわけだ。
ともなれば、接待の基本だよな。

「……基本と言いますと？」

「相手の土俵で、相手に気分良くなつてほしい、いや喜んでほしい
つて奴だろ？」

おお、と感心した外事担当者たちだったが、相手の土俵を聞いて
顔をゆがめる。

いや、ひとりだけ、嬉しそうにほほえむ人間がいた。

よし、あんたから話だ。

タダオから教えて貰った「アクションMMORPG」というのは
かなり面白いのじゃ。

老師と二人で始めたのじゃが、かなりの時間を持っていかれるお
もしろさじゃった。

老師も、自分のアバターが弱いのが嬉しいらしく、「この、目に
見えて死にそうになるのがいいのお」とかなんとか。

で、外の時間が夜になると、かなりの人数の他者と会うことが多
い。

始めたばかりの我らと違って、高レベルのプレイヤーも多く、そ
の庇護の下でレベル上げをしている状態がまた新鮮じゃった。

『お、テオっち。またレベルあげれるのかぁ！？』

『おいおい、おまえさん、ドンだけ引きこもりプレイ中だよ』

「長期休暇なのじゃ。この休みは家の爺さんと一緒に廃人プレイ孝行なのじゃ」

『男前！』『つつか、廃人プレイ孝行って、どこの日本語！？』

『うわ、その一族になりてえ』

こんな気軽な言葉を交わせるのは、うちのギルドの大半が社会人じゃからだろう。

それなりに大人としての常識を持ち合わせている土壤があるからこそその気軽さじゃと解るのが心地よい。

まあ、向こうはこつちを学生もしくはニートだと思っておるじゃろうがな。

『さーて、テオつちもエテつちも、レベルがずいぶん追いついてきたし、そろそろ城攻め参加しね？』

『いいねーいいねー、テオつちもエテつちも、プレイヤースキルが高いから、キャラレベル超えてつえーし』

『二人ともいくつしょ？』

「「いくいく」」

というわけで、城攻め。

正式には、他のギルドが所有している大型拠点の攻防戦を実施するので、参加しよう、というものだった。

なんじゃるなあ、この、敵城を攻め落として自分達の城にすると
言う、心躍るシユチエーションは。

うむ、実にブリリアントじゃ。

いやー、上手いきすぎた。

こっちの勧めたMMORPGにのめり込んだテオドラと老師は、そこそこ中堅のギルドメンバーの中の外事担当と割と仲良くなってしまうた。

まあ、外事担当の一人が廃人プレイヤーだったのをヒヤクメの権能で魔鈴さんが見抜いてくれたからなんだけど。

で、仕事そこそこに遊びで仲良くなつた某外事担当は、業務な話は一切しないで仲良くなってしまうている。

老師は結構気づいて居るみたいだけど、一緒にプレイしているテオドラが気づいていないようなので気づかない振りをしてくれて居るみたいだ。

正に手加減の天才といえる。

俺も時々入ってみることがあるけど、テオドラたちのプレイにはついていけない。

恐ろしくマニアックすぎるのが困る。

そんな中、愛子はかなり追従している。

とりあえず、テオドラたちとつかず離れずで監視してもらっていた。

「このIDとこのIDは政府機関ね。あと、この人は多分政治家秘書。で、あとはマジ廃人よ」

実に満足のいく報告だった。

テオドラをかまい付けているのは廃人で、彼らを中心にリアル女性に愛想尽かされないようにする会を発足してフォーローに回っている。

るらしいことまで判明した。

ネカマ率が高く、リアルワレの度に失望が渦巻くMMORPG世界の中で、心底女性であることが保証されているプレイヤーへの依存度が高いの何のって。

そういうえば、最近「ドウメキ」というキャラクターが現れたけど、やっぱあれか？

リアル時間で一週間に渡る旧世界休暇を終えたテオドラ王女は、猛烈な国内官僚支持を取り付けて帰国した。

その間、ある方面の外交は完全に沈黙していたそうだが、それはそれと言うことで、一切のお咎めがなかったとか。

その真実を知るものは少ないようで結構多いという。

魔法料理魔鈴のアルバイトは、美女美少女ばかりと大評判。

当然のことながら、彼女たち目当ての音子供が通い詰め、そして声をかけるのだが・・・

「あかんあかん、うちにはダーリンがおるんよ」

「うふふ、他人の彼女を横恋慕なんて、健康によろしくありませんよ？」

「もう、冗談ばかり。だめですよ？ 彼女さんに言いつけますからね？」

等々、重数名いるかという少女たち全員に彼氏がいると判明肩を

落としつつ、どんな彼しか聞いてみると・・・

「すげべやな」

「やさしいんですよ？」

「頼りがいがある、かな？」

なんてノロケがバンバン飛び出てくるのを聞いて、さすがにあきらめるしかない男どもであった。

が、それがすべて同一人物の評価と知ったらなにを思うだろう？
そんな風に苦笑いの魔鈴であった。

では、あきらめた男どもが客層からいなくなるかということ、そういうわけではない。

見るだけとはいえ、そこらのアイドルだって裸足で逃げ出すようなクオリティの女子が甲斐甲斐しく働いているお店など早々あるわけではなく、徐々にその客層を広げてゆくのであった。

で、そんななか、新たな客層が直撃した。

なんと、ネットアイドル「ちう」のファンだった。

初めは偶然だった。

横島事務所からの出向が多いユエの代わりに魔法料理魔鈴にバイトしたときのことだった。

横島事務所女子用の魔法使いコスをしているために「チウ」モードになってしまった千雨を、ファンが「ちう」だと解ってしまったのだ。

が、ネットアイドルに対してそれをリアルで指摘するような愚行を彼はしなかった。

ネットとリアルは別物、それが彼の真実であり誇りだった。

が、一度ネットに戻ってしまえば、愉快で軽薄なバカに戻り、大宣伝。

「ちうたん」はあはあ、と携帯写真をアップした途端店が割れ、翌日から脂汗＋太めの常連客が通い詰めることになってしまった。さすがに自分の影響だと理解した千雨は、自身のブログで「みんなのために衣装代を稼いでいるんだぴょん」「でもでも、寄付とかはだめだよ？自分の力で作りたいんだから！」とか書き上げ、どうにか周辺の鎮火を試みたわけだが、逆に「けなげ」と盛り上がられてしまい、いささか居心地の悪いことになってしまった。過去の自分なら「けけけ、つられてやがるぜ」とか笑っていたんだらうけど、と苦笑いの千雨だった。

客層の増加によるメニューの変更はなかった。

基本、魔鈴のイメージと美意識によるプロデュースが店の売りだったから。

そんなわけで、離れる客層がありそうなものだが、実は逆に女性客も増えていた。

主に彼氏につれてこられて気に入ってそのまま常連に、というパターン。

加え、魔鈴の店が「GS事務所」を兼ねていることと、常識的な価格で引き受けてくれることから、若い女性に大人気だったりする。加え、派遣されるGS及び見習いGS達のほとんどは少女か女性と言っこともあり、女子寮や女性向けマンションなどでも引く手あまたになりつつあった。

そんな忙しい魔鈴事務所と元より忙しい横島事務所の仕事が両立しないかという点、わりとストレスなしに上手く行っていた。

魔鈴事務所、というよりも魔法料理魔鈴へのアルバイトは元々横島事務所のローテーションに入っていたし、他の事務所への人員派遣とは別枠なので大きく問題にされていなかった。

そう、されて「いなかった」。

大きく不満の声を上げたのは、都内の2流とランクされるGS達だった。

実力はそこそこ、しかし霊能自身には見切りをつけているというCクラス以下の専業GS達が仕事を奪われたとGS協会に訴え出ていたのだ。

が、現会長「唐巢」は全く取り合おうとしなかった。それはそうだろう。

モグリGS以下の仕事しかなしないような人間にGS免許など維持させたくなかったのだ。

前体制下では安穩とした仕事で暴利をむさぼれた彼らだが、現体制下では暴利などもつてのほかで、今まで通りに仕事などしようものならば即日で免許剥奪とオカルト法違反で検挙される。

唐巢の実施した価格適正化と仕事のランク適正化による正常なCクラス以下のGS生存率が上がり、そしてGSへの信頼性も向上しているのだから正常な方面からの反対などあるわけがなく、不満と反対意見は地に潜った陰にため込まれることになった。

が、現在のオカルト業界における「暗部」のパイは極めて少なかった。

すでに闇に潜った先達達によってギルド化が済んでおり、その先達であったはずの「関西呪術協会」も本体の大半が表にでてしまっているのだ。

彼らの支配していた仕事も法的根拠と資格を必要とするものとなり、税法的に主張できる類の仕事になってしまっていた。

つまり、この日本におけるアンダーグラウンドの仕事の大半は押さえられていて、新たに喪失された仕事であつても新参ものに手が出る類のものではなかった。

埋めうるパイがなく、さりとて活躍の場もない。

悪徳GSなどと呼ばれていた子悪党達は、小手先の詐欺やオカルト法違反などで、徐々に数を減らしていくのであった。

この事態は自然に流れて出たものではなかった。
状況を利用して流れを作った人々がいる。

一人はもちろん唐巢GS協会会長。

一流の人間が行う仕事に対する報酬は高額でもいい。逆に必要経費を考えれば必須だろう。

しかし、Cクラス以下の仕事での暴利は、絶対に許せなかった唐巢神父は、これを機に改革を一気に引き起こした。

価格と危険度の見直して大いに盛り上がった協会だったが、一樣に危険度見直しで安くなったわけではなかった。

逆に「b+」という危険度にランクされたのが「スライム」。

某麻帆良の事務所から猛烈なプッシュがあつたが、協会事務員は鼻で笑つたという。

この体制こそを変えなければならぬということ、唐巢神父は最高の防衛結界と霊具で武装させた事務員達にスライムに対峙させてみたのだつた。

結果は事務員達全員が土下座で会長に頭を下げることになった。

適正評価に私感は不要、と成つたわけだ。

もう一人の名前は意外じゃ無さそうで意外。六道冥那であつた。

六道を守るためならばあらゆる手段に手を染める彼女であつたが、今回の動きに関しては六道ですら不利益を被ることが多かつたはずだからだつた。

そのことを知っている横島はしきりに首をひねっていたが、実のところ完全な善意、というか恩返しであるなどは思いも寄らな

った。

そう、恩返し、なのだ。

次期当主、六道冥子は才能と力と言えば、歴代党首を遙かに上回る存在であったが、その低安定性と覚悟のなさは業界すべてが知るレベルであった。

GS免許も剥奪の話すらあったのだが、それが一気に改善した。そう、横島事務所のアキラを指導し始めて意識が改革し、彼女がGS免許を取得してからは大きく前進した。

そしてユウナとアキラが研修にくるようになってからは、六道事務所の経営状態が一気に改善前進してしまった。

26億に達していた施設弁済費用はゼロになり、累積赤字から差し引いた利益は一月あまりで10億。

協会内ランクも「六道補正なし」でAになっていた。

六道の脅しもなにもなしで、だ。

ここまでされてなにも感じないでおけるほど六道の名は軽くない。加えて言うのなら、子を守る母として、これに何もしないわけがなかった。

それ故の援護射撃であり、改革助勢であったのだが、じつはこの行動で六道の評価があがってしまった。

手段を選ばぬ暗部と見られていた六道は今、オカルトの名門としての地位を堅いものにしたのだった。

そして最後の人物は、最近でもっとも利益を受けた女性、美神美智恵であった。

弱兵であったオカルトGメン局員の強化ばかりか意識改革と関連勢力とのコネクション作りは、あり得ない程の事態であった。

加え、GSゴロや不良GS検挙による実績強化や霊的地域治安活

動による評判上昇は何にも代え難いモノであり、喉から手が出るほどほしかったモノでもあった。

民間GSに押されて評価の低かった日本オカルトGメンおよびICPOの面目を保つどころか押し上げるものであった。

なにしろ、最近では、地域犯罪の相談までオカルトGメンに持ち込まれるモノだから、隣接施設に警察官の詰め所までできるほどだった。

手札にこだわり手段を選ばない女、美神美智恵であっても、これには恩義を感じざる得なかった。

が、彼女は一步違っている。

「いつでも隊長待遇で席を準備しておくわ」

横島事務所全体の取り込みをにらんだ求人活動も絡めるあたり人間の厚みについてよくよく考えるべき腕はないかと娘令子ですら思ったものであった。

第四十四話（後書き）

ひさしく、よこしまほら本編でした。

政治面での攻防って、書いてて不快になってしまい、進まなくなつたため削りました。

暗闘を期待していた人がいましたらごめんなさい。

第四十五話（前書き）

修行編続行中}

かなりGS寄りの内容です。

第四十五話

対人戦闘ばかりでは良くないということで、私たち、高音さんと一文字さんと共々で、麻帆良内の霊的慰撫に回ることになりました。

日々、楓さんが行っている行為のおかげか、実に平穏な状況で、雑霊レベルでも残滓ともいえる時間をゆったりと過ごしています。

横島事務所の方針のおかげでしょう。

意志有る者達は尊重され、意志なき者達は平穏な時間を与えられ、そして狂気に侵された者たちは、一瞬でも正気に戻され、悔い改めさせられます。

狂気の自分を意識させるなんて、どんなに非道なことか、と高音さんは最初怒っていましたが、輪廻転生のシステム上、狂気のままでは来世に影響がでる旨を理解していただけると、積極的に押さえてくださるようになりました。

まことにありがたい話です。

本来ならば宗教的はお話がじゃまをするはずなのですが、直接「キーン」にお会いしているのが良い影響だったようで、あからさまな異宗教アレルギーは無くなったようです。

「……つつわけでな、最近外から変な怪異が来るらしいから気をつけるよ?」

『うん、怖かったら、横島のお兄ちゃんの所にいけばいいんだよね?』

「ああ。あと、吸血姫んどこでもいいぞ？ あいつは弱い奴らにやとことん優しいからな？」

『うん、ありがとうね。お姉ちゃん』

にっこりほえむ少女の幽霊を優しくなでると、少女の幽霊は一字さんに抱きつきました。

『お姉ちゃん、ママみたい』

恥ずかしげに微笑んでから一字さんが抱きしめると、少女の幽霊は幸福な笑顔を浮かべて、輝き消えた。

「・・・いった、な」

「ええ」

GSとして生きてゆくならば、何度でも出会う場面。高音さんは瞳の端をハンカチで押さえていた。

「さ、お次もがんばるか」

「ええ」

ささつと高めの線香を焚いた私たちは、涙を飲み込んで笑顔になります。

これができることこそが、GSの最低条件じゃないかと最近思います。

「麻帆良、正解でしたわね」

「ああ、大正解だったぜ」

「氷室さんには悪いことしましたかしら？」

「おキ又ちゃんならわかってくれるさ」

「……本気でおっしゃってます?」
「……たぶん」

ひいひい。

この状況、何とかしてください。

「むりやな、在学中のそれも非戦闘系の霊能でGS免許取得や。リスペクトされまくりやろ?」

き、鬼堂先生、せめてフォローしてください。

「あんなあ、氷室。おまえ、途中入学で美神事務所でネクロマンサーで在学中GS免許取得なんて並べたら、パニックになるにきまつるやろ?」

ひ、ひい……。

私も麻帆良に行きたかった……。

「氷室は無理やろ? 美神はんが手放すわけないしなあ」

私は、視界に広がる自称「妹の群」に冷や汗を流しています。
美神さんやエミさんならまだしも、私をお姉さま扱いしてどうするんでしょ!?

そりゃ、確かにネクロマンサーですよ? そりゃGS免許も取りました。

美神さんの事務所にも所属してます。

でも、私は私なのに！

「切れるなや、氷室。ショックで寝込む娘もおるからな」

私が寝込みたいです！

「あんじょう、きばりや、氷室」

あ————ん、助けて、美神さは————ん、横島さは——
——ん——！！

美女美少女による除霊と言うことで、妙な評判がたたないうちにいろいろと仕事のルートを限定した。

メインは魔法料理魔鈴、サブは匿名メールアドレス、アンダーグラウンドは会員制ボードだ。

会員制といっても紹介性と言うだけだが、結構排他的で管理が楽だ。

私自身もアングラ色が濃いので、そっちに情報が流れたと解れば、早々に情報移転してしまう事ができる。

土偶の力も借りれば、どこの誰が情報を流したかも解るので、それ以外の会員を引き連れ別サーバーに定住も可能だったりする。

まったくのチートだ。

この機能で「ちう」ページを作ったら、もう、伝説のアングラペ

ージとか言われてしまったのが寂しい限りだ。

が、非公式なルートが実のところ結構ある。

「千雨ちゃん、お願いできない？」 と、横島さんの師匠である美神令子さん。

「ちさめちゃん、たすけて〜」 と、これは六道冥子さん。

「ち・さ・め・ちゃん」と、これは美神美知恵さん。

GSの業界ルートで頼まれると断りづらい話が多い。

まあ、美神玲子さん以外は無茶な話は無いんだけど。

それにしても横島さんの周りは美人ばっかでレベル高いよな……。

「……千雨、話があるワケ」と、今度は小笠原エミさん。

この人は、仕事というよりもヘッドハンティングに来てるんだよなあ。

まあ、この人から見れば、宝の山らしいなあ。

夏美・那波は当たり前として、実はあたしも狙われてる。

やっぱあたしのAFが狙いらしいけど。

細かくハンティングしてきているのは、さらに奥にある魔法世界の人材の良いところを狙っているらしい。

この人もどん欲で有能なんだよなあ。

「千雨、この条件で移籍すれば、年収はこれで……」

どしゃどしゃ書類積まれても、あたしゃ、横島事務所を離れるつもりないんですけど？

「……くう……、愛で縛る横島事務所ってワケ？」

……一応、額いとくぜ？

聞けば、おキ又ちゃん、六女で「お姉さま」をさせられているそう
うだ。

一応、弓さんと一文字さんとの三人でお姉さま扱いはされていた
らしいんだけど、研修と称して麻帆良に二人が行ってしまったせいで「妹」が集中。

さらには麻帆良のウルスラから来た魔法生徒たち、おキ又ちゃんが
横島君の元同僚と知ってからは同級生なのにお姉さま扱い。

もう、六女の「お姉さま」、最上位の「お姉さま」という扱いに
落ち着く勢いだとか。

うっわー、伝説のお姉さまの再来かしら？

「えっと、美神さん。その話、聞きたいような聞きたくないような
……」

青い顔で、シドロモドロのおキ又ちゃん。

隣で、本日研修日のアスナちゃんとさよちゃんが興味津々で聞い
ている。

女の子はこつこつという話が好きよね。

「六女にはね、全校を通して82%の生徒が認めた「お姉さま」を

「エルダーシスター」として認定して、卒業後も「お姉さま」と呼ばれる名誉お姉さまシステムがあるの」
「いやーーーー！！！！！！」

あ、実感で82%越えてるな？
でもこの制度、GS資格を持つてるなら結構いいわよ？

「な、何ですか？」

「開業の際、自分の妹や後輩を、無制限にヘッドハンティングできるもの」

「・・・！！ ア、アスナちゃん、さよちゃん、六女に来ませんか！？」

ん、おキ又ちゃんも解ってきたわねえ。

「あ、あはははは、私もさよちゃんも学内進学なのでえ・・・」

「あ、あああああ、あの、お誘いは嬉しいのですが、麻帆良進学が嬉しいです」

くう、さすが横島君。

困い込みが半端じゃないわね。

熱心に勧誘するおキ又ちゃんはおいておいて、私は大グループ構想を推し進めることを考えていた。

現在、群雄割拠状態でまとまりのないGSとGS協会だけど、唐巢先生が会長に納まって以降、かなりの体質変化を起こしている。師匠と弟子の縦のつながりしかない関係に協会が横を繋げているのだ。

この流れを強化することで、現在麻帆良で行われている雑霊の慰

撫や鎮静化を修行の一部に組み込むことが出来ると私は確信している。

オカルトGメンが試験的に導入して成果を上げているのをみれば、GS協会だって重い腰を上げざる得ない。

各地方、各地域の所轄GSを警察で言うところの警察署の扱いとして、修行中の見習いGSやGS見習いを交番勤務扱いにすることで、緊急な対応や恒常的な慰撫に予算を大きくかけることなく専従させることが出来るだろう。

これにより、GS協会やオカルトGメンは、細かな依頼をまとめたり取り上げられない霊象を位置から調査したりしなくてもいいわけだ。

なにしろ、定例的な調査が「慰撫」で行われるわけだから。

麻帆良でも安定した地縛霊からの通報や目撃談が寄せられ、防犯や捜査の大きな力になっているという。

これは警察側からも望まれる状況だ。

つまり

各省庁から予算が「がっばり」なのよ！

で、広域をフォローできる大グループ構想を、となるわけ。

一応、横島君のところと美神事務所、エミのところと・・・、あと弓さんの実家あたりに声をかけられないかしら？

ママ、は、パスね。

薄給でグループを使われるのが落ちだし。

あ、そうか、六女の研修でオカGに行つて、有能そうなのはおキヌちゃんか「エルダー」権限でグループに引つ張る・・・。

つながったじゃない!!
というわけで・・・

「おキ又ちゃん、エルダーシスター、がんばってね?」

「いやぁー……!」

「おキ又お姉さま、がんば」「りすべくとです、おキ又お姉さま」
「だったら六女にきてえ……!」

なんだかおキ又ちゃんも「横島君」っぽくなってきたわねえ。

ま、うちの助手らしく、かしら?

A Fは禁止されているでござるが、除霊は少し心痛むでござるよ。
麻帆良では対話と会話で対面してきた霊たちを、力でねじ伏せねばならないのでござる。

バカリダー、いや、ユエ殿も始め泣いていたでござるが、コレしかないと理解すると前向きに頭を切り替えたらしく、結界や捕縛魔法で足止めして、狂気を覚ます努力を始めたでござる。

コレについて、知っているGSはみんな「無駄」と言っていたでござるが、拙者は、ユエ殿は、横島殿は無駄とは思わなかったでござる。

狂気を持ったまま散らされれば、輪廻の和に加わった後も狂気を帯びてしまうのでござる。

しかし、少しでも正気に戻して除霊出来れば、輪廻に戻るときもその後も狂気から解き放たれる。

それは神魔が認めた事実でござった。

ゆえに、事務所方針で「狂気」から解き放ち除霊する事にしたのでござったが、思いの外予算がかかるのが解ったのでござる。

もちろん、自分たちで霊符を作ったり、魔法の補助を使ったりしているので赤字にはなっていないでござるが、ふつうのGSが同じことをすれば、一月で事務所が潰れるという調子でござった。

「何とかしなければなりません」

真剣に悩むユ工殿と横島殿でござったが、さすが横島殿、何かに気づいたようでござった。

電話で数分話した後、拙者とユ工殿に微笑んだでござる。

「うまく行けば、かなりの予算削減だ！」

不意にひらめいたのは「ローレライ」。

あるとき、美神さんは録音された音声に霊波をのせている状態なのに、ローレライには肉声に感じていた。

ならば、ネクロマンサーの笛の録音を行ったものに、慈愛の霊波をのせたら？

そんな思いつきを美神さんに話したところ、今すぐ麻帆良に行くから待っている、ということになった。

魔法料理魔鈴のゲートから飛び出してきたのは美神事務所一行と

アスナ&さよちゃん。

「機材は準備できるかしら、横島君!？」

「あー、大学部から色々借りてますよ」

「私も一枚かませてもらいます!！」

「もちろんワシもじゃ!！」

大学部に機材を借りに行くと、聡美ちゃんとカオスがいて、今からする実験の話の話を聞いたら目を輝かせて飛びついてきた。

まあ、科学とオカルトのダブルトップなので、役に立つだろうと言っことになり、急遽エヴァちゃんの別荘におじゃますることになった。

「なんだ、愛子空間じゃまずいのか？」

「愛子が除霊されたらまずいだろ？」

「・・・ああ、なるほどな」

てなわけで、おキ又ちゃんとさよちゃんのAFの録音を行った後、俺のAFでも録音して音声分析して、最適化された音源ができあがった。

音源単体で流してもきれいな極になっており、このまま売れるかも、と美神さんの欲望を刺激したそうだが、実験はこれから。

「じゃ、ユエちゃん。この音楽にユエちゃんの霊たちを助けたい思いを乗せるんだ」

「はいです」

はじめは音に霊波を乗せるという行為自体を理解できなかったユエちゃんだったけど、一時間ほどでそのコツをつかみ、完全に自分の霊波を乗せることに成功した。

結果は、他の実験することなど意味がないほど解った。

威力としてはおキヌちゃんの半分ほどの能力だろう。しかし、それが実行できるということ自体が実験の成果だった。聡美ちゃんは、オカルトと科学の融合に感動し、カオスはこの実験結果からマリヤにも転用可能であることを確信した。

「で、どんな兵器にするんだ？」

「うむ、ゴットボイスかのお？」

「ゴットはまずいだろ？」

「小僧から、本人に使用許可をもらえんかのお？」

「まず間違いなくマリヤ自身が気に入られて、代わりに神族になれとか、部下に迎え入れましょう、とか言われるだろうぜ？」

「それはいただけんのお」

「確かに、茶々丸が勧誘されてますからねえ」

「神族と魔族、両方からな」

「うむ、無垢なる魂じゃからのお」

そういう理由だったのか、と思わずなっとく。

「ゴット・ラ・ムウ、がいいところかのお？」

「なんでネタ技にこだわるんだよ」

「マリヤがお前たちのネタ技にあこがれておってな、機構上可能なら仕込んでほしいと請われておるのじゃよ」

「ですが、マリヤさんは結構完成してるので、むずかしいんですよえ」

「アタッチメントを追加してもだめなのか？」

「それでは満足せんほど渴望しておる」

マリヤ、お前はどこに向かっているんだ？

それはさておき、俺たちはこの音源と霊力を一緒に使える装置開発に打ち込むことになった。

「やっぱり背負うのが一番つすかね？」

「そうね、装備に関係ない位置が良いわね」

「移動も考えると背負うしかないです」

「あまり重いと困るでござるなあ」

「補助で楽器型の音源と背負いバッテリー、楽器の方に霊波同期装置、かな？」

「ふむ、そうなるとある程度の大きさが必要じゃぞ？」

「だったら、思い切ってギター型とかどうです？」

「……」

「その形なら、パーカッションとか、キーボードも可能ですね」

「……なんだか除霊っぽくないです」

「それもいいやろ、なんせ俺の事務所やし」

そんなこんなで横島霊能楽団、準備中。

試験運用として音源と霊波伝達装置をセットにしたユニットを隊長のところまで試したところ、五体投地で「是非とも完成の折りにはオカルトGメンに卸してください」と頼まれてしまったのは内緒だ。気まずいので三セットほどレンタルしたところ、毎日結果報告と詳細運用報告があがってくるようになって閉口したのだった。

第四十五話（後書き）

修行編というよりも、けっこう泥臭い内容がちらほらとW

二次創作なので色々引っ張ってきてますが、それなりに体裁は整ってるかなあ、なんて思っています。

第四十六話（前書き）

GM到来!!

って、これだけでネタ割れしてる気が・・・w

第四十六話

「ちょっと見に行くわよ・母」

突然のメールには驚いたけど、アポなしでこられた前回に比べれば、結構余裕だな、なんて思っていた。

で、目の前の光景をみて、同じように思えるかというと、そのへんは、まあ、なんだ、ごめんなさい、だ。

「さいしよはグー！」

「『『『『じゃんけん、ぽん！』『』『』『』」

何でも、お袋が来る時の空港送迎に行くメンバーをジャンケンで選ぶとか。

うちの従者総出でジャンケンってどんなもんよ？

まあ、ネカネさんやら魔鈴さんは参加できないわけだけど、事務所メンバー勢ぞろいでジャンケンつうのも恐ろしい話だ。

「つうか、くるのお袋だぞ？ 有名人じゃあるまいし」

その一言に視線集中。

つうか、殺気ってなによ！？

「忠夫、黙ってる」

「ういっす」

ジャンケン オブ ジャンケンの頂点に立ったのはエヴァ。
従者は茶々丸。
で、もう一人が、コノカちゃん。

「ふ、ふふふ、ふはははは！ 強者は勝つのだ！」
「かったえ〜！」

ずびっとピースサインの二人は、胸を張り勝ち誇るのであった。
つつか、なぜ誇る？

「くくくくくう……」「」「」「」

実に悔しそうな、その残り。
なんだかなあ……

翌日、成田まで来た俺達の前に、すらりとしたコートを着たお袋
登場。

「久しぶりね、忠夫」
「よ、おつかね」

ぱん、とハイタッチの俺たち親子。
が、追加三人がきわめて緊張していた。

「ひ、ひ、ひ、ひさしくお目にかかる。エヴァンジェリン=A=K
=マクダウエルだ」

「おひさしゅうごいします。近衛コノカでございすっ」

「従者、茶々丸でございます・・・」

「」「義母様」「」

「ぶっ！」

思わず吹いてしまった俺と正反対に、お袋は何だか嬉しそうだった。

「なんだ、もうそういう関係なのかい、忠夫」

「まてまてまて、お袋、まてつて！」

「お嬢さん方は、準備万端つてかんじだけど？」

「いやいやいや、ほら、みんなまだ中学生だろうが!？」

「まあ、ちよつと早い気もするけどねえ？」

ちよつとだけじゃねえ！

「義母様、どうだろう。おすすめの料理店があるのだが。一緒に昼食などどうだろう?」

「あら、エヴァンジェリンさんは食通だと聞くから結構期待しているのかしら?」

「ええですよお、義母様。うちもかなりお気に入りなんです」

なんか、すごく盛り上がってるし。

「どうぞエヴァと及びください」

「うちは、コノカとよんでください」

「茶々丸とお呼びください」

するつと茶々丸ちゃんが入ってるのが、なんかおもしろい気にな

る。

「じゃ、案内してもらえるかい？」

「はい」

たどり着いたのは「魔法料理魔鈴」。

確かにお勧めだろう。

が、

「「「「いらっしやいませ、義母様！」「」「」

なんで従者全員いるかな！？」

「豪華絢爛なお出迎え、感謝感激、かしらね？」

にやりと笑うお袋を、みんなが拍手で迎えた。

「お久しぶりです、義母様。魔鈴めぐみです」

「おばえてますよ、めぐみさん。未成年の小僧の面倒をみてもらって感謝してます」

「いいえ、忠夫さんには私の方が面倒をみてもらっているような感じ。年長者として恥ずかしいですわ」

なんか、「おほほほ」とかいう笑いが似合う人間関係に見えるなあ。

「これからお食事会、という感じにしたいのですが、よろしいですか？」

「ええ、結構おなかも空いてるし、めぐみさんのお料理も楽しみにさせてもらっわ」

・・・なんやろ、この疎外感。

「では、うちも厨房に行きますわ」

「わたくしも向かわせていただきます」

茶々丸ちゃんとコノカちゃんも厨房に向かい、席に座っていた千鶴ちゃんも一礼して厨房に向かった。

うんうん、我が事務所の厨房メンバーが勢ぞろいってかな？

「では、義母様。食前酒などお楽しみただこうか」

「あら、このラベルは知らないわ。どこのワインかしら？」

「それは我が城で作られたものを、愛子空間で20年ほど寝かせたものだ」

「まあ」

流れるような動作で一口飲んだお袋は、にこり微笑んだ。

「とてもおいしすぎて、商品化を考えたくなるほどの味ね」

その言葉を聞いて、万歳を始める従者団。

なにしろブドウの収穫からブドウ踏み、瓶詰めやラベルデザインなんかを自分たちでやったからだった。

味についても美神さん太鼓判なので、心配はしていなかったのだが、お袋の口に合うかということだけは不安だったらしい。

従者たちの大半は未成年なので、ブドウジュースだが、お袋とエヴァはワインをたしなみ、そしてにこやかな会話を楽しんでいた。

「へえ、そんなに違うの？」

「恨みを持って死んだ魂は変質してしまうそうさ。だから正気に戻して輪廻の輪に戻してやりたいと、ユエや忠夫が言い出してな」

「・・・ふうん」

まじまじと俺を見つめるお袋。

「で、これから始めるのが、それ？」

「そうです」

そう言って引つ張りだしたギター型端末と背負い型のバッテリー & 制御装置。

ユエ・夏美・ユウナ・アキラが装備し始めた。

色々とみんなですら試したところ、この四人が適正の高さを見せたため、練習してみたのだが、かなりいい仕上がりになったと思う。

四人ユニットの時は内容を入れ替えてバンドっぽく出来、一人一人ならソロプレイヤーとして成り立つようにしてみただけ、結果はどうかなあ、と・・・。

「」「」「あ」「」「」

古来より、神楽音曲は霊能として当たり前の存在だった。

が、明確に意図された「それ」は、実に感動的なもので、このままプロデュースしたいレベルを超えていた。

息子の話では、これは一回一回にかかる除霊費用軽減のために編み出した小技だそうだけど、私のところに入ってきた情報だとそんなレベルではなく、まさに除霊革命の一端だという。

どんな革命かと言えば、「対費用革命」「霊能革命」「組織運用革命」等々。

なんだかよくわからないものの筆頭である「除霊」を、科学の底面まで引つ張り込んで「それ」を成功させているという実績と、再現できるという科学根拠の実証。

すでに各国から情報公開への要求が高まっていた。

それを知ってか知らずしてか、息子は試作品をオカルトGメン、それも救世の女神と呼び名も高い美神美智恵に預けているのが、各国にとって痛し痒しといったところだろう。

少なくとも、各国間の引つ張り合いや恫喝で手に入れることができない場所であるし、相手も相手だけに手がでない。

窃盗という手段も行われていたが、いつの間にか元の場所に戻っているという。

監視カメラの情報では、試作機を盗んでおいておいた場所から、小さな子供が逃げてゆく映像が残っていたとか。

つまり、自分から変化して元の場所に戻ったというわけだ。どれだけの安全策を施しているのやら。

「どうですか？ お口にあいますか？」

「ええ、とてもおいしくてよ」

現代の魔女、魔鈴めぐみ。

忠夫の従者として名を連ねてくれている女性だ。

こんな女をバカにしたかのようなハーレム状態を容認し、そして仲間に入っていること事態愚かしいのではないかと直接電話で聞いたことがあったが、彼女は微笑みを込めた声で答えてくれた。

「横島さん、いいえ、忠夫さんは、人生をともしても惜しくないほどの男性ですが、一人で支えるには重すぎる男性だと思ってますの」

女であれば、女ならば、その男を自分に縛り付けたいものだろうに。

「それを瞬間たりとも思わないわけではありませんが、あの人のものでありうる可能性はコレしかありませんので」

電話の彼女は清々しい笑顔であることがわかった。

そんないい女に惚れられている息子は、演奏中の四人にヤンヤヤンヤの大歓声。

こんなガキのどこがいいのやら、と思ってたけど、周囲の女の子もちらちら息子をみているのだから、こう、不合理なものを感じないでもない。

まあ、でも、こう考えればいいだろう。

意図せず、大量の、多種多彩の娘を得ることができた、と。

ふふふ、覚悟しなさい、忠夫。

娘さんたちの艶姿を一通り楽しませてもらうわよ？

もちろん、あんたの財布でね。

午後からお袋による横島霊能事務所の経営状態チェックが入った。愛子はかなり絞られていたけれど、前後の帳簿をみて逆に俺は感心した。

なにしろお袋、経営へちよつとした指摘をするだけで売り上げを数倍にするようなスーパーOLなのだ。

それなのに純利益も運営費も全く変わらないし、数字上に変化など微々たる状態だったりする。

つまり、愛子の勝利なのだ。

そのことを愛子に言うと、一瞬虚につかれたようだったけど、へへっとなつて赤くなつて笑つて見せた。

「だめよ、忠夫。愛子ちゃんはまだまだ伸びるんだから、甘やかしちゃだめ」

「ええやん、かわいいんだからかわいがるもんやろ？」

「あんだ、典型的な女をだめにする男やな」

ぎん、と睨まれては反撃できましえーん。

「まあ、ええわ。それより、お世話になつてる方々に挨拶させてほしいんやけど、案内できるか？」

「おう、まかしとき。妖怪大將軍を筆頭に結構出勤してると思うで」

そんなわけで、疲労困憊の愛子をおいて、俺とお袋、そしてエヴァとコノカちゃん、加えて千鶴ちゃんのチームで巡業開始となつた。

「お初にお目にかかる。本麻帆良学園の学園長をしている近衛近衛門と申しますじゃ」

「初めまして、近衛老。私は、この忠夫の母、横島百合子ともうします。愚息の迷惑を色々引き受けていただいとお聞きしております。」

礼儀正しく始まった挨拶だったけど、まあ、身内が身内だ。

ぶっちゃけた話が始まった。

「というわけでのお、人界の戸籍だけでも入籍して、これからの交流をじゃなあ・・・」

「そうもうしましても、コノカちゃん以外にも色々と責任を背負わねばならない娘さんもいるようですし、親の一存では返事できないことですわ」

あぶねえ、あぶねえ。

となりでコノカちゃんが小さく舌打ちしてるなんて聞こえねえ。癒しの本丸コノカちゃんが、肉食系の行動方針で動いてるだなんて信じねえぞ。

「信じないのは勝手だが、畏は深いぞ？」

エヴァちゃん、怖いからやめて！

「おお！ 横島君のお母様ですか！！ いや、じつに感激だ！ このような好青年に育てた人生訓というものをお聞きしたいと思っていたのですよ！」

えー、なぜか高校の職員室に女子中学の3年学年主任新田先生がいた。

「ああ、来年度にはうちの生徒が何人もお邪魔することになるからね。今のうちに打ち合わせにきているのだよ」

いい先生や、ほんまにいい先生や。

コノカちゃん、千鶴ちゃん、このことは噂に広めちゃいかんぞ。

「なんでえ？ 感動的な話やん！」

「あんな、コノカちゃん。新田先生は進んで憎まれ役をして、進んで生徒のために動く人や。賞賛や好意が先生の足を縛る枷にもなるんや。せやから、無茶に広めたらあかん」

その言葉に感涙した新田先生は、力の限りに俺をハグし、さらにはお袋握手を求める。

「いや、本当にすばらしい青年ですよ、彼は！ 彼のおかげで問題時ばかりの3Aは学内一番の成績になり、そして品行は向上、もう、彼にはこのまま教師になってほしいほどですよ！！」

「は、はあ……」

信じられない高評価に呆気にとられたお袋だったけど、周囲の先生も絡めて素行を聞いて、一応の納得をしたようだ。

「・・・私は息子を厳しく育てすぎたせいで、一度は歪めてしまいました。それでも息子は前向きに生き、そして育ってくれました。みなさんにお褒めいただけるような息子に育ったのだとすれば、すべて先生やみなさんのような周りの人たちのおかげだと思っていますのよ?」

お袋の話に感動した教師たちは万雷の拍手をして、みんながみんな握手を求めたり何だったたり。

気づけばいつの間にか魔法先生たちが集まっており、握手を求めていた。

「ああ、あなたは、マフィア先生」

神多羅木先生、まじガツクリ。

「失礼、先日の映画を見ておまして、とても可愛い感じだと思っておりますので」

真つ赤になる先生をみて、周辺も軽くなった。

「・・・横島君との教師としての接点は多くありませんが、彼のおかげで多くの生徒と触れ合うことができました。あなたの息子さんは大した「漢」ですよ」

「ま、すてきなほめ言葉ですわね」

「ええ、たぶん、彼をそう評価している「人間」は多いと思いますよ」

たぶんの意味を込めた言葉を多くの教師たちはうなずいて迎えた。

STEP 3

横島霊能事務所

良い時間になったので、事務所に戻って夕飯、ということになったのだが、今度は事務所員以外も結構きていた。

たとえば、女子中学生3A、ほぼ全員。

たとえば、ネギ・ネカネ・アーニヤのスプリングフィールドご一行様。

・・・おい、何故いるんだ、ネカネさん。
つつかアーニヤちゃんも！

「・・・私だけ忠夫さんのお母様にご挨拶できないのはずるいですわ」

「・・・忠夫のママって、結構好きなのよ」

そんな理由で逆転号を・・・

「すまん、千雨ちゃん」

「・・・」

気にすんな、と手だけでゼスチャーしてつつぶす千雨ちゃんをとりあえず撫でとく。

「で、お前ら、なんでいるんだ？」

高校の我がクラス、一同。

「いやー、ほら、異常に若いお母さんを連れた横島が目撃されたつうから……」

まあ、確かに。

どんな魔法を使ったかはしらんが、目元のしわや口元のしわ、いや、肌艶も良いしな。

……なにがあつた？

「まあまあ、これって私の歓迎で、主賓は私なんですよ？ だって学校の忠夫の話も聞きたいし、みなさんもどうですか？」

「…………ごちになりまーす！」「…………」

はあ、これでクラスはお袋のシンパだな。

第四十六話（後書き）

GMの主な目的は、息子の抜き打ち検査、ではなくて各国から依頼されている内容の調査、でした。

基本、商社なので、いろいろと動くためのカードのできるかナーと着てみれば、真っ黒すぎてカードにできない状況＋息子が無茶苦茶評価されていて面映いてなかんじです。

学園祭のときにおおよそ感じていたものの、直接言われていたわけではないので、スルーしていたけれど、実際聞いてみると本人のことか理解できないほど、というわけでしたw

で、この話は、仕事中の合間にメモしたアイデアノートを基にしています。

凄い腹筋の蛇さまサンクスです

第四十七話（前書き）

GM来襲の第二段

というか、オチです。
ちとみじかいw

第四十七話

横島さんの義母様が来ると言うことで盛り上がってしまった事務所だけど、実際、業務自体を止めるわけではなかった。

というか、その現場がみたいと言うことだったので、私とさよちゃんとともに美神さんのところに同行した。

「・・・横島君のお母様」

「美神さん、お久しぶり」

にこやかな感じなんだけど、なんとというか、とげとげしい。

私はどちらの良い人なのを知っているの、さよちゃんといっしょに仲を取り持とうと必死。

そんな私とさよちゃんをみてか、二人とも苦笑いでした。

「アスナちゃん、これは、まあ、レクリエーションみたいなものだから、ね？」

そういうことにしときます。

義母様はこのあと、アキラとユウナのいる六道、そして夏美と千鶴さんのいるエミさんのところに参観に行くそうですけど、大丈夫かしら？

私は今、多分、今までにない注目の中にいると思う。
タイガーさんやチツ姉を超えた注目を浴びてる。

・・・お母様から。

ちょっと緊張したけど、心と思いを込めて演奏できたと思う。
だからエミさんも絶賛。

「夏美、この霊具背負って、うちに嫁に来るワケ!!」

全身全霊でハグされてしまいました。

今までの除霊では、霊波の届く範囲に霊を集めるか引き込むかして一斉に消す方法だったんだけど、この「霊具」を使って演奏すると、音の届く範囲に作用する。

で、効果範囲を限定するために結界でも張れば、その範囲で反響して効果が増幅される。

つまり、より少ない霊力で効果的に多数を除霊出来るのだ、という事だったと思う。

そういう説明だったよねえ？

今の所、この「霊具」には適正があるそうだ。

ネクロマンサーの笛ほどの狭い適正ではないにしろ、かなり人を選ぶ道具なのだそうで、「霊具自体」は大量販売されることはないだろうと横島さんの言葉だったけど、でも威力は絶大だと、美神さんの言葉。

とはいえ、あそこには本家のネクロマンサーがいるんで、あんまり関係ないですよな？

その点で言えば、さよちゃんがいる横島事務所も、実はあんまり

頑張らなくていいはずなんだけど、横島さんって、こつこつ趣味には全力だし。

「夏美、次の現場に行くワケ！」

「夏美ちゃん、頑張りましょうね」

あーん、チツ姉が二人いるみたいだよー

この「霊具」、むちゃくちゃ肌に合う。

アキラもかなり気に入っていて、凄く練習してたし。

亜子が指の皮がめくれるまで練習する気持ちがあった。

それに、この霊具には「追加要素」がある。

「ユーナ、ディスク交換完了だよ！」

「了解、アキラ！」

二人の霊具のディスクドライバーが同時に回転し始める。

「ディスクX！」

音波を霊波に変え、さらには物理的に干渉できるまでに高められた霊波が私たちから迸る。

ドクターカオスと忠夫さんの共同開発霊具で演奏しながら、私たちは声を合わせて歌い上げる。

それは鎮魂でも慰撫でもない。

それは勇気の歌。

それは戦いの歌。

それは心に光をともす為の歌。

「最高、だつぜ」

私たちの演奏と冥子さんの指揮によって霊団を分解してゆくオカルトGメン隊員達。

なぜか髪の毛が短かったり眉毛がなかったりするんだけど、何でかな？

「アキラちゃん、ユーナちゃん。もう一極お願いね」
「了解！」

ディスク交換無しで再び私たちは声を上げる。

そう、勇気の歌を！ 勇者達のために！！

「Power of Desier!!」

事務所の傍で、私は霊具を展開。

ノドカやネギ先生も聞きに来てくれています。

いつの間にかお義母様もいらして、加えるならば、ご近所の浮遊霊の皆さんが大集合しています。

そう、今回は御近所霊の皆さんに向けたコンサートなのです。

演奏者は私だけ。

でも、皆さん期待してくれているので気合が入るのです。

セレクターを切り替えて自動演奏部分とタイミングを合わせます。

直接演奏部分を鍵盤に設定。

軽く鳴らした指を這わせませす。

深呼吸の後、私は声を発しました。

「あゝ」

マイクを通して意思有る言葉に変換される歌詞。

染みとおる、突き抜ける意思が空間を占める。

それは安らぎ、それは安寧、それは慰撫。

誰かを想い、誰かの安らかを願う意思。

それは、遍くを愛する心を持った少女の想い。

その場が集まった浮遊霊ばかりか、音に惹かれてやってきた人々も涙を流す。

はじめから集まっていた人々も感動させられた。

いや、感動せざる得なかった。

心を、魂を、直接揺さぶられたのだから。

気付けば、万雷の拍手に溢れていたです。

お義母様も、ネギ先生も、ノドカも、名も知らぬ人々も皆、みんな涙を流して感動してくれているのが嬉しいです。

「・・・では二曲目、聴いて欲しいのです」

私は思ったのです。

思いを、心を歌詞に乗せる感動を、もう少し付き合って欲しい、と。

ヤバイやばいと思っていただけ、真っ黒けだった。

この霊具が世界に広がれば、元々はネクロマンサーの力のはずが、聖歌や信仰の力というふうに変えて猛威を振るうことになるだろう事は間違いなかった。

GSの有用性によって退魔の分野で明らかな後手に回っていた某宗教がこれを利用しないわけがない。

悪魔祓いは戒律に合わないが、聖歌で退魔ができるなら問題ない、そんな流れで乱用されるのが目に見えている。

息子は「これは事務所装備やから、国外にはださん」といっていただけ、実際には海外からの情報照会が激しい。

背後には「バチカン市国」の某情報管理事務所を兼ねているテンブルナイツが囓んでいるだろう。

先ほどまで見た演奏除霊は、様々な局面での有用性があり、アキラちゃんとユーナちゃんの演奏はまるで呪曲のように味方の力の底上げをしていた。

夏美ちゃんの曲は荘厳で壮麗でその力に圧倒された霊たちが粛々と世界から退場したし、ユエちゃんの演奏は霊や人々の意識を覚醒

させる何かがあった。

そして四人が同期すると、それは圧倒的な力となった。

こんなものを正直に報告すれば、何としてでも手に入れようと手を伸ばすバカが多いだろうし、大国の力というものがどんなものを息子に味合わせることになるだろう。

それもそれで良い教育なのだが、息子ばかりか未来の娘たちまで迷惑をかけるのはいやだった。

ならば、この話は「横島」に仕切らせてもらおうじゃないか。うちの馬鹿旦那だって、これだけの数の娘に「お義父様」とか呼ばれれば、鼻息荒くハッスルするに違いない。

あ、そうだ、忠夫には言っておかないといけないことがあった。

そろそろ、あんた、お兄ちゃんだよ、って。

あらあら、忠夫さんってば、お義母様の見送りから帰ってきたら倒れそうになって。

何かあったのかしら？

そつと支えると、涙目の忠夫さん。

やだ、ちよつと可愛いわ。

夏美ちゃんの涙目もいいけど、忠夫さんの涙目もいいわ。

茶々丸さん、記録記録。

・・・OK!

さて、堪能したので覗き込むと、忠夫さん悲しそうに。

「・・・わい、そろそろお兄ちゃんになるらしいんや」

まあ、お義母様、タダオさんにカミングアウトなさったのね。

「って、千鶴ちゃんしつとたんか!？」

というか、皆わかってましたよ、ね？

と、私のふりに皆頷きます。

「・・・なんで？」

「女の勘です」

がつくり頂垂れる忠夫さんも可愛いですね。

ささ、存分に撮影を、茶々丸さん!!

・・・GOOD!

「・・・どのへんで解るんやろ？」

「そうですねえ、たとえばお義母様の肌が若々しいのは女性ホルモンが活発なせいですし、食事にもかなり気を使ってらっしゃいましたし、香辛料にも細かな配慮や・・・」

「そっか、決定かあ・・・、美神さんみたいな問答無用じゃない分
ましやな」

そういえば、美神さんも年齢差がかなり有る姉妹でした。

・・・忠夫さん、叔母と姪っ子が年子、なんて興味がありません？

「ち、ちづるちゃん……」

血の海の中に崩れ落ちた夕ダオさんを見て、割と純情なんですよねえ、とか思ってしまった私だった。

第四十七話（後書き）

作中、歌詞は出てきませんが「ネタ」の曲名が出てます。
多分ガイドラインではグレーですがセーフ、と判断してます。

で、感想でもいろいろとお話を頂きましたが、演奏霊具のネタは元
は予想通りですw

熱気な人と、神曲な方々、ここまでは予想されていたと思うのですが、
最後は予想されていなかったみたいなので追記、13世な勇者
ロボですw

では、そんな分類かと言うと・・・

夏見： 神曲（フォーン）

ユーナ： 13世

アキラ： 熱気（というか、ミレ又？）

ユエ： 神曲（シーナ バケツツ）w

えー、「バケツツ」誤植じゃないです、ネタです。

第四十八話（前書き）

おひねごぶりのよいごまはらぶち。

第四十八話

話しに聞くとところによると、おキ又ちゃんは六道の生徒会長みたいな役目になったそうだ。

「……えーっと、どっちかって言うと天皇陛下みたいな感じじゃないかと思うんだなあ……」

— 文字さんの話だと生徒会長は別にいるそうだけど、象徴というか憧憬の対象というか、そういうシンボルらしい。

「どっちかっていうと、弓さんあたりがそんな役だと思うんだけどな」

「そうでもないですよ、横島さん。どちらかというとは私は偽物ですから」

まあ、雪之丞から弓さんの武闘派ぶりは聞いているし研修内容で見れば、まさに女雪之丞なんだけど、見た目や物腰は「超」お嬢様だと思っただけだなあ……。

「その、見た目と物腰、そして心があって初めて選出され、そして全校生徒の承認によって生まれるのが『エルダーシスター』なんですのよ?」

で、そのエルダーシスターに選出されたのがおキ又ちゃん、と。まあ確かに優しくあつたかくて、その場を和ませてくれる癒し存在だけだなあ。

ともあれ、ボケとして排斥されると思つてたんだけど、かなり評

判がいつて事だな、うん。

で、何でそんな話になったかというのと、十数年ぶりに選出されたエルダーシスターのお披露目式に弓さんと一文字さん、そしてうちの事務所に招待状が来たのだ。

なんというか、その招待状、豪華絢爛でありながら、黒々とした意志を漂わせてる。

まるでシメサバ丸を構えたおキヌちゃんかのように。

「とりあえず、弓さんと一文字さんは参加だよな？」

「うん」「はい」

「うちはどうする？」

そう言っつて振り返るけど、二人は確定。

明日菜とさよちゃん、ふたりは美神事務所での研修仲間なので。

あとは俺。

一応事務所代表だし。

「後何人ぐらいつれて行くんですか？」

千鶴ちゃんの質問で、一応指折り数える。

んー、通常の霊コミュニケーションと巡回も含めると、あと二人かな？

「それでしたら、このかさんと刹那さんが妥当かと」

んー、二人ともそれでいい？

「わかったえ」「了解です」

つづか、何気にバランスのいいパーティーにしたね、千鶴ちゃん。

「ふふふ、当たり前ですよ？」

なんだろう、凄く安心できない笑顔だなあ……。

GSの活動に聴衆がつくのはどうかと思うけど、まあ、演奏が心地いいのは事実なので仕方ないと思う。

ただ、あからさまにスパイを送ってくるのはどうかと思うぞ、某市国の宗教。

どうしても聖歌を呪曲にしたいらしいけど、自分たち以外の宗教は全部難払いみたいな宗教には技術交流なんてできんでしょう？

あー、まじ？

シスターシャークター、あんたも情報収集？ うっわー、不味くないですか？

私の中の評価下がったわあ……。

「千雨ちゃん、どうした？」

「ああ、横島さん」

巡回から帰ってきた横島さんが、定期慰霊公演に顔を出したので報告すると、さすがに顔をしかめた。

「もつとばれないようにやってくれって言っとくよ」

「え？ ばれなきゃいいのかよ」

「だってな、さすがに魔法と霊能と科学のハイブリットだぜ？ こんなの解析できるのってハカセかカオスぐらいなものだし」

「じゃあ、その二人クラスが研究協力してたら？」

「まあ、威力十分の一ぐらいなら再現できるやろうなあ・・・」

思わず目をむく。

そんなに再現性が低いのか、と。

とはいえ、私もその原因に思い至った。

そう、いま、うちの事務所で保有している霊具の核には「文珠」が仕込まれている。

それゆえに、威力は目を見張るものがあり、他では複製不可能になっているのだ。

「麻帆良やうちの事務所の中での運用ならまだいいけどな。外で運用したら不味い」

「こつちでも情報つぶしにかかるよ」

「千雨ちゃん、頼んだ」

万雷の拍手の中、定期公演は終了。

笑顔の演奏者たちには聞かせられない話だな、と苦笑いの私だった。

横島君の作成した新霊具の情報をバチカ から求められている。ほぼ強制のレベルで司教も胃痛に悩まされいた。

事はバチカ の威信に関わることでもあるので情報収集は秘匿しつつ、それでも本体情報を持ち出せ等と明らかに修道女に求める内容ではない。

むろん、向こうも私が魔法人であるからこそ無茶を言ってきたのだが、普段のもって回った言い方など忘れたかのような要求に目を白黒差せられた。

が、調べれば調べるほど持ち出せないことがわかった。

これは電子的にネクロマンサーの笛を再現し、不足を霊力と魔法で埋めるという無茶苦茶な構想の下で生まれた奇跡だったから。

元々の話は、霊力を乗せたCD音声を神霊であるセイレーンが肉声と勘違いしたという事件があつてからだという。

ならば、ということが開発された彼らの新霊具は、その技術力も相まって恐ろしいまでの成果を残してしまった。

個別で現場運用されたときの効果、合奏したときの効果、ともに破格で、これまでの除霊の常識を根底から覆すものだった。

悪魔払いを異端とする協会でも、これならばエクソシストとして名をあげることができる。

だからほしい。

よこせ。

これが西洋社会の社会宗教のあり方だった。

これがEUやUSAで生まれた技術ならば「よこせ」「よこさなければ異端で破門」で済むが、ここは日本、絶対にあり得ない。

異端だ破門だと騒いでも、「なにそれ？おいしいの？」てなもんだ。

加えるならあの横島忠夫、あの「方」と焼き肉を奪い合う仲だとか。

そんな人間に異端扱いなどちゃんちゃらおかしい話だろう。

逆に騒ぎを起こした人間が破門されてもおかしくない。

・・・本気でそのことを報告書に入れようかと思ってしまうくらいだ。

一応、現場で録音した音声は送ったが、再現性は低いものだった。全音域録音しても追いきれない何かなど、本気で研究しなければ手に入るものではない。

成果だけかすめ取りたいなど、どこの泥棒だと言いたいが、どうにもこうにも文句の行きどころがない。

シスターシャークティーが胃痛で倒れたとか。

馴れないスパイごっこが負担だった模様。

というわけで、不祥の生徒こと私、春日が話を聞きにきたっす。

「あのなあ、一応企業秘密なんやで？」

「そこをなんとか・・・」

土下座もしてみただけどダメでした。

「ねーねー、そんなにバチカに渡しちゃいけない技術なんすか？」

「んー、作って使ってわかったけど、これ、オカルト業界の核兵器

って感じなんだよ」

え、そんなに不味いの？

「サンプリングした音が、靈力に変換されて攻撃にも防御にもできる。魔法以上に禁忌技術やな」

うっわあ、じゃ、あの高畑先生の魔法レベルで？

「それ以上」

おもわず横島さんを見てしまった。

彼の苦笑いで真実だとわかってしまう。

「で、俺たち以外異端全滅みたいなことを真剣に言っている奴らに渡すと、神魔と戦争までしかねーんだよ」

なんとというか、凄く、すごーく理解できた。

確かに神族の主流はウチらしいけど、他の神族と戦争になったら恐ろしいことになるだろう。

やべ、うちの先生、そんなことに巻き込まれてんのかよ。

というか、胃痛になるのは当然だわ。

「というわけで、教えられん。納得した？」

「ういっす」

くわー、魔法だけでも一杯一杯なのに、このうえ神魔戦争？ ありえねーって。

六道婦人の迎えもあり、俺たちはロングなロールスロイスで六道女学院まで連れてこられた。

参加者は俺、このか、刹那、明日菜、さよ、そしてなぜかアキラちゃん。

彼女だけ別途に招待状が来ていたそうだ。

おそるべし、六道親子。

まあ、六道で冥子ちゃんが参加してるかもしれないという時点で予想はできていたけど。

実にご機嫌な冥子ちゃん。

何しろ右に美神さん左にアキラちゃんの布陣だ。

これでユーナが入れば完璧かもしれないけど、残念、本日はローテーションに入っていて不参加だった。

そんなご機嫌モードの冥子ちゃんの後ろで、俺は不機嫌モード。

何しろメンドクさいことに、俺の両脇を六道婦人と隊長に挟まれていたから。

いや、嫌いな訳じゃないよ？

ただ、政治的に利用されているかのような位置が嫌なだけで。

「あら、横島君、ご機嫌斜めね？」

と、ふにゅんっと柔らかいものが押しつけられた。

くう、この悪女め！！

「横島君は、不本意だったかしら？」

「い、いや、この式典に参加自体は不本意じゃありませんよ？ お
キ又ちゃんのお祝いですもん」

ただねえ、こう、来賓の中の最上位席にいるのが、ちょっと、ね。
大体、GS協会会長の唐巢神父より上位の扱いは困るんですが？

「いいじゃない？ それだけ横島君が重要って事よ」

「いやいや、隊長。そう言うわけには行かないでしょ？ あっちで
怨叉の視線を送ってきている六道闕の方々が・・・」

「あら、問題ないのよ？ だって、横島君たちが闕にはいつて
くれれば、今までの闕なんて、何の価値もないもの」

ぐはっ！ つまり俺を餌にして闕の清掃をしようって事かよ・・・
さらにオカルトGメンの内部清掃もかねるって、どんだけ俺個人
に負担があるんだよ！

「ギク（～）」

あー、もう、勝手に利用しないでくださいよ、もう。

「ごめんね、でも、横島君ぐらいの若い人が力を持ってくれるか
ら、これからのオカルト業界は安泰だと思うのよ」

「そうね、だから今のウチに業界をきれいにしておきたくって。無
茶したわ」

まあ、この人たちの思惑って、そう言う側面があるから文句が言
い辛いんだよなあ。

つまり、今のウチにゴミ掃除をして、次世代によい未来をという活動なのだというのが。

これは、俺たちのためでもあるし、今、この場の六道の生徒のためでもあり、そしておキ又ちゃんのためでもあると言われてはいろいろなもの呑むしかない。

「でも、そういうのって美神さんの役目だったと思うんですけど」

「ふふふ、そういう矢面に立つ立場も世代交代があるのよ」

「令子ちゃんは隙があっても反撃が怖いわ。それが知れ渡ってるから、もうお役ごめんかしら？」

はやくお役ごめんにして下さいと心から祈るっす。

そんなバカ話の最中に、式典が開始され、そして祝辞なんかを歴代のエルダーシスターが登場して読み上げていたりする。

出てくる人の多くは「強い女」「鉄の女」系統が多く、美神さん系統のにおいがある元少女の潔癖さを感じた。

が、おキ又ちゃんの一代先代は違った。

何というか、雰囲気が違うのだ。

そう、なんというか、こっ、黒い。

「彼女がオカルトGメンEUの元締めよ」

「・・・っわ」

つまり、今、諜報戦の防御ラインを支えてくれているのが彼女と
言うことらしい。

「隊長、つまり、俺を生け贄に彼女を引き込むっつ事っすか？」

「まさか。横島君を紹介してくれるだけでいいって話だから連れてきただけよ？」

「絶対それじゃ済みませんって。いまにでも『喰っちゃるか』って目じゃないですか」

「あら、彼女、結構スタイルいいし、それもおいしいんじゃないかしら?」

「ありや、^{パッケージ}矯正下着のパワーツ」

隊長の耳元でささやいただけなのに、なぜか演台の視線が強化された。

やべ、殺される……。

思わずガタガタ震えているところで、不意に気づくと六道婦人がマイク片手に立ち上がっていた。

演台の祝辞もひと段落と言うところで、婦人にスポットライトが当てられていて、にっこりほほえむ姿がスクリーンにも映し出された。

「ご来賓のみなさん、この度はエルダーシスター就任式にご出席いただきありがとうございます」

おキ又ちゃんを持ち上げつつ、これからの六道やオカルト業界を支える柱の一つなので、彼女に助力を頼むという話で締めくくられた。

やっと終わった、と思っていたのも束の間。

いきなりマイクが渡された。

そのまま隊長にスルーパスしたら、その様子がスクリーンに映し出されていて、会場から爆笑の渦が発生。

うむ、拳骨で隊長に殴られたけど、良い笑いがとれたからいいか。

一応空気を読んで、堅っ苦しい挨拶を一通り並べた後で、ちょこ

つと仲間としての一言。

「・・・おキヌちゃん、おめでとつ。素敵なお姉さまになってくれよっ。」

その一言で締めくくったところで、万雷の拍手がもらえた。うん、いい感じだな。

さっきのEU元締めも視線の攻撃色を弱めてるし。

このまま終わりにできんかなー。

「とりあえず、この後の立食パーティーのは出してもらおうよ?」

「・・・逃げたい」

「今逃げたら、麻帆良まで追っ手が来ると思ってね?」

「・・・ぼすけて」

必死になって逃げまどっていた六道の面倒事が横島君に行くようになって解ったんだけど、冥子の面倒事って私個人について回る厄介事だったのね、ってこと。

オカルト関係の公はなくなったけど、冥子自身が持ち込む厄介事は減らなかった。

まあ、横島君がアキラちゃんやユウナちゃんを研修で入れてくれるおかげで激減しているんだけど、それでも厄介事はなくなるない。

今回のおキヌちゃんエルダースター就任も冥子が一枚かんでい

ないわけではない。

推薦者の一人だろうし、推進者の一人に違いない。

ただこれは、おキヌちゃんへの応援でもあるだけに厄介事だと決めつけはできない。

が、面倒事であることには違いない。

純粹にGSとしての活動だけではなく、社会システムに組み込まれることが決定したようなものだから。

そのための足場固めは、私も協力しろと言うことなんだろうと、ママのプレッシャーを感じたりする。

で、私に代わって矢面に立たされているはずの横島君は、ガツチリ固められていた。

一人、六道冥那。

一人、美神美智恵。

一人、羽川つばさ。

ごめん、横島君。

アタシでもそこに行きたくないわ。

代替わりしてくれてありがとう。

あなたは良い丁稚だったわ。

つつか、あの完璧超人羽川つばさが、わざわざ横島君を見に来るのも驚きなら、怒りなんていう感情を込めてみているのも驚きよね。少なくとも、エルダー在任中やら世界転戦しているときだって笑顔しか見せなかった「笑う仮面」と言われていたのに。
なに言ったのかしら、横島君。

・・・ダメね、その興味が猫を殺す、そう靈感が囁くわ。
無視ね、無視。

EUの魔女という噂らしい、羽川つばさんは、なんつつか、怖い人だった。

真っ黒な現実と真っ白な理想をそのまま建前そのまま堅持できている怪物で、つきあいきれないほど高邁な理想の人だった。

まあ、その余波がいろんなところに出ているからこそその「魔女」の字なんだろうと思うけど。

一応、とげとげしい空気のまま会場にいるのを良しとしなかったという理由で貴賓室に移動したところで雰囲気が変わった。

なんとというか、全員が仮面をとったという風情だった。

「勘弁してほしいっす、胃に穴があくっすよ」

「なに？ 横島君。女の子何人も抱えている事務所の所長がそんな根性でやってけると思ってるの？」

「まあ、そうなの？ ほんと？」

「横島君は、女子中学生ばかりを雇ってるのよ」

「まあ、ロリコン？」

「ロリコンちゃうわー！ー！ー！ー！ー！」

とまあ、合法的な人払いの中で、いろいろと社会的な裏側について会談に参加させられたのであります。

つつか、俺みたいなの丁稚に、こういう重い話を振らんでください。

「……そうやって逃避できるうちはいいけど、逃げ場はどんどんなくなるものよ？」

羽川さんのせりふは非常に重いものだった。
そのこと自体は、実のところ最近よく考えることだから。

「でもまあ、なにも考えている訳じゃないって解っただけでも収穫かな？」

にっこりほほえむ羽川さん。

六道時代は美少女やったんやろうなあ……。

「あ、逃避してる」

「逃避してるわね」

「逃避してるわ」

女性はかくも鋭いもので。

あー、誰か助けてー、美神さーん。

第四十九話（前書き）

えー、前回の続きです

第四十九話

なんというか、お嬢様学校ってすごすぎ。

美神事務所所属の氷室先輩が主役の式典、そんな学校内のイベントに呼ばれたんだけど、規模がすごい。

政財界の有名どころとか、GS協会の偉い人とか一杯集められている会場の雛壇に氷室先輩がいるんだから。

学校のイベントって、もっと手作り感がある話だと思っていたのに。

なんというか、隔絶よね？

「えーっと、アスナさんがそれを言うのは反則かと思えますよ？」

苦笑いのさよちゃんにマジ質問。

「え？ なんで？」

「アスナさん、あなたの出自を考えてください」「・・・あ」

とりあえず、私、王族だっけ？

つつか、もう関係ないつもりだけど。

「王権を振るってませんが、復帰は望まれていますよ？」

そっか、そういう面でも呼ばれた？

というか、選んだのは千鶴だけど。

「アスナ、うちかてそういう面で呼ばれてるんやで？」

ああ、そっか、コノカもいわばお姫様。
なるほどなあ……。

選定理由が超納得。

「あの、アスナさんって、結構成績よくなってません？　なのになんで……」

「あんな、せつちゃん。成績がいいのと察しがいいのは別なんやで？」

「ああ、このちゃん。すごく理解できました」

失礼ね。

最近成績はいいし、周りの空気も読める、いい女なのよ？

「お二人とも、それは失礼ですよ。アスナさんは以前の天真爛漫な性格が残っているだけです」

「さよちゃん、それは『アホな子』の性格が残ってる、って言うてるよつなもんや」

コ、コノカ、言うじゃない。

……というか、否定なさいよ、さよちゃん。

そこで、ゆっくりと視線を逸らさない！

「あー、みんな来てくれたんだ」

気まずい雰囲気吹き飛ばすように、氷室先輩が登場。

いつもお世話になっています。

主に、夜食的な意味で。

で、彼女の隣には何故か苦笑いのアキラちゃん。なんだか、完全に取り込まれてるわよね、うん。というか、そっちで困役をお願い。

「はい、お邪魔してます、氷室先輩。・・・いいえ、おねえさま、ですか？」

軽いジャブだったんだけど、地雷でした。

「・・・そう呼んでくれるなら、ウチに来てほしいわねえ」

おほほ、と黒い笑いを浮かべる氷室先輩。

んー、いい感じになってきたなあ。

なんだか冥子さんより冥那さんっぽいし。

これは、ああ、横島さん曰く「シメサバ丸モード」？

「氷室さん、エルダー就任おめでとございますわ」「おキ又ちゃん、おめでとっ」

「弓さん、一文字さん」

ぱあっと明るい顔になった氷室先輩。

・・・せーふ。

やべーやべー。

少なくとも、アキラちゃんを生け贄にしてるんだから、これ以上の被害は・・・。

「・・・二人が学院にいればこんな事態には・・・」

があ・・・また黒くなってる。

黒というより漆黑！

というか、一文字さんも弓さんも私の後ろに隠れないで！

こ、コノカ、刹那さんまで！？

さよちゃん・・・逃げたあ！？

アキラちゃんまで何で隠れるのぉ！

「ねえ、アスナちゃん。こういう時ってどんな顔をすればいいと思うっ？」

「・・・笑えばいいと思います」

ああああああ、なんで私はここでネタに走るかなあ！？

一層黒くなる周囲の気配に冷や汗が止まらない私だった。

これなら、老師と対面してる方が・・・いや、あつちは即死、こっちは精神枯渇、どっちもいやー！！

あ、アスナちゃんが生け贄になってるわ。

まあ、彼女も魔法世界のお姫様だし、おキ又ちゃんとしても縁をアピールしておくに越したことはない関係よね。

あの、あそこに集まっているメンバーと言えば、次世代のオカルトメンバー＋魔法世界の中心があるといえる。

この度エルダーシスターに就任したおキヌちゃん、魔法世界のお姫様アスナちゃん、関西呪術協会のお姫様コノカちゃん、すでに六道の次女とまで言われているアキラちゃん。で、GSの古参弓家のおおりにちゃん。

あとの周辺関係者はすべて横島事務所関係者。

まあ、話題と騒動の中心よね。

今まで中心にいた立場からすると、懐かしさすら覚えるわ。

「令子ちゃん、みんな楽しそうね」

「ま、本人たちは苦労していると思ってると思うけどね」

そう、若い頃の苦労は、買ってでもっていうじゃない？

「でも、令子ちゃんは、買う契約をしつつもお金を払うときに値切つて、報酬を得ると思つての」

「言うわね、冥子」

ま、否定はしないわよ？

そういう対応も含めて経験だもの。

私は買ったたく、冥子は倍プッシュ。

そして横島君は、ぜんぜん別の角度から切りかかるでしょう。じゃ、おキヌちゃんはどうするかしらね？

呼ばれたから来たけど、場違いやなあ。

とりあえず、踊るGSの関係で、あらゆるオカルトイベントに呼ばれておるんやけど、今回はダチの関係者やしな。

氷室キヌ。

踊るGSの役づくりん時からの知り合いで、よこつち経由で結構遊んだせいで芸能界からもチェックされとつた。

そのおキヌちゃんが、六道のシンボルのな立場に立って、その就任記念式典をやる、って話が来たもんやから、顔出し程度で考えていたら、えらいことになった。

「近畿くん、サインしてください」

「うちの娘がファンなのよ」

「コンサート、毎回楽しみにしてるわ」

と、まあ、熟女のみなさんに取り囲まれてもつた。

どないしよ、と思っていたら、親友登場。

「なんや、銀ちゃん。きとつたんか？」

おお、我が心の友よ、と振り向いてみれば、灰汁の強そうな熟女三人に囲まれている横うち。

つつか、美神美智恵さん、六道冥那さん、あと怖そうな女性。

やべ、あつちの方がやばい。

なにせ、俺の周りの熟女が、潮がひくようにいなくなりよつた！

つまり、そういう女の集団に決まってるわけやな。

「あ、あああ、事務所に招待状が来てな。おキ又ちゃんの晴れ姿やし、見にきたんや」

とりあえず、にこやかに握手したところで、三人の熟女に取り囲まれた。

「まあ、横島君、近畿君と知り合いなの？」

「ええ、まあ、幼なじみで。最近でもよくつるみますよ？」

「そうね、学年別対抗でも、いっしょに来てくれたわ」

「そうだ、横島君。オカルトGメンの勧誘ポスターに、近畿君といっしょに出てくれない？」

「GS協会通してください」

「事務所とおしてください」

「・・・なんか、私だけ扱い悪くないかしら？」

と、そういえば、この女性は・・・

「あ、すみません。自己紹介がまだでしたわ。横っちの親友、堂本銀一です。仕事は一応俳優やってます」

正面の女性は、魅力的で柔らかな笑顔を浮かべた。

「ご丁寧に、どうも。私は、オカルトGメンEU所属の羽川つばさです。ドラマは週遅れだけど全部見せてもらってるわ」

・・・やっべーーーーー！

羽川つばさ？

EUの魔女！

一級非接触対象やる！！

横うち、なんつう人を連れてきたんや！

社長の冷や汗が目には浮かぶうちゅーんや！

「あ、ありがとうございます。一応日本のGS協会には見てもらってるんですが、不自然なところはなかったですかあ？」

「ん？ ああ、結構リアルな部分が多くて、日本にいる時を思い出させてくれる良作だと思うわよ？」

「ありがとうございます！」

よっしゃ！ EUの魔女のお墨付きや！

社長の冷や汗も止まるやる。

「応援してるから、がんばってね」

「はい！」

このときの応援が、どんな類の物だったかなんて思いもよらなかつた俺だった。

ああ、俺のバカ。

さすが、国内ではアイドル、国外では演技派で通ってるだけあって、羽川大將軍のとおりもいい。

このままみがわりにしたろ、とおもったが、視界のはじっこで助けを求める視線のアスナ発見。

・・・こっちの方がましだな、うん。

「そういえば、横島君も堂本君も、氷室さんとは面識あるのよね？」

「はい、自分は横っち経由で」

「ははは、同じ事務所っすからね」

「で、どっちが恋人？」

ぱつとその言葉を交わすような仕草の俺と銀ちゃん。

「羽川さん、その台詞は禁止っす」

「羽川さん、この場での質問としては最悪っす」

見れば、遠巻きにしていた人並みが、すんげー近づいてるし。

あ、なんかおキ又ちゃんの「シメサバ丸モード」が解除されてる。

このまま逃げるべきやな。

「まあ、主賓にも挨拶してませんから、俺も銀ちゃんも、いちどお暇しますね」

「ほんじゃ、」

「また」

同時に礼をして、ぱびゅーんとアスナたちの元にダッシュした俺たちコンビ。

ほんま、吉本でデビューしたるか。

横島さんと堂本さんが、「あそこ」から逃げるように現れた。
まあ、あんな相手やつたら逃げるわな。
本家の老人たちよりたちが悪いわ。

「や、おキ又ちゃん、おめでと」

「おめでとな、おキ又ちゃん」

「・・・あんまりめでたくないんですけどねえ」

苦笑いの氷室先輩。

つつか、なんとなくおキ又さんのことを氷室先輩と呼ぶようになったのはアスナと小夜ちゃんの影響や。

美神事務所で研修する二人の影響で、何となくその場の呼び方がウチらの事務所でも定着したとる。

そんな一体感を、周囲の生徒さんやら大人さんやらが近寄り難そうにしている。

まあ、そうやろうな。

今までも血統的な壁があるのに、加えてアイドル様に横島さんや。

はつきり言えば、自意識が徹底的に麻痺しとらんと近づけんやろうな・・・

「ほーっほっほっほ、氷室さん、あなたごときがエルダーとは片腹痛いですわ！」

ふらりと現れたのは、えせ金髪でキンキンになった髪の毛を、むちやくちやなダンロールにした生徒さん。

ばばっと広げた扇子には、かゆくなりそうなほど白い毛がついるけど、なんのプラスも感じん。

ほら、あれや。

ウチらは真のモフモフをしつとるから、あんなには騙されんや。

「この、金剛院綾こそが、真に、真にエルダーにふさわしいというのに、なぜあなた程度の存在が、エルダーに、そして、美神令子お姉さまの事務所で働けますのお！！！」

絶叫ともいえる声が響きわたるけど、氷室先輩ってば丸無視。

みれば、周囲の生徒さんも無視しとる。

そんな中でも、朗々と自分自慢が続いてるんやけど、ええんやるか？

「コノカさん、無視なさい」

「ええんですか？ 弓先輩」

「ええ、「あれ」は一種の霊症ですよ」

なんでも一代前のエルダーにコテンパンにされた女子生徒の怨霊で、時々こうやって現れるそう。

被っても被っても復活することから、実在の霊じゃなくて集合怨霊じゃないかというこらしい。

でも、せやったら、言霊で分解すれば・・・

「理論的にはそうですが、妬みや嫉みの感情の集合ですからね。そうそうはらせませんの」

「ああ、あれやな。負の意識の集合体ちゆうことは、カップル憎しで大暴れの『コンプレックス』みたいなもんやな」

「いやー………！」

瞬間、金剛院なんたらが光って消えよった。

「……」
「……」
「……」
「……」

周囲が盛り上がったはる。

「すごいですわ、あのシッコい怨霊を一言で！」

「でも、流石にあれといっしょにされたら、私だつて入滅するわ」

「……」
「……」
「……」
「……」

「すごいわ、コノカちゃん！ 是非とも六道に！」

氷室先輩は、二言目にはそれや〜

「ええ、そうですね！ ここまでの逸材！」
「……」
「……」
「……」

あ、なんかやばい感じや。

ここはヨコシマンバリアーやな。

せつちゃんシールドも強力やで。

エルダー就任式典は、実に疲れた。

ウチの娘たちも、美神さんも大いに疲労しているみたいだっただけ
ど、なぜか冥子ちゃんはツヤツヤしていた。

なんでやる？

第四十九話（後書き）

ちよつと別視点を入れてみました。

冥子ちゃんがつやつやなのは、ずっと令子ちゃんと一緒にだったから
ですw

11/13 修正 銀ちゃんの設定がまざってました

第五十話（前書き）

火が付いたのでアップしますw

第五十話

珍しい事だけど、今年の美神さん、海外旅行をしないそうだ。何でだろう、と思って聞いてみると・・・

「誰かさんが大事巻き起こした影響で、海外旅行なんてフラフラしてられないわよ」

まるで俺が悪いかのような言い方は勘弁してほしいものだ。そんな話を事務所ですると、なぜか冷たい視線が集中した。

「ヨコシマ、あんた自覚ないの？」

「まあ、横島君だし」

えー、なんやなんや、まるでワイの責任みたいやないか、タマモ、愛子！

「あー、横島。とりあえず、それ以上の発言は墓穴だと思うぞ？」

雪之丞まで！！

「横島さんは少し自覚してほしいのじゃ」

タイガー、貴様もか！！

なんでやあ・・・

「・・・横島さん、説明した方がいい？」

なんでやろ、癒しの最前線のはずのアキラちゃんから冷たい靈気

を感じる。

「あー、コノカちゃんも刹那ちゃんをモフモフしながらも冷たい目でこつちを見とる。」

「あかん、なんだかとってもあかん。」

「……つつか、膝の上で俺の腕から血をしゃぶっとるエヴァちゃん下ろさんと命の危機や。」

「あー、エヴァちゃん、そろそろ貧血や」

「むー、新しく吸い出してはいないぞ？ 染み出てきているのを嘗めてるだけだ」

「……おまえはカブトムシか？」

「ふっ、お前は花で、私は蝶だな」

「ずいぶん豪勢な蝶やな」

「蝶が着飾るのは道理だ」

「はっはっは、と気持ちよい高笑い響いたところで、現在休憩中の事務所を見回した。」

「今日は、久しぶりに出勤がない。」

「もちろん緊急要請とかがあるので待機してるけど、うちの事務所関係で出勤しているのは高音と愛衣だけだった。」

「厳密に言えば二人とも霊能者ではなく魔法使いなので、事務所の構成員ではないけど仲間に違いない。」

「……愛衣しゃん、大丈夫かのお」

「心配しすぎだつての、タイガー」

「魔理シャン……」

「二人にとって愛衣は妹分扱いらしい。」

嫉妬とかしないのかな、一文字さんも。
ま、舎弟扱いだから無いか。

「雪之丞、この書式は……」
「あ？ ああ、これは……」

あの、あの、雪之丞が書類仕事を弓さんに教えている。
加えて勉強まで教えてるんだ。
なんとという奇跡！

麻帆良に来るまで学校に行った事がないとはおもえん！
というか、愛子先生の実力だよな。

「横島さん、外線です」

電話番号のアスナから受話器を受け取る。

「はい、横島霊能事務所、横島忠夫です」
『緊急要請じゃ、横島君』

「俺に直接つて事は、厄介事っすね？」

『……至急、横島君とエヴァンジェリンの出勤を要請する』

さすがに聞こえているエヴァはニヤリと笑う。

「私は高いぞ、じじい」
『最高値じゃ、至急、正面門に急行してくれ！』

資金契約もなにもなしに、ということとは、マジで崩壊の危機だな。

「つつわけで、雪之丞、後任せたぞ」

「おう、いってこい！」

なんつつか、本当に助かるよな、雪之丞。

「俺とエヴァちゃんがフォワード、茶々丸はバックアップ、アスナは遊撃に回ってくれ！」

「了解！！」

「残りは一時魔鈴さんの店に避難」

「了解」「了解」

ま、これで何があっても対応できるだろ。

つつか、俺の携帯じゃないあたり、いつものイリーガルじゃねえ。ということは、……逆にタマモは不味い。そんな予感がする。

かあ、まったく。

相手が弱いと笠に着るつてのが質悪いよな、官僚つてやつはよ！
……外国だったらいやだなーとか思うけど、九割がたこの国の政治屋か官僚だろう。

麻帆良をそのままにしておいてもうま味がないので、既存権益にあり得なかったオカルト権益でおいしい汁を吸おうというのが根幹か？

「まあ、その方向性だろうな」

炎の狐をAFで召喚したエヴァちゃんが俺の隣で笑う。

「横島さん、現在、政府筋ではなく省庁からの情報で、一部隊の暴走、とのことですよ」

「ふっ、現場を動かしておいて、トカゲの尻尾切りか。やりきれんな」

「茶々丸ちゃん、黒幕は特定できてる？」

「はい。13人委員会なる裏金共有組織がいます」

「うっわー、どこの経済フィクションサスペンスだよ」

思わずため息が出た俺だったが、事務所を後にした。

麻帆良正面の橋を挟み、緊張は増していた。

物理的な攻撃力で見れば、世界でも上位にはいると言われる軍隊が、いや、自称自衛隊が隊列を組んで整列していた。

彼ら曰く、不法に土地を占拠している外国人の排除だという。

「ならば、外務省のしごとじゃろ？」

もしくは入国管理局。

「われわれはその作戦実行の指揮を受けている」

「国内示威行為じゃ。法的根拠を示すべきじゃろ？」

「その必要はない！」

指揮官と思われる男は、学園結界の縁で銃を構える。

「我々は日本国民を守る自衛隊だ。人外を擁護する職種ではない！」

「ふむ、職種のために銃を構えるか。では構えられた日本国民はどうしたらいいののお？」

「妖怪の分際で日本国民を語るとは、片腹痛い！そこをどけ、妖怪！！」

なぜじゃ、背後の魔法教員たちが無言じゃ。

わしは日本国籍をもつとるんじゃが！？

妖怪じゃないし！！

「・・・バカにしているのか？ 貴様の頭、それが人間だということかあ！！！」

なんじやろう、背後から「ガッテン、ガッテン」と聞こえるんじやが。

「あー、指揮官殿。いちおう、うちの学園長は人間のはずなんだが？」

「ガンドルフィーニ君、一応とはなんだね？昇給には興味がないと言っことかね？」

「・・・まさか、そんなはずはない！この麻帆良を統べる大妖怪かの英雄すら手を出さない古の妖怪を我らが討伐すれば・・・」

「さすがに名誉のための殺人は不味いんじゃないっすか？」

空から現れたのは、現行、麻帆良の最大戦力にして対政府関係者における鬼札！

「・・・横島忠夫」

指揮官がうめくように呟いたその名こそがすべて。

「ここに到着する前に確認しましたが、すでにあなた達の上位組織は武力制圧されています」

「・・・なっ！」

茶々丸くんの言葉に目をむく指揮官。

「ま、ここに派遣された時点で、尻尾切りされてるんだろ？ で、一部部隊の暴走とそれの鎮圧にかこつけた麻帆良制圧。一応、内部呼応部隊も魔法教師で追いたてんぞ？」

横島君の台詞に青くなる指揮官は、ゆっくりとひざを突いた。

「そこから一センチでも進入すれば、鎮圧部隊が投入されただろう。よかったなあ、運が良くて」

エヴァの一言を聞いて、飛び上がり後ずさる男。

「で、いつまで銃を構えてるんや？ 一部部隊の暴走ということで、政治屋どものおもちやにされるんがシベリアンコントロールつうわけか？」

実に辛辣な言葉を受けたが、彼らは銃を構えたままだった。

まあ、命令は聞いていない。

心神喪失状態の指揮官に追従したら兵隊失格じゃろう。

「所長、周辺山中に展開していた所属不明部隊の撤収が開始されました」

「横島さん、正面部隊の一部隊が撤収してるわ」

茶々丸君とアスナちゃんの言葉を聞いて頷いた横島君は、ニッコリほえむ。

「どうする？ 武装解除すれば俺らが匿うぜ？」

「そ、それはどういうことで？」

ふらふらに目を泳がせた指揮官に、横島君は人の悪そうな笑顔でワラワラ。

「このままなら、民間人を襲おうとした自衛官の汚名どころか先の見えないオカルトクーデターを起こしたつう汚名が部隊全域にかけられるくせに、監視に来ていた部隊はお咎め無しで逃げられるんだろつなあ……」

ざわつと、正面部隊の緊張が高まる。

「……が、一応俺にもコネがあつてね。条件次第じゃ「今回の件」をナイナイに出来ると思うぜ？」

「……本当か？」

一縷の光明。

彼にはそう見えたりじゃろつが、わしには巧妙な罠にしかみえんな。

「いま、俺のバックには六道がいて、関西呪術協会がいて、オカルトGメンがいて、アシモト元首相がいる。現実的な話だろ？」

横島君らしからぬ話だが、これは相手に合わせたと見ていいじゃろつ。

急に生氣を取り戻した男は、背後の兵達に銃を下ろさせた。

「……条件について細かく打ち合わせたい」

ふむ、どれだけ相手のプライドを傷つけずにどれだけ引き出せるか、この辺がポイントじゃろう。

まあ、その辺はワシが……

「……我々は人間同士での打ち合わせを要求する。いや、これは、懇願だ」

背後で響く爆笑。

おぼえておれよ、サラリーマン諸君。

横島から魔鈴の店に退避と命令が来たということ、魔鈴の店経由で各地に散ることにした。

アキラとユウナは六道へ、アスナとサヨは美神へ、ユエとエヴァがオカルトGメンへ、千鶴と夏美は小笠原へ、魔鈴と千雨、コノカ、刹那、クーフェイ、楓、俺による逆侵攻。

愛衣、高音、愛子、タマモは異空間で待機。

さすがかおりの同位体、高音は自分も戦闘参加すると息巻いているが、麻帆良の外で麻帆良の魔法使いが敵対行動するのはまずい。そんなことをタマモから説明され、従うほかない様子だった。

「ま、後で請求されても困らない程度に壊してくれば？」

苦笑いのタマモにニツコリ笑う愛子。

「誰に喧嘩を売ったかを理解させてきてね？」

ま、メガロメセンブリアの事実上の崩壊を聞いて、麻帆良を守る結界が弱まったと勘違いしている連中は多いらしいな。

しかし、強襲するつうやつらが、正面对決で時間稼ぎされるって、ドンだけ無能なんだよ。

「向こうは、出来るだけ無傷で麻帆良を押さえたいみたいですからね。無能で直情っていう人間を部隊長にしたんでしょう？」

魔鈴の言葉に頷くほかねえ。

「んじゃ、行動開始！」

「「「「「了解！」「」「」「」

ほんじゃ、一気に畳み込むか。

夜も遅い時間にアスナちゃんとさよちゃんが飛び込んだときには驚いたけど、どっかのバカが麻帆良侵攻なんて始めたと聞いてため息がでた。

「どこのバカよ」

「雪之丞さんの話ですと、利権にあぶれたか裏金が干された政治屋と戦争屋だろう、と」

アスナちゃんの台詞をきいて、もう一つ思いついた。

「コメリカ、いいえ、例の霊具欲しさに某宗教動いてそうね」

「・・・あ、そんな絵図がみえますか！」

「だって、向こうさん必死よ？　どんなにスパイを送っても解析できない内容とか、適合確率0.000000000001%なんていう霊具の適合者選定情報やら開発者情報とか恐ろしい値段で取り引きされてるわよ」

ま、誤認情報を裏で流して荒稼ぎさせてもらったけど。

さすがに最近じゃあ騙されてくれないみたいだけどね。

ま、稼ぎきつたからいいけど。

「そんなわけで、美神さんからも少し圧力をかけてもらえませんか？」

「いいわよ、うん、楽しそうだし」

まあ、横島君からの借り入れが山積しすぎてるし、少しぐらいは返さないとな。

「戦力は十分？」

「現地戦力は十分ですので、政治力の方をお願いします」
「判ったわ」

あ、おキ又ちゃん、お茶はいいから、寝てていいから、幽体離脱

してるから！

「氷室せんぱーい、でてますでてます」

『ほえ？ あれ、さよちゃんだあ』

なぜか、夜なのにアキラちゃんとユウナちゃんの声が聞こえた気がした。

眠い目をこすって声のする方に行くと、なぜかお母様とアキラちゃん、ユウナちゃんが話し合ってる。

なにかしら、ゆめかしら？

だったら楽しい夢がいいのに。

「そうなの、わかったわ、政府関係者と官僚のバカ狩り出しはまかせてね？」

「はい。こんなことを突然お願いして申し訳ありません」

「いいのよ、アキラちゃん達や横島君にはとつてもお世話になってるんですもの」

・・・なんだか夢じゃないみたい。

「……二人ともどうしたの〜？」

「あ、冥子さん」

にこやかな笑顔で迎えてくれる二人。

ああ、本当にうれしいわ。

「こんな夜遅くにい〜、あ、わかったあ〜、お泊まりに来てくれたのねえ〜」

ああ、横島君って、冥子のほしいこと、なんでも教えてくれるんだわ〜。

あこがれていたのよ、仲良し同士のパジャマパーティー！。

「いいえ、冥子さん、違うんです」

困った顔のアキラちゃん曰く、麻帆良が誰かに攻撃されそうになっている、という。

なんでかしら、いままでだったらそんな悲しいことを聞いたら、頭がパニックになっていたのに、すごく落ち着いてるわ。

「それは、誰なのかしら〜」

「今、みんなで調べてます。一応目星はついてますけど」

「そうなの〜」

なんで、冥子の幸せを奪うのかしら？

アキラちゃんが、ユウナちゃんが、横島君が暮らす楽園のような町、麻帆良。

あそこを無くそうとしているという事なのかしら？

つまりそれって、冥子の幸せを無くそうとしている事よね？

「ふふふふふふ」

心の底から感じるわ。

これは、沸き上がる想い。

体中が感じているわ。

これは、守りたいという想い。

こう、黒くてドロドロとして、体中を焼き尽くすほどの熱量で。

「ふふふふふふふふ」

今わかったわ。

わたし、いま、怒ってるのね。

「お母様、全力を尽くしますわ」

「冥子、立派になったわね」

守りたい気持ち、すべてをたたきつけるわ

「バカなことをするワケ」

エミちゃんに召集されて事務所に行くと、夏美ちゃんと千鶴ちゃんがおる。

仕事でも研修でもない、じゃあ、なにが起こってるんじゃ？

「実は、政府の一部利権屋が暴走して、という建前で、謎の裏金組織が麻帆良をねらっているみたいなんです」

千鶴ちゃんの説明に、わっしは目を丸くしてしまった。

あの、理想郷を、あの、わっしにとつての夢の世界を壊すつもりか、と。

「一応、忠夫さんとエヴァさんが正面にでましたので、武力的な侵攻は完全に殺せますけど、あとあとの政治的な面倒の始末をしないといけないということで、関係者への協力を依頼しに回っています」

聞けば、美神事務所やら六道事務所にも人を出しているそうじゃ。

「六道のところだけで十分なワケ」

「・・・雪之丞さん曰く、金以外の力が動いてるかもしれないから、つてことなんですけど」

あー、なるほどね、と苦笑いのエミちゃん。

どういう事ですかのお？

「タイガー、考えるワケ。協力要請された中に『GS協会がなかった』事を」

・・・!!

もしかして、今の会長が唐巢神父だからですかのお？

「そのとおりよ、タイガー。たぶん、相談を受けたところ全部が気づいているワケ」

正直、恐ろしい話。

わっしが独立しても、けしてその領域には届かないだろう事は理解できてるケン。

「タイガーさん、すでにその領域に片足をつっこんでます」

「夏美しゃん・・・」

「ふふふ、私だけこんな世界に置き去りなんて、許しませんよ？」
「なつみしゃん・・・」

ああ、わっしもあの世界にドップリ。

寿命が短そうな世界じゃあ。

「夏美、このリストの女を呪うワケ」

「えー、エミさん、私、呪うだなんて・・・」

「このリストの女は全員、国政の裏で暗躍する夜の蝶、いわば勝ち組なわけ」

「・・・とりあえず、リストを見せてください。写真もあるとうれし
しいです」

だめじゃ、夏美しゃんの目からハイライトが消えたのじゃ。

「ふふふ、夏美ったらあんなにうれしそうに」

「うんうん。さすが私の後継者なワケ」

正直に言おう、めんどくさい話が持ち込まれた。

魔境とまでいわれた麻帆良の情報公開は、ひとえに美神隊長と横島君の人力の土台にあることだ。

が、その土台を無視して利益だけを盗み去ろうとしている勢力があり、その先兵がすでに麻帆良に到着しているというのだ。

では、先兵の元をたどると……。

「……某宗教の本部、つてわけね？」

「ええ。我が国が従順に従っている某国の大統領ですら、破門をちらつかされれば、判断が揺らぎますしね」

ユエ君とチャチャゼロ君の情報により、各国のオカルトGメンと連携したところ解った情報は濃かった。

現実に、暴走した一部隊鎮圧という名目で、在日コメリカ軍すら出動を予定されていたようだ。

ユエ君のAF、ミニマリアとの連携で集まった情報を見れば、どいつが黒くて誰が白いか一目瞭然だった。

本気で、うちの署員になってくれないものだろうか。

「で、うちはなにをすればいいのかしら？」

「雪之丞さん曰く、『魔女』に情報を渡してほしい、とのことですよ……という事は、横島君の判断ね？」

ニツコリほほえんで頷くユエ君。

とはいえ、ゴキブリの駆除にBC兵器を使うようなもので、解ってるのか？

「ですが、宗教観に縛られず、それでいて強力な札は彼女ぐらいかと」

「じゃ、おキ又ちゃんからも連絡を取ってもらいましょう」

「了解です」

ぴっと敬礼をするユエ君を見て、やはりウチに来てほしい、と心底思った僕だった。

「西条さん、私をあまり熱い視線でみないでください。．．．もしかしてロリですか？」

「断じて違う!！」

「でも、美神さんにお兄ちゃんと呼ばれて悦に入っているという噂が．．．」

「悪意に満ちた妄言だ!」

いろいろな交渉の末、部隊の行き先はまだしも安全は確保されることになった。

英雄志望の彼には悪いけど、あんなにも頭が悪い英雄は害悪でしよ？

というか、あの指揮官殿は戦争の小英雄になれても、本当の意味での英雄にはなれないと思うぞ？

というわけで、脳筋指揮官を確保しつつ、外との連携をとって落とし所を探ってみたけど、まあ、気持ちいいほどの尻尾切り。

逃げきりたい連中ばかりだったので、いわゆる裏組織全体を引っ張りだして、これに関係している人はいますかー？ と目隠し自供を迫り、誰も名乗りでないことを確信した上で、確保されていた資金・財源・資産すべてを押さえさせてもらった。

誰も持っていない、誰も管理していない、誰も知らない資金だし、文句無いよな？

そんな一言に対してだれも反論しなかったが、個々で「自分のだ」「自分にこそ権利がある」「こつこつためた俺の裏金だ」などと言ってきた人間が多数現れたので、すべて検察庁に回したところ、小躍りで迎えてくれた。

まあ、全部押さえたって言ったって、国民の財産だからな。

俺の私有にするワケじゃない。

これから活発になる魔法世界外交や交流の下地にするための確保だ、と外務省と入国管理局に根回ししたところ、妖怪メツサツの話すら吹っ飛んだ。

裏金を右から左に動かしただけなんだがな。

てなわけで、国内ニュースは大騒ぎ。

尻尾を切られた役人や政治屋がテレビの解像度の限界まで並べられていて、朝からニュースが大変なことになっている。

日本国内も政治家や官僚の大量捕縛で大騒ぎになっていると伝えられているが、名前を読み上げるだけで時間いっぱいになるって、っただけだよ、と苦笑い。

じっさい、あれだけ捕まっているのに、国の機能は麻痺していないのだから、捕まった奴らって仕事していたのか？ という疑問も少なくない。

で、真実を知っているこっちとしては、大荒れも当然だろうなあ、と想わざる得ない。

今回の騒動の大本は、あれだ、新除霊具。

あれを「寄進しろ」とバカなことをいつてきた某宗教の話を突っぱねたところから始まっている。

世話になっていないわけではないので、話ぐらいをしましようかと席を設けても「よこせ」としか言わない連中とつきあうわけもないので、完全に拒絶していたら、なんと、宗教力を使って、強奪に訴えようとしやがった。

あまりの脳味噌筋肉具合に、EUって斧でマンモス狩りをしていた頃から進化してねえな、と感じさせられた。

まあ、某中華な国も、三国志の頃から政治形態が変わっていない気もするので、どっちもどっちだけだ。

「で、横島さん。まじで世界大戦寸前だったって話なんですけど」

朝食に紛れ込んだ謎のシスター仮称春日は平べったい視線。

「あー？ 世界大戦と言うよりも、魔法世界対某宗教、かなあ？」

「・・・本気ですか？」

「まじ戦争になるんだったら、向こうから宣戦布告させた上で、きーやんに泣きつくな」

「……………うっわー」「……………」

朝食をともにしていた所員全員が苦笑い。

「使えるコネはいくらでも使っぞ、俺は」

「それはたのもしいんやけど、無茶したらあかんえ？」

「わかってるって、コノカちゃん」

お変わりを持ってきてくれたコノカちゃんにほほえむ。

「しかしなんだな、手管もいいが、正面衝突がないと、歯ごたえがないな」

「まあ、今夜を楽しみにな、エヴァちゃん」

「・・・もしかして、何かあるですか？」

「たぶん、俺の感が正しければ、憂さ晴らしと逆恨みで、バカが山ほどやってくると思うぞ？」

「うわー、本当に頭が悪い、とウチの女の子たちが顔をしかめる。

「今日の警備は、直接戦闘能力がある人と、千雨ちゃんだけな」

「なんだよ、あたしや強制参加か？」

「・・・頼むわ。さすがに逆天号があると違うんだわ」

「・・・わかったよ、横島さん」

というわけなんで・・・

「弓さんと一文字さんは留守番な」

「・・・納得できませんわ！」

「・・・弓、さすがにおれらGSだぜ？」

「逆に、高音と愛衣ちゃんは参加つうことで」

「はい、解ってます」

「解ってますわ」

とりあえず、蛇の頭はつぶしたけど、虫並にしぶとい奴らがこのままなわけがない。

というか、仇敵として名乗りを上げたんだから、うちのバトルモ

ンガーたちの標的になってもらわんなあ。

「・・・おまたせしましたあ〜！」

あ、来たな、ゴスロリバトルモンガー。

血の匂いに惹かれて参上ってか。

魔法世界の戦闘以来、ヘラス帝国お抱えの人斬り部隊に入っていたのだが、治安向上とともに人斬りの機会も減り、最近では幻獣ハンターなんかをしているって手紙が来てたけどなあ。

「ひどいですわあ、旦那様。こんな楽しい祭りがあるなら、呼んでもらわへんと」

ありや、人斬り祭り無制限、血河死山建設祭りとか思ってる目だな。

小竜姫様でも矯正できなかった悪の剣士、健在ってか？

「一応いつとくがな、殺人はだめだぞ？」

瞬間、この世の終わりかという表情になったが、少し悩んでこちらをのぞき込む。

「・・・ちよことつとだけですかえ〜？」

「ちよこつとだけでも殺しちゃだめ」

つつか、殺しちゃダメだって言ってんだろつが。

まだまだあきらめきれないのか、再び熟考。

「・・・さきつちよだけですえ〜？」

「だからダメだって」

おめえ、どこのエロ男の言い訳だ！

「あーん、いけずう。これなら魔法世界で竜退治しとったほうがたのしかったあ〜」

「今から戻るか？」

瞬間それも検討したようだが、人斬りはやっぱり人斬りらしい。

「……ころさんかったら、人間斬ってもええんですよねえ〜、旦那様〜？」

はんごろしー、にくだるまーとか天使の笑顔で言っているゴスロリ。

エヴァより質が悪すぎる。

ま、学園長にも一報入れて、ぬるい魔法関係者はさがらせないといかんな。

「横島さん、アシモトのおじさまからお電話です」

「ありがとな、さよちゃん」

アシモト、おじさまとかいわれるのがうれしくて、直電してこねえし。

「はいはい、横島ですよ、あしもっさん」

第五十話（後書き）

今回は、冥子覚醒！

いやー、多分、かなり早い覚醒で、色々と世界に影響が出ますよう
ねえw

12/2 修正しました。： 霊具の適応確率について > 実際は
もっと高いんですが、防諜レベルが低い場所では「あれ」な内容で
通されています。

第五十一話（前書き）

もっと早くにアップする予定でしたが、ちょっと遅くなりました。

第五十一話

人界の鬼札、横島忠夫の面目躍如。といったところだろうか？

僕の出張中に始まった麻帆良侵攻は、手元に届く情報を追いきれないほどの早さで推移していった。

まず始まったのが、日本国内の秘匿部署による麻帆良接收計画の発動。

じつはこの計画の大本は、アメリカのFEDAによる極東戦略の一環であり、アメリカ国内や各国にある魔法使いたちの町への侵攻モデルケースとなるはずだった。

が、呼び水となる部隊の遅延により、逆に政治的反撃を喰らい、次々と命令系統が分解されていった。

オカルト犯罪と分類される範囲はオカルトGメンが魔法世界の出張要員達とともに追いつめ、非認定部署で権力を振るっていたものは、今後の関係を断ち切ることで政治取引を行い組織を完全に分解させてしまった。

日本国内で分解されていないのは現地スタッフのみであり、すでに詳細動作に至るまで把握されてしまっていた。

もちろん、中には開明的な研究をしている組織もあったそうだが、得ている権力が余りにも黒すぎるので全ては研究停止になったはずである。

そんな騒動の一夜を越えて未だ動いているのが、未だ策動の大本で被害を免れているモノ達だった。

つまり、アメリカであり、そのアメリカをも動かすことを決意し

た存在だった。

まあ、某宗教の中心だと言えば分かりやすい。

彼らにはどうしても欲しいモノがあったのだ。

それは、あの「横島君」がノリと勢いで作ってしまった新霊具であつた。

適正のある者が神楽音曲で霊波を紡ぎ、除霊を行うというもので、威力としてはネクロマンサーの笛に劣るものの、その適正範囲の広さは大きく上回るとされているものだった。

これを科学的に考察したとされている「百合子レポート」では、本霊具を単一の宗教で独占することの危険を高らかにうたいあげており、宗教や風習の違うオカルトの弾圧や宗教の違いを大本とした戦争が再び発生するであろうことを予期していた。

だからこそ、「某宗教」にだけは渡してはダメだ、と。

なんとというか、横島君のとぼつちり、と思わなくもないが、麻帆良侵攻の表向きの理由は「魔法世界からの異宗教移民流入の防止」なわけ。

真実を知っていると、どうにも納得がいかない話だともいえる。

で、この麻帆良侵攻の背後にある事実にぶち当たった日本国内政治家や反コメリカ国家は大いに騒ぎだした。

表だって抗議し始めた国や、非公式ルートで「真実」を求める声明を出した国やら、アジアの大国を自認する某国などは、西側大国の謀略によるアジアの混乱と大騒ぎとなった。

なんにせよ、今のところは麻帆良及び日本の国自体は被害者扱いであり、表向きの加害者はコメリカ、となっている。

国内汚職やら陰謀野望にまみれた政治家官僚にあふれていようと、踊らされた被害者、と。

学園長からの緊急召集で来てみれば、麻帆良を囲い込むように軍勢が集まっていた。

すでに戦争だな、と思わなくもなかったが、よくよく考えれば超の田中軍団の方が数は多かつたな、と。

むろん、向こうは実弾を発射してくるのだが、事前に横島事務所経由で配られた「矢避けの加護」符は実弾でも証明されている。

ここのところストレスの多い魔法先生軍団は大いに乗り気であり、集団戦闘訓練に明け暮れていた魔法生徒達も鼻息が荒い。

が、誰もが引くほどに盛り上がっているのは横島事務その一部だろう。

「はふーはふー、旦那様、旦那様、うち、もう、しんぼうたまらん・・・」

「ただおただお、あれ、くっちまっついていいんだよな？ 死なない程度に全滅させていいんだよなあ・・・？」

両手で二人を抱きすくめながら、どうにかこうにか押さえている横島さんだが、そろそろ限界が近そうだ。

「が、学園長、そろそろ、戦いの獵犬を放っていいっすか!？」

「あー、いいじゃろ」
「いけーいけーいけー！」

声もなく音もなく、二つの陰は森の中に消えた。

「つつわけで、戦闘開始じゃ。各員、同士討ちには気をつけるんじや。あと、後詰めで横島事務所があるから、おもいつきり飛ばしてくるんじゃー！」

「「「「「おっー!!」「」「」「」

「おやおや、刀子さんやシスターシャークターまで目をぎらつかせて散っていったよ。」

「マナちゃん、遠距離狙撃を頼む」
「わかったよ、横島さん」

私は通信用に得たアイテムを片手に、持ち場へ走る。

「実質上、見える戦力全てがおとりだ。
「じゃあ本隊はというと、麻帆良と侵攻部隊を挟んだ反対側に潜んでいたりする。」

「夏美をチャンバーに入れた状態の逆天号が。」

「艦長、C20方面で穴が発生しました」

「魔鈴さん、照準できる？」

「・・・はい、総数12、捕捉しました」

「夏美、呪縛」

『・・・!!』

アスナがチャンバーに入ると凶悪無比の攻撃になるが、夏美がチャンバーに入ると回避不可能な個人攻撃の呪いになる。

正直、その呪いは「急におなかが痛くなり、一歩も動けなくなる下痢になる呪い」とか「家のコンロがつけっぱなしになっている気がする呪い」とか「同僚からB.Lっぽい視線を常に感じる呪い」とかとんでもないものばかりだが、絶対に力かる呪いばかりだとエミさんを驚愕させていたのは記憶に新しい。

「楓さんから『逃走兵を纏めた』との報告です」

「愛子さんに喰ってもらってくれ」

「了解」

通信端末を操作するアキラ。

「艦長、そろそろ夏美が限界っぽい」

「了解、じゃ、次弾装填！」

「了解ネ！ クーフエイ、チャンバーはいるヨ!!」

瞬間、ストーミング効果が薄れ、逆天号がレーダーに写った。

そう、何の前触れもなく、巨大な空中戦艦が現れたのだ。

「艦長、実体弾の砲門が、こちらに向きました」

「了解。・・・艦内全員に通達！ これより変態機動戦開始だ、ハ
ーネス強度最強で待機!!」

「・・・了解!!」

「エヴァちゃん、のりのりやなあ」

ん？ 忠夫か。何だ、私の勇姿を見に来たのか？

「んにゃ、死にそんなバカの回収」

ん？ おかしいな、気絶はさせても怪我はさせてないぞ？

「あんな、エヴァちゃん。極寒の中気絶してりゃ、凍死するって」

・・・ああ。

「変態機動中の逆天号から、死にそんな人マップが送られてきたんや」

見せられた地図では、確かに私の周辺の動かないバカども大半が死にそうだというサインになっていた。

「忠夫、このエリアの死にそうサインの色が違うが？」

「それ？ ああ、夏美ちゃんの呪いやな」

思い出して本気で背筋が寒くなった。

あれ、私にもレジスト出来ないし。

一般人になんて恐ろしい。

「じゃあ、私は戦場を変えた方がいいか？」

「んにゃ、この地域制圧を続けてくれ。バカの回収はバックアップの茶々姉ズでやっつくから」

「ん、ではたのんだぞ」

あの人形達、外での活動のために忠夫の魔力線を繋げたら、おもしろいぐらいに人間的になったな。

うむ、おもしろい。

本当に忠夫はおもしろいな。

ふふふふ、絶対にはなさんぞ、忠夫。

結局、正面の砲撃装備の部隊全員が投降してきた。

まあ理解できるよ、うん。

実際あり得ない光景が続いたからね。

なにしろ、自走砲やら戦車やらの砲弾を、「戦艦」が「動作」だけで受け流したのだから。

あれを無理矢理説明するとするなら「化剋」とよばれる中国武術の技法だろう。

手や足や体の動きで攻撃を受け流す技法のことなんだけど、まさか戦艦の羽や砲身の動きやアンテナで砲弾を受け流すなんて、誰が信じられるだろうか？

正直、僕らも声を失って見入っていたもの。

あんなのを見せられたら砲科の人間は白旗を揚げるほかないだろう。

「あー、私は、麻帆良の魔法教師、瀬流彦ともうします。基本、彼らはでたらめですので、これ以上の抵抗は無駄とご理解ください」
まるでブリキのおもちゃのような感じで、ぎぎぎっとこちらを向く兵士達。

「投降していただけるなら、無碍な扱いはしません。投降していただくませんか？」

彼らは涙を流してうなずいた。

視線を逸らした向こうでは、空中戦艦が「カモンカモン」としているようだった。

僕でもあの光景を見たら戦意喪失だね。

というか、近接砲弾やらロケット弾をどうやってそらすのか、本気で聞きたいよ。

周囲展開していた自衛隊の部隊全てを捕縛した魔法先生達は、実にやり遂げたという顔だったが、茶々丸と雪之丞が愛子と共に連れ込んだ人間をみて息をのんだ。

そう、とらえられ、眠らされていた人員の半分までが魔法陣営であり、さらに言えば、麻帆良に勤めていたことのある元魔法先生だったのだ。

元々はMM本国からの警備増員だったのだが、教師である部分が余りにも疎かすぎたので、学園長が送り返した人員でもあった。いわゆる魔法至上主義、というやつだった。

そんな人間が、なぜ、この集団、アメリカ海兵隊と共にあるのか？

「ま、読めなくもねえだろ？」

「そうじゃな」

顎髭をしごく学園長の隣で、エヴァは苦笑い。

「体のいいスケープゴート、か」

「そんなところじゃろうな」

「で、そのノウハウで、他の魔法使いの町を襲う、と」

「あからさまじゃな」

「ということは、このバカどもは、アングレッサ仮想敵兼道案内か？」

雪之丞の問いに、周囲は苦々しい顔になる。

魔法秘匿、それは名目上の話ではあるが、ここまで浸透されるのはおもしろくない、と。

「ふむ、MMのイリーガルが、母国を失って野良犬になったといったところかのお？」

存外きつい言いぐさだったが、野良犬発言はうなずける魔法先生達だった。

「このままアメリカに引き渡すのもおもしろくないのお」
「とはいえ、麻帆良で飼うのは反対ですね」

学園長の言葉に応えるはマフィア先生、ではなく、神多羅木教諭。

「まあ、発動体の破壊と封印というのが基本では？」

ガンドルフィーニの台詞に魔法教師たちはうなずくのだった。

横島たちは周囲警戒をしていた。

コメリカ海兵がいることは予想していたが、現在の乱戦状態であれば、簡単に進入できる、乱戦で攪乱できる、そして目的のものを手に入れられる、とうわけだ。

一応、開発設備のすべてを魔法球に放り込んで、さらに愛子空間に入っている関係上、ほぼ入手不可能のだが、となるか、というよりも一般人にすら手を出しかねない相手であると認識しているので、武闘派の事務所員で虱潰しに迎撃をしていた。

さすがにプロではない魔法先生たちは警戒がゆるんでいるが、マナの補助で警戒がゆるんでいない横島事務所は、次々に捕縛者を増やしていった。

「なんつつか、多すぎやろ、宗教」

「あはははは、こりゃ、ドンだけ必死なんだよって、かんじっすね」

避難の関係上、逆天号に乗鑑した一文字は苦笑だった。

「横島さん、そろそろ最高責任者様にご連絡なされた方がいいのではないですか？」

弓のそのひと事に、顔をゆがめる横島。

実は、すでに連絡を入れているのだが、予想を斜めゆく答えが返ってきたのだ。

『つまり、よこっちは私の加護を受け入れてくれるんですね？
人よこっちの誕生ですね？』
聖

『まちや、きーやん。そりゃ抜け駆けやろ！』

てな会話があったからで。

まあ、向こうもこの騒動の見物に飽きれば介入してくるんだろうけど、今のうちにはじっくり対応しなければならぬ。

なにしろ、某宗教の象徴様は、なぜか自分のところの信者がイジられるのを喜んでいらっしやる。

そんなわけで、しばらくは魔法球隔離だ、と苦々しい横島の視線の先に、山積みで呻いている怪しげな男たちを眺めていた。

MMの弱体化に起因する騒動の最高潮こそが、今回の麻帆良侵攻であると歴史書にはかかれるだろう。

表向きにはそうしなければならぬ。

政府関係者の指示による暴走、権益を求めた海外からの圧力。

そうではなければならぬ。

・・・はずだった。

はじめに漏れたのは、某宗教関係者の収監に関する情報だった。

不法入国、銃刀法違反、不法侵入、暴行、施設破壊。

あり得ない罪状の羅列であったが、防犯ビデオに残る姿や、オカルト警備システムに残った証拠は動かし難く、証拠として完全だった。

もしこれが西欧諸国であったなら、宗教的圧力でどうにかなったかもしれない。

しかし、それは「日本」で起こったこと。

宗教の坩堝にして、もつとも権威がない世界。

圧力をかけるまでもなく、情報が流出し、世界を席卷した。

名誉毀損だ、偽情報だと声を上げる某宗教関係者だったが、事件背景や作戦目的なども明らかにされるうちに宗教的な攻撃が行われているわけではないことが判明した。

そう、某宗教と言っているが、某島国の固有派閥や大陸北部の派閥を指しているのではないのだ。

バカをやったのは、宗教本部のある一部。

この指摘をどう受け止めるかは、様々であろうが、基本的に保守的である宗教関係者は大きく動いた。

修飾や回りくどい表現を抜粋して、直接的な表現に意識すると・

『悪いのはあいつらだ。わいらは関係あらへん』

実にすがすがしい尻尾切りだ。

一時的な保身を計れるだろうが、近未来的にみればその発言は終了宣言と言っていていい。

・・・自分自身の。

事態からの保身をはかった者たちは、多く国家機関からつけねられることになる。

そう、彼らは保身のために組織を裏切ったのだから。

いや、彼らは、保身のために信教を裏切ったともいえる。

むろん、神を裏切ったわけではない。

が、信教を裏切ると言うことは、生きる立場を捨てる事と相違無い。

それこそその強権であり、それこそその強欲でもあったのだ。

が、その力が通用しないとみるやいなや、その力と心中するならまだしも、生き残ることを選んだ彼らは、安らかな生涯を失ったと等しい。

「誘導したとはいえ、こりゃひどい話ね」

「この結果を見通していたのに、その一言がでる羽川さんが怖いっす」

麻帆良の事態収束とお礼に直接E.U.オカルトGメン本部まで挨拶にきた横島は、にこやかで邪気のない笑顔で恐ろしいことを言う羽川つばさ女子を恐ろしいモノをみるかのようにみていた。

隣で立っていたおキ又ちゃんは、名状不明な笑顔だったわけだが、その種類の特定を横島もあきらめていた。

羽川つばさに挨拶に行く、という時点で、逆天号の出勤は決定していたが、実は同行者はほとんどいなかった。

茶々丸とエヴァ、そしてアスナだけであった。

まあ、横島事務所の人員露出を避けるという意味ではこの三人を連れ出すのが一番なのだが、これに今期のエルダーシスターとして前期のエルダーシスターに、と挨拶に行きたいと言い出したのは氷室キ又、その人であった。

先日お披露目で挨拶したばかりではあったが、この件について協力を求める際に名前を借りているので、渡りに船と行ったところだろう。

「あら、横島君だって色々とやってるでしょ？」

「いえいえ、人道の真ん中をいく横島忠夫ですから・・・」

「あら、おもしろい冗談」

「またまた」

あはは、おほほ、と笑う二人の横で、氷室キ又は強い力を発した。

「・・・横島さんは、羽川さんと仲がいいですね？」

それも、見当違いの方向に!!

「ま、まって、まってくれ、おキ又ちゃん！」

「ふふふ、とーっても仲がいいのよ、わたしたちい」

「このおばはん、ここぞとばかりにいい加減なことを!!」

「あらあら、こんなに若くてスタイルのいい女性にひどい事言っわ

あ・・・ないちゃおうかしら？」

「横島さん、最低です・・・」

「誤解やーーーーー!!」

まあ、横島さんがこういうノリなのはいつものことだし、いいんだけどね。

「(アスナ、諜報は?)」

「(霊的なのと魔法的なのは全部つぶしたわ)」

「(機械的なモノも全滅させました)」

いやいや、このオカルトGメンってとこ、伏魔殿もいいところよ。視覚聴覚霊覚あらゆる面で盗み見てる目が山盛り。

本当は音楽霊具を持ってこようかという話もあったけど、中止して正解ね。

・・・あ。

「（どうした、アスナ）」
「（いや、この新しい視線、麻帆^{まほ}良の学園長じゃないかなーと）」
「（・・・む、本当だな。よし、茶々丸、めくらました）」
「（了解です、マスター）」

なぜか指をブイの字にした茶々丸さんが、「ふんっ」と言う気合
いとともに、虚空にそれを突き立てた。

瞬間、「ぎゃー！ー」という怪物の叫びのようなモノが聞こえ
たせいか、盛り上がったいた三人が、何事かとコチラを見た。

「ああ、気にするな。視覚をとばしてのぞき込んでいたバカに、め
つぶしをしただけだ」

「・・・あ、あのね、一応、本部内保安のための監視の目もあるか
ら、手加減してくれると嬉しいかなあ、なんて思うんだけど」

「ああ、それなら大丈夫。たぶん無許可の妖怪視線を潰しただけ
すから」

「はい、あの視線は日本の妖怪大将のものです」

私と茶々丸さんの言葉で納得がいった横島さんは、すでに気にし
ていないようだけど、氷室先輩と羽川さんは疑問が残っているよう
だった。

「えー、妖怪大将というのは、うちの学園長のことです。あだ名の
理由は容姿です」

私の説明で納得のいった一人だった。

第五十一話（後書き）

50話の続きでした。

こんな策動の間、ネギ君はというと・・・、ちゃんと先生してますw

なにしろ、彼の魔法修行は「教師をすること」ですから、ええ。

でたらめな世界からの侵食を避けるために、まじめな先生になりますよ、彼w

12/06 一部修正

第五十二話（前書き）

なんだろう、実際の仕事が忙しすぎると、現実逃避で話が進むW

第五十二話

G S協会から使者がきたのです。

今回の騒動で身動きがとれなかった事へのお詫びだそうなのです。曰く、雪之丞さんは「仕方ねえだろ、神父は破門されても教会に未練あつたしな」とおっしゃってましたが、使者の方は悔しそうでした。

使者の方は「ピエトロ＝ド＝ブラドー」というダンピールさんでした。

エヴァさんとも顔見知りで、手土産持参でしたが、EU出張と聞いてすごく安心した顔になったのです。

「そんなに怖いですか？」

「怖いというよりも苦手、ですね」

何でも、年齢的にはエヴァさんの方が下らしいのですが、格は遙かに向こうの方が上なんだそうです。

ハーフだからですか？

「覚悟の差です。エヴァンジェリン様は、心の底から覚悟の出来た方ですから」

とはいえ、今は単なる恋する乙女なのですよ？

「……実は、それが信じられないんですが、でも、相手は横島さ

んだからなあ……」

ああ、人外吸引体質ですね。
聞いています。

逆に、麻帆良の魔法使いたちも引かれているのは人外という意識があるからとも聞きますが。

「ええ。横島さんはおもしろいほど人外に好かれますからね」

苦笑いのピートさん。

頬を赤らめている、人外……。

……なぜかちよつと離れる雪之丞さん。

私も少し離れましたが、遊びに来ていたネギ先生は興味深そうに一歩近づきました。

「あ、あの、いろいろとお話聞かせてもらっていいですか？」

「いいですよ、ネギ「スプリングフィールド君」

「あ、あの、僕のことをご存じで!？」

「はい。横島さんがうれしそうに弟分が出来たって話してくれましたから」

「……横島さんが……」

なぜでしょう、うれしそうに頬を赤らめるネギ先生に、一級警報を感じるです。

ベークンレタス警報です。

ハルナ警報です!!

横島さんのオカルト活動は、本物でした。

まさに、「正義の魔法使い」を実践しているような人でありながら矛盾をはらんだ人でもあります。

10を助けるために1を切れるか？

よく聞く設問ですが、横島さんたちは悠々乗り越えてしまつと僕は感じてしまっています。

でも、ピートさんの考えは違っていました。

「美女美少女の多い方を助けるでしょうね、横島さんは」

もしくは、美女美少女だけ助けるとか。

その発想はなかったんですが、聞けば正しいことが理解できました。

よく、横島さんが美女美少女の味方つていますが、究極的にみれば「レディーファースト」の体现であり、婦女子を守る対象としている騎士道精神ともいえます。

そういう見方をすれば、横島さんの行動は、普段の発言を無視できれば、本当に格好いい人であり、目指すべき人といえます。

そのことに気づいた女性は彼を評価できますし、気づかなかつた女性は彼を軽くみます。

つまり、ピートさんの話通りなら、世の大半の女性は彼を軽くみていたわけですが、状況的に追いつめられている怪異の女性や霊能者、そして彼に大きな繋がりを持つ女性が彼を好ましく感じるという流れですね。

そんな彼だからこそ、横島さんだからこそ、うちのクラスの生徒さん達に好かれているんだと思います。

あのエヴァンジェリンさんですら、一人の女性として横島さんの隣に立とうとしてますし。

「・・・本当二、すごい人ですよね、横島さん」

「ふふふ、ネギ君は横島さんが好きなのかい？」

あの人は、理不尽で力強くて、そして輝く人。

まるで、ウェールズにいたときに思い描いた僕の想像の中のお父さんのような人。

それでいて、実際にみたお父さんと重なるおおらかな人。

そんな横島さん、そう、僕は大好きでした。

「・・・魔法学校を首席で卒業した僕は、思い上がった子供でした。そんな僕を普通の子供だつて教えてくれた横島さんには感謝してます」

でも、

「そんな横島さんが大好きです！」

あれ、なんででしょう？

事務所にいるクラスのみなさんが険しい顔つきです。雪之丞さんはなぜか逃げていきます。

あ、タイガーさんも・・・

あれ、なんでみなさん発動体を構えているんですか？

「所长、お茶でもいかがですか？」

「ん、ありがとな、茶々まるちゃん。あと、エヴァちゃんもありがとな。なんか靈感にさわる何かを感じただけや」

そう、俺は思いこもつとしていたんだけど、事務所からしばらく帰らないで遊んでこいと連絡が入ったので、千雨ちゃんの希望を組み入れピンポイント世界一周をして帰ったのだった。

綾瀬君の要請を聞き現場に急行すると、そこは血の海だった。

「ち、治療かね!？」

「記憶処置なのです!！」

え、でも、このふたり、というかネギ君死にそうだよ!？」

「命よりも思い罪業を背負うところなのです、やばいのです!！」

みれば千鶴君たちがうなずいている。

かなり本気でますらしい。

「聞けば、このペーパさんもヤバげなのです」

なにがやばいのか、と聞いてみると、ずいぶんとまずいことがわかった。

うん、そういうマイノリティーを否定するつもりはないけど、彼らのような重責にある人間が進む道ではない。

「了解したよ、綾瀬君。ネギ君や彼のレジストレベルは高いから、いろいろと集めておこう」

「お願いするのです」

さすがにまずいよね、オカルト英雄と英雄の息子にして新世界の王子が「そういう関係」という噂は……。

「……ああ、弐集院先生ですか？ 申し訳ありませんが記憶処置関係者を全員集合させてください、はい、緊急事態です」

僕の一言を聞いて、事務所はひとまず安心した空気になった。

うん、僕も少し緊張していたみたいだね。

とはいえ、横島君、そこいらじゅうに妙な魅力を振りまかないでほしいものだよ！

なんやろなあ？

学校の行き帰りはタマモやら愛子がべったりだし、仕事でも必ずうちの娘たちがべったり。

なんでやる？

一応、本日は某教会との手打ちがあるので、世間的に大問題にならないメンバーで会場にきてるんやけど、視線が痛いわ。

「横島さん、何で私なんです？」

「夏美ちゃん、超適役や」

「……ありません」

壁際に手を突いて落ち込む夏美ちゃんだけど、じつのところ、ふつこの女の子としか見えないのがいい。

加えて、クーフエイと楓が控えているのがさらにいい。

名付けて「無宗教組」！

千鶴ちゃんあたりでもありなんだけど、彼女は妙に威圧感を発揮できるしなあ。

そういう意味ではコノカちゃんもだめ。

アスカもエヴァちゃんもだめ。

そんなわけで、本日の三人は事務所の看板にしてもいいかなあと思う。

まあ、演奏組のなかで連れ出せるのがこの娘だけなんだけどね。

他の子だと宗教的な吸引力に負ける可能性があるというかなんというか。

あと、宗教的な仇敵なんて存在もいるしなあ。

というわけで、このメンバーだ。

「横島君、なんというか、まじめかね？」

ひどいですね、唐巢神父、いや、会長。
俺、本日はまじめですよ？

「とりあえず、信じておこう」

とまあ、そんなわけで、某迎賓館にドレスアップしたうちの娘たちをエスコートする形で唐巢神父と西条さんも同行。

あ、今手を握ってる男には気をつけるや、クーフエイ。

「大丈夫アル。弱い男には興味ないアル」

「・・・実に自尊心が傷つけられる話だね」

「・・・基本、靈力なしならシロに張りますよ、その娘」

「本気かい？」

「本気つす」

それに、老師との組み手でほぼ死んで、靈力も鰻登りだし。

「・・・卒業後の進路を・・・」

「そういうナンパに気をつけると、ユエにいわれてるアル」

あはははは、ユエちゃんの名前を聞いて固まったぞ。

さすがだなあ・・・、剃り魔の恐怖。

そんなバカな会話があったけど、いわゆる政府関係者が合流したところで、ひとしきり文句を言われた。

技術供与ぐらいあるべきだ、と。

つまり、この技術を解放して、外交得点にしろというのですかな？

「そ、そこまでは言っていない」

ですが、自分の影響力で供与させたと言わせたい、と？

「……」

これからの政治生命と、失われる生命に対する責任を一族すべてで背負っていただけるなら、考えますが？

「……どうということだね？」

さすが、国際外交の最前線で戦ってきた官僚だ。引つかかることを意識できたんだろう。というか、これで引つかからなかったら、まじ日本の危機だって。

で、諸外国喜々。

「それはですね、あの霊具を持つてすれば、むりやり霊を抜つどころか、オカルト兵士を仕立てることも犯罪転用も容易すぎるのですよ」

「……信じられないほど敷居が高い適正と聞いているが？」

「数十億いる某宗教ですよ？ 確率など乗り越えますよ」

俺には見えるなー、宗教を背景に他宗教を悪霊として弾圧する某宗教。

はつきり言うと、愛面には持たせちゃいけないと思う。

主に「 関係者。」

キーちゃんもいつてたけど、あの手の凶信者は全うに声すら届かないので、どうしようもないとか。

いいことも悪いことも自分のせいになされてはたまらないって言う

てたし。

「・・・そこまで、理不尽なのか？」

「貴方がそこまでお気楽な理由が知りたいっす」

俺の言葉に顔をしかめるおっさん。

「とりあえず、あそこのトップとは、いや、宗教的なトップとは話が付いてるっすから、妙なとラップにハマらなければ、外交得点稼ぎまくりっすよ?」

脂汗のおっさんを先頭に、俺たちは会合室に向かったのだった。

第五十二話（後書き）

様々な戦いの中で、権謀数術という綱引きは単純ではありません。欲望と絶望が渦巻く野望の大地なのです。

実際のところ、裏社会とはいえバックボーンに美神さんやら六道がいる横島君には、けっこう補正が入りますが、相手が某宗教となると一元化された対立構造が浮上します。

その辺を絡めた展開を以後考えていきますので、ご注意ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1184p/>

よこしまほら

2011年12月13日02時30分発行